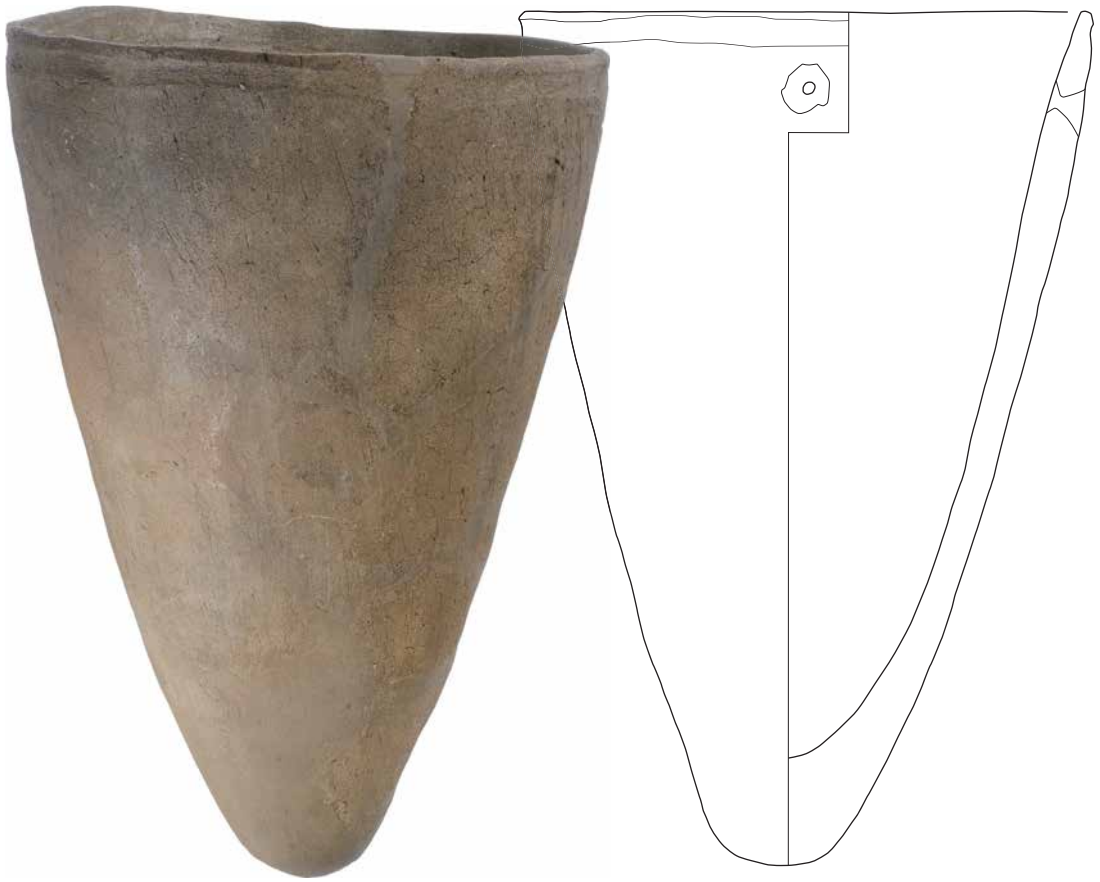
千葉県船橋市　TORIKAKE NISHI Shell Midden

# 取掛西貝塚総括報告書

## －東京湾東岸部最古の貝塚－

## 第１分冊



2021

船橋市教育委員会

千葉県船橋市

# 取掛西貝塚総括報告書

## （第１分冊）

▲取掛西貝塚上空からの空中写真（東から）：遺跡上空より東京湾を望む。台地の先には東京湾に注ぎ込む海老川が見える。

▲遺跡全体のオルソ画像（写真上が北）：遺跡は東西に細長い台地上に占地する。遺跡範囲は東西 500m ほどの規模で、西端部を除くほぼ全域から縄文時代早期前葉の遺構が検出された。遺跡西側および東側、北東部は昭和 30 ～ 40 年代の土砂採取などにより削平されたが、遺跡の主要部は奇跡的に現在まで残された。

## 巻頭図版 2

◀10トレンチから出土した縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群１類）

１類（井草式）土器は本遺跡で出土した最古の土器となるが、この時期の住居跡は現在のところ発見されていない。

◀10トレンチから出土した縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群４類・５類）

４類（稲荷原式）・５類（花輪台式）土器は本遺跡における集落の開始時期にあたる段階の土器である。この時期の住居跡は、遺跡西部から中央部にかけて分布する傾向にあった。

◀５次調査で出土した縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群 12 類）

12 類（東山式）土器は早期前葉末にあたる段階の土器である。この時期の住居跡は、遺跡中央部から東部にかけて分布していた。貝類の利用が認められたのもこの時期であり、貝層を伴う遺構は５次調査地点およびその周辺に集中する。

◀ 5 次 SI－002（早期前葉）
　この住居跡では、厚さが約 70 ㎝におよぶ貝層の堆積が確認された。早期前葉の貝塚としては関東で 6 例目の発見であり、東京湾東岸部では最古の貝塚となる。

▲ 5 次 SI－002 貝層堆積状況：縄文時代早期前葉の住居跡に堆積した貝層は、川の河口などの汽水域にすむヤマトシジミが大部分を占めていた。混土貝層・混貝土層・灰を含む層が堆積しており、複数回にわたって廃棄が行われたと考えられる。

▲ 5 次 SI－002 動物骨集中：SI－002 に堆積した貝層直下からは、イノシシやシカの頭骨がまとまって出土した。意図的に集めたと考えられる出土状況や、その場で被熱したと考えられる痕跡が一部で認められた。

## 巻頭図版４

◀５次調査地点で出土した骨角製針製品

貝層中から出土した針製品は全体が丁寧に研磨され、糸を通したと思われる穴も開いている。

◀５次調査地点で出土した
骨角歯牙製・貝製の装飾品

貝層からは、サメの歯牙・椎骨に穿孔を施したものやタカラガイ類を加工したものなど、多くの骨角歯牙製・貝製の装飾品が出土した。

◀ツノガイ類製品
（上段：管状・下段：小玉状）

５次調査地点では上記の装飾品のほか、SI－002 を中心に 2,000 点を超えるツノガイ類製品（素材を含む）が出土した。この点数は、現在のところ全国でも最多のものとなる。また、これらのツノガイ類製品は、年代測定の結果から化石ツノガイを利用していた可能性が高いことが判明している。

◀ツノガイ類製品（小玉状）の
切断面

小玉状の製品は径が２～３mm ほどであり、切断面が丁寧に研磨されたものが少なくない。

# 序　文

船橋市は首都の近郊に位置するとともに、東京湾にも面し、陸海交通の便もよく恵まれた自然環境にあります。また市内には 200 か所を超える遺跡が存在しており、旧石器時代以来、この地における人々の生活が連綿と続いてきた歴史を物語っています。

縄文時代には、貝類を食料として採取することで、多くの貝塚が形成されました。千葉県内では縄文時代を通じて全国で最も多数の貝塚が発見されており、船橋市内においても多数の貝塚が所在しています。

取掛西貝塚は、そのなかでも初期の貝塚を伴う集落跡であり、東京湾が形成される以前の暮らしや環境を物語る貴重な文化遺産といえます。

さらに、縄文海進最盛期の貝塚も併せ持つことから、遺跡周囲を取り巻く環境の変動についても比較・検討できる遺跡といえます。

船橋市教育委員会では、このような取掛西貝塚の重要性を鑑み、一部の範囲を市の史跡に指定するとともに、良好に保存された状態を恒久的に維持することを目的として、平成 29 年度より 4 か年にわたって国庫及び県費補助を受け、遺跡の保存を目的とする確認調査や地形測量などを実施してまいりました。

このたび、これまでの調査成果を総合的に分析し、取掛西貝塚の重要性や価値を明確にした総括報告書を刊行する運びとなりました。今後、この報告書で取りまとめた成果が様々な調査研究に活かされていくことを願うとともに、取掛西貝塚をはじめとする埋蔵文化財の保存や整備・活用に繋がることを願います。

最後に、本書を刊行するに至るまで、文化庁文化財第二課ならびに千葉県教育庁文化財課をはじめ、土地所有者の方々など、多大なご協力とご理解をいただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げます。

令和３年２月１７日

船橋市教育委員会
教育長　松　本　文　化

# 例　　言

1．本書は千葉県船橋市飯山満町１丁目 1363-3 ほかに所在する取掛西貝塚の総括報告書である。

2．保存目的の範囲・内容確認調査ならびに整理作業、本報告書の作成・刊行は平成 29 年～令和２年度の国庫補助および県費補助を受けて船橋市教育委員会が実施した。各年度の発掘調査の期間・内容等は第１章第２節に記した。

3．本書の作成にあたって、船橋市取掛西貝塚調査検討委員会の委員から全般にわたってご指導いただいた。委員会の構成は第１章第２節に記した。

4．６～８次の範囲・内容確認調査の発掘作業・整理作業は白﨑智隆・早坂仁敬・箱石幸祐が担当した。土器圧痕・炭化種実の抽出・分類は目黒まゆ美（非常勤職員・当時）・鈴木宏和（臨時職員・当時）が補助した。出土遺物の撮影は前期以降の縄文土器を早坂が、それ以外を沼野健一が担当した。全体の編集は狩野美那子・白﨑が行った。執筆分担は目次に記した。

5．第５章自然科学分析には下記の方々から玉稿を賜った（敬称略）。

第２節第１項　伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・Zaur Lomtatidze・森　将志
（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）

第２節第２項　小林謙一（中央大学）

第３節第１項　黒住耐二（千葉県立中央博物館）

第３節第２項・第３項　樋泉岳二（明治大学講師）

第４節第１項　佐々木由香（明治大学黒耀石研究センター）・Bhandari Sudarshan（パレオ・ラボ）

第４節第２項　山本　華・佐々木由香（パレオ・ラボ）

第４節第３項　小畑弘己（熊本大学大学院人文社会科学研究部）・
佐々木由香（明治大学黒耀石研究センター）

第４節第４項　佐々木由香（明治大学黒耀石研究センター）

第５節　柴田　徹（考古石材研究所）

第６節第１項　森　将志・辻　康男・藤根　久・野口真利江・伊藤　茂・佐藤正教・廣田正史・
山形秀樹・Zaur Lomtatidze（パレオ・ラボ）

第６節第２項　遠藤邦彦（ＮＰＯ法人首都圏地盤解析ネットワーク）

6．５次 SI－002 の動物骨集中について、下記の方から玉稿を賜った（敬称略）。

第４章第４節第２項　浪形早季子（（公財）横浜市ふるさと歴史財団）

7．下記のとおり自然科学分析の業務委託を行い、その成果を第５章に掲載した。

| | |
|---|---|
| 石器石材同定 | 有限会社考古石材研究所 |
| 圧痕レプリカ種実同定及び SEM 画像撮影 | 株式会社パレオ・ラボ |
| 自然環境分析（ボーリング調査等） | 株式会社パレオ・ラボ |
| 年代測定 | 株式会社パレオ・ラボ |

8．測量は下記のとおり委託した。

| | |
|---|---|
| 基準点測量・台地上詳細地形測量 | 船橋測量設計株式会社 |
| 3D 地形測量・空中写真撮撮・遺構オルソ画像作成 | 株式会社シン技術コンサル |

9．出土した石器の実測・トレースは、株式会社シン技術コンサルに委託した。

10．遺物写真図版のうち、２～５次調査・分布調査・弥生時代の出土遺物はＤＶＤのみに収録している。
11．註は節･項末に､参考文献は節末に記すことを基本とした。第５章は註･参考文献ともに項末に記した。
12．本書の著作権等は船橋市教育委員会が有している。
13．調査に係わる図面・写真等の諸記録及び出土遺物は、船橋市教育委員会が保管している。
14．発掘調査にあたっては土地所有者の方々にご協力いただいた。記して謝意を表したい。発掘調査・整理作業及び報告書執筆にあたって、下記の諸氏・諸機関からご指導並びにご協力を賜った。ここに記して感謝の意を表したい（五十音順・敬称略)。

秋山邦雄・浅野光彦・阿部昭典・石川日出志・岡村道雄・小倉　均・金子直行・加納　実・上守秀明・工藤雄一郎・小泉玲子・小林青樹・小林　克・清藤一順・千葉　毅・轟　直行・中村信博・西野雅人・西本豊弘・禰冝田佳男・橋本勝雄・原川雄二・原田昌幸・毒島正明・水ノ江和同・御堂島正・宮崎朝雄・山崎京美・山本典幸・領塚正浩

# 凡　　例

１．遺構図中の方位は座標北を示す。標高は T.P.（東京湾平均海水面）を基準とし、各セクションポイント横に表記した。測地系は１～５次調査は日本測地系、６～８次調査は世界測地系である。
２．遺構及び遺物実測図は、各図に縮尺を表記した。また、写真図版の遺物縮尺は基本的に挿図と同一である。
３．本書での遺構表記は以下のとおりとした。

１～５次調査　（調査次数）（遺構記号）－（遺構番号）　例：５次 SI－002

６～８次調査　（トレンチ番号）T－（遺構番号）（遺構種別）　例：10T－001 住居跡

遺構番号は１～５次調査は調査次ごとに、６～８次調査はトレンチごとに、遺構の種別に関係なく 001 から順に付しており、整理作業で番号の振り替えを行っていない。

４．本書で使用した地形図は下記のとおりである。

第１・７・８・12・13・361・362・390・454・455・456・458 図

船橋市役所発行　1/2,500 地形図

第３図　（財）日本地図センター発行　明治前期測量２万分１フランス式彩色地図

『千葉縣下總國東葛郡高谷北方西海神等村落』『千葉縣下總國東葛郡大堺村近傍邨落』

『千葉縣下總國東葛郡舩橋驛近傍村落』『千葉縣下總國東葛郡鎌箇谷驛近傍村落』

『千葉縣下總國千葉郡藥園臺新田外六村』『千葉縣下總國千葉郡神保新田近傍村落』

第４図　国土地理院発行　２万５千分の１地形図　船橋、習志野

５．図版扉の空中写真は「空中写真データ（MKT634X-C5-8)」（国土地理院）をもとに作成した。
６．遺物の観察表及び遺構計測値において、遺存値は（　）で示した。
７．挿図に使用したスクリーントーンの用例は、各図に凡例を示した。

土器実測図の断面は胎土中に繊維を含むものに△、石英・長石の角礫を含むものに□、軽しょうな胎土に○を付し、須恵器は黒塗りした。拓影は表／断面／裏の順に掲載した。

巻頭図版
序文
例言
凡例

# 本文目次

－第１分冊－
第１章　調査の経緯と目的…… 1
　第１節　保存目的の調査に至るまでの経緯（白井） …… 1
　第２節　調査の体制（植木） …… 1
　　第１項　各調査の概要 …… 1
　　第２項　調査組織 …… 4
　　第３項　調査検討委員会 …… 6
第２章　取掛西貝塚の立地と環境…… 9
　第１節　地理的環境（白井） …… 9
　第２節　歴史的環境…… 10
　　第１項　取掛西貝塚周辺の遺跡（白井） …… 10
　　第２項　船橋市内の縄文時代早期前葉から前期前半の遺跡（早坂） …… 14
第３章　取掛西貝塚の時間軸…… 23
　第１節　出土縄文土器分類（白﨑） …… 23
　第２節　集落変遷の段階区分（白﨑） …… 28
　第３節　取掛西Ⅰ～Ⅵ期の年代について（白井） …… 29
第４章　検出した遺構と遺物…… 32
　第１節　調査の目的と方法（早坂・植木・白﨑） …… 32
　第２節　分布調査（白﨑） …… 38
　第３節　既調査地点の概要と保存目的確認調査（白﨑） …… 46
　　第１項　既調査地点の概要（１～５次調査） …… 46
　　第２項　保存目的確認調査（６～８次調査） …… 55
　第４節　縄文時代…… 167
　　第１項　縄文時代早期（白﨑） …… 167
　　第２項　５次 SI－002 にみられる動物骨集中について（浪形早季子） …… 338
　　第３項　縄文時代前期以降（早坂・箱石） …… 351
　第５節　弥生時代（植木） …… 388
　第６節　その他の時代（白﨑） …… 420
　第７節　出土遺物の特徴（白﨑） …… 425
　　第１項　土器…… 425
　　第２項　石器…… 434
　　第３項　骨角歯牙製品・貝製品…… 445

－第２分冊－

第５章　自然科学分析……447
第１節　自然科学分析の目的と概要（植木・狩野・早坂）……447
第１項　取掛西貝塚における既報告の自然科学分析……447
第２項　本書掲載の自然科学分析の目的と概要……448
第３項　６～８次調査のサンプル採取方法と抽出方法……450
第２節　遺跡の年代……453
第１項　取掛西貝塚の放射性炭素年代測定（パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ）……453
第２項　取掛西貝塚の炭素 14 年代測定に基づく年代的考察（小林謙一）……469
第３節　動物遺体……485
第１項　取掛西貝塚出土の貝類（黒住耐二）……485
第２項　脊椎動物遺体（樋泉岳二）……503
第３項　取掛西貝塚の動物資源利用の特徴と価値（樋泉岳二）……507
第４節　植物遺体……517
第１項　取掛西貝塚６～８次調査の炭化種実（佐々木由香・Bhandari Sudarshan）……517
第２項　レプリカ法による土器圧痕の同定（山本華・佐々木由香）……525
第３項　千葉県船橋市取掛西貝塚出土土器の潜在圧痕調査報告（小畑弘己・佐々木由香）……537
第４項　取掛西貝塚の植物資源利用の特徴と価値（佐々木由香）……547
第５節　船橋市取掛西貝塚出土石器の石材同定（柴田徹）……555
第６節　ボーリング調査……573
第１項　取掛西貝塚周辺の古環境復元（パレオ・ラボ）……573
第２項　千葉県船橋市における縄文海進期の環境変化
－関東平野の環境変遷の中で－（遠藤邦彦）……635
第６章　総括……651
第１節　取掛西貝塚の特徴……651
第１項　集落の変遷（白﨑）……651
第２項　早期集落の構成と形成時期（白﨑）……657
第３項　動植物遺体と資源利用（植木）……661
第４項　取掛西貝塚周辺の環境変化（白井）……663
第５項　関東地方における貝塚の形成と早期前葉撚糸文期の集落（白井）……665
第６項　関東地方早期前葉の集落との比較（早坂・植木）……667
第２節　日本列島における取掛西貝塚（白井）……677
第３節　取掛西貝塚の価値と重要性（白井）……680
第４節　取掛西貝塚の保存と活用（白井・植木）……682

写真図版
報告書抄録
付属 DVD

# 挿図目次


第 1 図　取掛西貝塚調査地点 …… 3
第 2 図　千葉県北西部地形分類 …… 10
第 3 図　周辺の地形 …… 12
第 4 図　周辺の遺跡 …… 13
第 5 図　船橋市内縄文時代早期～前期前半遺跡分布図 …… 15
第 6 図　取掛西貝塚地形段彩図 …… 18
第 7 図　6～8次調査の層序と地形 …… 19
第 8 図　取掛西貝塚遺構全測図 …… 20
第 9 図　縄文時代早期前葉（Ⅰ群土器）の土器分類（1）…… 26
第 10 図　縄文時代早期前葉（Ⅰ群土器）の土器分類（2）…… 27
第 11 図　基本層序模式図 …… 33
第 12 図　分布調査採集遺物集計図（1）…… 38
第 13 図　分布調査採集遺物集計図（2） …… 39
第 14 図　分布調査出土土器（1） …… 40
第 15 図　分布調査出土土器（2） …… 41
第 16 図　分布調査出土土器（3） …… 42
第 17 図　分布調査出土石器（1） …… 43
第 18 図　分布調査出土石器（2） …… 44
第 19 図　分布調査出土石器（3） …… 45
第 20 図　1次調査全測図 …… 48
第 21 図　2次調査全測図 …… 48
第 22 図　3次調査全測図 …… 49
第 23 図　4次調査全測図 …… 50
第 24 図　5次調査全測図 …… 51
第 25 図　2次調査出土Ⅰ群土器 …… 52
第 26 図　3次調査出土Ⅰ群土器 …… 52
第 27 図　4次調査出土Ⅰ群土器 …… 53
第 28 図　4次調査出土石器（早期前葉）…… 54
第 29 図　1T 遺構配置図 …… 73
第 30 図　2T 遺構配置図 …… 74
第 31 図　3T 遺構配置図 …… 75
第 32 図　4T 遺構配置図 …… 76
第 33 図　5T 遺構配置図 …… 77
第 34 図　6T 遺構配置図 …… 78
第 35 図　7T 遺構配置図 …… 79
第 36 図　8T 遺構配置図 …… 80
第 37 図　9T 遺構配置図 …… 81
第 38 図　10T 遺構配置図 …… 82
第 39 図　11T 遺構配置図（1） …… 83
第 40 図　11T 遺構配置図（2） …… 84
第 41 図　12T 遺構配置図（1） …… 85
第 42 図　12T 遺構配置図（2） …… 86
第 43 図　13T 遺構配置図 …… 87
第 44 図　14T 遺構配置図 …… 88
第 45 図　15T 遺構配置図 …… 89
第 46 図　16T 遺構配置図 …… 90
第 47 図　17T 遺構配置図 …… 91
第 48 図　18T 遺構配置図 …… 92
第 49 図　19T 遺構配置図 …… 93
第 50 図　20T 遺構配置図 …… 94
第 51 図　21T 遺構配置図 …… 95
第 52 図　22T 遺構配置図 …… 96
第 53 図　23T 遺構配置図（1） …… 97
第 54 図　23T 遺構配置図（2） …… 98
第 55 図　24T 遺構配置図 …… 99
第 56 図　25T 遺構配置図 …… 100
第 57 図　26T 遺構配置図 …… 101
第 58 図　1T 出土土器（1） …… 102
第 59 図　1T 出土土器（2） …… 103
第 60 図　2T 出土土器（1） …… 103
第 61 図　2T 出土土器（2） …… 104
第 62 図　3T 出土土器（1） …… 105
第 63 図　3T 出土土器（2） …… 106
第 64 図　4T 出土土器 …… 107
第 65 図　5T 出土土器（1） …… 108
第 66 図　5T 出土土器（2） …… 109
第 67 図　6T 出土土器 …… 110
第 68 図　7T 出土土器 …… 111
第 69 図　8T 出土土器 …… 111
第 70 図　9T 出土土器（1） …… 112
第 71 図　9T 出土土器（2） …… 113
第 72 図　9T 出土土器（3） …… 114
第 73 図　10T 出土土器（1） …… 115
第 74 図　10T 出土土器（2） …… 116
第 75 図　10T 出土土器（3） …… 117
第 76 図　10T 出土土器（4） …… 118
第 77 図　10T 出土土器（5） …… 119
第 78 図　11T 出土土器（1） …… 120
第 79 図　11T 出土土器（2） …… 121
第 80 図　11T 出土土器（3） …… 122
第 81 図　11T 出土土器（4） …… 123
第 82 図　11T 出土土器（5） …… 124
第 83 図　11T 出土土器（6） …… 125
第 84 図　11T 出土土器（7） …… 126
第 85 図　12T 出土土器（1） …… 126
第 86 図　12T 出土土器（2） …… 127
第 87 図　12T 出土土器（3） …… 128
第 88 図　13T 出土土器 …… 128
第 89 図　14T 出土土器 …… 129
第 90 図　14 ～ 16T 出土土器 …… 130
第 91 図　16T 出土土器 …… 131
第 92 図　18T 出土土器 …… 132
第 93 図　19T 出土土器 …… 133

第 94 図　20T 出土土器…… 133
第 95 図　23T 出土土器（1） …… 134
第 96 図　23T 出土土器（2） …… 135
第 97 図　23T 出土土器（3） …… 136
第 98 図　23T 出土土器（4） …… 137
第 99 図　23T 出土土器（5） …… 138
第 100 図　23T 出土土器（6）…… 139
第 101 図　23T 出土土器（7）…… 140
第 102 図　23T 出土土器（8）…… 141
第 103 図　23T 出土土器（9）…… 142
第 104 図　24T 出土土器（1）…… 143
第 105 図　24T 出土土器（2）…… 144
第 106 図　25T 出土土器（1）…… 145
第 107 図　25T 出土土器（2）…… 146
第 108 図　26T 出土土器 …… 147
第 109 図　2T 出土石器 …… 148
第 110 図　3T 出土石器 …… 148
第 111 図　4T 出土石器 …… 149
第 112 図　5T 出土石器 …… 149
第 113 図　6T 出土石器（1） …… 150
第 114 図　6T 出土石器（2） …… 151
第 115 図　7T 出土石器 …… 152
第 116 図　8T 出土石器（1） …… 153
第 117 図　8T 出土石器（2） …… 154
第 118 図　9T 出土石器（1） …… 155
第 119 図　9T 出土石器（2） …… 156
第 120 図　10T 出土石器（1） …… 157
第 121 図　10T 出土石器（2） …… 158
第 122 図　11T 出土石器（1） …… 158
第 123 図　11T 出土石器（2） …… 159
第 124 図　11T 出土石器（3） …… 160
第 125 図　12 ～ 14T 出土石器 …… 160
第 126 図　16T 出土石器 …… 161
第 127 図　18T 出土石器 …… 161
第 128 図　19T 出土石器 …… 162
第 129 図　19・20・22・23T 出土石器 …… 163
第 130 図　23T 出土石器 …… 164
第 131 図　24T 出土石器 …… 165
第 132 図　24 ～ 26T 出土石器 …… 166
第 133 図　5 次 SI－002 …… 188
第 134 図　5 次 SI－003・004 …… 189
第 135 図　5 次 SI－006・008・009…… 190
第 136 図　5 次 SI－010・011・012・015 …… 191
第 137 図　5 次 SK－005・114・008・131 …… 192
第 138 図　5T－005 住居跡 …… 193
第 139 図　6T－001 住居跡 …… 193
第 140 図　7T－001 住居跡（1） …… 194
第 141 図　7T－001 住居跡（2） …… 195
第 142 図　9T－001・002 住居跡 …… 196
第 143 図　9T－001 住居跡 …… 197
第 144 図　9T－002 住居跡 …… 198
第 145 図　10T－001 住居跡（1） …… 199
第 146 図　10T－001 住居跡（2） …… 200
第 147 図　10T－001 住居跡（3） …… 201
第 148 図　10T－001 住居跡（4） …… 202
第 149 図　10T－001 住居跡（5） …… 203
第 150 図　10T－001 住居跡（6） …… 204
第 151 図　10T－001 住居跡（7） …… 205
第 152 図　10T－001 住居跡（8） …… 206
第 153 図　10T－004 住居跡 …… 207
第 154 図　10T－005 住居跡 …… 207
第 155 図　10T－007 住居跡 …… 208
第 156 図　12T－001 住居跡 …… 208
第 157 図　12T－002 住居跡 …… 209
第 158 図　16T－001 住居跡（1） …… 210
第 159 図　16T－001 住居跡（2） …… 211
第 160 図　19T－002・003 住居跡 …… 212
第 161 図　23T－001 住居跡 …… 213
第 162 図　23T－002 住居跡 …… 214
第 163 図　23T－003 住居跡 …… 215
第 164 図　23T－004 住居跡 …… 216
第 165 図　24T－001 住居跡（1） …… 217
第 166 図　24T－001 住居跡（2） …… 218
第 167 図　24T－001 住居跡（3） …… 219
第 168 図　24T－001 住居跡（4） …… 220
第 169 図　24T－003 住居跡 …… 220
第 170 図　24T－002 住居跡 …… 221
第 171 図　10T－008・011・012、23T－006・007 土坑 …… 222
第 172 図　17T－001、25T－001・002 土坑 …… 223
第 173 図　5 次 SI－002 出土土器（1） …… 224
第 174 図　5 次 SI－002 出土土器（2） …… 225
第 175 図　5 次 SI－002 出土土器（3） …… 226
第 176 図　5 次 SI－002 出土土器（4） …… 227
第 177 図　5 次 SI－002 出土土器（5） …… 228
第 178 図　5 次 SI－002 出土土器（6） …… 229
第 179 図　5 次 SI－002 出土土器（7） …… 230
第 180 図　5 次 SI－002 出土土器（8） …… 231
第 181 図　5 次 SI－002 出土土器（9） …… 232
第 182 図　5 次 SI－002 出土土器（10）…… 233
第 183 図　5 次 SI－002 出土土器（11）…… 234
第 184 図　5 次 SI－002 出土土器（12）…… 235
第 185 図　5 次 SI－002 出土土器（13）…… 236
第 186 図　5 次 SI－002 出土土器（14）…… 237
第 187 図　5 次 SI－003 出土土器（1） …… 238
第 188 図　5 次 SI－003 出土土器（2） …… 239
第 189 図　5 次 SI－004 出土土器（1） …… 240
第 190 図　5 次 SI－004 出土土器（2） …… 241
第 191 図　5 次 SI－004 出土土器（3） …… 242
第 192 図　5 次 SI－004 出土土器（4） …… 243

第 193 図　5 次 SI－004 出土土器（5）…… 244
第 194 図　5 次 SI－006・008 出土土器 …… 245
第 195 図　5 次 SI－009・010 出土土器 …… 246
第 196 図　5 次 SI－011・012 出土土器 …… 247
第 197 図　5 次 SK－005 出土土器…… 248
第 198 図　5 次 SK－008 出土土器（1） …… 249
第 199 図　5 次 SK－008 出土土器（2） …… 250
第 200 図　5 次 SK－008 出土土器（3） …… 251
第 201 図　5 次 SK－008 出土土器（4） …… 252
第 202 図　5 次 SK－008 出土土器（5） …… 253
第 203 図　5 次 SK－008 出土土器（6） …… 254
第 204 図　5 次 SK－008 出土土器（7） …… 255
第 205 図　5 次 SK－008 出土土器（8） …… 256
第 206 図　5 次 SK－114 出土土器…… 257
第 207 図　5 次 SK－131 出土土器…… 258
第 208 図　5 次 SI－002 出土石器（1）…… 259
第 209 図　5 次 SI－002 出土石器（2）…… 260
第 210 図　5 次 SI－002 出土石器（3）…… 261
第 211 図　5 次 SI－002 出土石器（4）…… 262
第 212 図　5 次 SI－002 出土石器（5）…… 263
第 213 図　5 次 SI－002 出土石器（6）…… 264
第 214 図　5 次 SI－002 出土石器（7）…… 265
第 215 図　5 次 SI－003 出土石器 …… 266
第 216 図　5 次 SI－004 出土石器（1）…… 266
第 217 図　5 次 SI－004 出土石器（2）…… 267
第 218 図　5 次 SI－010・011・015 出土石器 … 268
第 219 図　5 次 SK－008 出土石器（1） …… 269
第 220 図　5 次 SK－008 出土石器（2） …… 270
第 221 図　5 次 SK－114 出土石器…… 270
第 222 図　5 次 SK－131 出土石器…… 271
第 223 図　5 次出土骨角歯牙製品（1）…… 272
第 224 図　5 次出土骨角歯牙製品（2）…… 273
第 225 図　5 次出土骨角歯牙製品（3）…… 274
第 226 図　5 次出土貝製品（1）…… 275
第 227 図　5 次出土貝製品（2）…… 276
第 228 図　5 次出土貝製品（3）、貝刃 …… 277
第 229 図　5T－005 住居跡出土土器 …… 278
第 230 図　6T－001 住居跡出土土器（1）…… 278
第 231 図　6T－001 住居跡出土土器（2）…… 279
第 232 図　6T－001 住居跡出土土器（3）…… 280
第 233 図　6T－001 住居跡出土土器（4）…… 281
第 234 図　7T－001 住居跡出土土器（1）…… 282
第 235 図　7T－001 住居跡出土土器（2）…… 283
第 236 図　7T－001 住居跡出土土器（3）…… 284
第 237 図　9T－001 住居跡出土土器（1）…… 285
第 238 図　9T－001 住居跡出土土器（2）…… 286
第 239 図　9T－002 住居跡出土土器（1）…… 287
第 240 図　9T－002 住居跡出土土器（2）…… 288
第 241 図　9T－002 住居跡出土土器（3）…… 289
第 242 図　9T－002 住居跡出土土器（4）…… 290
第 243 図　9T－002 住居跡出土土器（5）…… 291
第 244 図　9T－002 住居跡出土土器（6）…… 292
第 245 図　10T－001 住居跡出土土器（1） …… 293
第 246 図　10T－001 住居跡出土土器（2） …… 294
第 247 図　10T－001 住居跡出土土器（3） …… 295
第 248 図　10T－001 住居跡出土土器（4） …… 296
第 249 図　10T－001 住居跡出土土器（5） …… 297
第 250 図　10T－004 住居跡出土土器 …… 298
第 251 図　10T－005 住居跡出土土器 …… 298
第 252 図　10T－007 住居跡出土土器（1） …… 299
第 253 図　10T－007 住居跡出土土器（2） …… 300
第 254 図　12T－001 住居跡出土土器 …… 301
第 255 図　12T－002 住居跡出土土器（1） …… 302
第 256 図　12T－002 住居跡出土土器（2） …… 303
第 257 図　12T－002 住居跡出土土器（3） …… 304
第 258 図　12T－002 住居跡出土土器（4） …… 305
第 259 図　12T－002 住居跡出土土器（5） …… 306
第 260 図　12T－002 住居跡出土土器（6） …… 307
第 261 図　12T－002 住居跡出土土器（7） …… 308
第 262 図　16T－001 住居跡出土土器（1） …… 309
第 263 図　16T－001 住居跡出土土器（2） …… 310
第 264 図　16T－001 住居跡出土土器（3） …… 311
第 265 図　19T－002・003 住居跡出土土器 …… 312
第 266 図　23T－004 住居跡出土土器 …… 312
第 267 図　23T－001 住居跡出土土器（1） …… 313
第 268 図　23T－001 住居跡出土土器（2） …… 314
第 269 図　23T－002 住居跡出土土器 …… 315
第 270 図　23T－003 住居跡出土土器（1） …… 316
第 271 図　23T－003 住居跡出土土器（2） …… 317
第 272 図　23T－003 住居跡出土土器（3） …… 318
第 273 図　24T－001 住居跡出土土器（1） …… 319
第 274 図　24T－001 住居跡出土土器（2） …… 320
第 275 図　24T－001 住居跡出土土器（3） …… 321
第 276 図　24T－001 住居跡出土土器（4） …… 322
第 277 図　24T－001 住居跡出土土器（5） …… 323
第 278 図　24T－002 住居跡出土土器 …… 324
第 279 図　24T－003 住居跡出土土器 …… 324
第 280 図　10T－008 土坑出土土器 …… 325
第 281 図　23T－006 土坑出土土器 …… 325
第 282 図　23T－007 土坑出土土器 …… 326
第 283 図　25T－001 土坑出土土器 …… 326
第 284 図　25T－002 土坑出土土器 …… 326
第 285 図　5T－005 住居跡出土石器 …… 327
第 286 図　6T－001 住居跡出土石器 …… 327
第 287 図　7T－001 住居跡出土石器 …… 328
第 288 図　9T－001・002 住居跡出土石器 …… 329
第 289 図　10T－001 住居跡出土石器 …… 330
第 290 図　10T－004・007、12T－001 住居跡出土石器 …… 331
第 291 図　12T－002 住居跡出土石器 …… 332

第 292 図　16T－001、19T－003 住居跡出土石器… 333
第 293 図　23T－001・002 住居跡出土石器 …… 334
第 294 図　24T－001 住居跡出土石器 …… 335
第 295 図　24T－003 住居跡出土石器 …… 336
第 296 図　10T－008、25T－002 土坑出土石器… 337
第 297 図　５次 SI－002 動物骨出土状況 …… 345
第 298 図　２次 SI－001・002 …… 360
第 299 図　３次 SI－001 …… 361
第 300 図　４次 SI－001・002 …… 362
第 301 図　４次 SI－003・004 …… 363
第 302 図　４次 SI－005 ～ 007 …… 364
第 303 図　5T－001 住居跡 …… 365
第 304 図　5T－003 住居跡 …… 365
第 305 図　5T－002 住居跡（１）…… 366
第 306 図　5T－002 住居跡（２）…… 367
第 307 図　5T－002 住居跡（３）…… 368
第 308 図　12T－003 住居跡 …… 369
第 309 図　18T－001 住居跡（１）…… 369
第 310 図　18T－001 住居跡（２）…… 370
第 311 図　19T－001 住居跡 …… 370
第 312 図　24T－004 住居跡 …… 371
第 313 図　15T－002、20T－003 土坑、20T－004
　炉跡 …… 372
第 314 図　10T－010 住居跡 …… 373
第 315 図　２次 SI－001・002 出土遺物 …… 374
第 316 図　３次 SI－001 出土遺物 …… 375
第 317 図　４次 SI－001 ～ 004 出土遺物…… 376
第 318 図　４次 SI－003・005 ～ 007 出土遺物 … 377
第 319 図　5T－002 住居跡出土土器（１）…… 378
第 320 図　5T－002 住居跡出土土器（２）…… 379
第 321 図　5T－002 住居跡出土土器（３）…… 380
第 322 図　5T－001 ～ 003 住居跡出土土器…… 381
第 323 図　12T－003 住居跡出土土器 …… 382
第 324 図　18T－001 住居跡出土土器 …… 382
第 325 図　19T－001 住居跡出土土器 …… 383
第 326 図　24T－004 住居跡出土土器 …… 383
第 327 図　5T－002 住居跡出土石器 …… 384
第 328 図　5T－002・003 住居跡出土石器 …… 385
第 329 図　12T－003、18T－001、19T－001、
　24T－004 住居跡出土石器 …… 386
第 330 図　10T－010 住居跡出土土器 …… 387
第 331 図　16T－005 土坑 …… 398
第 332 図　22T－001 住居跡（１）…… 399
第 333 図　22T－001 住居跡（２）…… 400
第 334 図　22T－002 住居跡（１）…… 401
第 335 図　22T－002 住居跡（２）…… 402
第 336 図　22T－003 住居跡（１）…… 403
第 337 図　22T－003 住居跡（２）…… 404
第 338 図　22T－004 住居跡 …… 405
第 339 図　22T－005・008 住居跡 …… 406
第 340 図　22T－006・009 土坑 …… 407
第 341 図　22T－006 土坑遺物出土状況 …… 408
第 342 図　22T－001 住居跡出土遺物（１）…… 409
第 343 図　22T－001 住居跡出土遺物（２）…… 410
第 344 図　22T－001 住居跡出土遺物（３）…… 411
第 345 図　22T－002 住居跡出土遺物（１）…… 412
第 346 図　22T－002 住居跡出土遺物（２）…… 413
第 347 図　22T－003 住居跡出土遺物 …… 413
第 348 図　22T－004 住居跡出土遺物 …… 414
第 349 図　22T－006 土坑出土遺物（１）…… 414
第 350 図　22T－006 土坑出土遺物（２）…… 415
第 351 図　22T－006 土坑出土遺物（３）…… 416
第 352 図　22T－006 土坑出土遺物（４）…… 417
第 353 図　22T－008 住居跡出土遺物、22T 以外
　出土弥生土器 …… 418
第 354 図　22T－006 土坑の比較事例 …… 419
第 355 図　奈良～平安時代住居跡 …… 422
第 356 図　奈良～平安時代出土遺物 …… 423
第 357 図　12T－004 掘立柱建物跡 …… 424
第 358 図　Ⅰ～Ⅶ群土器出土量比（トレンチ別）… 425
第 359 図　Ⅰ群土器集成図（１）…… 426
第 360 図　Ⅰ群土器集成図（２）…… 427
第 361 図　Ⅰ群土器出土分布図（類別）（１）…… 429
第 362 図　Ⅰ群土器出土分布図（類別）（２）…… 431
第 363 図　トレンチ別Ⅰ群土器出土点数組成
　（類別）…… 432
第 364 図　石鏃集成 …… 437
第 365 図　楔形石器集成（１）…… 438
第 366 図　楔形石器集成（２）…… 439
第 367 図　抉入石器集成 …… 440
第 368 図　礫斧集成（１）…… 441
第 369 図　礫斧集成（２）…… 442
第 370 図　石皿集成 …… 442
第 371 図　スタンプ形石器・三角錐形石器
　集成（１）…… 443
第 372 図　スタンプ形石器・三角錐形石器
　集成（２）…… 444
第 373 図　骨角歯牙製品 …… 445
第 374 図　貝製品 …… 446
第 375 図　試料写真（１）…… 458
第 376 図　試料写真（２）…… 459
第 377 図　暦年較正結果（BC 表記）（１）…… 461
第 378 図　暦年較正結果（BC/AD 表記）（２）…… 462
第 379 図　暦年較正結果（BC 表記）（３）…… 463
第 380 図　暦年較正結果（BP 表記）（４）…… 464
第 381 図　暦年較正結果（BP 表記）（５）…… 465
第 382 図　暦年較正結果（BP 表記）（６）…… 466
第 383 図　マルチプロット図 …… 467

第 384 図　取掛西貝塚　既測定分などの IntCal20 を用いた較正年代確率分布 …… 470
第 385 図　ツノガイおよび縄紋早期の貝殻試料の較正年代（IntCal20） …… 472
第 386 図　ツノガイおよび縄紋早期の貝殻試料の測定値と較正曲線（IntCal20） …… 472
第 387 図　付着物の年代測定をおこなった土器 … 473
第 388 図　縄紋早期・前期の種実類・炭化材・土器付着物の較正年代（IntCal20） … 474
第 389 図　縄紋早期・前期の種実類・炭化材・土器付着物の測定値と較正曲線の関係（IntCal20） …… 476
第 390 図　年代測定試対象遺構 …… 484
第 391 図　取掛西貝塚７・８次調査出土貝類 …… 486
第 392 図　取掛西貝塚８次調査のハマグリ殻に付着した灰様物質 …… 487
第 393 図　取掛西貝塚の縄文時代前期前半の食用貝類組成 …… 488
第 394 図　取掛西貝塚における陸産・淡水産微小貝類の組成変化 …… 492
第 395 図　取掛西貝塚の早期前葉貝層における魚類遺体の組成（NISP 比）…… 515
第 396 図　取掛西貝塚の早期前葉貝層における魚類の生息環境別の組成（NISP 比）…… 515
第 397 図　取掛西貝塚５次調査で検出された早期前葉貝層における鳥獣類遺体の組成（NISP 比）…… 516
第 398 図　取掛西貝塚から出土した炭化種実 …… 520
第 399 図　取掛西貝塚出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（１） …… 532
第 400 図　取掛西貝塚出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（２） …… 533
第 401 図　取掛西貝塚出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（３） …… 534
第 402 図　取掛西貝塚出土土器の圧痕レプリカの走査型電子顕微鏡写真（４） …… 535
第 403 図　取掛西貝塚出土の複数圧痕を有する土器と種実圧痕（１） …… 539
第 404 図　取掛西貝塚出土の複数圧痕を有する土器と種実圧痕（２） …… 540
第 405 図　取掛西貝塚出土の複数圧痕を有する土器と種実圧痕（３） …… 541
第 406 図　取掛西貝塚出土の複数圧痕を有する土器と種実圧痕（４） …… 543
第 407 図　取掛西貝塚出土炭化種実の組成 …… 549
第 408 図　遺跡出土アズキ亜属炭化種子の長さ … 552
第 409 図　石材移動概念図（縄文時代早期） …… 572
第 410 図　ボーリング調査地点（国土地理院 電子国土 Web 使用） … 573
第 411 図　ボーリング調査使用機材 …… 574
第 412 図　No. 1 地点における地質柱状図…… 575
第 413 図　No. 2 地点における地質柱状図…… 576
第 414 図　No. 3 地点における地質柱状図…… 577
第 415 図　ボーリングコア写真（No.1　0－9m） … 578
第 416 図　ボーリングコア写真（No.1　9－17m）… 579
第 417 図　ボーリングコア写真（No.2　0－9 m） … 580
第 418 図　ボーリングコア写真（No.2　9－17m）… 581
第 419 図　ボーリングコア写真（No.3　0－11m）… 582
第 420 図　ボーリングコア写真（No.3　11－16m）… 583
第 421 図　年代測定試料採取層準と測定結果 …… 587
第 422 図　暦年較正結果（BC/AD 表記）（１） …… 592
第 423 図　暦年較正結果（BC/AD 表記）（２） …… 593
第 424 図　暦年較正結果（BC/AD 表記）（３） …… 594
第 425 図　暦年較正結果（BC/AD 表記）（４） …… 595
第 426 図　暦年較正結果（BC 表記）（５）…… 596
第 427 図　暦年較正結果（BP 表記）（１）…… 597
第 428 図　暦年較正結果（BP 表記）（２）…… 598
第 429 図　暦年較正結果（BP 表記）（３）…… 599
第 430 図　暦年較正結果（BP 表記）（４）…… 600
第 431 図　暦年較正結果（BP 表記）（５）…… 601
第 432 図　No.1 コアにおけるマルチプロット図 … 602
第 433 図　No.2 コアにおけるマルチプロット図 … 602
第 434 図　No.3 コアにおけるマルチプロット図 … 603
第 435 図　No.1 コアにおける堆積物中の珪藻化石分布図 …… 607
第 436 図　No.2 コアにおける堆積物中の珪藻化石分布図 …… 608
第 437 図　No.3 コアにおける堆積物中の珪藻化石分布図 …… 609
第 438 図　堆積物中の珪藻化石の顕微鏡写真 …… 614
第 439 図　産出した花粉化石 …… 622
第 440 図　No.1 コアにおける花粉分布図 …… 623
第 441 図　No.2 コアにおける花粉分布図 …… 624
第 442 図　No.3 コアにおける花粉分布図 …… 625
第 443 図　船橋市～市川市付近の台地と低地の RCMap による地形 …… 636
第 444 図　縄文海進最盛期の海岸線を示す RCMap… 636
第 445 図　船橋市～市川市付近の低地の地形－RCMap による－ …… 637
第 446 図　縄文海進最盛期の海域の復元、および復元の基となった自然科学分析地点… 639
第 447 図　関東平野中央部における過去 15,000 年間の相対的海水準変動曲線 …… 639
第 448 図　船橋市海老川流域の地形－RCMap による－ …… 640
第 449 図　海老川に沿う地形区分図とボーリング地点 …… 641
第 450 図　飯山満川に沿う地形区分と断面図の位置 …… 641

第 451 図　飯山満川の低地で実施されたボーリング地点付近の横断面図 …… 642
第 452 図　飯山満川に沿う縦断面復元図 …… 643
第 453 図　海老川流域沖積層縦断面図 …… 644
第 454 図　時期別住居跡分布図① …… 654
第 455 図　時期別住居跡分布図② …… 655
第 456 図　時期別住居跡分布図③ …… 656
第 457 図　トレンチ別Ⅰ群土器出土数量 …… 657
第 458 図　撚糸文期の住居跡および土器の分布状況 …… 658
第 459 図　関東地方の縄文時代早期と前期の貝塚分布 …… 666
第 460 図　関東地方縄文時代早期前葉の集落と貝塚 …… 668
第 461 図　千葉県北部の取掛西Ⅱ～Ⅳ期（Ｙ３期）の遺跡 …… 670
第 462 図　早期前葉の主要な集落と貝塚（関東地方）…… 672
第 463 図　比較対象遺跡の遺構全体図 …… 673
第 464 図　縄文時代早期前葉～中葉の貝塚 …… 677

# 表　目　次

第 1 表　取掛西貝塚　土器群と年代測定結果…… 31
第 2 表　早期住居跡の検討表（６～８次調査）… 37
第 3 表　５次SI－002動物骨集中動物遺体リスト… 346
第 4 表　取掛西貝塚動物骨集中頭部データ …… 348
第 5 表　取掛西貝塚動物遺体集計 …… 350
第 6 表　主要遺構別Ⅰ群土器出土点数 …… 433
第 7 表　遺構別石器器種出土点数 …… 434
第 8 表　遺構別骨角歯牙製品・貝製品集計表…… 446
第 9 表　貝層サンプル一覧（５次調査）…… 451
第 10 表　貝層サンプル一覧（６～８次調査）…… 451
第 11 表　土壌サンプル一覧（６～８次調査）…… 452
第 12 表　測定試料および処理 …… 457
第 13 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 460
第 14 表　取掛西貝塚測定一覧 …… 480
第 15 表　取掛西貝塚６次調査　縄文時代早期前葉の7T－001 住居跡から抽出された微小貝類等 …… 496
第 16 表　取掛西貝塚６次調査　縄文時代早期前葉の貝層堆積物サンプル中のヤマトシジミ殻長サイズ …… 496
第 17 表　取掛西貝塚７次調査　縄文時代前期前半の貝層堆積物から抽出された貝類遺体等 …… 497
第 18 表　取掛西貝塚７次調査　縄文時代前期前半の貝層堆積物サンプル中の貝類計測値（9.5mm メッシュ） …… 498
第 19 表　取掛西貝塚８次調査　縄文時代前期前半の貝層堆積物から抽出された貝類遺体等 …… 502
第 20 表　取掛西貝塚８次調査　縄文時代前期前半の貝層堆積物サンプル中の貝類計測値（9.5mm メッシュ） …… 500
第 21 表　６～８次調査の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の種名一覧 …… 504
第 22 表　６～８次調査の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の同定結果 …… 505
第 23 表　６次調査 7T－001 住居跡の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の集計表 …… 505
第 24 表　６次調査 7T－001 住居跡の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の組成（NISP）…… 506
第 25 表　７～８次調査の貝層サンプルから検出された脊椎動物遺体の組成（NISP）… 506
第 26 表　取掛西貝塚における動物遺体群の変遷… 516
第 27 表　６～８次調査から産出した炭化種実… 521
第 28 表　取掛西貝塚出土土器の圧痕同定結果… 527
第 29 表　取掛西貝塚出土土器の圧痕レプリカの同定結果一覧 …… 530
第 30 表　土器個体ごとの検出圧痕とその属性 … 544
第 31 表　取掛西貝塚出土複数個体圧痕混入土器の圧痕属性 …… 545
第 32 表　取掛西貝塚から出土した時期別の炭化種実と圧痕種実 …… 548
第 33 表　礫石器類器種毎時期毎構成岩石種表 … 567
第 34 表　礫石器類器種毎構成岩石種表 …… 568
第 35 表　剝片石器類器種毎時期毎構成岩石種表… 569
第 36 表　礫類構成岩石種 …… 570
第 37 表　小礫構成岩石種 …… 571
第 38 表　測定試料および処理 …… 588
第 39 表　放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 …… 590
第 40 表　微化石試料採取層準の深度および標高 … 606
第 41 表　No.1 コアの珪藻化石産出表…… 610
第 42 表　No.2 コアの珪藻化石産出表…… 611

第 43 表　No.3 コアの珪藻化石産出表 …… 612
第 44 表　No.1 コアにおける産出花粉胞子一覧表… 626
第 45 表　No.2 コアにおける産出花粉胞子一覧表… 627
第 46 表　No.3 コアにおける産出花粉胞子一覧表… 628
第 47 表　時期別住居跡一覧 …… 651
第 48 表　住居別分類土器群集計表 …… 659
第 49 表　遺構間接合資料一覧 …… 660
第 50 表　関東地方縄文時代早期前葉の集落と貝塚… 669
第 51 表　早期前葉の主要な集落と貝塚一覧（関東地方） …… 671

# 巻頭図版目次

巻頭図版 1
取掛西貝塚上空からの空中写真（東から）
遺跡全体のオルソ画像（写真上が北）
巻頭図版 2
10 トレンチから出土した縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群 1 類）
10 トレンチから出土した縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群 4 類・ 5 類）
５次調査で出土した縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群 12 類）
巻頭図版 3
５次 SI－002（早期前葉）
５次 SI－002 貝層堆積状況
５次 SI－002 動物骨集中
巻頭図版 4
５次調査地点で出土した骨角製針製品
５次調査地点で出土した骨角歯牙製・貝製の装飾品
ツノガイ類製品
ツノガイ類製品（小玉状）の切断面

# 図版目次

図版 1
１次調査遺構確認状況（西から）
１次調査完了状況
２次 SI－001 完掘（北から）
２次 SI－002 遺物出土状況（北から）
２次 SK－015 ～ 017・023 完掘（東から）
２次調査地点全景（東から）
３次 SI－001 検出状況（南東から）
３次 SI－001 完掘（南東から）
図版 2
４次 SI－001 完掘（北西から）
４次 SI－002 遺物出土状況（西から）
４次 SI－002P2 貝層断面（南から）
４次 SI－002P3 貝層断面（西から）
４次 SI－003 遺物出土状況（南東から）
４次 SI－003 完掘（東から）
４次 SI－004 遺物出土状況（北から）
４次 SI－004 完掘（北から）
図版 3
４次 SI－005 遺物出土状況（北西から）
４次 SI－005 完掘（西から）
４次 SI－007 完掘（南から）
４次 SK－100 ～ 102 完掘（南東から）
４次 SK－171 完掘（北から）
４次調査地点中央部完掘（南東から）
４次調査地点 全景（北から）
図版 4
５次 SI－001 遺物・焼土・炭化材出土状況（南から）
５次 SI－001 完掘（南から）
５次 SI－001 掘り方完掘（南から）
５次 SI－001 カマド遺物出土状況（南から）
５次 SI－002・003・004 貝層 ( 南から）

図版 5
5 次 SI－002・003・004 貝層（上が東）
5 次 SI－002 貝層検出状況（南から）
5 次 SI－002 貝層掘り下げ（東から）
5 次 SI－002 貝層 ( 西から）
5 次 SI－002 貝層（南西から）
5 次 SI－002 貝層（上が東）
5 次 SI－002 東西セクション南面（南から）
図版 6
5 次 SI－002 東西セクション北面（北から）
5 次 SI－002 西壁セクション（東から）
5 次 SI－002 南北セクション東面（東から）
5 次 SI－002 貝製品出土状況（東から）
5 次 SI－002 骨製品出土状況（南から）
5 次 SI－002 炭化種実出土状況（南から）
5 次 SI－002 骨・石器出土状況（南から）
図版 7
5 次 SI－002 貝出土状況（南西から）
5 次 SI－002 貝・土器出土状況（西から）
5 次 SI－002 魚骨・獣骨出土状況（南から）
5 次 SI－002 土器出土状況
5 次 SI－002 焼土・炭化物出土状況（南から）
5 次 SI－002C・D・G・H 区獣骨出土状況（南から）
5 次 SI－002C・G・H 区獣骨出土状況（北から）
5 次 SI－002G・H 区獣骨出土状況（北から）
図版 8
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（南から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（東から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（南から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（東から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（東から）
図版 9
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（南から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（南西から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（北西から）
図版 10
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（東から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（上が東）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（南から）
5 次 SI－002 動物骨集中検出状況（南から）
図版 11
5 次 SI－002 動物骨集中ベルト除去後（東から）
5 次 SI－002 動物骨集中ベルト除去後（南から）
5 次 SI－002 動物骨集中ベルト除去後（西から）
図版 12
5 次 SI－002 完掘状況（東から）
5 次 SI－002 完掘状況（西から）
図版 13
5 次 SI－002C・D・G・H 区遺物出土状況（西から）
5 次 SI－002A・B・E・F 区遺物出土状況（南から）
5 次 SI－002 灰床炉検出状況（西から）
5 次 SI－002 灰床炉検出状況（南から）
5 次 SI－002 灰床炉完掘状況（東から）
5 次 SI－002 作業風景
5 次 SI－002 微小巻貝サンプル採取風景
5 次 SI－002 南北ベルト剝ぎ取り作業
図版 14
5 次 SI－003 検出状況（南から）
5 次 SI－003 貝層 ( 東から）
5 次 SI－003 完掘（東から）
図版 15
5 次 SI－003 貝層 ( 南から）
5 次 SI－003 南北セクション東面（東から）
5 次 SI－003 遺物出土状況（東から）
5 次 SI－003 獣骨出土状況（西から）
5 次 SI－003 貝層下遺物出土状況（東から）
5 次 SI－003 貝層下獣骨出土状況（南から）
5 次 SI－003 遺物出土状況（南から）
5 次 SI－003 遺物出土状況（北西から）
図版 16
5 次 SI－004 貝層 ( 西から）
5 次 SI－004 遺物出土状況（東から）
5 次 SI－004 完掘（南から）
図版 17
5 次 SI－004 検出状況（南から）
5 次 SI－004 貝層（南から）
5 次 SI－004 貝層南側（東から）
5 次 SI－004 貝層北側（東から）
5 次 SI－004 貝層（東から）
5 次 SI－004 遺物出土状況（南から）
5 次 SI－004 遺物出土状況（東から）
5 次 SI－004 セクション東面（西から）
図版 18
5 次 SI－004 遺物出土状況（南から）
5 次 SI－004 獣骨出土状況（南から）
5 次 SI－004 獣骨出土状況（東から）
5 次 SI－004 遺物出土状況（東から）

5次SI－004遺物出土状況（東から）
5次SI－004遺物出土状況（西から）
5次SI－004遺物出土状況（西から）
5次SI－004遺物出土状況（東から）
図版19
5次SI－006東西セクション（南から）
5次SI－006貝層検出状況（南から）
5次SI－006完掘（南から）
図版20
5次SI－008・SK－008上層遺物出土状況（北東から）
5次SK－008上層遺物出土状況（南西から）
5次SI－008下層遺物出土状況（南西から）
図版21
5次SI－008下層遺物出土状況（北東から）
5次SI－008下層遺物出土状況（北東から）
5次SI－008・SK－008完掘状況（北東から）
図版22
5次SI－009遺物出土状況（北から）
5次SI－009完掘（北から）
5次SI－010・011遺物出土状況（南から）
5次SI－010遺物出土状況（西から）
5次SI－011遺物出土状況（西から）
5次SI－012セクション（東から）
5次SI－012遺物出土状況（西から）
5次SI－012完掘（西から）
図版23
5次SI－015遺物出土状況（北から）
5次SI－015完掘（北から）
5次SK－005貝層検出状況（南西から）
5次SK－005貝層検出状況（南西から）
5次SK－005貝層とセクション（南西から）
5次SK－005遺物出土状況（南から）
5次SK－005・114遺物出土状況（南から）
5次SK－005・114完掘状況（西から）
図版24
5次SK－013検出状況（東から）
5次SK－013土器出土状況（南から）
5次SK－016完掘（西から）
5次SK－114遺物出土状況（西から）
5次SK－114遺物出土状況（東から）
5次SK－131東西セクション（南から）
5次SK－131遺物出土状況（南から）
5次SK－131完掘（南から）
図版25
5次調査地点 全景（上が西）
5次確認調査6T確認状況（西から）
5次確認調査10T確認状況（北から）
分布調査風景
分布調査 貝散布状況
図版26
8次調査5・10Tオルソ画像（上が北）
図版27
12～14Tオルソ画像（上が北）
図版28
15～17Tオルソ画像（上が北）
図版29
18～20Tオルソ画像（上が北）
図版30
22・25・26Tオルソ画像（上が北）
図版31
23・24Tオルソ画像（上が北）
図版32
1T全景（北から）
1－1T土坑（南から）
1－2T遺構（西から）
2T全景（北から）
2T全景（南から）
図版33
2T－001住居跡（西から）
2T－002住居跡（西から）
3T全景（南から）
3T遺物出土状況（南東から）
3T遺物出土状況（東から）
4T全景（南から）
図版34
4T－004土坑（東から）
4T－003住居跡（南東から）
5T全景（南から）
5T－001住居跡（北西から）
5T－001住居跡（南東から）
5T－001住居跡 炉跡（西から）
5T－002住居跡（南西から）
図版35
8次調査5T拡張区全景（東から）
5T－002住居跡（南から）
5T－002住居跡完掘（南から）

図版 36
5T－002 住居跡貝層検出状況（南東から）
5T－002 住居跡ツノガイ出土状況
5T－002 住居跡炉跡（北東から）
5T－003 住居跡（南から）
5T－003 住居跡貝層検出（北東から）
5T－003 住居跡土器出土状況
5T－005 住居跡（南から）
5T－005 住居跡 出土石鏃
図版 37
6T 全景（北から）
6T 全景（南から）
6T－001・002 住居跡（南より）
6T－001・002 住居跡（北西から）
6T－001 住居跡遺物出土状況（西から）
7T 全景（北から）
図版 38
7T－001 住居跡（西から）
7T－001 住居跡貝層（西から）
7T－001 住居跡貝層断面（西から）
7T－001 住居跡石皿出土状況（西から）
7T－001 住居跡焼土検出状況
図版 39
7T－001 住居跡サブトレンチ（北から）
8T 全景（北から）
8T 全景（南から）
8T 石鏃出土状況（南から）
8T－001 住居跡（南東から）
図版 40
9T 全景（北から）
9T 北部（北から）
9T－002 住居跡遺物出土状況（北から）
9T－001・002 住居跡（北から）
図版 41
9T－001・002 住居跡サブトレンチ（北西から）
9T－002 住居跡遺物出土状況
6 次調査 10T 拡張前全景（北から）
8 次調査 10T 拡張区全景（東から）
図版 42
6 次調査 10T－001 住居跡（南西から）
8 次調査 10T－001 住居跡（東から）
8 次調査 10T－001 住居跡床面検出（東から）
図版 43
8 次調査 10T－001 住居跡グリッド設定（南から）
8 次調査 10T－001 住居跡セクション（南東から）
8 次調査 10T－001 住居跡ピット断ち割り（東から）
8 次調査 10T－001 住居跡 P33・37
8 次調査 10T－001 住居跡 P25
8 次調査 10T－001 住居跡 P5
8 次調査 10T－001 住居跡 P76
8 次調査 10T－001 住居跡 P49
図版 44
8 次調査 10T－001 住居跡中央部掘り込み（東から）
8 次調査 10T－004 住居跡（南東から）
8 次調査 10T－004 住居跡サブトレンチ（南東から）
8 次調査 10T－005 住居跡（南東から）
8 次調査 10T－005 住居跡サブトレンチ（南東から）
8 次調査 10T－006 住居跡（西から）
8 次調査 10T－007 住居跡（南から）
8 次調査 10T－007 住居跡（南から）
図版 45
8 次調査 10T－007 住居跡遺物出土状況（北西から）
8 次調査 10T－007 住居跡遺物出土状況（南から）
8 次調査 10T－007 住居跡遺物出土状況（南東から）
8 次調査 10T－007 住居跡セクション（南から）
8 次調査 10T－008 土坑（北から）
6 次調査 10T－008 土坑土器出土状況
8 次調査 10T－010 住居跡 炉跡（東から）
8 次調査 10T－010 住居跡 炉跡上層（東から）
図版 46
8 次調査 10T－010 住居跡 炉跡中層（東から）
8 次調査 10T－010 住居跡 炉跡セクション（北から）
11T 全景（北から）
11T 遺物出土状況（北西から）
11T 北部遺構検出状況（南から）
11T 遺物出土状況（南東から）
11T－003 住居跡（北東から）
図版 47
12T 全景（北から）
12T 全景（南から）
12T－002 住居跡遺物出土状況（南東から）
12T－002・003 住居跡（北西から）

図版 48
12T－001 住居跡（北西から）
12T－002 住居跡（南から）
12T－002 住居跡遺物出土状況（北西から）
図版 49
12T－002 住居跡遺物出土状況
12T－004 掘立柱建物跡（上が北）
13T 全景（南から）
14T 全景（北から）
13T 北側拡張部（北東から）
14T 全景（南から）
図版 50
14T 拡張区全景（北東から）
14T 拡張区（上が北）
15T 全景（南から）
15T 拡張区全景（北から）
15T－002 土坑（東から）
15T－002 土坑セクション（南から）
16T 全景（北から）
図版 51
16T 全景（南から）
16T 拡張区全景（上が北）
16T－001 住居跡（東から）
図版 52
16T－001 住居跡遺物出土状況
16T－001 住居跡遺物出土状況
16T－001 住居跡サブトレンチ
16T－001 住居跡遺物出土状況
16T－003・005 土坑（南東から）
16T－005 土坑サブトレンチ（南から）
17T 全景（南から）
図版 53
17T－001 土坑（南東から）
17T－001 土坑（北東から）
18T－001 住居跡（南から）
18T－001 住居跡（南東から）
18T－001 住居跡（北から）
図版 54
18T－001 住居跡貝層セクション（東から）
18T－001 住居跡貝層（東から）
18T－001 住居跡 炉跡
18T 早期土坑（東から）
19T 北部全景（北から）
19T－001 住居跡サブトレンチ（北から）
19T－001 住居跡貝層検出状況（北から）
図版 55
19T－001 住居跡南側貝ブロック
19T－001 住居跡北側貝ブロック
19T－002・003 住居跡（北から）
19T 拡張区近世溝遺物出土状況
19T 南部拡張区近世溝（西から）
20T 全景（南から）
20T－001 住居跡（北から）
図版 56
20T－001 住居跡（東から）
20T－001 住居跡セクション（西から）
20T－003 土坑（西から）
20T－004 炉跡セクション（西から）
21T 全景（北から）
21T 全景（南から）
22T 拡張区（南から）
22T－001 住居跡（北から）
図版 57
22T－001 住居跡石斧出土状況
22T－001 住居跡 炉跡（南から）
22T－002 住居跡（北から）
22T－002 住居跡（西から）
22T－002 住居跡 炉跡
22T－003 住居跡（南西から）
22T－003 住居跡サブトレンチ（南西から）
22T－004 住居跡 炉跡（東から）
図版 58
22T－006 土坑土器出土状況上層（東から）
22T－006 土坑土器出土状況上層（東から）
22T－006 土坑土器出土状況中層（南から）
22T－006 土坑土器出土状況中層（東から）
22T－006 土坑土器出土状況下層（西から）
22T－008 住居跡土器出土状況（西から）
23T 全景（北から）

図版 59
23T 全景（南から）
23T 拡張区全景（北から）
23T 拡張区全景（南から）
23T－001 住居跡（南西から）
23T－002 住居跡（西から）
23T－003 住居跡（西から）
23T－004 住居跡（南西から）
図版 60
23T－005 住居跡（南から）
23T－006・007 土坑セクション（西から）
24T 全景（南から）
24T 全景（北から）
24T 拡張区全景（南西から）
24T－001 住居跡（北東から）
24T－001 住居跡石鏃出土状況
図版 61
24T－001・002 サブトレンチ（南東から）
24T－003 住居跡（東から）
24T－004 住居跡（南東から）
24T－003・004 住居跡サブトレンチ（西から）
24T－004 住居跡 炉跡（北東から）
24T 検出硬化面
図版 62
25T 全景（西から）
25T 全景（東から）
25T 拡張区全景（西から）
25T－001・002 土坑（東から）
25T－002 土坑土器出土状況
25T－002 土坑石器出土状況
図版 63
25T－001・002 セクション（西から）
25T－003 土坑セクション
25T－002 土坑（西から）
26T 全景（北から）
26T 全景（南から）
図版 64
26T－001 住居跡（北東から）
26T－001 住居跡遺物出土状況（南から）
26T－001 住居跡遺物出土状況
26T 近世溝（北から）
遺跡見学会（６次調査）
遺跡見学会（６次調査）
遺跡見学会（６次調査）
学生作業風景（６次調査）
図版 65
親子 de 発掘体験（７次調査）
新任教職員研修（７次調査）
学生作業風景（７次調査）
遺跡見学会（８次調査）
遺跡見学会（８次調査）
芝山東小学校見学会（８次調査）
芝山東小学校見学会（８次調査）
学生作業風景（８次調査）
図版 66
5T－005 住居跡出土土器
6T－001 住居跡出土土器（１）
図版 67
6T－001 住居跡出土土器（２）
図版 68
6T－001 住居跡出土土器（３）
7T－001 住居跡出土土器（１）
図版 69
7T－001 住居跡出土土器（２）
図版 70
7T－001 住居跡出土土器（３）
9T－001 住居跡出土土器（１）
図版 71
9T－001 住居跡出土土器（２）
9T－002 住居跡出土土器（１）
図版 72 ～ 75
9T－002 住居跡出土土器（２）～（５）
図版 76 ～ 78
10T－001 住居跡出土土器（１）～（３）
図版 79
10T－001 住居跡出土土器（４）
10T－004 住居跡出土土器
図版 80
10T－005 住居跡出土土器
10T－007 住居跡出土土器（１）
図版 81
10T－007 住居跡出土土器（２）

図版 82
12T－001 住居跡出土土器
12T－002 住居跡出土土器（1）
図版 83 ～ 87
12T－002 住居跡出土土器（2）～（6）
図版 88
12T－002 住居跡出土土器（7）
16T－001 住居跡出土土器（1）
図版 89・90
16T－001 住居跡出土土器（2）・（3）
図版 91
19T－002・003 住居跡出土土器
23T－001 住居跡出土土器（1）
図版 92
23T－001 住居跡出土土器（2）
23T－002 住居跡出土土器（1）
図版 93
23T－002 住居跡出土土器（2）
23T－003 住居跡出土土器（1）
図版 94・95
23T－003 住居跡出土土器（2）・（3）
図版 96
23T－004 住居跡出土土器
24T－001 住居跡出土土器（1）
図版 97 ～ 99
24T－001 住居跡出土土器（2）～（4）
図版 100
24T－002 住居跡出土土器
24T－003 住居跡出土土器
図版 101
5T－001 住居跡出土土器
5T－002 住居跡出土土器（1）
図版 102
5T－002 住居跡出土土器（2）
図版 103
5T－002 住居跡出土土器（3）
5T－003 住居跡出土土器
図版 104
12T－003 住居跡出土土器
18T－001 住居跡出土土器
図版 105
19T－001 住居跡出土土器
24T－004 住居跡出土土器
図版 106
10T－010 住居跡出土土器
図版 107
10T－008 土坑出土土器
23T－006・007 土坑出土土器
25T－001・002 土坑出土土器
図版 108
1T 出土土器
図版 109
2T 出土土器
図版 110
3T 出土土器（1）
図版 111
3T 出土土器（2）
4T 出土土器
図版 112
5T 出土土器（1）
図版 113
5T 出土土器（2）
6T 出土土器（1）
図版 114
6T 出土土器（2）
7T 出土土器
図版 115
8T 出土土器
9T 出土土器（1）
図版 116・117
9T 出土土器（2）・（3）
図版 118 ～ 120
10T 出土土器（1）～（3）
図版 121
10T 出土土器（4）
11T 出土土器（1）
図版 122 ～ 124
11T 出土土器（2）～（4）
図版 125
11T 出土土器（5）
12T 出土土器（1）

図版 126
12T 出土土器（２）
図版 127
12T 出土土器（３）
13T 出土土器
14T 出土土器（１）
図版 128
14T 出土土器（２）
15T 出土土器
16T 出土土器（１）
図版 129
16T 出土土器（２）
18T 出土土器
図版 130
19T 出土土器
20T 出土土器
23T 出土土器（１）
図版 131 ～ 135
23T 出土土器（２）～（６）
図版 136
23T 出土土器（７）
24T 出土土器（１）
図版 137
24T 出土土器（２）
25T 出土土器（１）
図版 138
25T 出土土器（２）
26T 出土土器
図版 139 ～ 141
住居跡出土石器（１）～（３）
図版 142
住居跡出土石器（４）、土坑出土石器
図版 143 ～ 148
トレンチ出土石器（１）～（６）
図版 149
トレンチ出土石器（７）
分布調査出土石器（１）
図版 150
分布調査出土石器（２）
5T－002 住居跡出土ツノガイ類

付属ＤＶＤ内訳

１．縄文土器観察表
２．石器観察表
３．データ集
４．写真図版

# 第 1 章　調査の経緯と目的

## 第 1 節　保存目的の調査に至るまでの経緯

取掛西貝塚は、東京湾最奥部の千葉県船橋市飯山満町 1 丁目・米ケ崎町にあり、面積は約 76,000㎡である。平成 11 年に初めて発掘調査が行われ、その後、平成 18 年の 4 次調査まで、縄文時代前期の貝塚を伴う集落跡と認識されていた。ところが、平成 20 年の 5 次調査で、東京湾奥部初となる縄文時代早期前葉の貝塚が発見され、同時期の竪穴住居跡 10 軒を調査した。この調査で早期前葉の遺跡として認識が改められるとともに、船橋市域にとどまらない遺跡の重要性が判明した。

船橋市では、平成 26 年の海老ケ作貝塚損壊事件を契機に、重要な遺跡は市民共有の財産として、現状保存を念頭に保護に取り組むこととなった。その筆頭が取掛西貝塚である。

一部が宅地化されたものの、平成 27 年の時点で 50,000㎡をこえる範囲が畑地・山林として残っており、宅地化が進む前に市史跡への指定などにより、現状保存をはかる必要があると考えた。そこで、市は、今後の現状保存の計画と市史跡指定に向けての基礎資料を得る目的で、平成 28 年度に畑地部分を対象に分布調査を計画した。当初は 10 ～ 12 月に実施する計画であり、調査について土地所有者への説明を始めたところ、平成 28 年 6 月 28 日に範囲内の土地について宅地開発の相談があった。遺跡の評価を早急に行う必要が生じたため、分布調査を 7 月 7・8 日、 8 月 9 ～ 18 日に前倒しで実施した。その結果、現存する台地上のほぼ全域において、縄文時代早期前葉の遺物が散布する状況が認められ、遺跡の規模・範囲が広範囲に及ぶことが判明した。この成果をもとに市として取掛西貝塚を現状保存していく方針を決定し、相談のあった土地について土地所有者と協議を行ったところ、市で取得し、現状保存することとなった。この土地については、平成 28 年 11 月 28 日付けで船橋市文化財（史跡）に指定した。

また、分布調査の成果を受け、遺跡の価値や希少性、重要度が高く見込まれることから、国史跡を目指して保存・整備事業を進めることとなった。

保存にあたっては遺跡の範囲、規模および構造などをより詳細に把握する必要があることから、国庫および県費の補助を受けて、平成 29 年度から 3 か年の計画で、保存目的の範囲・内容詳細確認調査を実施することとした。

## 第 2 節　調査の体制

遺跡の保存に向けた施策の実施にあたっては、開発行為などに伴う緊急調査に対応する従前の体制のほかに、取掛西貝塚の調査・研究および保存に向けた体制構築を図るため、船橋市教育委員会文化課に史跡整備推進班を新たに設置するとともに、船橋市埋蔵文化財調査事務所において調査・研究体制の構築を行った。

併せて、文化庁および千葉県教育庁文化財課からの助言を受けるとともに、調査、保存および活用について必要な事項を検討するため、船橋市取掛西貝塚調査検討委員会を組織し、その下部組織として同作業部会を設置した。

### 第 1 項　各調査の概要

取掛西貝塚ではこれまで 8 次にわたる調査を実施している。以下に概要と既刊の報告書について示す。なお、 6 ～ 8 次調査では、学習・経験の機会提供という観点から、首都圏の大学で考古学を専攻・履修する大学生・大学院生の参加を募った（参加者数などは各概要に示した）。

（１）第 1 次調査

調査期間　　平成 11（1999）年 2 月 9 日

調査面積　　30㎡（事業範囲 165.29㎡）

調査内容　　確認調査（無線基地局設置に伴う緊急調査）

調査主体　　船橋市教育委員会

調査担当　　清水理史（非常勤職員）

調査報告書　船橋市教育委員会 2003「取掛西貝塚」『平成 8 年度～平成 11 年度船橋市発掘調査報告書』

（２）第 2 次調査

調査期間　　平成 15（2003）年 6 月 18 日～ 6 月 30 日

調査面積　　193.5㎡（事業範囲 1,404.07㎡　保存範囲 1,033.00㎡）

調査内容　　確認調査（宅地造成に伴う緊急調査）

調査主体　　船橋市教育委員会

調査担当　　荒井弘道（非常勤職員）

調査報告書　船橋市教育委員会 2004「取掛西貝塚（２）」『平成 15 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』

（３）第 3 次調査

調査期間　　平成 17（2005）年 2 月 17 日～ 3 月 17 日

調査面積　　363.79㎡（事業範囲 2,060.37㎡）

調査内容　　確認調査（宅地造成に伴う緊急調査）

調査主体　　船橋市教育委員会

調査担当　　小中美幸

調査報告書　船橋市教育委員会 2019「取掛西貝塚（３）」『平成 16 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』

（４）第 4 次調査

調査期間　　平成 18（2006）年 6 月 28 日～ 8 月 14 日

調査面積　　990.9㎡（事業範囲 2,368.79㎡　保存範囲 1,068.08㎡）

調査内容　　本調査（宅地造成に伴う緊急調査）

調査主体　　船橋市教育委員会

調査担当　　白﨑智隆（非常勤職員・当時）

調査報告書　船橋市教育委員会 2008『取掛西貝塚（４）』

（５）第 5 次調査

調査期間　　平成 20（2008）年 6 月 2 日～ 7 月 30 日

調査面積　　472.19㎡（事業範囲 1,757.70㎡　保存範囲 1,149.87㎡）

調査内容　　本調査（宅地造成に伴う緊急調査）

調査主体　　船橋市教育委員会

調査担当　　蒲　明男（大成エンジニアリング株式会社）、石坂雅樹

調査報告書　船橋市教育委員会 2013『取掛西貝塚（５）Ⅰ』

船橋市教育委員会 2021『取掛西貝塚（５）Ⅱ』

普及事業　　遺跡見学会（平成 20 年 7 月 10 日）/ 小学生・近隣住民参加

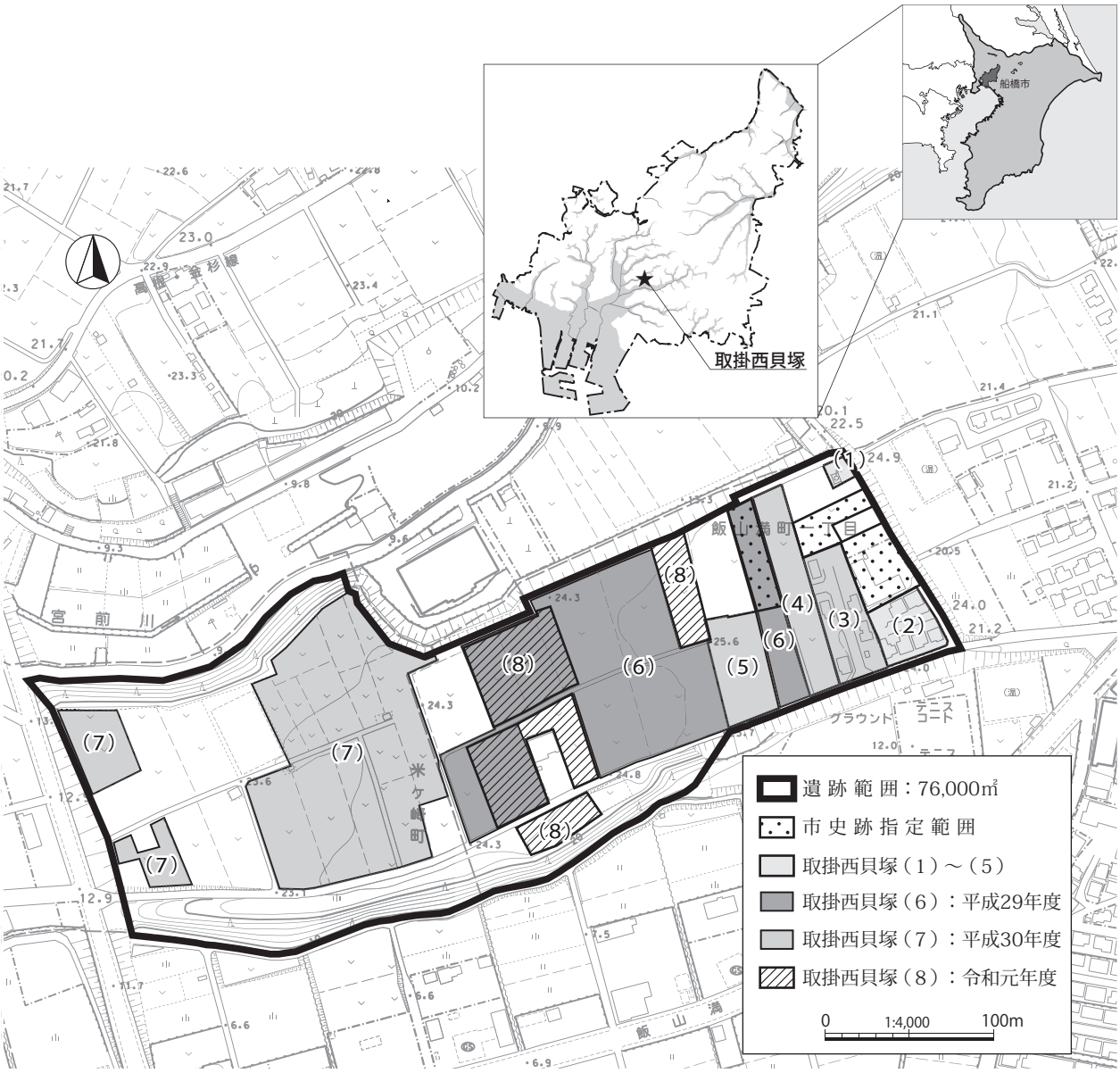
飛ノ台史跡公園博物館展示「船橋市最古の貝塚－取掛西貝塚速報展－」
平成 21 年 9 月 19 日～ 10 月 4 日

（6）分布調査

調査期間　平成 28（2016）年 7 月 7 ～ 8 日・8 月 9 ～ 18 日
調査内容　保存目的の分布調査
調査担当　白﨑智隆・早坂仁敬
調査指導　阿部芳郎（明治大学）

（7）第 6 次調査

調査期間　平成 29（2017）年 6 月 12 日～ 9 月 29 日
調査面積　1,222.9㎡（対象面積 15,513.79㎡）
調査内容　保存目的の範囲・内容確認調査（国庫・県費補助事業）
調査主体　船橋市教育委員会




第 1 図　取掛西貝塚調査地点

調査担当　　白﨑智隆・早坂仁敬
調査報告書　船橋市教育委員会 2018「取掛西貝塚（６）」『平成 29 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
学生参加者数　28 人（昭和女子大学、大正大学、千葉大学、明治大学、立正大学、早稲田大学）
普及事業　　遺跡見学会　２回開催 / 参加者 451 名、講座　９回開催 / 参加者 967 名
講演会「取掛西貝塚を考える～約１万年前の縄文ワールド　第１弾～」
３回開催 / 参加者 383 名
「取掛西貝塚を考える～約１万年前の縄文ワールド　第２弾～」
３回開催 / 参加者 394 名

（８）第７次調査
調査期間　　平成 30（2018）年６月 11 日～９月 28 日
調査面積　　2,014.8㎡（対象面積 14,974㎡）
調査内容　　保存目的の範囲・内容確認調査（国庫・県費補助事業）
調査主体　　船橋市教育委員会
調査担当　　白﨑智隆・早坂仁敬
調査報告書　船橋市教育委員会 2019「取掛西貝塚（７）」『平成 30 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
学生参加者数　25 人（昭和女子大学、大正大学、千葉大学、明治大学、立正大学、早稲田大学）
普及事業　　遺跡見学会　６回開催 / 参加者 451 名、講座　13 回開催 / 参加者 634 名
講演会「取掛西貝塚を考える～約１万年前の縄文ワールド　第３弾～」 参加者 240 名
飛ノ台史跡公園博物館展示「ここまでわかった！～１万年前の取掛西貝塚～」
平成 31年２月１日～３月３日（参加者 1,640人）

（９）第８次調査
調査期間　　令和元（2019）年６月 10 日～９月 30 日
調査面積　　989.565㎡（対象面積 7,144㎡）
調査内容　　保存目的の範囲・内容確認調査（国庫・県費補助事業）
調査主体　　船橋市教育委員会
調査担当　　白﨑智隆・早坂仁敬・箱石幸祐
調査報告書　船橋市教育委員会 2020「取掛西貝塚（８）」『令和元年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
学生参加者数　29 人（國學院大學、昭和女子大学、大正大学、明治大学、早稲田大学）
普及事業　　遺跡見学会　８回開催 / 参加者 700 名、講座　７回開催 / 参加者 484 名

**第２項　調査組織**

保存目的の範囲・内容確認調査は、平成 29 年度～令和元年度に国庫補助（国宝重要文化財等保存整備費補助金、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金）および千葉県費補助（埋蔵文化財緊急調査事業補助金）を受けて実施した。

各年度の調査組織と内容は、以下のとおりである。

**１．平成 29 年度　保存目的の範囲・内容確認調査（第６次調査）、地形測量、基礎整理**

船橋市教育委員会
教育長　松本文化　　教育次長　金子公一郎　　生涯学習部長　小出正明

文化課
　課長（生涯学習部参事）　大屋武彦　　課長補佐　道上文
　埋蔵文化財保護係長（主査）　白井太郎　　副主査　小中美幸　　主事　小野寿美子
文化課埋蔵文化財調査事務所
　所長　石坂雅樹
　副主査　恩田亜紀子　　副主査　髙橋文子　　副主査　小林理惠
　主任主事　髙岡実　　主任主事　白﨑智隆
　主事　狩野美那子　　主事　山口晃　　主事　沼野健一　　主事　早坂仁敬

**２．平成 30 年度　保存目的の範囲･内容確認調査（第 7 次調査）、レーザー航空地形測量、ボーリング調査、基礎整理、概要報告書刊行**

船橋市教育委員会
教育長　松本文化　　教育次長　金子公一郎　　生涯学習部長　三澤史子
文化課
　課長（生涯学習部参事）　大屋武彦　　課長補佐（主幹）　道上文
　埋蔵文化財保護係長・史跡整備推進班長（主査）　白井太郎
　史跡整備推進班　主事　永塚歩
　保護班　班長（副主査）　小中美幸　　主事　狩野美那子
文化課埋蔵文化財調査事務所
　所長　石坂雅樹
　調査班　班長（副主査）　小林理惠　　主任主事　髙岡実　　主任主事　白﨑智隆
　主事　山口晃　　主事　沼野健一　　主事　早坂仁敬　　主事　小林美貴
　庶務管理班　班長（副主査）　髙橋文子　　副主査　恩田亜紀子

**３．令和元年度　保存目的の範囲・内容確認調査（第 8 次調査）、ボーリング調査、自然科学分析、整理**

船橋市教育委員会
教育長　松本文化　　教育次長　大山泰光　　生涯学習部長　三澤史子
文化課
　課長（生涯学習部参事）　大屋武彦　　課長補佐（主幹）　道上文
　埋蔵文化財保護係長・史跡整備推進班長（主査）　白井太郎
　史跡整備推進班　主任主事　植木雅博　　主事　永塚歩
　保護班　班長（副主査）　小中美幸　　主事　狩野美那子　　主事　松本康太郎
文化課埋蔵文化財調査事務所
　所長　石坂雅樹
　調査班　班長（副主査）　小林理惠　　主任主事　髙岡実　　主任主事　白﨑智隆
　主事　山口晃　　主事　沼野健一　　主事　早坂仁敬　　主事　小林美貴　　主事　箱石幸祐
　庶務管理班　班長（副主査）　髙橋文子　　副主査　恩田亜紀子

**４．令和２年度　自然科学分析、整理・総括報告書刊行**

船橋市教育委員会

教育長　松本文化　　教育次長　小山泰生　　生涯学習部長　三澤史子

文化課

課長（生涯学習部参事）　大屋武彦　　課長補佐　白井太郎

埋蔵文化財保護係長・保護班長　小中美幸

史跡整備推進班　班長（主任主事）　植木雅博　　主任主事　永塚歩

保護班　主事　狩野美那子　　主事　松本康太郎

文化課埋蔵文化財調査事務所

所長　石坂雅樹

調査班　班長（副主査）　小林理惠　　主任主事　髙岡実

主任主事　白﨑智隆　　主任主事　早坂仁敬　　主事　山口晃　　主事　沼野健一

主事　小林美貴　　主事　箱石幸祐

庶務管理班　班長（副主査）　髙橋文子　　主査　富永敬子

**第３項　調査検討委員会**

発掘調査および保存・活用について必要な事項を検討するため、平成 30 年度に船橋市取掛西貝塚調査検討委員会を設置し、学識経験者から指導・助言を受けながら事業を進めることとした。また、本委員会の下部組織として、先史考古学、動物考古学、植物考古学・古環境の作業部会を設置し、具体的な調査・分析方法の検討を行った。

**１．組織**（所属などは令和２年 11 月現在。オブザーバー職名は当時。）

**（１）取掛西貝塚調査検討委員会**

委員長　　阿部芳郎（明治大学教授、船橋市文化財審議会委員）

副委員長　樋泉岳二（早稲田大学講師、明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）

委員　　堀越正行（元市立市川考古博物館長）

委員　　谷口康浩（國學院大學教授）

委員　　佐々木由香（明治大学黒耀石研究センター客員研究員、東京大学総合博物館特任研究員）

**（２）オブザーバー**

文化庁文化財第二課（平成 30 年９月まで文化財部記念物課）

森先一貴（文部科学技官、平成 30 年度）

斉藤慶吏（文化財調査官、令和元年度から令和２年度まで）

千葉県教育庁教育振興部文化財課

高梨俊夫（副課長、令和元年度）

木原高弘（埋蔵文化財班長、平成 30 年度）

大内千年（主任上席文化財主事、平成 30 年度）

永塚俊司（主任上席文化財主事、平成 30 年度から令和２年度まで）

吉野健一（主任上席文化財主事、平成 30 年度から令和２年度まで）

速水成美（文化財主事、令和元年度）

**（3）取掛西貝塚調査検討委員会作業部会**（所属などは令和 2 年 11 月現在。◎は部会長）

**①先史考古学部会**

◎阿部芳郎（明治大学教授、船橋市文化財審議会委員）
栗島義明（明治大学研究・知財戦略機構特任教授、明治大学黒耀石研究センター員）
峰村　篤（松戸市教育委員会社会教育課）
米田　穣（東京大学総合研究博物館教授）

**②動物考古学部会**

◎樋泉岳二（早稲田大学講師、明治大学研究・知財戦略機構研究推進員）
黒住耐二（千葉県立中央博物館）

**③植物考古学・古環境部会**

◎佐々木由香（明治大学黒耀石研究センター客員研究員、東京大学総合博物館特任研究員）
遠藤邦彦（日本大学名誉教授、NPO 法人首都圏地盤解析ネットワーク）
能城修一（明治大学黒耀石研究センター客員教授）

**（4）事務局**

船橋市教育委員会生涯学習部文化課

**2．会議の概要**

**（1）検討委員会**

①平成 30 年度第 1 回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会
日時 平成 30 年 6 月 4 日　午後 3 時から　場所 船橋市役所
議題 平成 29 年度取掛西貝塚保存事業の報告について、平成 30 年度取掛西貝塚保存事業の計画について　など

②平成 30 年度第 2 回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会
日時 平成 30 年 6 月 4 日　午前 10 時から　場所 取掛西貝塚
議題 調査内容の視察、今後の調査方法について　など

③平成 30 年度第 3 回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会
日時 平成 31 年 1 月 28 日　午後 2 時から　場所 船橋市役所
議題 平成 30 年度調査成果について、史跡指定範囲候補（案）について、平成 31 年度調査計画について、国指定までのスケジュールについて、ボーリング調査について、平成 30 年度普及事業について　など

④令和元年度第 1 回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会
日時 令和元年 5 月 20 日　午後 3 時から　場所 船橋市役所
議題 令和元年度調査計画について　など

⑤令和元年度第 2 回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会
日時 令和元年 8 月 5 日　午後 2 時から　場所 取掛西貝塚
議題 調査内容の視察、今後の調査方法について　など

⑥令和元年度第 3 回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会
日時 令和 2 年 1 月 20 日　午後 3 時から　場所 船橋市役所
議題 令和元年度調査成果について、総括報告書について　など

⑦令和２年度第１回船橋市取掛西貝塚調査検討委員会

日時 令和２年 11 月４日から 12 月２日まで（書面開催）

議題 取掛西貝塚総括報告書の内容について

**（２）作業部会**

①先史考古作業部会

日時 平成 30 年７月３日　午後２時から　場所 船橋市役所・埋蔵文化財調査事務所

議題 作業部会の立上げ、スケジュールについて、これまでの調査成果と今後の調査について、取掛西貝塚（5）と関連する遺跡の分布と特徴、分析について、確認調査出土土器の実見

②動物考古作業部会

日時 平成 30 年９月３日　午前 10 時から　場所 埋蔵文化財調査事務所・取掛西貝塚調査現場

議題 貝層サンプルの整理作業方針について、概報および総括報告書のスケジュールについて

③植物考古学・古環境作業部会

日時 平成 30 年９月 25 日　午後２時から　場所 埋蔵文化財調査事務所

議題 ボーリング調査について、土器圧痕調査について、貝層・土壌サンプルなどの自然科学分析の方法と進め方について

④合同作業部会

日時 平成 30 年 12 月 18 日　午後４時から　場所 明治大学グローバルフロント

議題 平成 31 年度の調査の方向性と分析研究成果の位置づけについて　など

⑤植物考古学・古環境作業部会（ボーリングコア検討会）

日時 令和元年６月７日　午後２時から　場所 明治大学猿楽町第二校舎　考古学専攻実習室

議題 ボーリング候補地について、ボーリングコアの分析方針について

⑥動物考古学および植物考古学・古環境作業部会

日時 令和元年７月 18 日　午後１時半から　場所 取掛西貝塚調査現場

議題 竪穴住居跡（縄文早期）の調査について、土壌サンプリング方法などについて

⑦動物考古学および植物考古学・古環境作業部会

日時 令和元年 10 月 31 日　午後２時から　場所 埋蔵文化財調査事務所

議題 土壌サンプルの水洗・選別作業進捗状況について、８次調査　縄文前期貝層の分析候補について、今後の分析スケジュールについて

# 第２章　取掛西貝塚の立地と環境

## 第１節　地理的環境

千葉県船橋市は千葉県北西部に位置し、中心市街地（市役所本庁舎所在地）の地理的位置は北緯 35 度 41 分 41 秒、東経 139 度 58 分 57 秒である。本市の面積は 85.62㎢で、市域の広がりは東西 13.86km、南北 14.95km である。地形的には、関東平野南部の下総台地の一部に位置し、小河川による樹枝状の開析谷が発達している（第２図）。下総台地は下総上位面、下総下位面、千葉段丘に分類され、市内の河川は市域北西から南東にかけて広がる下総上位面を境に、東京湾水系と利根川（印旛沼）水系に分かれる。また、海岸部には沖積低地があり、幅 500m 前後、高さ３～ 6m の砂州地形（船橋砂州）が東西に延びている。東京湾岸は現代では人工的な埋立地となっているが、かつては遠浅の干潟が広がっており、わずかに三番瀬や谷津干潟（習志野市）にその面影が残っている。地勢は全般的に低く平坦であり、標高の最高点は市東部（習志野３丁目）の 32.3m、最低点は臨海部（南海神１丁目、湊町１丁目）の 0.2m である。

取掛西貝塚は、船橋市飯山満町１丁目・米ケ崎町に所在し、東葉高速鉄道飯山満駅の北西約 800m の距離にある（第４図）。本貝塚は海老川の支流である宮前川と飯山満川に開析された東西に長い舌状台地（下総下位面）上に位置する。宮前川と飯山満川は、遺跡の西で主要河川である海老川と合流する。海老川が流れる低地は夏見低地（滝口 2004）と呼ばれ、縄文海進時に台地を侵食しながら海が侵入し、内湾となっていた。その後、海退して船橋砂州に塞がれるようになると潟湖になり、次第に陸化していった。

東京湾に面する台地南端は直線的な海食崖となっており、海退時に吹き上げられた砂により砂丘に被覆されている。これらの砂丘帯に連なって夏見低地を塞ぐように東西方向に船橋砂州が延びている。この砂州は、海進時に沿岸流が台地を侵食し、大量の砂が沿岸部に供給されて形成されたと考えられており、砂州上で古墳時代前期の竪穴住居跡や後期の円筒埴輪が検出されていることから、遅くとも古墳時代までには安定した陸地となっていた。現在、この砂州上に国道 14 号線が通っており、古代における下総と上総を結ぶ駅路は、この国道 14 号線に踏襲されていると考えられている（山路 2010 など）。

取掛西貝塚が位置する台地は標高約 23 ～ 25m で、直下の飯山満川の低地との比高差は約 16m である。台地は北の一部と東側、西側を戦後の土砂採取で削平されており、島状に残った台地全体が周知の埋蔵文化財包蔵地である。台地上はおおむね平坦であるが、南東から北西に向かって緩やかに傾斜している（第６図）。第７図 C－C' 断面に見られるように台地北半で北に向かってやや強い傾斜となる。

参考文献

貝塚爽平編　1993 『東京湾の地形・地質と水』築地書館

財団法人千葉県史料研究財団編　1997 『千葉県の自然誌　本編２　千葉県の大地』千葉県

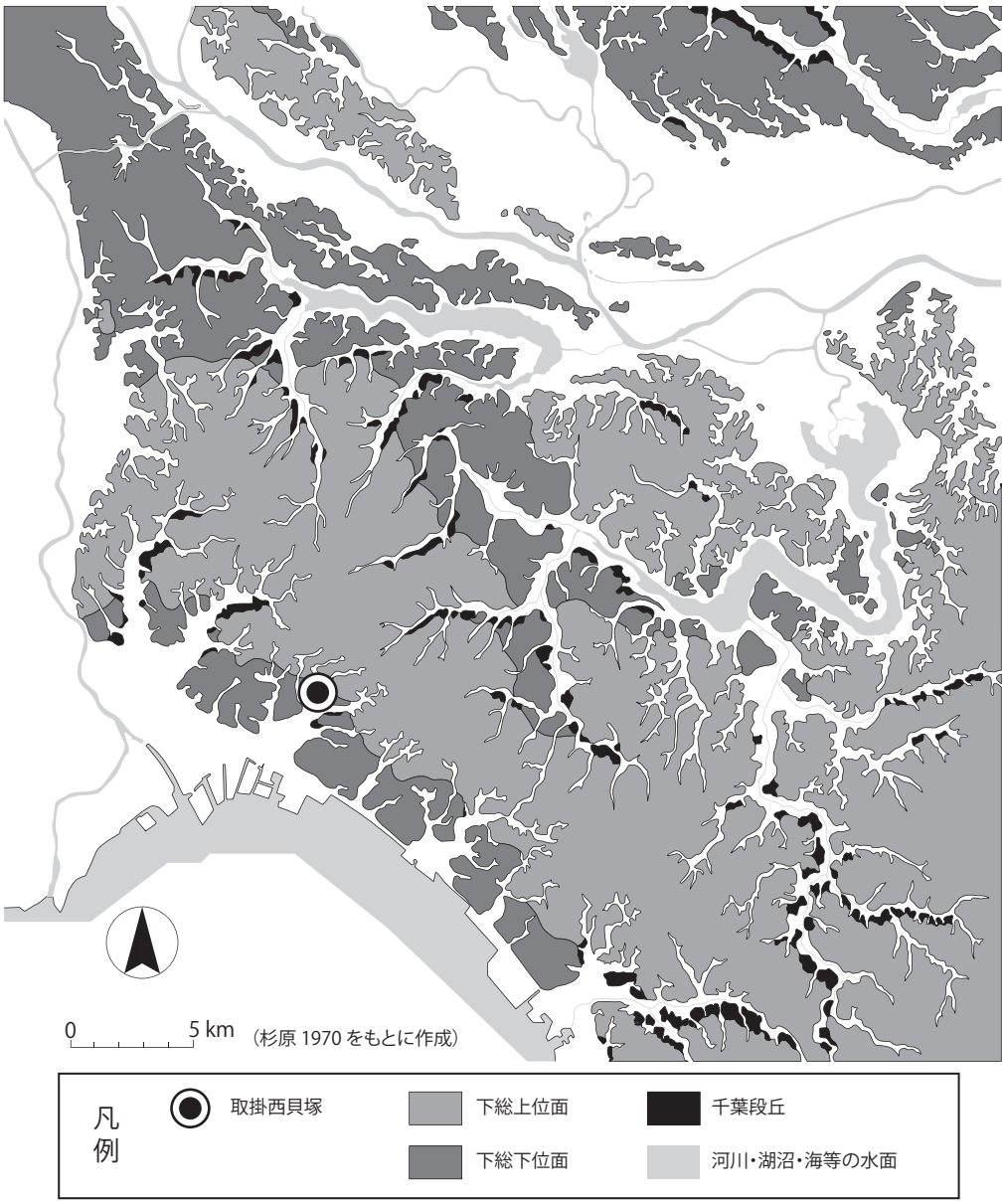
杉原重夫　1970 「下総台地西部における地形の発達」『地理学評論』43，pp.703-718，日本地理学会

滝口昭二　2004 「夏見低地の水田化について」『史談会報』25, pp.1-9，船橋市史談会

山路直充　2010 「ヤマトタケルの江戸川渡河伝説」『市史研究いちかわ』創刊号，pp.33-53，市川市

市川市史自然編編集委員会編　2016 『市川市史　自然編－都市化と生きもの－』市川市

遠藤邦彦　2017 『日本の沖積層－未来と過去を結ぶ最新の地層－　改訂版』冨山房インターナショナル




第 2 図　千葉県北西部地形分類

## 第 2 節　歴史的環境

### 第 1 項　取掛西貝塚周辺の遺跡

海老川水系の遺跡を中心に取掛西貝塚周辺の主な遺跡を概観する（第 3 ・ 4 図）。

**旧石器時代**：西の台遺跡、36. 古作中台遺跡、37. 向遺跡、49. 海神台西遺跡、52. 飛ノ台貝塚、59. 夏見台遺跡、27. 新山東遺跡、29. 大仲台遺跡、93. 飯山満遺跡（No.4）、81. 飯山満遺跡（No.5）で石器ブロックが検出されている。

**縄文時代**：草創期は 1. 取掛西貝塚、18. ユルギ松遺跡、84. 沢之台遺跡、52. 飛ノ台貝塚で有舌尖頭器、37. 向遺跡で局部磨製石斧が出土している。

早期前葉は 1. 取掛西貝塚、24. 中野木台遺跡、25. 新山貝塚、82. 高郷遺跡で竪穴住居跡が検出され、16. 上ホシ遺跡、26. 新山遺跡で撚糸文系土器の包含層が調査されている。早期中葉は 75. 佐倉道南遺跡、

93. 飯山満遺跡（No.4）、西の台遺跡、37. 向遺跡、52. 飛ノ台貝塚、59. 夏見台遺跡で沈線文系土器が出土している。早期後葉は、東京湾東岸部を代表する拠点的集落である 52. 飛ノ台貝塚のほか、50. 北台次遺跡と 75. 佐倉道南遺跡で竪穴住居跡と炉穴、58. 夏見台西遺跡、59. 夏見台遺跡、71. 宮本台遺跡群、92. 藤崎台遺跡で炉穴が検出されている。

前期の代表的な集落跡は、早期の遺跡よりやや内陸に分布しており、1. 取掛西貝塚、3. 飯山満東遺跡、78. 古和田台遺跡、75. 佐倉道南遺跡、42. 立場遺跡、57. 八栄北遺跡、58. 夏見台西遺跡、45. 辺田台遺跡、44. 前貝塚堀込貝塚、37. 向遺跡がある。

中期の主な集落跡は、谷奥に立地するものが認められるようになる。79. 高根木戸北貝塚、80. 高根木戸遺跡、3. 飯山満東遺跡、9. ついじ台貝塚、16. 上ホシ遺跡、18. ユルギ松遺跡、24. 中野木台遺跡、25. 新山貝塚、27. 新山東遺跡、28. 中嶋遺跡、42. 立場遺跡、44. 前貝塚堀込貝塚、30. 藤原観音堂貝塚、31. 中法伝貝塚、35. 前貝塚で集落跡が調査されている。

後期は遺跡数が少なくなる。10. 上高根貝塚、25. 新山貝塚、宮本台貝塚（71. 宮本台遺跡群）、38. 後貝塚、30. 藤原観音堂貝塚がある。

**弥生時代**：市内の遺跡は少ないが、夏見低地を取り巻くように台地上に集落跡が分布している。中期後半の集落跡は、市内で初めて 1. 取掛西貝塚で確認された。後期の集落跡は 59. 夏見台遺跡、62. 夏見大塚遺跡、12. 台畑遺跡、42. 立場遺跡、11. 東町遺跡で調査されており、夏見台遺跡では市内初となる竪穴住居跡内貝層も検出されている。このほか、18. ユルギ松遺跡と 62. 夏見大塚遺跡で方形周溝墓が検出されている。

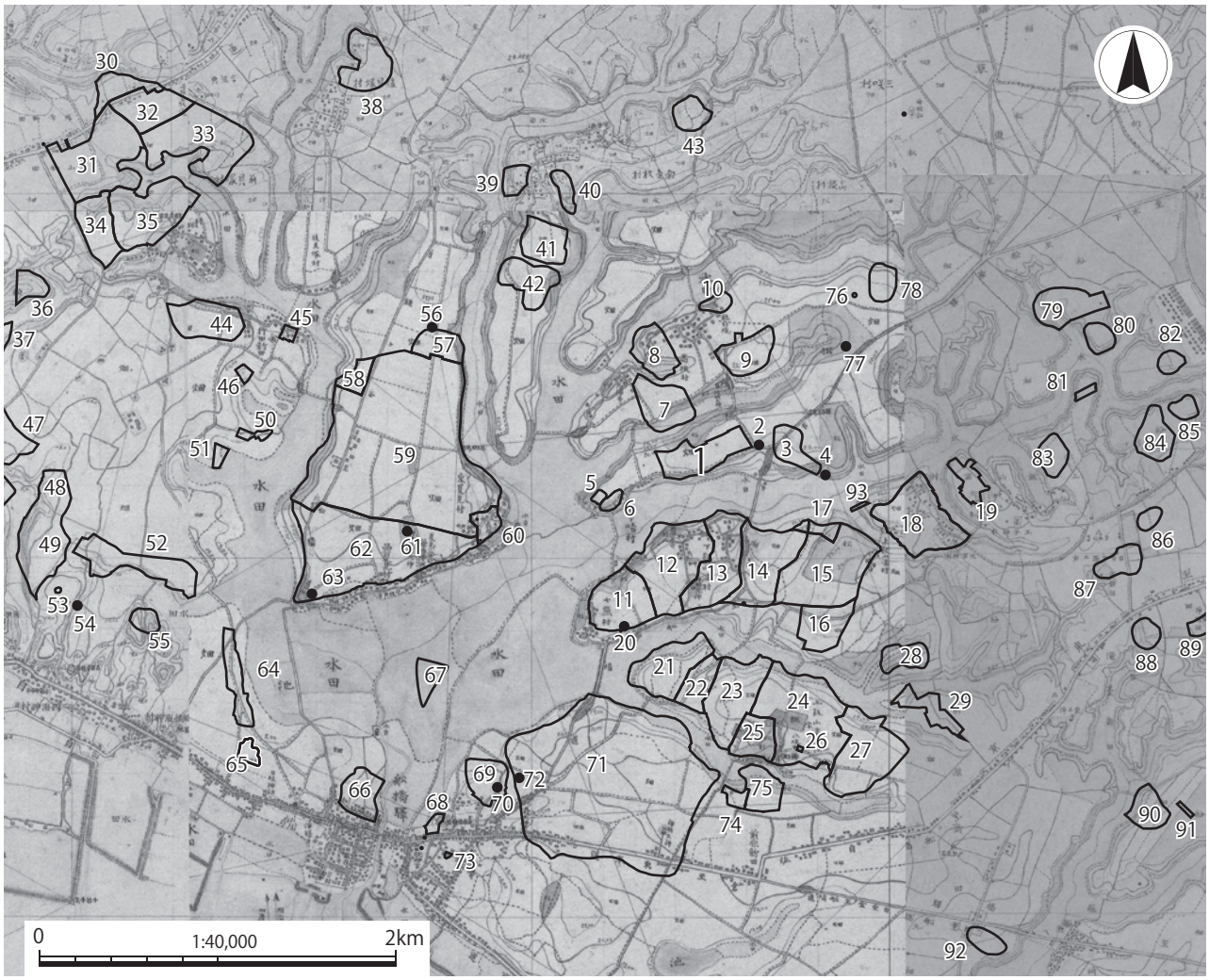
**古墳時代～奈良・平安時代**：下総国府跡が本貝塚の西方約 9.6km の位置にあり、古代の主要道は台地前面の砂州上を通っていたと考えられている。このため、本市南部の主要な古代集落遺跡は、東京湾に臨む台地上に多くが立地している。すなわち西から東中山台遺跡群、47. 印内台遺跡群、49. 海神台西遺跡、夏見台遺跡群、71. 宮本台遺跡群である。

本貝塚の西側台地上には夏見台遺跡群が所在する。夏見台遺跡群は、弥生時代後期から続く集落遺跡で、北東部の 57. 八栄北遺跡、北西部の 58. 夏見台西遺跡、南部の 62. 夏見大塚遺跡、北部の 59. 夏見台遺跡などを包摂している。古墳時代の集落は、北東～東縁辺部、南部、西縁辺部で検出されている。奈良・平安時代になると、台地南～東部縁辺部に集落が展開する。

古墳時代～奈良・平安時代の竪穴住居跡を検出した遺跡は、12. 台畑遺跡（古墳時代中・後期）、13. 子の神遺跡（古墳時代中期）、93. 飯山満遺跡（No.4）（古墳時代前期）、11. 東町遺跡（古墳時代後期）、71. 宮本台遺跡群（古墳時代前・中・後期、奈良・平安時代）、55. 宝塚遺跡（古墳時代中期）、52. 飛ノ台貝塚（古墳時代後期）、50. 北台次遺跡（古墳時代後期）、51. 北台次南遺跡（古墳時代後期）、45. 辺田台遺跡（古墳時代前・中・後期）、49. 海神台西遺跡（古墳時代後期、奈良・平安時代）、74. 中野木向遺跡（平安時代）、90. 外原遺跡（古墳時代中期）があげられる。また、古墳時代中期から後期にかけて、石製模造品工房跡が 12. 台畑遺跡、57. 八栄北遺跡、59. 夏見台遺跡、71. 宮本台遺跡群、55. 宝塚遺跡、45. 辺田台遺跡、90. 外原遺跡で検出されている。

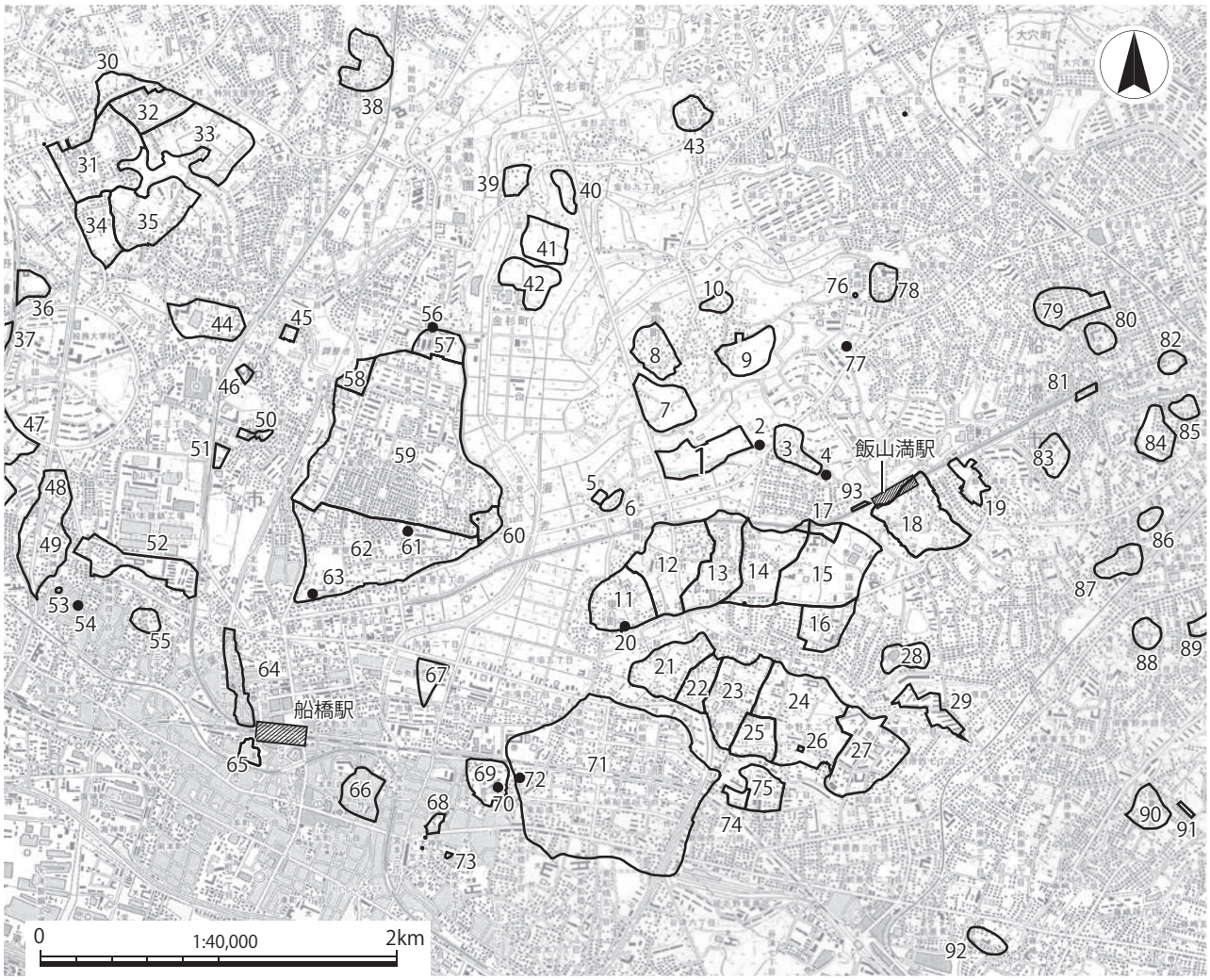
西南の砂州上には、古墳時代～平安時代の遺物包蔵地で 6 世紀代の円筒埴輪が出土した 64. 天沼遺跡、人物埴輪が出土した 65. 竹ノ越遺跡がある。この西に隣接する海神地区では、大正時代に京成電鉄を敷設する際に円筒埴輪が出土しており、天沼～海神地区に古墳群が存在していたと考えられる。砂州東部には古墳時代前期の竪穴住居跡を検出した 66. 船橋御殿跡が立地している。

砂州東側の台地上では、69. 峰台遺跡、72. 峰台古墳、71. 宮本台遺跡群にかけて円墳からなる古墳群




1　取掛西貝塚
2　取掛貝塚
3　飯山満東遺跡
4　上飯山満南貝塚
5　米ケ崎城跡
6　米ケ崎遺跡
7　唐沢台貝塚
8　高根城跡
9　ついじ台貝塚
10　上高根貝塚
11　東町遺跡
12　台畑遺跡
13　子の神遺跡
14　川の上遺跡
15　飯山満西遺跡
16　上ホシ遺跡
17　上飯山満遺跡
18　ユルギ松遺跡
19　宮下田遺跡
20　七熊庚申塚
21　西駿河台遺跡
22　中駿河台遺跡
23　東駿河台遺跡
24　中野木台遺跡
25　新山貝塚
26　新山遺跡
27　新山東遺跡
28　中嶺遺跡
29　大仲台遺跡
30　藤原観音堂貝塚
31　中法伝貝塚
32　坂ノ上遺跡
33　宮前遺跡
34　西之広遺跡
35　前貝塚
36　古作中台遺跡
37　向遺跡
38　後貝塚
39　金杉城跡
40　オオラント塚
41　南堀込遺跡
42　立場遺跡
43　高木遺跡
44　前貝塚堀込貝塚
45　辺田台遺跡
46　北本町二丁目遺跡
47　印内台遺跡群
48　行田貝塚
49　海神台西遺跡
50　北台次遺跡
51　北台次南遺跡
52　飛ノ台貝塚
53　海神古墳
54　海神五丁目所在塚
55　宝塚遺跡
56　笹塚古墳
57　八栄北遺跡
58　夏見台西遺跡
59　夏見台遺跡
60　夏見城跡
61　夏見古墳
62　夏見大塚遺跡
63　花輪台古墳
64　天沼遺跡
65　竹ノ越遺跡
66　船橋御殿跡
67　船橋城跡
68　西福寺境内遺跡
69　峰台遺跡
70　宮本六丁目所在塚
71　宮本台遺跡群
72　峰台古墳
73　カネンド塚
74　中野木向遺跡
75　佐倉道南遺跡
76　高根シシ見塚
77　飯山満古墳
78　古和田台遺跡
79　高根木戸北貝塚
80　高根木戸遺跡
81　飯山満遺跡（No. 5）
82　高郷遺跡
83　細田遺跡
84　沢之台遺跡
85　七林遺跡
86　薬園台北遺跡
87　薬園台貝塚
88　滝台貝塚
89　薬園台南貝塚
90　外原遺跡
91　内之原遺跡
92　藤崎台遺跡
93　飯山満遺跡（No. 4）

第 3 図　周辺の地形




1　取掛西貝塚
2　取掛貝塚
3　飯山満東遺跡
4　上飯山満南貝塚
5　米ケ崎城跡
6　米ケ崎遺跡
7　唐沢台貝塚
8　高根城跡
9　ついじ台貝塚
10　上高根貝塚
11　東町遺跡
12　台畑遺跡
13　子の神遺跡
14　川の上遺跡
15　飯山満西遺跡
16　上ホシ遺跡
17　上飯山満遺跡
18　ユルギ松遺跡
19　宮下田遺跡
20　七熊庚申塚
21　西駿河台遺跡
22　中駿河台遺跡
23　東駿河台遺跡
24　中野木台遺跡
25　新山貝塚
26　新山遺跡
27　新山東遺跡
28　中嶺遺跡
29　大仲台遺跡
30　藤原観音堂貝塚
31　中法伝貝塚
32　坂ノ上遺跡
33　宮前遺跡
34　西之広遺跡
35　前貝塚
36　古作中台遺跡
37　向遺跡
38　後貝塚
39　金杉城跡
40　オオラント塚
41　南堀込遺跡
42　立場遺跡
43　高木遺跡
44　前貝塚堀込貝塚
45　辺田台遺跡
46　北本町二丁目遺跡
47　印内台遺跡群
48　行田貝塚
49　海神台西遺跡
50　北台次遺跡
51　北台次南遺跡
52　飛ノ台貝塚
53　海神古墳
54　海神五丁目所在塚
55　宝塚遺跡
56　笹塚古墳
57　八栄北遺跡
58　夏見台西遺跡
59　夏見台遺跡
60　夏見城跡
61　夏見古墳
62　夏見大塚遺跡
63　花輪台古墳
64　天沼遺跡
65　竹ノ越遺跡
66　船橋御殿跡
67　船橋城跡
68　西福寺境内遺跡
69　峰台遺跡
70　宮本六丁目所在塚
71　宮本台遺跡群
72　峰台古墳
73　カネンド塚
74　中野木向遺跡
75　佐倉道南遺跡
76　高根シシ見塚
77　飯山満古墳
78　古和田台遺跡
79　高根木戸北貝塚
80　高根木戸遺跡
81　飯山満遺跡（No. 5）
82　高郷遺跡
83　細田遺跡
84　沢之台遺跡
85　七林遺跡
86　薬園台北遺跡
87　薬園台貝塚
88　滝台貝塚
89　薬園台南貝塚
90　外原遺跡
91　内之原遺跡
92　藤崎台遺跡
93　飯山満遺跡（No. 4）

第４図　周辺の遺跡

が検出され、70. 宮本六丁目所在塚は円墳を利用した塚であったことが判明している。

東京湾に面した船橋市南部の遺跡では、古代の貝層が多くみられる特徴がある。古墳時代～平安時代（6 ～ 11 世紀）の竪穴住居跡や溝状遺構から貝層が検出されている（12. 台畑遺跡、59. 夏見台遺跡、62. 夏見大塚遺跡、71. 宮本台遺跡群、49. 海神台西遺跡、47. 印内台遺跡群、東中山台遺跡群）。

**中世～近世**：平安時代末、保延 4（1138）年に夏見低地を中心とした範囲に伊勢神宮領である夏見御厨（船橋御厨）が成立する。夏見低地西岸の砂州付近に天沼千軒伝承があること、中世の印内台遺跡群・東中山台遺跡群・夏見台遺跡群・峰台遺跡など夏見低地を取り巻く遺跡から貿易陶磁器や国産陶器他の優品が出土することから、中世の夏見低地は潟になっており、潟内に湊が存在したのではないかという説がある。本遺跡の西にある夏見台遺跡群は、中世の夏見御厨の中心部に位置している。62. 夏見大塚遺跡から 13 世紀の滑石製石鍋の破片が出土したほか、59. 夏見台遺跡や 62. 夏見大塚遺跡で台地整形区画などが検出されている。また、夏見低地に面する 69. 峰台遺跡では道路状遺構や井戸状遺構などが検出され、12 ～ 16 世紀の貿易陶磁器など市内でも検出例が少ない遺物が出土している。

中世には砂州付近の海老川河口に湊があり、海老川を挟んで五日市、九日市と呼ばれる定期的な市が立ち、都市的な空間が形成された。海老川河口の東側の砂丘上には、延喜式内社である船橋大神宮（意富比神社）があり、その北に位置する西福寺（68. 西福寺境内遺跡）には 14 世紀ごろの伊豆産安山岩製大型五輪塔と宝篋印塔（市指定文化財）がある。両塔とも海老川西岸にある御殿地（66. 船橋御殿跡）から移したといわれており、船橋砂州上に船橋湊の拠点的な律宗系寺院が存在し、金融業者が活動していたことを示唆している（湯浅 2004）。また、御殿地と宮本（69. 峰台遺跡の西付近）からは、15 ～ 16 世紀ごろと推定される大甕に入った埋納銭が見つかっている。66. 船橋御殿跡は江戸時代初頭に造営された徳川将軍が東金へ鷹狩りに行く時に宿泊する御殿で、海老川河口西岸に位置する。もとは船橋大神宮の宮司である富氏の屋敷であったといわれ、中世の方形居館であったと推定される。近世になると、船橋砂州上の街道と海老川が交差する五日市・九日市周辺は、佐倉道（成田道）の宿場町（継立場）として、また将軍家に魚介類を献上する「御菜浦」を擁した湊町として栄えた。

中世の城館跡は、5. 米ケ崎城跡（消滅）、8. 高根城跡、39. 金杉城跡、60. 夏見城跡、67. 船橋城跡（消滅）があり、夏見低地を取り巻くように位置している。

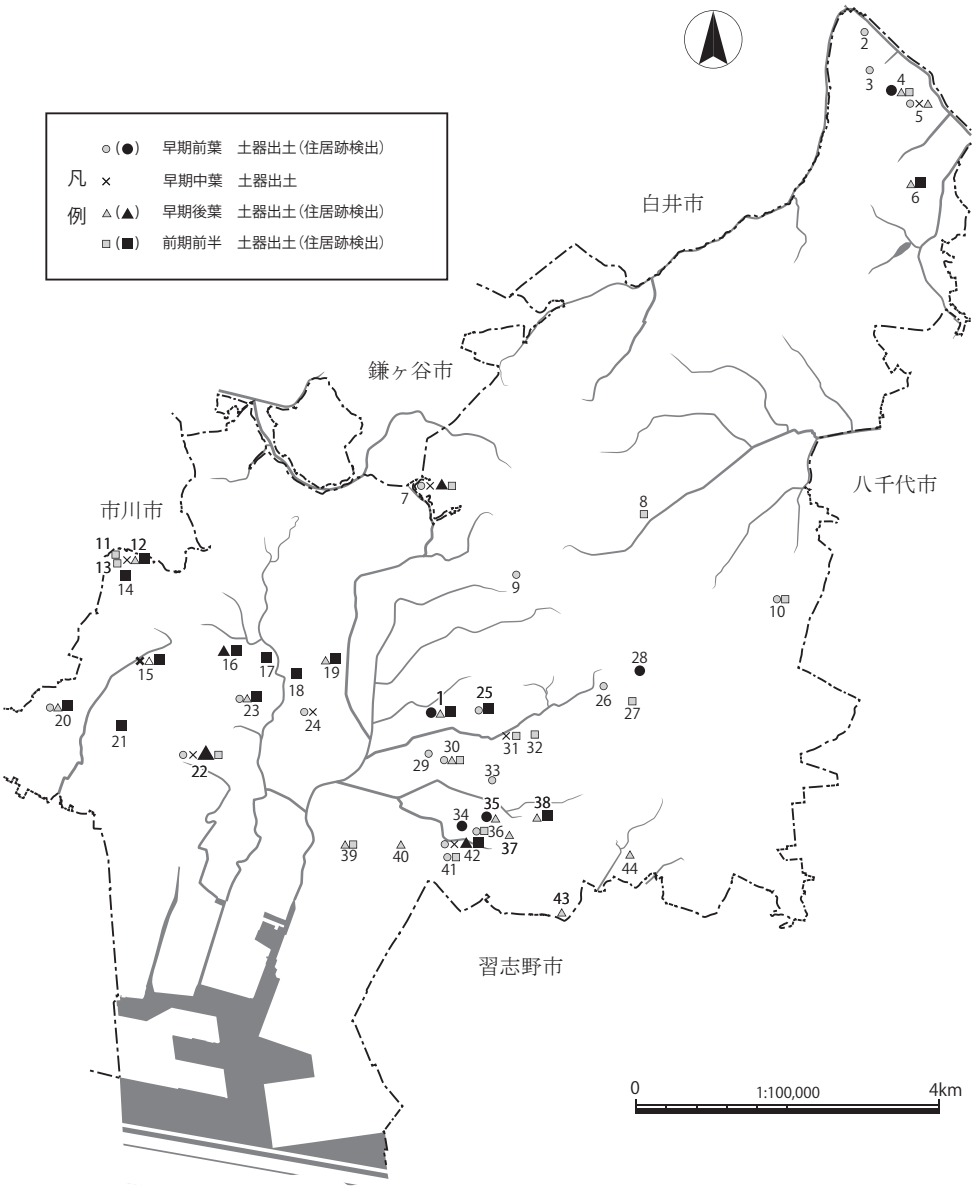
このほか、本遺跡南東の 18. ユルギ松遺跡では中世後半を中心とする台地整形区画などが検出されている。南方の 71. 宮本台遺跡群では、中世後半の台地整形区画のほか、近世の道路状遺構や溝状遺構が検出されている。また、11. 東町遺跡で中近世の土坑墓や溝状遺構などが調査されている。

船橋市南部の遺跡では、中世・近世も引き続き、貝層が形成されている。中世の貝層は、69. 峰台遺跡、47. 印内台遺跡群、東中山台遺跡群で地下式坑や井戸跡などで検出されたほか、貝殻敷の道路跡が見つかっている。近世の貝層はわずかであるが、47. 印内台遺跡群と東中山台遺跡群で検出されている。

### 第 2 項　船橋市内の縄文時代早期前葉から前期前半の遺跡

船橋市内の早期前葉から前期前半の遺跡を第 5 図にまとめた。

縄文時代早期前葉の遺構および遺物の検出事例は少ない。早期で最も古い段階では、井草式が出土した夏見台遺跡（24）、佐倉道南遺跡（42）、西の台遺跡（７）、小室上台遺跡（５）、小室台遺跡（４）、白井先遺跡 A 地点（３）、白井先遺跡 D 地点（２）があげられる。夏島式の明瞭な出土事例は現段階で確認し得ないが、次の稲荷台式になると出土事例が若干増加し、源七山遺跡（10）、新山遺跡（36）、台畑遺跡（29）、夏見台遺跡（24）、飯山満東遺跡（25）、中野木台遺跡（35）、小室上台遺跡（５）、小室台遺跡（４）、新




| No. | 遺跡名 | 早期前葉（撚糸文系土器期） | 早期中葉（沈線文系土器期） | 早期後葉（条痕文系土器期） | 前期前半（花積下層～黒浜式期） |
|---|---|---|---|---|---|
| 1 | 取掛西貝塚 | ● | | ○ | ● |
| 2 | 白井先遺跡Ｄ地点 | ○ | | | |
| 3 | 白井先遺跡Ａ地点 | ○ | | | |
| 4 | 小室台遺跡 | ● | | ○ | |
| 5 | 小室上台遺跡 | ○ | ○ | ○ | |
| 6 | 小室木駄橋遺跡 | | | ○ | ● |
| 7 | 西の台遺跡 | ○ | ○ | ● | ○ |
| 8 | 海老ケ作北貝塚 | | | | ○ |
| 9 | 三咲 | ○ | | | |
| 10 | 源七山遺跡 | ○ | | | ○ |
| 11 | 藤原北貝塚 | | | | ○ |
| 12 | 下郷後遺跡 | | ○ | ○ | ● |
| 13 | 法蓮寺山遺跡 | | | | ○ |
| 14 | 下郷遺跡 | | | | ● |
| 15 | 向遺跡 | | ○ | ○ | ● |
| 16 | 前貝塚堀込貝塚 | | | ● | ● |
| 17 | 辺田台遺跡 | | | | ● |
| 18 | 夏見台西遺跡 | | | | ● |
| 19 | 八栄北遺跡 | | | ○ | ● |
| 20 | 東中山台遺跡群 | ○ | | ○ | ● |
| 21 | 印内台遺跡群 | | | | ● |
| 22 | 飛ノ台貝塚 | ○ | ○ | ● | ○ |
| 23 | 北台次遺跡 | ○ | | ○ | ● |

| No. | 遺跡名 | 早期前葉（撚糸文系土器期） | 早期中葉（沈線文系土器期） | 早期後葉（条痕文系土器期） | 前期前半（花積下層～黒浜式期） |
|---|---|---|---|---|---|
| 24 | 夏見台遺跡 | ○ | ○ | | |
| 25 | 飯山満東遺跡 | ○ | | | ● |
| 26 | 飯山満遺跡（No.5） | ○ | | | |
| 27 | 沢之台遺跡 | | | | ○ |
| 28 | 高郷遺跡 | ● | | | |
| 29 | 台畑遺跡 | ○ | | | |
| 30 | 子の神遺跡 | ○ | | ○ | ○ |
| 31 | 飯山満遺跡（No.4） | | ○ | | ○ |
| 32 | ユルギ松遺跡 | | | | ○ |
| 33 | 上ホシ遺跡 | ○ | | | |
| 34 | 新山貝塚 | ● | | | |
| 35 | 中野木台遺跡 | ● | | ○ | |
| 36 | 新山遺跡 | ○ | | | ○ |
| 37 | 新山東遺跡 | | | ○ | |
| 38 | 宮下田遺跡 | | | ○ | ● |
| 39 | 峰台遺跡 | | | ○ | ○ |
| 40 | 宮本台遺跡群 | | | ○ | |
| 41 | 中野木向遺跡 | ○ | | | ○ |
| 42 | 佐倉道南遺跡 | ○ | ○ | ● | ● |
| 43 | 藤崎台遺跡 | | | ○ | |
| 44 | 外原遺跡 | | | ○ | |

●：住居跡検出
○：土器出土

第５図　船橋市内縄文時代早期～前期前半遺跡分布図

山貝塚（34）、上ホシ遺跡（33）、西の台遺跡（７）、高郷遺跡（28）が該当し、特に小室台遺跡からはこの時期と考えられる住居跡が検出され、小室上台遺跡では稲荷台式期と考えられる小型土偶（バイオリン形土偶）が出土している。次の段階で集落跡が確認されている遺跡は取掛西貝塚のみであるが、源七山遺跡（10）、飯山満遺跡（No.5）（26）で花輪台・稲荷原式と考えられる土器が出土している。

早期中葉は竪穴住居跡の検出はなく、小室上台遺跡（５）、佐倉道南遺跡（42）、下郷後遺跡（12）、飛ノ台貝塚（22）、夏見台遺跡（24）、西の台遺跡（７）、飯山満遺跡（No.4）（31）、向遺跡（15）の８か所で沈線文系土器が出土している。

縄文時代早期後葉になると、遺跡数がやや増加する。市指定史跡の飛ノ台貝塚（22）は 1932 年に杉原荘介氏によって発見された貝塚であり、当時の調査ではハイガイを主体とする貝層が検出された。さらに 1938 年の調査では新発見の遺構として「炉穴」の名称が与えられ、学史的にも重要な遺跡として位置づけられる。その後の調査事例の蓄積によって、野島式期から茅山下層式期を中心に竪穴住居跡、炉穴、土坑墓などの遺構が多数検出されただけでなく、ハイガイを主体にマガキ、ハマグリ、シオフキなどの貝種を含む貝層も多数検出されており、縄文海進を考える上でも貴重な集落遺跡である。また、佐倉道南遺跡（42）、前貝塚堀込貝塚（16）、西の台遺跡（７）でも竪穴住居跡、炉穴などの遺構が検出され、東中山台遺跡群（20）、中野木台遺跡（35）、夏見台遺跡（24）、北台次遺跡（23）、宮下田遺跡（38）、藤崎台遺跡（43）などでも炉穴が検出されている。他にも峰台遺跡（39）、新山東遺跡（37）、子の神遺跡（30）、小室上台遺跡（５）、小室台遺跡（４）、下郷後遺跡（12）、八栄北遺跡（19）、宮本台遺跡群（40）、外原遺跡（44）から条痕文系土器が出土している。

前期前半は、花積下層式期から関山式期の住居跡を検出した遺跡が現段階で取掛西貝塚のみであり、土器が出土した遺跡についても飯山満東遺跡（25）、印内台遺跡群（21）、沢之台遺跡（27）、西の台遺跡（７）と早期後葉と比較すると低調になる。黒浜式期になると再び遺跡数が増加し、向遺跡（15）、夏見台西遺跡（18）、前貝塚堀込貝塚（16）、佐倉道南遺跡（42）、八栄北遺跡（19）、下郷遺跡（14）、辺田台遺跡（17）、飯山満東遺跡（25）、宮下田遺跡（38）、小室木駄橋遺跡（６）、東中山台遺跡群（20）、印内台遺跡群（21）、北台次遺跡（23）からは住居跡を検出している。また、住居跡が検出されなかった遺跡では海老ケ作北貝塚（８）、小室台遺跡（４）、源七山遺跡（10）、飛ノ台貝塚（22）、沢之台遺跡（27）、ユルギ松遺跡（32）、西の台遺跡（７）、子の神遺跡（30）、飯山満遺跡（No.4）（31）、峰台遺跡（39）、小室木駄橋遺跡（６）、藤原北貝塚（11）、夏見台西遺跡（18）、下郷後遺跡（12）、法連寺山遺跡（13）があげられる。また、夏見台西遺跡（18）、向遺跡（15）、前貝塚堀込貝塚（16）、下郷後遺跡（12）、藤原北貝塚（11）、法蓮寺山遺跡（13）、飯山満東遺跡（25）では遺構内覆土から貝層が検出されており、いずれもハマグリを組成の主体とすることが分かっている。

ここまで、船橋市内の遺跡を対象に、縄文時代早期前葉から前期前半までの遺跡分布について概観してきた。早期前葉は、稲荷台式期を中心とする小室台遺跡に代表されるように取掛西Ⅰ期とⅡ期の間の時期である遺跡が複数あり、取掛西貝塚の主要時期である取掛西Ⅱ～Ⅳ期においても遺物のみの出土ながら遺跡が少数存在する。早期後葉については取掛西貝塚で遺構遺物ともに希薄な時期であるが、市内全体では飛ノ台貝塚をはじめ遺跡数が増加しており、立地の変化が見られる。取掛西貝塚で再び集落の存在が顕著となるのは縄文時代前期前半であり、市内全体でも特に黒浜式期になると遺跡数が増加する傾向にあり、取掛西貝塚でも黒浜式期には住居数が増加し、かつ住居内貝層が顕著になる傾向も市内の他遺跡と一致すると言えよう。

**遺跡別参考文献**


**１　取掛西貝塚**

船橋市教育委員会　2003 「Ⅵ　取掛西貝塚」『平成８年度～ 11 年度　船橋市発掘調査報告書』

船橋市教育委員会　2004 「取掛西貝塚（２）」『平成 15 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』

船橋市教育委員会　2019 「Ⅳ．取掛西貝塚（３）」『平成 16 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』

船橋市教育委員会　2008 『取掛西貝塚（４）』

船橋市教育委員会　2013 『取掛西貝塚（５）Ⅰ』

船橋市教育委員会　2021 『取掛西貝塚（５）Ⅱ』

**２　白井先遺跡 D 地点**

財団法人千葉県都市公社　1973 「(付) 白井先 D 地点の井草Ⅰ式土器」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ本文編』

**３　白井先遺跡 A 地点**

財団法人千葉県都市公社　1973 「３　白井先 A 遺跡 (CN305)」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ本文編』

**４　小室台遺跡**

船橋市教育委員会　2015 『小室台遺跡（１）』

**５　小室上台遺跡**

船橋市教育委員会・船橋市遺跡調査会　1991 『小室上台遺跡』

**６　小室木駄橋遺跡**

船橋市遺跡調査会　1995 『小室木駄橋遺跡』

**７　西の台遺跡**

西ノ台遺跡発掘調査団　1983 『西ノ台遺跡調査報告』

船橋市遺跡調査会　1985 『西の台（第２次)』

**８　海老ケ作北遺跡**

船橋市教育委員会　2017 『海老ケ作北遺跡（５）』

**９　船橋市三咲**

峰村　篤　2003 「東葛地域における撚糸文土器終末期の一様相―船橋市三咲遺跡採集資料について―」『奈和』41 号　奈和同人会

**10　源七山遺跡**

財団法人千葉県教育振興財団　2006 『船橋市源七山遺跡　坪井地区埋蔵文化財調査報告書』

**11　藤原北貝塚**

葛飾区中川中学校社会部　1963 『千葉県船橋市藤原北貝塚の研究』

**12　下郷後遺跡**

船橋市教育委員会　1983 『下郷後―船橋市下郷後遺跡発掘調査報告書―』

**13　法蓮寺山遺跡**

財団法人千葉県都市公社　1973 「第１部　法蓮寺山遺跡」『小金線―小金線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』

**14　下郷遺跡**

財団法人千葉県都市公社　1973 「第２部　下郷遺跡」『小金線―小金線建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告―』

船橋市教育委員会　2016「Ⅷ．下郷遺跡（２）」『平成 16 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』

**15　向遺跡**

財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター　2001 『向遺跡』

**16　前貝塚堀込貝塚**

船橋市教育委員会　2017 『前貝塚堀込貝塚（５）』

船橋市教育委員会　2019 『前貝塚堀込貝塚（８）』

**17　辺田台遺跡**

船橋市教育委員会　2004 『辺田台遺跡（１・２）』

**18　夏見台西遺跡**

船橋市教育委員会　2017 『夏見台西遺跡（２）』

**19　八栄北遺跡**

船橋市教育委員会　1974 『八栄北　縄文時代前期・古墳時代後期集落址の発掘調査』

**20　東中山台遺跡群**

財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター　1997 『東中山台遺跡群（８・９）』

財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター　1998 『東中山台遺跡群（10)』

船橋市教育委員会　2006 「Ⅰ．東中山台遺跡群（20)」『平成 13 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』

船橋市教育委員会　2007 『東中山台遺跡群（36)』

船橋市教育委員会　2018 『東中山台遺跡群（65)』

**21　印内台遺跡群**

船橋市教育委員会　2001 「４－１　印内台遺跡群（26)」『平成 12 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』

船橋市教育委員会　2005 「８　印内台遺跡群（41)」『平成 16 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』

**22　飛ノ台貝塚**

飛ノ台貝塚発掘調査団　1976 『飛ノ台貝塚発掘調査概要』

船橋市教育委員会　1999 『飛ノ台貝塚第４次発掘調査報告書』

千葉県　2000 「72　飛ノ台貝塚」『千葉県の歴史』資料編考古１（旧石器・縄文時代）

船橋市教育委員会　2001 『飛ノ台貝塚１・２次発掘調査報告書（写真図版編)』

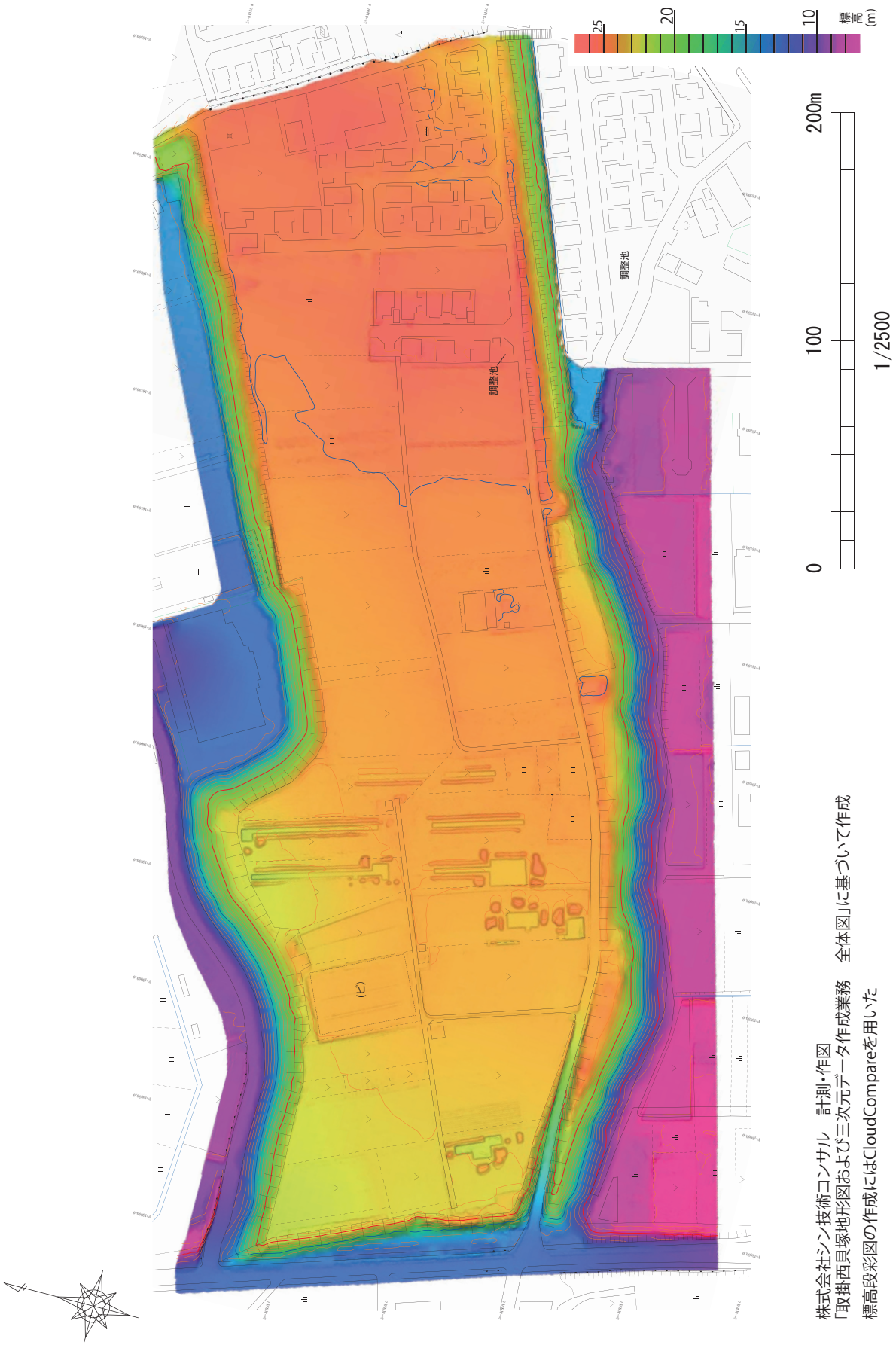
船橋市飛ノ台史跡公園博物館　2004 ～ 2009 『飛ノ台史跡公園博物館紀要』創刊号～第６号

財団法人千葉県教育振興財団　2010 『船橋市　飛ノ台貝塚　海神県営住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告』

**23　北台次遺跡**

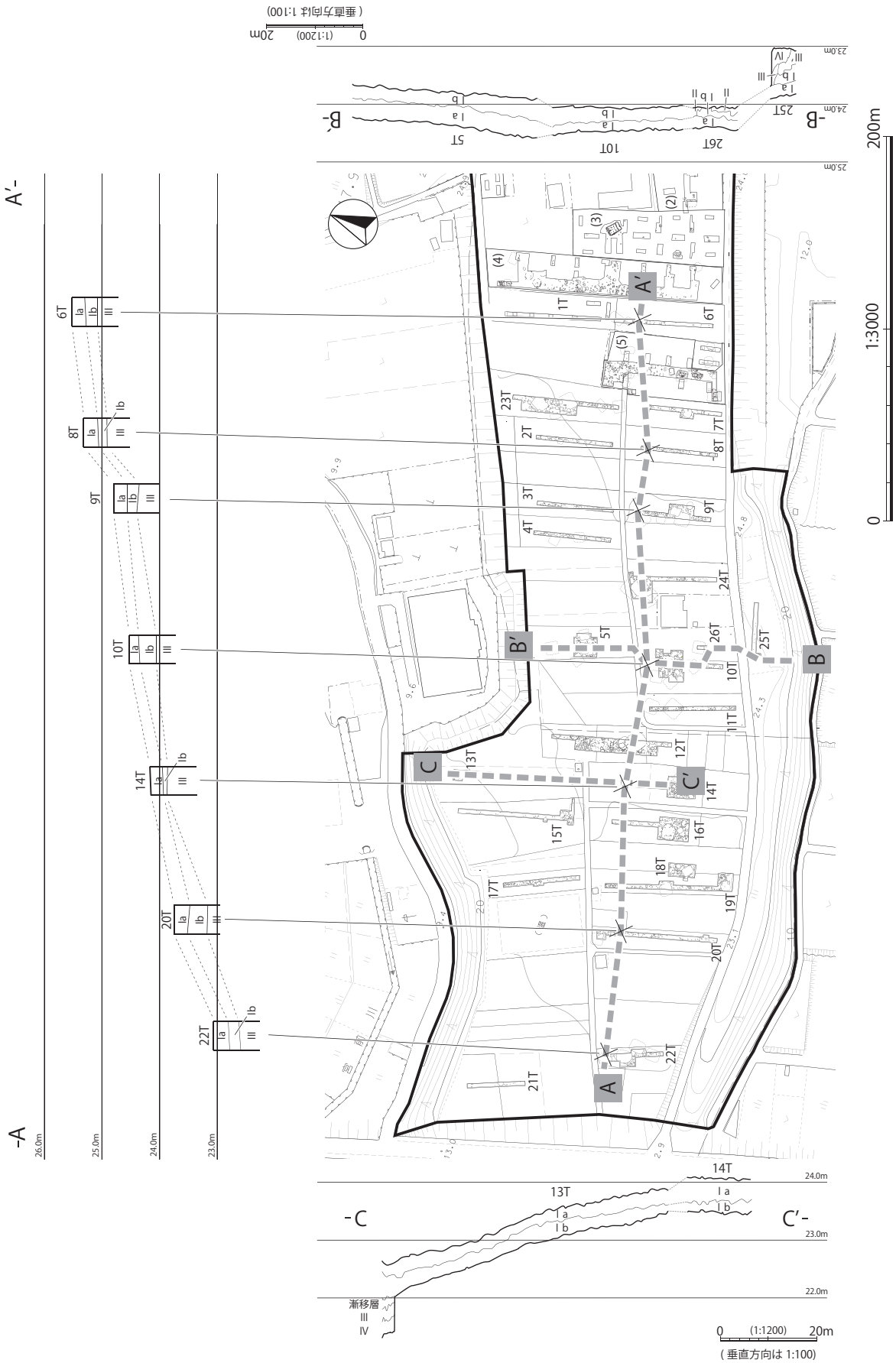
財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター　2001 『北台次遺跡』

船橋市教育委員会　2001 「２　北台次遺跡」『平成 12 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』



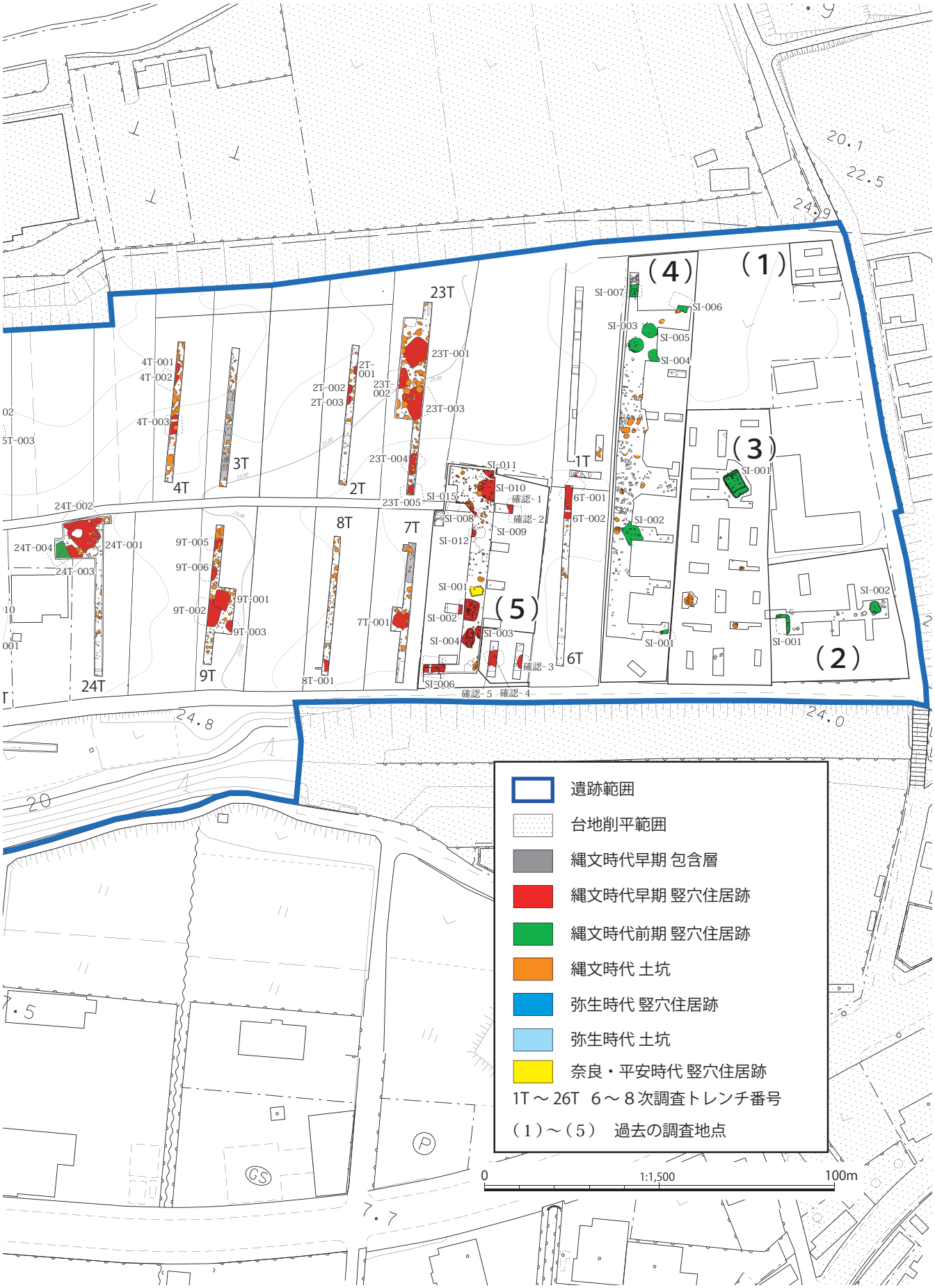

株式会社シン技術コンサル　計測・作図
「取掛西貝塚地形図および三次元データ作成業務　全体図」に基づいて作成
標高段彩図の作成にはCloudCompareを用いた

第 6 図　取掛西貝塚地形段彩図




第７図　６～８次調査の層序と地形

第 8 図　取掛西貝塚遺構全測図


遺跡範囲
台地削平範囲
縄文時代早期 包含層
縄文時代早期 竪穴住居跡
縄文時代前期 竪穴住居跡
縄文時代 土坑
弥生時代 竪穴住居跡
弥生時代 土坑
奈良・平安時代 竪穴住居跡
1T～26T　６～８次調査トレンチ番号
（１）～（５）　過去の調査地点
0
1:1,500
100m
（１）
（２）
（３）
（４）
（５）
1T
2T
3T
4T
6T
7T
8T
9T
23T
24T
SI-001
SI-002
SI-003
SI-004
SI-005
SI-006
SI-007
SI-008
SI-009
SI-010
SI-011
SI-012
SI-015
確認-1
確認-2
確認-3
確認-4
確認-5
GS
P

**24　夏見台遺跡**
船橋市遺跡調査会　2009 『夏見台遺跡第 6 次』
船橋市教育委員会　2012 「2　夏見台遺跡（53)」『平成 23 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
**25　飯山満東遺跡**
財団法人千葉県都市公社　1975 『飯山満東遺跡　下総台地における縄文前期を主とする集落址の調査』
**26　飯山満遺跡（No. 5）**
財団法人千葉県文化財センター　1994 「飯山満遺跡(No.5)」『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡　他―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』
**27　沢之台遺跡**
船橋市教育委員会　2003 『沢之台遺跡（2）』
**28　高郷遺跡**
船橋市教育委員会　2008 「X　高郷遺跡」『平成 15 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』
船橋市教育委員会　2017 「3　高郷遺跡（2）」『平成 28 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
**29　台畑遺跡**
船橋市教育委員会　2003 『台畑遺跡（4）』
船橋市教育委員会　2012 「6　台畑遺跡（6）」『平成 23 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
船橋市教育委員会　2015 「2　台畑遺跡（9）」『平成 26 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
**30　子の神遺跡**
財団法人千葉県文化財センター　1994 「子ノ神遺跡(No.2)」『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡　他―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』
船橋市教育委員会　2003 「VII　東町･飯山満台遺跡群」『平成 8 年度～ 11 年度　船橋市発掘調査報告書』
**31　飯山満遺跡（No. 4）**
財団法人千葉県文化財センター　1994 「飯山満遺跡(No.4)」『八千代市沖塚遺跡・上の台遺跡　他―東葉高速鉄道埋蔵文化財調査報告書―』
**32　ユルギ松遺跡**
船橋市教育委員会　2002 「VII　ユルギ松遺跡（4）」『平成 13 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
**33　上ホシ遺跡**
船橋市教育委員会　2006 「5　上ホシ遺跡（3）」『平成 17 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
船橋市教育委員会　2008 『上ホシ遺跡（5）』
船橋市教育委員会　2008 「VII　上ホシ遺跡（2）」『平成 15 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』
船橋市遺跡調査会　2020 『上ホシ遺跡（1）』
**34　新山貝塚**
船橋市教育委員会　2006 「4　新山貝塚（1）」『平成 17 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
船橋市教育委員会　2019 『新山貝塚（4）』
**35　中野木台遺跡**
船橋市遺跡調査会　1994 『中野木台遺跡―第 3 次調査報告書―』
船橋市教育委員会　1999 「6　中野木台遺跡群（6）」『平成 10 年度船橋市内遺跡発掘調査報告書』
船橋市教育委員会　2006 「Ⅴ－1．中野木台遺跡(10)」『平成 13 年度船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』
**36　新山遺跡**
中野木新山遺跡調査団　1977 『中野木新山遺跡』
**37　新山東遺跡**
財団法人千葉県文化財センター　2001 『船橋市新山東遺跡―前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書―』
財団法人千葉県教育振興財団　2007 『新山東遺跡 II―前原団地建替事業関連埋蔵文化財調査報告書２―』
**38　宮下田遺跡**
船橋市教育委員会　2003 『宮下田遺跡』
**39　峰台遺跡**
船橋市教育委員会　2016 『峰台遺跡（3）』
**40　宮本台遺跡群**
船橋市教育委員会　2017 『宮本台遺跡群（61)』
**41　中野木向遺跡**
船橋市教育委員会　2008 「VIII　中野木向遺跡（2）」『平成 15 年度　船橋市市費単独事業遺跡発掘調査報告書』
**42　佐倉道南遺跡**
船橋市教育委員会　1975 『佐倉道南―縄文時代早期集落址の発掘調査―』
佐倉道南遺跡調査団　1977 『佐倉道南―C 地点における縄文時代早・前期集落址の発掘調査―』
**43　藤崎台遺跡**
財団法人船橋市文化・スポーツ公社埋蔵文化財センター　1999 『藤崎台遺跡』
**44　外原遺跡**
船橋市教育委員会　1972 『外原―古墳時代集落址・滑石工房址の発掘調査―』

# 第３章　取掛西貝塚の時間軸

取掛西貝塚では、弥生土器・土師器・須恵器・近世陶磁器が出土しているが、出土土器の大半は縄文土器である。そこで本章では、遺跡の内容を記述するうえで基準となる縄文土器の分類と遺跡の縄文時代～近世の集落段階区分について説明する。

## 第１節　出土縄文土器分類

これまでの取掛西貝塚の調査では、縄文時代早期から後期にかけての縄文土器が確認されている。井草式が最古、後期安行式と考えられるものが最新の土器となるが、いずれも出土量はわずかである。最も出土量が多いのは早期前葉の撚糸文系土器群であり、前期後半以降の土器の出土量は少ない。これらの出土した縄文土器について以下のように大別した。

Ⅰ群　撚糸文系土器群
Ⅱ群　沈線文系土器群
Ⅲ群　条痕文系土器群
Ⅳ群　前期前半土器群（花積下層式～黒浜式およびそれに併行する土器群）
Ⅴ群　前期後半土器群（諸磯式と浮島式・興津式およびそれに併行する土器群）
Ⅵ群　中期土器群
Ⅶ群　後期土器群

これらのうち、出土量の多い群はさらに細かく類別・種別を行った。以下に、その分類基準について説明する。各分類群の説明中には一部を除いて相当する土器型式を示したが、各土器型式の内容は研究者により細部が異なるため、本報告における記載は一部を例外とするものの基本的には型式名ではなく下記の分類群の名称を使用した。また、Ⅰ群土器については、代表的な口縁部破片を第９・10図に示した。

### Ⅰ群　撚糸文系土器群

１類　口唇部が著しく外反し、肥厚するもの。**井草式**に相当する。

２類　口唇部は丸く緩やかに肥厚し、横方向の丁寧な調整が施され、口唇部直下から撚糸文や縄文が施文されるもの。**夏島式**に相当するが、本遺跡では明確な口縁部破片は確認できていない。

３類　口縁部に横方向の丁寧な調整が施され、直下から撚糸文や縄文が施文されるもの。**稲荷台式**に相当する。本遺跡では新段階にあたるものが確認されているが、出土量は極めて少ない。

４類　肥厚した口唇部に無文帯を持ち、口縁部直下でくびれるもの。**稲荷原式**に相当し、本遺跡では新段階のものが多い。胴部との境界には凹線・沈線や稜・段が認められる。胴部に撚糸文が縦位施文されるものが主体であり、粗雑な撚糸文が施文されるものも目立つ。

５類　縄側面圧痕文や絡条体圧痕文により口縁部無文帯の下端が区画されるもの。**花輪台式**に相当する。胴部に縄文が異方向施文されるものが多い。

６類　口縁部に無文帯を持たず、撚糸文が施文されるもの。口唇部は基本的に肥厚しない。以下の２種に細別する。

ａ種：口唇部は肥厚せず、その直下付近から縦位に撚糸文が施文されるもの。
ｂ種：口縁部に横位または斜位の撚糸文が施文されるもの。

７類　口縁部に比較的幅の広い無文部があるが、その下端が区画されないもの。口唇部は肥厚しない。胴

部には縦位の撚糸文が施文されるものが多い。

８類　口縁部形態や調整から４～５類に伴う無文土器と考えられるもの。口唇部が肥厚するものや指頭による調整で口縁部直下がくびれるものをまとめた。

９類　胴部～底部破片のうち、文様が施されるもの。主に４・５類に伴うと考えられる胴部～底部破片。施文原体により以下の５種に細別する。

ａ種：撚糸文が縦位施文されるもの。主に４類に伴うと思われる。

ｂ種：縄文が施文されるもの。主に５類に伴うと思われる。特に異方向施文されるものはその可能性が高い。

ｃ種：縄側面圧痕文や絡条体圧痕文を地文とするもの。

ｄ種：沈線が施文されるもの。

ｅ種：刺突文や列点状の押圧文が施文されるもの。一部、回転体により施文されたと考えられるものもあるが、判別困難な個体が多いため全てここに含めた。

10 類　山形文や格子目文などの押型文が施されるもの。

11 類　胴部に横走する撚糸文が施文されるもの。**大浦山式**に相当する。赤褐色で厚手な胎土も特徴となる。角閃石・輝石など有色鉱物を含むものが目立つ。口縁部が屈曲するものと直立するものがあり、前者は口縁部が基本的に無文となるが、後者は口唇部直下から撚糸文が施文される。

12 類　口縁部直下に段や一条の沈線がめぐり、胴部は無文となるもの。**東山式**に相当する。口唇部の断面形態により以下の３種に細別する。

ａ種：口唇部は肥厚し円頭状で、比較的幅の広い無文の口縁部直下に段や沈線がめぐるもの。東山式ａ期（原田 1991）に相当する。

ｂ種：口唇部は角頭状で平坦面をもつもの。口縁部と胴部の区画には段や凹線・沈線が施される。段や凹線は口縁部を横位に削り込むことにより施されるものが目立つ。東山式ｂ期（原田 1991）を主体とするが、口縁部無文帯の幅が狭いものは東山式ｃ期（原田 1991）とされるものを含む可能性がある。

ｃ種：口唇部が尖頭状やつぶれた円頭状のもの。沈線は口唇部直下にめぐり、口縁の無文部は狭いものが多い。沈線は極めて細いものや浅いものなど不明瞭なものが存在し、短沈線を重ねたようなものもある。東山式ｃ期（原田 1991）にほぼ相当する。

ｄ種：口唇部を欠損する口縁部破片。

13 類　撚糸文や縄文などが施文されず、文様の無いもの。ただし、口縁部付近は横位のケズリ、胴部は縦位のケズリを施すなど、口縁部を意識した調整が施されるものも多い。原田氏の編年（原田 1991）による**平坂式**から 15 類を除いたものに相当する。器形による分類が困難な小破片が多かったため、口唇部の断面形態により以下の３種に細別した。

ａ種：口唇部が円頭状のもの。８類と異なり口唇部は肥厚せず、くびれを持たない。口縁部にミガキを施すものもある。

ｂ種：口唇部が角頭状で平坦面をもつもの。胎土に砂粒を多く含むものが目立つ。

ｃ種：口唇部が尖頭状のもの。器面は繊維束のような工具で調整されるものがあり、ミガキを施されるものは少ない。胎土は粘土質で砂粒が少なく、焼成がやや不良のものがある。

14 類　胴部～底部破片のうち、無文のもの。主に 12 類や 13 類に伴うと考えられる。

15 類　無文土器のうち器面調整による擦痕が顕著で、胎土に長石・石英の細角礫を多量に含むもの。微細な雲母片を含む一群が存在し、これらの雲母片は多くのものが白雲母となる可能性がある。内面は丁寧

なミガキやナデが施され、黒色を呈するものが多い。天矢場遺跡Ⅰ群１類（中村 2002）に相当する。以下の４種に細別した。

ａ種：口唇部が円頭状のもの。

ｂ種：口唇部が角頭状のもの。13 類に比べ明瞭な稜を持つものは少ない。

ｃ種：口唇部が尖頭状のもの。

ｄ種：胴部および底部破片。

16 類　器面調整や胎土の特徴から 13 類および 15 類に伴うと考えられるが、無文ではなく施文が認められるもの。以下の２種に細別する。

ａ種：口縁部に１条の縄側面圧痕文が施されるもの。施文は浅く不明瞭なものが多い。

ｂ種：細沈線により鋸歯状文など幾何学的な文様が施されるもの。

17 類　口径が 10cm 程度の小型のもの。器厚が薄く推定径が小さい胴部破片もここに含めた。

**Ⅱ群　沈線文系土器群**

口縁部に文様帯があり、沈線により斜線文や格子目文などの文様が描かれるもの。三戸式などに相当する土器片がわずかに認められるが、出土量が僅少なため類別していない。

**Ⅲ群　条痕文系土器群**

胎土に繊維を含み、放射肋をもつ貝殻腹縁により条痕文が施されるもの。条痕文系土器群に相当する。小破片が多く全体を窺える資料が乏しいため、類別しない。

**Ⅳ群　前期前半土器群**

胎土に繊維を含み、主に縄文により羽状・菱形状の文様が施されるもの。花積下層式～黒浜式およびそれに併行する土器群をまとめた。以下の４つに類別する。

１類　縄側面圧痕文により文様が施されるもの。花積下層式に相当する。

２類　二ツ木式に相当するもの

３類　関山式に相当するもの

４類　黒浜式に相当するもの

**Ⅴ群　前期後半土器群**

主に半截竹管により文様が施されるもの。諸磯式と浮島式・興津式およびそれに併行する土器群をまとめた。以下の３つに類別する。

１類　主に半截竹管により爪形文などの文様が施文されるもの。諸磯式に相当する。

２類　半截竹管による変形爪形文や貝殻腹縁により文様が施されるもの。浮島式または興津式に相当する。

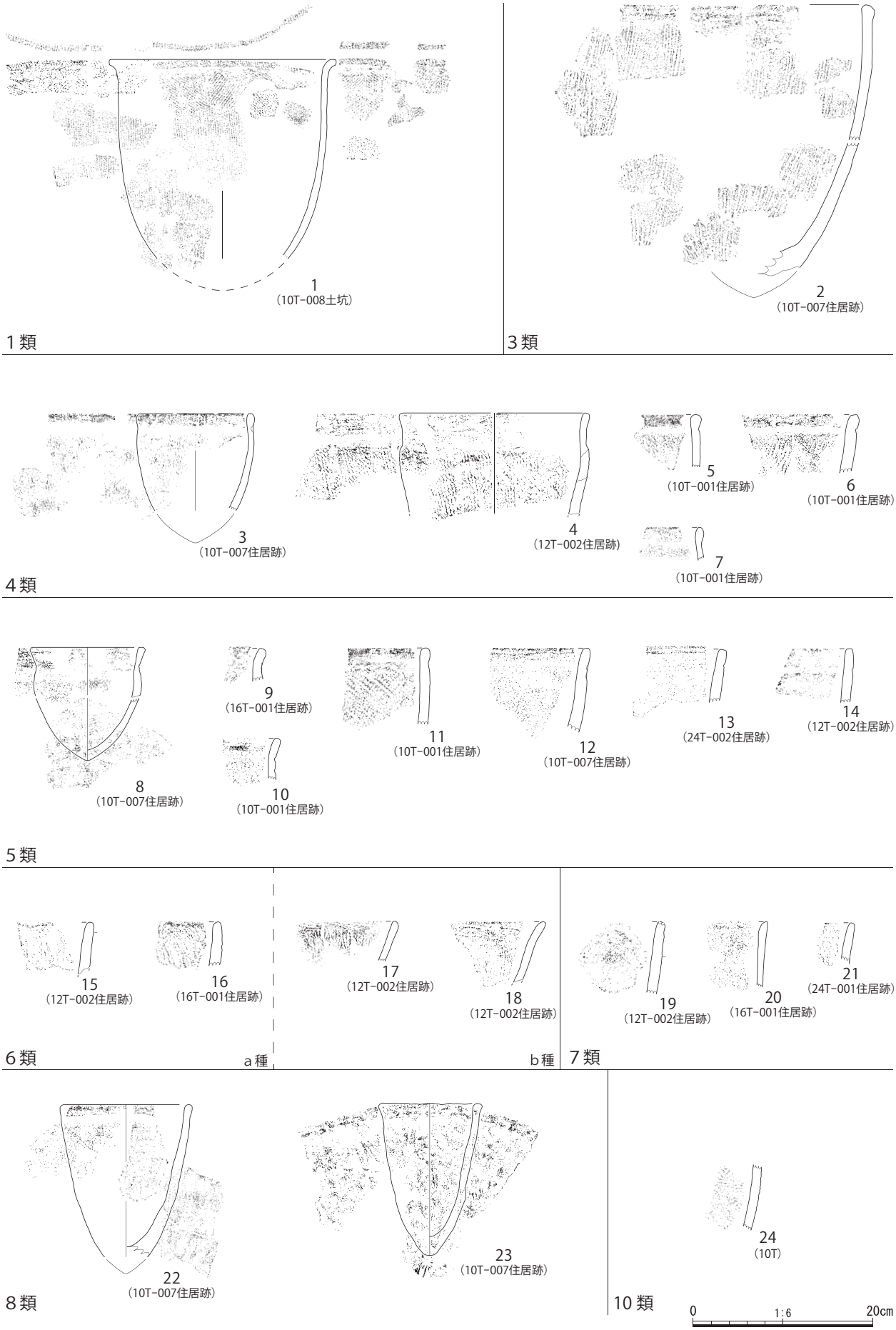
３類　前期末葉に併行する諸型式の土器群を一括した。

**Ⅵ群　中期土器群**

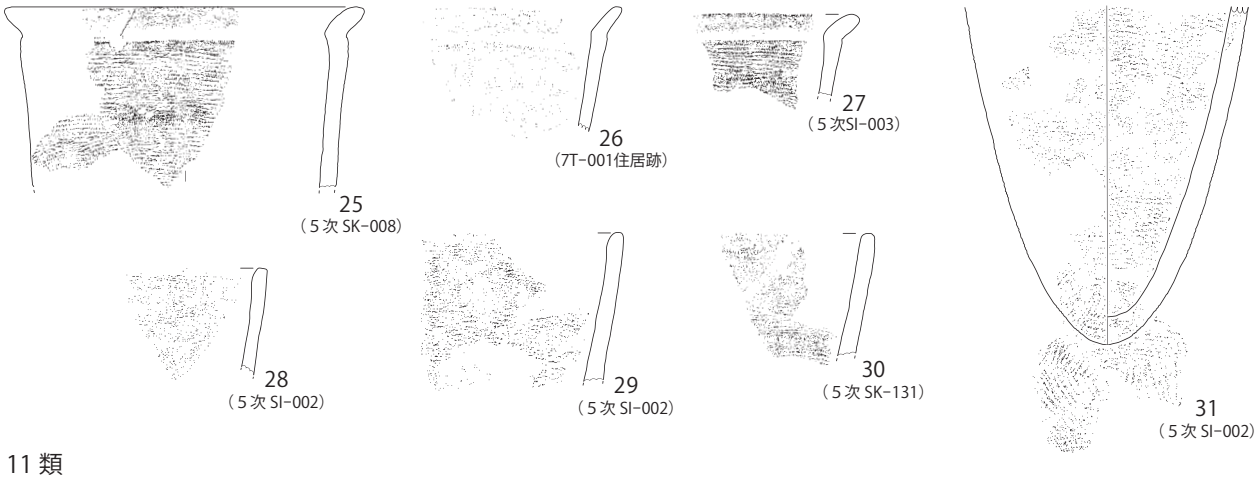
縄文時代中期に属する土器を一括した。以下の２つに類別する。

１類　中期前半の土器を一括した。阿玉台式土器を主体とするが出土点数は僅少である。

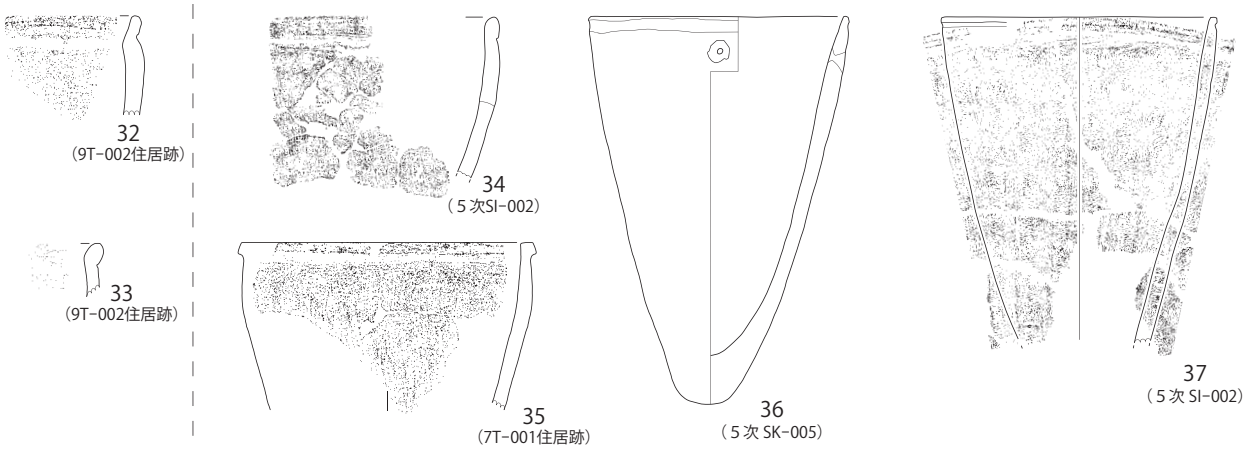
２類　加曽利Ｅ式およびそれに併行する土器群を一括した。出土点数は少ない。



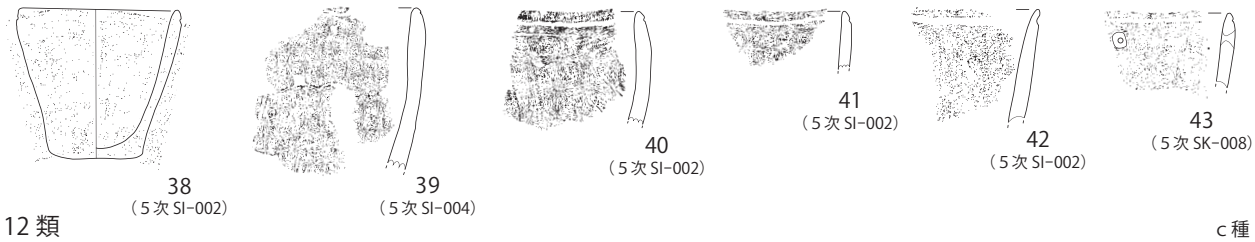

第９図　縄文時代早期前葉（Ⅰ群土器）の土器分類（１）




11 類

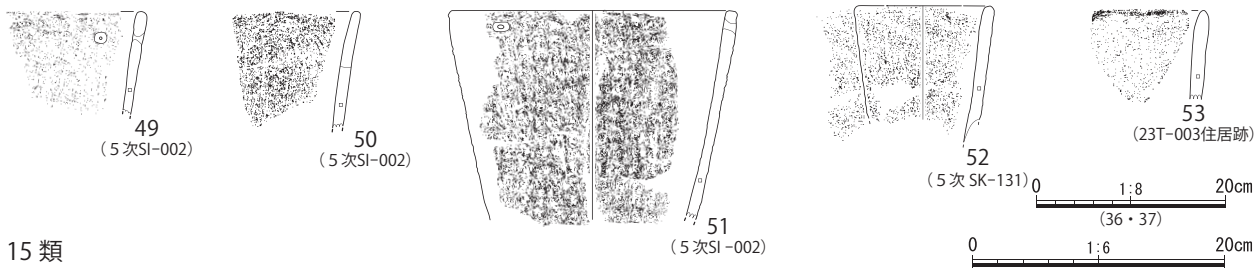



a種　　b種




12 類　　c種

13 類




15 類

第 10 図　縄文時代早期前葉（Ⅰ群土器）の土器分類（２）

**Ⅶ群　後期土器群**

縄文時代後期に属する土器を一括した。称名寺式、堀之内式、加曽利Ｂ式、安行式などが確認されたが、それぞれの出土数は僅少であり類別しない。

## 第２節　集落変遷の段階区分

１次から５次調査までの記録保存調査および６～８次調査までの保存目的確認調査の成果をもとに、取掛西貝塚における集落変遷の段階設定を行い、以下のようにⅠ期～Ⅹ期まで 10 段階に区分した。

取掛西Ⅰ期：Ⅰ群１類（井草式）を主体とする時期。

取掛西Ⅱ期：Ⅰ群４類（稲荷原式）・５類（花輪台式）および６～９類を主体とする時期。

取掛西Ⅲ期：Ⅰ群 11 類（大浦山式）・12 類（東山式）・13 類（平坂式）を主体とする時期。

取掛西Ⅳ期：Ⅰ群 13 類（平坂式）・15 類（天矢場遺跡Ⅰ群１類）を主体とする時期。

取掛西Ⅴ期：Ⅳ群２類（二ツ木式）・３類（関山式）を主体とする時期。

取掛西Ⅵ期：Ⅳ群４類（黒浜式）を主体とする時期。

取掛西Ⅶ期：Ⅵ群２類（加曽利Ｅ式）を主体とする時期。

取掛西Ⅷ期：弥生土器（中期）を主体とする時期。

取掛西Ⅸ期：奈良・平安時代の土師器・須恵器を主体とする時期。

取掛西Ⅹ期：近世陶磁器を主体とする時期。

前節で述べた土器群と年代測定結果（第５章第２節参照）との関係は第１表に示した。表中の土器の出土量は相対的なもので、出土量が豊富な順に◎＞○＞△の記号で示し、＋はごく少量でも出土が確認できたもの、－は出土が確認できなかったものである。縄文時代早期後葉（Ⅲ群）や前期後半（Ⅴ群）などは一定量の土器が出土したが、現時点では住居跡が確認できていないため段階設定をしていない。

集落変遷については第６章第１節であらためて説明するが、ここでは本書における遺跡内容の記載の前提として、その概要を以下に説明する。ただし、６～８次調査において精査された遺構はごく一部であり、遺構確認面で出土した遺物からその時期を推定した結果となる。

取掛西Ⅰ～Ⅳ期は縄文時代早期前葉で、本遺跡において中心となる時期である。

取掛西Ⅰ期は土坑のみの検出であり、住居跡は確認できていないが、遺跡における最初の生活痕跡として評価し、ひとつの段階として設定した。

取掛西Ⅱ期はⅠ群４類や５類が主体となる時期である。これ以前の時期に属する土器の出土はわずかであり、取掛西貝塚における集落の開始期と考えられる。

取掛西Ⅲ期はⅠ群 11 ～ 13 類を主体とする時期で、検出できた住居数は前段階と大きな変化はない。早期において住居内貝層が確認されるのは、現在のところこの段階のみである。

取掛西Ⅳ期はⅠ群 13 類や 15 類を主体とする時期で、前段階にくらべ住居跡の検出数は減少し、住居跡は主に遺跡北東部に分布する。本遺跡における早期集落の終焉期となる段階である。

取掛西Ⅴ～Ⅵ期は縄文時代前期前半の時期にあたる。

取掛西Ⅴ期はⅣ群２～３類を主体とする時期で、遺構・遺物共に遺跡東端部を中心に分布する。住居跡の検出数は少ない。貝層を伴う住居跡が認められる。

取掛西Ⅵ期はⅣ群４類を主体とする時期で、住居跡は集中することなく遺跡全体に散在する傾向にある。貝層を伴う住居跡は、前段階より増加する。

取掛西Ⅶ期は縄文時代中期後半である。土器の出土量は極めて少ないが、住居跡の残滓と考えられる炉

跡を検出しているため、ひとつの段階として設定した。

取掛西Ⅷ期は弥生時代中期後半である。Ⅶ期以降、縄文時代後期・晩期は土器の出土量が乏しく、遺構も未検出となるが、弥生時代になり再び台地上に集落が営まれる。住居跡は遺跡西端部に集中する。

取掛西Ⅸ期は奈良・平安時代とした。遺構数は少なく、散在している。

取掛西Ⅹ期は近世である。遺跡中央部の米ケ崎町と飯山満町の境界部分で、18 世紀以降と考えられる掘立柱建物跡を検出している。

取掛西貝塚の集落変遷の中では、縄文時代早期前葉（取掛西Ⅲ期）と前期前半（取掛西Ⅴ・Ⅵ期）で遺構内貝層が確認されている。集落の盛期となるのは早期前葉（取掛西Ⅱ～Ⅳ期）であり、原田昌幸氏による第５様式（原田 1991）にあたる時期が集落の中心となる。この早期集落の継続期間を明らかにするため年代測定を実施したが、早期集落の最終段階となる取掛西Ⅳ期で良好なデータが得られなかった（第５章第２節第２項）。このため、集落の継続期間を明らかにはできなかったが、約１万年前を中心に営まれた集落であるというデータの蓄積ができた点は重要である。

## 第３節　取掛西Ⅰ～Ⅵ期の年代について

前節では、取掛西貝塚の集落変遷を取掛西Ⅰ～Ⅹ期の 10 段階に区分した。このうち取掛西貝塚で中心となる早期前葉から前期前半の取掛西Ⅰ～Ⅵ期を対象に放射性炭素年代測定を実施し、各期の実年代について検討した。以下、小林謙一氏（第５章第２節第２項）の成果をもとに、結果の位置づけと課題について述べる。放射性炭素年代測定結果の詳細は、第５章第２節を参照されたい。

**取掛西Ⅰ期**　10T－008 土坑覆土中から得たミズキ炭化核１点（PLD-40867）を試料として放射性炭素年代測定を行った。その結果は 10488-10463 cal BP（7.78%）および 10431-10246 cal BP（87.67%）であり、想定される取掛西Ⅲ期の年代を示していた。10T－008 土坑からは全形が復元できるⅠ群１類土器（井草式）が出土しており、遺構自体は取掛西Ⅰ期と考えられる。土坑の掘り込みは浅く、放射性炭素年代測定試料となる炭化種実自体が少なかったことから、試料としたミズキ炭化核は遺構に伴うものでなく、周囲からの混入であった可能性が高いと考えられる。今後、土坑から得られた炭化種実などを検討し、覆土を堆積物として再評価する必要がある。

取掛西Ⅰ期の実年代については、より確実性が高い試料が得られた時点で再考したい。実年代としては小林謙一氏（2017）の示した 11345-11200 cal BP と捉えておく。

**取掛西Ⅱ期**　10T と 16T あわせて７点の試料について放射性炭素年代測定を行った。16T－001 住居跡の土器付着炭化物（PLD-40870）は外面に付着しており、埋没後の付着の可能性も考慮する必要があると思われる。現時点で理由は不明であるが、想定よりも新しい年代値が得られている。

10T では、10T－001 住居跡（PLD-41368・41369・40868・40869）と 10T－005 住居跡（PLD-41370）、10T－007 住居跡（PLD-41371）から得られた試料６点で放射性炭素年代測定を行った。$^{14}$C 年代をみると PLD-41368 が 9205 ± 30 yr BP、PLD-41369 が 9270 ± 30 yr BP、PLD-41370 が 9100 ± 30 yr BP、PLD-41371 が 9130 ± 30 yr BP、PLD-40869 が 9030 ± 35 yr BP であり、PLD-41368 ～ 41371 は 9200 ～ 9100 yr BP によくまとまっている。PLD-41368 ～ 41371・PLD-40869 を暦年較正した年代は、PLD-41368 が 10491-10251 cal BP、PLD-41369 が 10567-10300 cal BP、PLD-41370 が 10362-10199 cal BP、PLD-40371 が 10403-10227 cal BP、PLD-40869 が 10244-10174 cal BP である。これらをまとめて最も古い値から新しい値の幅で示すと、10567-10174 cal BP となる。後述する取掛西Ⅲ期と年代の範囲が重なる部分が多いが、取掛西Ⅱ期の年代が若干、先行する可能性がある。当該期にあたる

小林謙一氏（2017）の S3-3 期の年代としてはやや新しく、今後も検討を要する。

問題となるのが 10150-9736 cal BP と新しい年代を示した PLD-40868 である。PLD-40868 は 10T－001 住居跡の D3 グリッド（炉焼土）/ 下層から得たオニグルミ炭化核である。発掘調査時には住居跡に伴う炉の可能性を考えていたが、覆土を掘り込んでいるようにも見え、検証のために放射性炭素年代測定を行った試料である。10T－001 住居跡の年代を示す試料としては出土状況からみても保留とすべきと判断した。

**取掛西Ⅲ期**　この時期に取掛西貝塚に貝塚が形成される。5 次 SI－002 は最大で約 75cm の厚みがあるヤマトシジミ貝層があり、その下の灰床炉中のミズキ炭化核の年代 10435-10250 cal BP は信頼性が高く、貝塚の形成時期を示す年代である。小林謙一氏（第 5 章第 2 節第 2 項）の示す 10435-10250 cal BP を貝塚形成の年代として捉える。また、24T－001 住居跡の 3 点の試料（PLD-41372・41373・41374）も年代がよく揃っており、これをまとめると 10400-10190 cal BP となり、PLD-21550 の年代とよく一致している。

**取掛西Ⅳ期**　23T－001 住居跡サブトレンチから得たオニグルミ炭化核（PLD-40872）を試料とした。結果は 6176-5930 cal BP であり、明らかに前期前半の年代であった。23T では前期前半のⅣ群土器もトレンチから一定量出土しており、PLD-40872 は周辺からの混入であった可能性が高い。遺構検出面での検討にとどまるが、23T－001 住居跡はⅠ群 12 類（東山式）をほとんど含まず、Ⅰ群 15 類土器が主体であり、取掛西Ⅳ期の遺構と考えられる。よって、取掛西Ⅳ期の実年代については、より確実性が高い試料が得られた時点で再考したい。現時点の予測として、おそらく小林謙一氏（2017）の S3-4 期 10460-10055 cal BP の後半の年代が該当してくるのではないかと思われる。

**取掛西Ⅴ期**　23T 遺構外から出土したⅣ群 3 類土器（関山式）の土器内面付着炭化物（PLD-41195）を試料とした。結果は 6442-6307 cal BP であり、想定より若干新しい年代である。土器の位置づけに再検討の余地もあり、取掛西Ⅴ期の実年代については保留とする。実年代として小林謙一氏（2017）の示した 6700-6445 cal BP と捉えておく。

**取掛西Ⅵ期**　18T－001 住居跡の炭化材（PLD-41375）と 19T－001 住居跡の炭化材（PLD-41376）を試料とした。それぞれ 6486-6301 cal BP、6260-6001 cal BP の結果が得られ、小林謙一氏（2017）がⅣ群 4 類土器（黒浜式）の年代として示した 6445-6080 cal BP と矛盾がないと考えられる。

以上のように、貝塚が形成される取掛西Ⅲ期については信頼性の高い年代値が得られた。貝塚の形成年代は 10435-10250 cal BP と考えられる。集落が形成される取掛西Ⅱ期と早期前葉集落が終焉する取掛西Ⅳ期については、今後、より確実性が高い試料での再検討が必要である。

**参考文献**

宮崎朝雄　1981　「撚糸文系土器群の終末と無文土器群」『土曜考古』３　土曜考古学研究会

野内秀明　1984　「三浦半島における無文土器群の様相」『横須賀市博物館研究報告』28　横須賀市自然・人文博物館

高麗　正　1988　『滝坂遺跡 東京都三鷹市中原 滝坂遺跡発掘調査報告書』三鷹市教育委員会

原田昌幸　1991　『撚糸文系土器様式』ニュー・サイエンス社

中村信博　2002　『天矢場』茂木町教育委員会

峰村　篤　2009a　「花輪台Ⅰ式土器に関する基礎的研究（１）-印旛沼西岸遺跡群を中心とする検討-」『日々の考古学２』六一書房

峰村　篤　2009b　「花輪台Ⅰ式土器に関する基礎的研究（２）-千葉県を中心とする撚糸文土器後半の変遷-」『千葉縄文研究』３　千葉縄文研究会

# 第１表　取掛西貝塚　土器群と年代測定結果

| 時代 | | 集落変遷 | 主な土器群 | 遺物出土量 | 調査次 | 主な遺構 | 種別 | 時期区分（小林 2017） | 暦年較正年代（cal BP）（小林 2017） | 年代測定結果 | | | | 貝層形成 | 備考 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | | 暦年較正年代（cal BP）IntCal20 2 σ | 測定番号 | 試料種別 | 採取位置 | | |
| 旧石器時代 | | － | － | ＋ | － | － | － | － | － | － | － | － | － | × | |
| 縄文時代 | 草創期 | － | － | ＋ | － | － | － | S1 ～ 2 | － | － | － | － | － | × | |
| | 早期前葉 | Ⅰ期 | Ⅰ群１類（井草） | △ | （８） | 10T－008 | 土坑 | S3-1 | 11345-11200 | 10431-10246 | PLD-40867 | 炭化種実 | 覆土中 | × | ミズキ核 |
| | | － | Ⅰ群２類（夏島） | － | － | － | － | S3-2 | 11200-11070 | － | － | － | － | × | |
| | | － | Ⅰ群３類（稲荷台） | ＋ | － | － | － | S3-3 | 11070-10460 | － | － | － | － | × | |
| | | Ⅱ期 | Ⅰ群４類（稲荷原）<br>Ⅰ群５類（花輪台） | ◎ | （８） | 10T－001 | 住居跡 | | | 10435-10251 | PLD-41368 | 炭化種実 | 覆土下層 | × | オニグルミ核 |
| | | | | | | | | | | 10567-10364 | PLD-41369 | 炭化種実 | 覆土下層 | | オニグルミ核 |
| | | | | | | | | | | 10150- 9736 | PLD-40868 | 炭化種実 | 焼土 | | オニグルミ核 |
| | | | | | | | | | | 10244-10174 | PLD-40869 | 炭化種実 | 覆土下層 | | オニグルミ核 |
| | | | | | （８） | 10T－005 | 住居跡 | | | 10295-10199 | PLD-41370 | 炭化種実 | 覆土中 | | オニグルミ核 |
| | | | | | （８） | 10T－007 | 住居跡 | | | 10380-10227 | PLD-41371 | 炭化種実 | 覆土中 | | ミズキ核 |
| | | | | | （７） | 12T－002 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | | | | | （７） | 16T－001 | 住居跡 | | | 10179-9881 | PLD-40870 | 土器付着炭化物 | 土器外面 | | 撚糸文施文の胴部破片（外面付着） |
| | | Ⅲ期 | Ⅰ群 11 類（大浦山）<br>Ⅰ群 12 類（東山）<br>Ⅰ群 13 類（平坂） | ◎ | （５） | SI－002 | 住居跡 | S3-4 古 | 10460-10055 | 10435-10253 | PLD-21550 | 炭化種実 | 炉内 | ○<br>淡水・汽水 | ミズキ核 |
| | | | | | | | | | | 10700-10284 | MTC-11932 | 炭化材 | 貝層下部 | | |
| | | | | | | | | | | 43570-42595 | PLD-41023 | 貝 | 上層 | | ツノガイ |
| | | | | | （５） | SI－003 | 住居跡 | | | 10145- 9697 | PLD-41024 | 炭化種実 | ベルト② | | ミズキ核 |
| | | | | | （５） | SI－004 | 住居跡 | | | 10228-9917 | PLD-41025 | 炭化種実 | ベルト③ | | ミズキ核 |
| | | | | | （５） | SI－006 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | | | | | （５） | SK－005 | 土坑 | | | 10253-10187 | PLD-41026 | 炭化種実 | 貝層中 | | カラスザンショウ種子 |
| | | | | | （６） | 7T－001 | 住居跡 | | | 9633-9532 | PLD-41027 | 炭化種実 | 貝層中 | | オニグルミ核 |
| | | | | | （８） | 24T－001 | 住居跡 | | | 10248-10192 | PLD-41372 | 炭化種実 | 覆土中 | | ミズキ核 |
| | | | | | | | | | | 10404-10221 | PLD-41373 | 炭化種実 | 覆土中 | | オニグルミ核 |
| | | | | | | | | | | 10286-10196 | PLD-41374 | 炭化種実 | 覆土中 | | オニグルミ核 |
| | | Ⅳ期 | Ⅰ群 13 類（平坂）<br>Ⅰ群 15 類 | ◎ | （５） | SI－011 | 住居跡 | S3-4 新 | | － | － | － | － | × | |
| | | | | | （６） | 6T－001 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | | | | | （８） | 23T－001 | 住居跡 | | | 6176-5930 | PLD-40872 | 炭化種実 | 覆土中 | | オニグルミ核 |
| | | | | | （８） | 23T－003 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | 早期中葉 | － | Ⅱ群（沈線文系） | ＋ | － | － | － | S4 | 10055-8405 | － | － | － | － | × | |
| | 早期後葉 | － | Ⅲ群（条痕文系） | △ | － | － | － | S5 ～ S7 | (8405-7470) | － | － | － | － | × | |
| | 前期前半 | － | Ⅳ群１類（花積下層） | ＋ | － | － | － | Z1 | 7050-6700 | － | － | － | － | × | |
| | | Ⅴ期 | Ⅳ群２類（二ツ木） | △ | （２） | SI－001 | 住居跡 | | － | － | － | － | － | × | |
| | | | | | （２） | SI－002 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | | | Ⅳ群３類（関山） | ○ | （４） | SI－003 | 住居跡 | Z2 | 6700-6445 | － | － | － | － | ○<br>海水 | |
| | | | | | （４） | SI－005 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | | | | | （８） | 23T | 遺構外 | | | 6410-6307 | PLD-41195 | 土器付着炭化物 | 土器内面 | | 組紐施文の胴部破片（内面付着） |
| | | Ⅵ期 | Ⅳ群４類（黒浜） | ○ | （４） | SI－002 | 住居跡 | Z3 | 6445-6080 | － | － | － | － | ○<br>海水 | |
| | | | | | （８） | 5T－002 | 住居跡 | | | － | － | － | － | | |
| | | | | | （７） | 18T－001 | 住居跡 | | | 6456-6301 | PLD-41375 | 炭化材 | 貝ブロック | | |
| | | | | | （７） | 19T－001 | 住居跡 | | | 6260-6001 | PLD-41376 | 炭化材 | 貝ブロック | | |
| | | | | | （５） | SK－013 | 土坑 | | | 5900-5595 | TKA-18038 | 人骨（脛骨） | 覆土中 | | 出土人骨を食性分析。出土した鉢は黒浜式 |
| | 前期後半 | － | Ⅴ群２類（浮島・興津） | △ | － | － | － | Z5 | 5895-5750 | － | － | － | － | × | 同一台地上に飯山満東遺跡 |
| | 中期前半 | － | Ⅵ群１類（初頭～阿玉台） | ＋ | － | － | － | C1 ～ 9 | (5415-4950) | － | － | － | － | × | |
| | 中期後半 | Ⅶ期 | Ⅵ群２類（加曽利Ｅ） | △ | （８） | 10T－010 | 住居跡 | C10 ～ 13 | (4950-4490) | － | － | － | － | × | 炉跡のみ検出（加曽利ＥⅢ） |
| | 後期 | － | Ⅶ群<br>（称名寺～加曽利Ｂ） | ＋ | － | － | － | K1 ～ 8 | (4490-3220) | － | － | － | － | × | |
| | 晩期 | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | － | × | |
| 弥生時代中期後半 | | Ⅷ期 | － | ○ | （７） | 22T－001 | 住居跡 | － | － | － | － | － | － | × | |
| | | | | | （７） | 22T－006 | 土坑 | － | － | － | － | － | － | × | |
| 奈良時代<br>平安時代 | | Ⅸ期 | － | △ | （５） | SI－001 | 住居跡 | － | － | － | － | － | － | × | |
| | | | | | （６） | 11T－003 | 住居跡 | － | － | － | － | － | － | × | |
| | | | | | （８） | 10T－006 | 住居跡 | － | － | － | － | － | － | × | |
| 近世 | | Ⅹ期 | － | ＋ | （７） | 12T－004 | 掘立柱建物跡 | － | － | － | － | － | － | × | |

※遺物出土量（◎＞○＞△＞＋＞-）はイメージで、点数をカウントした結果ではない。
※年代測定値は２ σの最も古い値と最も新しい値を示した。
参考：小林謙一 2017『縄文時代の実年代』同成社

# 第４章　検出した遺構と遺物

## 第１節　調査の目的と方法

ここでは、各調査において検出した遺構と遺物について記載する。これまで実施した調査のうち、遺跡の保存を目的とする調査（分布調査、６～８次調査）にあたっては、下記の目的と方法にて実施した。

### １．調査の目的およびトレンチの設定方法

これまでに実施した取掛西貝塚の調査のうち、１～５次調査は開発に伴う緊急調査、６～８次調査は遺跡の保存を目的とする確認調査として実施した。確認調査については、遺跡の範囲と内容の把握を主な目的とした。

なお、範囲・内容確認調査に先立ち分布調査を実施した。分布調査の範囲は取掛西貝塚の展開する台地上のうち、未調査の畑地を対象とし、1 地番を 1 単位として、遺物の表面採集を悉皆的に行った。あわせて、検土杖（ボーリングステッキ）により、地中の貝層・遺構の探索を行った。その結果、台地上のほぼ全域に縄文時代早期前葉の遺物が散布しており、遺構が広範囲に分布する可能性が認められた。また、一部に貝層が確認され、貝種構成から早期だけでなく前期の貝塚もあること、早期の貝塚の範囲もさらに広がることが予想された。

確認調査のトレンチ設定にあたっては、分布調査の成果をふまえて、できるだけ台地全域の遺構分布を把握できるように設定した。トレンチの幅は東西２m を基本として、南北方向に 30 ～ 60m の長さで設定した。トレンチ番号については、６～８次調査を通して連番にて付番した。なお、必要に応じて適宜トレンチを拡張したが、６次調査では農作業のスケジュールに合わせて調査可能な期間と範囲に限界があったことから、拡張を最小限度にとどめている。

また、それぞれの確認調査では、主な目的に加えて、個別の目的を設定した。

６次調査は、未調査の畑地部分東半部を対象に、縄文時代早期前葉の居住域と遺物分布範囲の把握を目的として、11 本のトレンチ（1 ～ 11T）を設定した。なお、トレンチ設定にあたっては、分布調査時に貝の散布がみられた範囲を優先的に設定対象とした。また、竪穴住居跡など遺構分布と地形との関係を把握するため、台地上の微地形測量を行った。

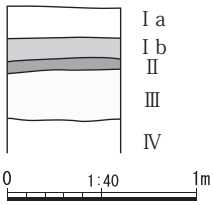
調査の結果、東半部全体に竪穴住居跡が分布しており、さらに西へも広がっている可能性が高く、居住域が予想を超えて広い範囲であること、５次調査より古い時期の竪穴住居跡が検出され、早期前葉のなかでも居住域の変遷が考えられること、また、新たに早期前葉の貝層を確認し、貝塚の範囲が広がることが判明した。このほか、縄文時代前期前半の竪穴住居跡が検出され、前期集落跡の範囲、早期と前期の比較についても新たな課題となった。

７次調査は、６次調査の成果を受け、残りの西半部を対象とし、早期前葉の居住域の範囲と変遷、前期集落跡の範囲と内容、台地北部の遺構の分布状況の把握を目的として、11 本のトレンチ（12 ～ 22T）を設定した。

調査の結果、台地全体に縄文時代早期前葉の集落跡が広がっており、関東地方最大級の規模と考えられること、貝塚の時期と範囲が限定されること、また、前期の集落跡と貝層も広がっていることを確認した。さらに台地西端では、市内初となる弥生時代中期後半の竪穴住居跡も確認した。

８次調査は、６～７次調査の補足を第一の目的として、より詳細に遺構の分布を押さえるため台地の南縁辺部や６～７次調査のトレンチ間などに、４本のトレンチ（23 ～ 26T）を設定した。また、縄文時代早

期における住居の構造把握に向けた調査・記録を第二の目的として、縄文時代早期の住居跡１軒と比較のため前期住居跡１軒を対象として精査した。調査の結果、縄文時代早期前葉の竪穴住居跡の分布範囲がさらに広がり、また、台地の南縁辺部にも当該期の遺構が認められた。




第 11 図　基本層序模式図

**２．基本層序およびトレンチの設定・掘削方法**

ここでは、６～８次調査における基本層序およびトレンチの設定・掘削方法について説明する。

６～８次調査では、以下の基準に基づいて層序区分を行った。

Ⅰａ層：黒褐色土（10YR2/2）現耕作土　しまり弱い。

Ⅰｂ層：黒褐色土（10YR2/2）旧耕作土　しまりやや弱く、Ⅱ～Ⅲ層の土が混在する。

Ⅱ層：暗褐色土（10YR3/4）しまりあり。部分的に存在し、縄文時代の遺物を包含する。

Ⅲ層：黄褐色ソフトローム層

Ⅳ層：黄褐色ハードローム層

トレンチ内の掘削については、６次調査はすべて人力にて実施し、遺構確認面の深度も把握した。７～８次調査はⅠａ層まで重機にて掘削し、Ⅰｂ層～遺構確認面および遺構覆土は人力にて掘削した。

遺構確認面については、基本的にはⅢ層にて確認し、堆積が良好な場合はⅡ層にて確認した。調査・記録にあたっての基本方針として、保存目的の調査であることから、遺構内の掘削は最低限度の範囲にとどめることを基本姿勢とした。客観的な遺構検出状況を記録するためドローンによるオルソ画像を作成した（５・10・12 ～ 20・22 ～ 26T）。また、遺構確認面から出土した遺物については、原則として２cm 角以上は出土位置を記録し、併せて土器の分類ごとでの分布傾向の把握を図った。

検出した遺構のうち、形態などからみて住居跡の可能性がある遺構、貝層を伴う遺構については、サブトレンチを設定して掘削し、遺構の内容把握に努めた。設定にあたっては、幅 50cm を基本として、覆土が良好とみられる位置に設定した。サブトレンチ内は人力にて掘削し、覆土の堆積状況、遺物の埋没状況・出土位置、遺構の形状などを記録した。また、有機物や微小遺物の採集にあたっては、適宜貝層・土壌サンプリングを実施した。貝層を含む土壌については、覆土一括またはコラムサンプルにて採取した。サンプル採取の詳細は第５章第１節に記した。

トレンチ内における遺構確認にあたり、覆土が黒褐色の土坑・ピットに関しては、当初縄文時代前期以降となる可能性を考慮し確認面での覆土観察の結果を記録した。しかし調査の結果、時期差だけでなく遺構深度などの要因も関係することが判明した。このため、当初の想定とは異なる結果となったが、今後の調査・整備にあたり参考になる情報と考え、遺構平面図に凡例を付して図示している。

また、一部の遺構については、サブトレンチ内の掘削にとどめず、半截またはそれ以上の範囲を掘削した。半截にあたっては、遺構の性格を確認するなどの理由から必要な場合に、人力にて実施した。有機物や貝層などの採集は前述と同様に実施した。さらに、一部の遺構については、住居構造などの把握に向けた記録作成のため、十字状に土層確認ベルトを残し、その他の範囲を人力にて掘削した。有機物や貝層などの取扱いについては後述する。

**３．遺構の種別および判断基準**

取掛西貝塚の調査において、検出された遺構の種別としては、住居跡、炉跡、土坑、ピット、溝、掘立

柱建物跡が挙げられる。ここでは、６～８次調査における遺構の判断基準などについて説明する。

遺構の認定にあたっては、全般的に、土色および確認面における遺物の分布状況を検討して、遺構の有無を判断した。遺構と判断したものの、平面形態などが確認できない場合には、可能な範囲でトレンチを拡張し、地山・覆土の境界から確認した。

なお、縄文時代早期の集落規模の把握については、本遺跡の評価に関わる事項であるが、６～８次調査では遺跡保存のために遺構の掘削を必要最低限にとどめており、得られる情報は限定的となる。そこで、縄文時代早期に帰属する遺構のうち、平面形態・規模から、住居跡の可能性がある遺構は、より慎重な評価を期すための手法として、住居跡として認定する基準の項目を設けて、点検・評価を行った。認定の基準は、以下のとおりである。

項目１：遺構の平面形態

評価Ａ：全体の形状が把握できたもの。方形を基調とするものが多い

評価Ｂ：平面プランの一部を確認したが、全体の形状は不明なもの

評価Ｃ：平面プランの形状が不明のもの

項目２：壁面の立ち上がり

評価Ａ：立ち上がりが確認できたもの

評価Ｃ：立ち上がりが確認できなかったもの

項目３：床面

評価ＡＡ：硬化面の形成があるもの

評価Ａ：床面が平坦であるもの

評価Ｂ：現代攪乱などを利用して床面の一部を確認したが、平坦かどうか不確実なもの

項目４：遺物出土状況

評価ＡＡ：遺構の平面プランの範囲内において、遺物が多量に出土したもの

評価Ａ：遺構外と比較して遺構の平面プランの範囲に遺物が集中するもの

評価Ｂ：遺構の平面プランの範囲において、遺物が少量出土したもの

評価Ｃ：遺構の平面プランの範囲内において、遺物が出土しなかったもの

項目５：遺構の輪郭

評価Ａ：遺構の輪郭が明瞭に視認できるもの

評価Ｂ：遺構の輪郭を視認しにくいもの

これらの基準に基づき、第２表に掲載した遺構を住居跡として認定した。住居跡と認定した遺構のうち、項目１：遺構の平面形態と項目４：遺物出土状況を重視し、評価ＡＡもしくはＡが２つ以上となるものについては、第４章第４節にて、遺構ごとに図示および事実記載を行った。また、その他の住居跡と認定した遺構については、第４章第３節にて、各トレンチの記載内容に含めて事実記載を行った。なお、５次以前の調査において検出した縄文時代早期の遺構のなかで住居跡とした遺構については、調査区の範囲内であればすべて完掘していることから、上記の認定基準によらず、住居跡として扱っている。

遺構のうち、土坑およびピットについては、一部の遺構を半截したが、大半の遺構については確認面で検出した段階で、平面形態を記録するにとどめた。そのため、土坑とピットを区別する基準については、遺構の性格などの評価によらず、便宜的な数値基準を設けて、土坑＝直径50cm以上、ピット＝直径50cm未満として取り扱った。

### ４．住居構造の検討に向けた調査・記録

本節１．において述べたとおり、６～８次調査では、遺構覆土の掘削を最小限度にとどめたが、サブトレンチ内に限定した調査では、住居の構造を検討するうえで必要な情報を十分に精査・記録できない。そのため、今後、集落景観などの検討・復元を行う可能性をふまえ、縄文時代早期に帰属する住居跡１軒を対象に精査した。

対象の選定にあたっては、５次調査で調査していない取掛西Ⅱ期の住居跡のうち、①遺構の全形が確認できること、②農地復元に影響がなく、調査可能な範囲で平面プラン全体を検出できること、③他の遺構や風倒木、後世の攪乱による影響が少ないことを総合的に満たすものを基準として、10T－001 住居跡を選定した。

掘削の方法としては、十字状に土層観察用ベルトを設定し、ベルト以外の範囲を人力にて掘削し、床面まで掘り下げた。覆土の掘削にあたっては、有機物や微小遺物の検出を考慮して、遺構内を１ｍ四方の小グリッドに分割したうえで、小グリッド単位ごとに土壌サンプルを全量採取した。

住居内および平面プランの周囲には、多数のピットが検出された。これらのピットについては、遺跡保存の観点から、全て掘削することは避ける方針とした。一方で、一部のピットについては、住居跡に付帯する柱穴などの遺構であるかを確認するために、以下のような調査を行った。

（１）同時性および形成要因による覆土の類似性を考慮し、ピットの覆土を観察し、類型化した。（２）住居跡廃絶後の掘り込みという可能性を考慮し、確認面を区別した（覆土中か床面での確認かを区別）。（３）覆土の類型ごとに数基ずつ、ピットを断ち割り掘削した。（４）断ち割ったピットの断面形状、覆土および堆積状況を観察し、記録した。

住居跡の床面について、硬化の程度および範囲を確認するため、土壌硬度計（藤原製作所・山中式普及型）を用いて計測した。計測位置については、土層観察用ベルトに沿って、50cm 間隔で計測した。また、比較のため、遺構確認面、覆土中と床を掘り下げた地山において、同様に計測した。その結果、明瞭に硬化と認められる値は観測されなかった。

住居構造の比較対象として、縄文時代前期の住居跡においても内部の精査を行った。対象として、前述した①～③の基準により 5T－002 住居跡を選定し、10T－001 住居跡と同様の方法で掘削した。内部のピットについては、明確に主柱穴としての配置が認められたため、これらを半截し、断面形状および覆土を観察・記録した。この住居跡では、貝層の堆積が認められたため、貝層サンプルについて、10T－001 住居跡の土壌サンプルと同様の方法で採集した。床面の土壌硬度計測については、前述の通り実施した。

なお、これらの精査を行った遺構については、調査終了後の埋め戻しにあたり、床面に山砂を敷き詰めたうえで現状復旧した。

### ５．その他の調査・記録など

前述した調査のほか、６～８次調査ではトレンチ内の遺構記録のため、ドローンによる空撮とオルソ画像の作成を行った。７次調査では、遺跡全体および周辺の微地形をドローンにより撮影および三次元計測した。また、６次調査では、7T－001 住居跡において、土層・貝層断面のオルソ画像を作成した。

あわせて、周辺の古環境を分析・検討するために遺跡周辺の低地３か所でオールコアのボーリング調査を行った。

## ６．本章の構成について

第２節から第７節の構成は以下のとおりである。

第２節で分布調査の成果、第３～６節で各調査の概要および遺構・遺物について時代ごとに説明し、第７節で縄文時代の出土遺物の特徴についてまとめた。

第３節では、第１項で１～５次調査地点（緊急調査）、第２項で６～８次調査地点（保存目的確認調査）の概要を記述した。

第１項では、１～５次調査地点の概要と、２～４次で出土した早期前葉の土器・石器の概要について記述した。第２項では、６～８次調査について、トレンチごとに遺構・遺物の概要を説明した。記述の重複を避けるため、第３節の遺物の記載は、第４節で説明する住居跡・土坑に属する土器・石器など以外を対象とした。たとえば、６～８次調査で検出した早期前葉の住居跡からは、耕作などの影響により遺構範囲内または覆土中に混入してしまったと考えられる縄文土器（主にⅢ～Ⅴ群土器（早期後葉～前期））も少量出土している。これらについては遺構に伴わない土器と判断し、第３節に各トレンチ出土遺物として掲載、図示した。

第４～６節は時代ごとに遺構・遺物を記述した。第４節は縄文時代、第５節は弥生時代、第６節はその他の時代である。

第４節は大きく縄文時代早期（第１項・第２項）と縄文時代前期以降（第３項）に分けた。

第１項では、５次で検出したすべての住居跡と６～８次調査で検出した本章第１節で住居認定が◎である住居跡、５次の土坑と６～８次で部分的に調査した土坑について記述した。第２項では、５次 SI－002 の動物骨集中について説明した。第３項では縄文時代前期以降の住居跡、前期以降の土坑の一部、炉跡について記述した。

第７節は、縄文時代の出土遺物の特徴を土器、石器、骨角歯牙製品・貝製品に分けて説明した。また、６～８次調査のトレンチから出土した土器の出土傾向について、第 358・363 図にトレンチごとに土器分類群の出土比率を示した。

第２表　早期住居跡の検討表（６～８次調査）

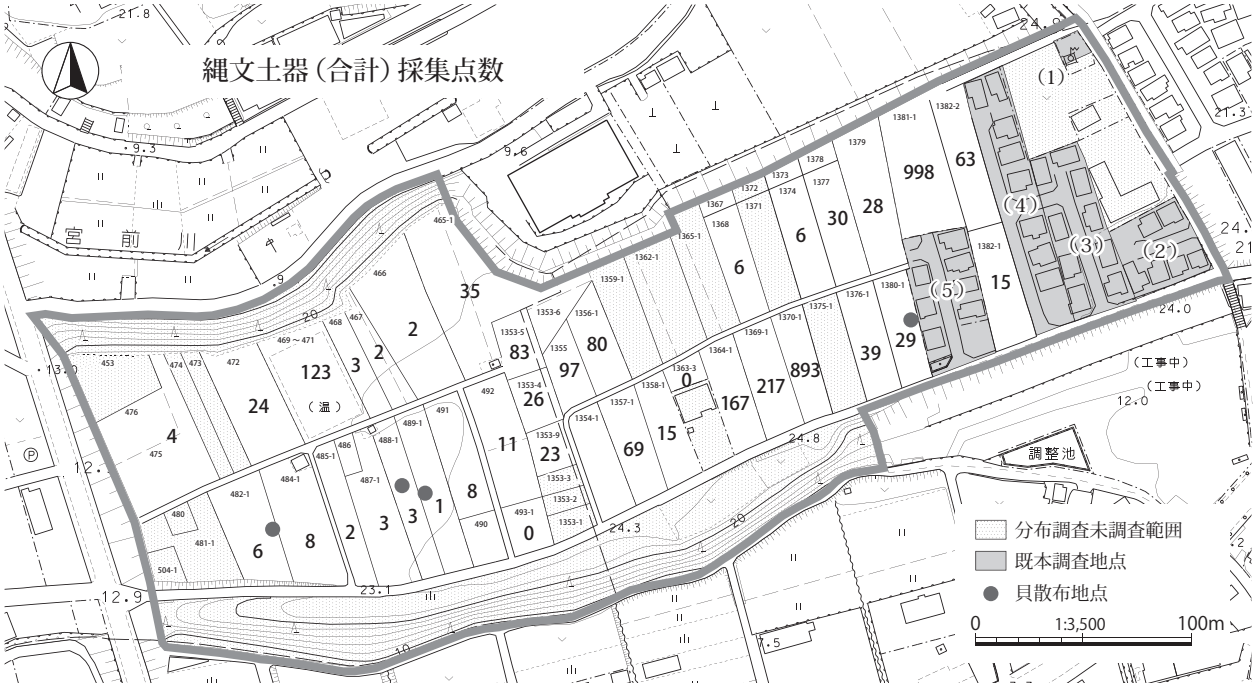
| 遺構番号 | 平面形態 | 立ち上がり | 床面 | 出土状況 | 遺構輪郭 | 住居認定 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 2T－001 | B | － | － | B | B | ○ |
| 2T－002 | B | － | － | B | B | ○ |
| 2T－003 | B | － | － | B | B | ○ |
| 4T－001 | B | － | － | C | B | ○ |
| 4T－002 | B | － | － | B | B | ○ |
| 4T－003 | B | － | B | B | B | ○ |
| 5T－005 | A | － | － | A | B | ◎ |
| 6T－001 | B | － | － | AA | A | ◎ |
| 6T－002 | B | － | B | A | B | ○ |
| 7T－001 | A | A | AA | AA | A | ◎ |
| 8T－001 | B | － | － | B | B | ○ |
| 9T－001 | A | A | A | A | B | ◎ |
| 9T－002 | A | A | A | A | B | ◎ |
| 9T－003 | B | － | － | B | B | ○ |
| 9T－005 | B | － | － | A | B | ○ |
| 9T－006 | B | － | － | B | B | ○ |
| 10T－001 | A | A | A | AA | A | ◎ |
| 10T－002 | B | － | － | B | B | ○ |
| 10T－003 | C | － | － | A | － | ○ |
| 10T－004 | B | A | A | B | B | ◎ |
| 10T－005 | A | A | A | A | A | ◎ |
| 10T－007 | A | A | A | AA | A | ◎ |
| 11T－001 | C | C | － | AA | － | ○ |
| 11T－002 | C | C | － | AA | － | ○ |
| 12T－001 | A | － | － | A | B | ◎ |
| 12T－002 | B | － | － | AA | A | ◎ |
| 15T－001 | B | － | － | B | B | ○ |
| 16T－001 | A | A | A | AA | A | ◎ |
| 16T－002 | B | － | － | A | B | ○ |
| 16T－004 | B | － | － | A | B | ○ |
| 18T－002 | B | － | － | C | B | ○ |
| 19T－002 | B | A | A | B | A | ◎ |
| 19T－003 | B | A | A | B | A | ◎ |
| 20T－001 | B | A | A | C | B | ○ |
| 23T－001 | A | A | A | AA | B | ◎ |
| 23T－002 | A | － | － | AA | B | ◎ |
| 23T－003 | A | － | － | AA | B | ◎ |
| 23T－004 | B | － | － | A | A | ◎ |
| 23T－005 | C | A | A | B | B | ○ |
| 24T－001 | A | A | A | AA | A | ◎ |
| 24T－002 | B | － | － | A | A | ◎ |
| 24T－003 | B | A | A | A | B | ◎ |
| 26T－001 | C | － | A | B | － | ○ |

## 第２節　分布調査

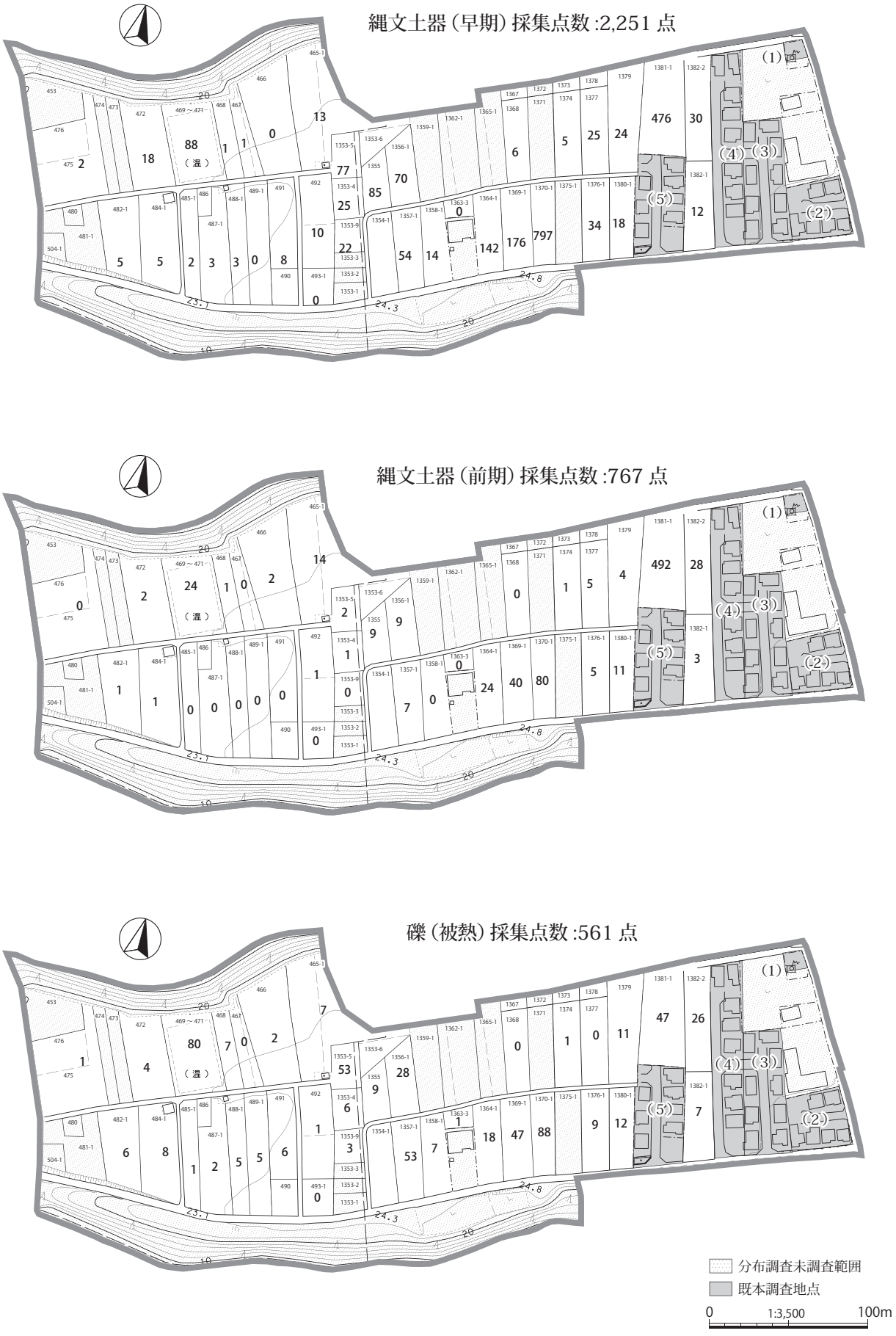
保存目的確認調査（６～８次調査）に先立ち、平成 28 年に遺跡全体の分布調査を実施した。その結果、遺跡中央部から東部にかけての採集点数が多いものの、残存する台地のほぼ全域で縄文時代早期および前期の遺物の散布が認められた（第 12・13 図）。また、貝の散布も計４か所でとらえることができた。特に５次調査地点の西側、1380－１地点ではヤマトシジミの散布も認められた。また、５次調査地点周辺の 1374・1376－１・1377・1379・1380－１・1381－１・1382－１・1382－２地点では、検土杖により耕作土層下の堆積層の遺存状態と土色の確認を行った。その結果、広範囲で暗褐色土の分布が確認されたことから、ヤマトシジミの散布が確認できたこともあわせて、５次調査で検出された早期集落の範囲がさらに周囲へ広がる可能性が示された。これらの成果を基にして平成 29 年～令和元年にかけて、遺跡の範囲および内容を確認する保存目的確認調査を実施した。

分布調査では、3,038 点の縄文土器が採集された。このうち、2,251 点がⅠ群土器（早期前葉）、767 点がⅣ・Ⅴ群土器（前期）であった。これらのうち、78 点を図示した（第 14 ～ 16 図）。１～ 54 はⅠ群土器である。１・２は４類、３～５は５類、６は６類ａ種である。７～ 22 は９類で、撚糸文が施文される７～ 20 はａ種、縄文が施文される 21・22 はｂ種とした。23 ～ 27 は 12 類である。口唇部が磨滅するため種別が困難だが、25 ～ 27 はｃ種となるか。28 ～ 35 は 13 類である。口唇部が円頭状の 28・29 はａ種、角頭状の 30･31 はｂ種、32 ～ 35 はｃ種とした。36 ～ 38 は 14 類、39 ～ 54 は 15 類である。55 ～ 65 はⅣ群土器（前期前半）、66 ～ 72 はⅤ群土器（前期後半）、74 ～ 76 はⅥ群土器（中期）、77・78 はⅦ群土器（後期）である。

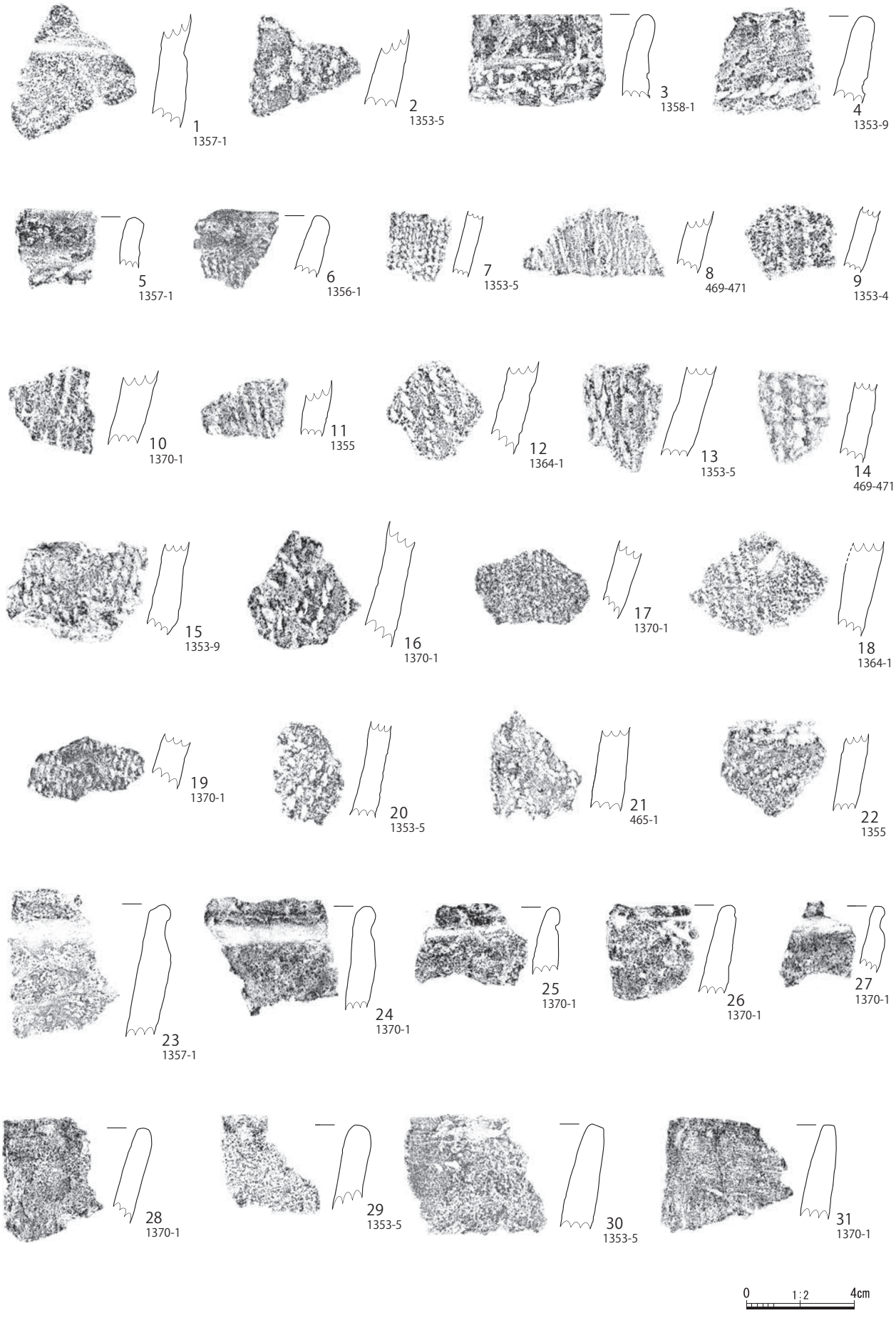
石器は 34 点を図示した（第 17 ～ 19 図）。早期前葉に属するものが多いと考えられるが、時期は明確ではない。１～４は石鏃、５・６は掻器、７は削器、８～ 19 は楔形石器、22 ～ 26 は抉入石器である。20・21 は不明石器とした。剝片石器の石材はチャートが多い。27 ～ 30 は礫斧、31 はスタンプ形石器、32・33 は敲石、34 は磨石Ａである。



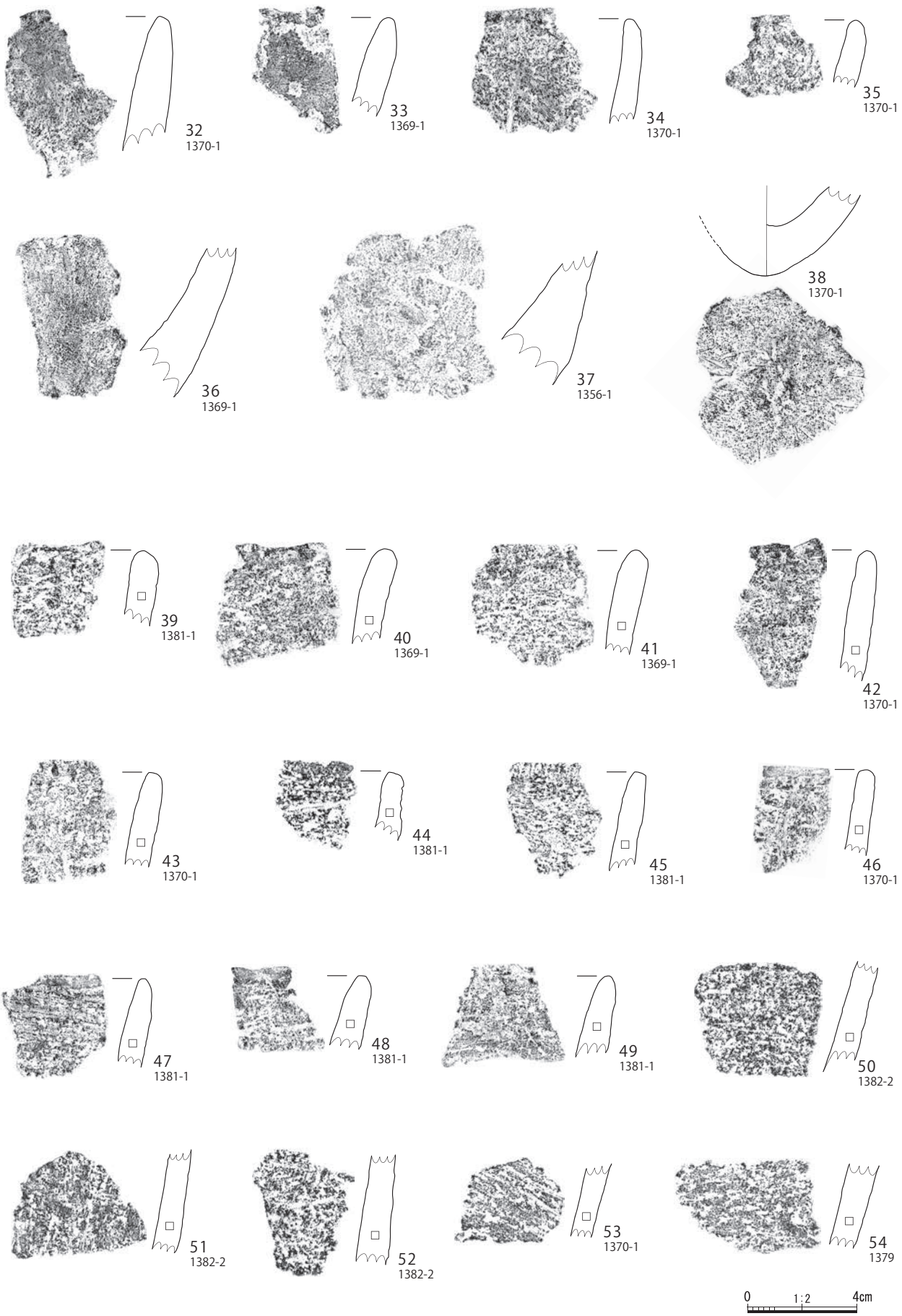

第12 図　分布調査採集遺物集計図（１）



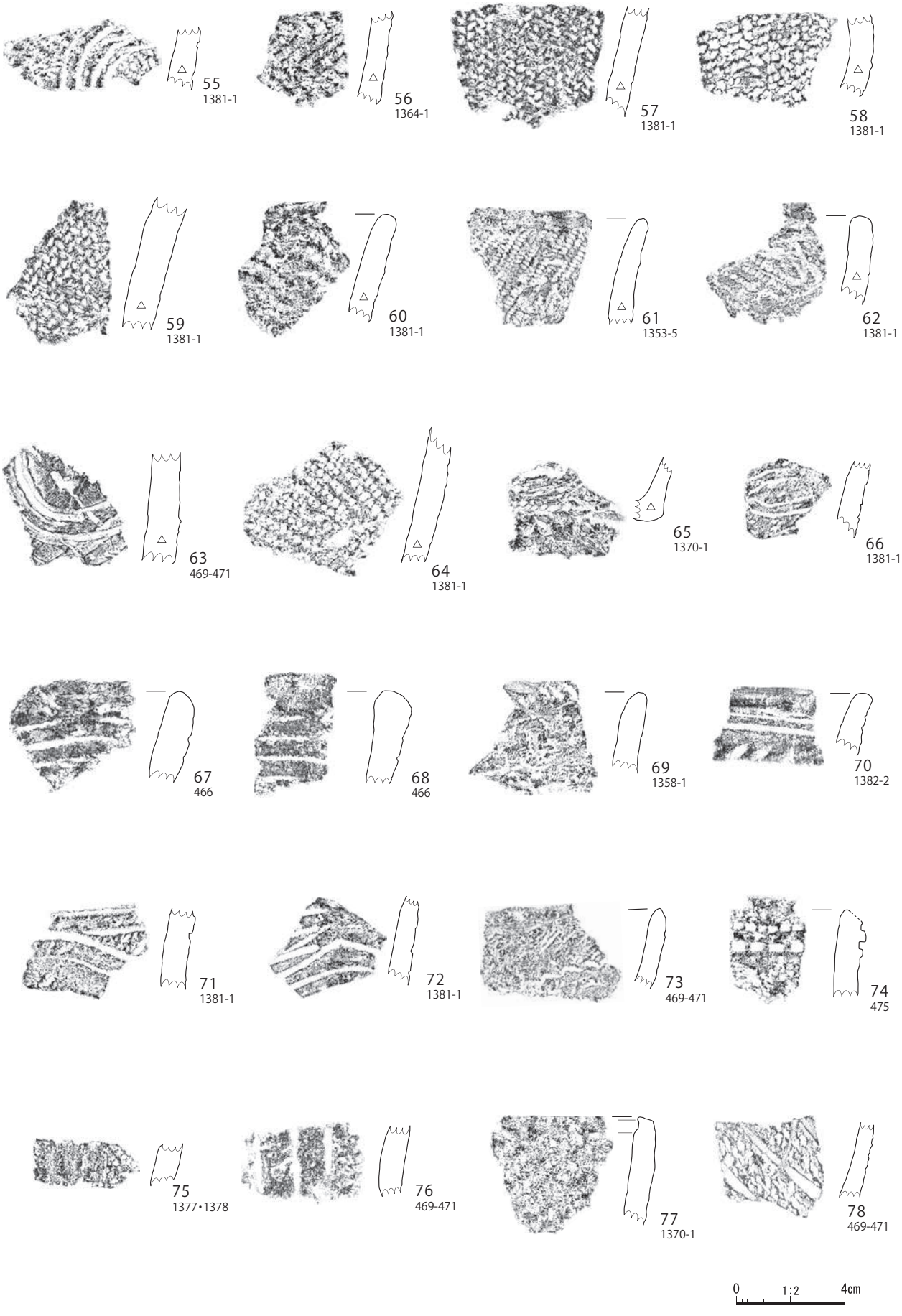

第 13 図　分布調査採集遺物集計図（２）



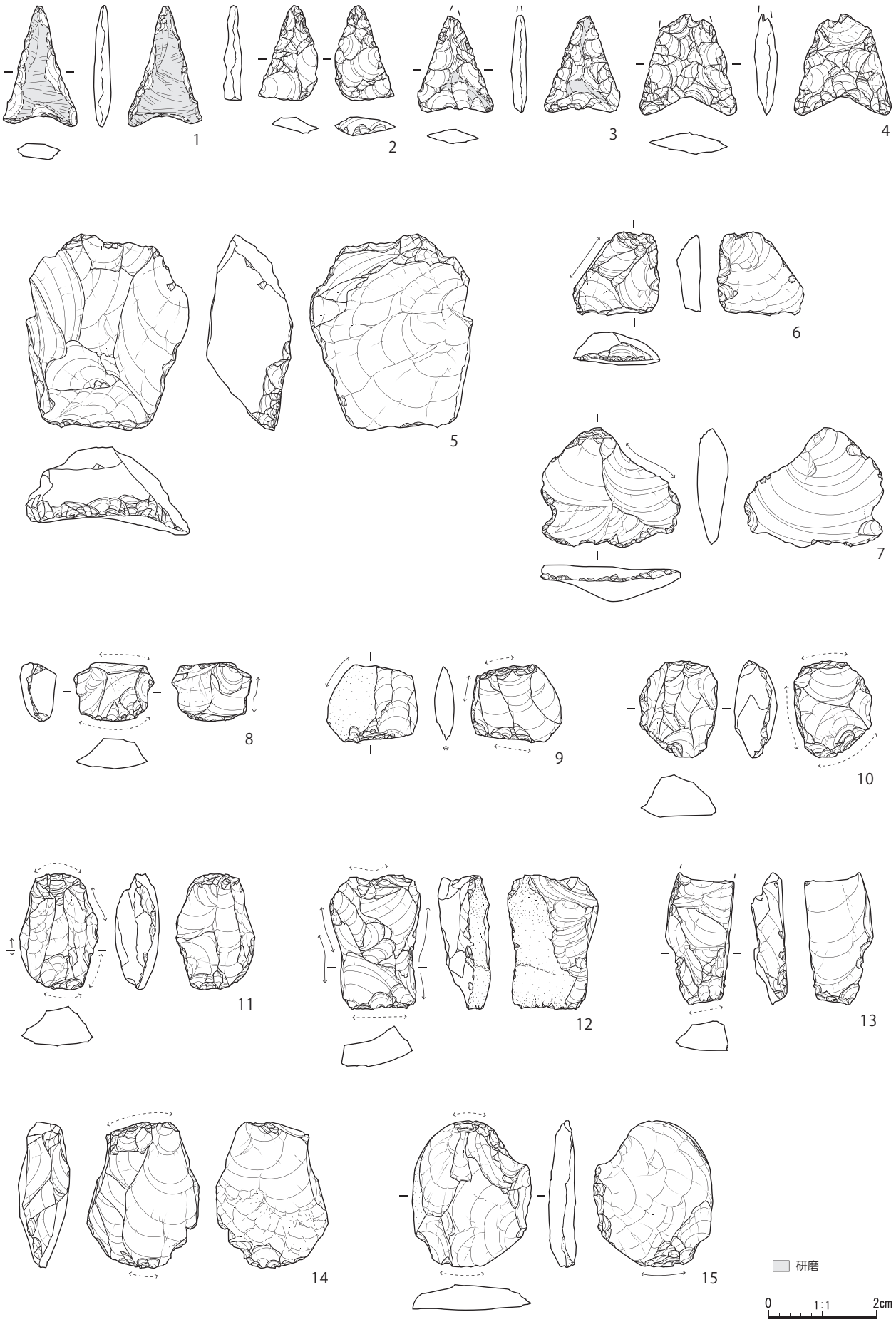

第 14 図　分布調査出土土器（1）



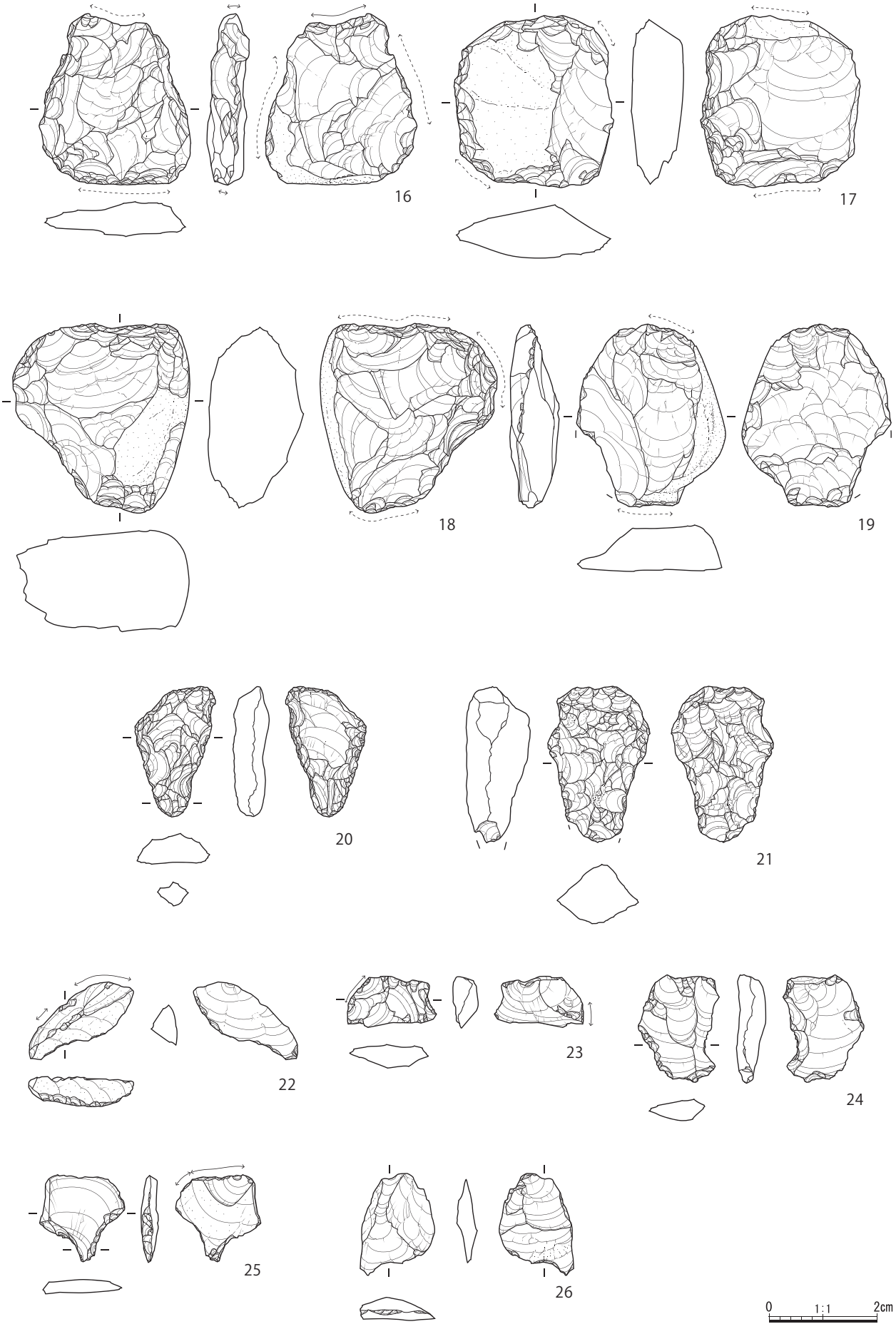

第 15 図　分布調査出土土器（２）



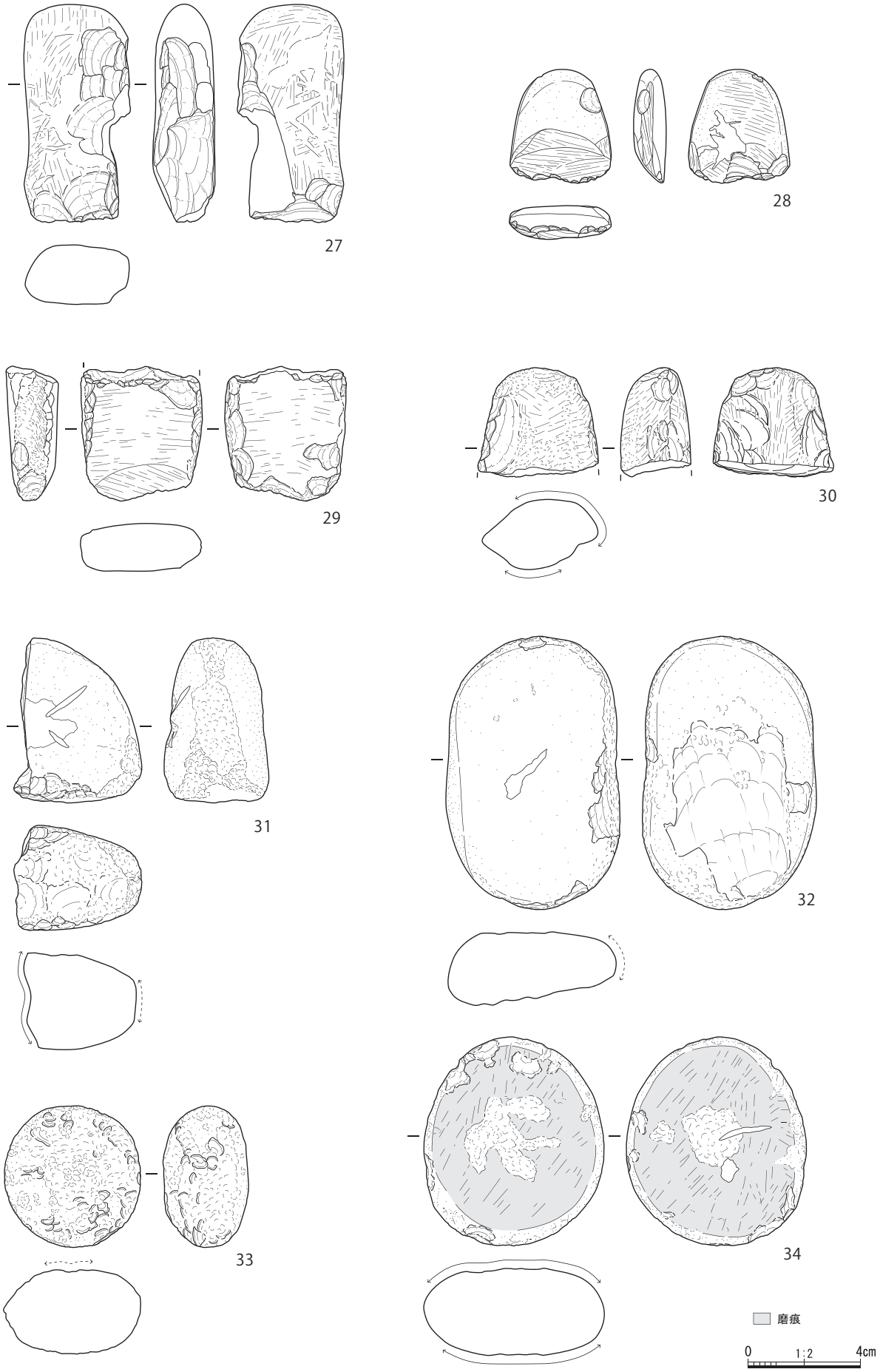

第 16 図　分布調査出土土器（3）




第 17 図　分布調査出土石器（１）




第 18 図　分布調査出土石器（2）




第 19 図　分布調査出土石器（３）

## 第３節　既調査地点の概要と保存目的確認調査

### 第１項　既調査地点の概要（１～５次調査）

取掛西貝塚では平成 20 年度までに開発に伴う緊急調査が５地点で行われている。以下にその概要を記す。また、第４節・第６節に各調査地点で検出した住居跡の記載を行った。また、縄文時代早期前葉の住居跡が検出されなかった２～４次調査地点については、出土した早期前葉の土器（Ⅰ群土器）を本項に図示した。

１次調査は、無線基地局設置に伴い平成 11 年に行われた。調査地点は遺跡の北東端に位置する。２×５ｍのトレンチを３本設定し、30㎡を調査した（第 20 図）。遺構は検出されなかったが、縄文時代前期前半の土器（Ⅵ群４類）が少量出土した。ただし、調査地点の南側では海水産の貝の散布が認められるため、付近に縄文時代前期の遺構が存在する可能性がある。

２次調査は、宅地造成に伴い平成 15 年に行われた。調査地点は遺跡の南東端に位置する。193.5㎡を調査し、竪穴住居跡２軒を検出した（第 21 図）。いずれもⅣ群２類の土器が出土していることから、縄文時代前期前半（取掛西Ⅴ期）の住居跡と考えられる。

２次調査では少量ながら縄文時代早期前葉の土器（Ⅰ群土器）が出土し、12 点を図示した（第 25 図）。15 類の出土点数が多い。３・４を除いて、前期の住居跡から出土したものである。１は 12 類ｂ種である。２～４は 13 類で、２・３は角頭状のｂ種、４は尖頭状のｃ種とした。５は無文の胴部破片で 14 類、６～ 12 は 15 類である。

３次調査は、宅地造成に伴い平成 17 年に行われた。調査地点は遺跡の南東部に位置し、２次調査地点の西に隣接する。363.79㎡を調査し、竪穴住居跡１軒を検出した（第 22 図）。住居跡から出土した土器はⅣ群４類を主体とすることから、縄文時代前期前半（取掛西Ⅵ期）の住居跡と考えられる。住居内からは小規模な貝ブロックを検出している。

３次調査で出土した早期前葉の土器（Ⅰ群土器）は 95 点であり、30 点を図示した（第 26 図）。15 類の出土点数が多い。１は 12 類ｂ種、２は 13 類、３～５は 14 類である。６～ 30 は 15 類で、口唇部が円頭状の８はａ種、角頭状の６・９～ 11 はｂ種、尖頭状の７はｃ種とした。

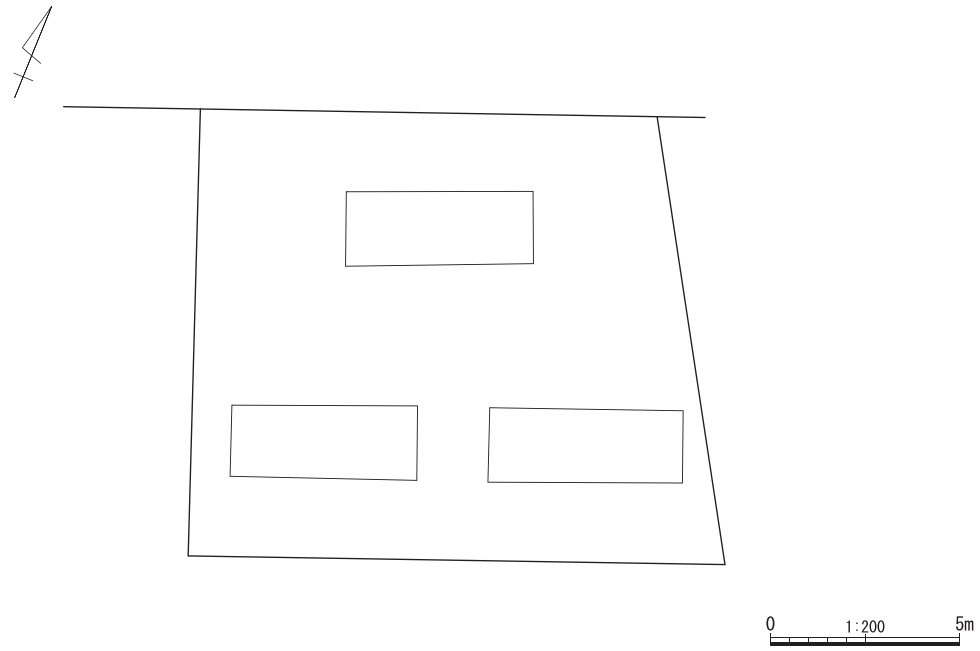
４次調査は、宅地造成に伴い平成 18 年に行われた。調査地点は遺跡の東部に位置し、３次調査地点の西に隣接する。990.9㎡を調査し、竪穴住居跡７軒を検出した（第 23 図）。出土土器からいずれも縄文時代前期前半の住居跡となるが、このうち５軒が取掛西Ⅴ期、２軒が取掛西Ⅵ期にあたると考えられる。また、４次 SI－002（取掛西Ⅵ期）および４次 SI－003（取掛西Ⅴ期）からは小規模な貝層が確認されている。

４次調査で出土した早期前葉の土器（Ⅰ群土器）は 1,151 点であり、口縁部を中心に 43 点を図示した（第 27 図）。15 類の出土点数が多い。１は４次調査報告（船橋市教委 2008）では、本書のⅠ群２類として記載されているが、口唇部形態がⅠ群２類に特徴的な肥厚する円頭状ではなく、口唇部にミガキ調整も認められない。このため、ここではⅠ群３類に属するものと考えたい。２～６は 12 類で、２をｂ種、３～６をｃ種とした。７～ 13 は 13 類である。口唇部が角頭状の７～９はｂ種、尖頭状の 10 ～ 13 はｃ種とした。14 ～ 42 は 15 類である。43 は口縁部に細沈線により文様が描かれる。16 類ｂ種とした。このほか４次調査出土の石器の中から、早期前葉と考えられるものを３点図示した（第 28 図）。44 はホルンフェルス製の礫斧、45・46 はスタンプ形石器で、下部破断面に磨耗痕が認められる。いずれも破損した磨石や敲石を再利用したと考えられる。45 は石英斑岩製、46 は安山岩製。

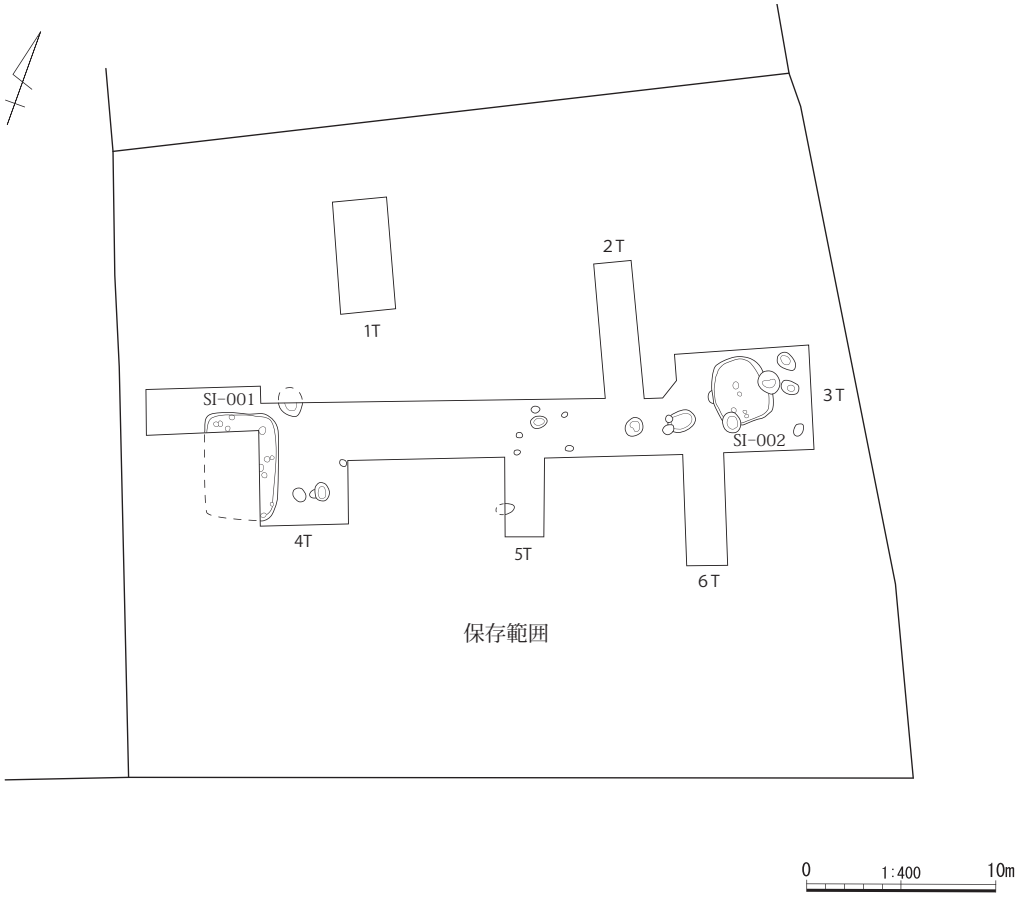
５次調査は、宅地造成に伴い平成 20 年に行われた。調査地点は遺跡の東部に位置し、４次調査地点の西に隣接する。確認調査で 13 本のトレンチを設定したところ、その多くで遺構が検出されたため、現状

保存が困難な 472.19㎡の本調査を実施している。その結果、縄文時代の竪穴住居跡 10 軒、平安時代の住居跡 1 軒を検出した（第 24 図）。出土土器からいずれも縄文時代早期前葉の住居跡（取掛西Ⅲ・Ⅳ期）と考えられる。前期の遺構は土坑のみであり、住居跡は検出されなかった。縄文時代早期前葉の遺構のうち、取掛西Ⅲ期にあたる竪穴住居跡 4 軒、土坑 1 基から汽水産のヤマトシジミを主体とした貝層が検出された。また、保存範囲となった調査区南東側の 10T（第 24 図）でもヤマトシジミ貝層を伴う住居跡が確認されている。なかでも 5 次 SI－002 では厚さ 70cm を超える貝層の堆積が確認され、貝層中からは多数の骨角歯牙製品・貝製品および動植物遺体が出土した。また、この貝層直下からはイノシシ・シカの頭骨がまとまった状態で出土しており、動物骨の儀礼的取扱いとしては、日本最古の事例である。

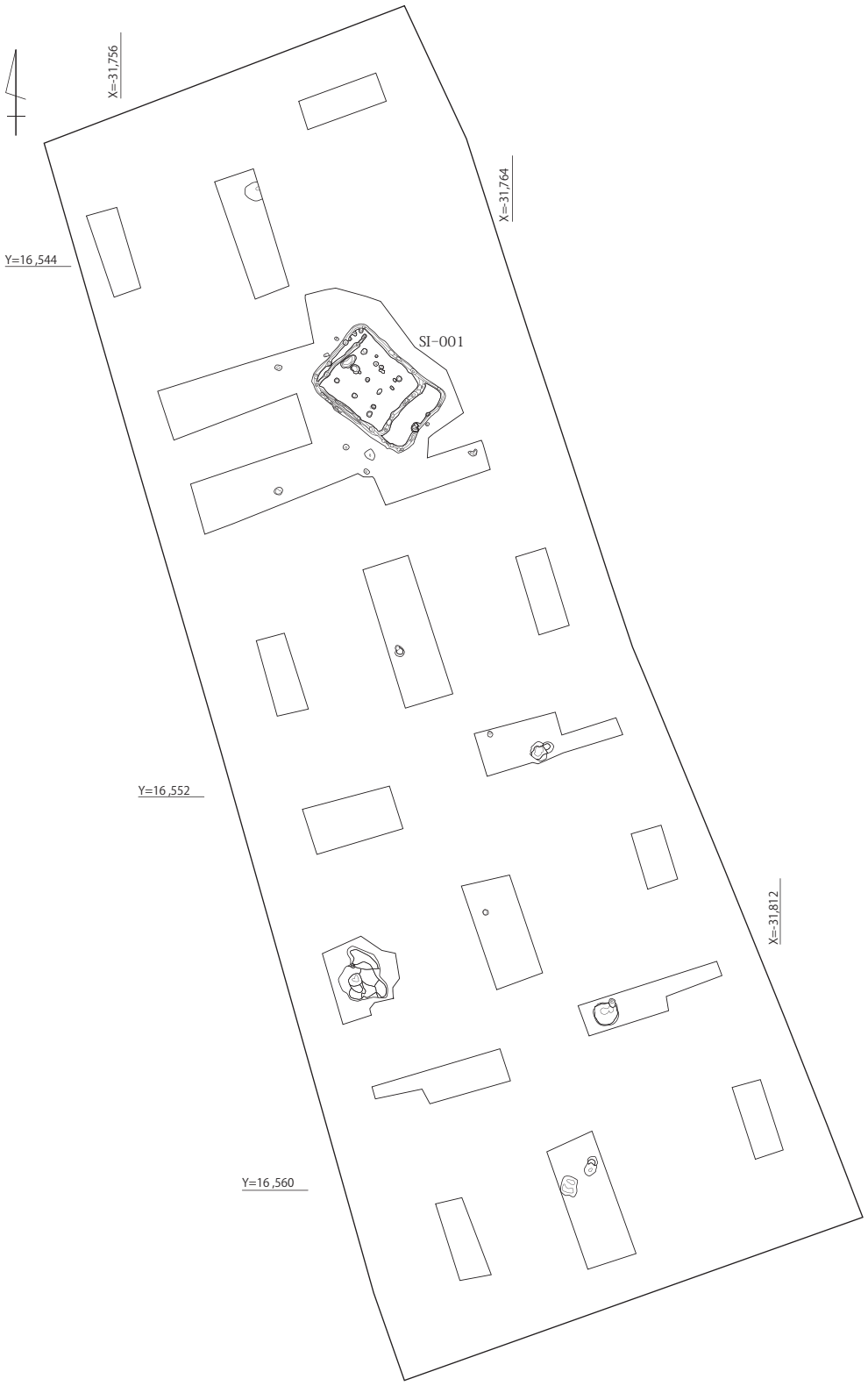
このように、取掛西貝塚は 4 次調査までは縄文時代前期の地点貝塚を伴う集落跡と考えられていたが、５次調査において早期前葉の集落と貝塚を検出し、貝層中からは多くの動植物遺体が確認されるなど、その希少性・重要性が注目されることとなった。




第 20 図　1 次調査全測図

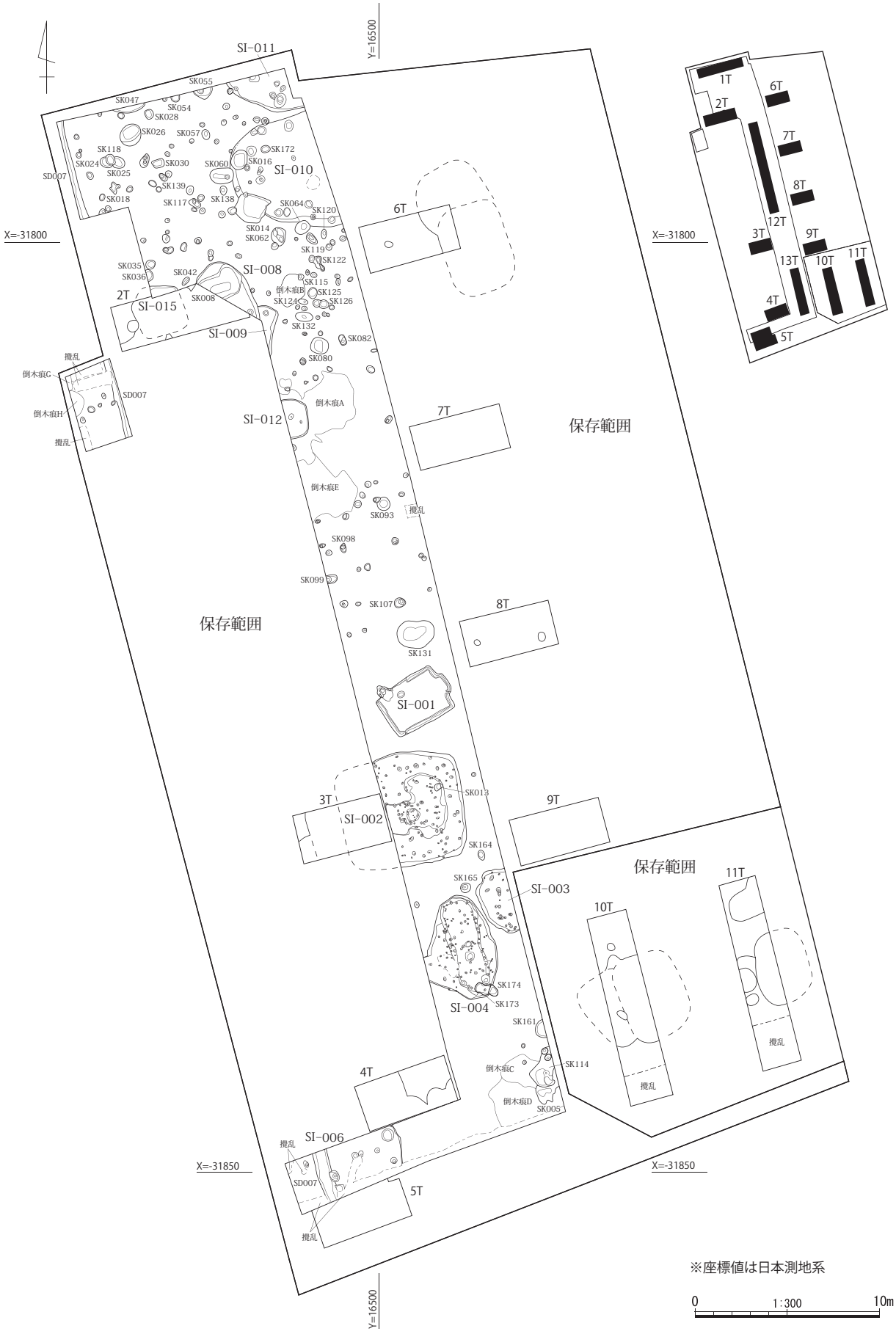



第 21 図　2 次調査全測図

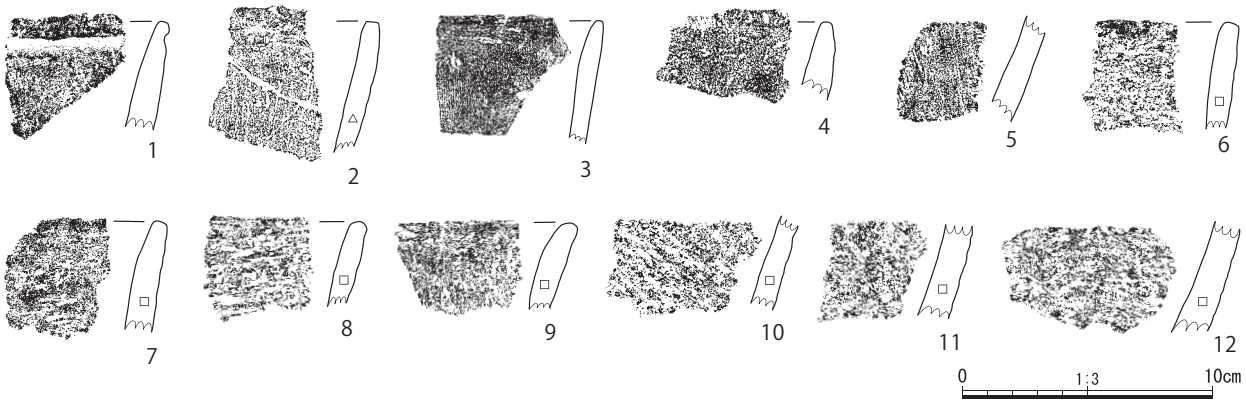



第 22 図　3 次調査全測図

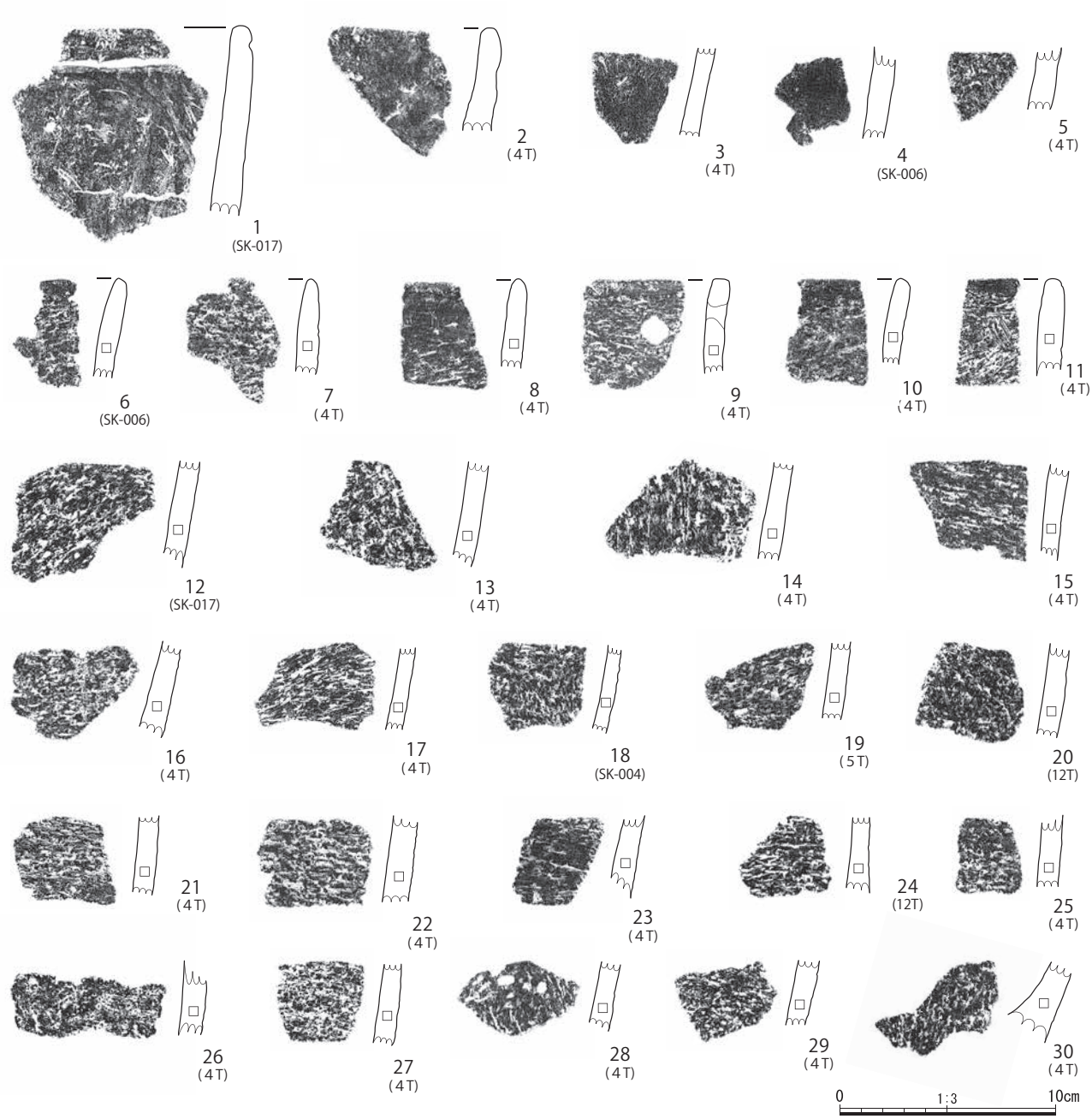
第 23 図　4 次調査全測図



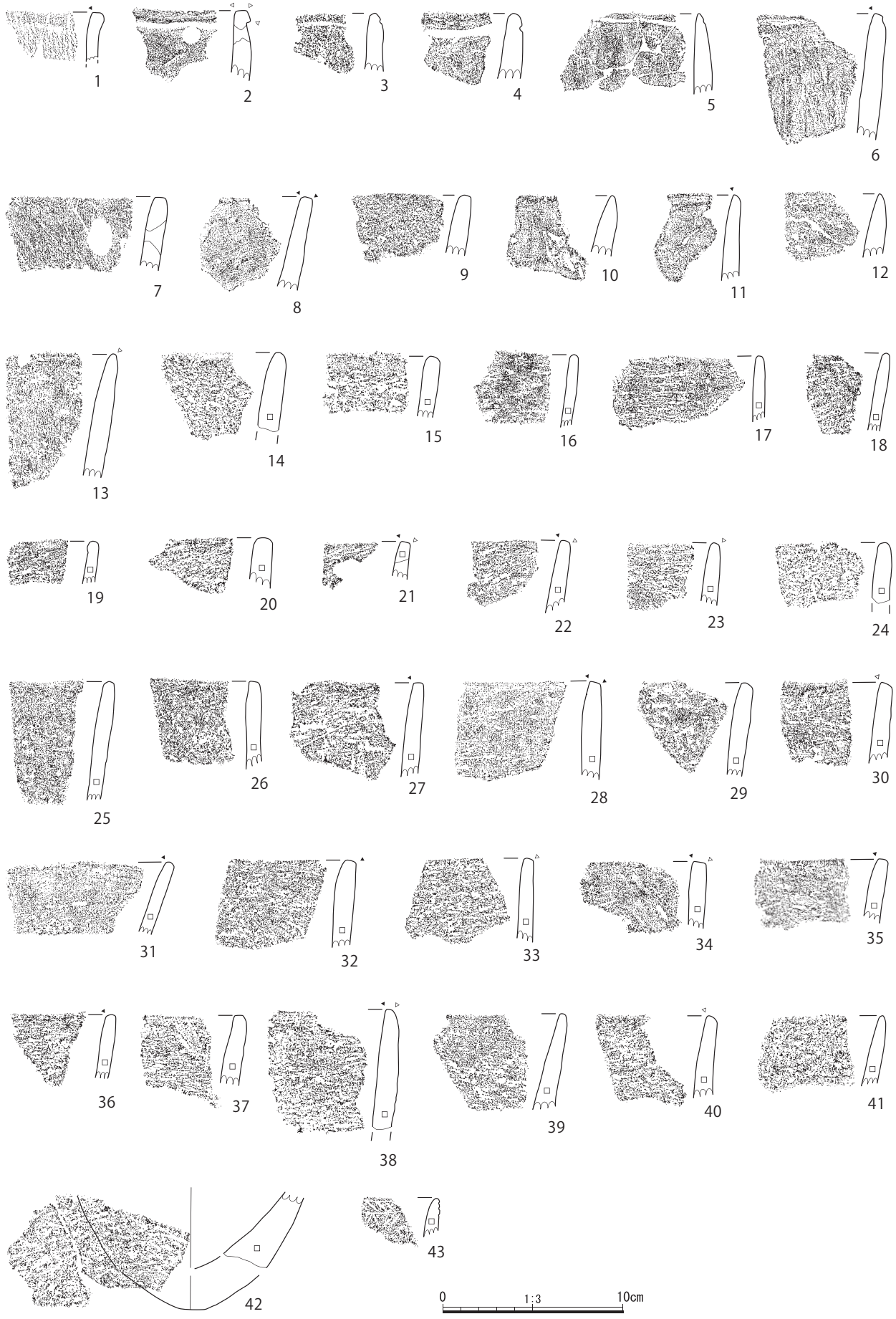

第 24 図　5 次調査全測図



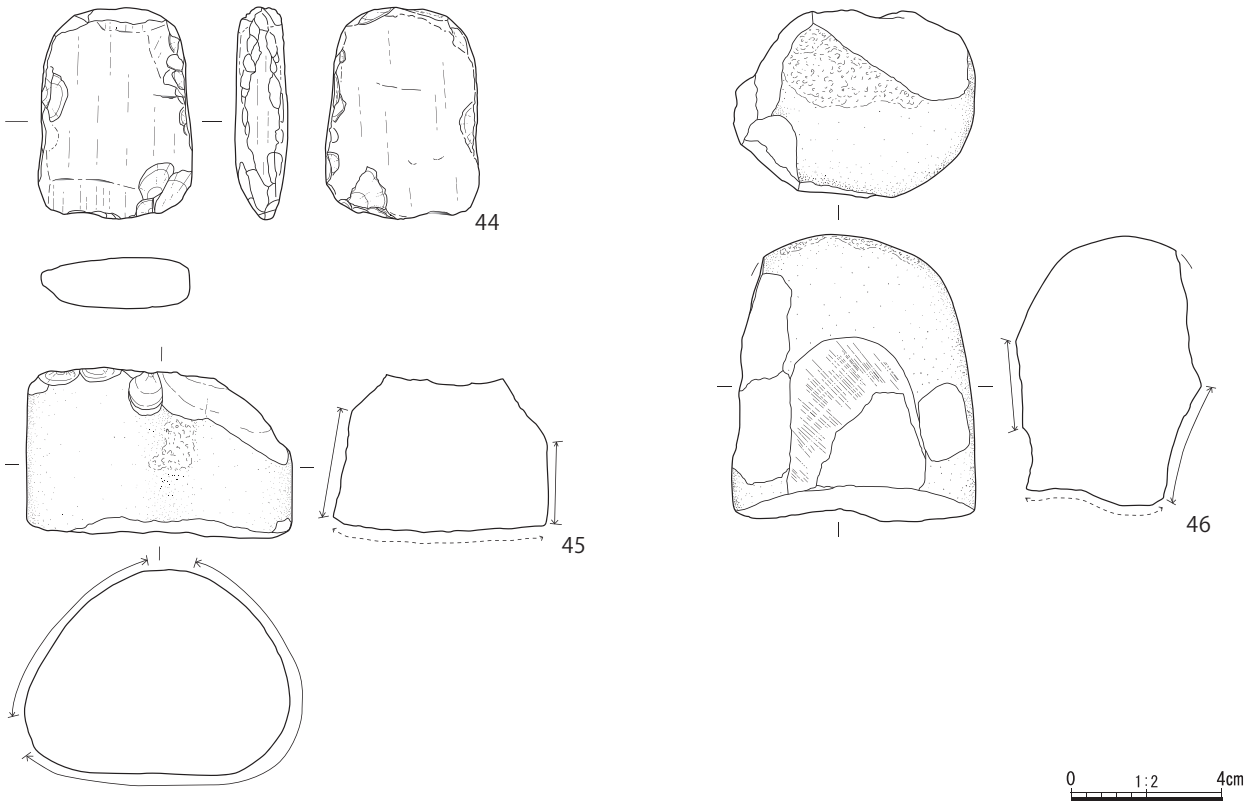

第 25 図　２次調査出土Ｉ群土器




第 26 図　３次調査出土Ｉ群土器




第 27 図　４次調査出土Ⅰ群土器




第 28 図　４次調査出土石器（早期前葉）

**第２項　保存目的確認調査（６～８次調査）**

平成 29 年度～令和元年度の３か年にかけて、遺跡の範囲および内容を確認するため、26 本のトレンチを設定し調査を行った。検出した住居跡は、縄文時代早期前葉（取掛西Ⅱ～Ⅳ期）のものが 43 軒、前期前半（取掛西Ⅴ・Ⅵ期）のものが８軒、縄文時代中期（取掛西Ⅶ期）のものが１軒、弥生時代中期（取掛西Ⅷ期）のものが６軒、奈良・平安時代のものが２軒である。以下にトレンチ毎に確認できた遺構・遺物について記載する。

**１トレンチ**（第 29 図）

遺跡東端部、４次調査地点の西側隣接地点に位置する。南北方向に２× 50m の規模で設定したが、トレンチ全体が削平されている状況だったため、一部深掘りを実施し現地表面より 120cm の深さで地山を確認したが、遺構は検出できなかった。このため、南側に補助的なトレンチを２本設定し、あらためて遺構確認を行ったところ、１－１Ｔで土坑を１基、１－２Ｔで住居跡を１軒検出した。１－２Ｔで検出した住居跡は６Ｔ北端部で検出した 6T－001 住居跡の隅部分と考えられる。１－１Ｔ・１－２Ｔの遺構確認面はいずれもⅢ層上面で標高は 24.7m、現地表面からの深さは約 50cm である。検出した遺構は合計して、住居跡１軒、土坑２基、ピット２基である。

**出土遺物**

**土器**（第 58・59 図）

縄文土器の出土点数は 165 点である。Ⅰ群 15 類の出土数が最多で、次いでⅣ群が多い。32 点を図示した。

１～ 18 はⅠ群土器である。１～３は 13 類である。口唇部が円頭状の１・２はａ種、角頭状の３はｂ種とした。４は無文の底部直上の破片で、14 類である。５～ 18 は 15 類である。口唇部が円頭状の５～８はａ種、角頭状の９～ 11 はｂ種、尖頭状の 12 はｃ種とした。13 ～ 18 は胴部破片のｄ種である。

19 ～ 21 はⅣ群３類で、21 は注口部の破片である。22・23 はⅤ群土器で、22 は１類、23 は２類とした。24 はⅥ群２類、25 はⅦ群土器である。

26 ～ 32 は１－２Ｔで出土した。26 ～ 29 は 15 類で、口唇部が円頭状の 26 はａ種、角頭状の 27・28 はｂ種、胴部破片の 29 はｄ種とした。30・31 はⅣ群１類、32 はⅦ群土器である。

**石器**　トレンチ全体で剥片・砕片を含め６点が出土したが、図示はしていない。

**２トレンチ**（第 30 図）

調査区東部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 24.3 ～ 24.7m、現地表面からの深さは約 45cm であった。トレンチ南半部は遺構・遺物とも少ないが、倒木痕中に遺物が集中していた。検出した遺構は住居跡３軒、土坑 13 基、ピット 37 基である。2T－001・002 住居跡は規模がやや小さいものの平面形態が方形を呈すると考えられる。しかし、覆土が暗褐色土で遺構の輪郭は視認しにくく、出土遺物も少ない。2T－003 住居跡は 001・002 住居跡よりも覆土の色調が淡く、出土遺物も少ない。いずれの住居跡も早期前葉と考えられる。

**出土遺物**

**土器**（第 60・61 図）

縄文土器の出土点数は 306 点で、Ⅰ群 15 類、14 類の順に出土量が多い。33 点を図示した。

１～ 31 はⅠ群土器である。１は 11 類の胴部破片、２～８は 12 類である。２・３は角頭状のｂ種、４～７は尖頭状のｃ種、８は口縁部を欠損するためｄ種とした。７は口唇部に狭い平坦面が認められたが、胴部に比べ口縁部の厚さが大きく減じるため尖頭状と判断した。９～ 14 は 13 類である。口唇部形態から、

９・10 は円頭状のａ種、11 ～ 14 は角頭状のｂ種とした。15・16 は 14 類である。16 は施文が認められないため 14 類としたが、11 類の底部となる可能性もある。17 ～ 30 は 15 類である。口唇部形態から、17 ～ 21 は円頭状のａ種、22・23 は角頭状のｂ種とした。31 は 17 類である。小型土器としたが、口縁部の特徴は 12 類ｃ種と類似する。

32 はⅣ群土器と考えられるが、類別できなかった。33 はＶ群２類である。Ⅲ群以降の縄文土器の出土は極めて少ない。

**石器**（第 109 図）

トレンチ全体で砕片を含めて９点が出土し、このうち３点を図示した。１は二次加工のある剥片である。珪質頁岩製。２は微細剥離痕のある剥片。黒曜石製。３は粗粒緑色凝灰岩製の磨石Ａである。下部破断面に磨耗痕が認められるため、破損後にスタンプ形石器として利用されたと考えられる。

**３トレンチ**（第 31 図）

遺跡東部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。遺構確認面はⅡ～Ⅲ層上面で標高は 23.9 ～ 24.4m、現地表面からの深さは約 40cm であった。トレンチ中央部から南部にかけてⅡ層の堆積を確認した。北部では耕作がやや深くまで及んでいたため、面的にⅡ層を確認することはできなかったが、崩落した調査区壁を整えるため壁際の耕作土（Ⅰｂ層）を取り除いたところ、北部でもトレンチ西壁でⅡ層の堆積を確認することができた（土層断面図Ａ－Ａ′）。

Ⅱ層上面での遺構確認が困難だったため、Ⅱ層を５m おきにⅢ層上面まで精査し、遺構の分布状況を確認した。その結果、トレンチ全体で土坑 22 基、ピット 49 基を検出した。トレンチ中央部～南部にかけてのⅡ層中からはⅠ群 14・15 類を中心に多くの土器が出土している。

**出土遺物**

**土器**（第 62・63 図）

縄文土器の出土点数は 569 点である。Ⅰ群 14･15 類が主体となるが、次いでⅣ群土器が多い。このうち、44 点を図示した。

１～ 35 はⅠ群土器。１～９は 11 類である。１は口縁部が屈曲するもの、２・３は直立するものである。10 ～ 18 は 12 類である。10 ～ 12 はｂ種、13 ～ 17 はｃ種とした。18 はｃ種となる可能性が高いが、口唇部を欠損するためｄ種としている。19 ～ 24 は 13 類である。口唇部形態から、19 ～ 21 は円頭状のａ種、22 は角頭状のｂ種、23・24 は尖頭状のｃ種とした。25・26 は胴部破片の 14 類である。27 ～ 35 は 15 類である。口唇部形態から、27 ～ 29 は円頭状のａ種、30 ～ 32 は角頭状のｂ種、33 は尖頭状のｃ種とした。34・35 は胴部破片のｄ種である。

36 ～ 38 はⅣ群土器である。36 は３類、37・38 は３類あるいは４類と考えられる。39 ～ 44 はＶ群土器である。40・41 は１類、39・43 は２類と考えられる。

**石器**（第 110 図）

トレンチ全体で剥片を含めて 24 点が出土し、このうち３点を図示した。１はチャート製の楔形石器、２はホルンフェルス製の礫斧である。３は砂岩製の砥石。下部破断面に磨耗痕が認められるため、破損後にスタンプ形石器として利用されたと考えられる。

**４トレンチ**（第 32 図）

調査区東部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 23.8

～ 24.2m、現地表面からの深さは約 40cm であった。検出した遺構は住居跡３軒、土坑 34 基、ピット 15 基である。4T－001・002 住居跡は平面形態が隅丸方形と考えられる。しかし、トレンチの拡張ができなかったため、全体形状は確認できていない。また、出土遺物が乏しく、遺構の輪郭も視認しにくかった。4T－003 住居跡は検出した南北辺のプランが直線的であることから平面形態が方形を呈すると考えられる。また、攪乱を利用して確認した底面は比較的平坦であった。11 類や 14 類が比較的まとまって出土している。しかし、001・002 住居跡と同様に全体形状を確認できず、遺構の輪郭も視認しにくかった。いずれの住居跡も早期前葉と考えられる。4T－004 は出土遺物に前期前半の土器が目立ち、覆土も他の前期遺構に類似することから、前期の土坑と考えた。

**出土遺物**

**土器**（第 64 図）

縄文土器の出土点数は 245 点で、主体となるのはⅠ群 14 類である。一定量のⅣ群土器が認められたが細片が多い。Ⅰ群土器から 17 点を図示した。

１は５類、２～４は９類ａ種である。５・６は 11 類で、５は口縁部が屈曲する。７・８は 12 類である。７はｂ種、８はｃ種とした。９は 13 類ａ種である。10 ～ 12 は 14 類で、11・12 は尖底を呈する。13 ～ 16 は 15 類である。口唇部形態から、13・14 は円頭状のａ種、15・16 は角頭状のｂ種とした。17 は 16 類ｂ種である。細沈線により文様が描かれ、胎土は 15 類に類似する。

**石器**（第 111 図）

トレンチ全体で３点が出土し、このうち１点を図示した。１はチャート製の石鏃である。

**５トレンチ**（第 33 図）

遺跡中央部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。８次調査では前期住居跡の住居構造把握のため、5T－002 周辺を再拡張して調査を実施した。最終的な調査面積は 109.7㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 23.7 ～ 24.0m、現地表面からの深さは 50 ～ 60cm であった。検出した遺構は住居跡５軒、土坑 48 基、ピット 149 基である。北部で検出した 5T－001 ～ 004 は前期の住居跡である。001 住居跡は耕作により床面近くまで削平されていたものの炉跡を検出している。002 住居跡は６次調査で貝層を確認しており、８次調査で住居構造把握のため床面まで精査を行った。003・004 は８次調査でトレンチを拡張した際に検出した住居跡であり、003 住居跡では小規模ながら貝ブロックも確認している。004 住居跡は出土遺物が乏しいものの、覆土が 002・003 住居跡と類似することから前期の住居跡とした。また、８次調査のトレンチ拡張に伴い検出した 5T－005 は早期の住居跡であり、前期の住居跡（5T－002）と重複するものの、やや不整形な隅丸方形の全体形状を確認することができた。001 ～ 003・005 住居跡については、第４節で詳細を記載する。

**出土遺物**

**土器**（第 65・66 図）

遺構出土分も含めたトレンチ全体の縄文土器の出土点数は 542 点である。Ⅰ群土器とⅣ群土器の出土量は同程度だが、前期住居跡出土分を除くとⅠ群９類および 14 類の出土量が多い。第４節記載の 001 ～ 003・005 住居跡出土分を除いた中から、49 点を図示した。

１～ 48 はⅠ群土器である。１・２は４類、３～６は５類である。７は７類で、口唇部は肥厚せず、無文の口縁部と撚糸文が施文される胴部の間に区画は認められない。８～ 10 は８類である。11 ～ 23 は胴部から底部の破片で、11 ～ 19 を９類ａ種、20 ～ 23 を９類ｂ種とした。22 は同一原体による異方向

施文ではなく、異原体によるものと考えられる。24 は 11 類で、口縁部は屈曲すると考えられる。25 ～ 27 は 12 類である。25・26 はａ種、27 はｃ種とした。28 ～ 37 は 13 類である。口唇部形態から、28 ～ 30 は円頭状のａ種、31・32・34 は角頭状のｂ種、33・35 ～ 37 は尖頭状のｃ種とした。38 ～ 45 は 14 類である。46･47 は 15 類である。46 は角頭状のｂ種、47 はｄ種で小平底となる。48 は 17 類で、小型土器の底部破片である。

49 はⅦ群土器。後期中葉以降の粗製土器と考えられる。

**石器**（第 112 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 41 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から６点を図示した。１は微細剥離痕のある砕片である。黒曜石製。２は黒曜石製の石核と考えられる。３は変質玄武岩製の礫斧である。４は磨製石斧である。変質安山岩製。前期のものか。５は三角錐形石器の基部破片と考えられる。砂岩製。６は石英斑岩製の磨石Ａである。下部破断面に弱い磨耗痕が認められるため、破損後にスタンプ形石器として利用されたと考えられる。

**６トレンチ**（第 34 図）

遺跡東部、４次調査地点と５次調査地点の間に位置する。規模は当初２× 45m（南北方向）で設定したが、北端部の広い範囲で暗褐色土を確認したため、北側にトレンチを延長している。最終的なトレンチ長は 52m で、調査面積は 103.7㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 25.0m、現地表面からの深さは 20 ～ 30cm であった。トレンチ南半部は遺構・遺物ともに少ない。検出した遺構は住居跡２軒、土坑 10 基、ピット 36 基である。北端部で検出した２軒の住居跡は、出土遺物からいずれも早期前葉のものと考えられる。6T－001 住居跡は 15 類を中心に多量の土器が出土し、覆土も黒褐色で遺構の輪郭も明瞭である。北に隣接する１Ｔでもこの住居跡と考えられる遺構覆土を検出できたことにより隅丸長方形に近い形状を確認することができた。遺物がある程度まとまって出土したため 6T－002 も住居跡と判断した。覆土が淡い暗褐色で遺構の輪郭が視認しにくかった。002 住居跡内の攪乱を利用し土層の堆積状況を確認したところ、複数の遺構が重複する可能性が認められた。しかし、東西方向へのトレンチの拡張が困難だったため明確にはできていない。001 住居跡については第４節で詳細を記載する。このほか、中央部に集中する土坑付近からは 15 類の土器が複数出土している。

**出土遺物**

**土器**（第 67 図）

縄文土器は遺構出土分も含め、トレンチ全体で 674 点が出土した。Ⅰ群 15 類の出土量が多い。このうち、第４節記載の 6T－001 住居跡出土分を除いた中から 21 点を図示した。

１～ 19 はⅠ群土器である。１は 11 類の胴部破片で、撚糸文が横位に施文される。２～４は 13 類。口唇部形態から、２はｂ種、３・４はｃ種とした。５・６は 14 類で無文の胴部破片である。７～ 19 は 15 類である。口唇部形態から、７・８は円頭状のａ種、９・10 は角頭状のｂ種とした。11 ～ 19 は胴部および底部の破片でｄ種とした。

20・21 はⅣ群土器で、20 が３～４類、21 が４類と考えられる。

**石器**（第 113・114 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 57 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から 17 点を図示した。１は石鏃である。チャート製。２はチャート製の掻器、３・４は黒曜石製の削器である。５はガラス質黒色安山岩製の楔形石器としたが、石核となる可能性がある。６は抉入石器、

７は微細剝離痕のある砕片である。６・７はチャート製。８は細粒緑色凝灰岩製の礫斧。９・10 は礫器とした。９は砂岩、10 はホルンフェルスの扁平礫を素材とする。11・12 はスタンプ形石器である。11 は変質玄武岩製、12 は砂岩製。11 はスタンプ形石器の下端部の破片で、左側破断面に磨耗痕が認められることから、破損後に磨石Ｃとして利用されたと考えられる。13 はチャート製の敲石、14 は粗粒緑色凝灰岩製の砥石である。15 ～ 17 は砂岩製の磨石Ａで、破損したものが多い。15 は下部破断面に磨耗痕が確認されることから、破損後にスタンプ形石器として利用されたと考えられる。

**７トレンチ**（第 35 図）

遺跡東部、５次調査地点の西側に位置する。分布調査で確認したヤマトシジミの散布地点を狙い、南北方向に２× 40m の規模で設定した。トレンチ中央部で貝層を伴う住居跡（7T－001）を検出したため、その付近を西側に拡張している。さらに北端部でも暗褐色土の広がりを確認したためトレンチの一部を西側に拡張したが、トレンチ西壁セクションの状況から残存したⅡ層と判断した。トレンチ拡張の結果、最終的な調査面積は 110.7㎡となった。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 25.0m を測り、遺跡範囲内で最も標高が高い地点のひとつである。現地表面から遺構確認面までの深さは約 45cm であった。トレンチ南部は遺構が少なく、出土遺物も乏しい。検出した遺構は住居跡１軒、土坑 21 基、ピット 30 基である。中央部で検出した住居跡（7T－001）の輪郭は明瞭であり、住居跡内にはヤマトシジミ貝層が確認された。001 住居跡の詳細は第４節で記載する。また、001 住居跡の北ではハマグリを主体とする貝層が堆積したピットを検出している。４次 SI－002 の貝層検出状況を考慮すると、前期前半に属する住居跡の柱穴となるか。周辺に前期の住居跡が存在した可能性があるが、ほかに住居跡の痕跡は確認できなかった。

**出土遺物**

**土器**（第 68 図）

住居跡出土分も含めた縄文土器の出土点数は 252 点である。出土量はⅠ群 14 類が主体を占め、次いでⅠ群 15 類が多い。このうち、第４節記載の 7T－001 住居跡出土分を除いた中から 19 点を図示した。

１～ 14 はⅠ群土器である。１・２は 11 類の胴部破片、３～６は 12 類ｂ種である。７は 13 類ｂ種、８は 14 類である。９～ 13 は 15 類である。口唇部形態から、９はａ種、10・11 はｂ種とした。12・13 は胴部破片でｄ種となる。14 は 16 類ｂ種。口唇部は角頭状で、横位沈線により区画された口縁部には鋸歯状の文様が施される。

15 ～ 17 はⅣ群土器で、15 が１類、16・17 が３～４類と考えられる。18・19 はⅤ群１類土器である。

**石器**（第 115 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剝片を含めて 39 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から 11 点を図示した。１・２は石鏃である。１はガラス質黒色安山岩製、２は赤チャート製。３は硬質頁岩製の抉入石器。４は器種不明の石器で異形石器となるか。あるいは類例に乏しいものの石匙となる可能性もある。チャート製。５・６は二次加工のある剝片である。５はメノウ製、６は黒曜石製。７は礫斧、８は礫器で、共にホルンフェルス製。９はスタンプ形石器で砂岩製。10 は中粒緑色凝灰岩製の砥石である。破断面に磨耗痕が認められることから、破損後に磨石Ｃやスタンプ形石器として利用したものか。11 は安山岩製の礫片で、腹面に磨耗痕が認められたため磨石Ｃとした。

**８トレンチ**（第 36 図）

遺跡東部に位置する。規模は２× 40m（南北方向）で設定したが、南部で遺構覆土と考えられる暗褐

色土の広がりを確認したため、西側に延びるサブトレンチを設定した。遺構確認面はⅢ層上面で標高は24.8 ～ 24.9m、現地表面からの深さは 20 ～ 30cm であった。ピットを中心に検出遺構は少なくないが、出土遺物は乏しい。検出した遺構は住居跡１軒、土坑 23 基、ピット 55 基である。8T－001 住居跡は平面形態が隅丸長方形と考えられる。出土遺物は少ないが、ほかの早期住居跡と覆土が類似することから、時期は早期前葉と考えられる。覆土は暗褐色で輪郭が視認しにくかった。また、住居跡の西壁を確認するためサブトレンチを設定したが、南北方向の溝跡（取掛西Ⅸ期か）に壊され確認することができなかった。

**出土遺物**

**土器**（第 69 図）

トレンチ全体の縄文土器の出土点数は 111 点で、Ⅰ群 14・15 類が多い。このうち、14 点を図示した。

１～９はⅠ群土器である。縦位の沈線が施される１は９類ｄ種となるか。２は 12 類ｃ種、３～５は 13 類で、全てｃ種とした。６・７は 15 類である。８は 16 類ｂ種で、横位沈線による区画内に斜位の細沈線が施される。胎土は 15 類に類似する。９は 17 類で、小型土器の底部破片である。

10 ～ 13 はⅤ群土器で、10 を１類、11 ～ 13 を２類とした。14 はⅥ群２類である。

**石器**（第 116・117 図）

トレンチ全体で剝片を含めて 25 点が出土し、このうち 13 点を図示した。遺構数に比して石器の出土点数が多い。１は尖頭器と考えられる。ホルンフェルス製。２は黒曜石製の石鏃、３はチャート製の石錐である。４は二次加工のある剝片でチャート製。５・６は礫斧で、５はホルンフェルス製、６は角閃岩製である。７は上端および下端に二次加工が施されるため、礫器とした。細粒緑色凝灰岩製。８～ 10 はスタンプ形石器である。８・10 が砂岩、９が変質玄武岩製である。11 は砂岩製の敲石か。12 は多孔質安山岩製の砥石片である。13 は砂岩製の石皿の破片となるか。破断面に磨耗痕が認められるため、破損後にスタンプ形石器や磨石Ｃとして利用されたと考えられる。

**９トレンチ**（第 37 図）

遺跡東部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。トレンチ中央南部の広い範囲で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、東側にトレンチを拡張した。最終的な調査面積は約 157.0㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 24.4m、現地表面からの深さは 30 ～ 40cm であった。検出した遺構は住居跡５軒、土坑 45 基、ピット 66 基である。中央部で検出した 9T－001・002 住居跡は、まとまって出土した遺物から早期前葉と考えられ、遺構の輪郭も比較的明瞭であった。9T－005 住居跡は隅丸長方形、9T－006 住居跡は隅丸方形に近い形状になると考えられる。しかし遺構の輪郭は視認しにくく、トレンチを拡張できなかったため全体形状も把握できていない。005 住居跡からは 15 類が多く出土している。9T－003 住居跡は楕円形に近い形状となるものの、005・006 住居跡に比べて遺構の輪郭がやや明瞭であり、規模も比較的大きい。出土遺物から時期は早期前葉と考えらえる。9T－004 は規模と平面形態から大型の土坑と考えた。001・002 住居跡については第４節で詳細を記載する。

**出土遺物**

**土器**（第 70 ～ 72 図）

住居跡出土分も含めた縄文土器の出土点数は 1,214 点である。主体を占めるのはⅠ群 14 類であり、次いで 15 類の出土量が多い。このうち、第４節記載の 001・002 住居跡出土分を除いた中から 80 点を図示した。

１～ 74 はⅠ群土器である。１は５類、２・３は９類ａ種である。４～８は 11 類で、４・５は口縁部

が屈曲する。８も口唇部が欠損するが、屈曲する口縁部破片と考えられる。９～ 16 は 12 類である。９～ 13 はｂ種、14 ～ 16 はｃ種とした。17 ～ 36 は 13 類である。口唇部形態から、17 は円頭状のａ種、18 ～ 26 は角頭状のｂ種、27 ～ 36 は尖頭状のｃ種とした。37 ～ 53 は 14 類である。52 は底部直上の破片、53 は尖底の底部破片となる。54 ～ 73 は 15 類である。口唇部形態から、54 ～ 56 は円頭状のａ種、57 ～ 61 は角頭状のｂ種とした。62 ～ 73 は胴部破片のｄ種である。74 は小型土器で 17 類とした。

75 ～ 79 はⅣ群土器で、75 が１類で、そのほかは４類と考えられる。80 はⅥ群１類である。

**石器**（第 118・119 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 61 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から 17 点を図示した。１は楔形石器、２は石錐である。いずれもチャート製。３は黒曜石製の抉入石器である。４～６は黒曜石製の二次加工のある剥片である。７・８は微細剥離痕のある剥片。７は黒曜石製、８はチャート製である。９～ 12 は礫斧である。９は細粒緑色凝灰岩、10 は変質玄武岩、11 は角閃岩、12 はホルンフェルス製。11 は扁平礫の端部に研磨整形により刃部を作出する。13・14 はスタンプ形石器。13 は砂岩の棒状礫を素材とする。14 はアプライト製。15・16 は敲石である。15 は正裏面に顕著な凹痕を有する。15 は白雲母花崗岩、16 は砂岩の円礫を素材とする。17 は磨石Ａである。安山岩製。正裏面の一部に赤色の付着物が認められる。

**10 トレンチ**（第 38 図）

遺跡中央部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。トレンチ北部の広い範囲で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、東西にトレンチを拡張し、住居跡（10T－001）を確認した（６次調査）。８次調査では住居構造把握のため、10T－001 住居跡周辺を再拡張して調査を実施した。最終的な調査面積は 159.3㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 24.0m、現地表面からの深さは約 35cm であった。検出した遺構は住居跡８軒、土坑 86 基、ピット 163 基である。トレンチ南半部は遺構・遺物ともに少ない。拡張区で検出した６軒の住居跡のうち、10T－006 住居跡は取掛西Ⅸ期（奈良・平安時代）、10T－010 住居跡は取掛西Ⅶ期（中期後半）で、それ以外の 10T－001・004・005・007 は出土遺物から早期前葉の住居跡と考えられる。これらの住居跡については第４節・第６節で詳細を記載する。10T－002・003 はその周辺にくらべてピットや遺物がまとまっていることから早期前葉の住居跡と考えたが、トレンチを拡張できなかったため、全体の形状および規模を確認することができなかった。

**出土遺物**

**土器**（第 73 ～ 77 図）

住居跡出土分も含めた縄文土器の出土点数は 1,974 点で、Ⅰ群９・14 類の出土量が多い。このうち、第４節記載の 001・004・005・007 住居跡出土分を除いた中から 120 点を図示した。

１～ 104 はⅠ群土器である。１～６は１類である。４は頸部への施文が認められず、小径の補修孔が施される。６は胴部破片だが、密接した縄文が施文されることから１類と判断した。７～ 26 は４類である。13 は口縁部に凹線を施文後、絡条体圧痕文が施される。14 は胴部に縄文ＬＲが異方向施文される。24 ～ 26 は口縁部を欠損するが、凹線が認められるためここに分類した。27 ～ 41 は５類である。口縁部に縄側面圧痕文が施されるものが多いが、39 は絡条体圧痕文、40・41 は列点が施される。41 の列点は深さがほぼ一定のため、回転体による施文となる可能性がある。42 は９類ｄ種で、沈線により矢羽根状の文様が描かれる。43 ～ 51 は６類ａ種で、口唇部直下から撚糸文が施される。52 ～ 60 は８類である。60 は凹線状の工具調整が施されることから、ここに分類した。61 ～ 72 は９類である。撚糸文が施さ

れる 61 ～ 67 はａ種、縄文が施される 68 ～ 72 はｂ種とした。67 は小型土器となる可能性がある。73 は 10 類である。破片上部に押型文、下部に縄文ＬＲが異方向施文される。74 は 11 類の胴部破片である。75 ～ 83 は 12 類である。75 ～ 80 はｂ種、81 ～ 83 はｃ種とした。84 ～ 91 は 13 類である。口唇部形態から、84 ～ 87 は円頭状のａ種、88・89 は角頭状のｂ種、90・91 は尖頭状のｃ種とした。92 ～ 102 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。102 は尖底の底部破片である。103・104 は 15 類で、103 は円頭状のａ種、104 は胴部破片のｄ種とした。105・106 は土製円盤である。105 は９類ａ種を素材とする。

107 ～ 111 はⅢ群である。112 ～ 114 はⅣ群で、112 が１類、113・114 が４類と考えられる。112 の内面には貝殻条痕文が施される。115 ～ 118 はＶ群土器である。115 ～ 117 は２類とした。119 は時期不明である。120 はⅦ群土器と考えられる。

**石器**（第 120・121 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 976 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から 22 点を図示した。１～４は石鏃である。１はガラス質黒色安山岩、２・３はチャート、４は黒曜石を素材とする。５～８は楔形石器である。７は石英製で、それ以外はチャート製。９はチャート製の石錐である。10・11 は二次加工のある剥片であり、いずれもチャート製。12・13 は微細剥離痕のある砕片である。12 は黒曜石製、13 はチャート製。14 は微細剥離痕のある剥片でチャート製。15 は砂岩製の礫斧である。扁平礫を素材として、端部に研磨整形による刃部が作出される。16 は中粒緑色凝灰岩製のスタンプ形石器である。17 ～ 19 は敲石で、17 はチャート、18・19 は砂岩の礫を素材とする。17・19 は側面に敲打痕が認められる。20 は粗粒緑色凝灰岩製の磨石Ａ、21 は中粒緑色凝灰岩製の磨石である。

22 は石製品で、トレンチ周辺で表面採集された滑石製の垂飾である。

**11 トレンチ**（第 39・40 図）

遺跡中央部に位置する。南北方向に２× 45m の規模で設定した。トレンチ全体で約 20 ～ 25cm の厚さのⅡ層の堆積を確認した。Ⅱ層上面の標高は 23.8m である。Ⅱ層上面での遺構確認が困難だったため、Ⅱ層の約半分を保存し、それ以外をⅢ層上面まで精査し遺構と遺物の分布状況を確認した。多くの土坑・ピットをトレンチ全体で検出したが、遺物は北部に集中する状況であった。検出した遺構は住居跡３軒、土坑 41 基、ピット 90 基である。北端部で検出した 11T－001・002 は、その周辺にくらべてピットや遺物が集中することから早期前葉の住居跡と考えたが、調査期間の関係からトレンチを拡張できなかったため、全体の形状や規模を確認することができなかった。また、トレンチ西壁セクションでもⅡ層中で遺構の立ち上がりを土色から見分けることができなかった。11T－003 は北壁にカマドを有する古代の住居跡である。003 住居跡は第６節に詳細を記載する。

**出土遺物**

**土器**（第 78 ～ 84 図）

縄文土器は 965 点が出土し、135 点を図示した。出土量はⅠ群９・14 類が多く、４・５・13 類がそれに次ぐ。

１～ 121 はⅠ群土器である。１～５は１類。４・５は密接した縄文が施文されることから１類と判断した。６～９・26 は４類である。９は口縁部を欠損するが、破片上端部に凹線が認められるためここに分類した。10 ～ 23 は５類である。口縁部がくびれて、絡条体圧痕文が施されるものが目立つ。24 は列

点により文様が描かれる。９類ｅ種とした。25 は６類ａ種で、口唇部直下から撚糸文が施される。27 ～ 31 は８類である。31 は丁寧にミガキが施される。32 ～ 77・79 は９類である。撚糸文が施される 32 ～ 61 はａ種、縄文が施される 62 ～ 73 はｂ種とした。74 ～ 77 はｃ種で、74・75 は絡条体圧痕文、76・77 は縄側面圧痕文が胴部に施される。79 は軽しょうな胎土で横位に列点が施される。ｅ種とした。78 は 11 類の胴部破片である。80 ～ 83 は 12 類である。80 はａ種、81 はｂ種、82・83 はｃ種とした。84 ～ 95 は 13 類である。口唇部形態から、84 ～ 88 は円頭状のａ種、89 ～ 95 は角頭状のｂ種とした。96 ～ 118 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。118 は尖底の底部破片である。119 は 15 類で、胴部破片のｄ種である。120・121 は小型土器で 17 類とした。

122 はⅢ群である。123 ～ 129 はⅣ群で、123 ～ 126 が１類に併行すると考えられ、123 ～ 126 は同一個体となるか。127 は３類、128・129 が４類と考えられる。130 ～ 132・134 はⅤ群である。130・131 が１類、132 が２類、134 が３類と考えられる。133 はⅢ群土器に類似するが、繊維を含まないことから時期を明確にできなかった。135 はⅦ群である。

**石器**（第 122 ～ 124 図）

トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 53 点が出土し、このうち 16 点を図示した。１は石鏃、２は掻器、３は削器である。いずれもチャート製。４～６は楔形石器で、いずれもチャート製である。７・８は二次加工のある剥片である。７は黒曜石製、８はメノウ製。９～ 11 は微細剥離痕のある剥片である。いずれもチャート製。12 は石核となるか。頁岩製。13 は粗粒緑色凝灰岩の扁平礫を素材とした礫斧である。14・15 は敲石である。14 は流紋岩製、15 はホルンフェルス製。16 は砥石片である。砂岩製。

**12 トレンチ**（第 41・42 図）

遺跡中央部に位置する。南北方向に２× 60m の規模で設定した。トレンチ中央部の広い範囲で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、西側にトレンチを拡張した。最終的な調査面積は 369.2㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 23.6 ～ 23.8m、現地表面からの深さは約 40cm であった。検出した遺構は住居跡３軒、掘立柱建物跡１棟、土坑 90 基（縄文は 83 基、近世７基）、ピット 299 基（縄文は 181 基、近世 118 基）である。拡張区で検出した 12T－001・002 は、平面形態が隅丸方形を呈し、遺構の輪郭も比較的明瞭なことから住居跡とした。出土遺物から時期は早期前葉と考えられる。002 住居跡と重複する 12T－003 は、出土遺物から前期の住居跡と判断した。001 ～ 003 住居跡に関しては、第４節で詳細を記載する。トレンチ北部で検出した 12T－004 は出土遺物から近世の掘立柱建物跡と考えた。詳細は第６節に記載する。

**出土遺物**

**土器**（第 85 ～ 87 図）

住居跡出土分も含めた縄文土器の出土点数は 1,369 点である。出土量はⅠ群９・14 類が多く、４・５類がそれに次ぐ。このうち、第４節記載の 001 ～ 003 住居跡出土分を除いた中から 60 点を図示した。

１～ 39・41 ～ 44 はⅠ群土器である。１は１類である。胴部破片だが、密接した縄文が施文されることから１類と判断した。２・３は４類である。４～ 10 は５類である。８・９は口縁部が屈曲し、10 は口縁部への沈線施文後に絡条体圧痕文が施される。11 は２段の絡条体圧痕文が施される。12 ～ 15 は６類である。12・13 は口唇部直下から撚糸文が施されるａ種、14・15 は口唇部直下に横位の撚糸文が施されるｂ種とした。16 は７類である。口唇部は肥厚せず、無文の口縁部と撚糸文が施文される胴部の間に区画は認められない。17 ～ 19 は８類である。17 には焼成前に施された小穿孔が口縁部に並ぶ。20

～ 30 は９類である。

撚糸文が施される 20 ～ 26 はａ種、縄文が施される 28 ～ 30 はｂ種とした。26 は絡条体条痕文が縦位に施される。27 は胴部に絡条体圧痕文が矢羽根状に施される。ｃ種とした。31 は 10 類である。小破片のため不明瞭だが、右側に押型文、左側に縄文が施される。32 ～ 34 は 12 類である。32 はａ種、33・34 はｂ種とした。35・36 は 13 類である。口唇部形態から、35 は円頭状のａ種、36 は角頭状のｂ種とした。37 ～ 39 は無文の胴部破片で 14 類である。41 ～ 44 は小型土器で 17 類とした。41 は文様の特徴が５類と類似する。45・46 は土製円盤である。いずれも９類ａ種の土器片を素材とする。

47・48 はⅢ群である。49 ～ 53 はⅣ群で、49 が１類、50 ～ 53 が４類と考えられる。54 ～ 57 はⅤ群土器で、54・55 が１類、56 が２類と考えられる。58 ～ 60 はⅦ群土器。40 は時期不明とした。

**石器**（第 125 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片を含めて 25 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から１点を図示した。1 はホルンフェルス製の礫斧である。研磨整形された刃部は使用により破損する。

**13 トレンチ**（第 43 図）

遺跡西部に位置する。南北方向に２× 60m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面である。その標高は北部 21.9m、南部 23.6m であり、中央部付近から北部に向かって緩やかに傾斜する状況であった。現地表面からの深さは 40 ～ 70cm である。全体的に遺構・遺物が乏しく、検出できた遺構は土坑１基、ピット 31 基である。トレンチ北端部でⅡ層の堆積が認められたため、その状況を確認することを目的としてトレンチの拡張を行い、サブトレンチを設定した。その結果、Ⅱ層が約 20cm の厚さで堆積し、台地北縁部に向かって地山が緩やかに傾斜していることがわかった。

**出土遺物**

**土器**（第 88 図）

縄文土器の出土点数は 28 点と少なく、５点を図示した。１～４はⅤ群土器である。１は２類、３・４は３類と考えられる。５は土製の玦状耳飾りである。２～３類に伴うものか。

**石器**（第 125 図）

トレンチ全体で剥片を含めて３点が出土し、このうち１点を図示した。１は黒曜石製の石鏃である。

**14 トレンチ**（第 44 図）

遺跡西部に位置する。南北方向に２× 60m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 23.6 ～ 23.7m、現地表面からの深さは約 40cm であった。検出した遺構は土坑 50 基、ピット 248 基である。トレンチ南部で土坑とピットが集中する状況が認められたため、住居跡が存在する可能性を考慮しトレンチの拡張を行ったが、ピットの集中する範囲を明確にできなかったため住居跡を確認できなかった。

**出土遺物**

耕作土中からの出土遺物は比較的多いが、点上げできた遺物は少ない。

**土器**（第 89・90 図）

トレンチ全体で出土した縄文土器の点数は 213 点であり、39 点を図示した。Ⅰ群９類・14 類が多い。

１～ 31 はⅠ群土器である。１は１類である。胴部破片だが、密接した縄文が施文されることから、ここに分類した。２は口唇部が肥厚することから３類とした。新段階にあたると考えられる。３～８は４類である。８は口縁部を欠損するが、くびれが認められるためここに分類した。９～ 12 は５類である。９・

11 は口縁部が屈曲し、縄側面圧痕文が施される。13 ～ 26 は９類である。13 は胴部に縦位の沈線が施されることから、９類ｄ種となるか。撚糸文が施される 14 ～ 23 はａ種、縄文が施される 24 ～ 26 はｂ種とした。21・22 は胎土に石英・長石の細角礫を多く含む。27 は 10 類である。28 ～ 31 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。31 は尖底の底部破片である。

32・33 はⅣ群４類である。34 ～ 39 はＶ群土器である。34 ～ 38 は２類、39 は３類と考えられる。

**石器**（第 125 図）

トレンチ全体で剥片を含めて５点が出土し、このうち２点を図示した。１は石鏃未成品である。黒曜石製。２はチャート製の石核である。

**15 トレンチ**（第 45 図）

遺跡西部に位置する。南北方向に２× 60m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面である。その標高は北部 21.7m、南部 23.4m であり、中央部付近から北部に向かって緩やかに傾斜する。現地表面からの深さは 40 ～ 80cm である。北端部では東に隣接する 13T から続くと考えられるⅡ層の堆積を確認している。全体的に遺構・遺物が乏しいが、トレンチ南端部で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、東西にトレンチを拡張した。最終的な調査面積は 188.5㎡である。検出した遺構は住居跡１軒、土坑８基、ピット 69 基である。拡張区で検出した 15T－001 住居跡は、遺構の輪郭が視認しにくいが、平面形態が隅丸方形と考えられる。しかし、農道の関係から南側へのトレンチ拡張が困難だったため、全体の形状と規模を把握することができなかった。出土遺物は少ないが、遺構の時期は早期前葉と考えられる。

トレンチ南部の西壁際で検出した 15T－002 は円形の土坑である。覆土の特徴から縄文時代のものと考えられるが、出土遺物がないため詳しい時期は不明である。002 土坑については第４節に詳細を記載する。

**出土遺物**

**土器**（第 90 図）

縄文土器の出土点数は９点と極めて少なく、１点を図示した。１はⅥ群１類である。中期初頭に併行する土器群と考えられる。

**石器**　トレンチ全体で２点が出土したが、図示はしていない。

**16 トレンチ**（第 46 図）

遺跡西部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。トレンチ南部の広い範囲で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、東西にトレンチを拡張した。最終的な調査面積は 250.7㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 23.4m、現地表面からの深さは約 40cm であった。検出した遺構は住居跡３軒、土坑 55 基、ピット 170 基である。遺構は南部の拡張区での検出数が多く、北部では少ない。出土遺物もこれと同様の分布状況を示している。

拡張区で検出した 16T－001 住居跡は、平面形態が隅丸方形を呈し、遺構の輪郭も比較的明瞭である。出土遺物から時期は早期前葉と考えられる。001 住居跡は第４節で詳細を記載する。16T－002・004 住居跡は多くの土坑・ピットと重複するため遺構の輪郭を確認することが困難だったが、方形に近い平面形態を呈すると考えられる。出土した遺物から時期は 001 住居跡と同様に早期前葉と考えられる。しかし、耕作物などの関係から南側への拡張が困難だったため、その全体形状と規模を把握することはできなかった。16T－003 は円形を呈する大型の土坑である。覆土の特徴と出土遺物から、時期は早期前葉と考えられる。003 土坑と重複する 16T－005 は弥生時代の土坑である。005 土坑の詳細は第５節に記載した。

**出土遺物**

**土器**（第 90・91 図）

住居跡出土分も含めた縄文土器の出土点数は 457 点で、Ⅰ群９・14 類が多い。このうち、第４節記載の 16T－001 住居跡出土分、第５節記載の 005 土坑出土分を除いた中から 37 点を図示した。

１～ 28 はⅠ群土器である。１は４類、２～８は５類である。２は口縁部が屈曲する。７・８は口縁部を欠損するが、縄側面圧痕文が認められるためここに分類した。９は７類である。口唇部は肥厚せず、無文の口縁部と撚糸文が施文される胴部の間に区画は認められない。10 ～ 22 は９類である。撚糸文が施される 10 ～ 16 はａ種、縄文が施される 17 ～ 22 はｂ種とした。16 は胎土に石英・長石の細角礫を多量に含む。20･21 は縄文が異方向施文される。23 ～ 27 は無文の胴部破片で 14 類である。28 は 15 類で、口唇部が角頭状となるｂ種である。

29 ～ 33 はⅣ群４類である。34 ～ 37 はⅤ群土器で､34 ～ 36 は２類とした。37 は類別できなかった。

**石器**（第 126 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 13 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から５点を図示した。１は石鏃、２は楔形石器である。いずれもチャート製。３は基部を欠損する三角錐形石器である。石英斑岩製。４は砂岩製の敲石である。５は砥石で、板状の褐鉄鉱砂岩を素材とする。

**17 トレンチ**（第 47 図）

遺跡西部に位置する。南北方向に２× 40m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面である。その標高は北部 22.9m、南部 23.3m であり、北部がやや低い状況であった。現地表面からの深さは 30 ～ 50cm である。全体的に遺構・遺物が少ないが、中央部で土坑を検出したため、全体形状を把握することを目的としてトレンチを西側に拡張している。検出した遺構は土坑 13 基、ピット 74 基である。

トレンチ中央部で検出した 17T－001 は隅丸長方形の土坑である。001 土坑については第４節に詳細を記載する。

**出土遺物**

**土器**　縄文土器は２点出土したが、図示はしなかった。Ⅰ群土器は出土していない。

**石器**　礫類・小礫は 10 点認められたが、石器は出土しなかった。

**18 トレンチ**（第 48 図）

遺跡西部に位置する。分布調査で確認した貝散布地点を狙い、東西方向に２× ６m の規模で設定した。トレンチ中央部で貝層を伴う住居跡（18T－001）を検出したため、住居跡全体を検出するまでトレンチの拡張を行った。また、その過程でトレンチ北部に暗褐色土の広がりを確認したため、さらに北側に拡張している。最終的な調査面積は 102.4㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 23.3m、現地表面からの深さは約 40cm であった。トレンチャーによる南北方向の耕作痕がトレンチ全体で確認されている。検出した遺構は住居跡２軒、土坑 34 基、ピット 58 基であった。

貝層を伴う 18T－001 住居跡は出土遺物から縄文時代前期の住居跡と考えられる。詳細は第４節に記載する。18T－002 住居跡は平面形態が隅丸方形と考えられる。他の早期前葉の住居跡と覆土が類似するため早期前葉と判断した。しかし、調査期間の関係から東側へのトレンチ拡張が困難だったため、全体の形状と規模を把握することができなかった。

**出土遺物**

**土器**（第 92 図）

住居跡出土分も含めた土器の出土点数は 256 点で、Ⅳ群土器が主体を占める。前期前半の土器を除くと、Ⅰ群９類の出土が目立つ。 第４節記載の 18T－001 住居跡出土分を除いた中から 16 点を図示した。

１～ 13 はⅠ群土器である。１・２は４類、３～６は５類である。４は口縁部が屈曲する。７～９は９類である。撚糸文が施される７・８はａ種、縄文が施される９はｂ種とした。10 は 12 類ｃ種である。11 ～ 13 は 13 類である。11 は円頭状のａ種、12 は角頭状のｂ種、13 は尖頭状のｃ種とした。14 は土製円盤である。

15 はⅢ群、16 はⅣ群土器である。16 は３類あるいは４類の底部と考えられる。

**石器**（第 127 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片を含めて 11 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から１点を図示した。１は砂岩製の磨石Ａである。

**19 トレンチ**（第 49 図）

遺跡西部に位置する。分布調査で確認した貝散布地点を狙って、南北方向に２×60m の規模で設定した。トレンチ中央部で想定どおり貝層を伴う住居跡（19T－001）を検出したため、東側にトレンチを拡張している。また南端部でも、暗褐色土の広がりを確認したため、さらに南側および東側へ拡張を行った。最終的な調査面積は 236.0㎡である。遺構確認面はⅢ層上面でほぼ平坦であり、標高は 23.3m、現地表面からの深さは約 40cm であった。18T と同様にトレンチャーによる南北方向の耕作痕がトレンチ全体で確認されている。検出した遺構は住居跡３軒、土坑 42 基、ピット 160 基であった。

トレンチ中央部で検出した 19T－001 住居跡は出土遺物から縄文時代前期と考えられる。19T－002・003 住居跡は平面形態が隅丸方形と考えられる。出土遺物から時期は早期前葉と考えられる。001 ～ 003 住居跡の詳細は第４節に記載する。

また、南端部では東西に延びる近世の溝跡を検出している。002・003 住居跡の状況を確認するため全体を精査したところ、焼塩壺などの近世遺物が出土した。

**出土遺物**

**土器**（第 93 図）

住居跡出土分も含めた土器の出土点数は 101 点で、Ⅳ群土器が主体を占める。前期前半の土器を除くと、Ⅰ群９・14 類の出土が目立つ。第４節記載の 19T－001 ～ 003 住居跡出土分を除いた中から 15 点を図示した。

１～６はⅠ群土器である。１は口唇部がやや外削ぎ状でミガキが施される。３類の新段階と判断した。２は４類、３は５類である。４は胴部破片で撚糸文が縦位施文される。９類ａ種である。５・６は無文の胴部破片で 14 類である。

７はⅢ群、８～ 12 はⅣ群４類、13・14 はⅤ群３類、15 はⅦ群土器である。

**石器**（第 128・129 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 17 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から２点を図示した。１は石核１点と剥片３点の接合資料である。ガラス質黒色安山岩製。２は石英斑岩製の敲石である。

**20 トレンチ**（第 50 図）

遺跡西部に位置する。南北方向に 2 × 60m の規模で設定した。遺構確認面はⅢ層上面でほぼ平坦であり、標高は 23.2m、現地表面からの深さは 50 ～ 60cm であった。18T・19T と同様にトレンチャーによる南北方向の耕作痕がトレンチ全体で確認されている。全体的に遺構・遺物が少ないが、北端部で暗褐色土の広がりを確認したため、西側へトレンチを拡張した。検出した遺構は住居跡 1 軒、土坑 19 基、ピット 60 基である。

北端部の拡張区で検出した 20T－001 住居跡は、平面形態が隅丸方形を呈すると考えられる。しかし、農道の関係から北側や西側へのトレンチ拡張が困難だったため、全体の形状と規模を把握することはできなかった。また、遺構の輪郭が視認しにくく、遺物も出土していない。覆土の特徴がほかの早期住居跡と似ることから、時期は早期前葉と考えられる。

北端部で検出した 20T－003 は隅丸長方形の土坑である。出土した遺物から時期は前期と考えられる。南端部で検出した 20T－004 は炉跡である。東側を攪乱に壊される。時期を確定させるため攪乱を利用し半截したが、遺物が出土しなかったため時期は不明である。住居跡が存在する可能性を考慮し、慎重に周辺の遺構確認を行ったが、主柱穴となるようなピットや周溝は認められなかった。003 土坑・004 炉跡については第 4 節第 3 項に詳細を記載する。20T－002 は欠番とした。

**出土遺物**

**土器**（第 94 図）

出土点数は 14 点と極めて少なく、 4 点を図示した。 1 はⅤ群土器で類別はできなかった。 2 ～ 4 はⅥ群 1 類である。中期初頭に併行する土器群と考えられる。

**石器**（第 129 図）

トレンチ全体で 2 点が出土し、このうち 1 点を図示した。 1 は砂岩製の礫器である。棒状礫の破断面に二次加工が認められたため礫器とした。

**21 トレンチ**（第 51 図）

遺跡西端部に位置する。南北方向に 2 × 30m の規模でトレンチを設定した。遺構確認面はⅢ層上面である。その標高は北部 21.8m、南部 22.3m であり、北部がやや低い状況であった。現地表面からの深さは 30 ～ 40cm である。検出した遺構は土坑 1 基、ピット 11 基のみであり、出土した遺物もわずかである。

**出土遺物**

**土器**　出土した縄文土器は 6 点と極めて少なく、図示はしなかった。 I 群土器の出土は 1 点のみである。

**石器**　礫が 1 点認められたが、石器は出土しなかった。

**22 トレンチ**（第 52 図）

遺跡西端部に位置する。南北方向に 2 × 30m の規模で設定した。トレンチ北部～中央部の広い範囲で住居跡と考えられる遺構の覆土を確認したため、トレンチの拡張を行っている。最終的な調査面積は 137.4㎡である。遺構確認面はⅢ層上面である。その標高は北部 22.4m、南部 22.6m であり、北部がやや低い状況であった。現地表面からの深さは 40 ～ 60cm である。検出した遺構は住居跡 6 軒、土坑 16 基、ピット 44 基である。検出した住居跡（22T－001 ～ 005・008）・土坑（22T－006・009）は全て弥生時代のものと考えられ、これらの遺構については第 5 節に詳細を記載する。

**出土遺物**

出土遺物は弥生時代のものが大半であり、これらについては第５節に記載した。縄文時代の遺物はわずかであり、図示した遺物は少ない。

**土器**　出土した縄文土器は６点と極めて少なく、図示はしなかった。Ⅰ群土器の出土は１点のみである。

**石器**（第 129 図）

トレンチ全体で９点が出土したが、そのうち６点は軽石製品である。１点を図示した。１は微細剝離痕のある剝片である。黒曜石製。

**23 トレンチ**（第 53・54 図）

調査区東部、５次調査地点の北西側に位置する。南北方向に２× 55m の規模で設定した。トレンチ北部の広い範囲で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、西側にトレンチを拡張した。最終的な調査面積は 286.4㎡である。遺構確認面はⅢ層上面で標高は 24.8 ～ 25.4m で北部が低い。現地表面からの深さは約 50cm であった。検出した遺構は住居跡５軒、土坑 80 基、ピット 73 基である。遺構はトレンチ全体で確認されたが、北端部ではやや密度が低い。

拡張区で検出した 23T－001 ～ 003 住居跡は、遺構の輪郭がやや不明瞭だったが、平面形態が隅丸方形を呈し、遺物もまとまって出土している。出土した遺物の時期から早期前葉の住居跡と考えられる。トレンチ南部で検出した 23T－004 住居跡は遺構の輪郭が比較的明瞭であり、平面形態が隅丸方形を呈する可能性が高い。出土遺物から 001 ～ 003 住居跡と同様に早期前葉の住居跡と考えられる。001 ～ 004 住居跡については第４節で詳細を記載する。

トレンチ南端部で検出した 23T－005 住居跡は遺構の輪郭が比較的明瞭であり、設定したサブトレンチで壁の立ち上がりを確認できた。しかし、調査期間の関係からトレンチを拡張できなかったため、平面形態と規模を確認することができなかった。

001 住居跡と 003 住居跡の間で検出した 23T－006・007 は円形を呈すると考えられる土坑である。出土遺物から住居跡と同様に早期前葉のものと考えられる。詳細は第４節に記載した。

**出土遺物**

**土器**（第 95 ～ 103 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で 1,281 点が出土した。このうち、第４節記載の 001 ～ 004 住居跡出土分を除いた中から 192 点を図示した。第４節記載分を除くとⅠ群 15 類が最も多く、次いでⅠ群 14 類、Ⅳ群土器が続く。

１～ 150 はⅠ群土器である。１～７は 11 類である。１・２は口縁部破片で、口縁部は直立すると考えられる。８・９は 12 類である。８はｂ種、９はｃ種とした。10 ～ 30 は 13 類である。口唇部形態から、10 ～ 17 は円頭状のａ種、18 ～ 22 は角頭状のｂ種、23 ～ 30 は尖頭状のｃ種とした。31 ～ 48 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。45・46 は尖底を呈すると考えられる。47 は小平底か。48 は平底の底部破片である。49 ～ 144 は 15 類である。口唇部形態から、49 ～ 68 は円頭状のａ種、69 ～ 95 は角頭状のｂ種、96 ～ 98 は尖頭状のｃ種とした。13 類に比べ口唇部が尖頭状を呈するものは少ない。99 ～ 144 は胴部～底部破片のｄ種である。99 や 102 などのようにケズリ整形後ナデやミガキによる調整を施されるものは少ない。136 ～ 144 は底部破片である。145・146 は小型土器で 17 類としたが、胎土は 15 類と類似する。147 ～ 150 は 16 類である。147 は細沈線により口縁部を横位に区画し、区画内に細沈線による鋸歯状文を施す。148 は横位区画をせずに鋸歯状文が施される。150 は鋸歯状文の間に

刺突文を加える。151・152 は土製円盤である。

153 はⅢ群、154 ～ 178 はⅣ群である。154・155 は 1 類、156 ～ 174 は 3 類、176 ～ 178 は 4 類とした。179 ～ 190 はＶ群土器である。179・180 は 1 類、181 ～ 185 は 2 類と考えられるが、他は類別できなかった。191・192 はⅦ群土器である。

**石器**（第 129・130 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 62 点が出土した。このうち、第 4 節記載分を除いた中から 9 点を図示した。1 は風化の異なる調整により断定できないが、ナイフ形石器であった可能性がある。硬質頁岩製。2 はチャート製の楔形石器、3 は黒曜石製の抉入石器である。4 ・ 5 は礫斧である。4 は変質安山岩製、5 は細粒緑色凝灰岩製。4 は刃部欠損後、破断面をスタンプ形石器として利用したと考えられる。6 ～ 9 は磨石Ａである。6 は流紋岩、7 はアプライト、8 ・ 9 は石英斑岩の礫を素材とする。7 ～ 9 は欠損後、下部破断面をスタンプ形石器として利用したと考えられる。

**24 トレンチ**（第 55 図）

調査区中央部、9Ｔの西側に位置する。南北方向に 2 × 45m の規模で設定した。トレンチ北部の広い範囲で遺構覆土と考えられる暗褐色土を確認したため、西側にトレンチを拡張した。最終的な調査面積は約 229.8㎡である。遺構確認面はⅢ層上面でほぼ平坦であり、標高は 24.1m である。現地表面からの深さは約 45cm であった。検出した遺構は住居跡 4 軒、土坑 37 基、ピット 111 基である。遺構分布をみると北部にくらべ南部では密度が低い。

拡張区で検出した 24T－001 住居跡は平面形態が隅丸方形を呈し、遺物もまとまって出土している。24T－002 住居跡は全体形状を把握できなかったが、遺構の輪郭は比較的明瞭であり遺物も少量出土した。24T－003 住居跡は遺構の輪郭がやや視認しにくく全体形状も確認できなかったが、サブトレンチでは壁の立ち上がりと平坦な底面を検出した。出土した遺物から、いずれの住居跡も早期前葉と考えられる。24T－004 は前期の住居跡である。003 住居跡と連続するサブトレンチ内で炉跡も検出している。001 ～ 004 住居跡については第 4 節に詳細を記載する。このほか、001 住居跡の南で、1.0 × 0.8m の硬化範囲を検出した。主柱穴や周溝などが確認できなかったため住居跡とはしなかったが、周辺に前期の住居跡が存在した可能性がある。

**出土遺物**

**土器**（第 104・105 図）

トレンチ全体の土器の出土点数は 779 点である。出土量はⅠ群 14 類が多く、Ⅳ群やⅠ群 9 類がこれに次ぐ。第 4 節記載の 001 ～ 004 住居跡出土分を除いた中から 40 点を図示した。

1 ～ 35 はⅠ群土器である。1 は 1 類である。胴部破片だが、密接した縄文が施文されることから、ここに分類した。2 は 4 類、3 ～ 9 は 5 類である。4 は口縁部が屈曲する。5 は口縁部に横位の撚糸文が施される。6 類ｂ種に類似するが、口縁部下端に 2 段の縄側面圧痕文が施されることからここに分類した。10 は 6 類ａ種、11 は 7 類である。12 ～ 14 は 8 類、15 は 9 類ａ種で撚糸文が縦位に施される。16・17 は 11 類の胴部破片で、不明瞭だが撚糸文が横位に施される。18 ～ 20 は 12 類ｃ種である。21 ～ 26 は 13 類である。口唇部形態から、21・22 は円頭状のａ種、23 は角頭状のｂ種、24 ～ 26 は尖頭状のｃ種とした。27 ～ 32 は無文　の胴部破片で 14 類である。33 ～ 35 は 15 類で、35 は底部破片である。

36 ～ 39 はⅣ群で、36 は 3 類、37 は 3 ～ 4 類、38・39 は 4 類である。40 は不明土製品である。

**石器**（第 131・132 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 666 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から９点を図示した。１は石鏃、２～５は楔形石器、６は抉入石器である。４は黄色碧玉製で、ほかはチャート製。７は中粒緑色凝灰岩の礫斧である。８は基部を欠損する三角錐形石器である。砂岩製。９は安山岩製の磨石Ｂである。破損後に下部破断面をスタンプ形石器として利用したと考えられる。

**25 トレンチ**（第 56 図）

調査区南部に位置する。台地南部での遺構分布を確認することを目的として、東西方向に２× 30m、南北方向に２× 10m のＬ字状のトレンチを設定した。トレンチ西端部で土坑を確認したため、トレンチの一部を拡張している。最終的な調査面積は 94.3㎡である。遺構確認面はⅢ層である。その標高は西部 24.0m、東部 23.3m であり、東部は耕作により削平され低くなっており、一部でハードローム層を確認している。現地表面からの深さは 30 ～ 50cm である。また、台地南縁部の旧地形を把握するため、縁辺部に沿って１× １ｍの試掘坑を３基設定した。その結果、試掘坑Ａで標高 23.2m、試掘坑Ｂで 22.7m、試掘坑Ｃで 22.9m の深さで耕作土層下にハードローム層を確認した。トレンチ全体から検出された遺構は土坑２基、ピット 27 基である。遺構数は少ないものの、西端部で検出した 25T－001 は隅丸方形を呈し、出土した遺物から早期前葉の土坑と判断した。25T－002 は 001 土坑と重複する陥穴である。覆土中からは第 106・107 図７～９や 22 のようなⅠ群土器の大型破片が出土しているが、これは 001 土坑から 002 土坑へと落ち込んだ遺物と考えられる。002 土坑は出土土器から、早期後葉～前期前半の陥穴と考えられる。また、001 土坑の下から、003 土坑を検出している。直径 80cm 程の円形を呈し、覆土にはロームブロックを多量に含む。001・002 土坑についての詳細は第４節に記載する。

**出土遺物**

**土器**（第 106・107 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で 178 点が出土した。このうち、第４節記載の 001・002 土坑出土分を除いた中から 32 点を図示したが、Ⅰ群土器の多くは早期後葉～前期前半と考えられる 002 土坑（主に覆土上層）で出土したものである（第 106・107 図１～ 10・12 ～ 14・16 ～ 20・22 ～ 30・32）。

１～ 32 はⅠ群土器である。１・２は４類、３は８類と考えられる。４・５は 11 類の胴部破片で、撚糸文Ｒが横位に施される。６～ 16 は 12 類である。６はａ種、７～ 14 はｂ種、15・16 はｃ種とした。17 ～ 22 は 13 類である。口唇部形態から、17・18 は円頭状のａ種、19 ～ 21 は角頭状のｂ種、22 は尖頭状のｃ種とした。23 ～ 28 は無文の胴部破片で 14 類である。29 ～ 31 は 15 類である。口唇部形態から、29 は円頭状のａ種、30・31 は角頭状のｂ種とした。32 は小型土器で、17 類である。

**石器**（第 132 図）

遺構出土分も含め、トレンチ全体で剥片・砕片を含めて 142 点が出土した。このうち、第４節記載分を除いた中から１点を図示した。１はチャート製の石鏃である。

**26 トレンチ**（第 57 図）

調査区中央部に位置する。10T と 25T の間の旧地形の状況を確認するため、南北方向に２× 15m のトレンチを設定した。遺構確認面はⅢ層上面でほぼ平坦であり、標高は 24.1m、現地表面からの深さは 25 ～ 45cm で南部が深い状況であった。検出した遺構は住居跡１軒、土坑９基、ピット 21 基である。

遺構数は少ないものの、北端部で検出した 26T－001 住居跡は覆土がやや暗い暗褐色土であり、サブ

トレンチでは床面を検出した。しかし、住居跡の南壁は攪乱に壊されるため確認できず、全体形状も不明である。覆土中からは第 108 図３～５などが出土していることから時期は早期前葉と考えられる。また、南端部では東西に延びる近世の溝跡を検出している。

**出土遺物**

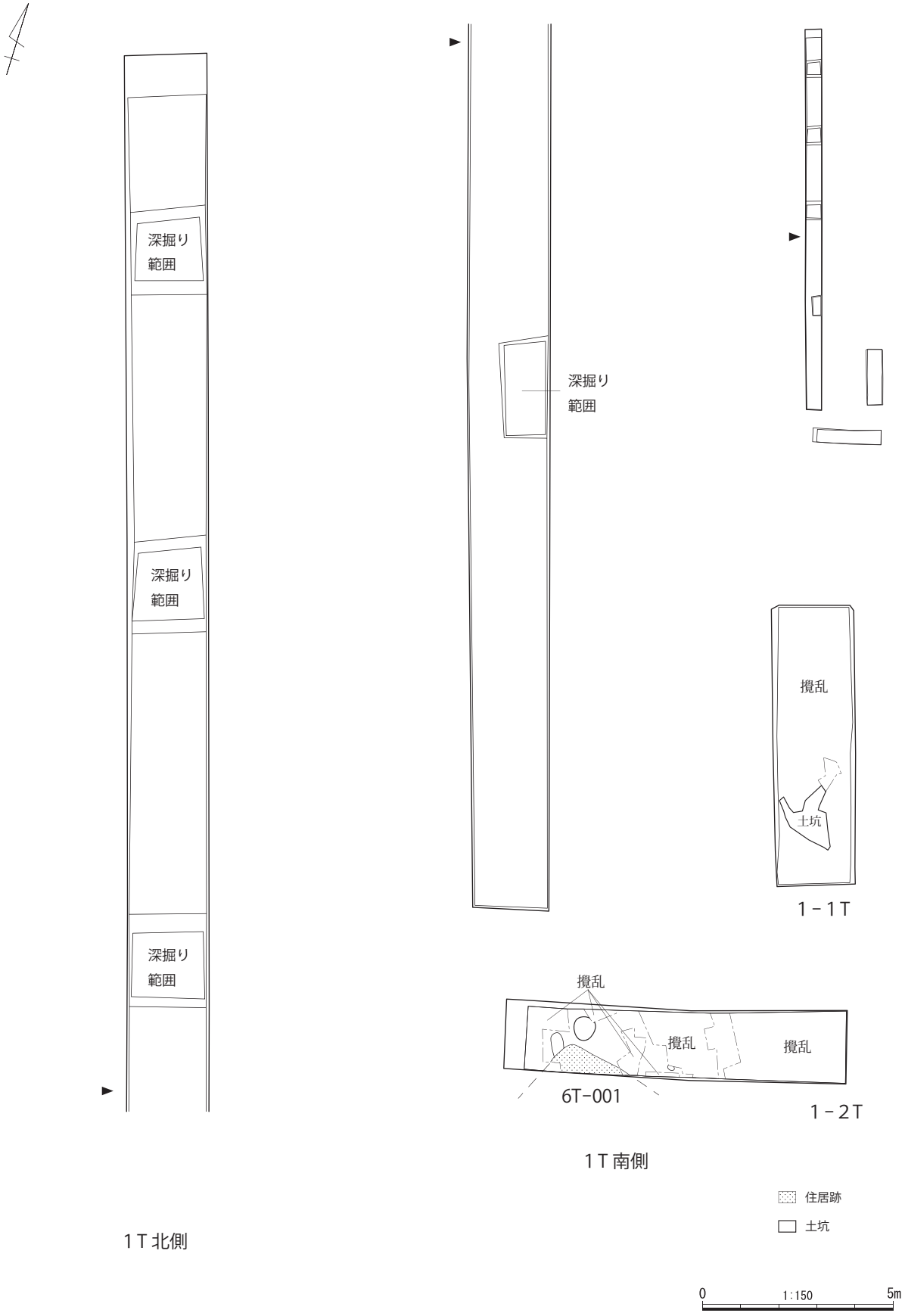
**土器**（第 108 図）

トレンチ全体で 20 点が出土し、このうち６点を図示した。

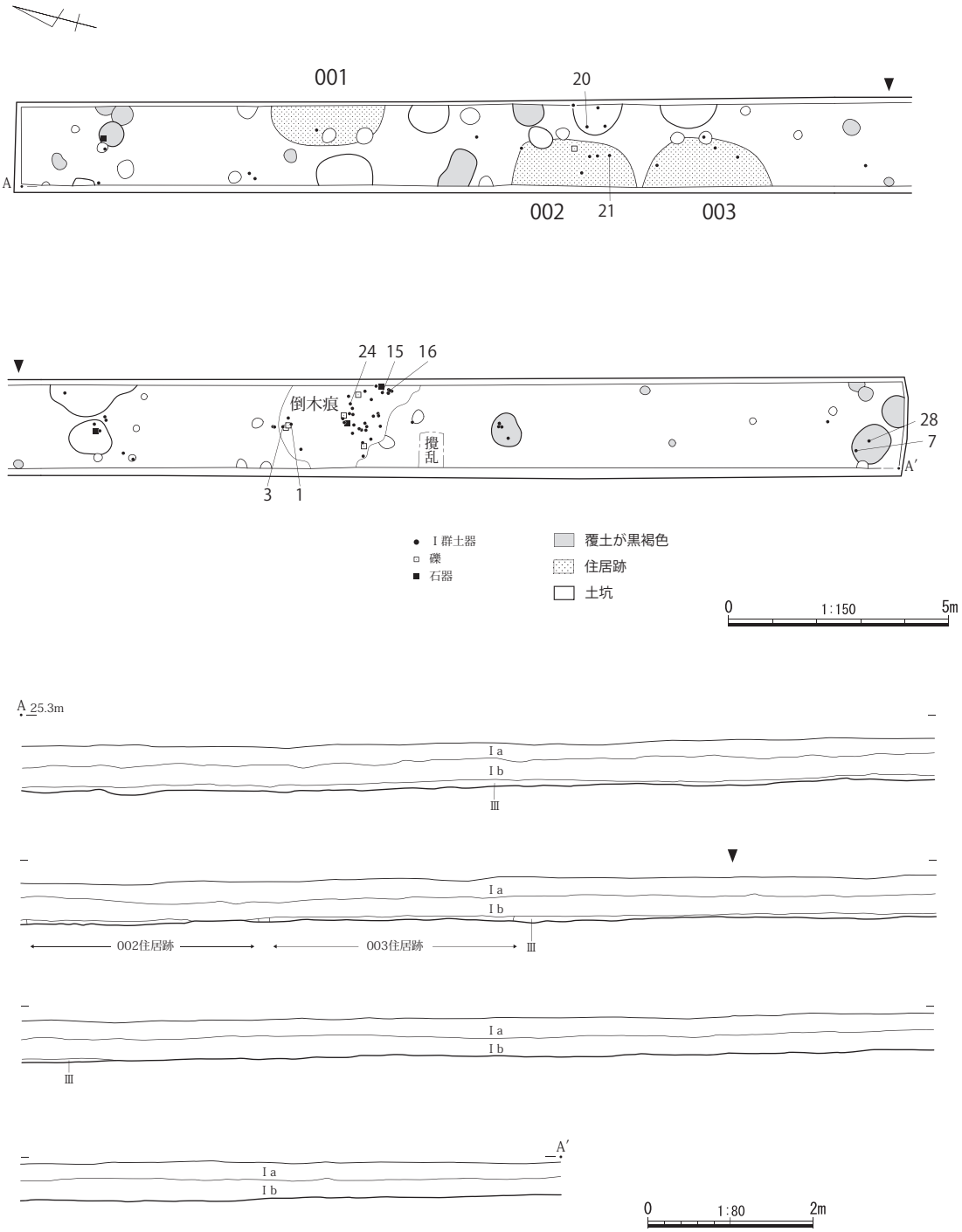
１～４はⅠ群土器である。１は４類、２は８類である。３・４は胴部破片で、３が９類ａ種、４が 14 類である。５・６は土製円盤である。いずれも９類ａ種を素材とする。

**石器**（第 132 図）

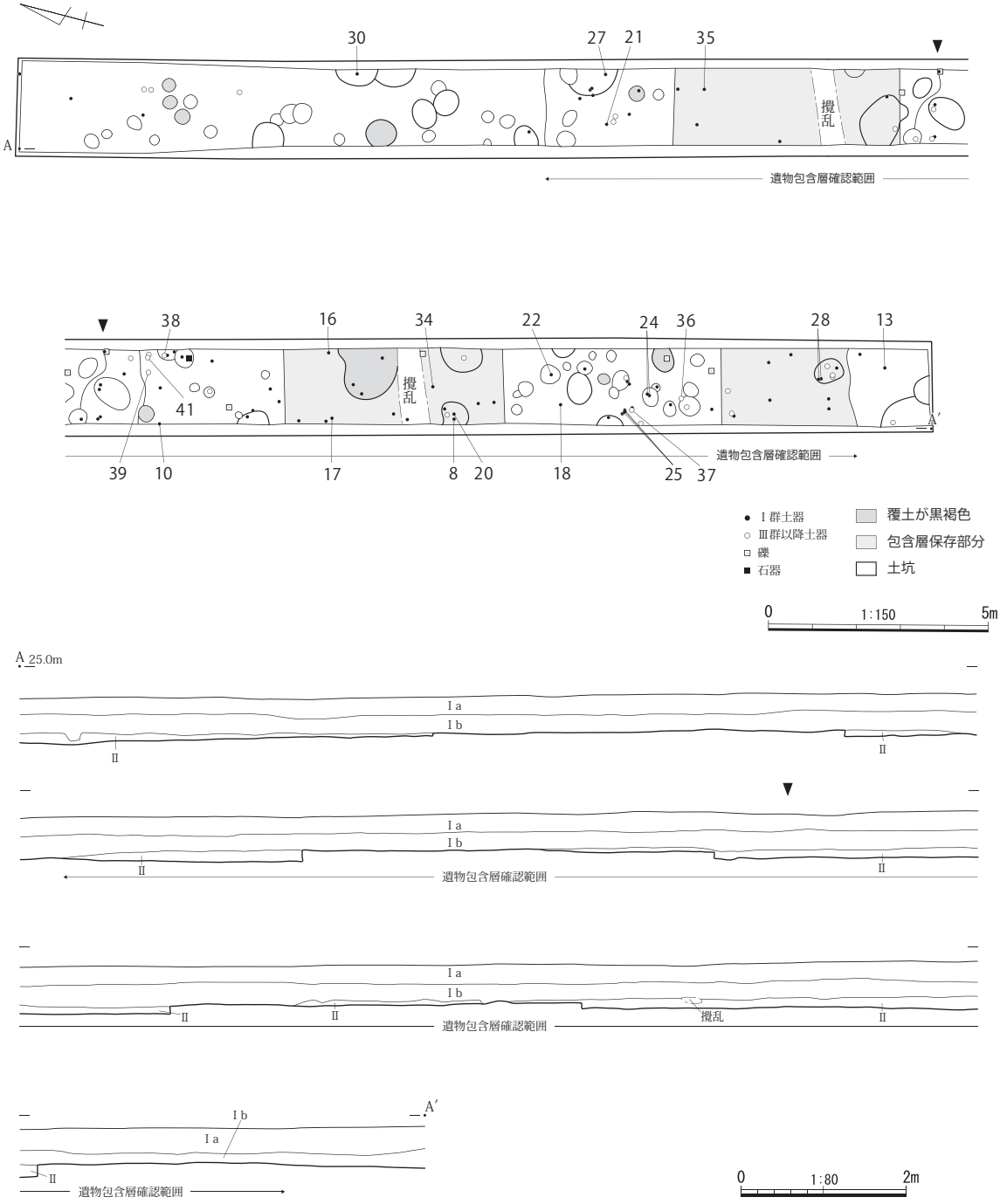
トレンチ全体で砕片を含めて 20 点が出土したが、このうち 18 点は 001 住居跡の覆土を水洗選別した際に検出されたものである。砕片を除いた２点を図示した。１はチャート製の石鏃である。001 住居跡から出土した。２は細粒緑色凝灰岩製の礫斧である。



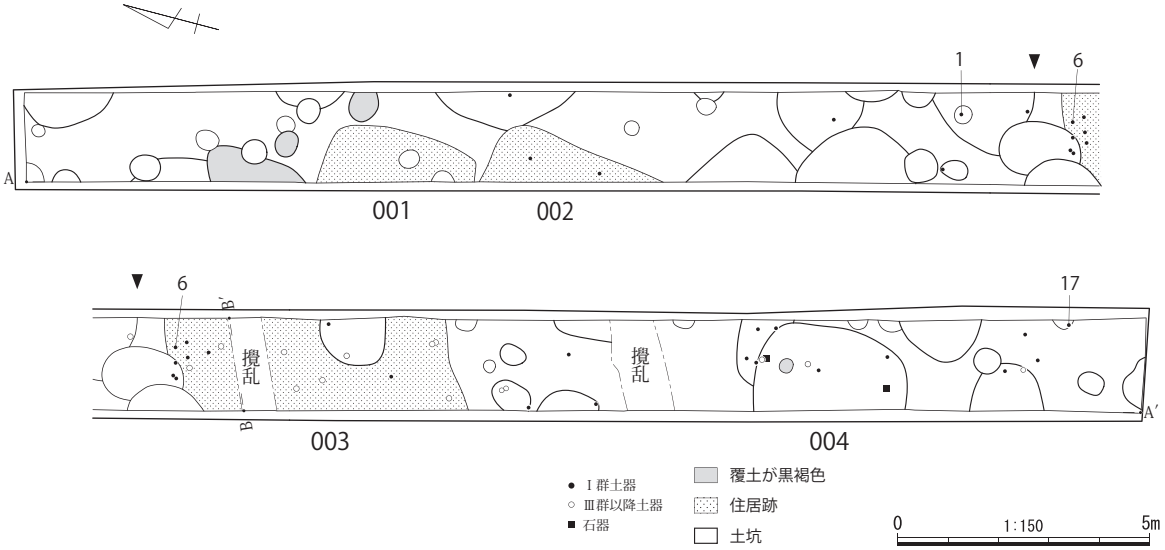

第 29 図　1Ｔ遺構配置図

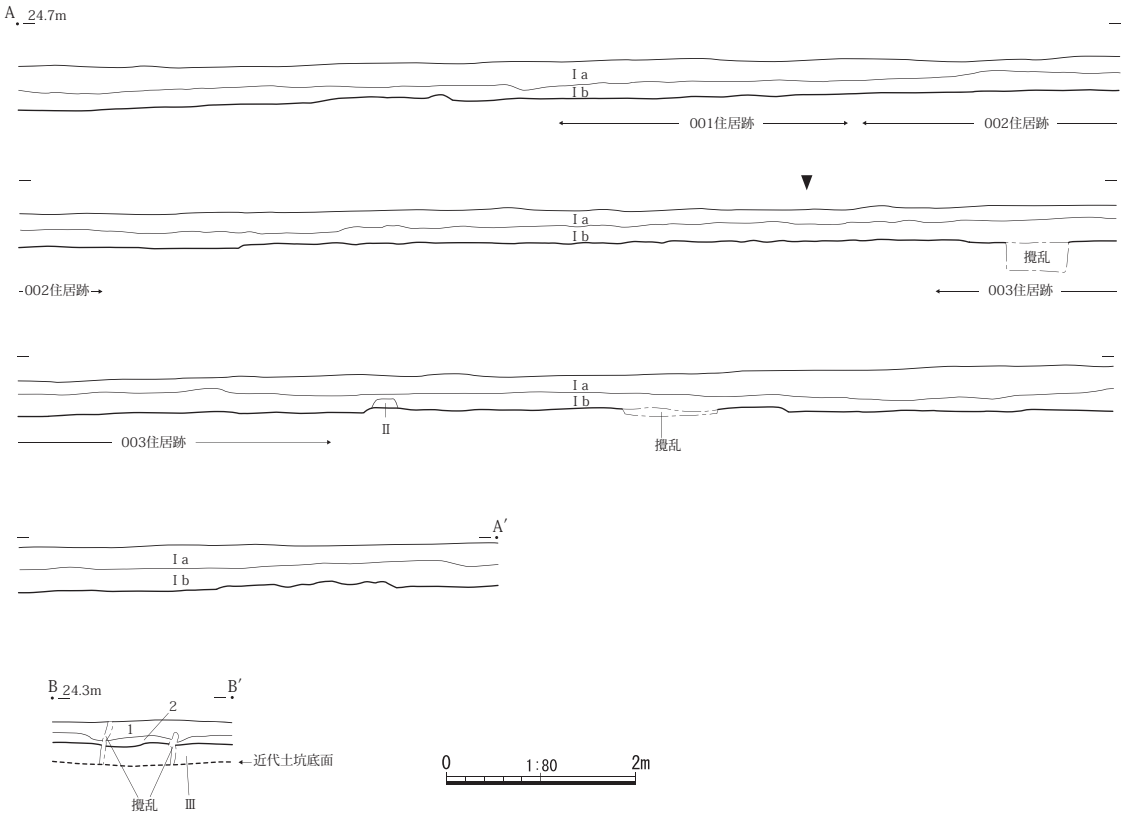



第 30 図　2Ｔ遺構配置図




第 31 図　３T 遺構配置図



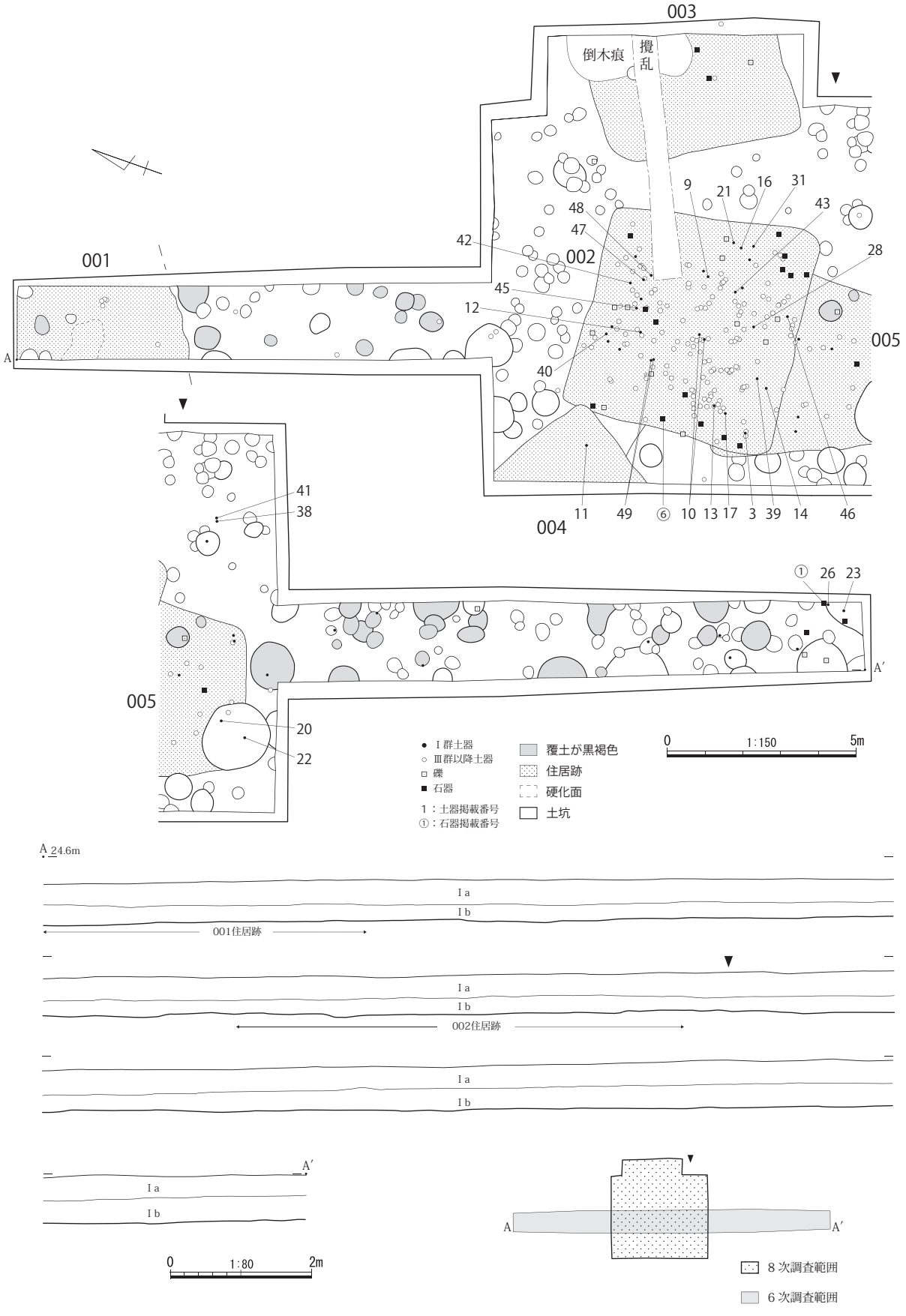





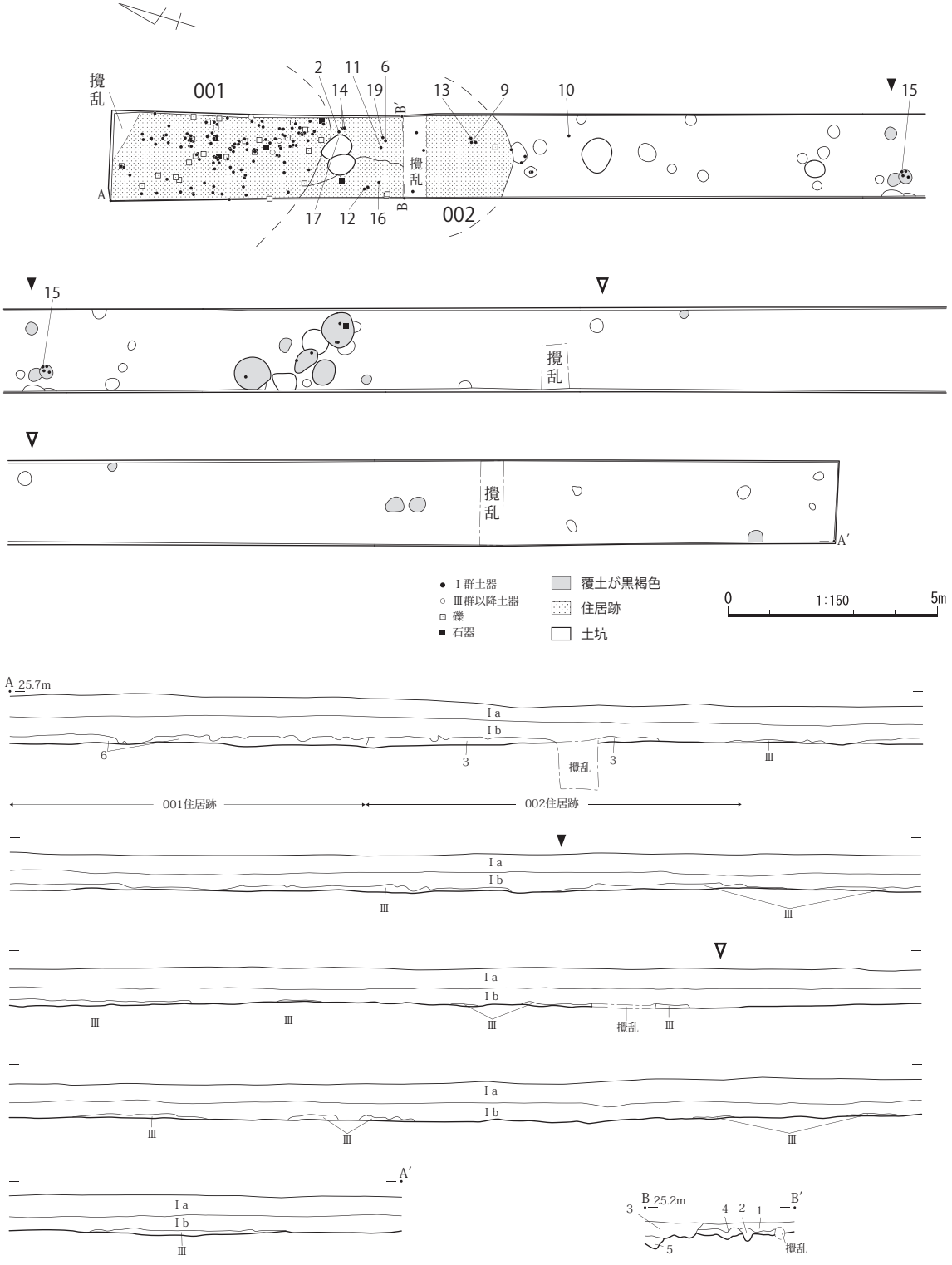


1．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜の焼土粒を極微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。均質な堆積土。しまり有り。

第 32 図　4Ｔ遺構配置図

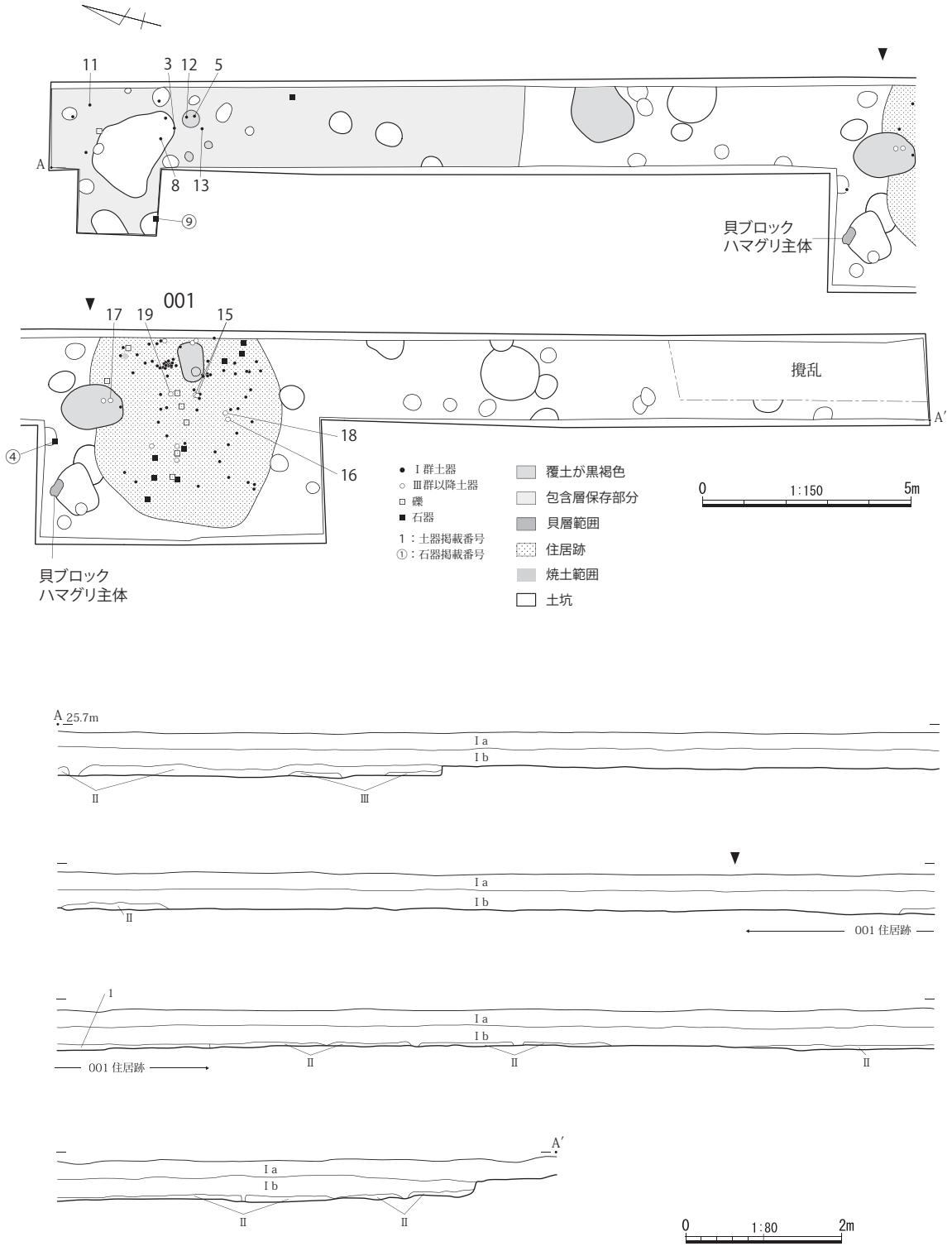



第 33 図　5T 遺構配置図



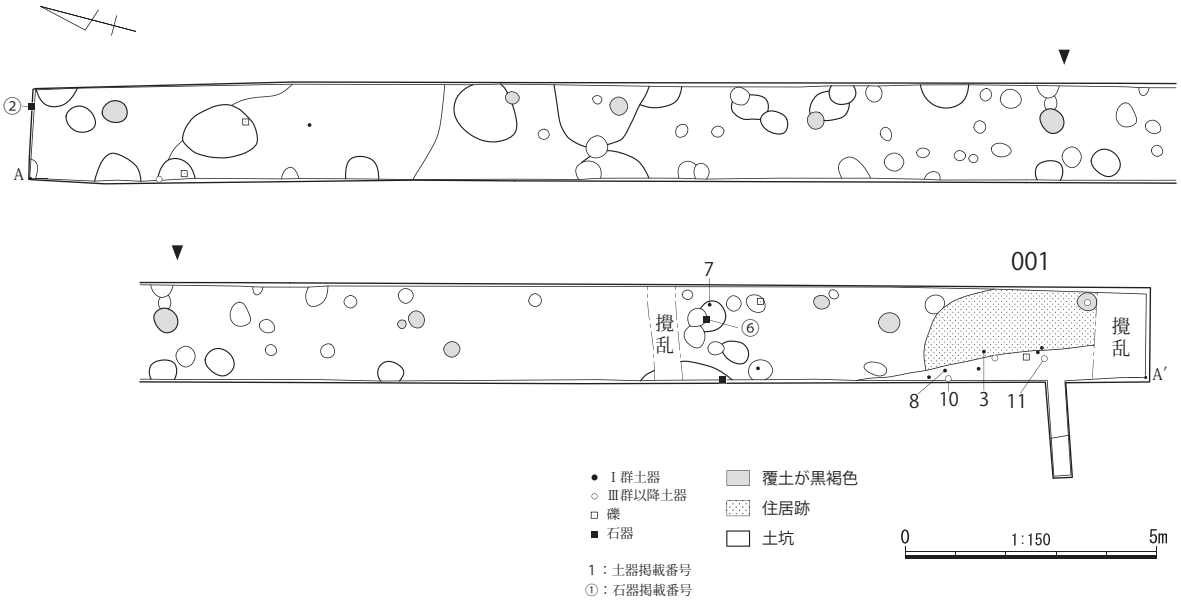

1．暗褐色土10YR3/3　　径1～2㎜のローム粒を少量、径1～2㎜の焼土粒を微量含む。しまり有り。
2．褐色土10YR4/6　　径1～2㎜のローム粒を少量、径1～2㎜の焼土粒、炭化物を微量含む。しまり有り。
3．にぶい黄褐色土10YR4/3　径1～2㎜のローム粒を少量、径1～2㎜の炭化物を微量含む。しまり有り。
4．褐色土10YR4/4　　径1～2㎜のローム粒を少量、径1～2㎜の焼土粒、炭化物を微量含む。しまり有り。
5．褐色土7.5YR4/4　　しまり有り。
6．暗褐色土10YR3/3　　径1～2㎜のローム粒を微量含む。しまり有り。

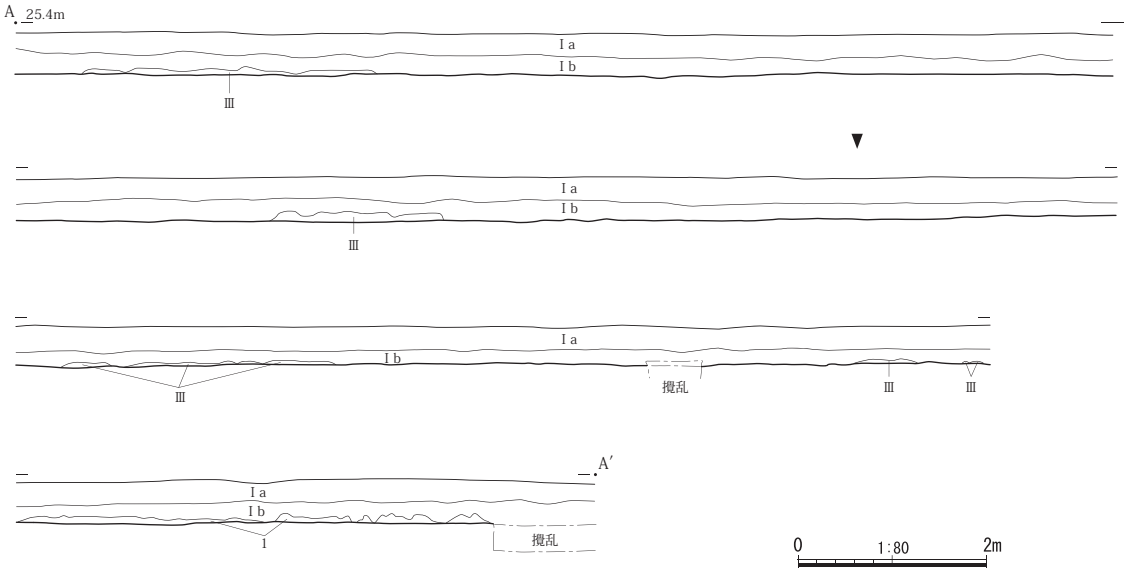
第 34 図　6Ｔ遺構配置図




1．黒褐色土7.5YR2/2　ローム粒、焼土粒を微量含む。しまり有り。

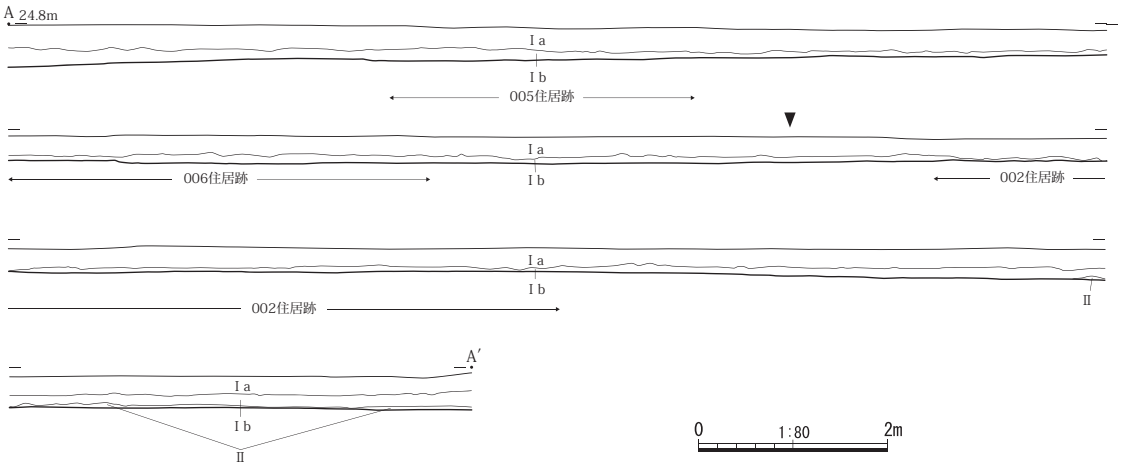
第 35 図　7Ｔ遺構配置図



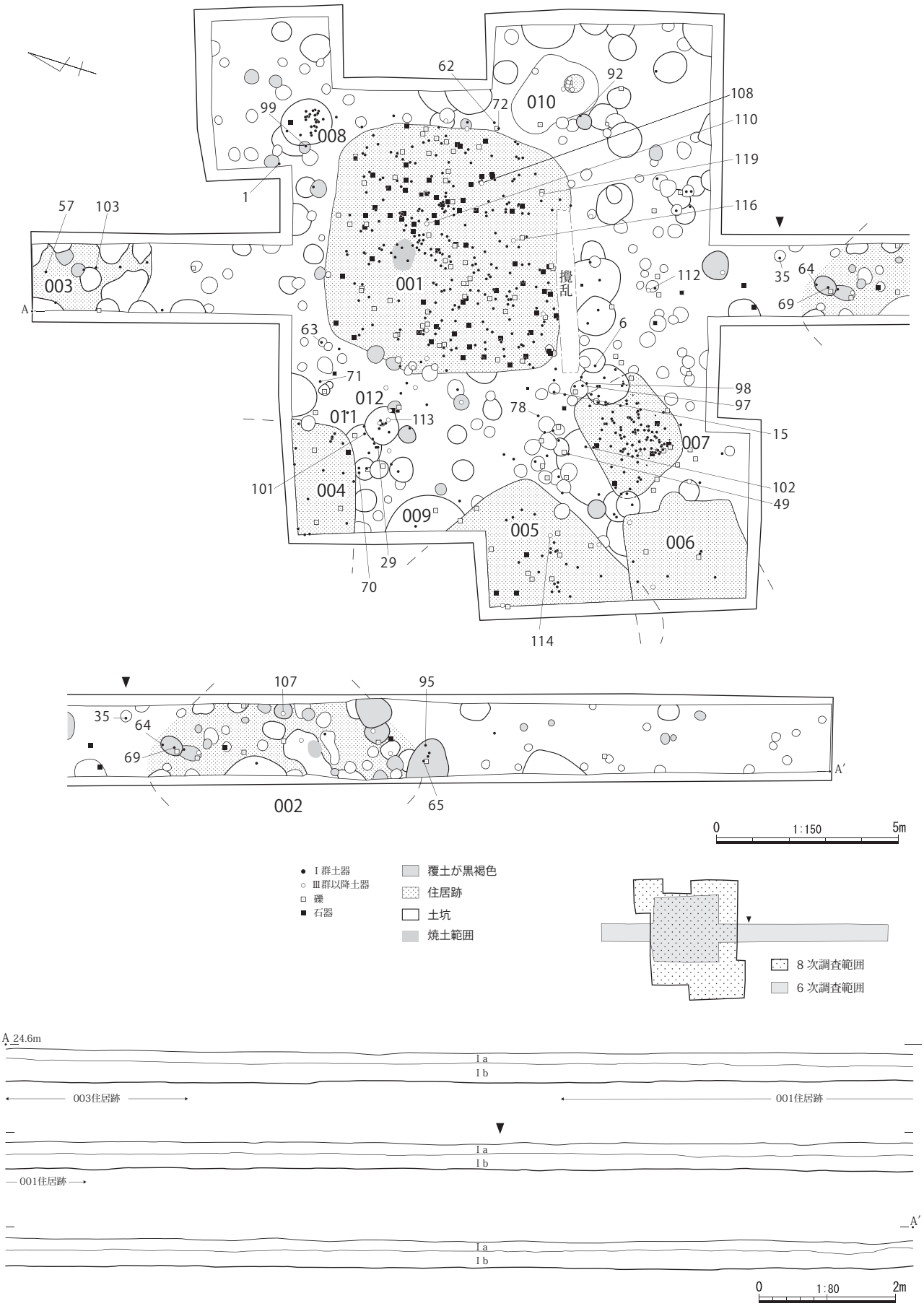




1．黒褐色土7.5YR3/1　径1～2㎜のローム粒を中量含む。しまり有り。

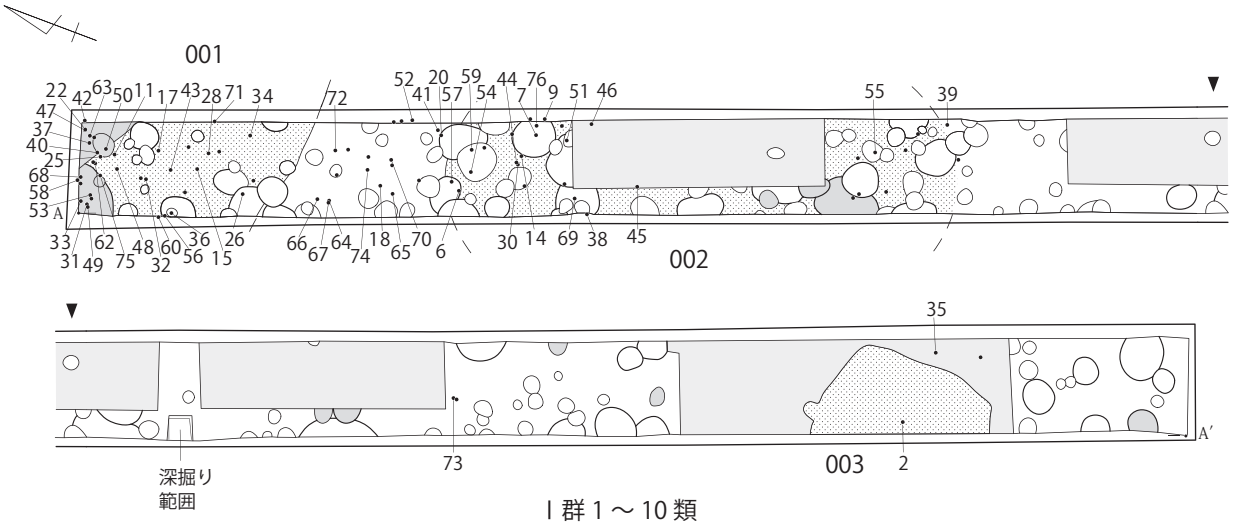
第 36 図　8Ｔ遺構配置図



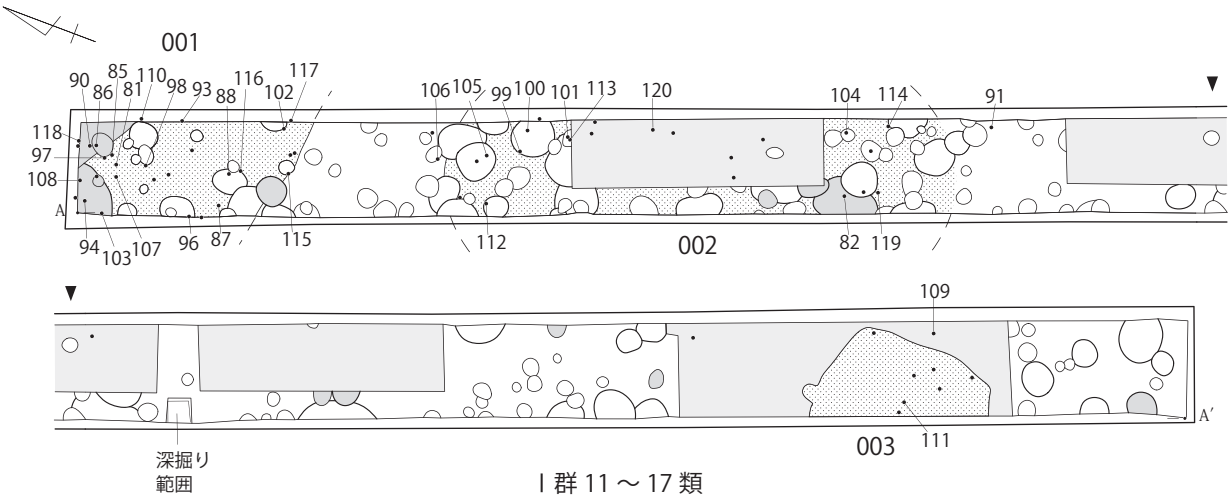

第 37 図　9Ｔ遺構配置図



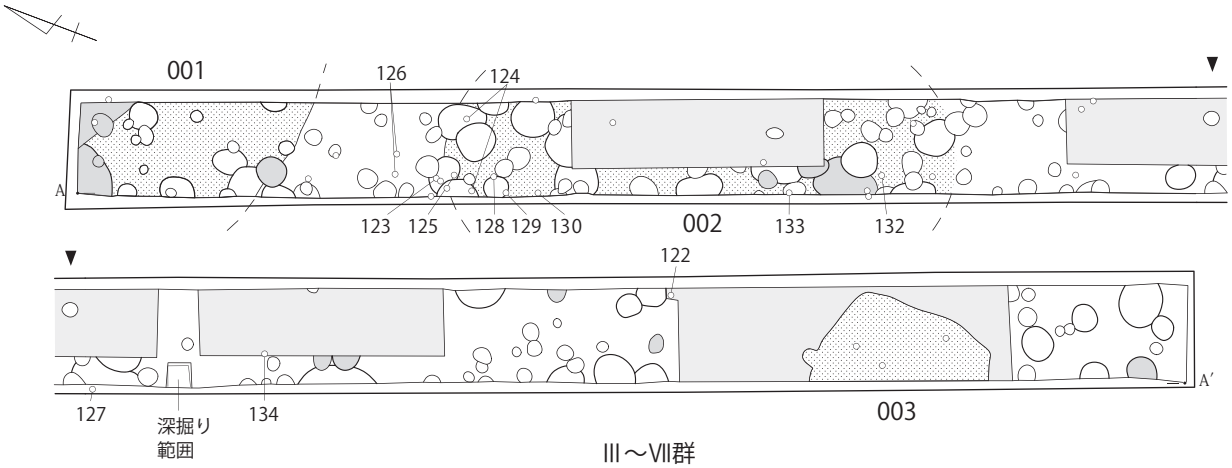

第 38 図　10T 遺構配置図




Ⅰ群１～10類

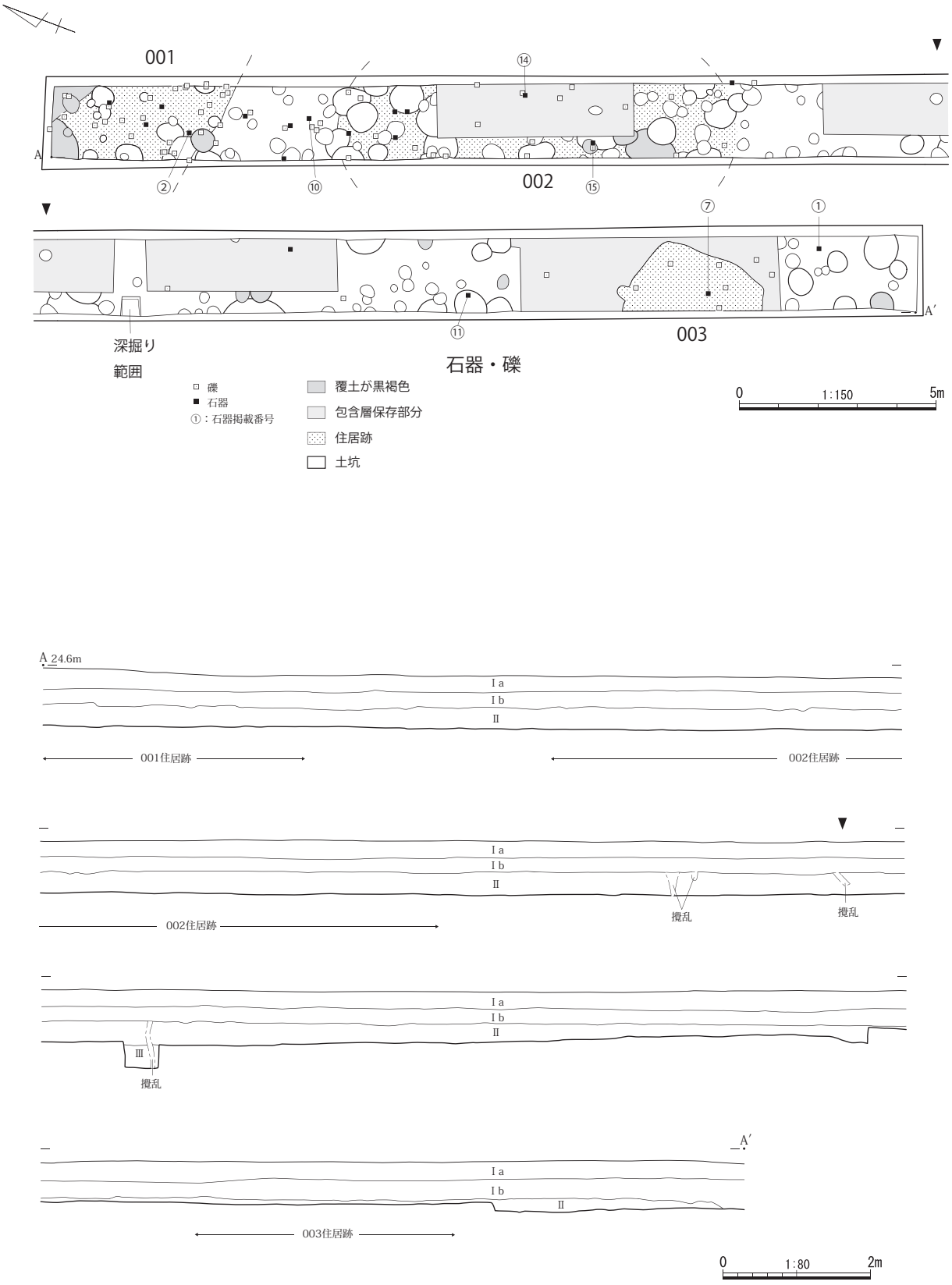



Ⅰ群11～17類

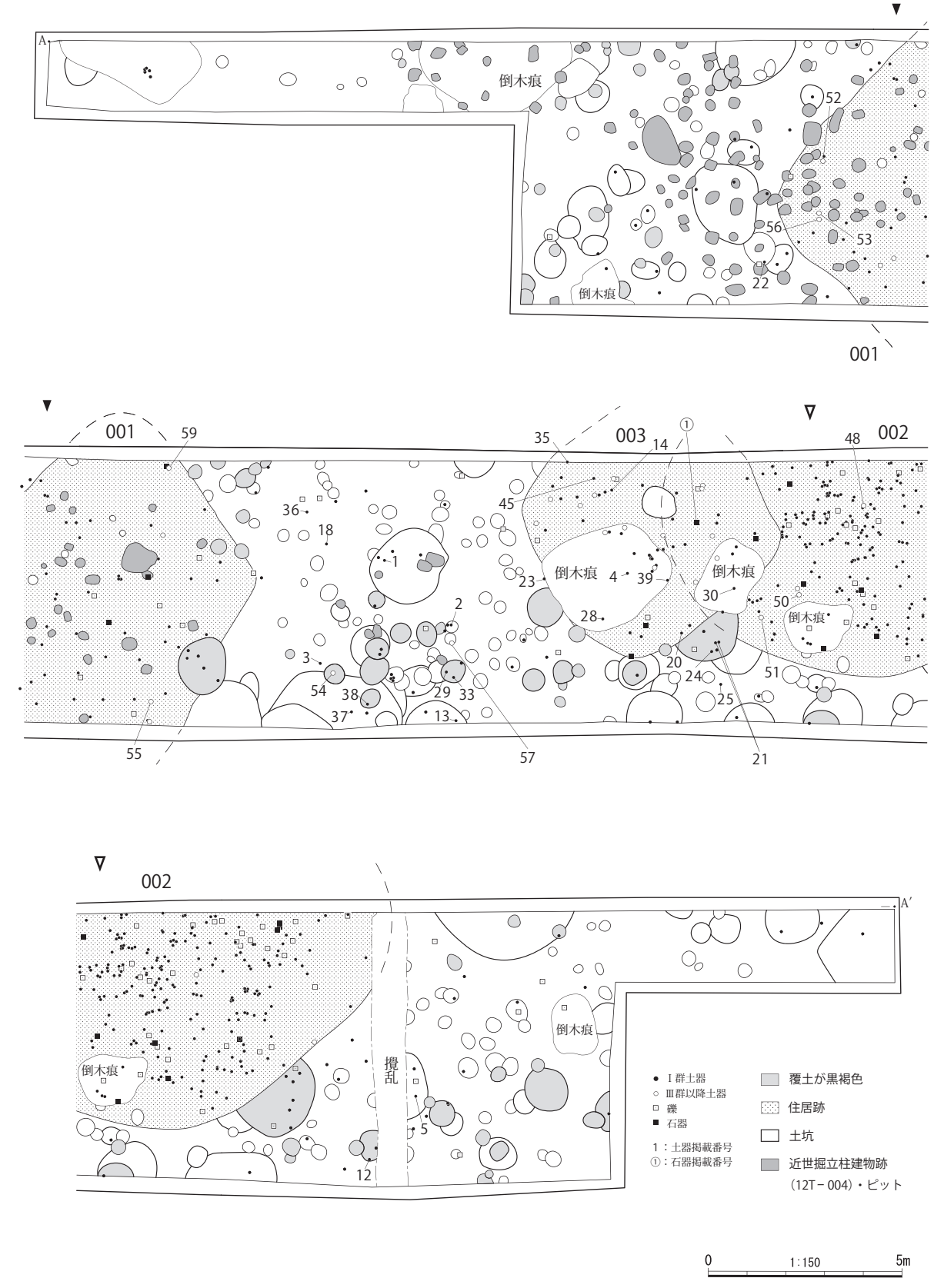



Ⅲ～Ⅶ群

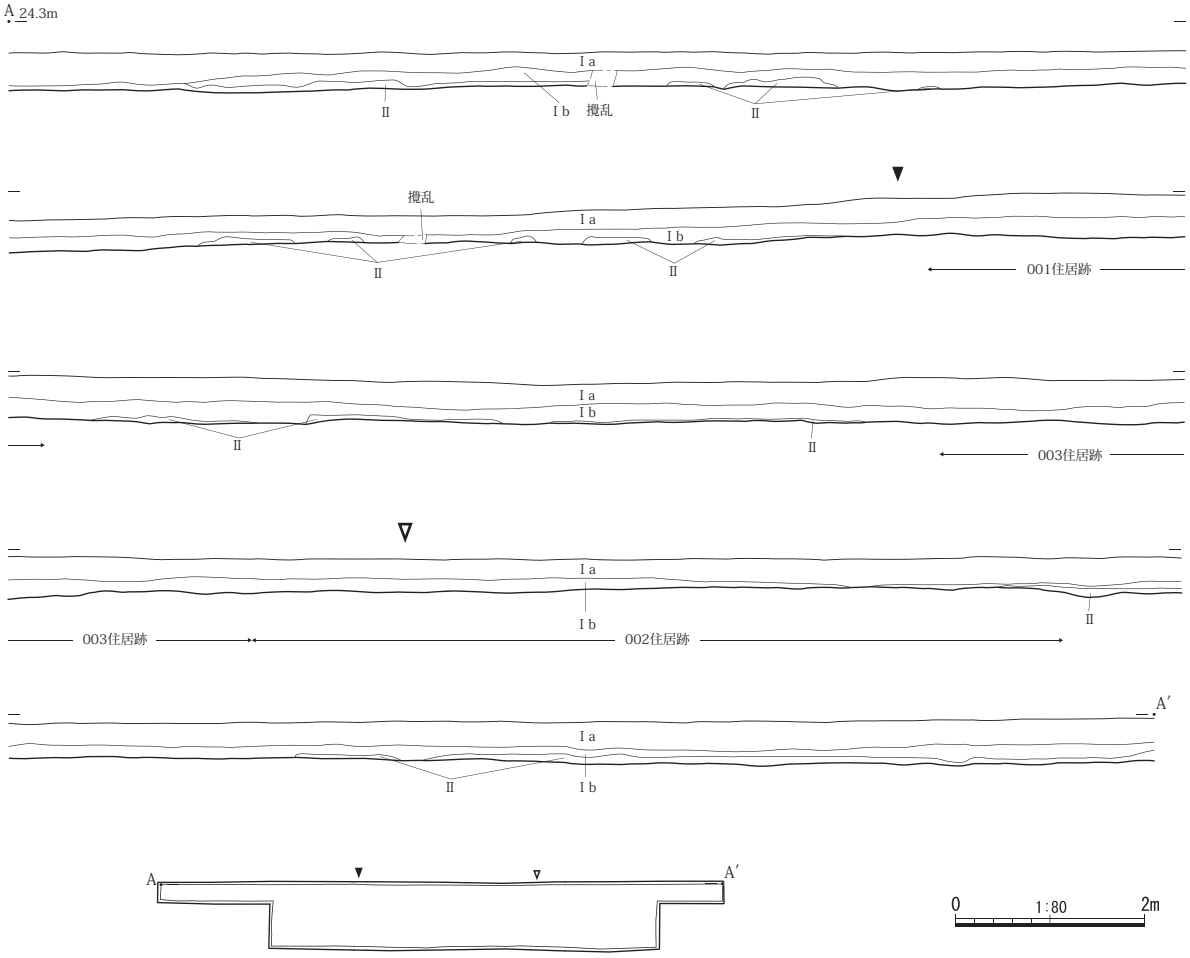
第 39 図　11T 遺構配置図（１）



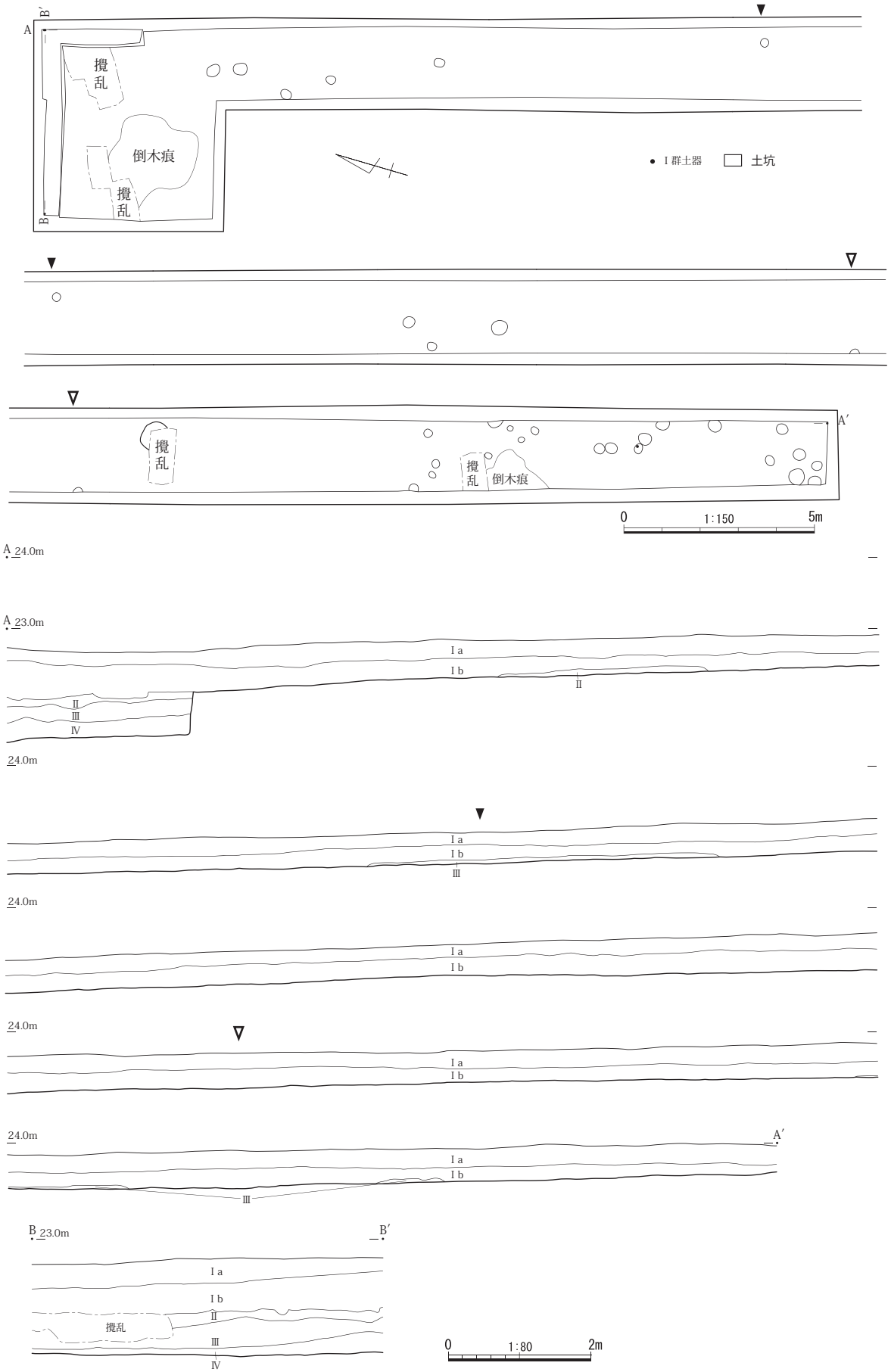

第 40 図　11T 遺構配置図（２）



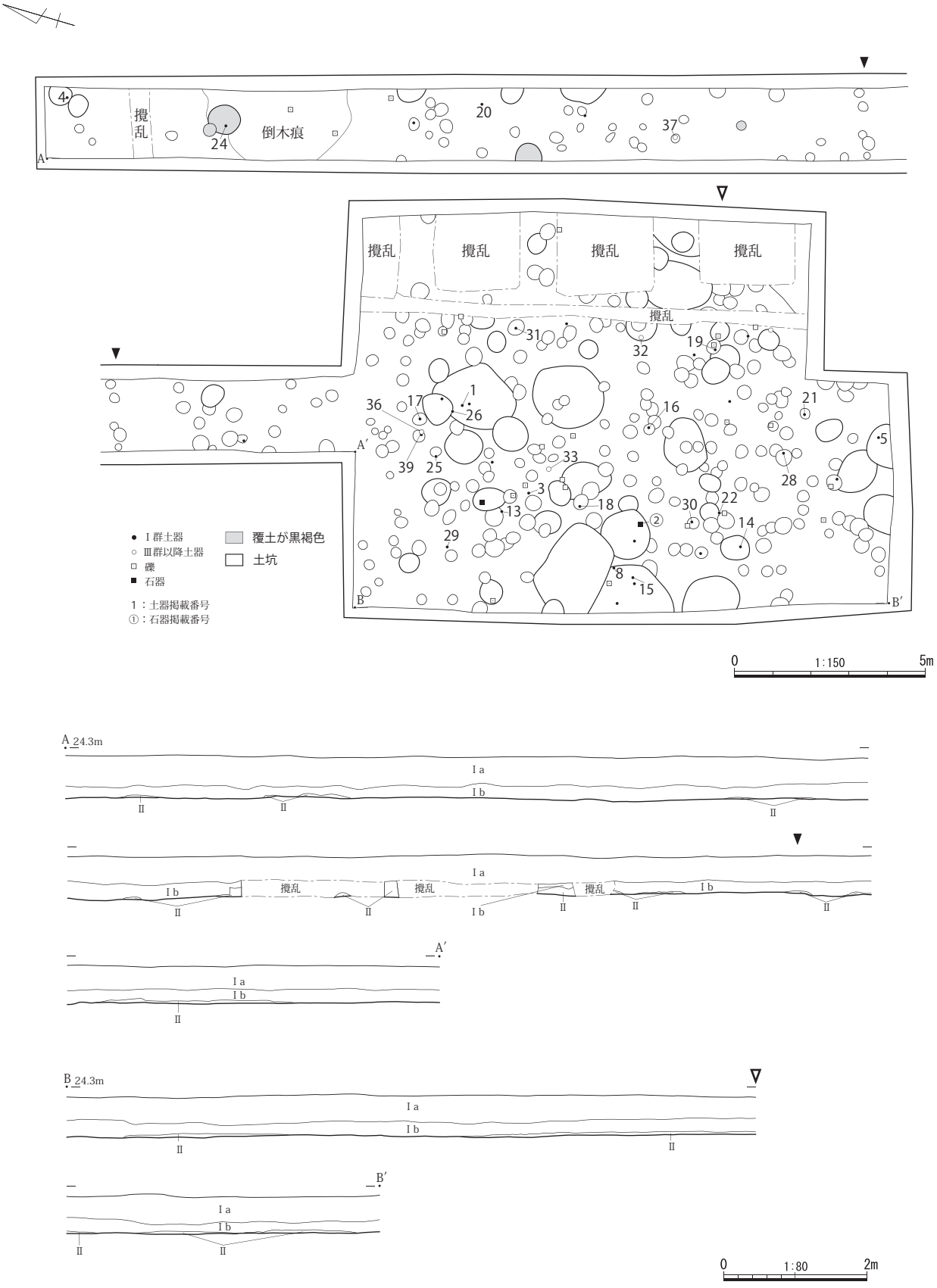

第 41 図　12T 遺構配置図（１）



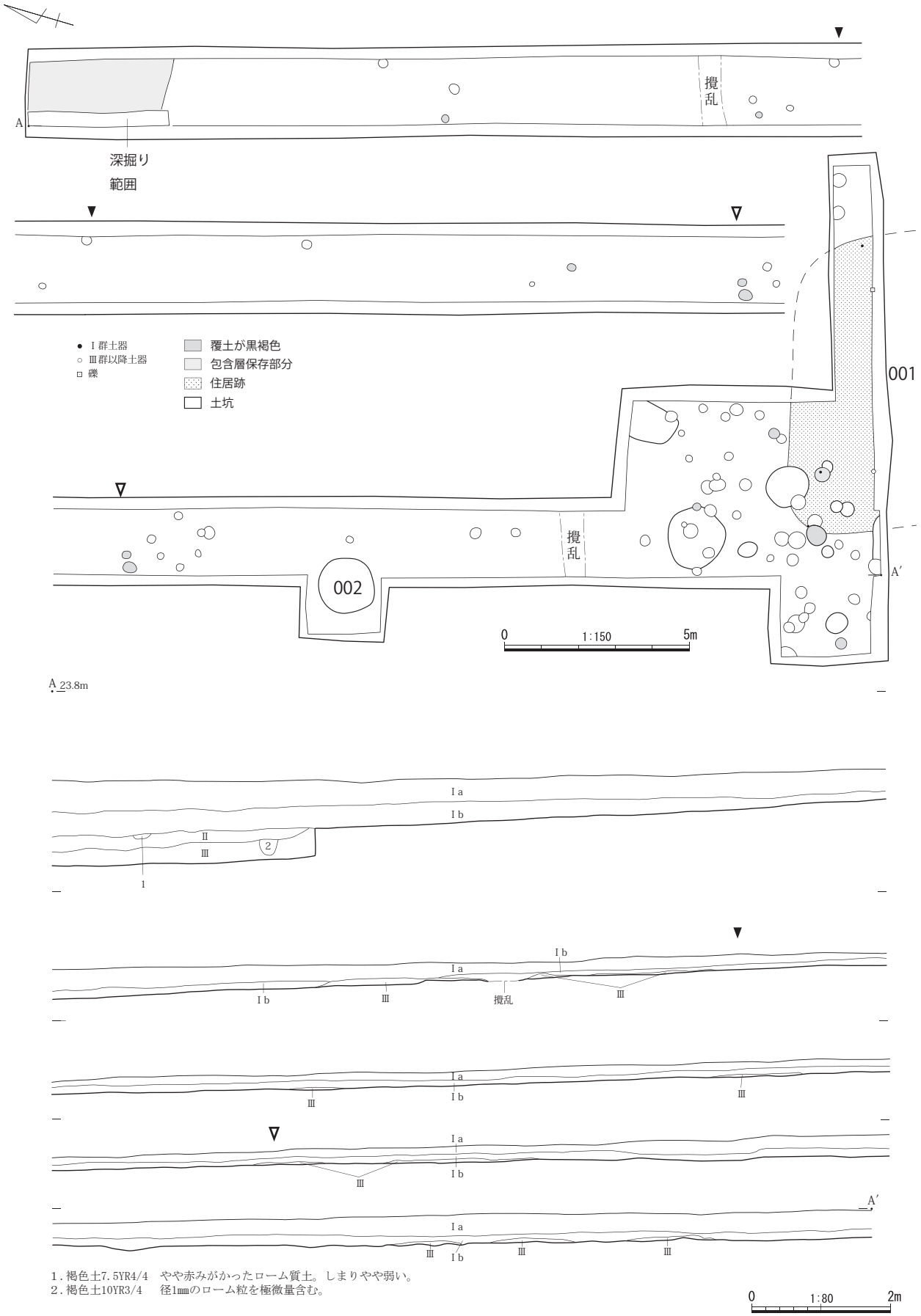

第 42 図　12T 遺構配置図（２）




第 43 図　13T 遺構配置図

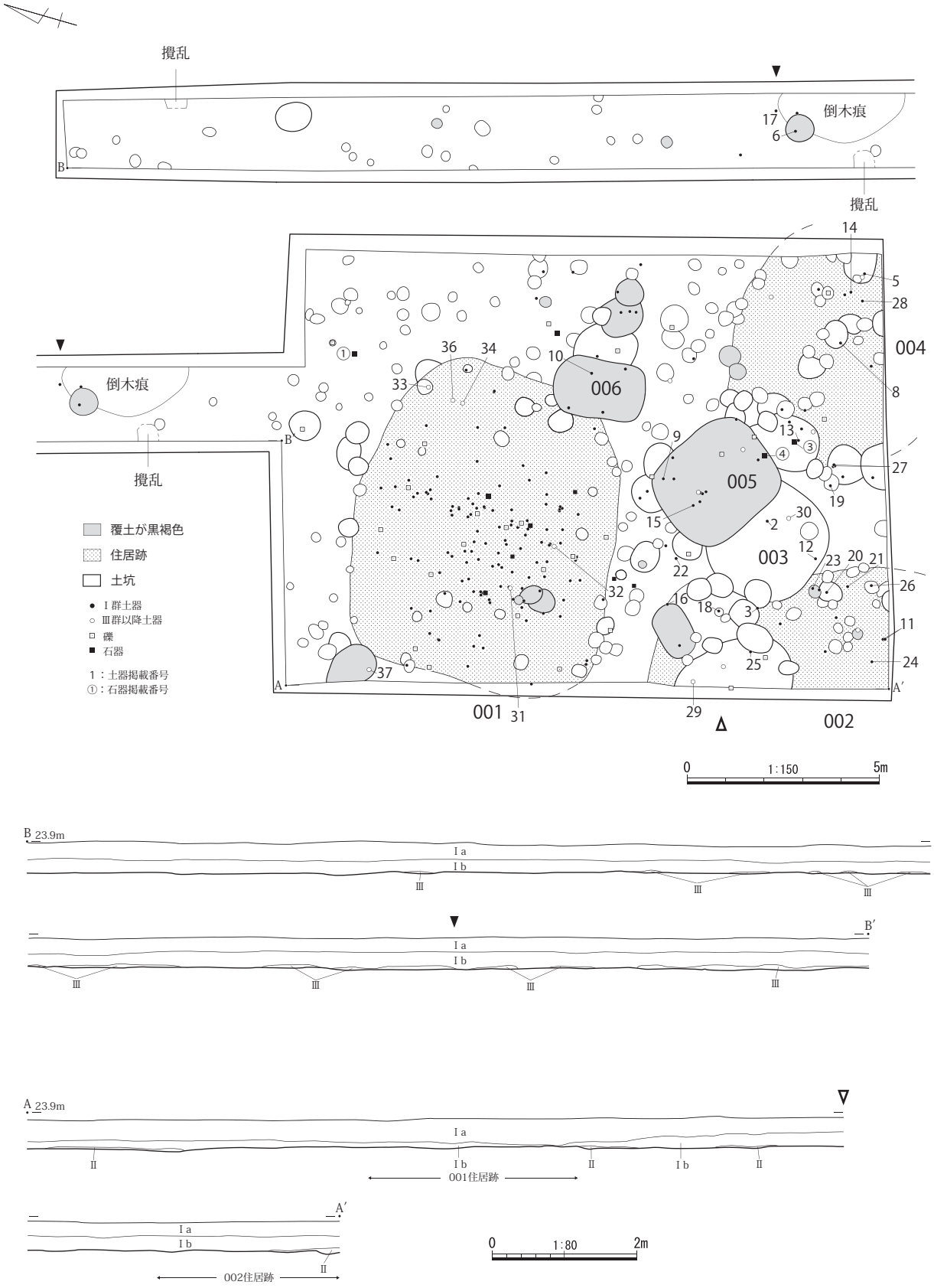



第 44 図　14T 遺構配置図

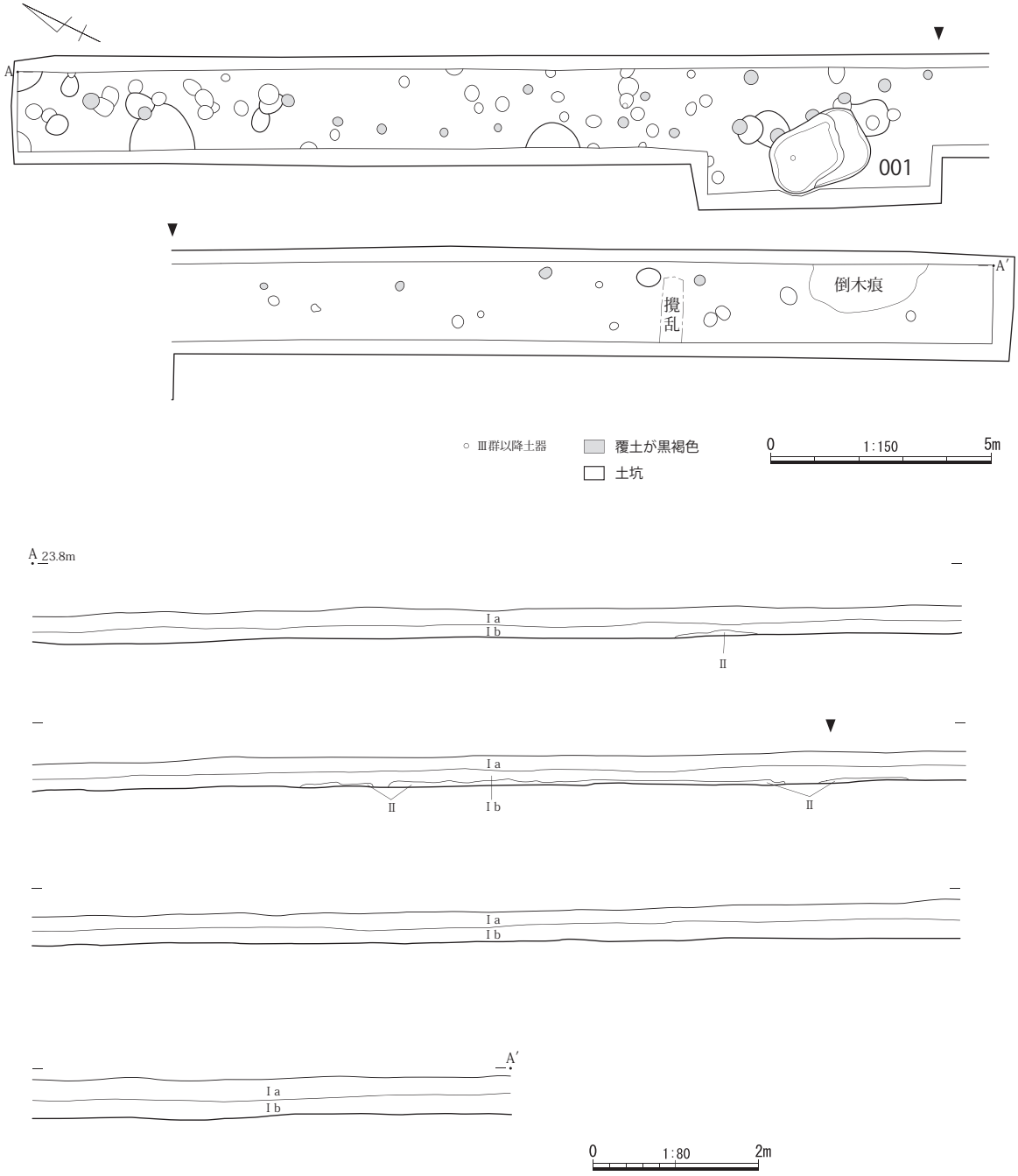



1．褐色土7.5YR4/4　やや赤みがかったローム質土。しまりやや弱い。
2．褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を極微量含む。

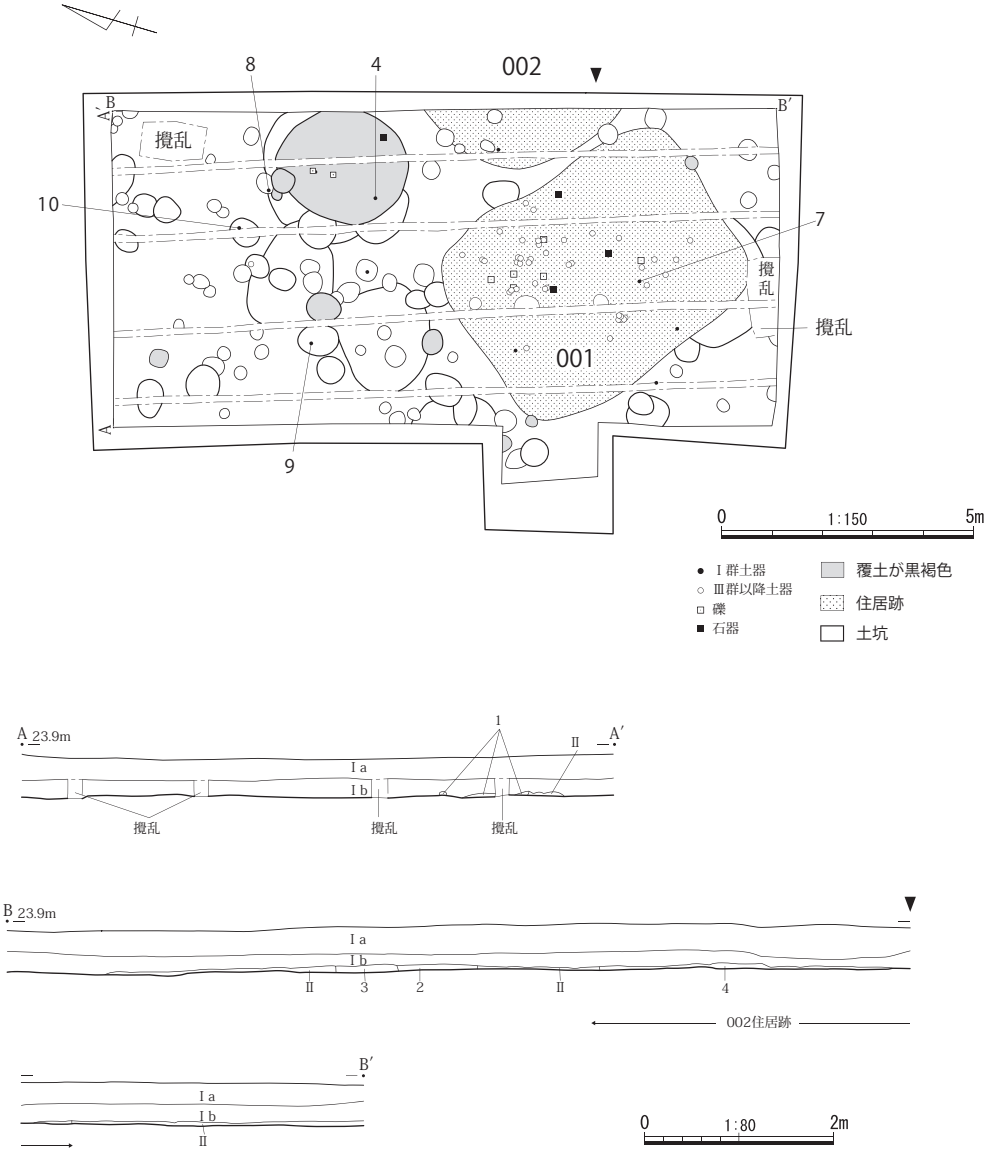
第 45 図　15T 遺構配置図




第 46 図　16T 遺構配置図

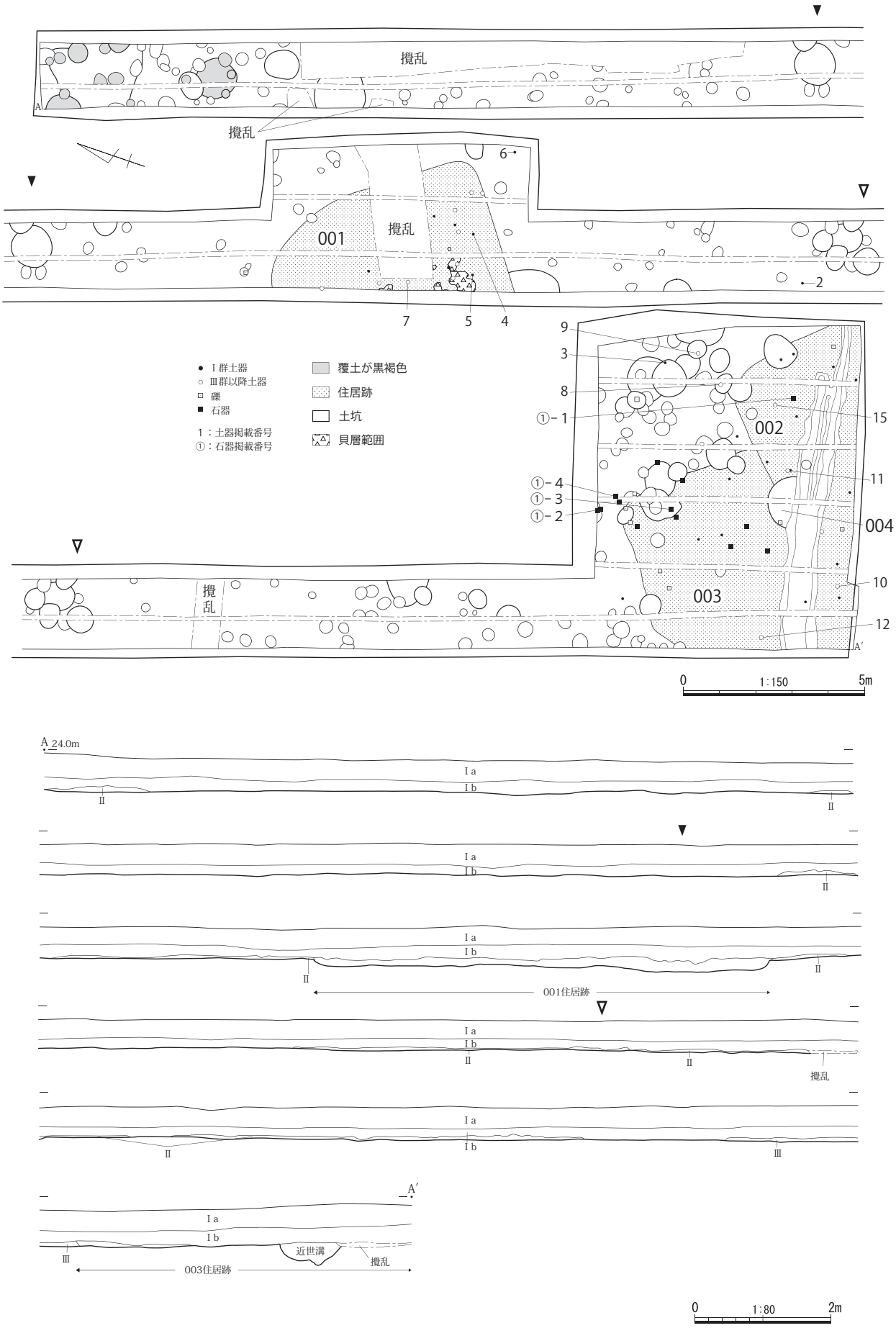



第 47 図　17T 遺構配置図

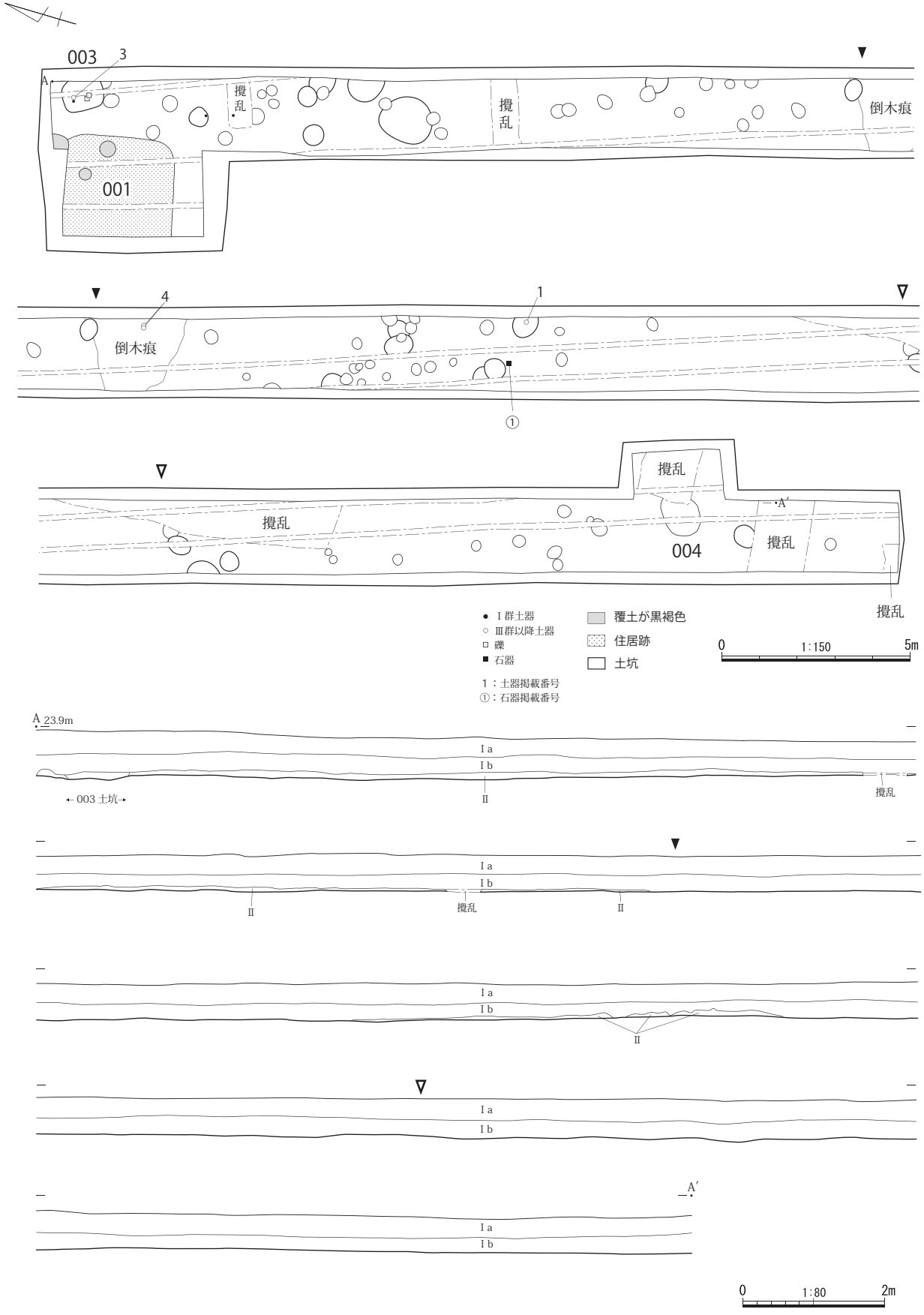



1．暗褐色土7.5YR3/4　ローム粒を多量含む。しまり有り。
2．黒褐色土7.5YR3/2　炭化物、ローム粒を小量含む。しまりやや有り。
3．暗褐色土7.5YR3/3　ローム粒を中量、焼土粒を微量含む。しまり有り。
4．褐色土 10YR4/4　　ローム粒を多量、炭化粒を少量含む。しまり有り。

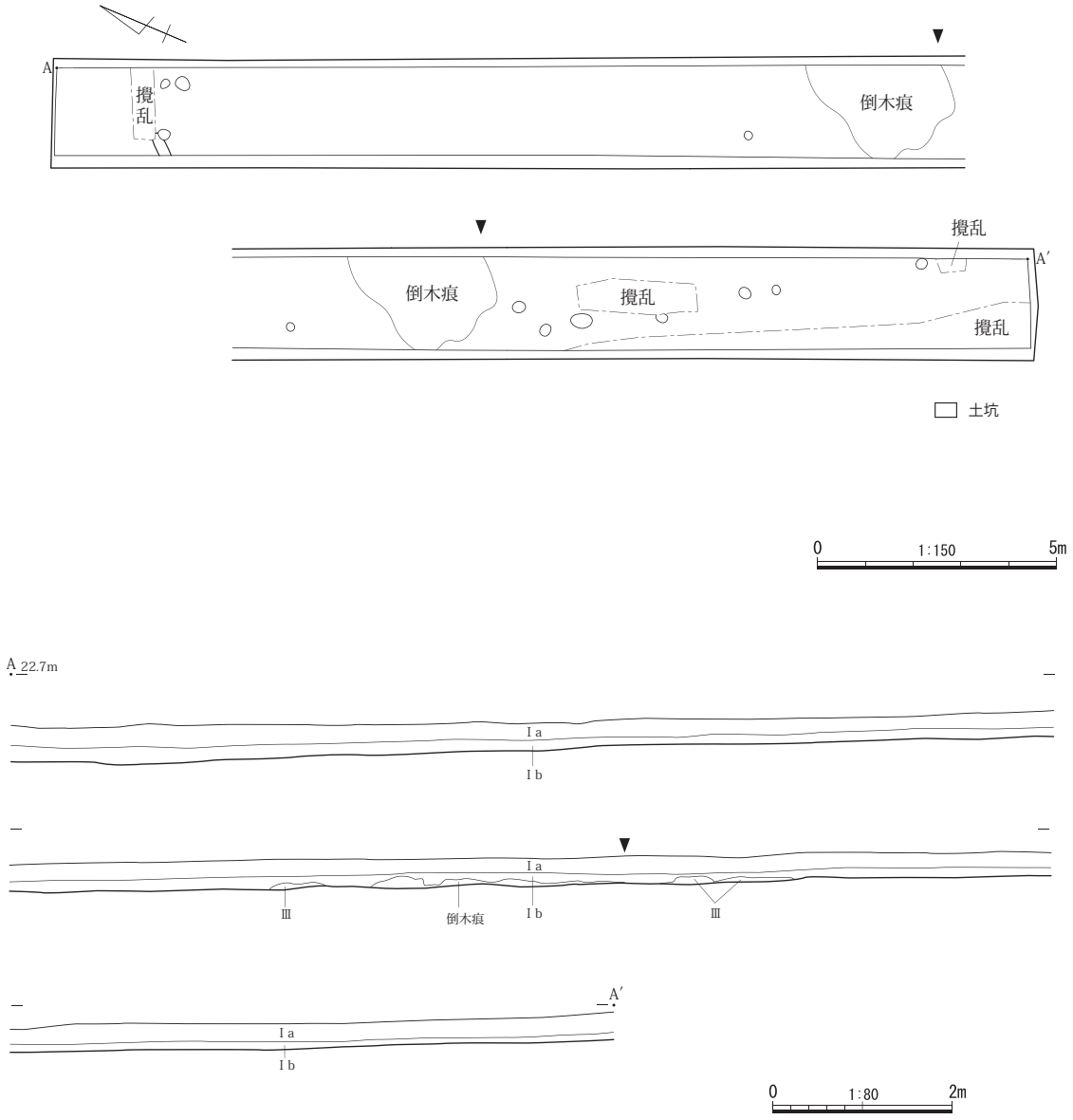
第 48 図　18T 遺構配置図



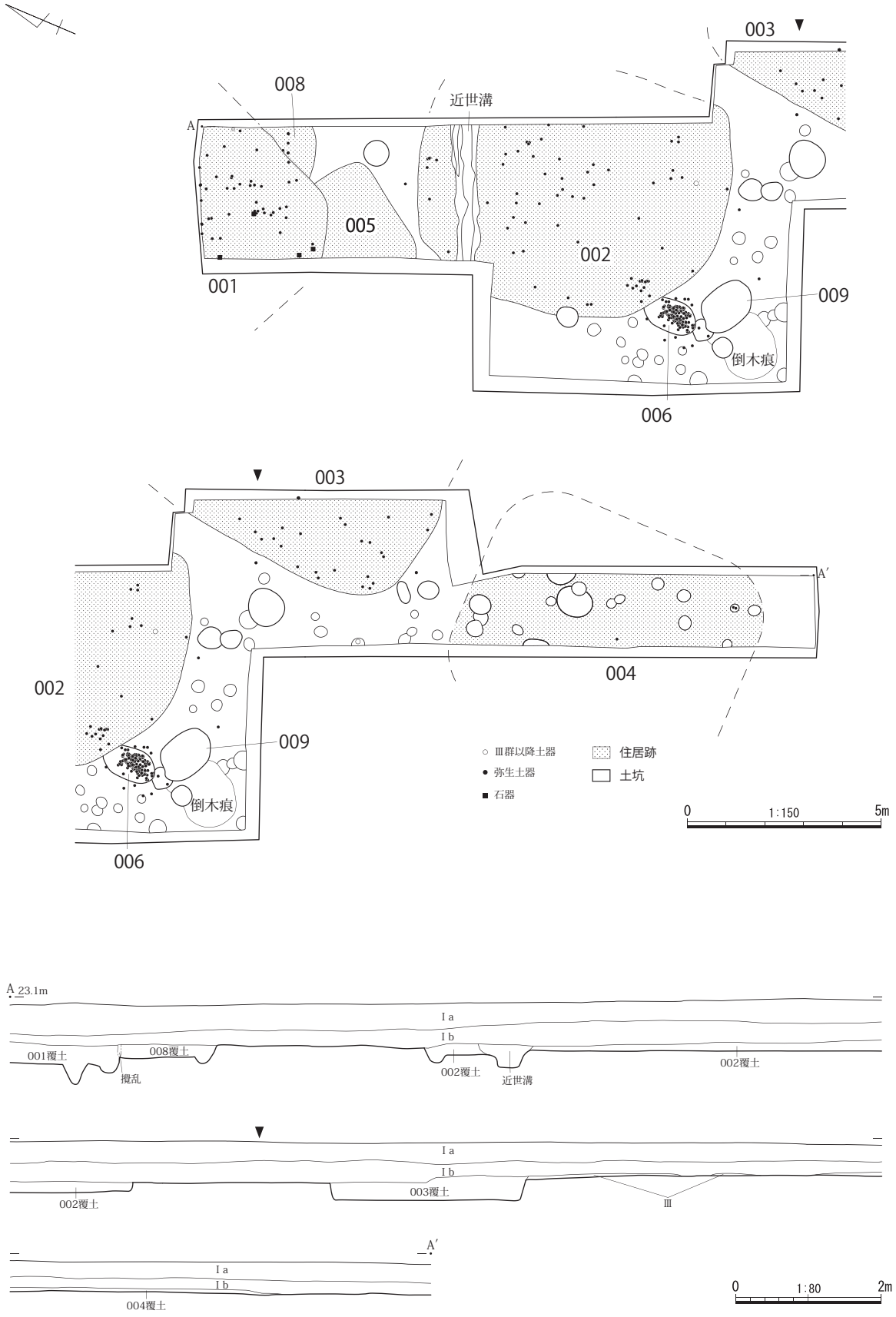

第 49 図　19T 遺構配置図



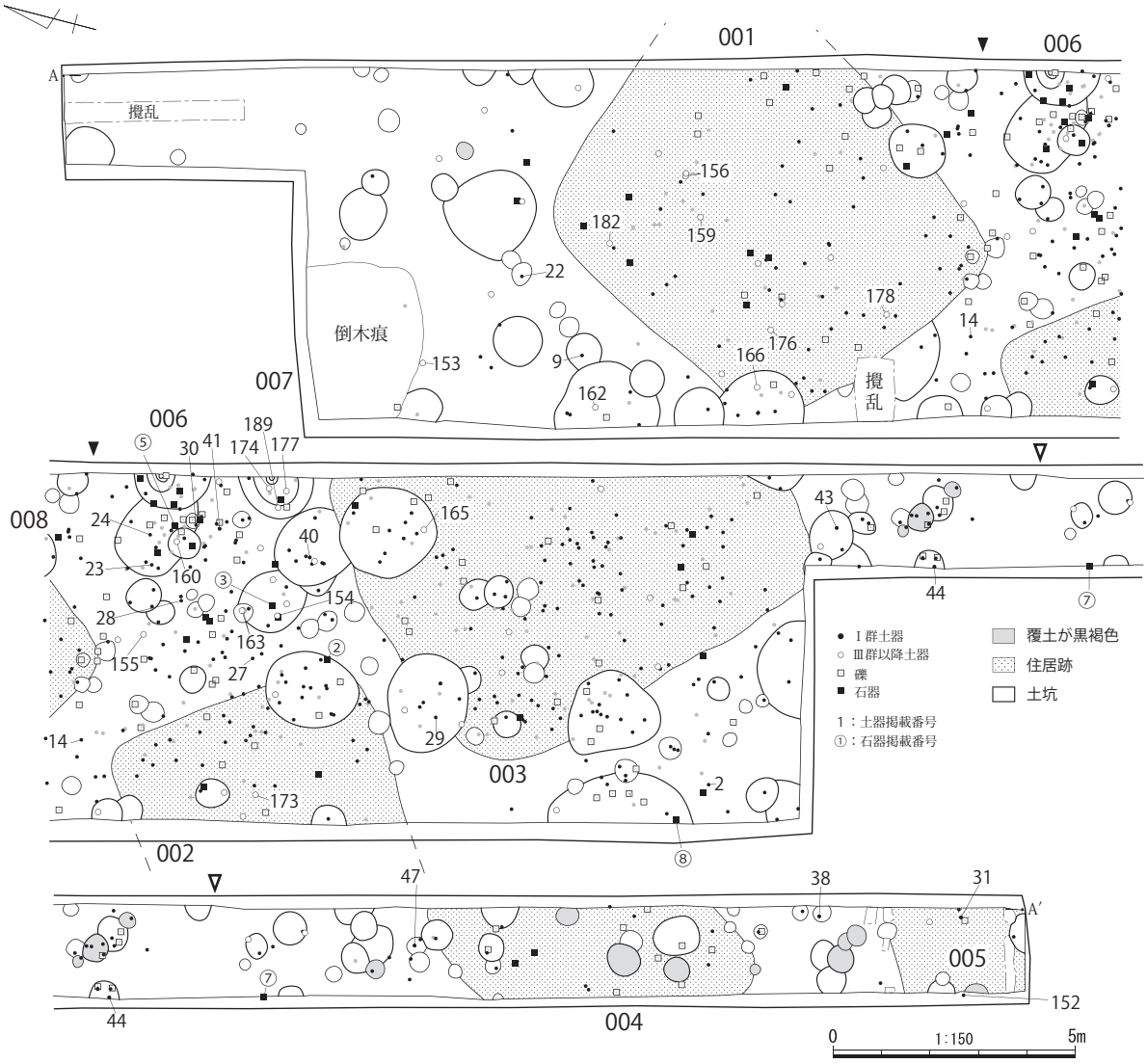

第 50 図　20T 遺構配置図



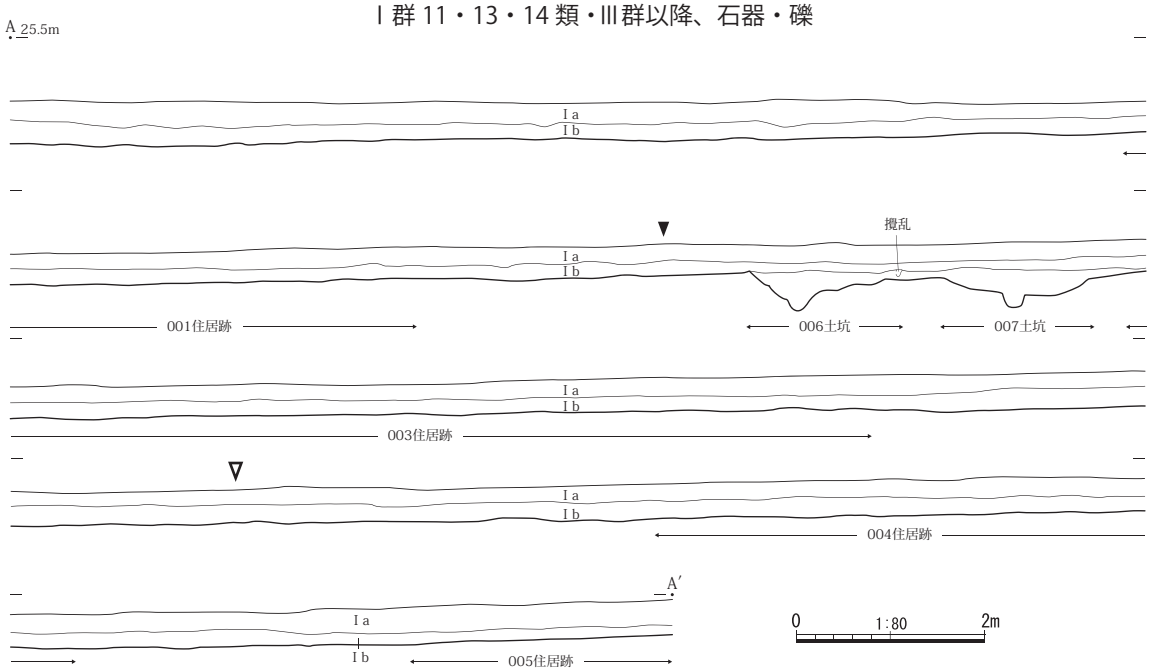

第 51 図　21T 遺構配置図



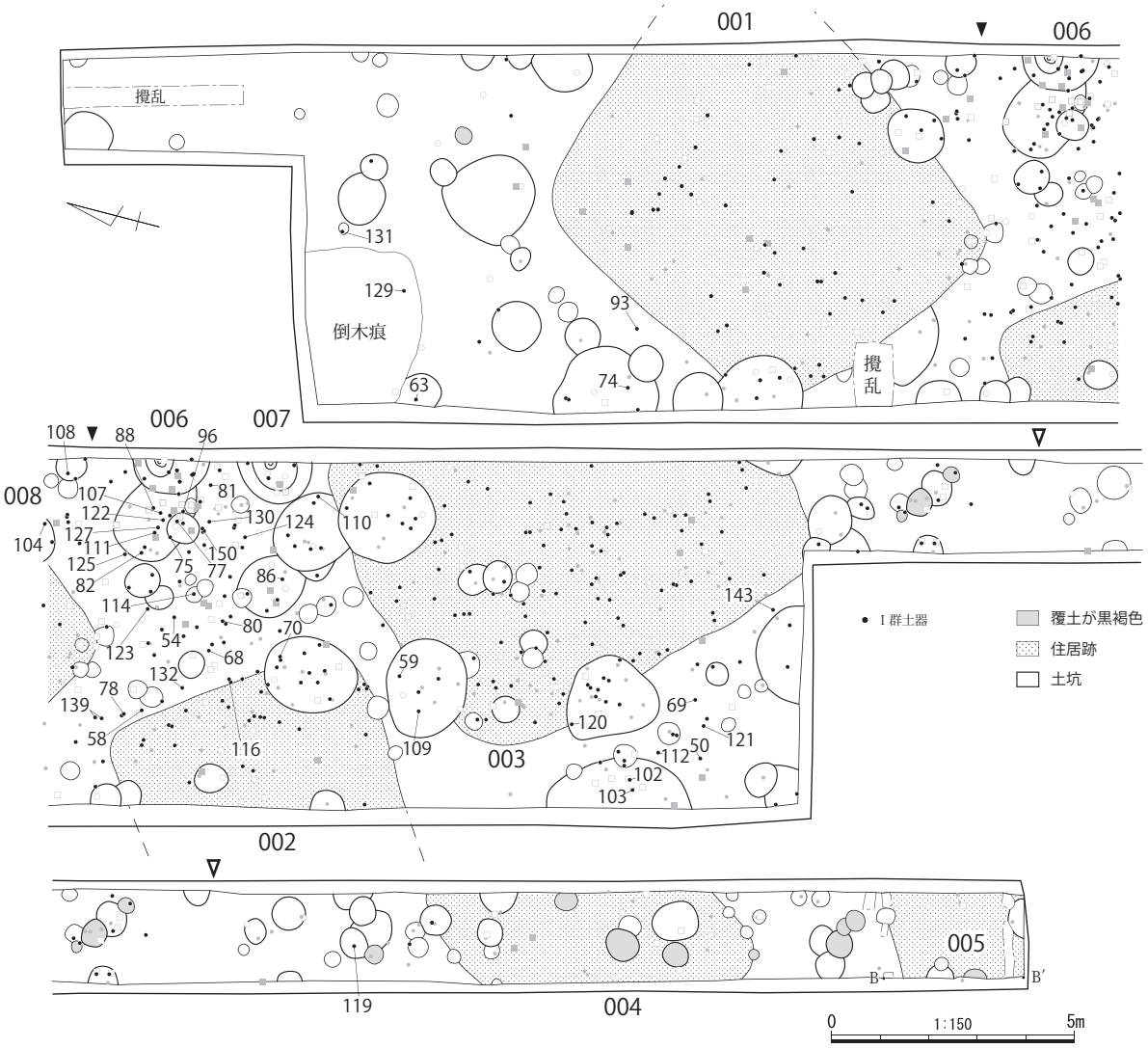

第 52 図　22T 遺構配置図




Ⅰ群 11・13・14 類・Ⅲ群以降、石器・礫

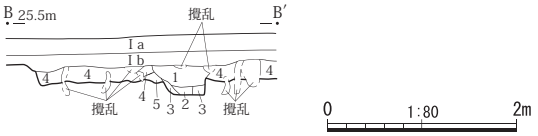



第 53 図　23T 遺構配置図（1）



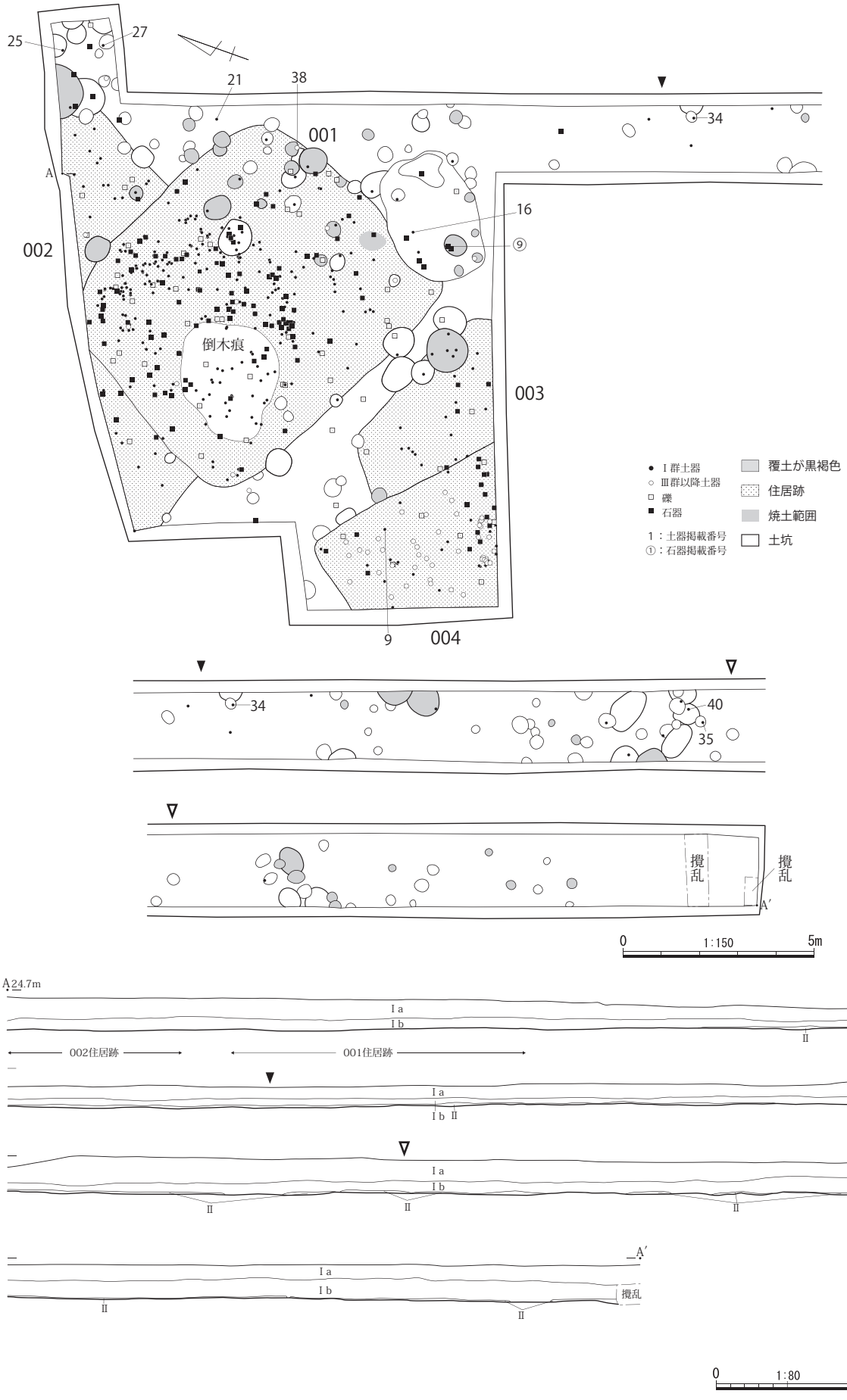

I 群 15・16 類

005

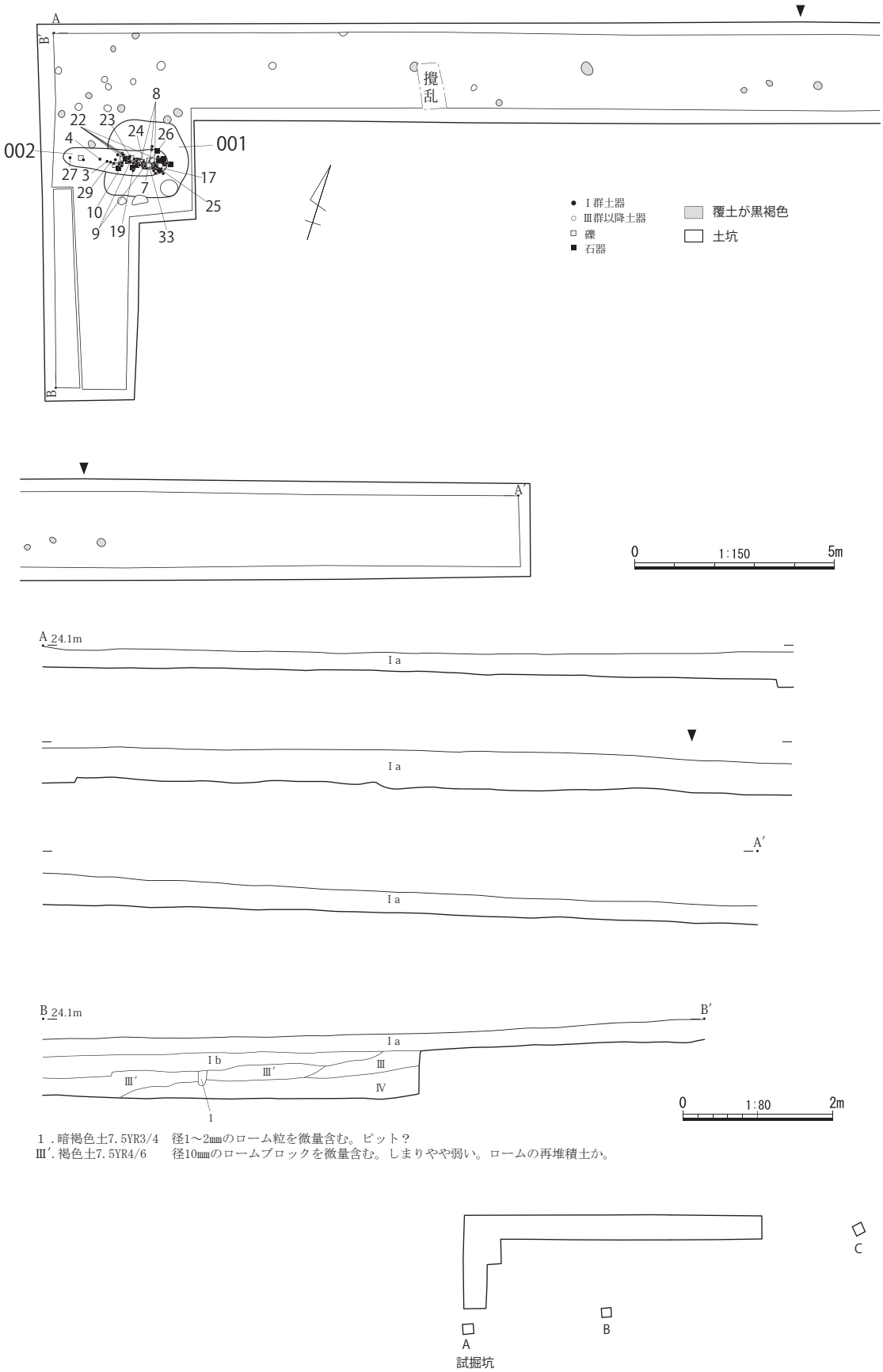



1．黒褐色土10YR2/2　径2～3㎜のローム粒を微量含む。しまり有り。
2．黒褐色土10YR2/2　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり有り。
3．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、ローム土を斑状に少量含む。しまり有り。
4．黒褐色土7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまり有り。
5．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、ローム土を斑状に中量含む。しまり有り。

第 54 図　23T 遺構配置図（2）

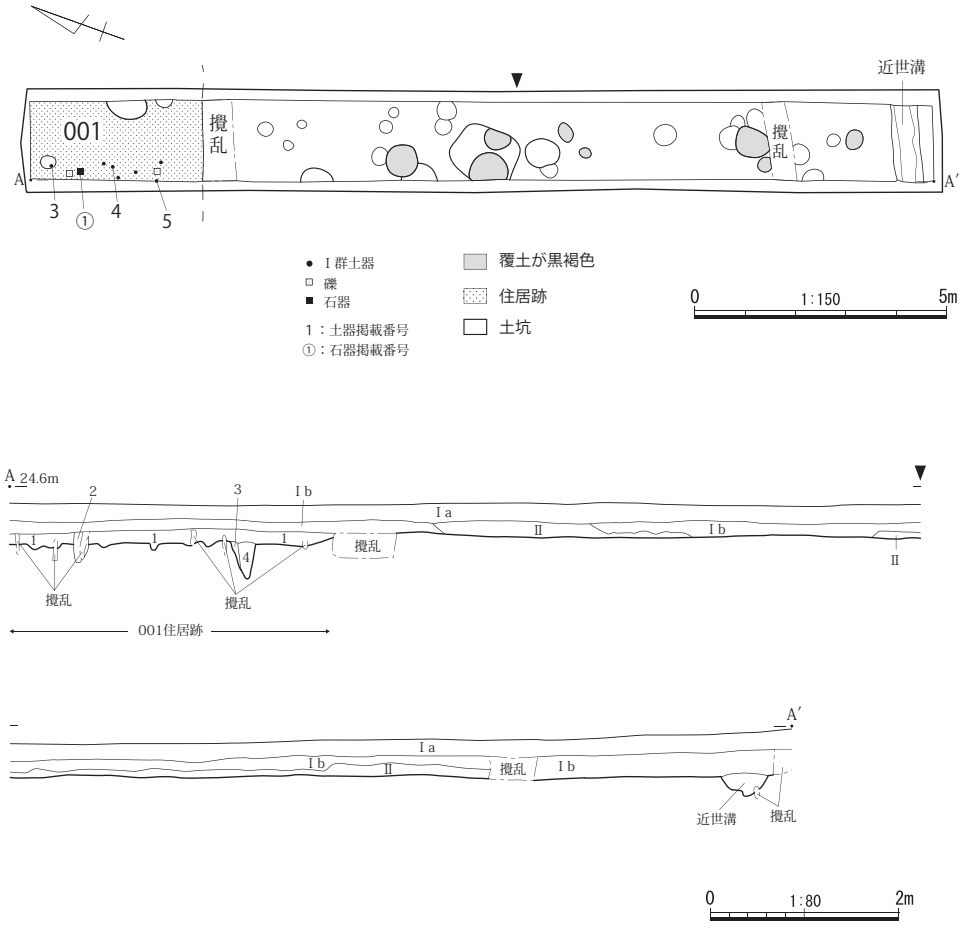



第 55 図　24T 遺構配置図



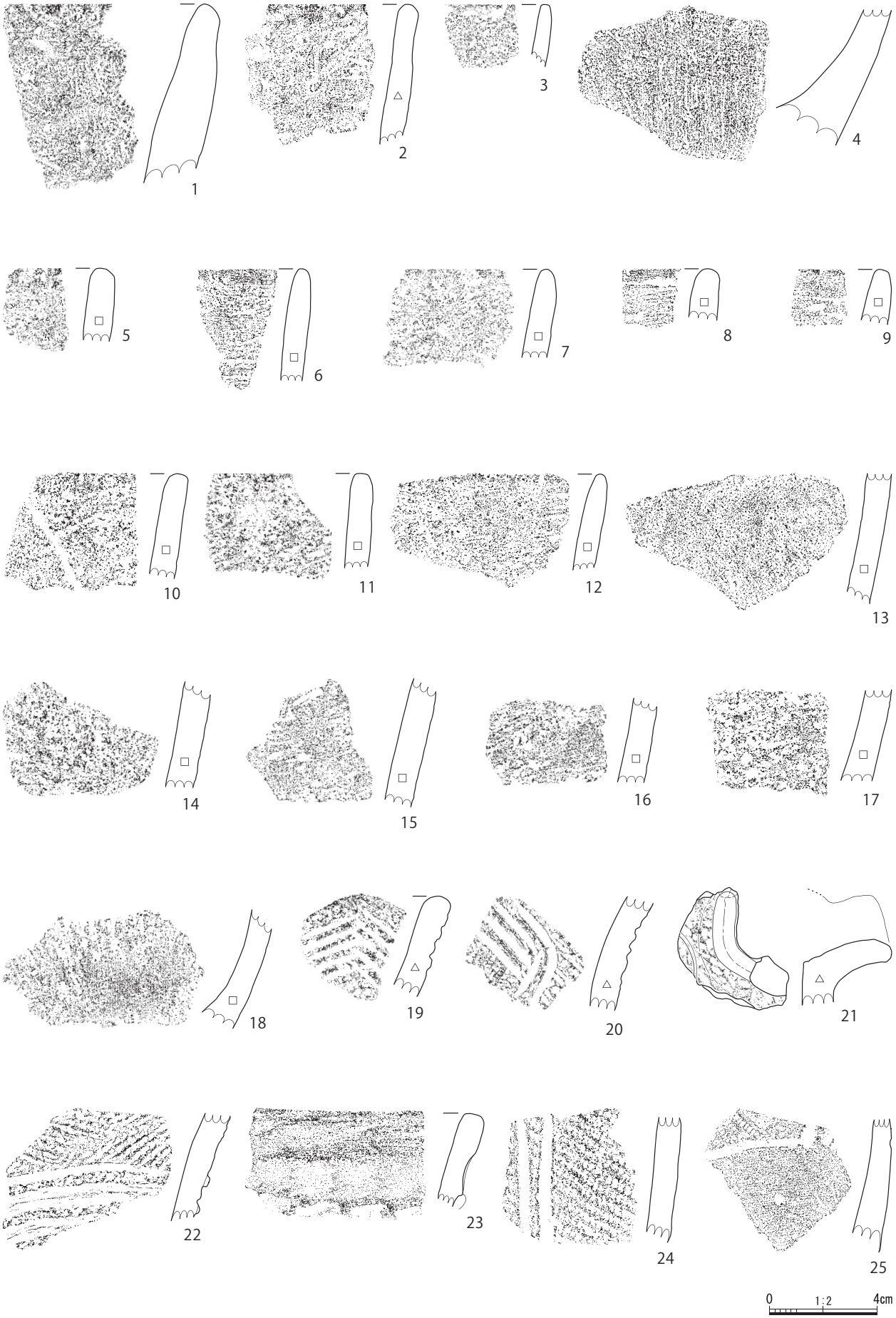

1．暗褐色土7.5YR3/4　径1～2㎜のローム粒を微量含む。ピット？
Ⅲ′．褐色土7.5YR4/6　　径10㎜のロームブロックを微量含む。しまりやや弱い。ロームの再堆積土か。

第 56 図　25T 遺構配置図

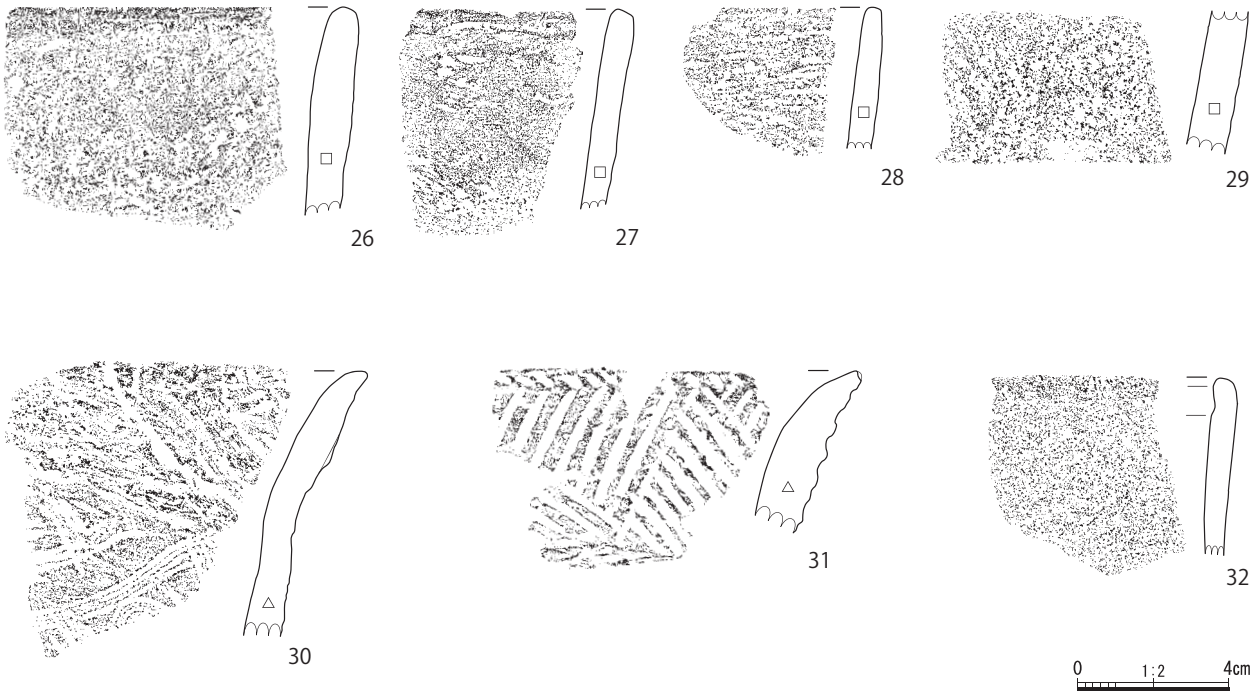



1．暗褐色土7.5YR3/3　径2～3㎜のローム粒を多量、径1～2㎜の炭化粒を微量含む。全体的に径1㎜以下の白色粒を上層部中心に少量含む。しまり強い。
2．黒褐色土10YR2/3　径2～3㎜のローム粒を少量含む。しまり強い。
3．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。白色粒は含まない。しまり強い。
4．暗褐色土7.5YR3/4　ローム粒をほとんど含まない。均質な覆土。3層よりやや明るい。しまり強い。

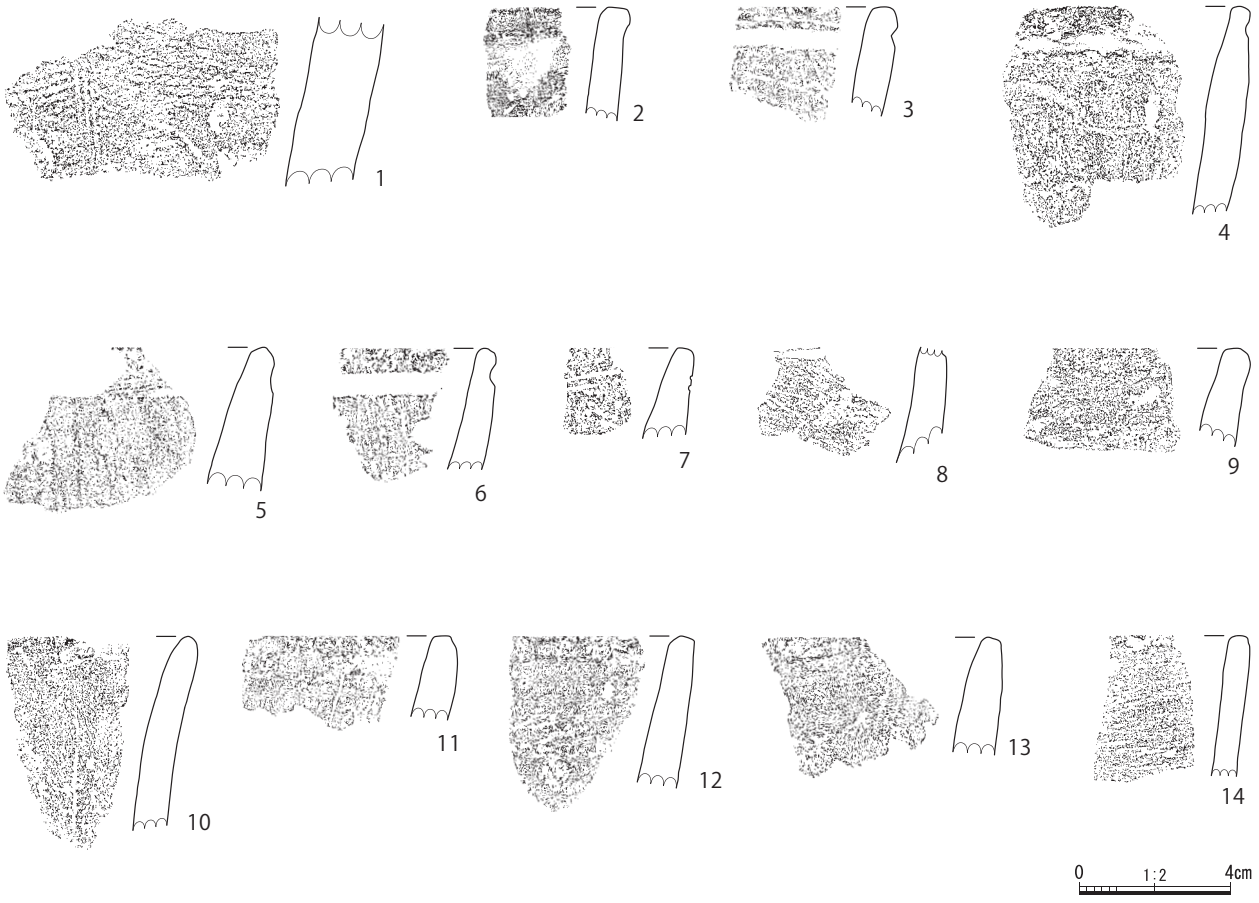
第 57 図　26T 遺構配置図



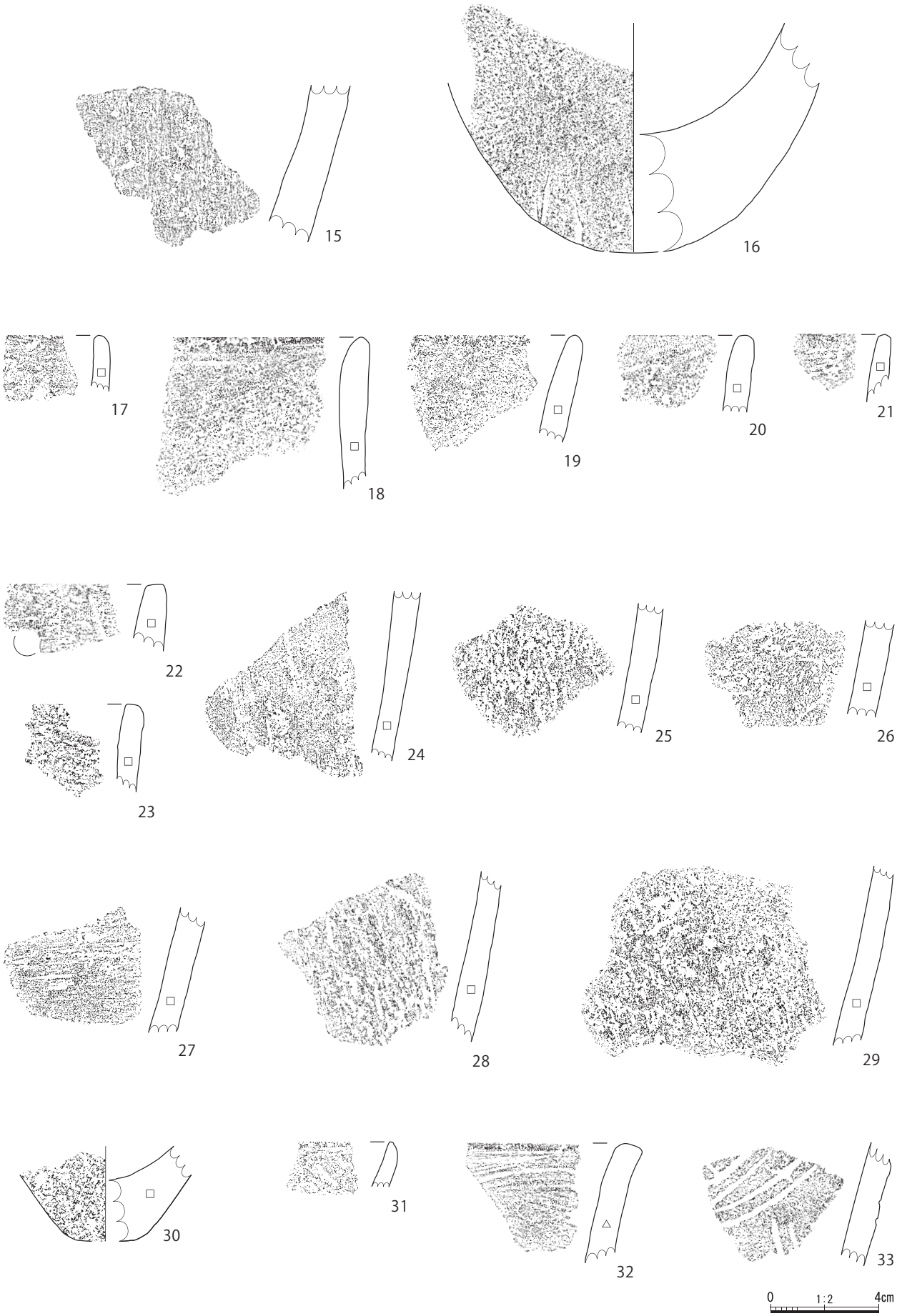

第 58 図　1T 出土土器（1）



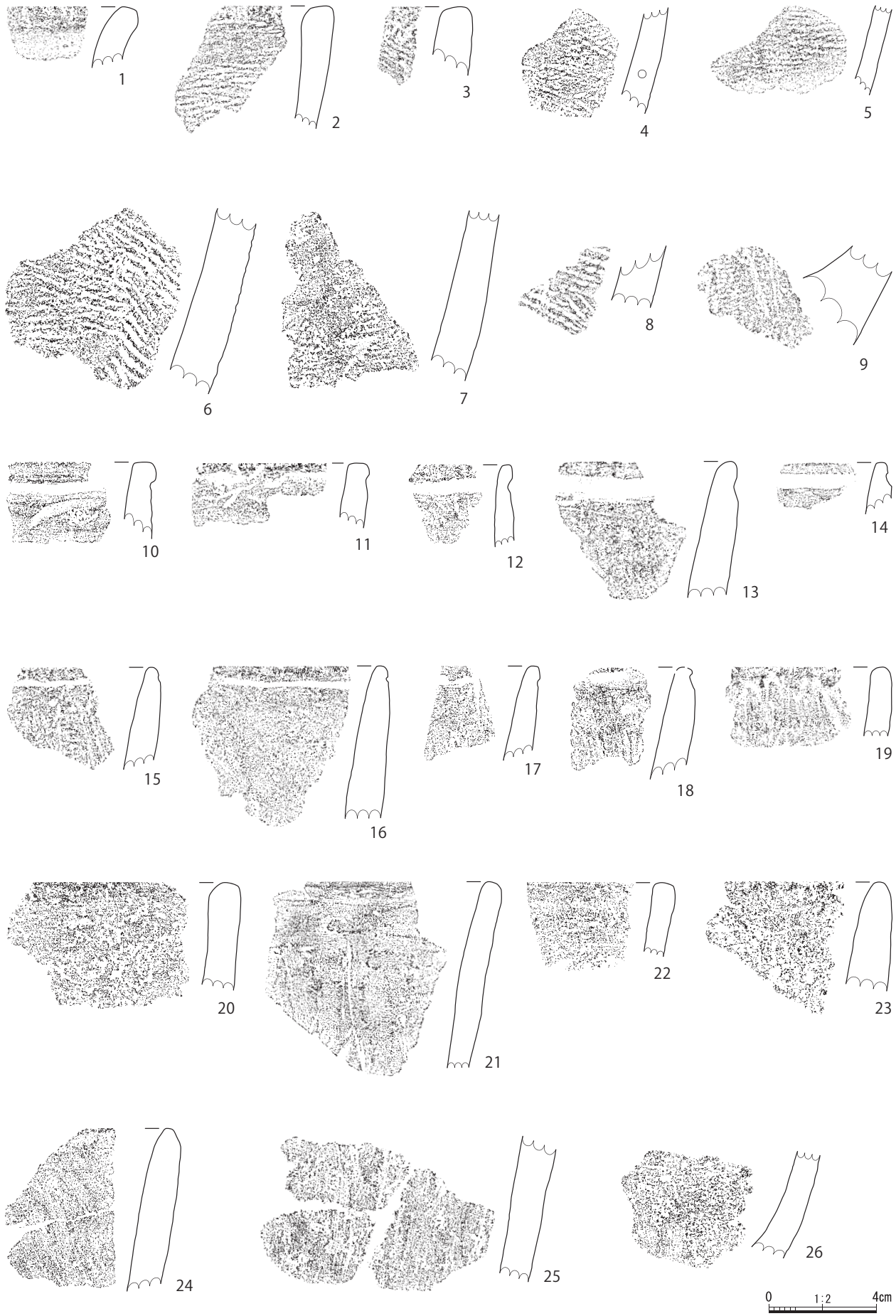

第 59 図　1Ｔ出土土器（２）



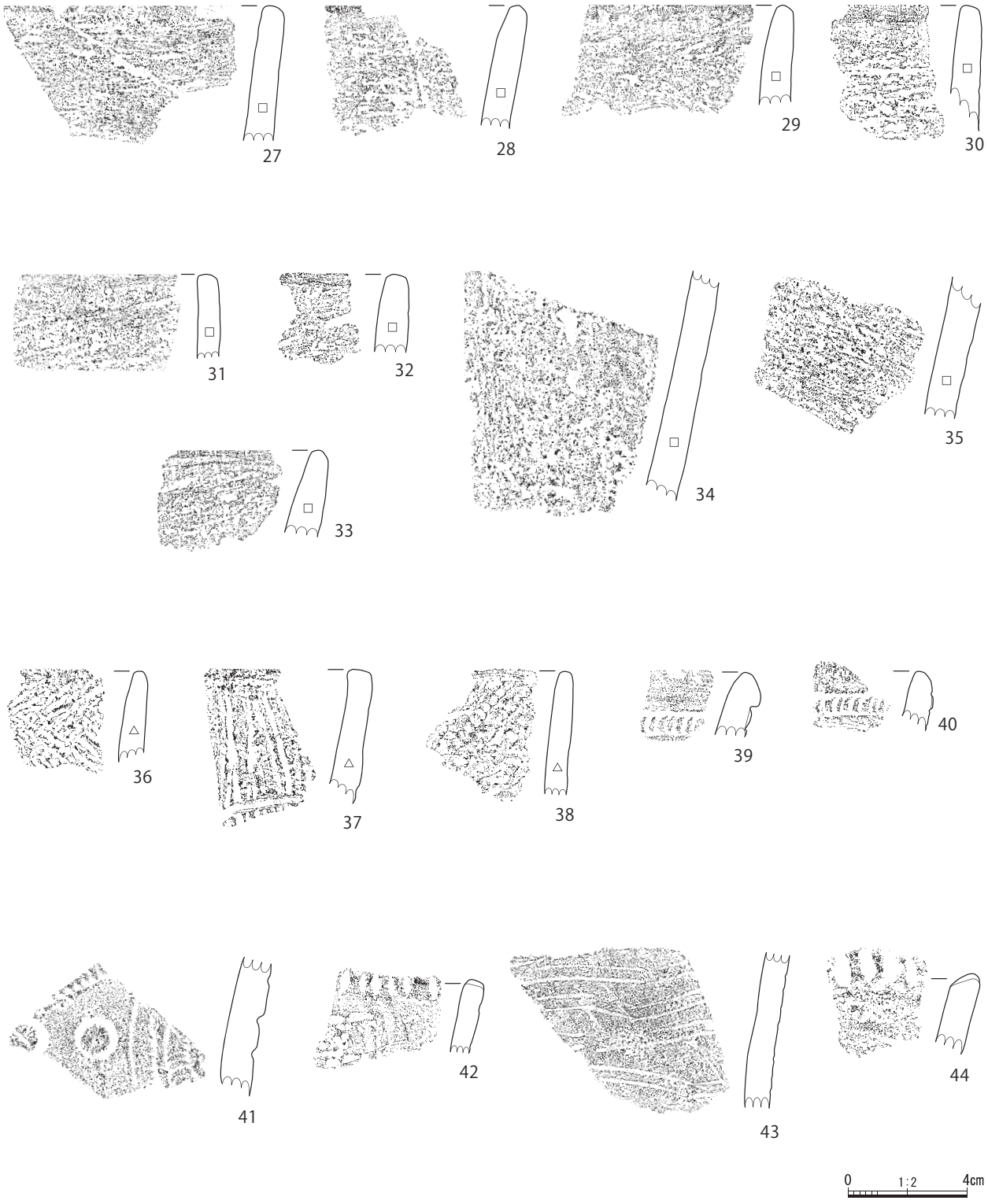

第 60 図　2Ｔ出土土器（１）



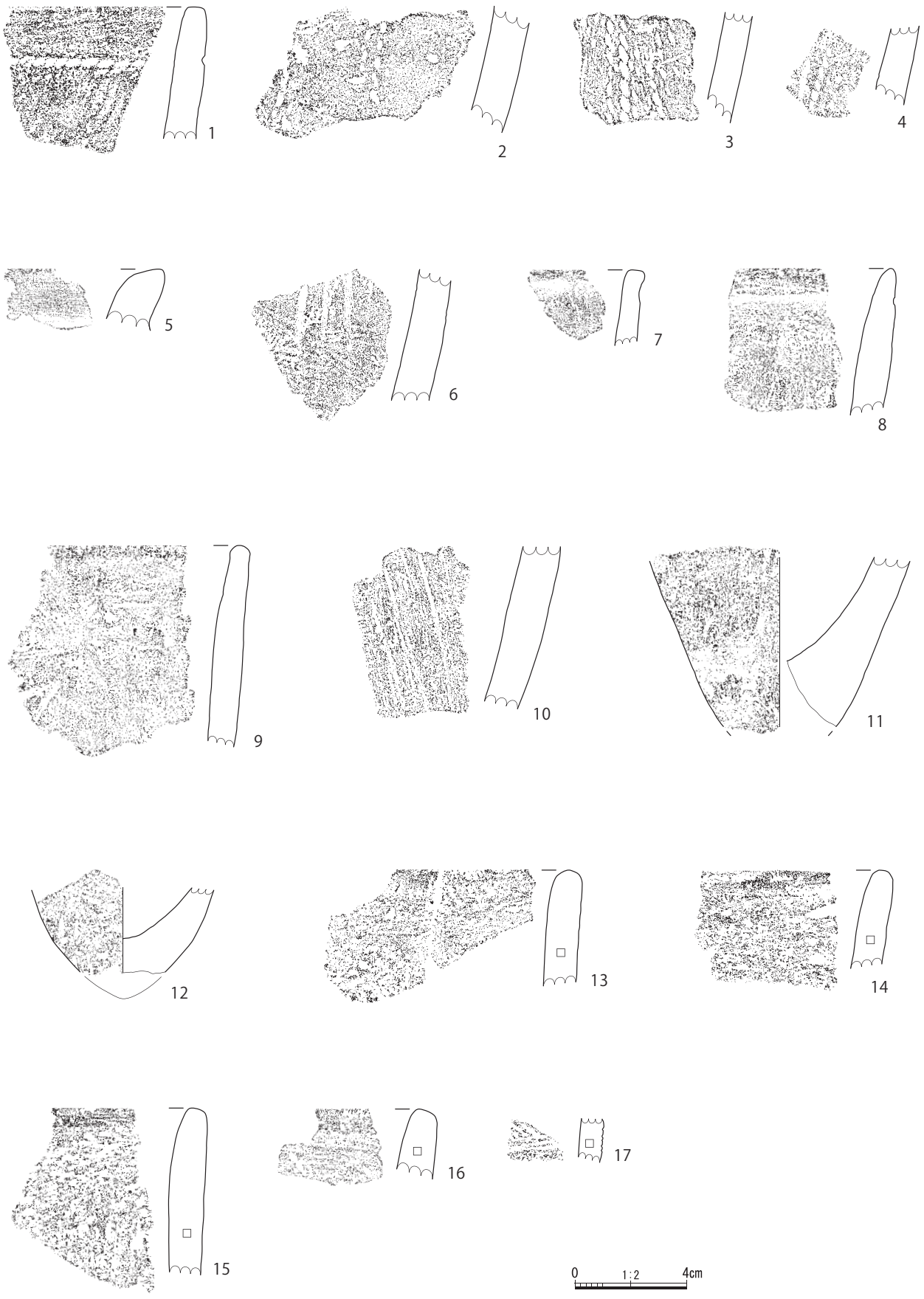

第 61 図　2T 出土土器（2）



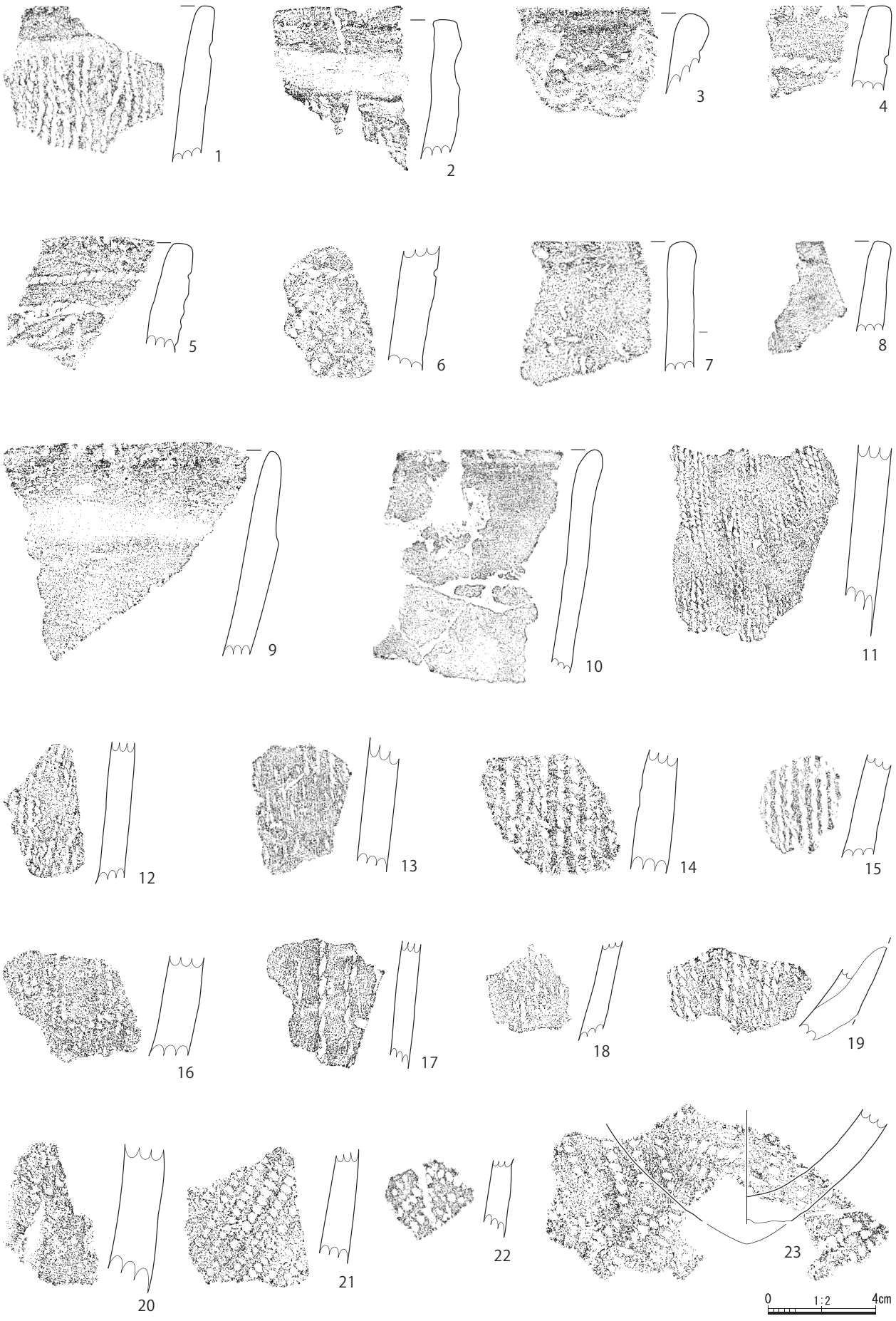

第 62 図　3T 出土土器（1）



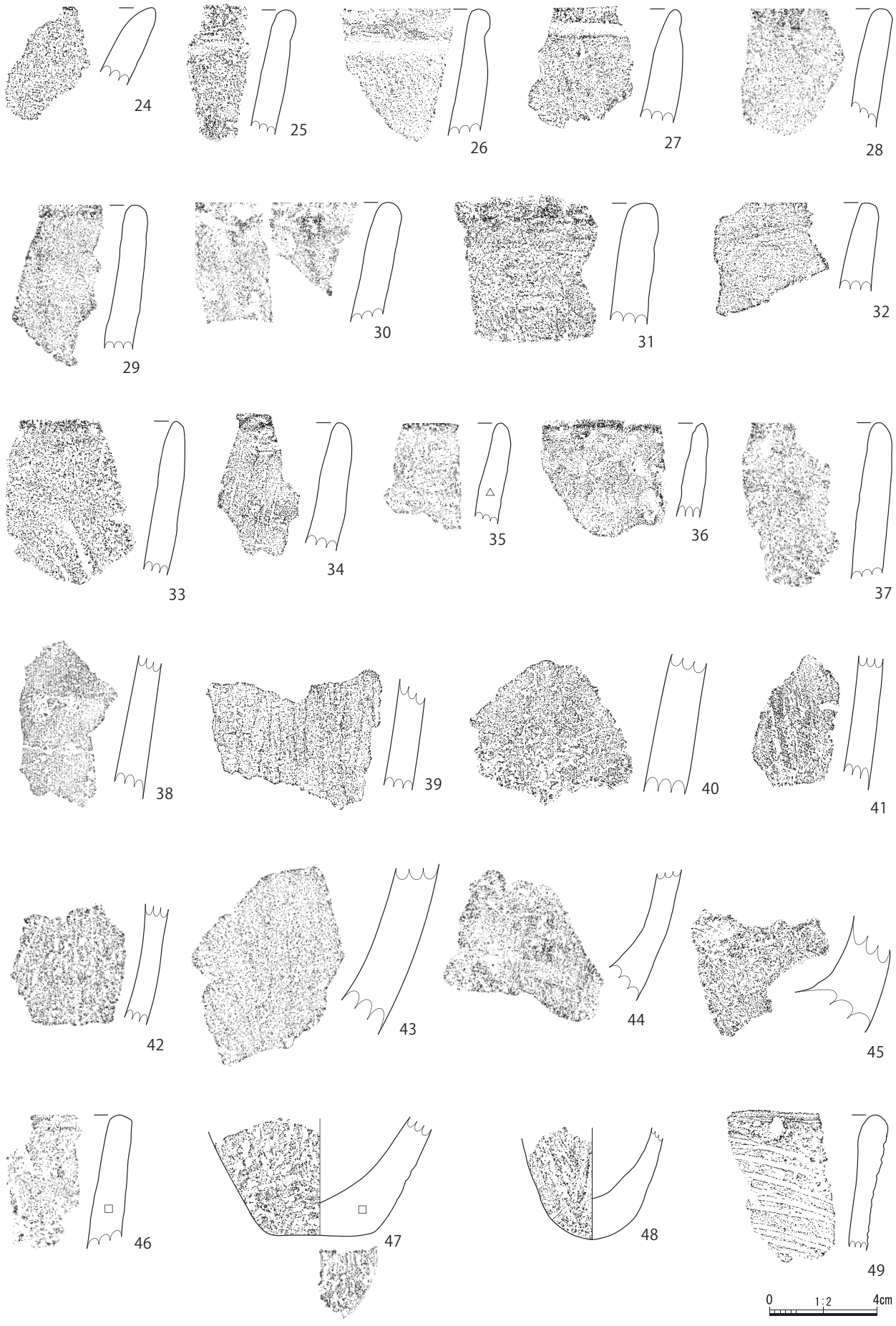

第 63 図　3T 出土土器（2）



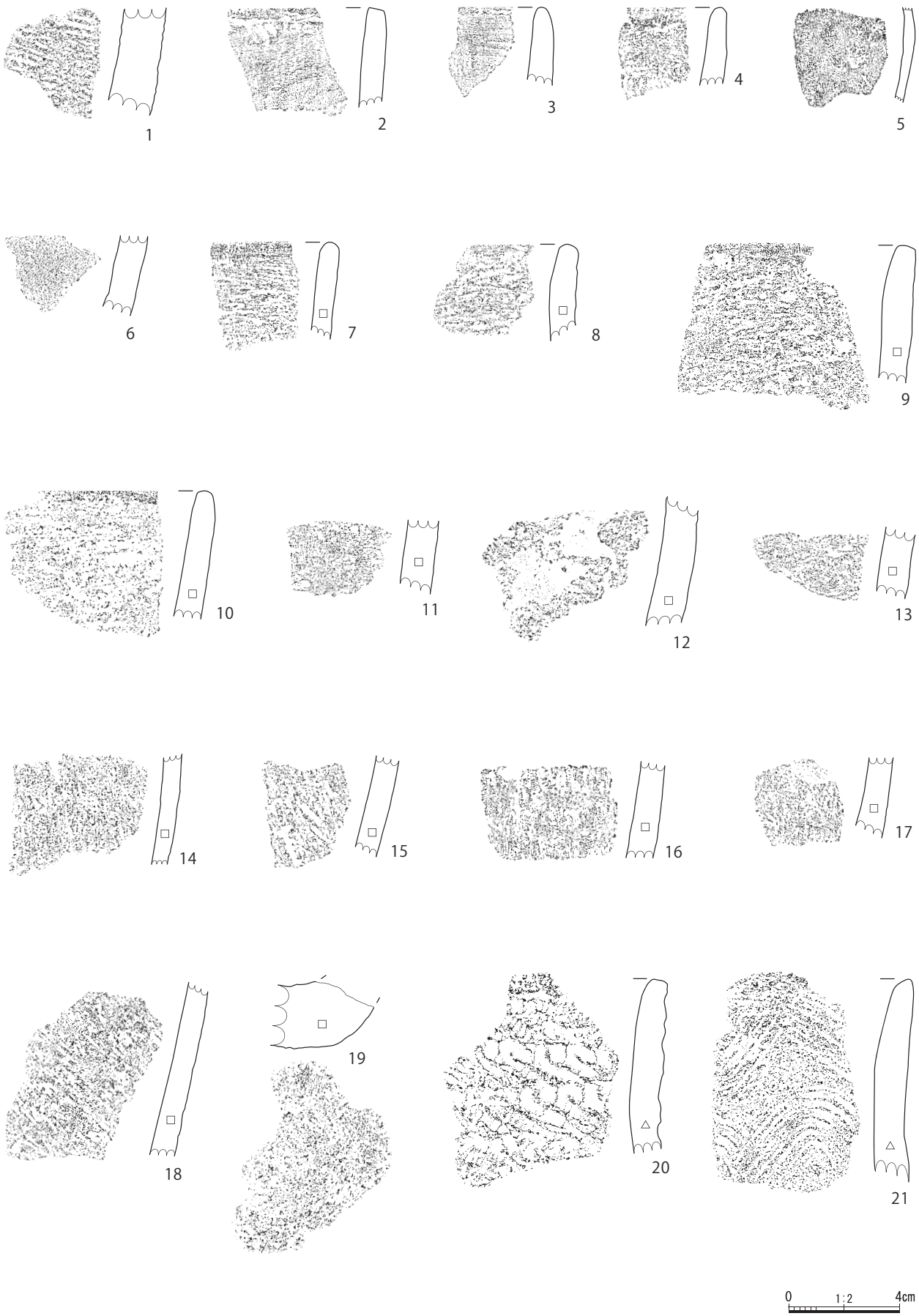

第 64 図　4T 出土土器



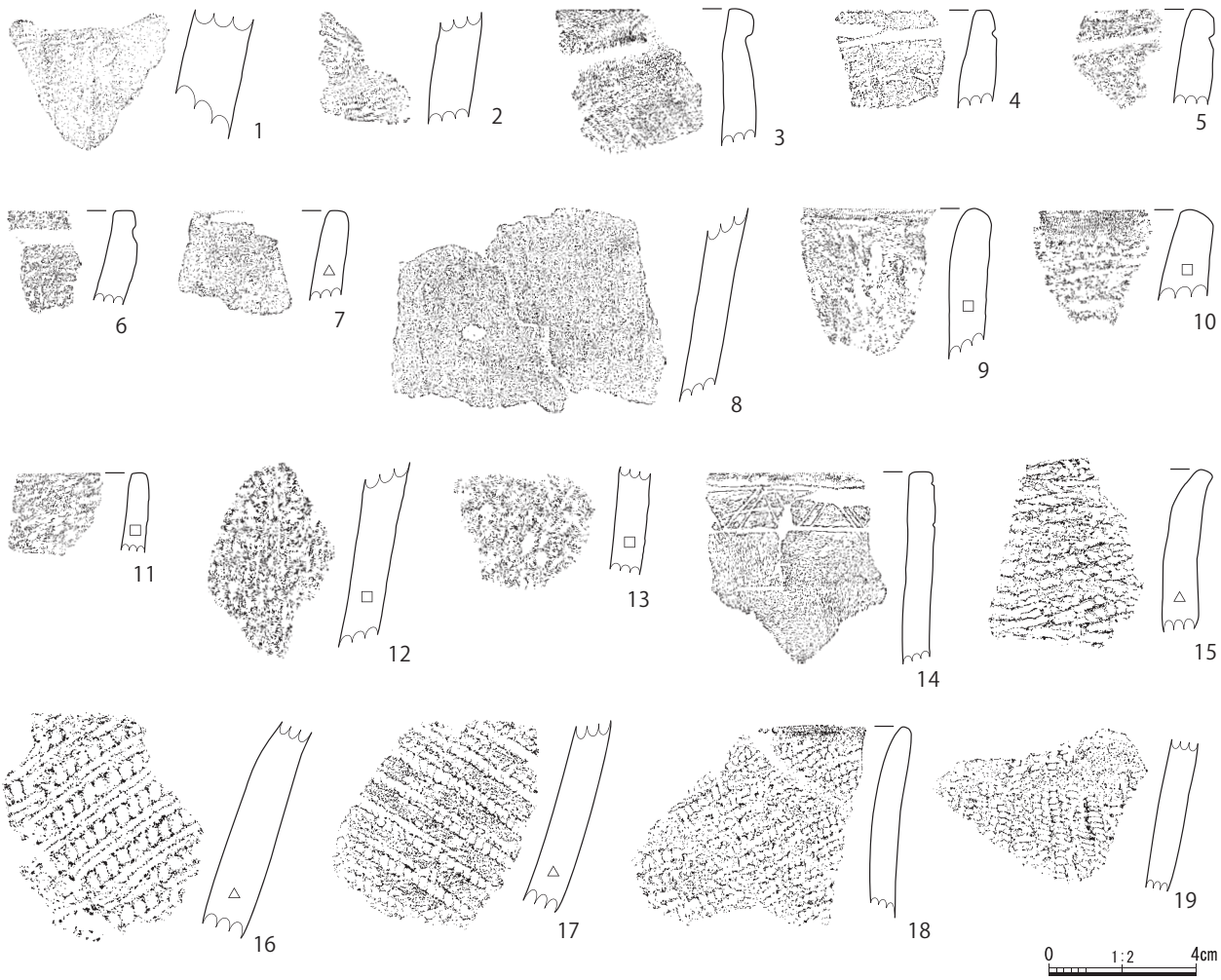

第 65 図　5T 出土土器（1）



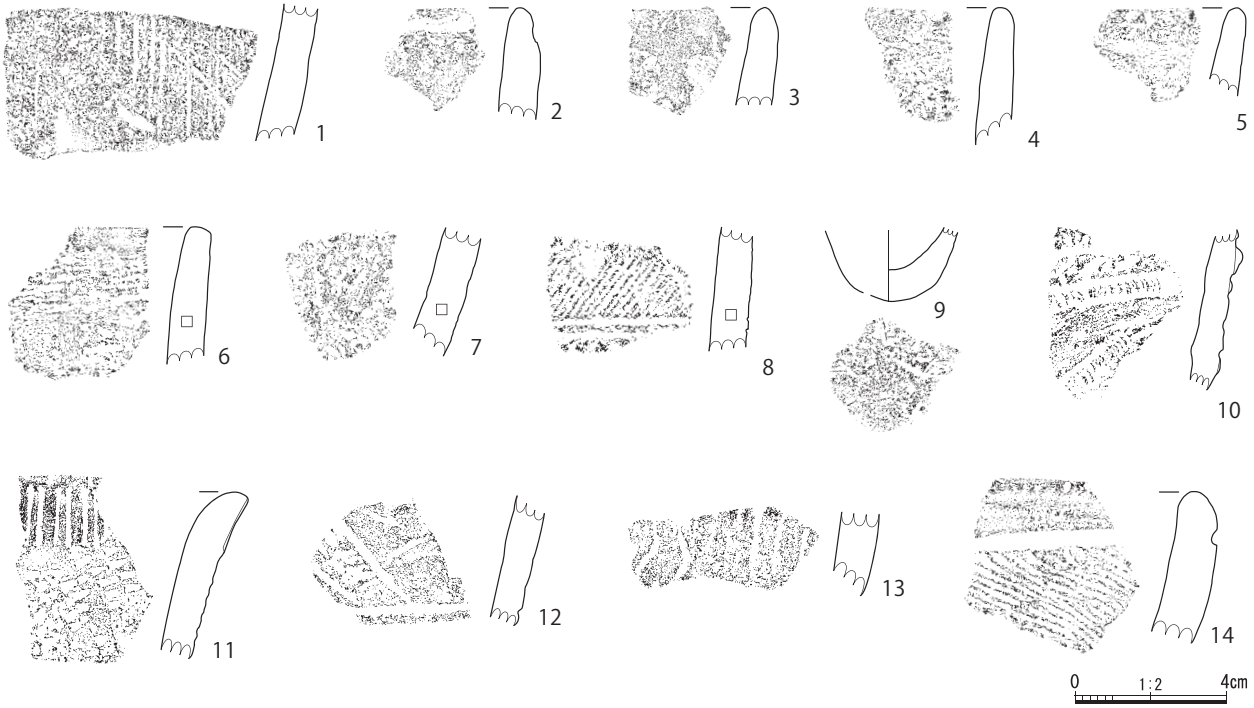

第 66 図　5T 出土土器（2）



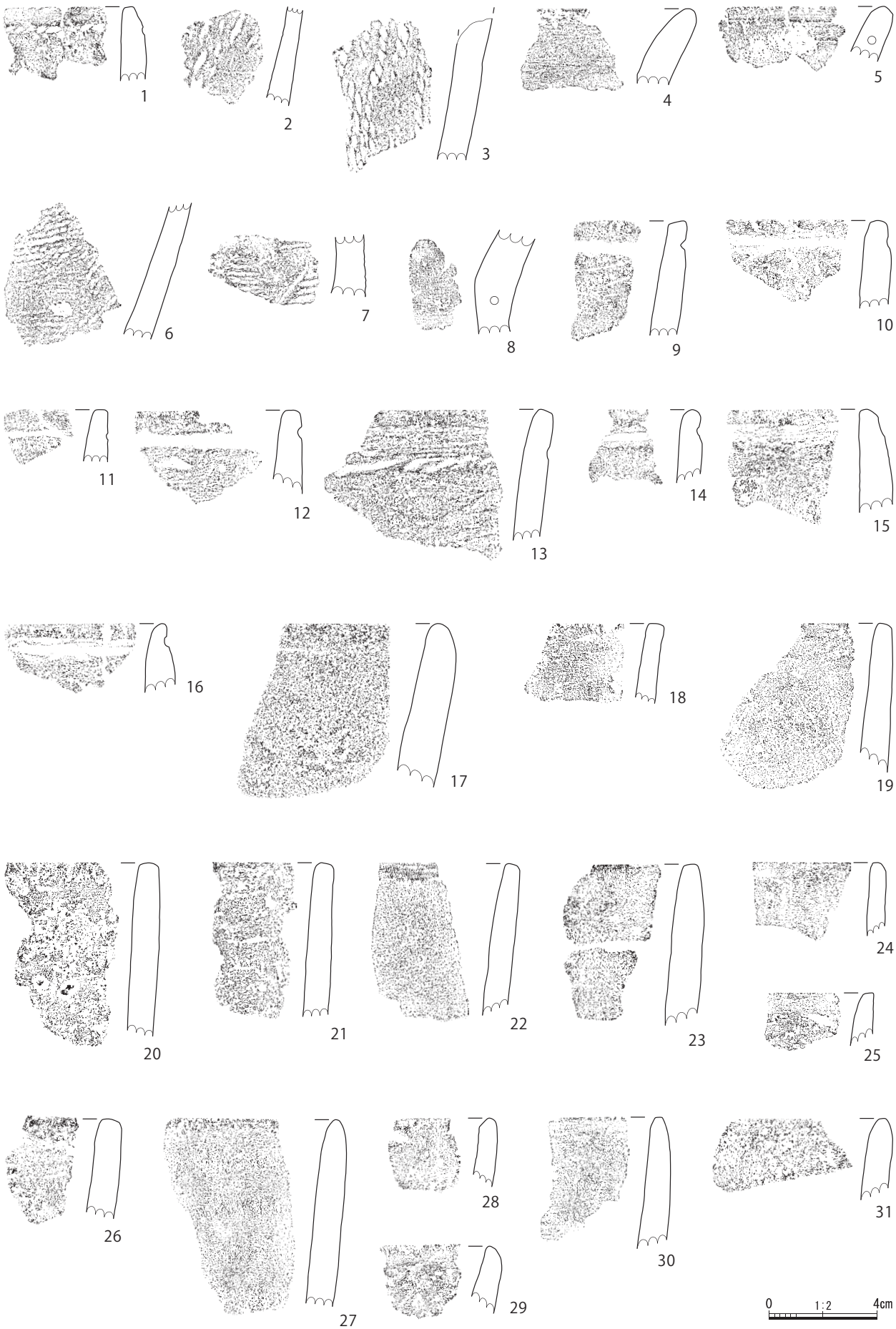

第 67 図　6 T 出土土器



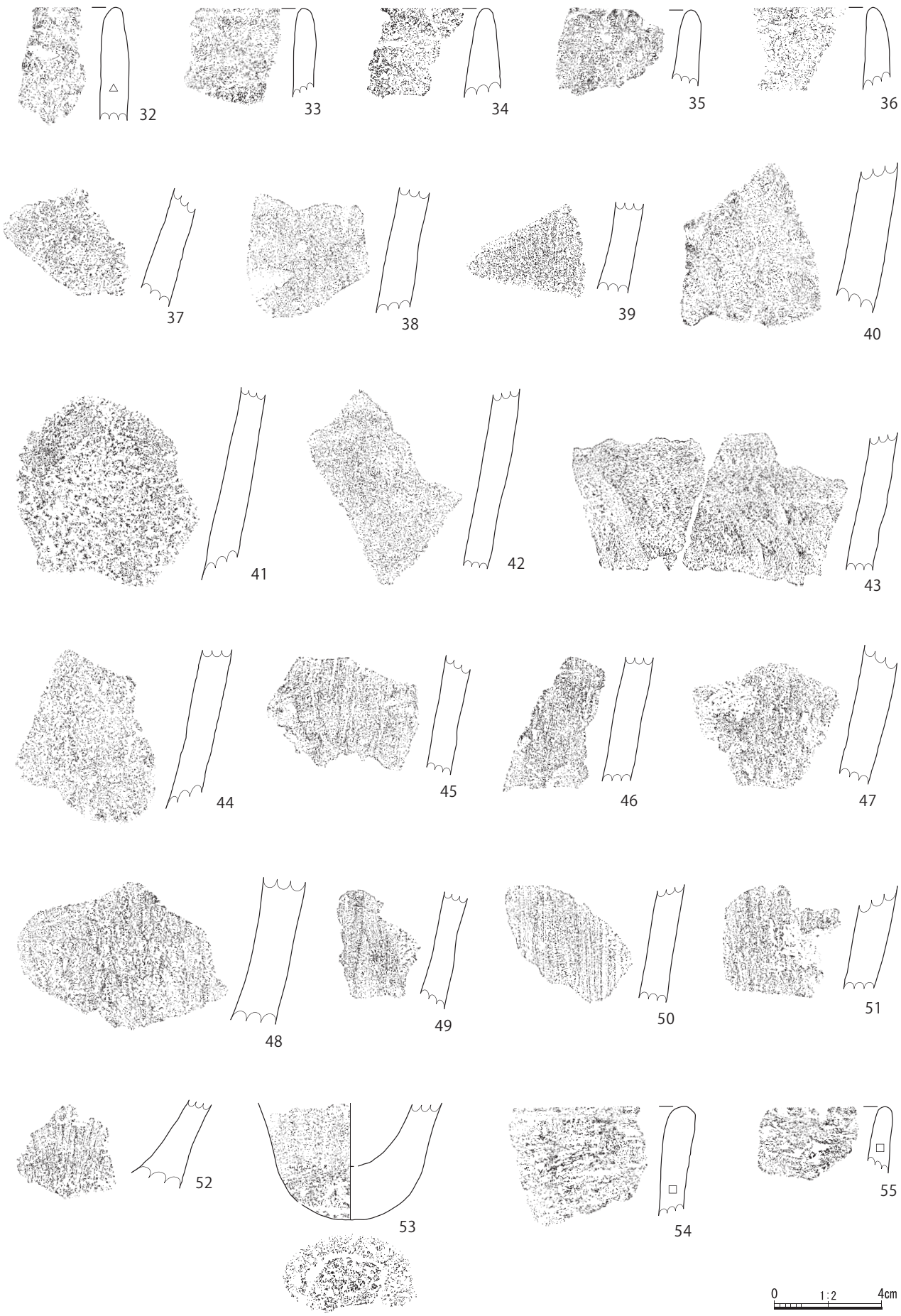

第 68 図　7T 出土土器



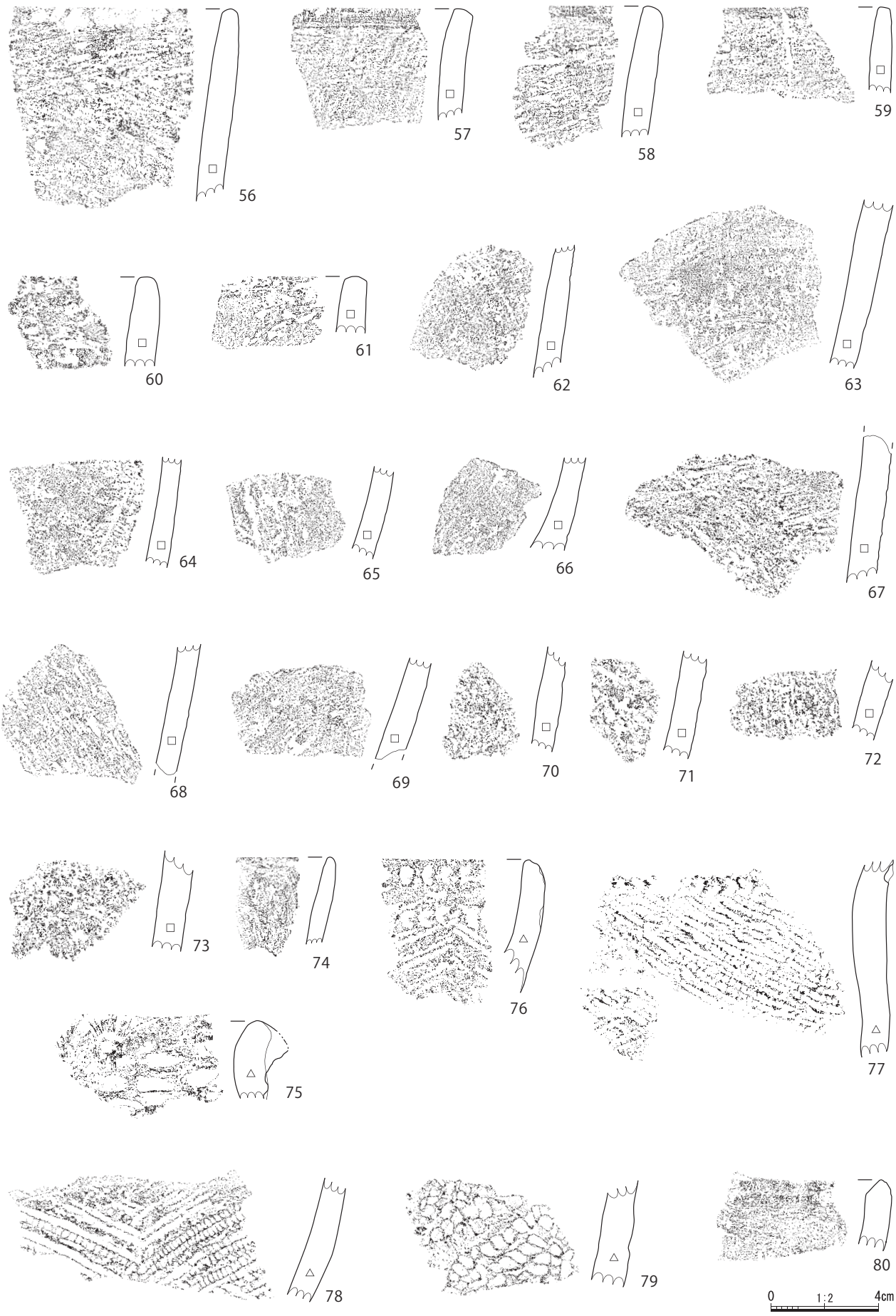

第 69 図　8T 出土土器



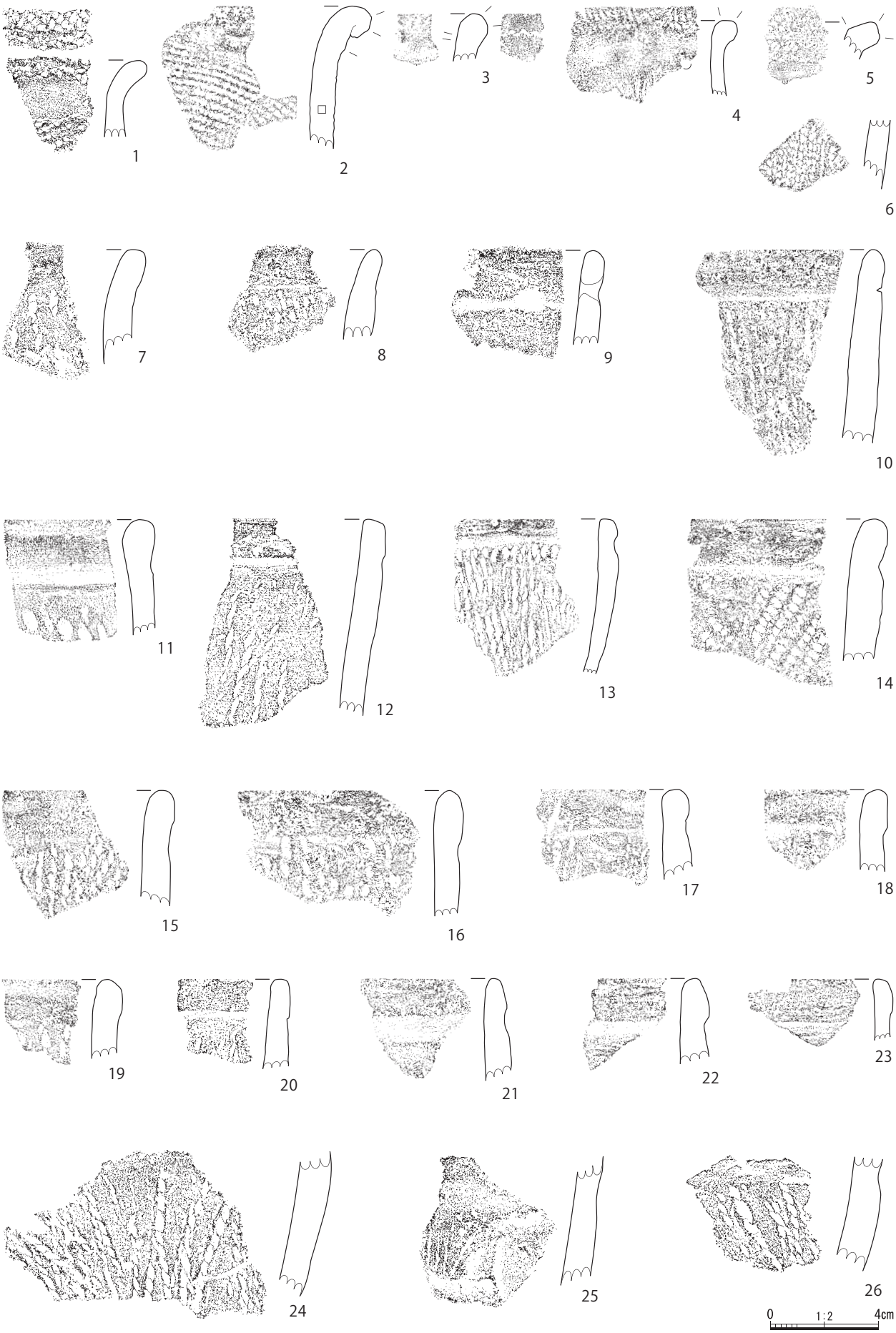

第 70 図　9T 出土土器（1）



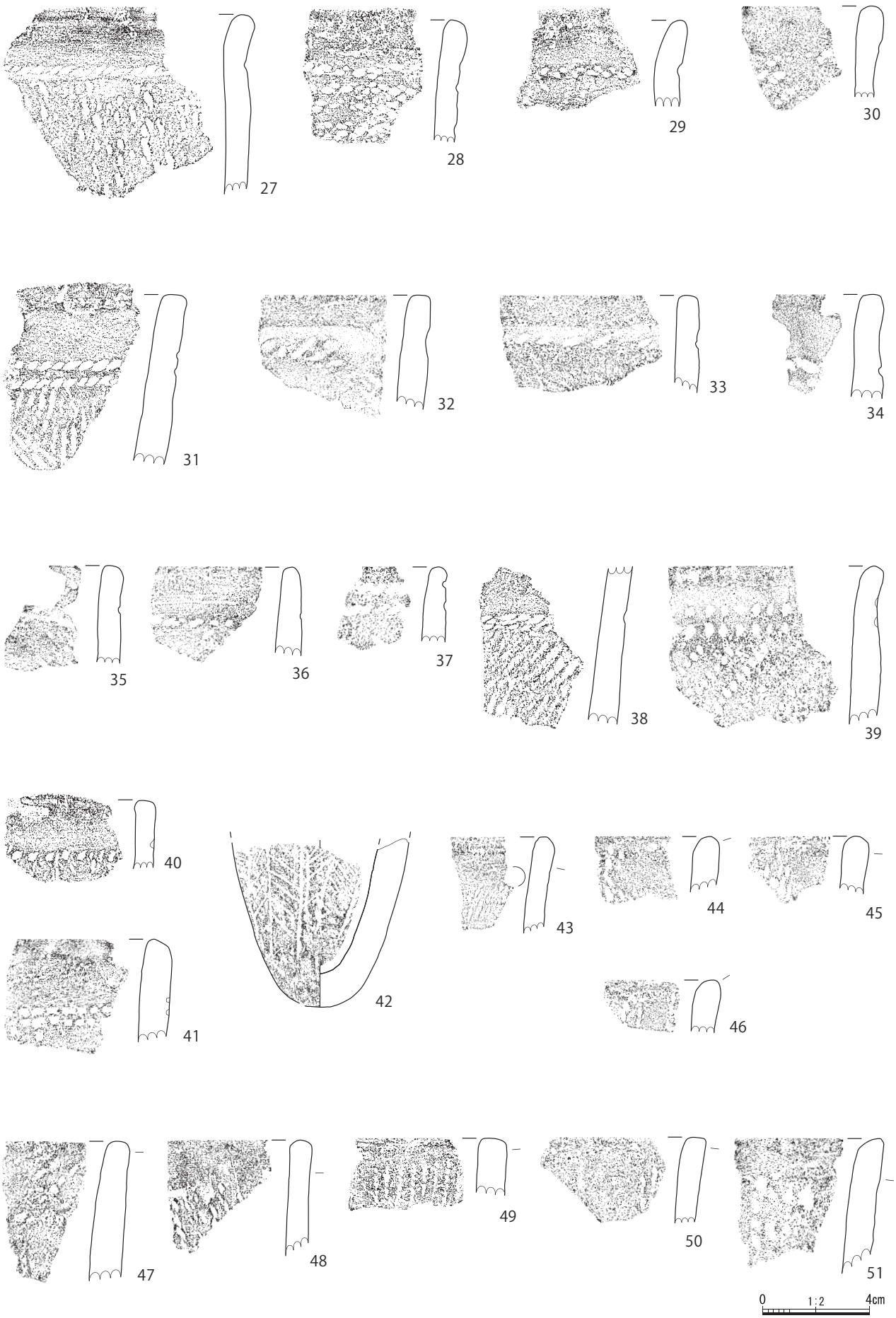

第 71 図　9T 出土土器（2）



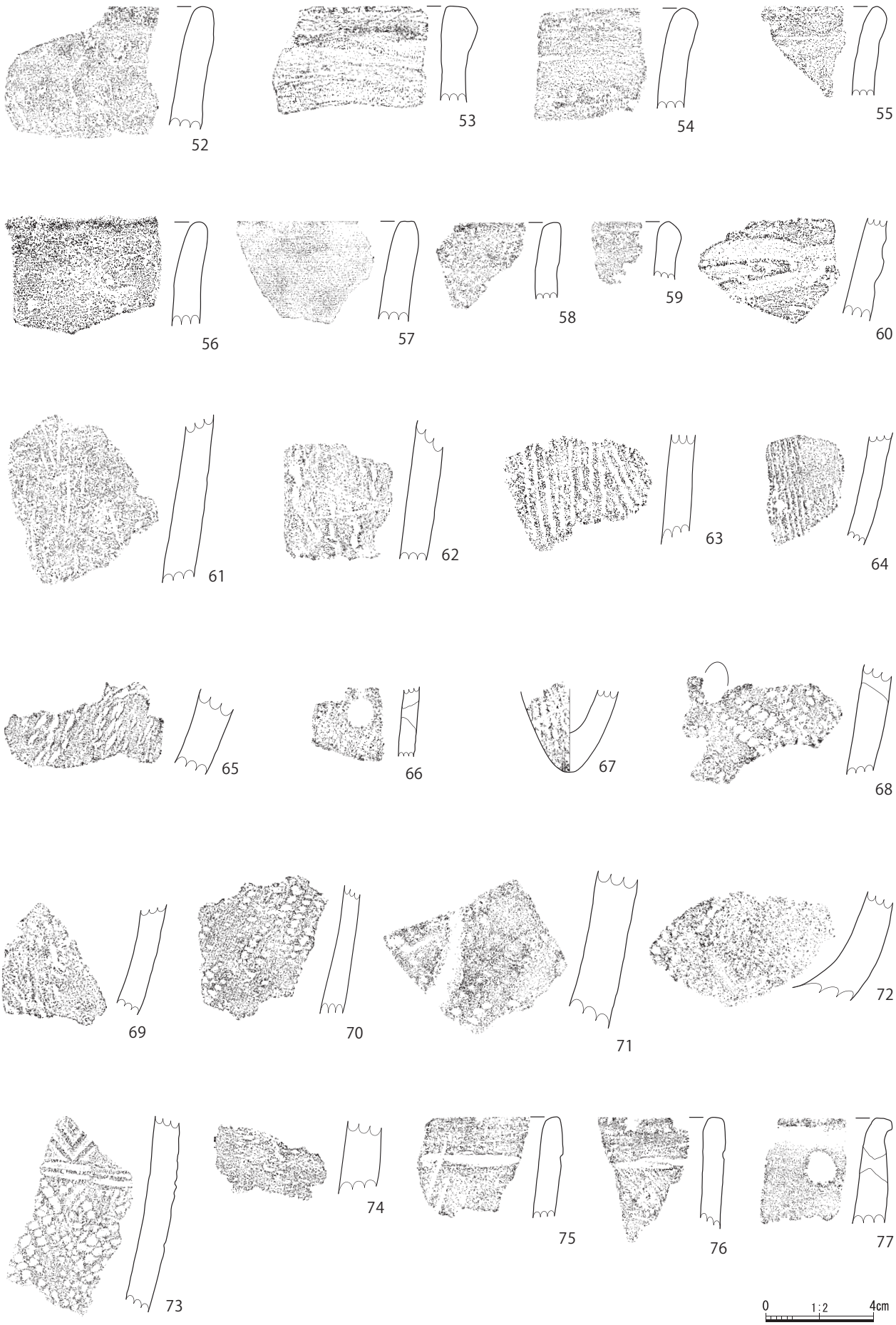

第 72 図　9T 出土土器（3）



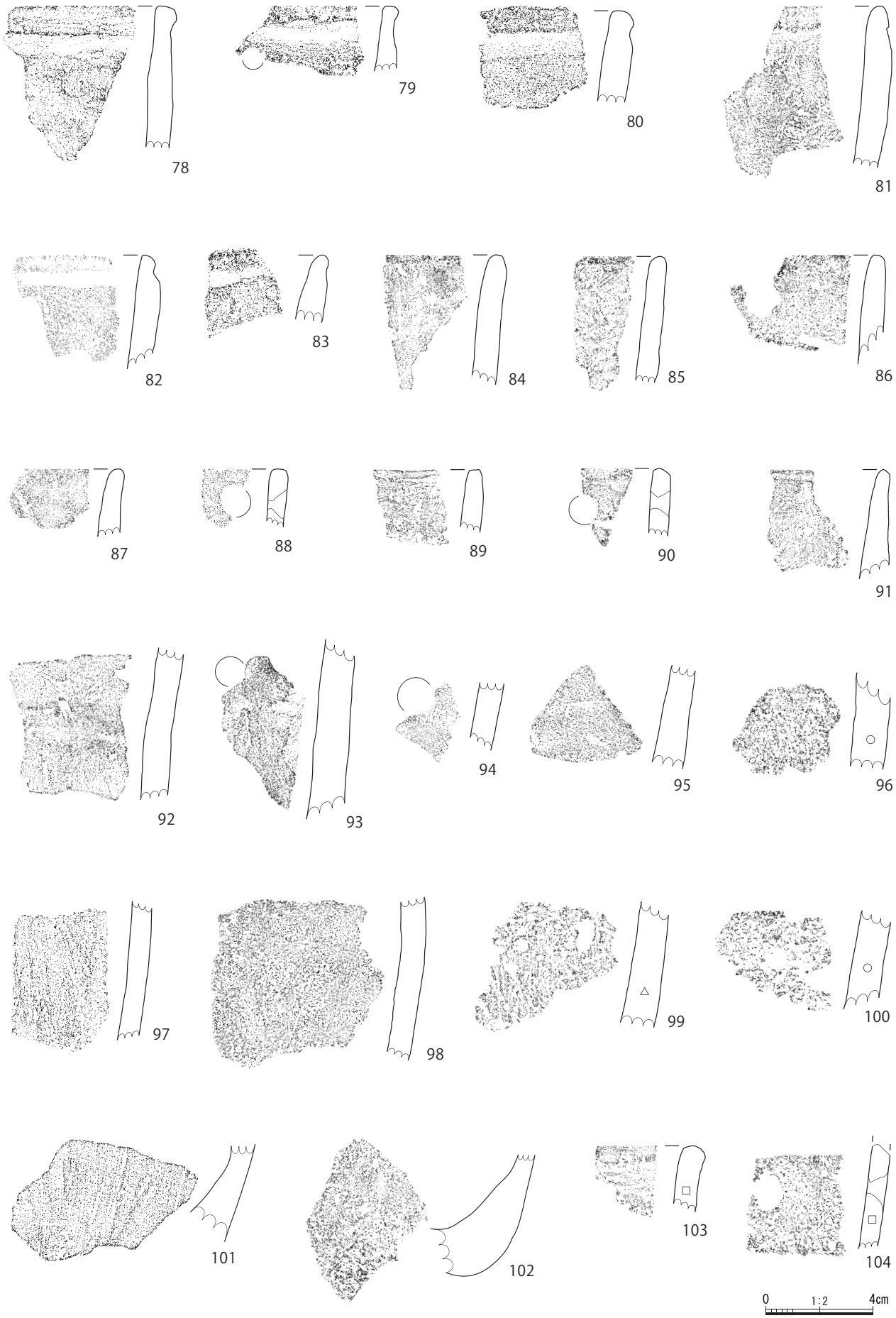

第 73 図　10T 出土土器（１）




第 74 図　10T 出土土器（2）

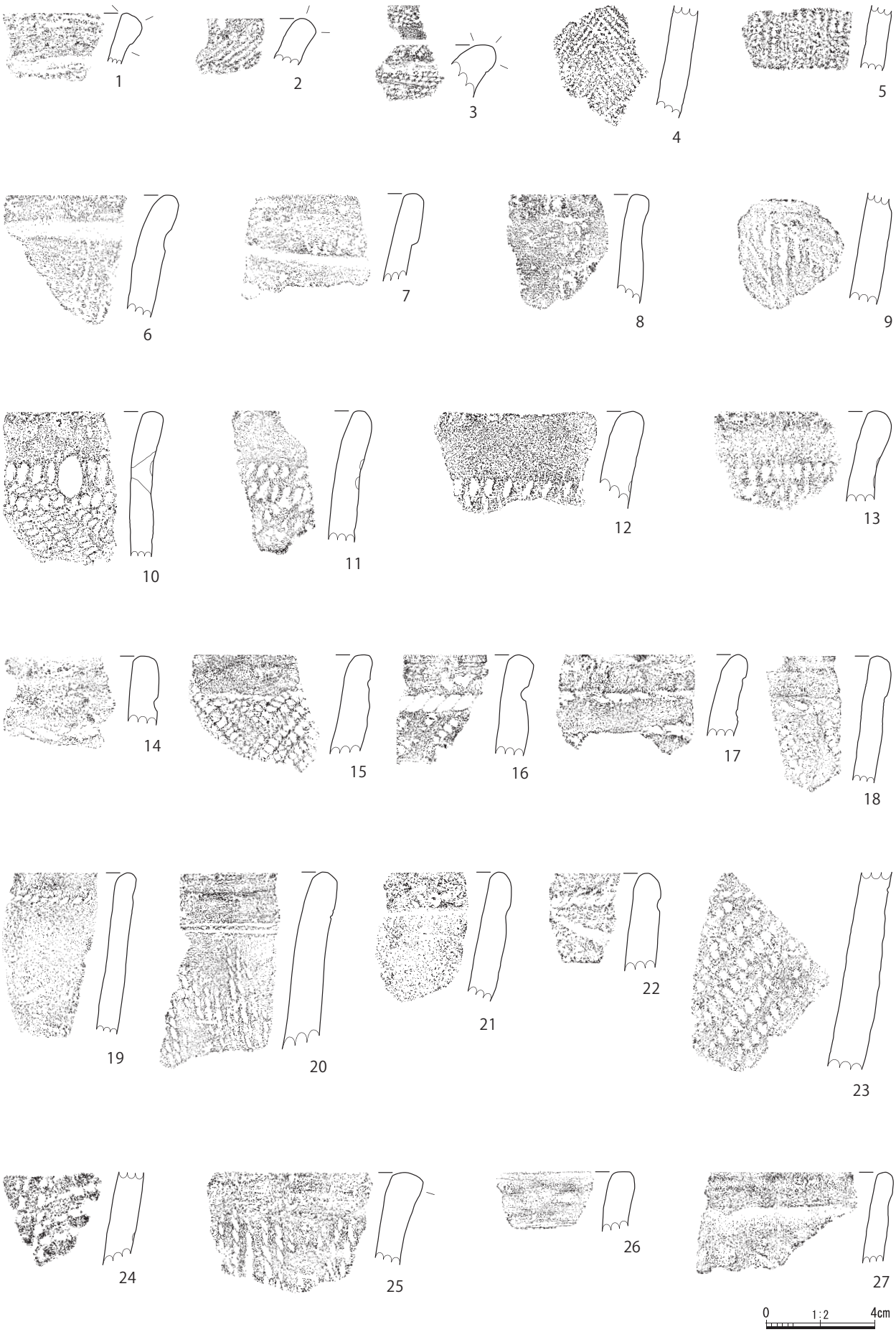



第 75 図　10T 出土土器（3）

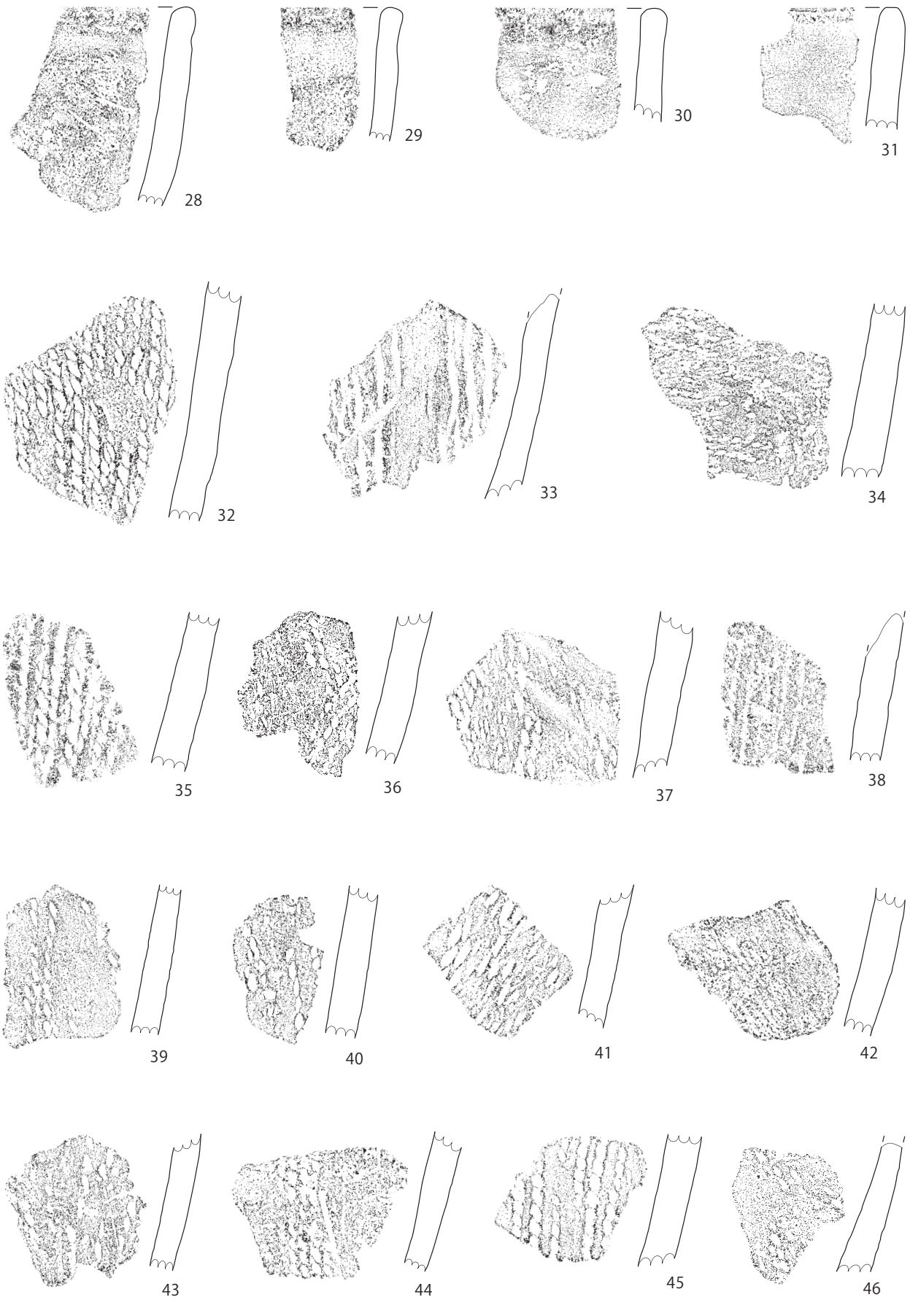



第 76 図　10T 出土土器（４）

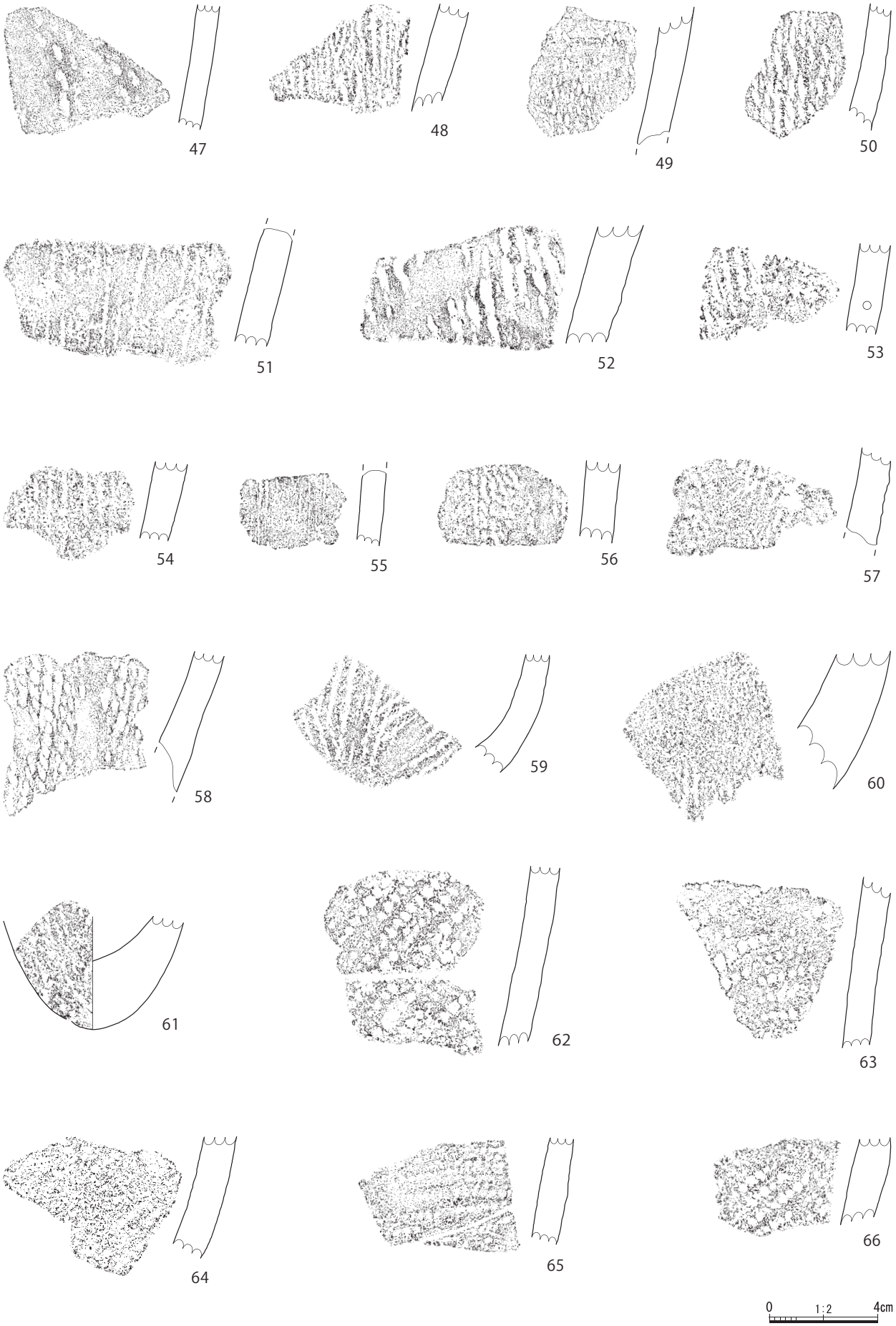
第 77 図　10T 出土土器（５）



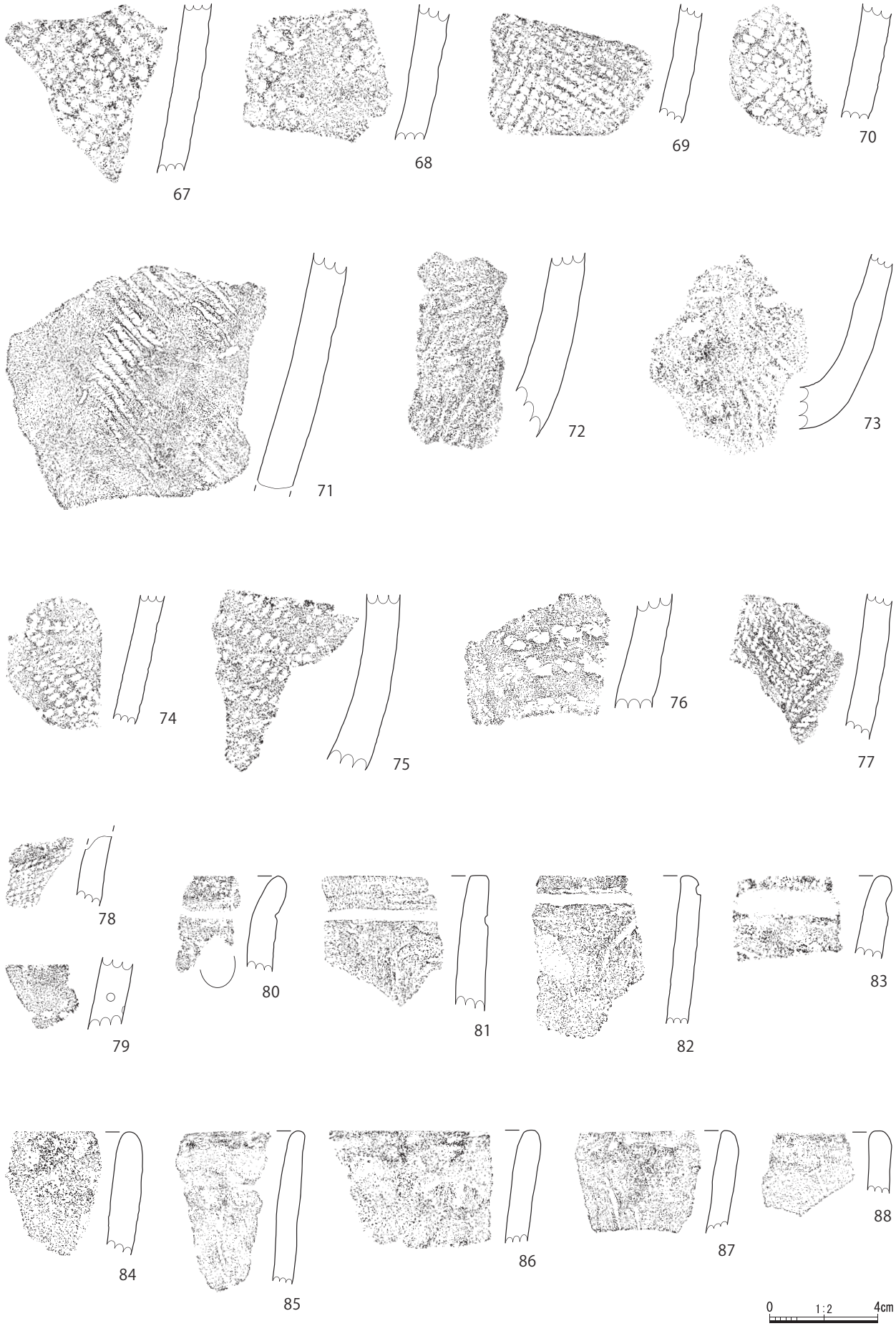

第 78 図　11T 出土土器（1）



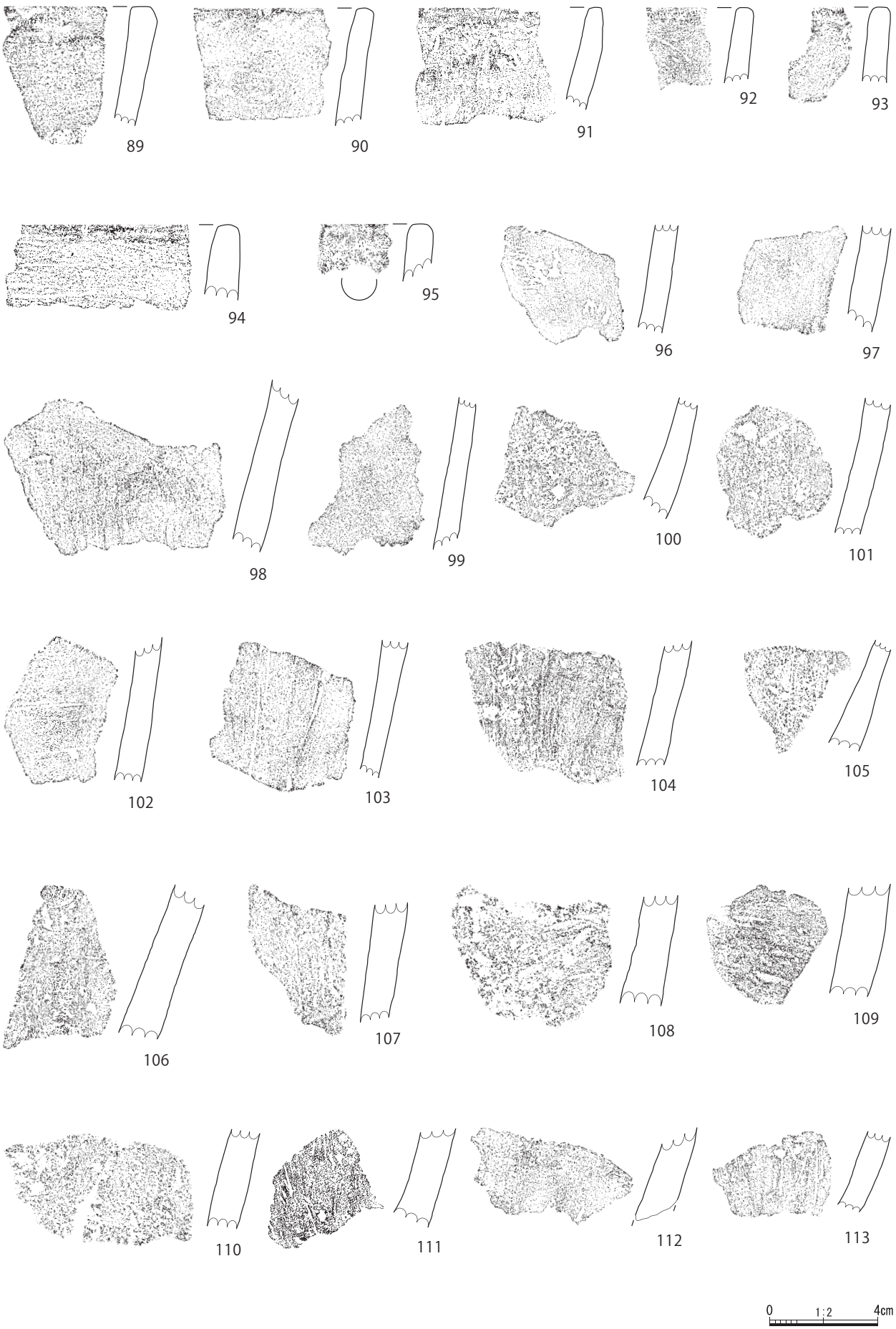

第 79 図　11T 出土土器（２）



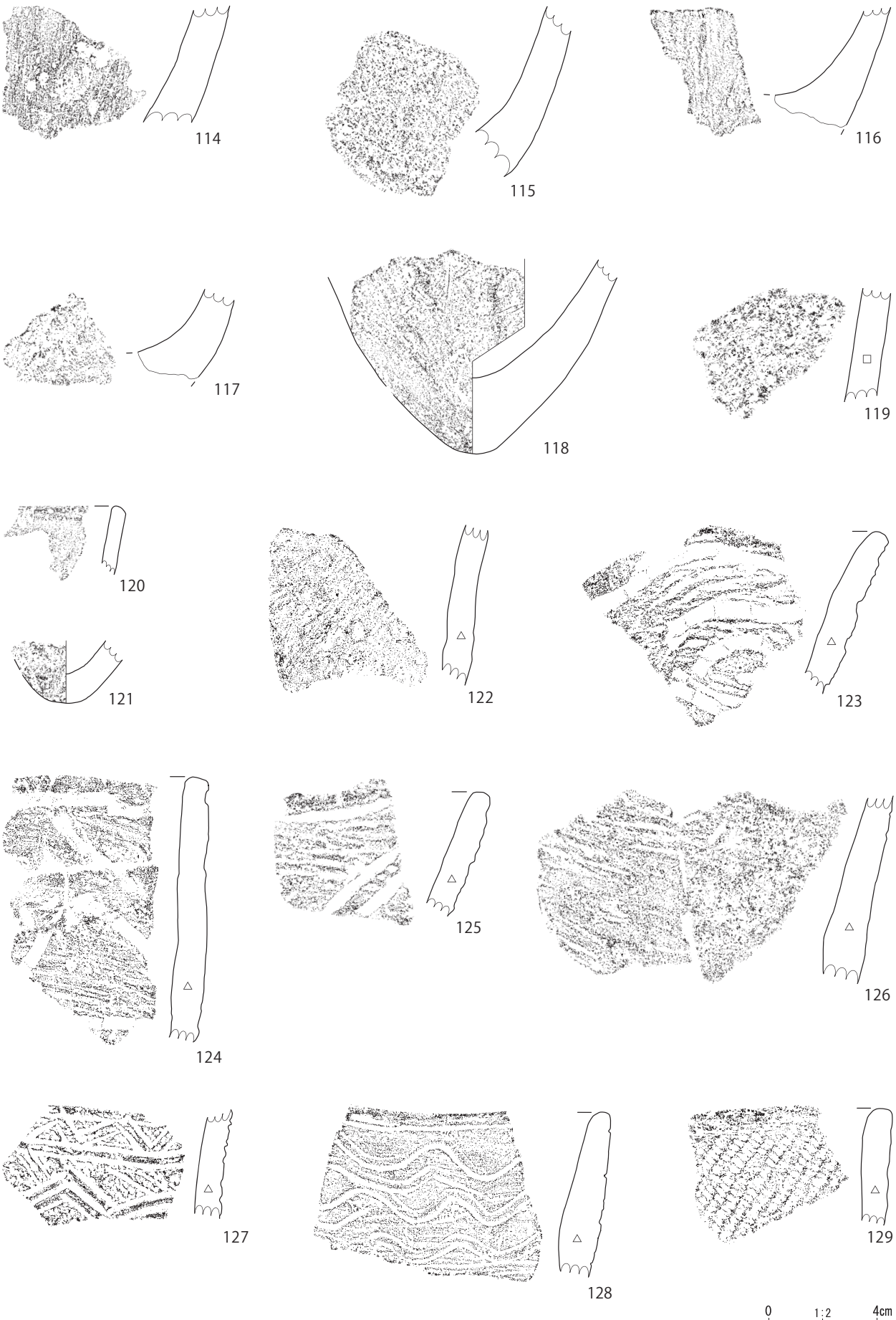

第 80 図　11T 出土土器（3）



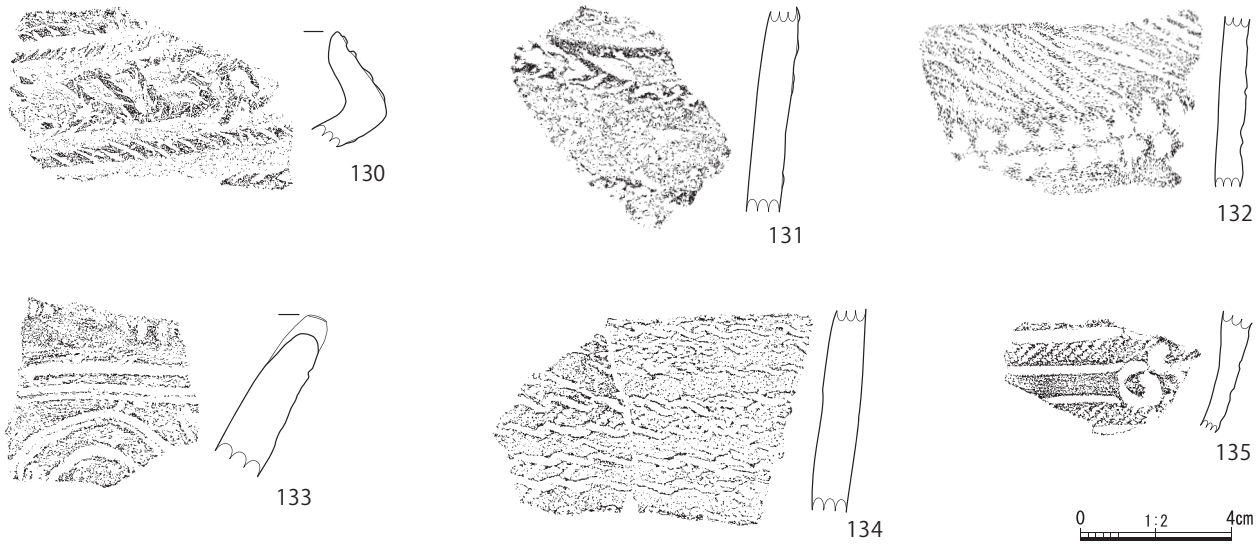

第 81 図　11T 出土土器（４）



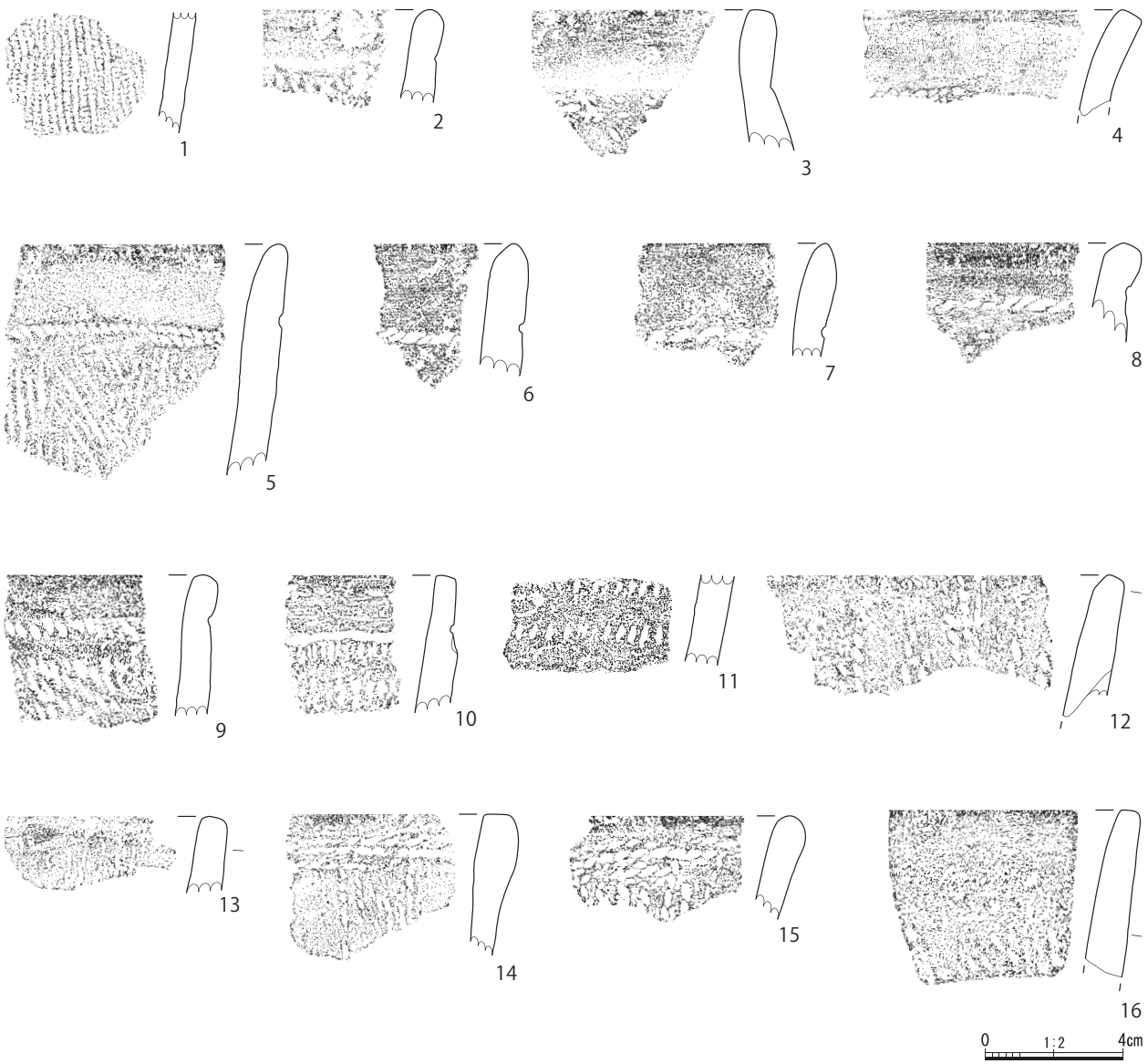

第 82 図　11T 出土土器（5）



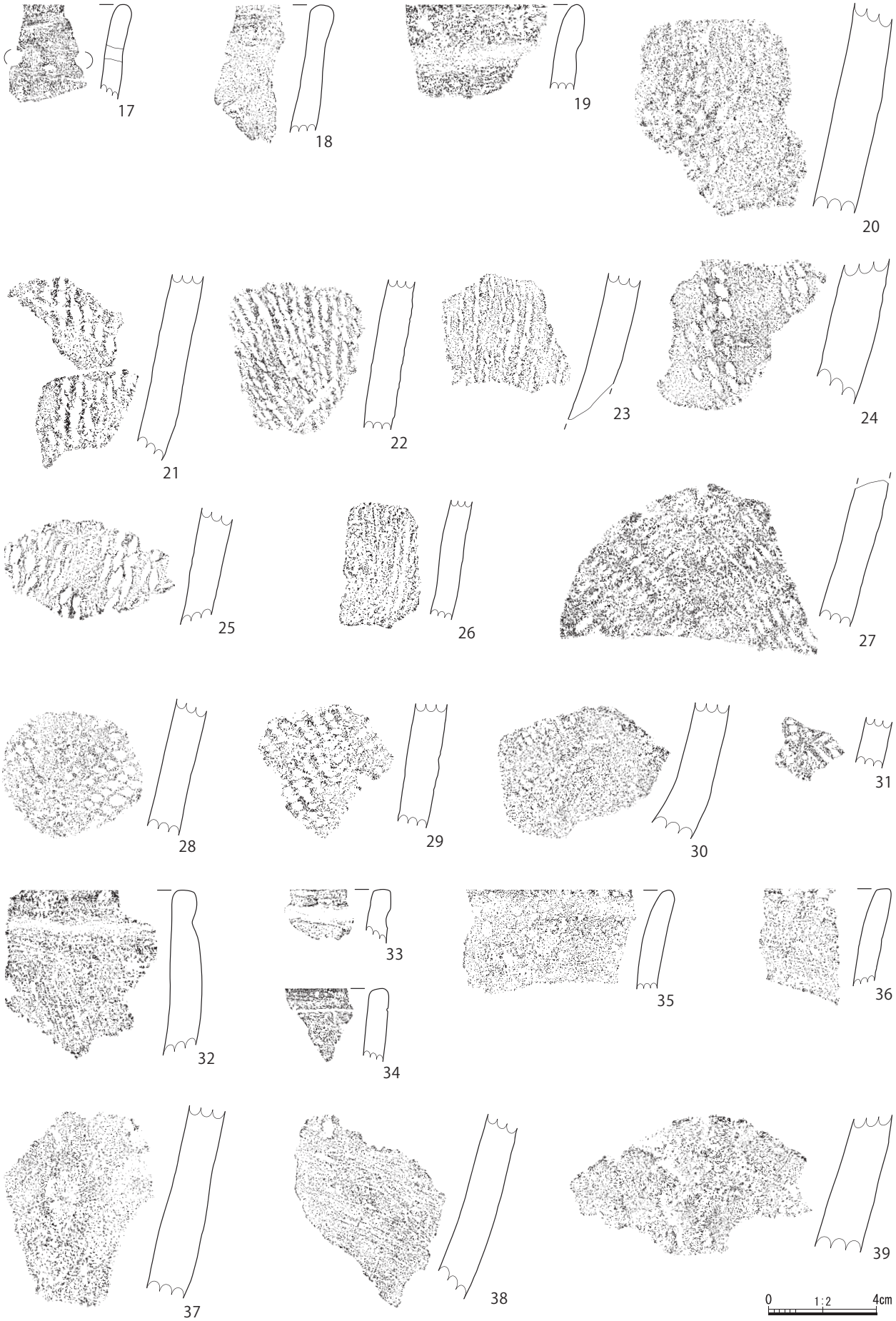

第 83 図　11T 出土土器（６）



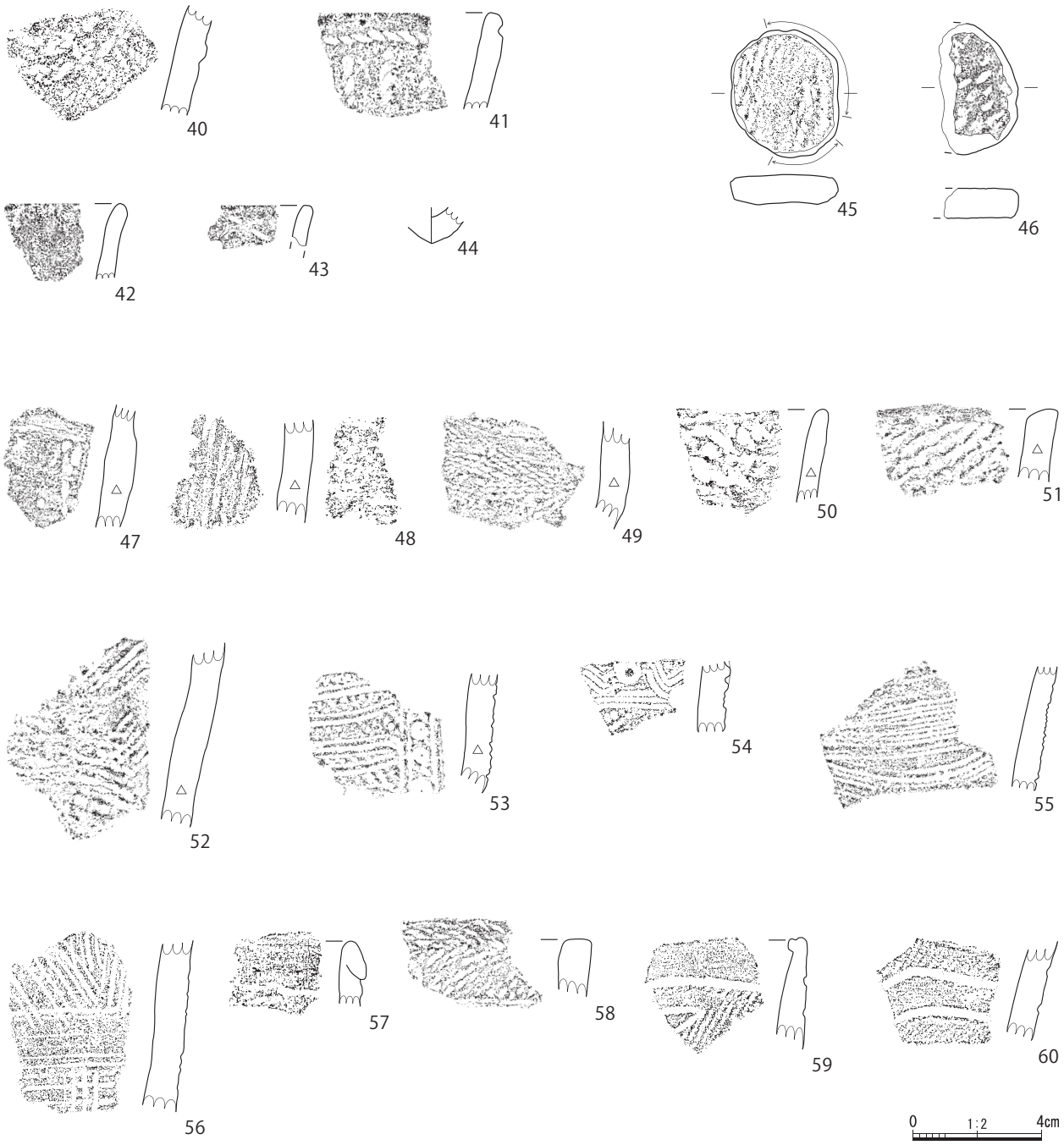

第 84 図　11T 出土土器（７）



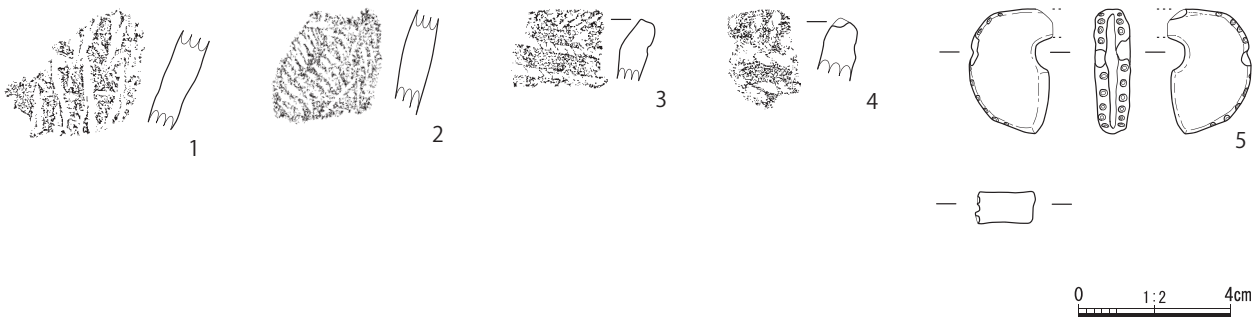

第 85 図　12T 出土土器（１）



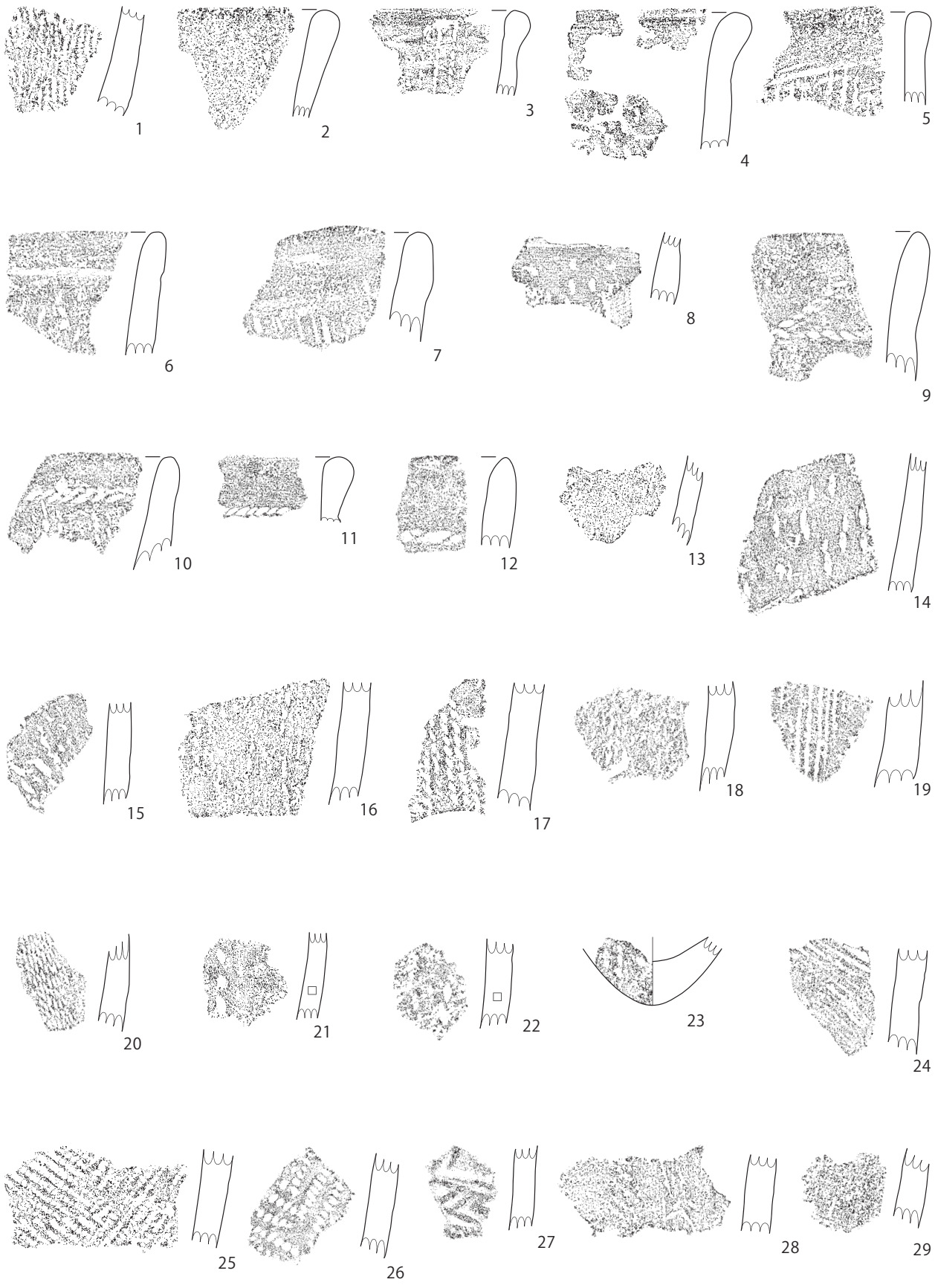

第 86 図　12T 出土土器（２）



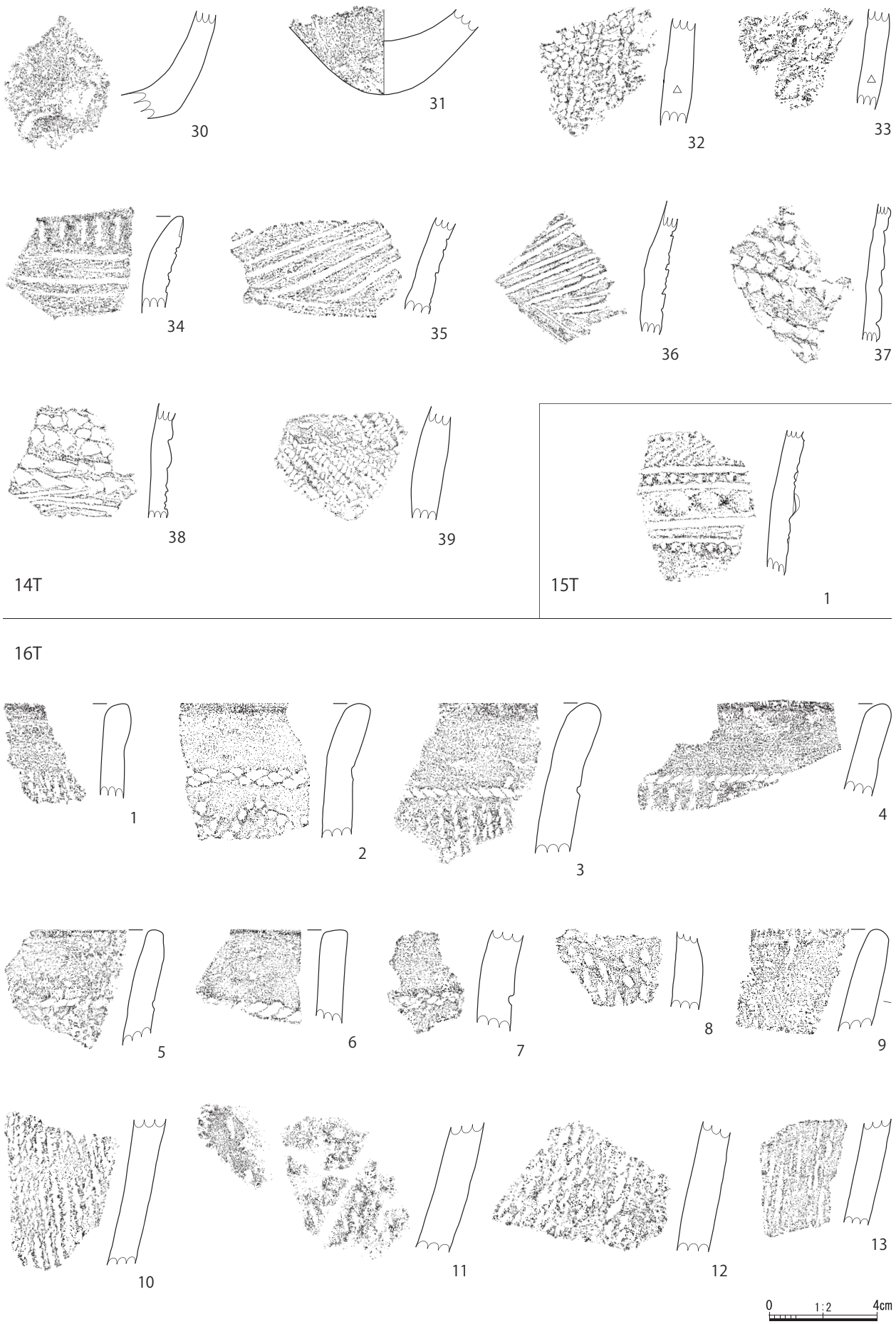

第 87 図　12T 出土土器（３）



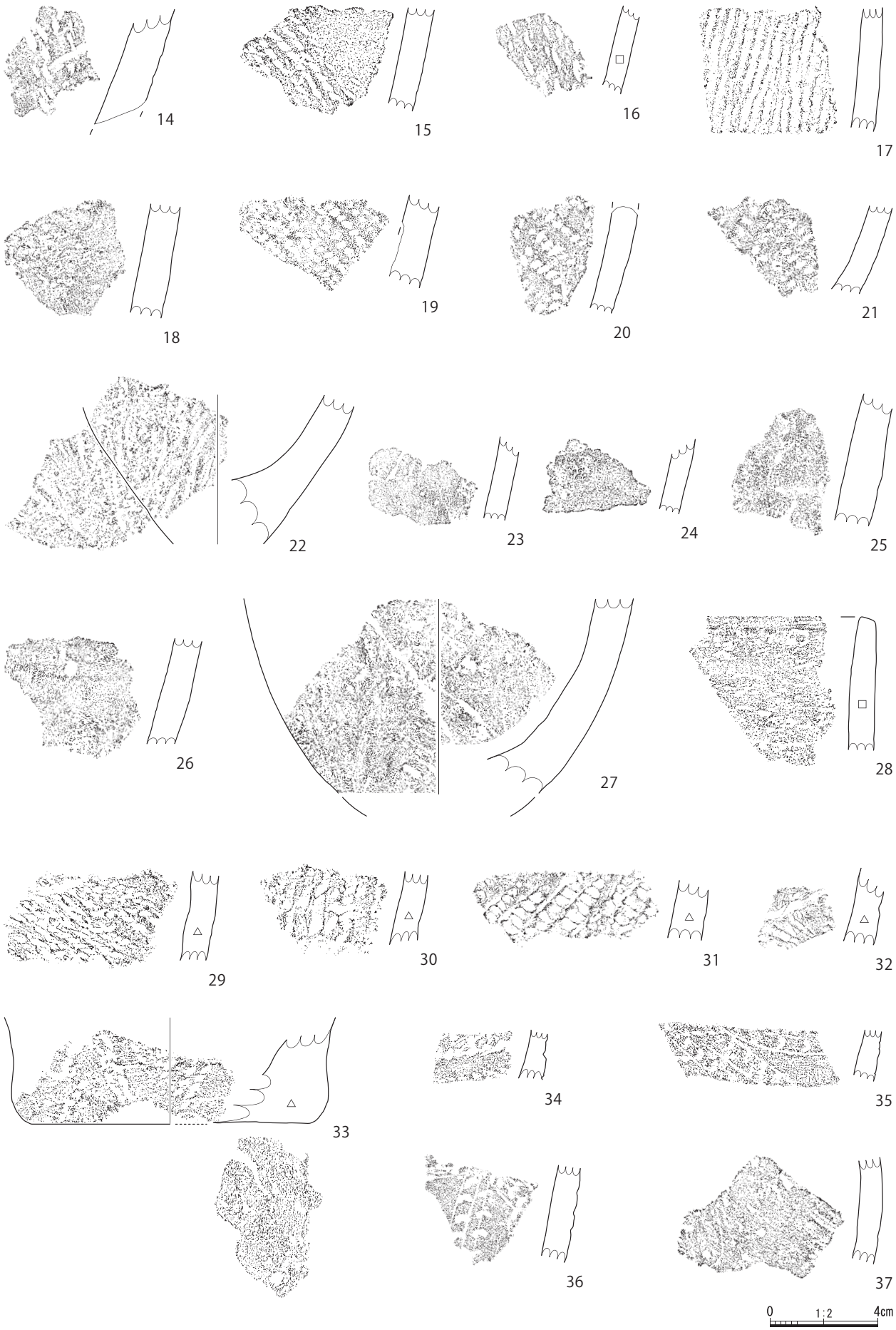

第 88 図　13T 出土土器



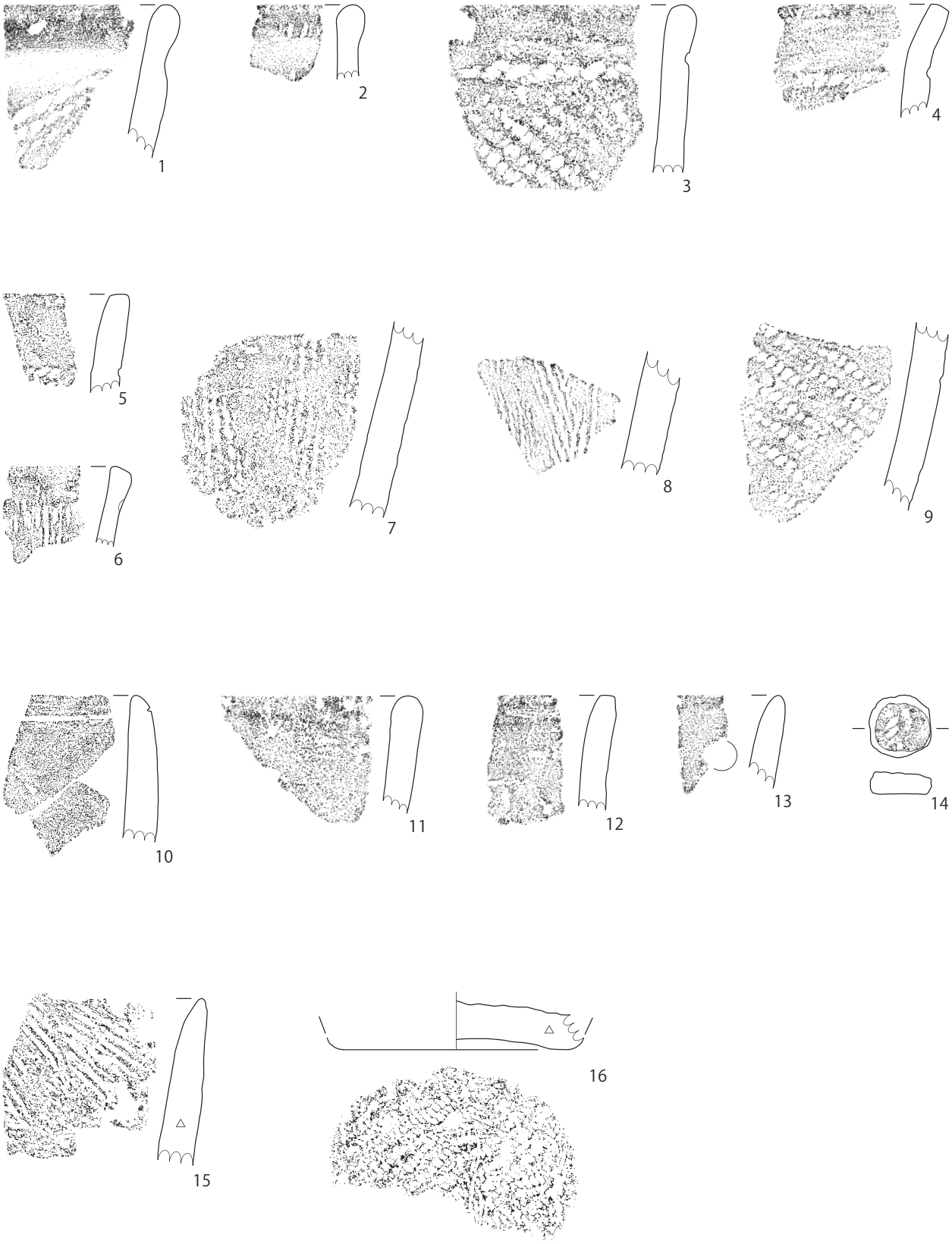

第 89 図　14T 出土土器



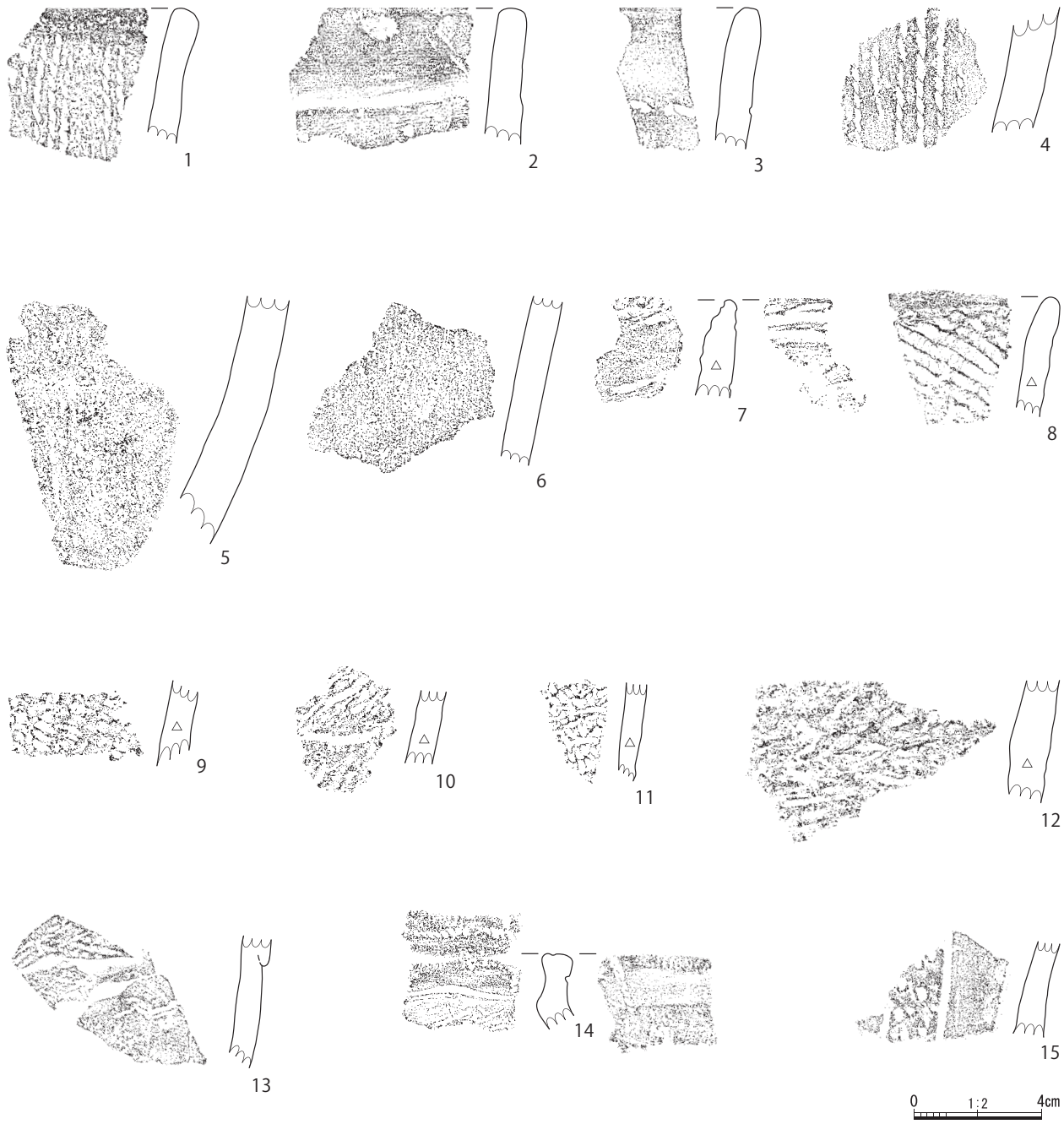

第 90 図　14 ～ 16T 出土土器



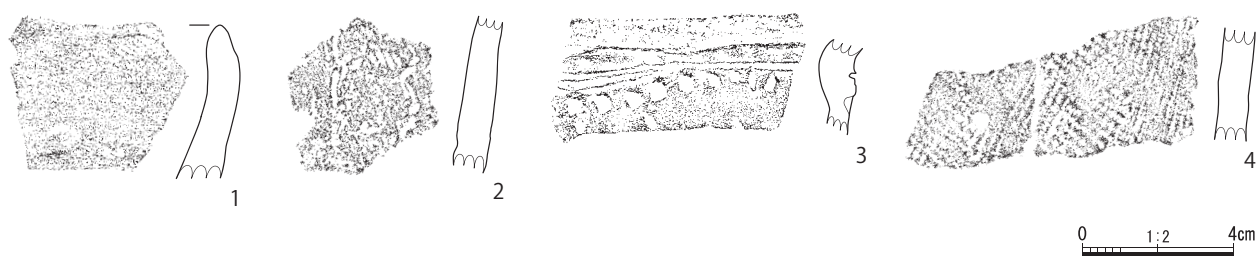

第 91 図　16T 出土土器



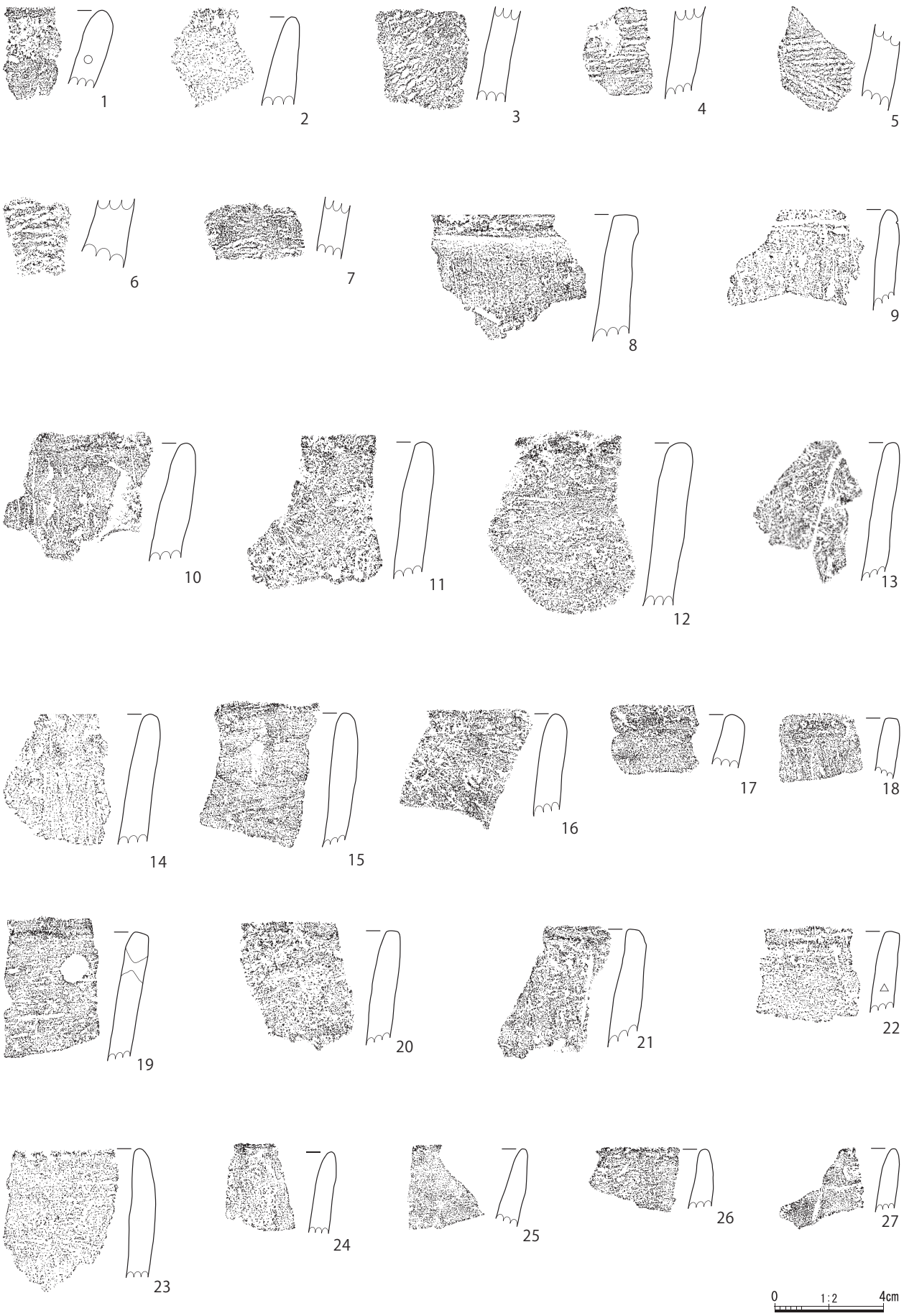

第 92 図　18T 出土土器



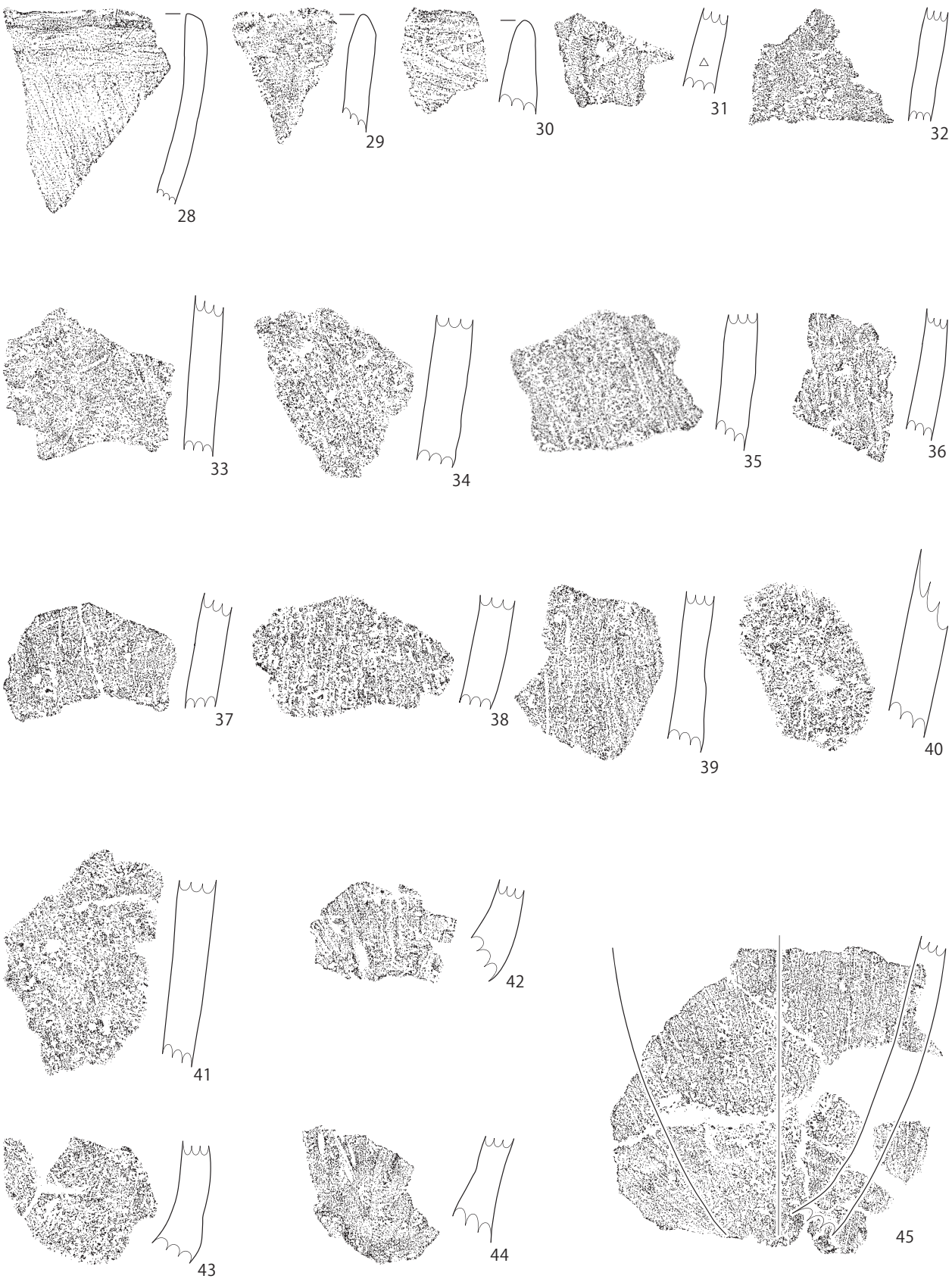

第 93 図　19T 出土土器



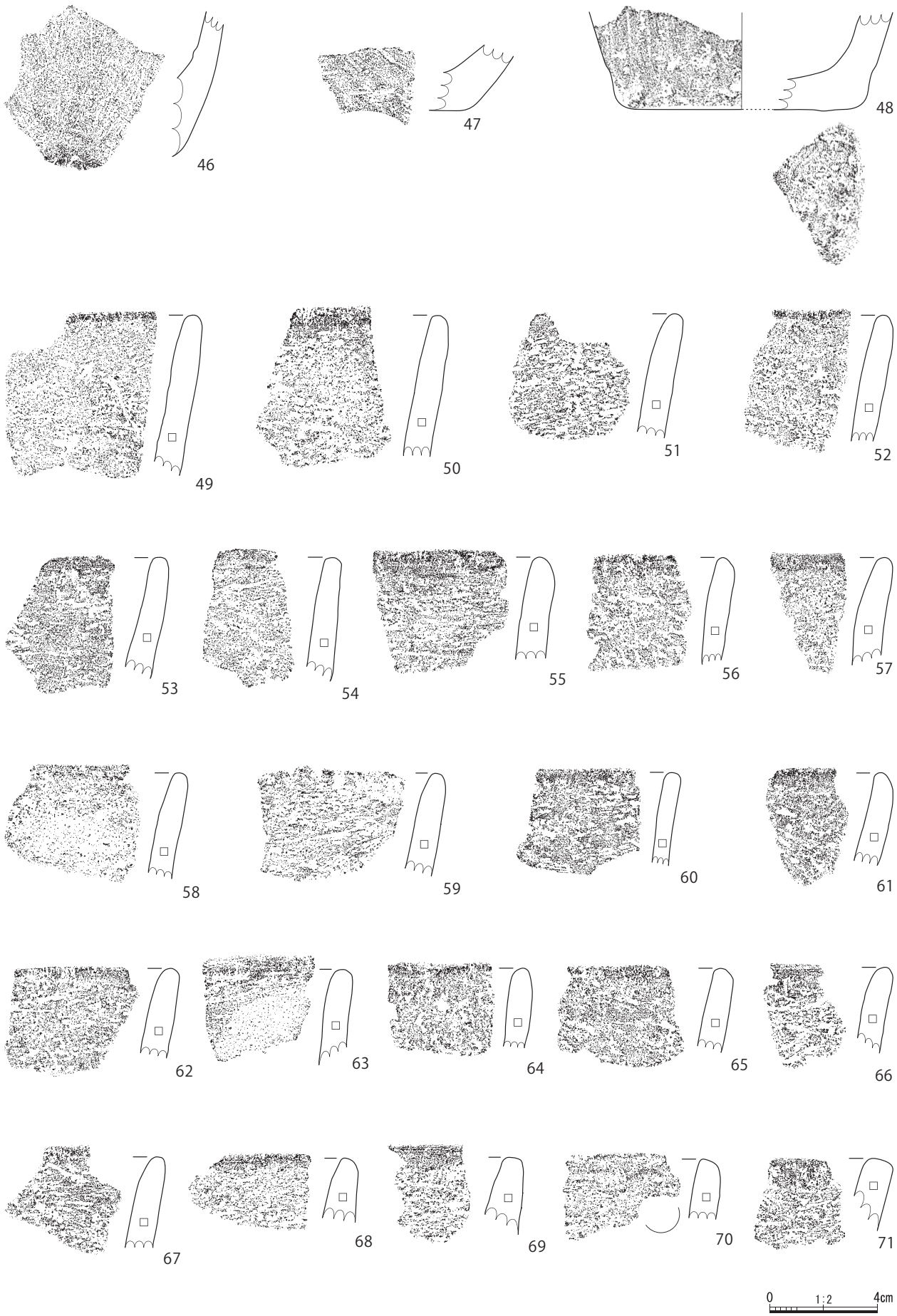

第 94 図　20T 出土土器



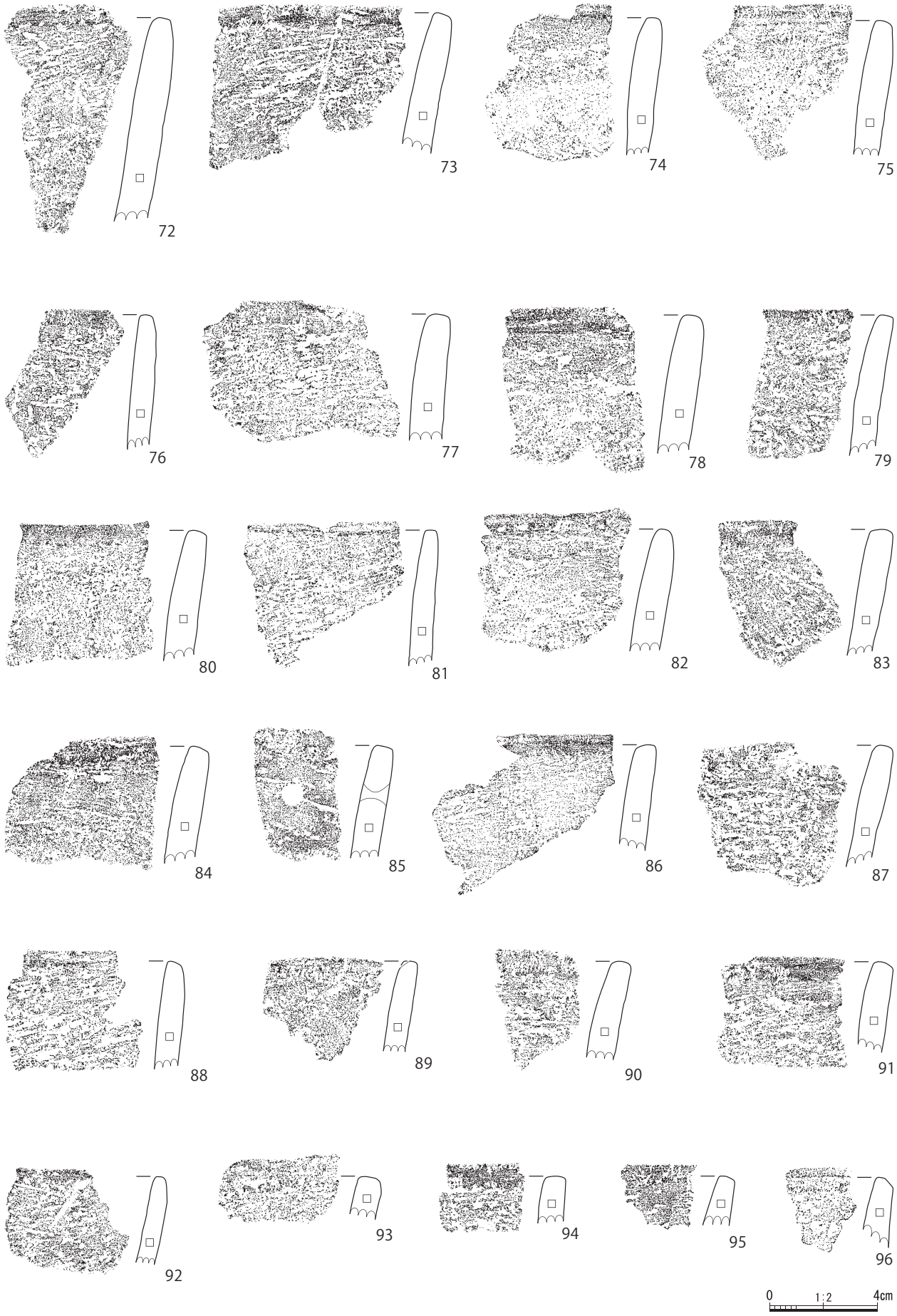

第 95 図　23T 出土土器（1）



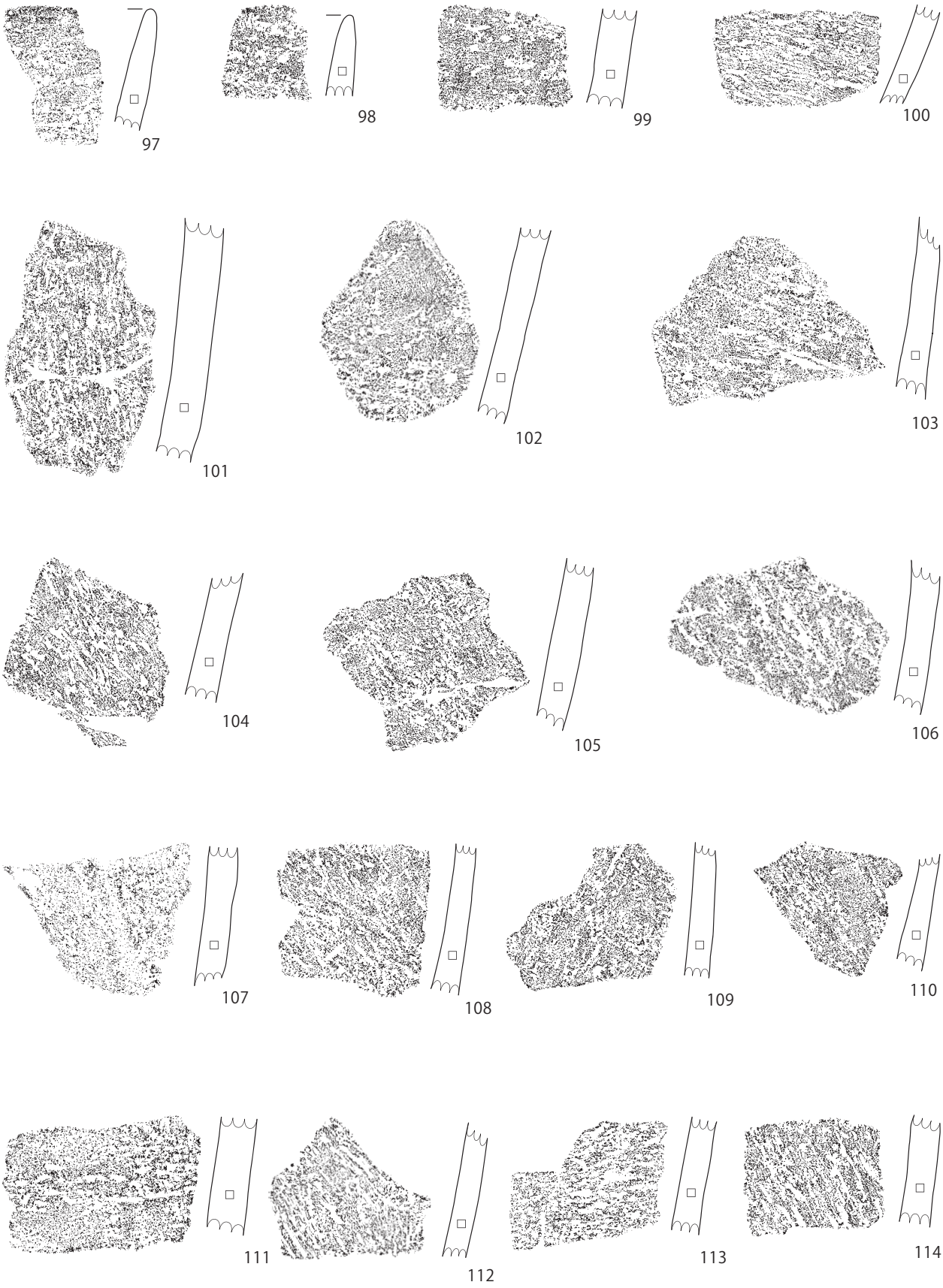

第 96 図　23T 出土土器（２）



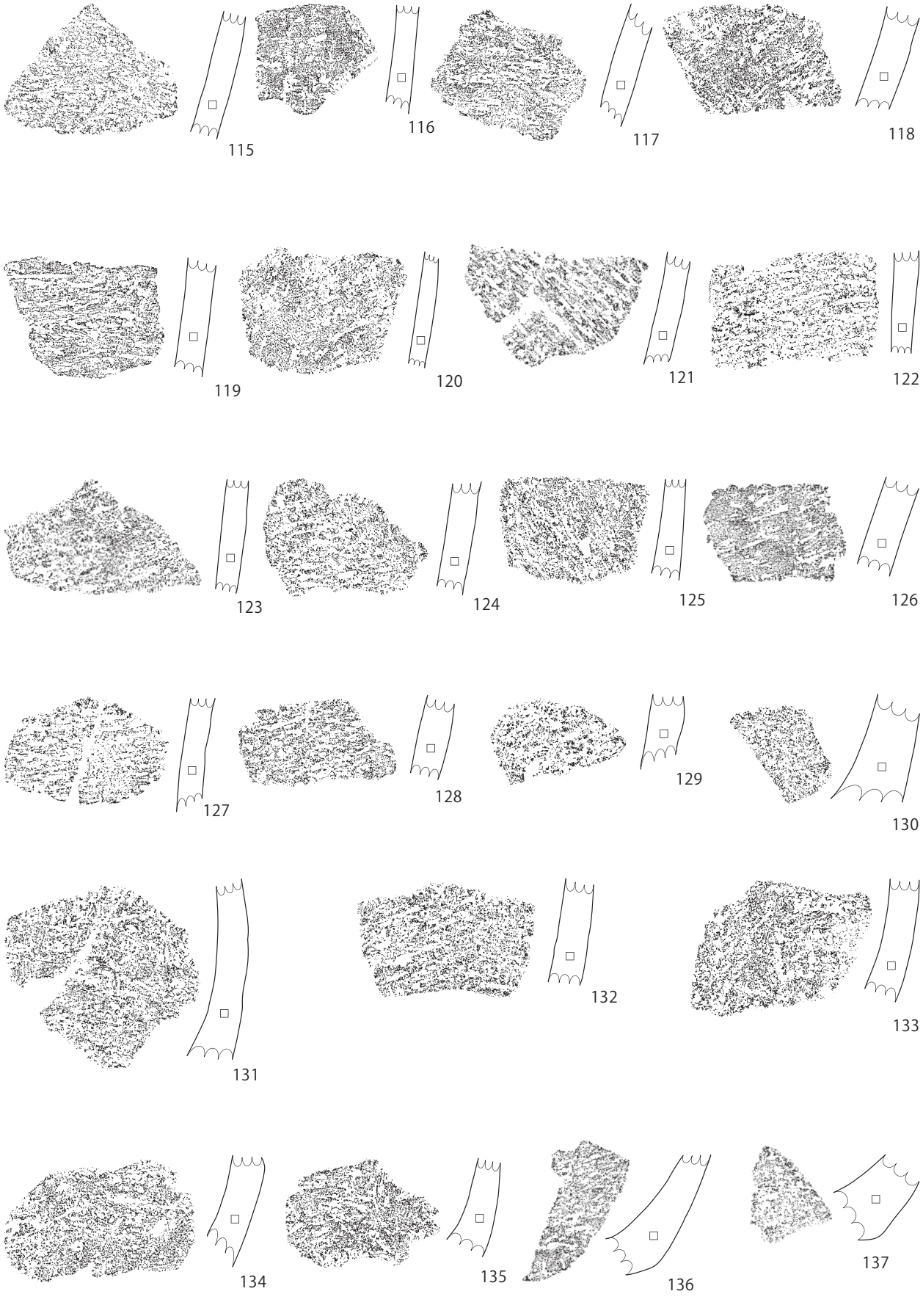

第 97 図　23T 出土土器（３）



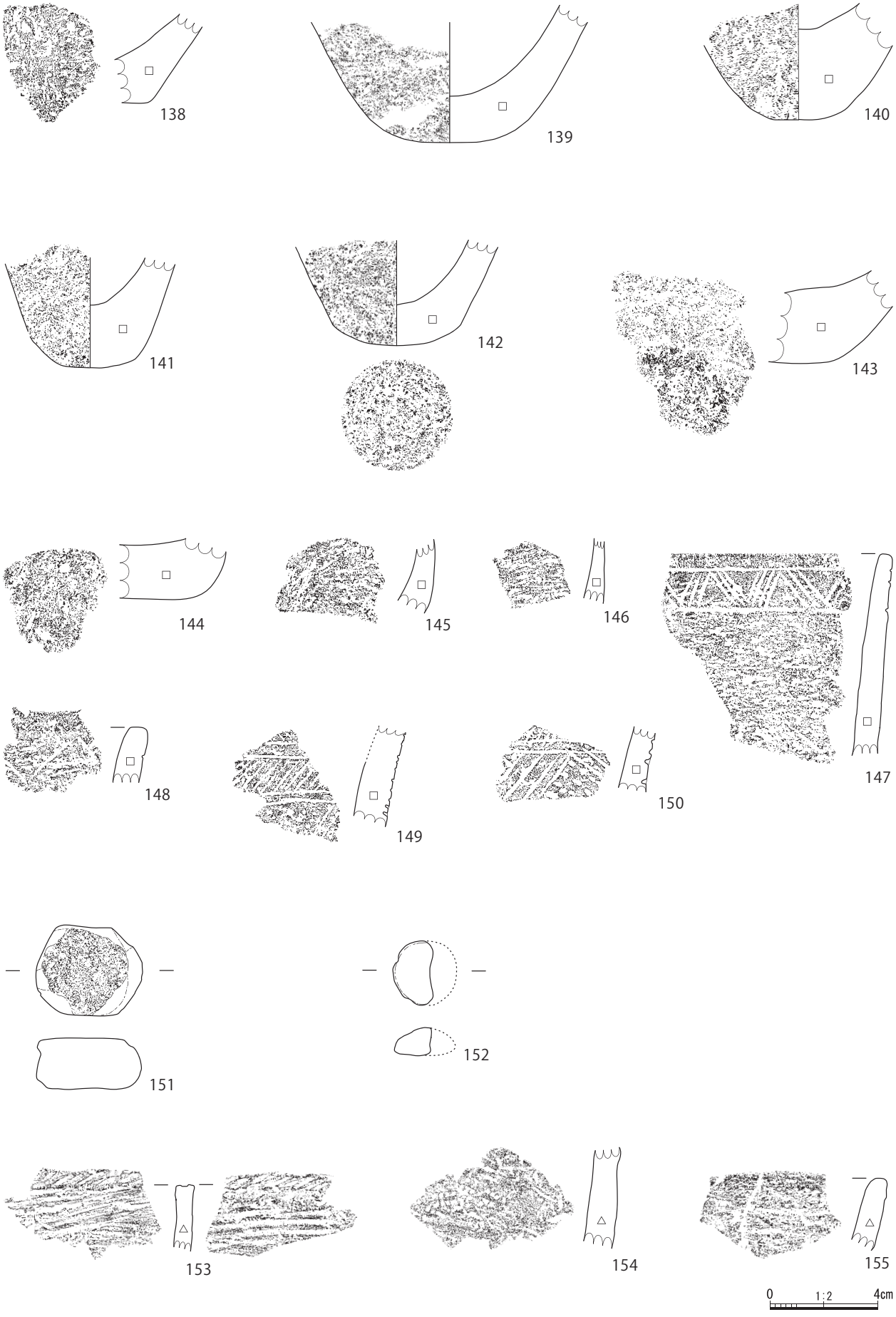

第 98 図　23T 出土土器（４）



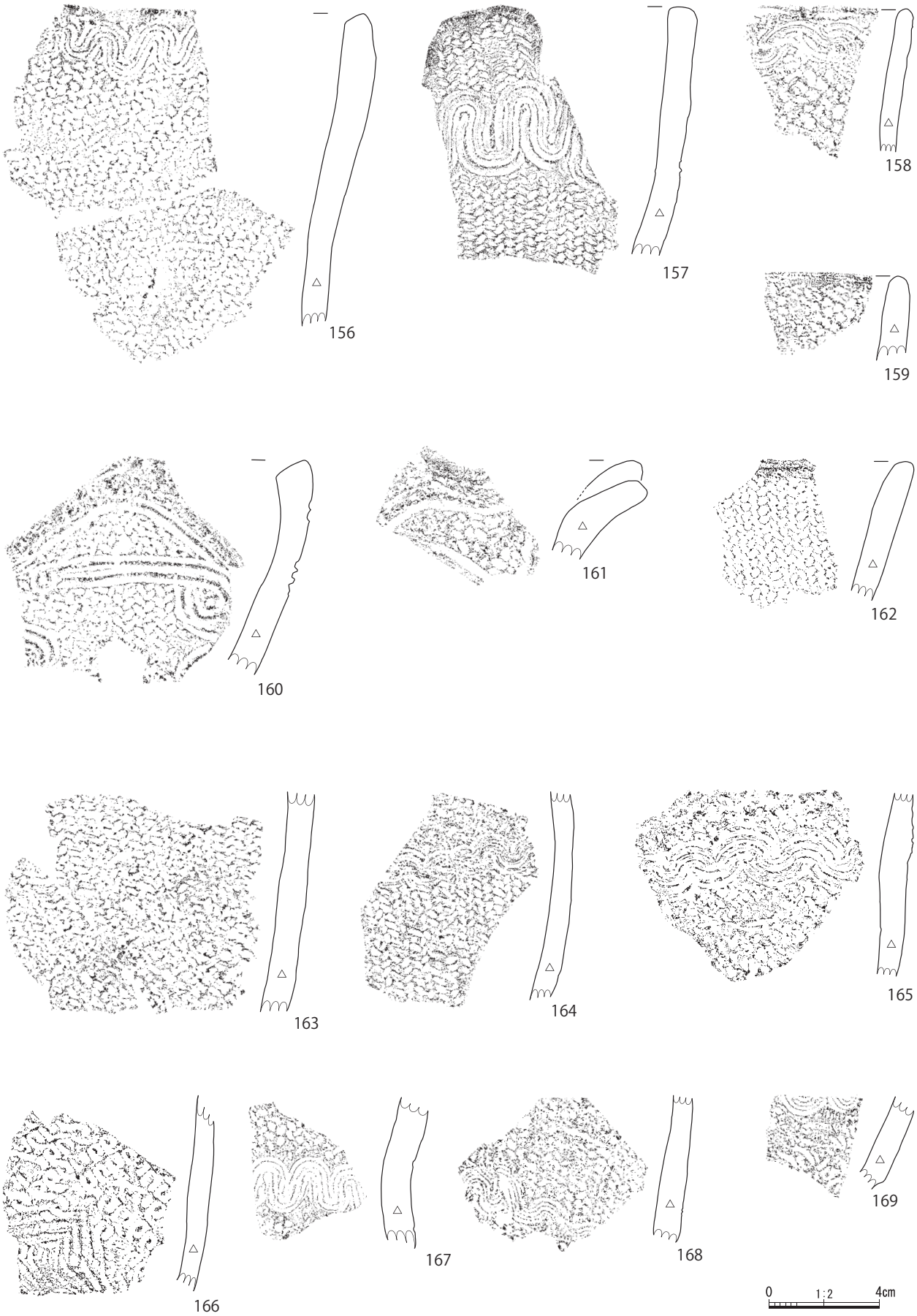

第 99 図　23T 出土土器（５）



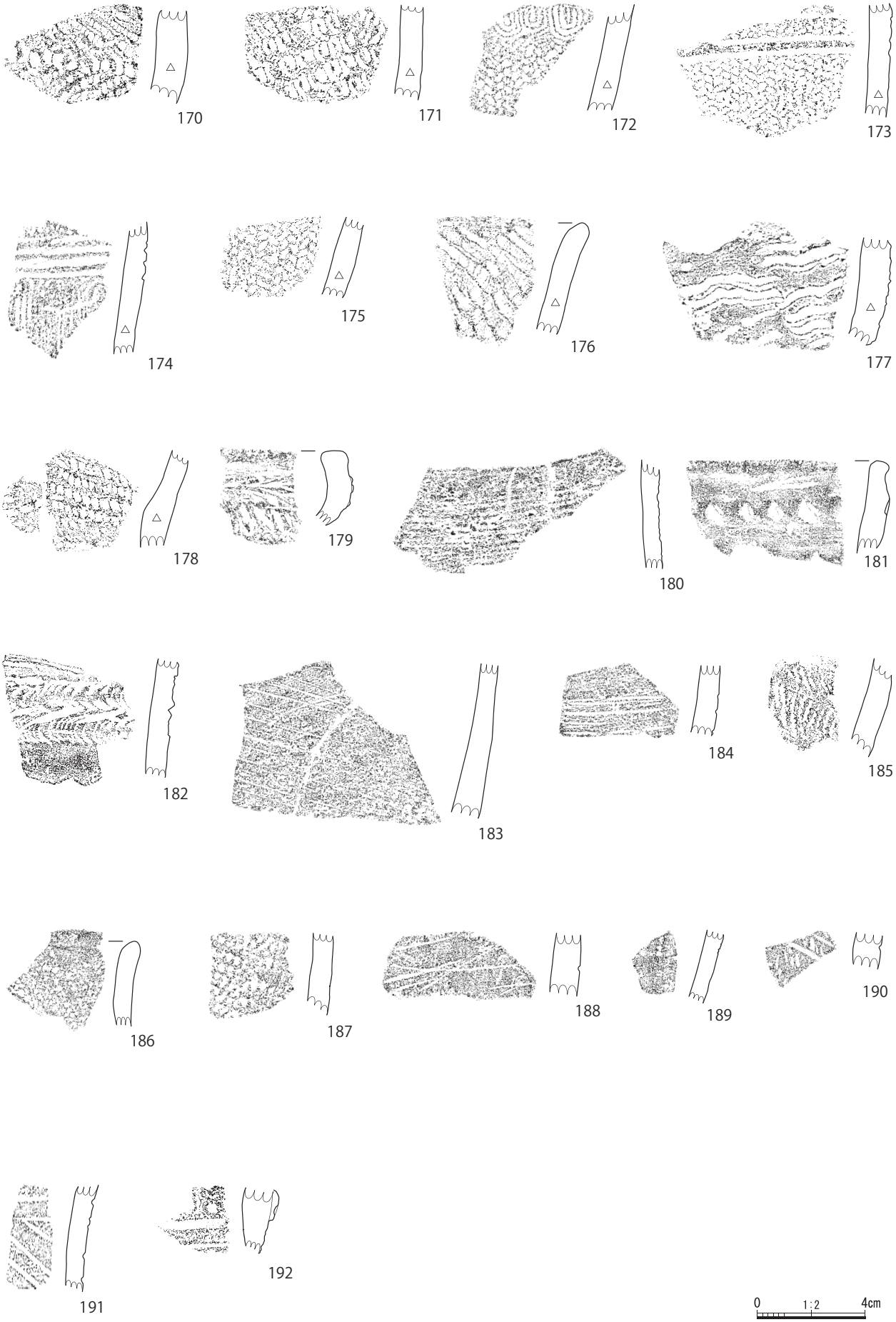

第 100 図　23T 出土土器（６）



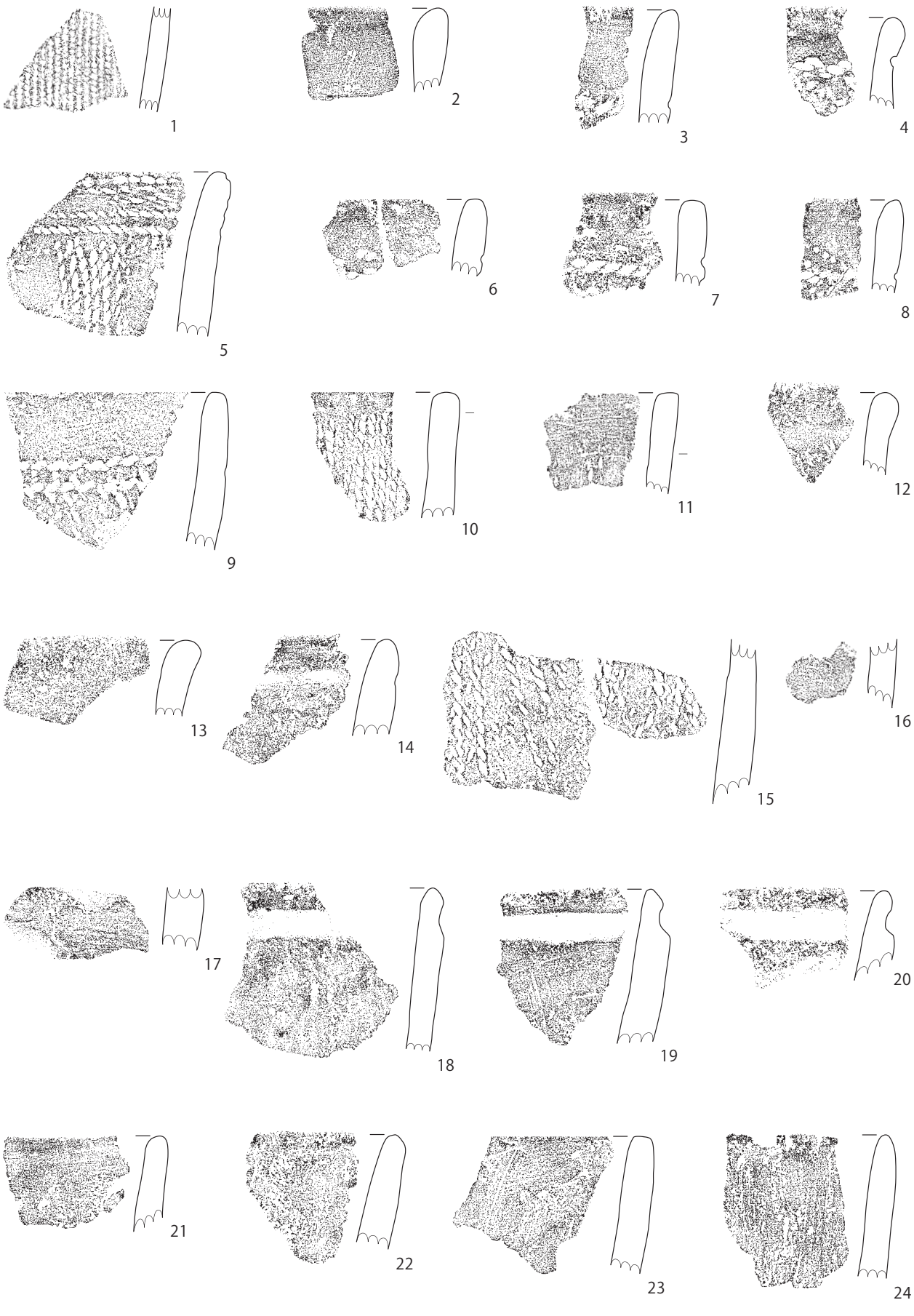

第 101 図　23T 出土土器（７）



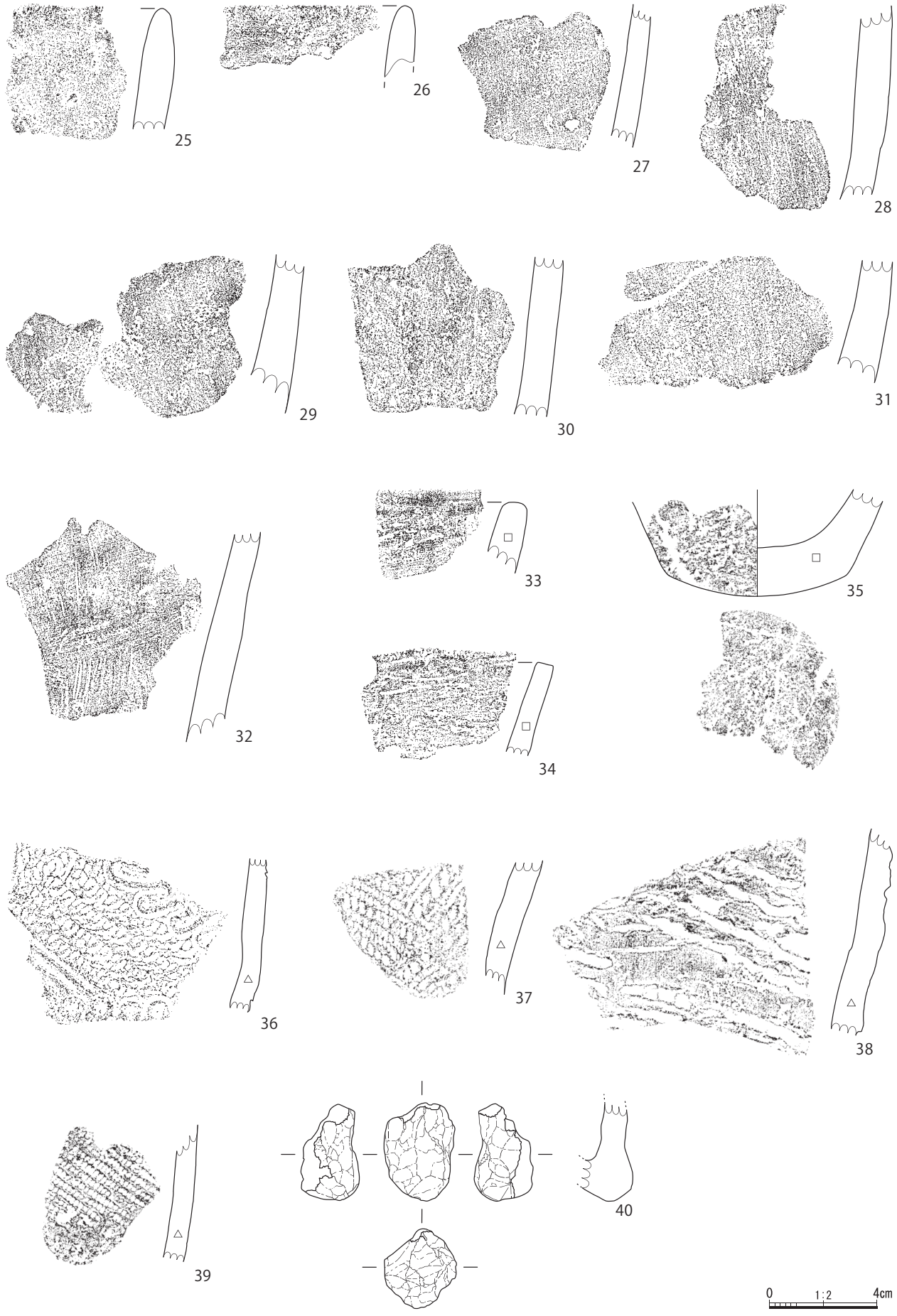

第 102 図　23T 出土土器（８）



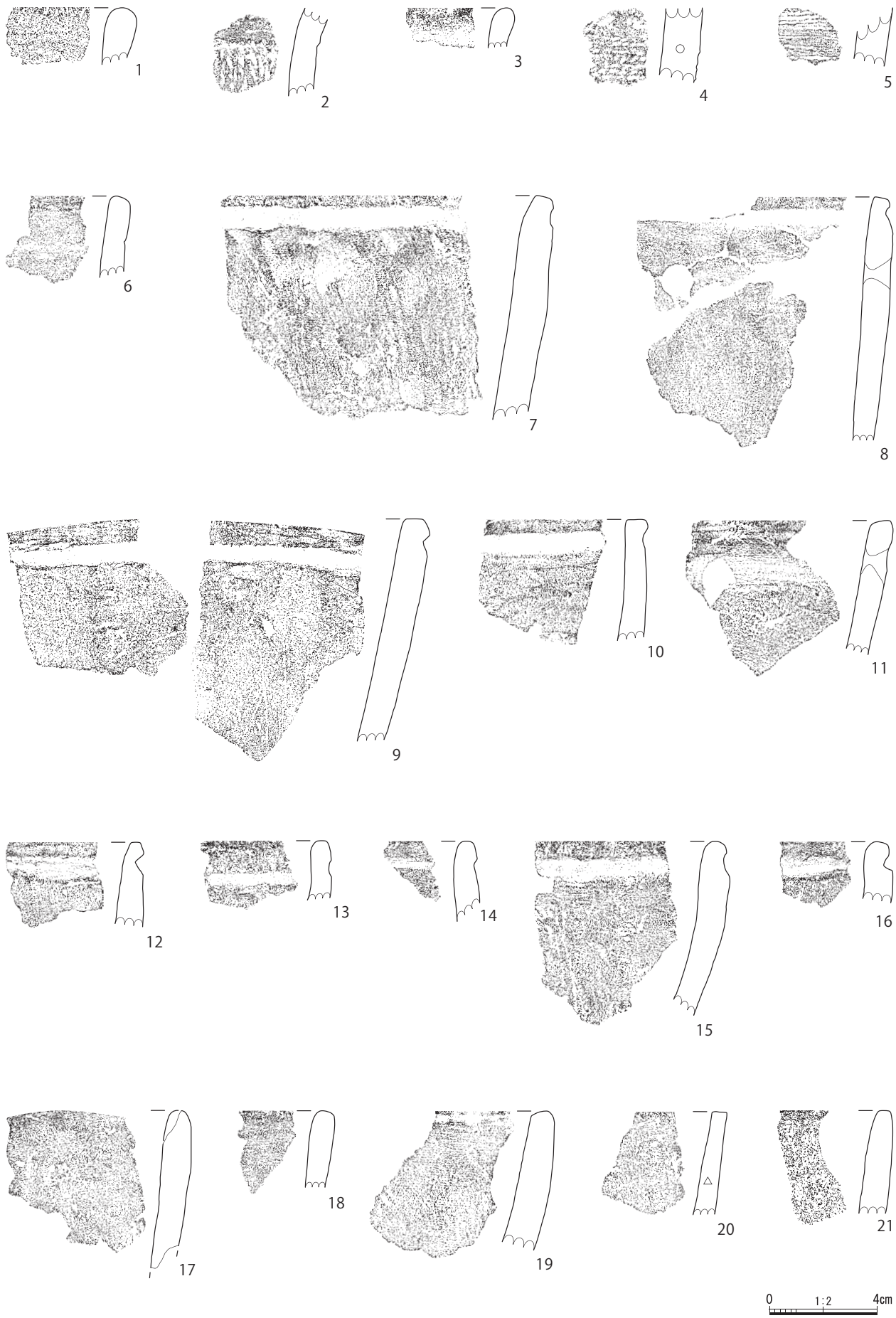

第 103 図　23T 出土土器（9）



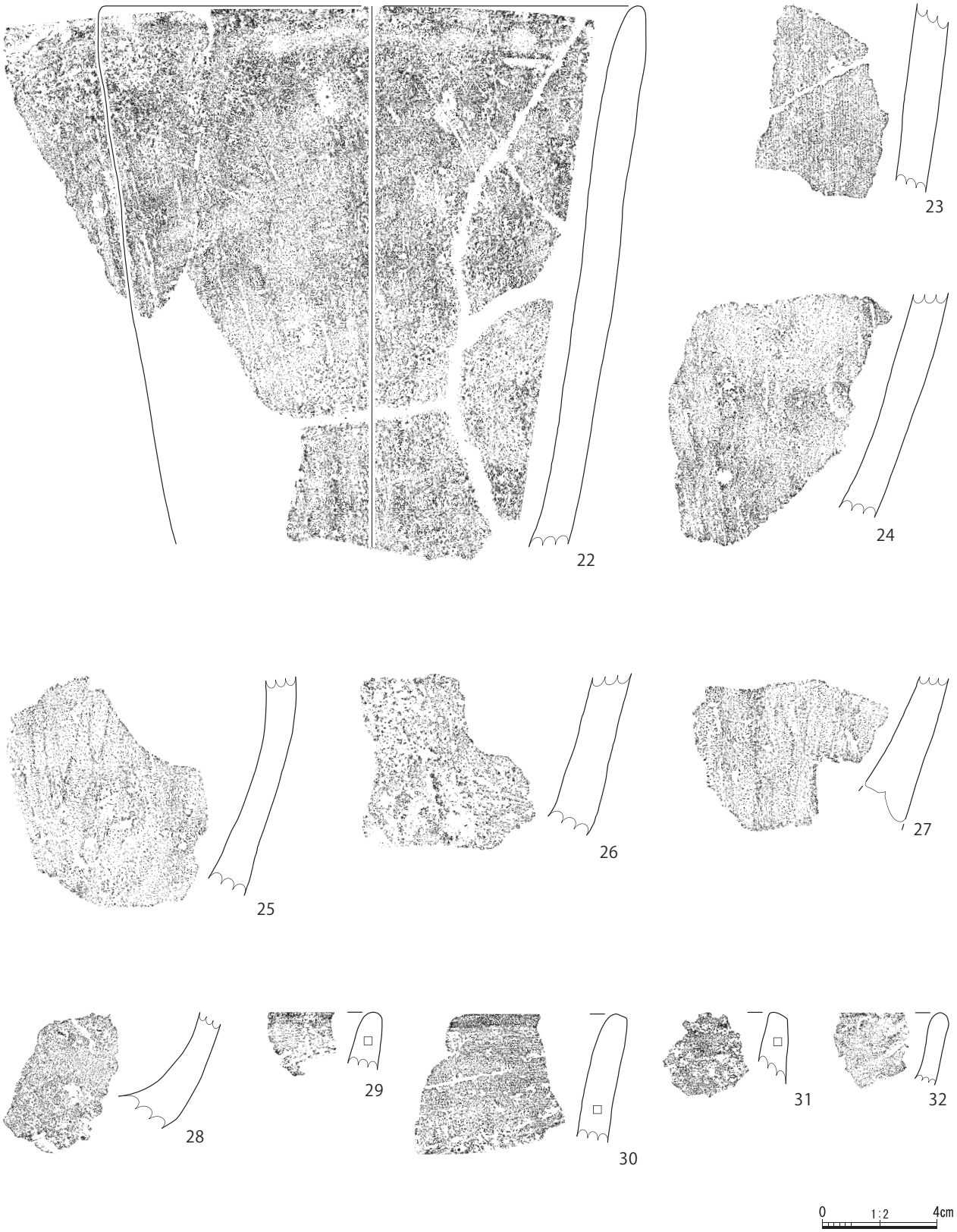

第 104 図　24T 出土土器（１）



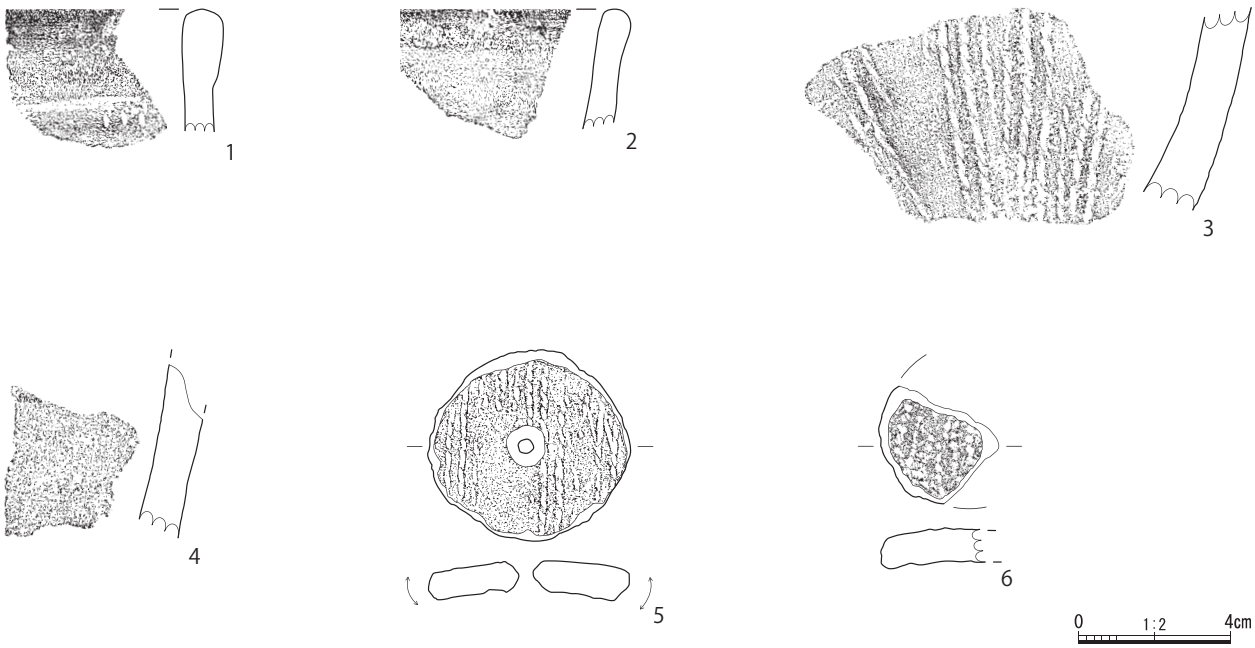

第 105 図　24T 出土土器（２）



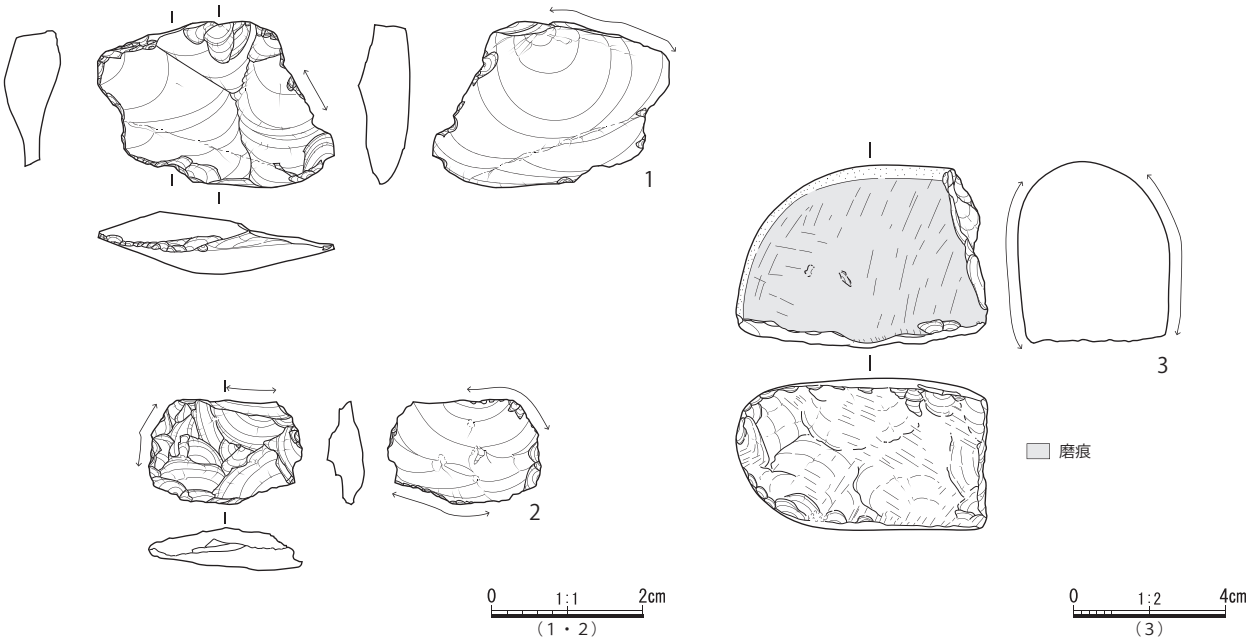

第 106 図　25T 出土土器（1）



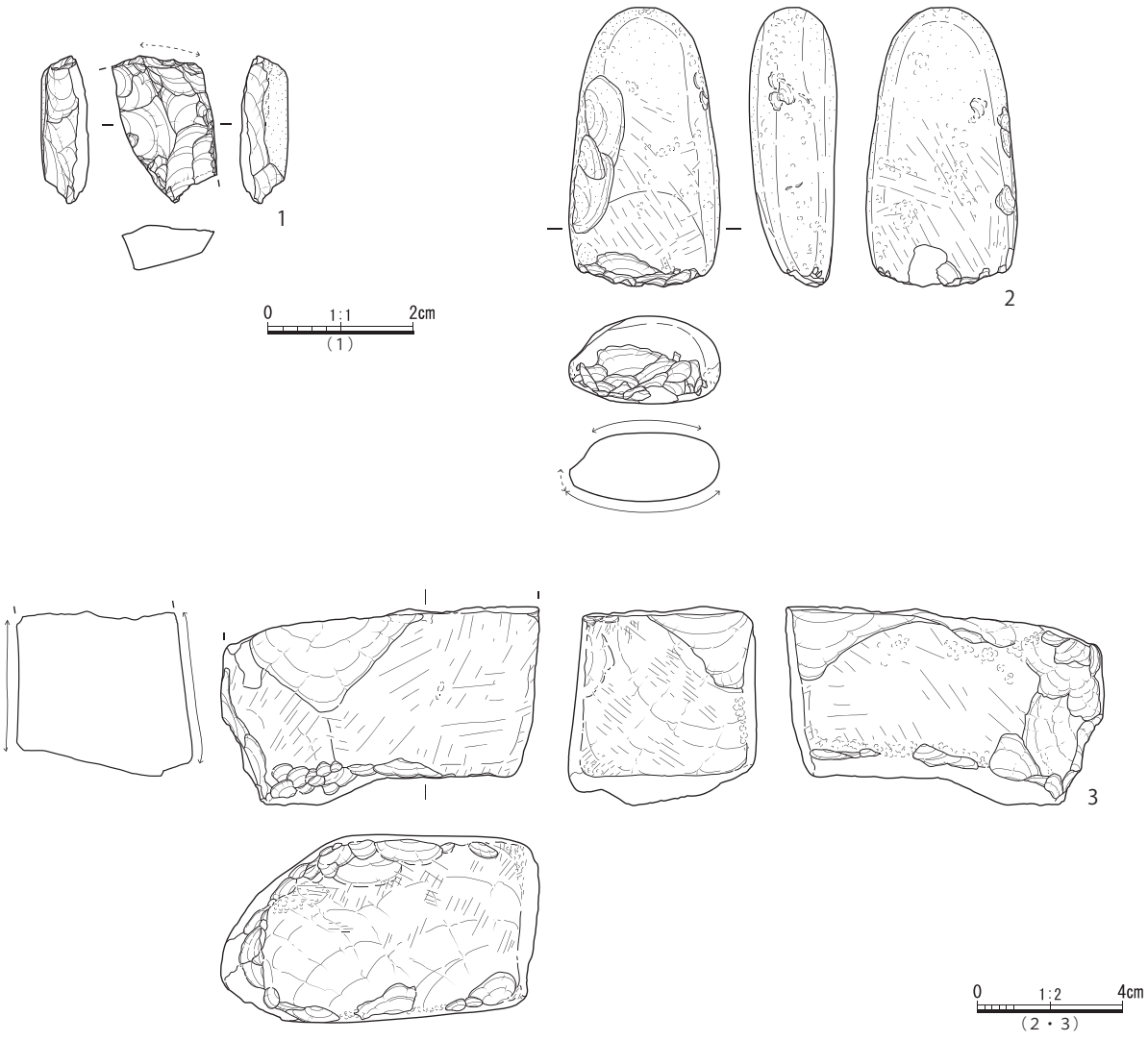

第 107 図　25T 出土土器（２）



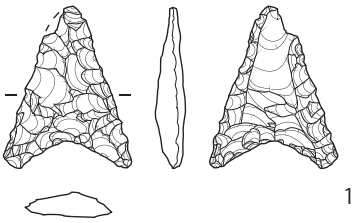

第 108 図　26T 出土土器



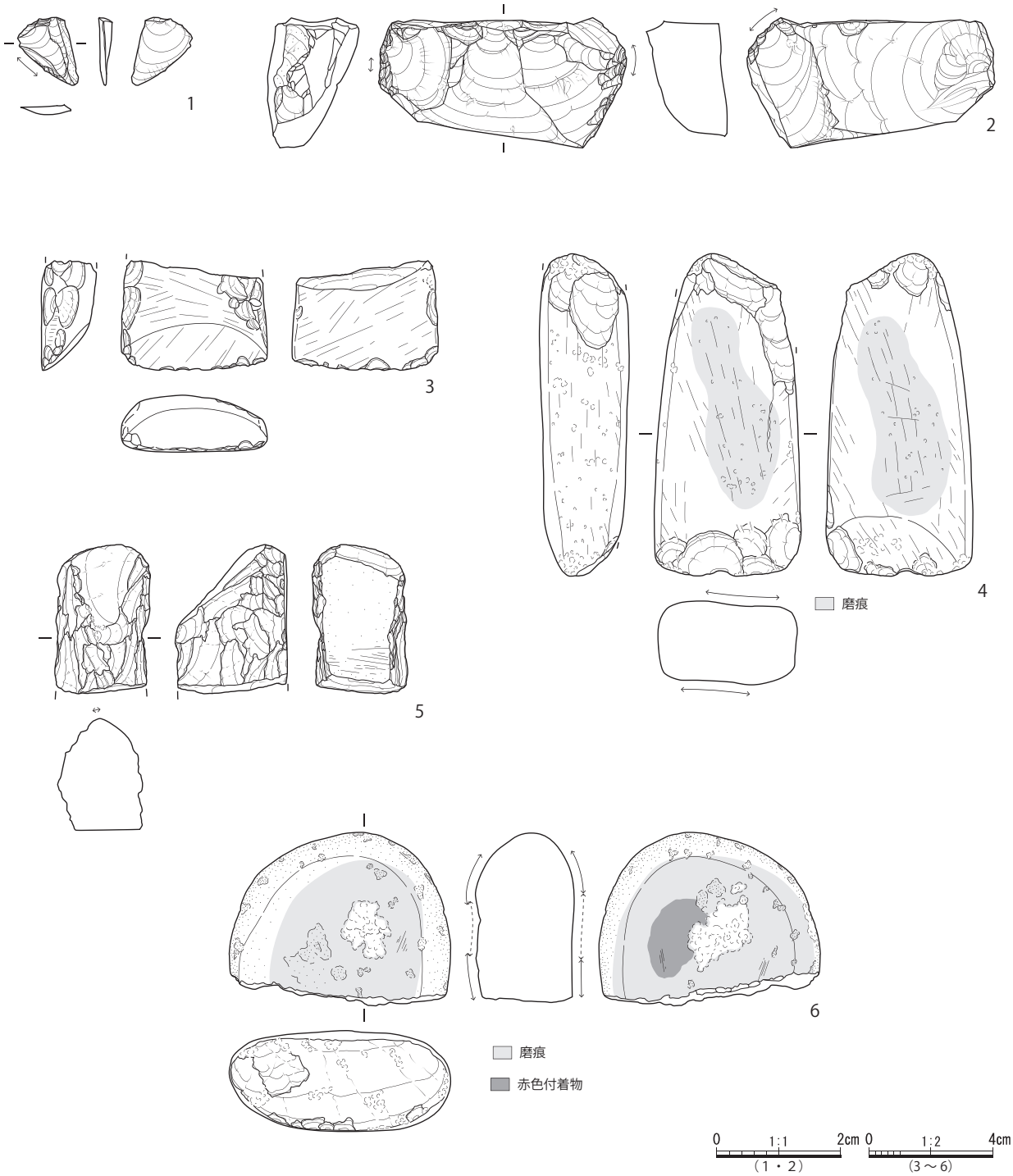

第 109 図　２T 出土石器



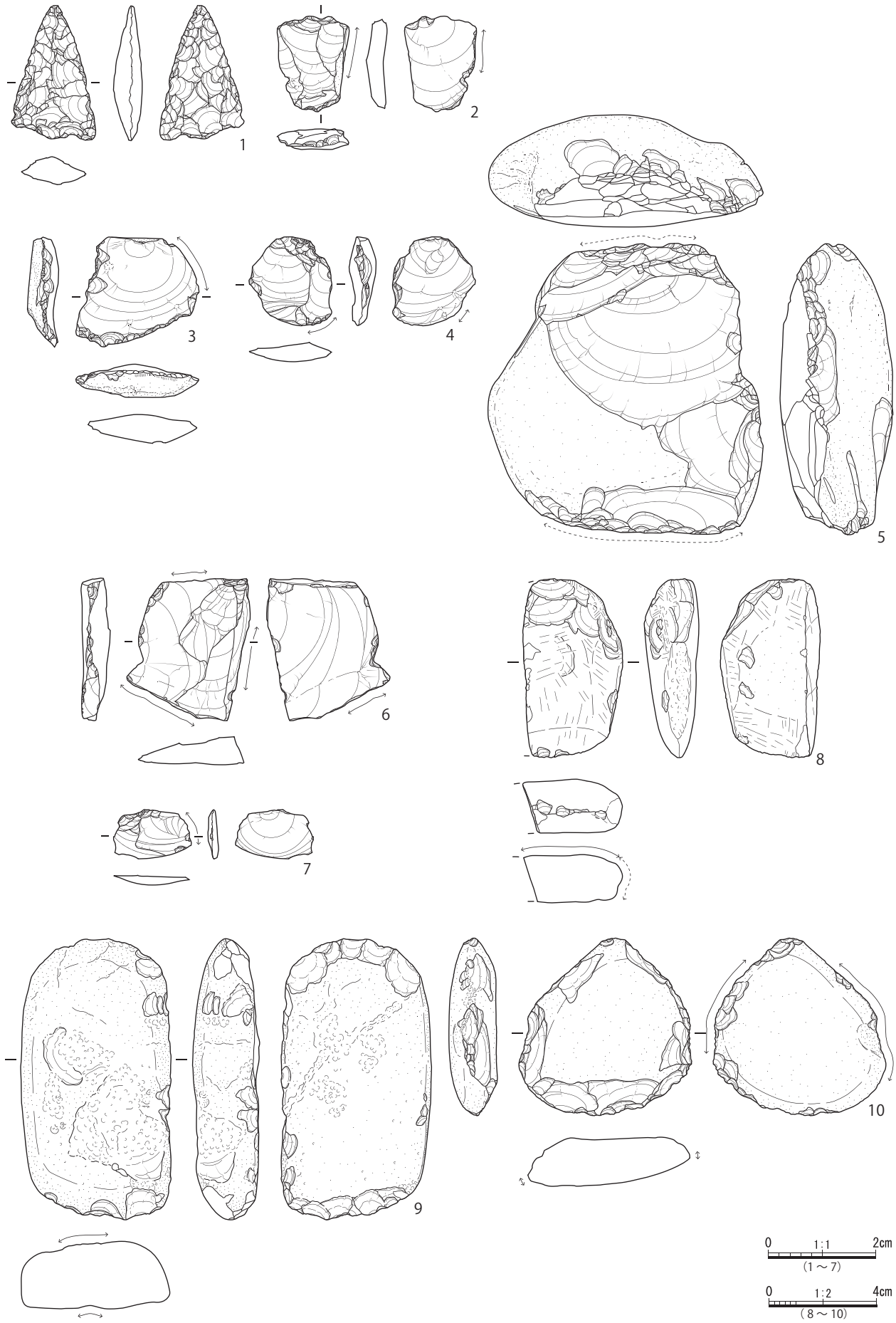

第 110 図　３T 出土石器



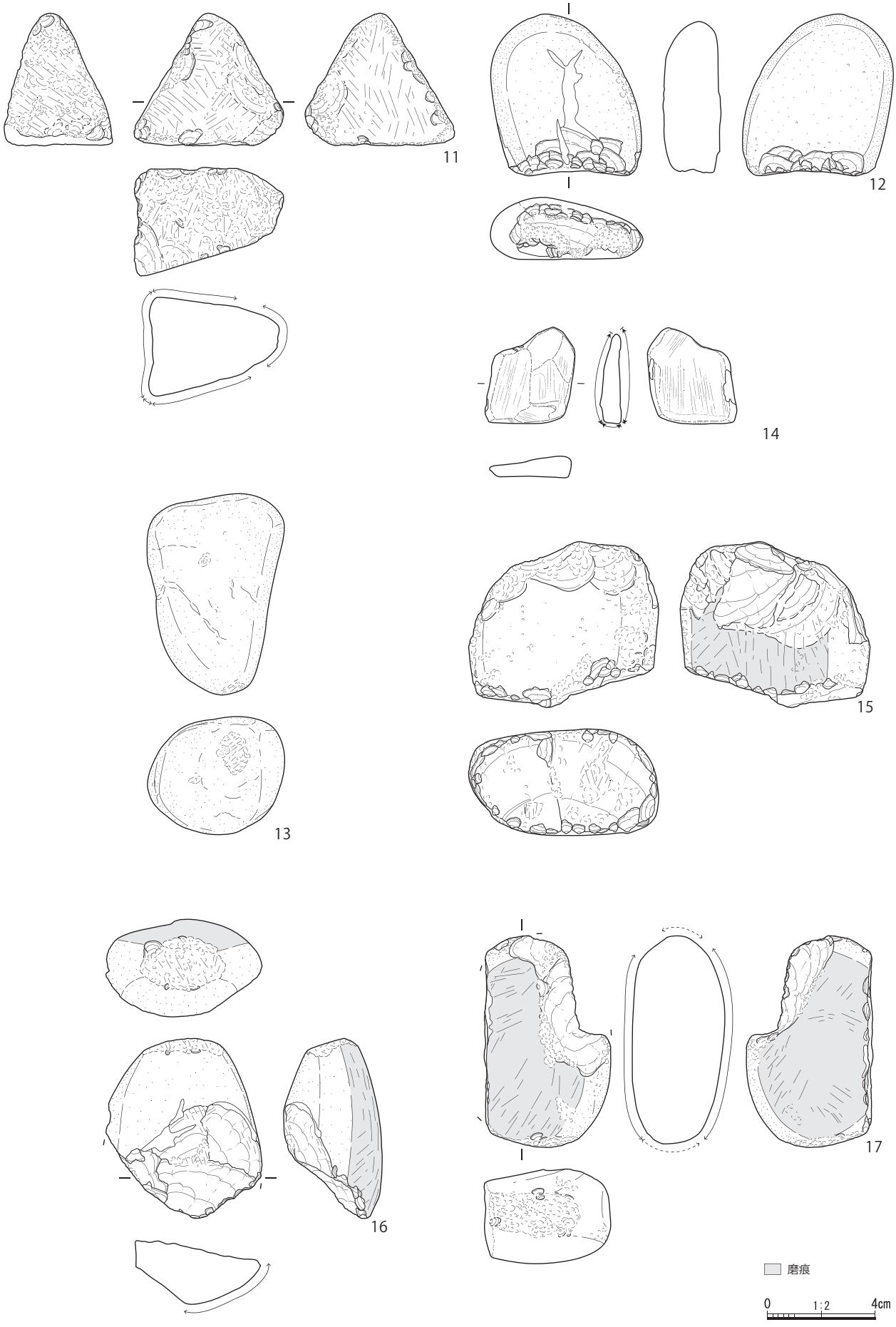

第 111 図　4T 出土石器




第 112 図　5T 出土石器



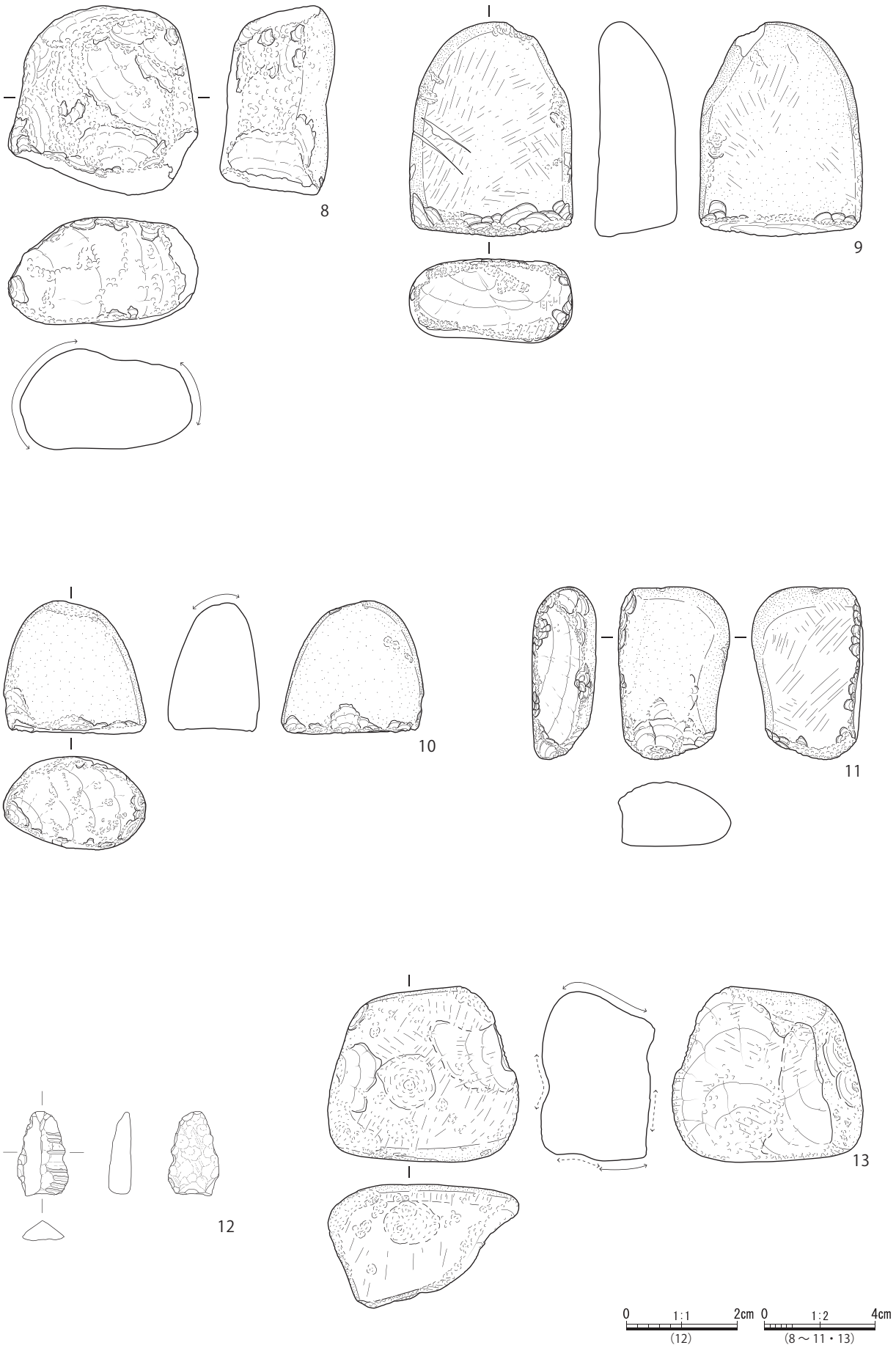

第 113 図　6T 出土石器（1）




第 114 図　6T 出土石器（2）

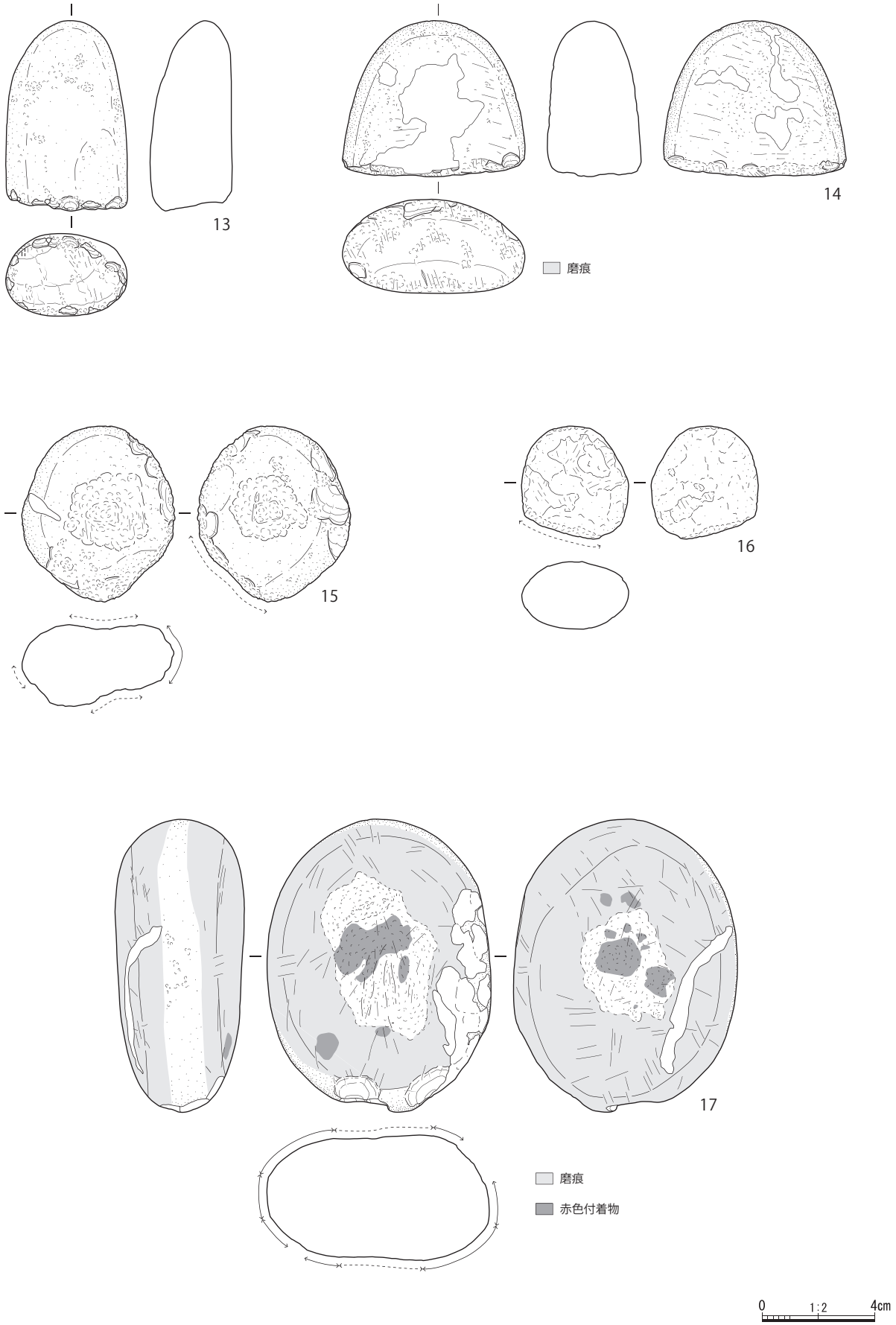
第 115 図　7T 出土石器

第 116 図　8T 出土石器（1）

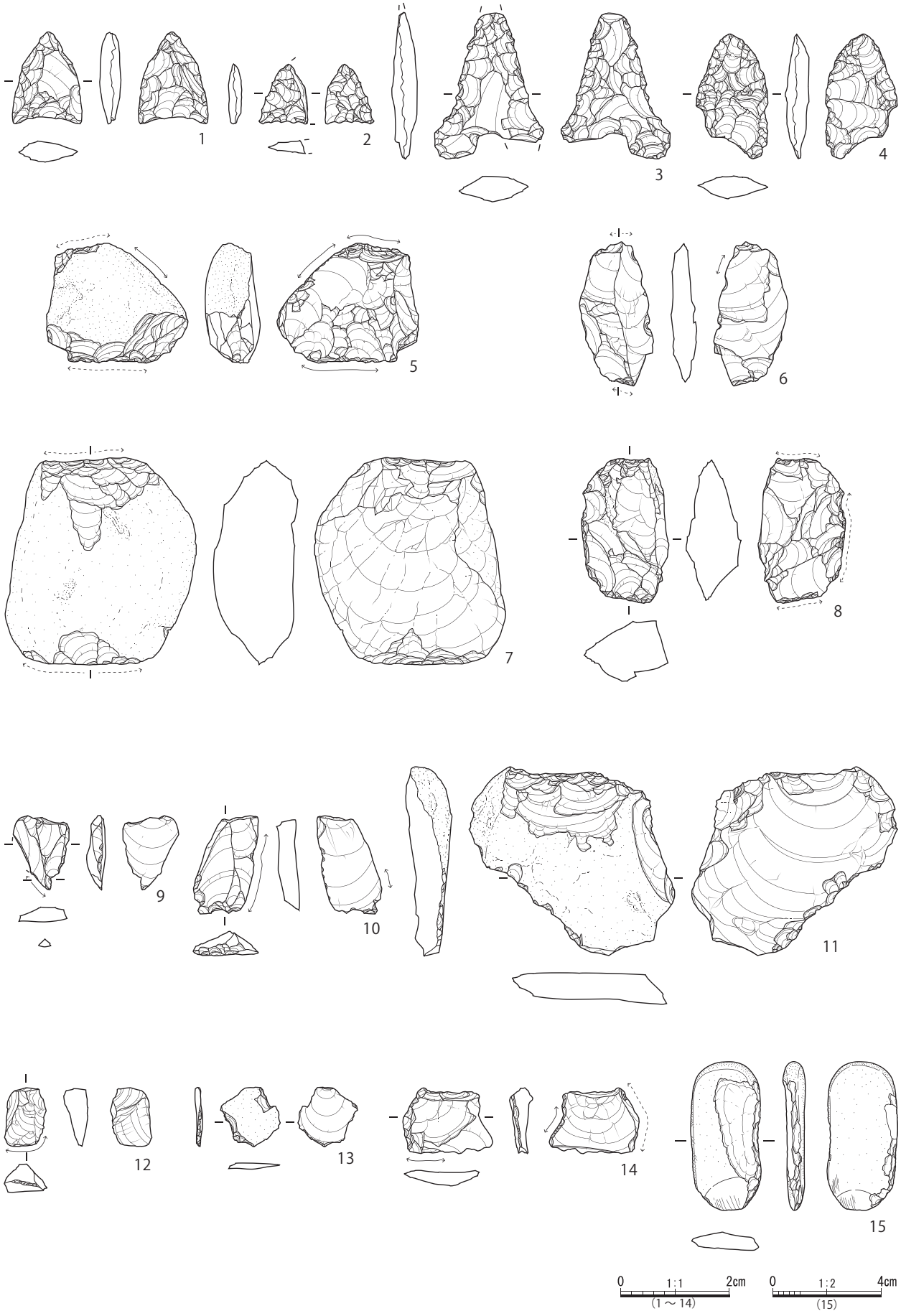



第 117 図　8T 出土石器（2）

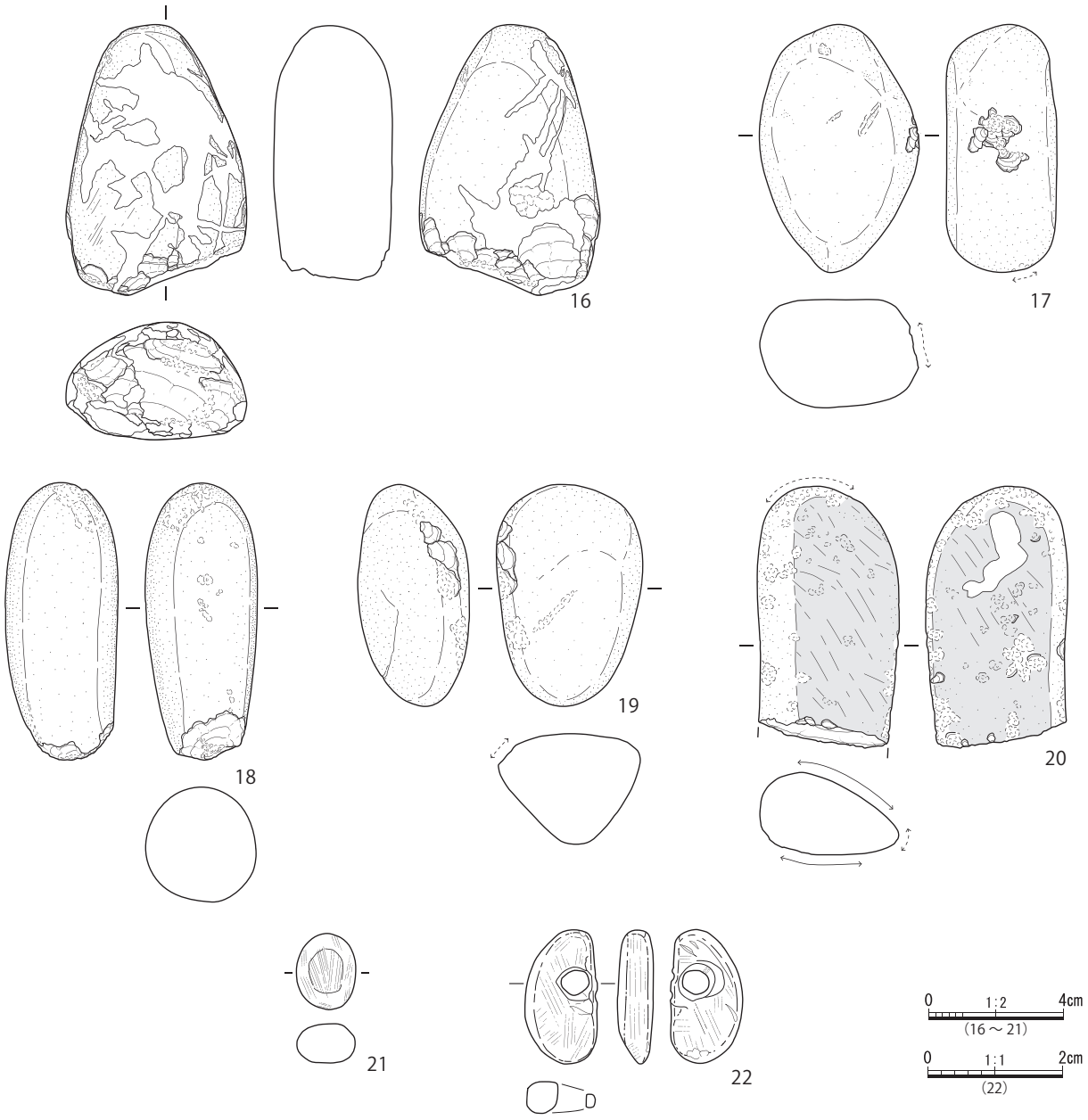
第 118 図　9T 出土石器（1）



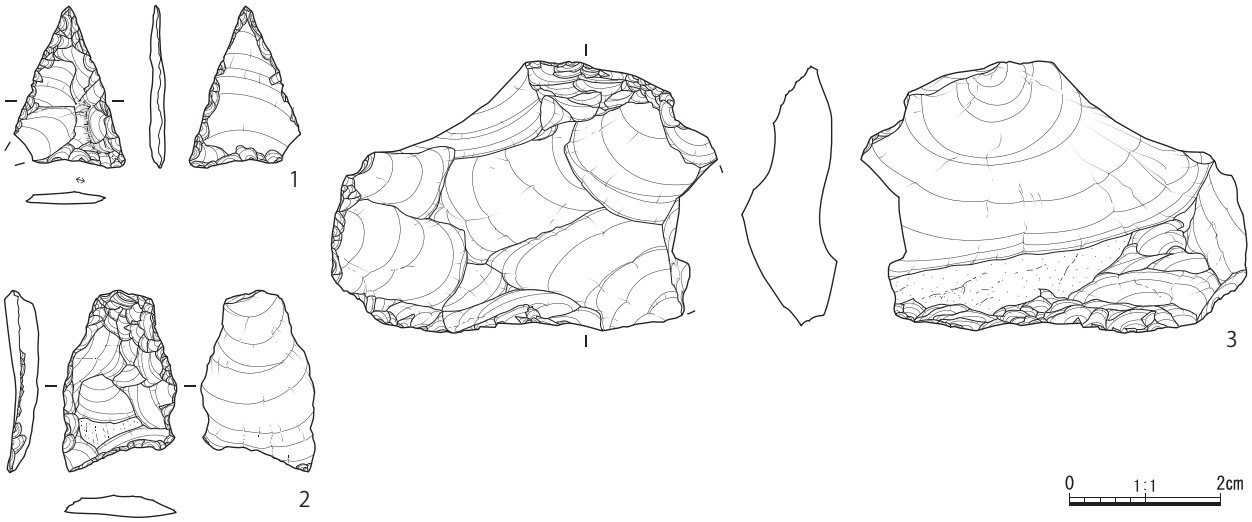

第 119 図　9T 出土石器（2）



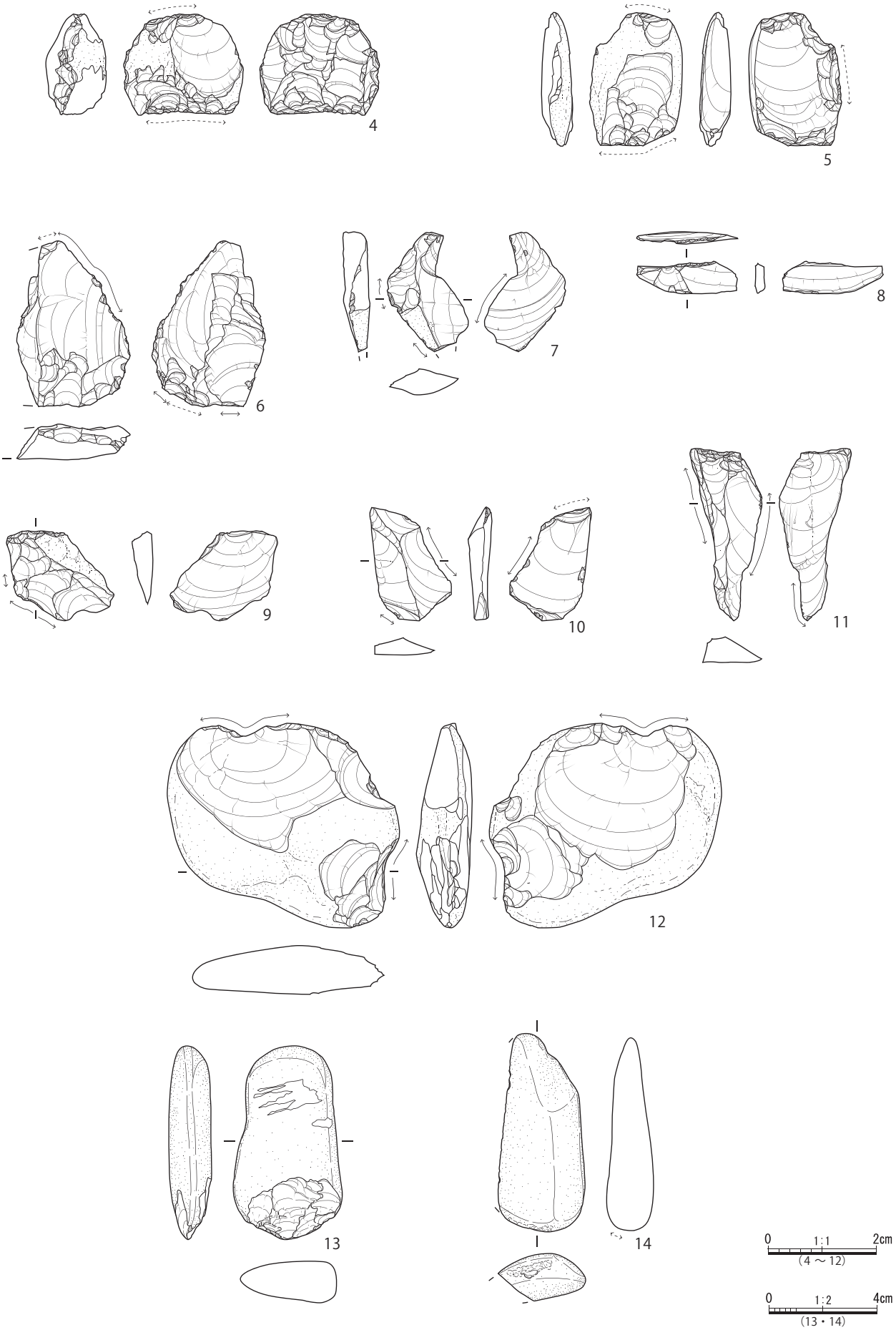

第 120 図　10T 出土石器（1）



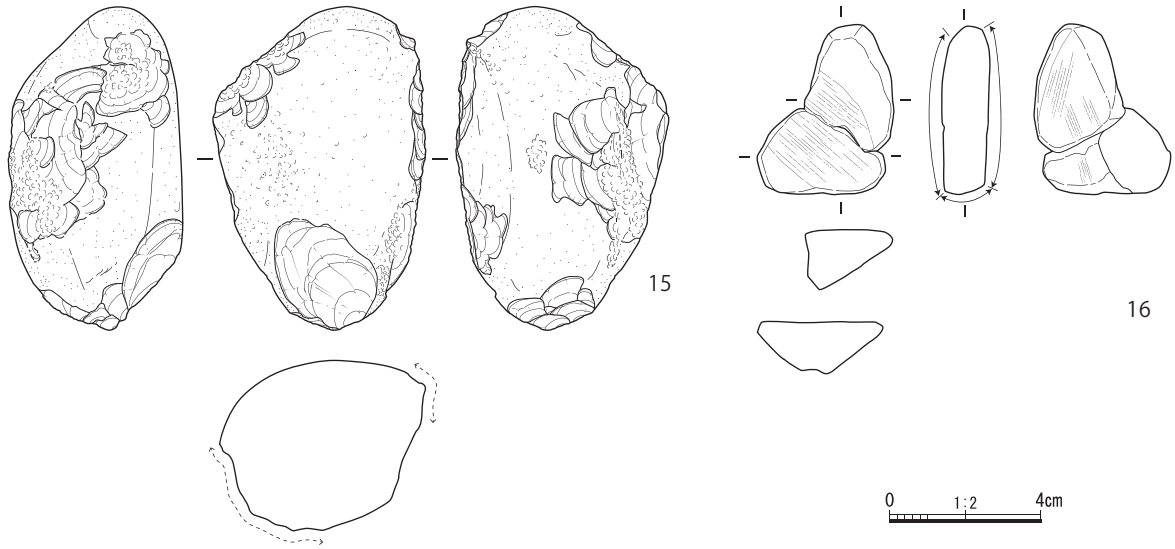

第 121 図　10T 出土石器（２）



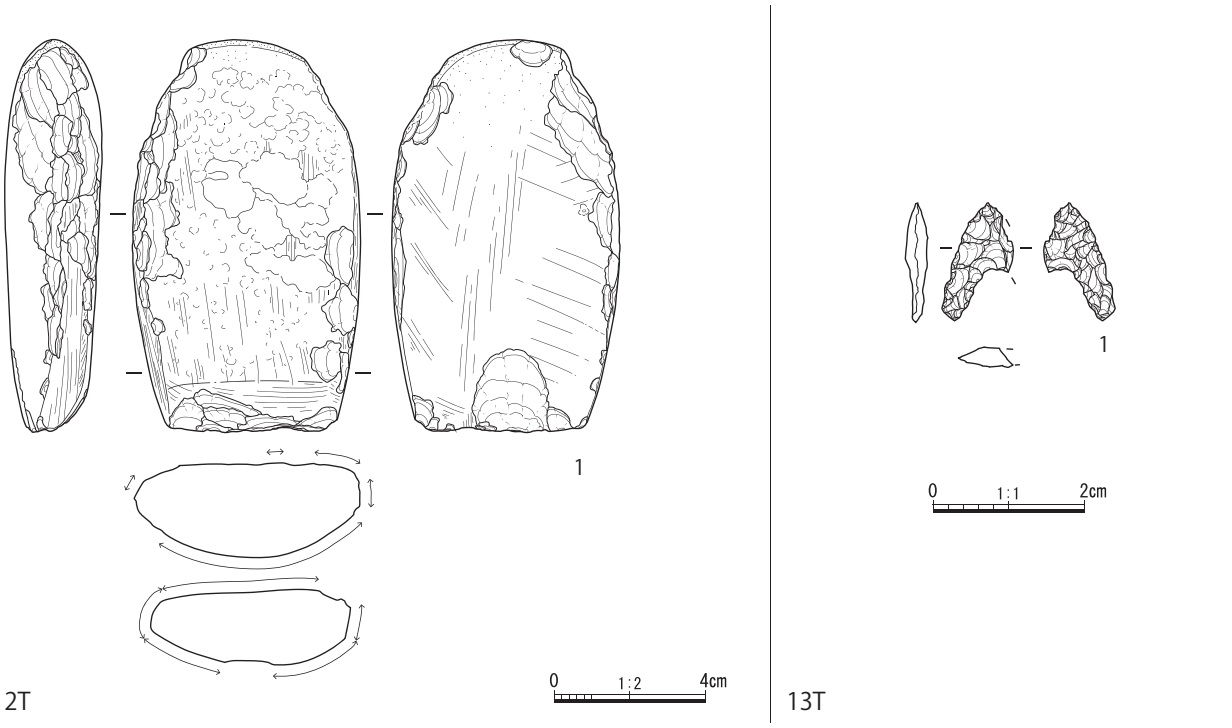

第 122 図　11T 出土石器（１）

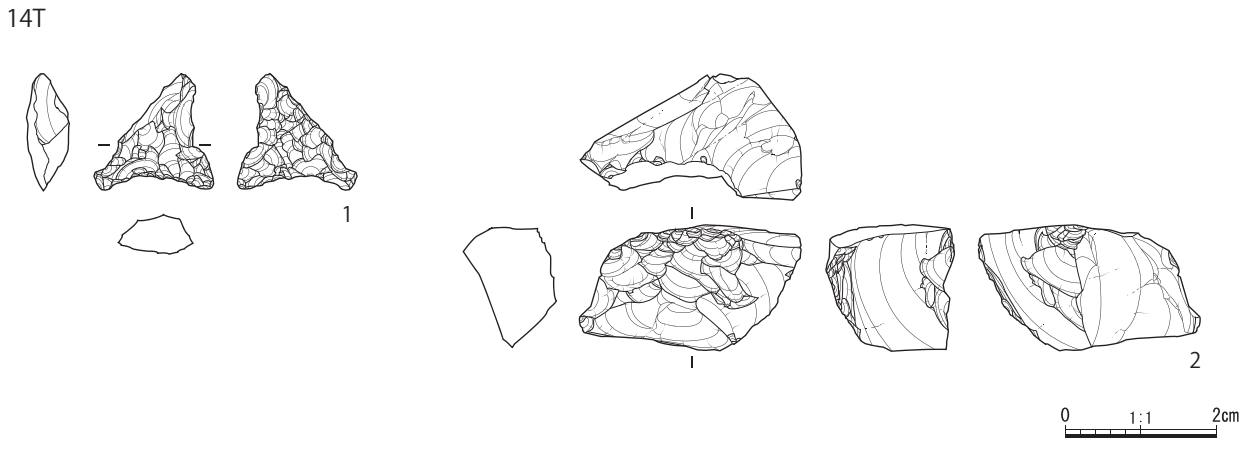



第 123 図　11T 出土石器（2）

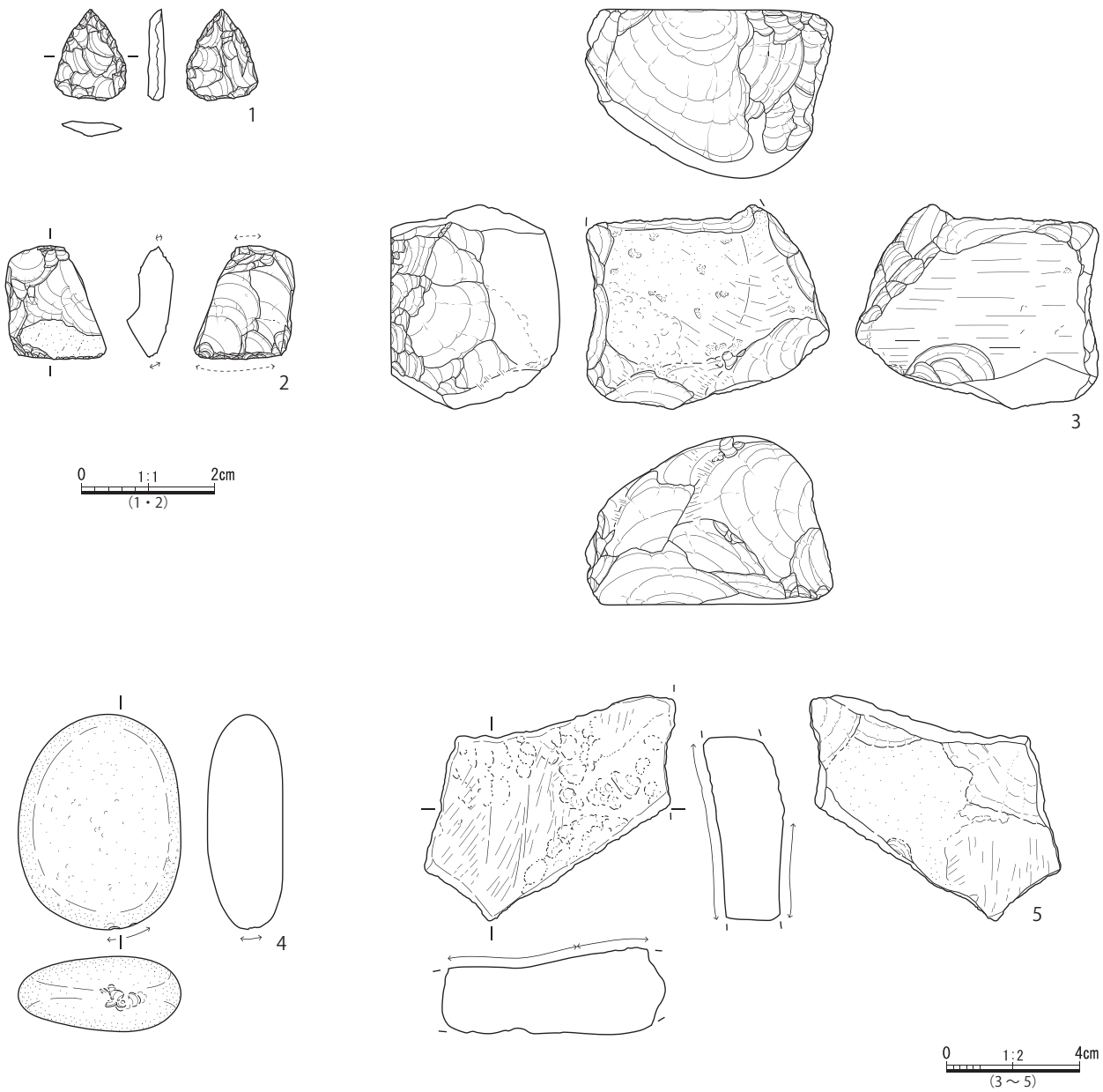



第 124 図　11T 出土石器（３）

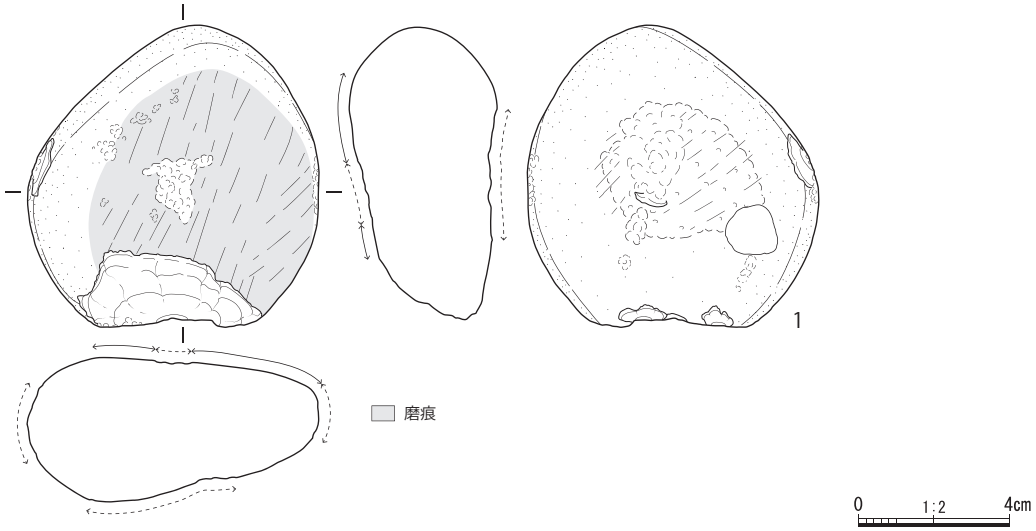


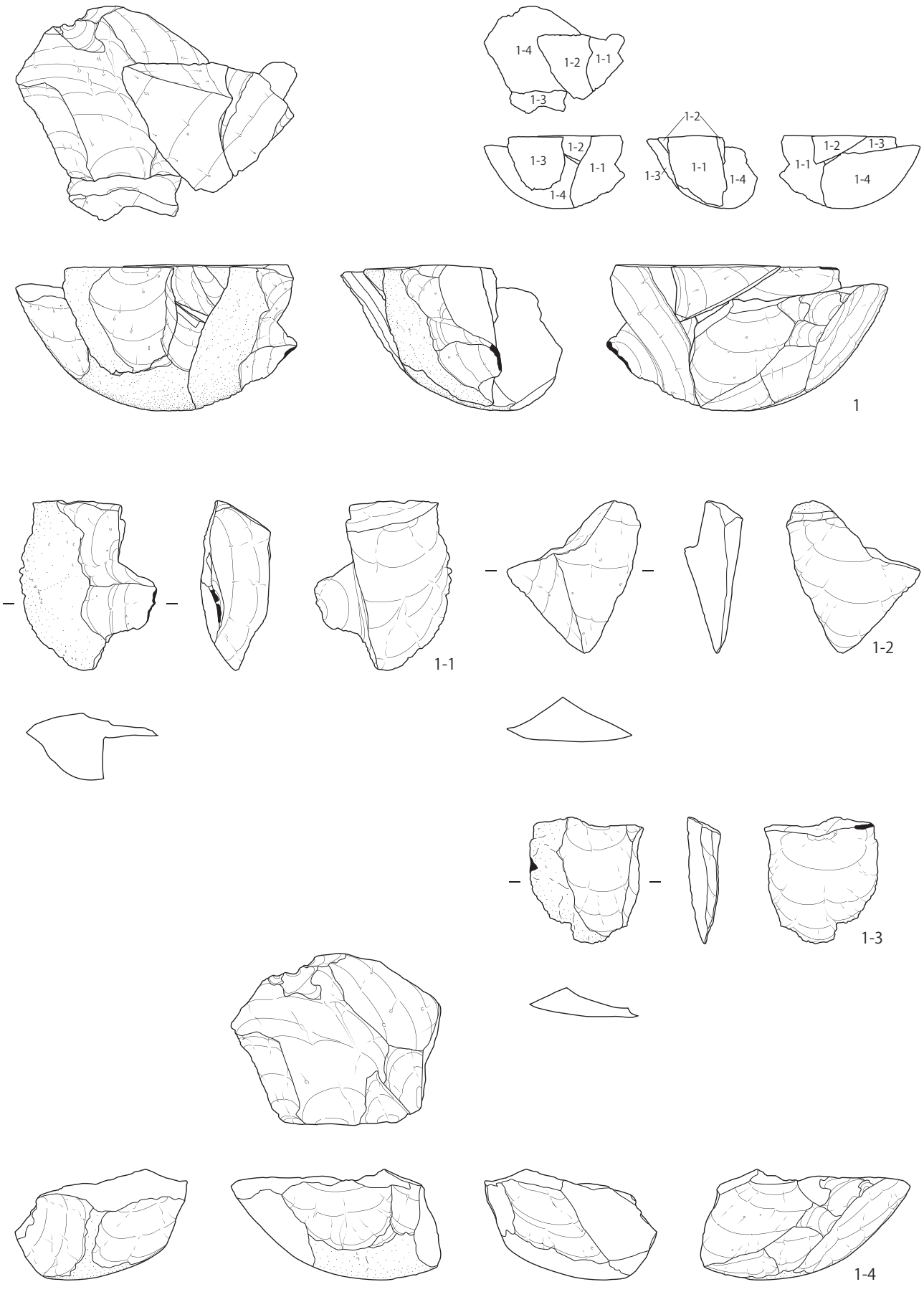

第 125 図　12 ～ 14T 出土石器



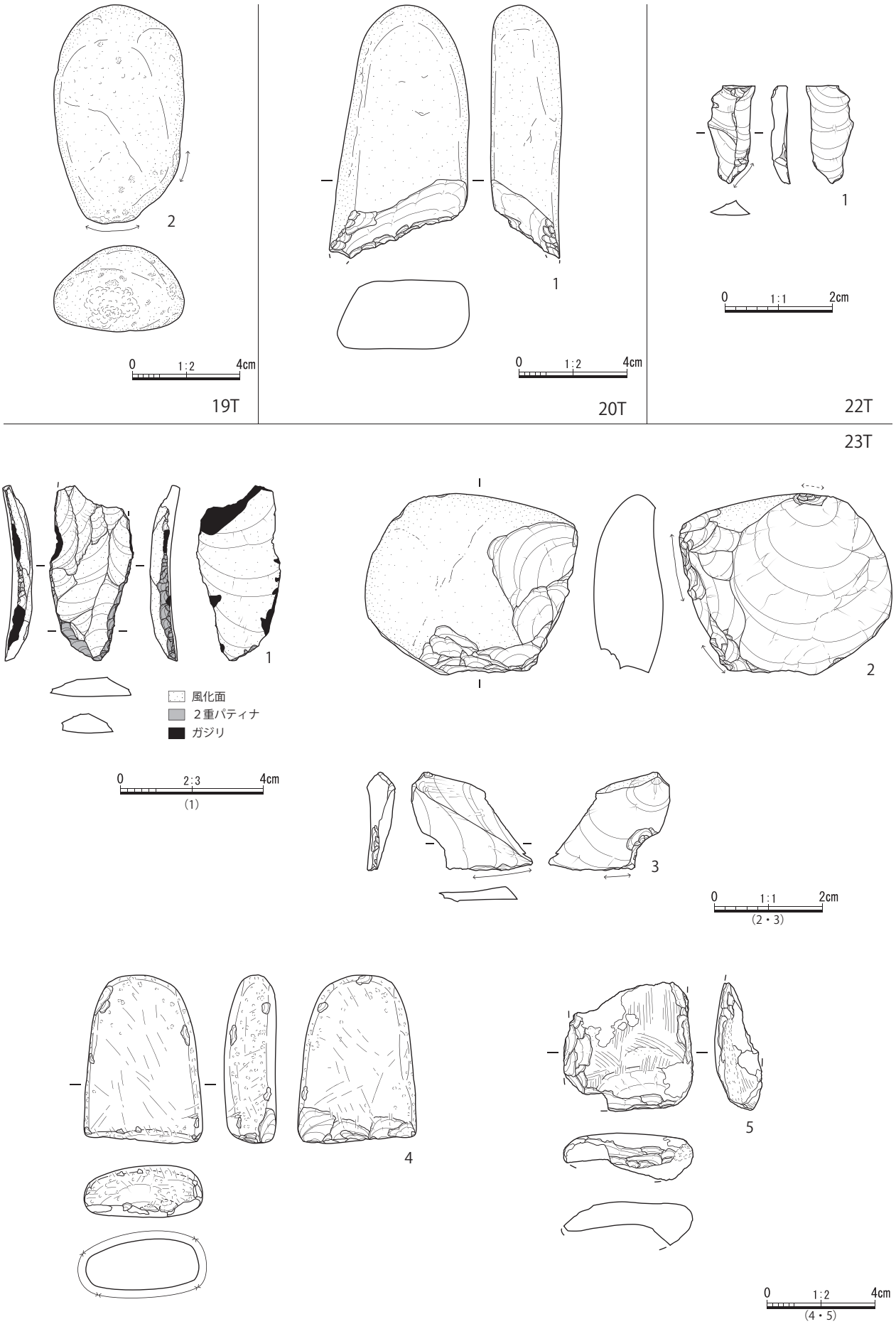

第 126 図　16T 出土石器



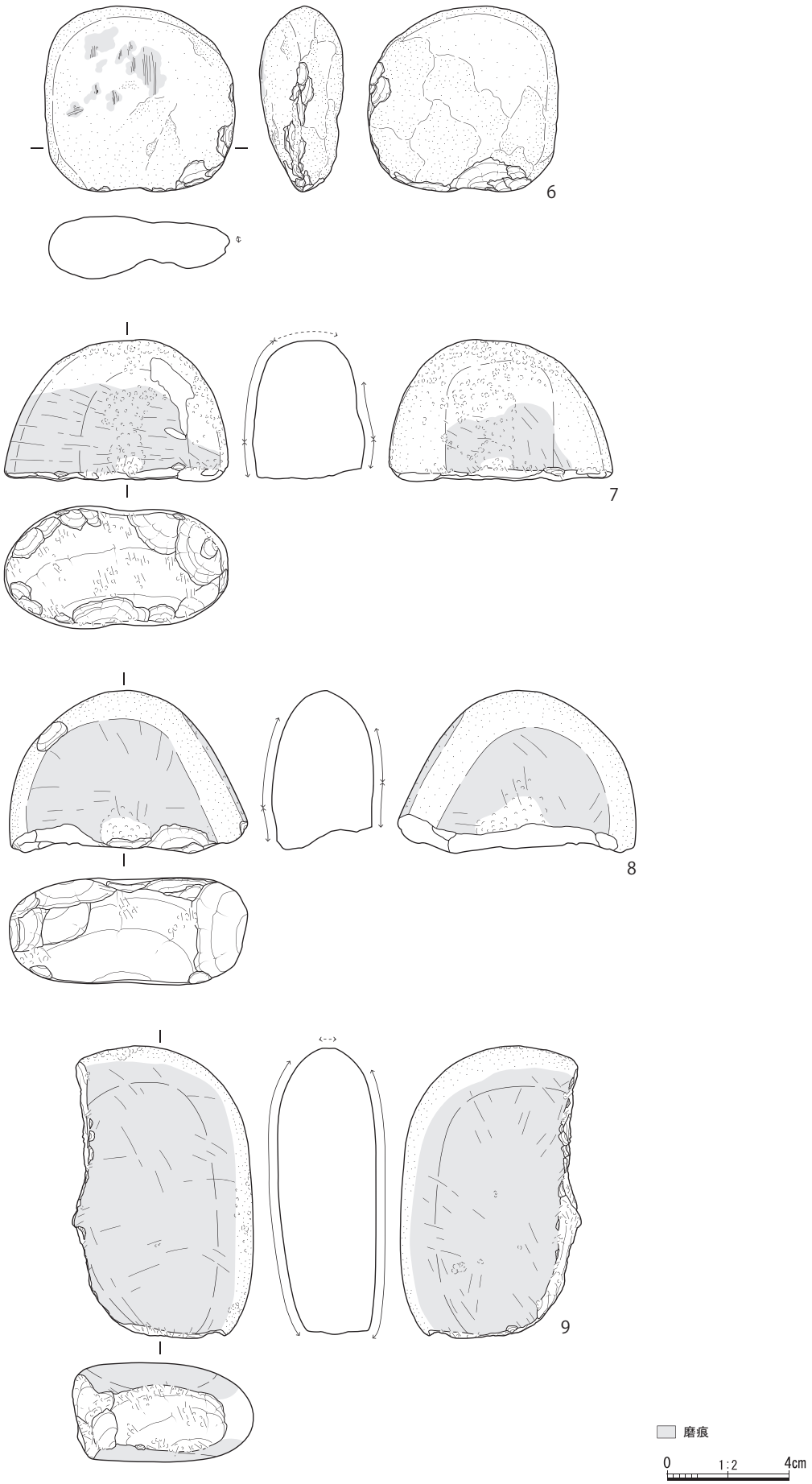

第 127 図　18T 出土石器



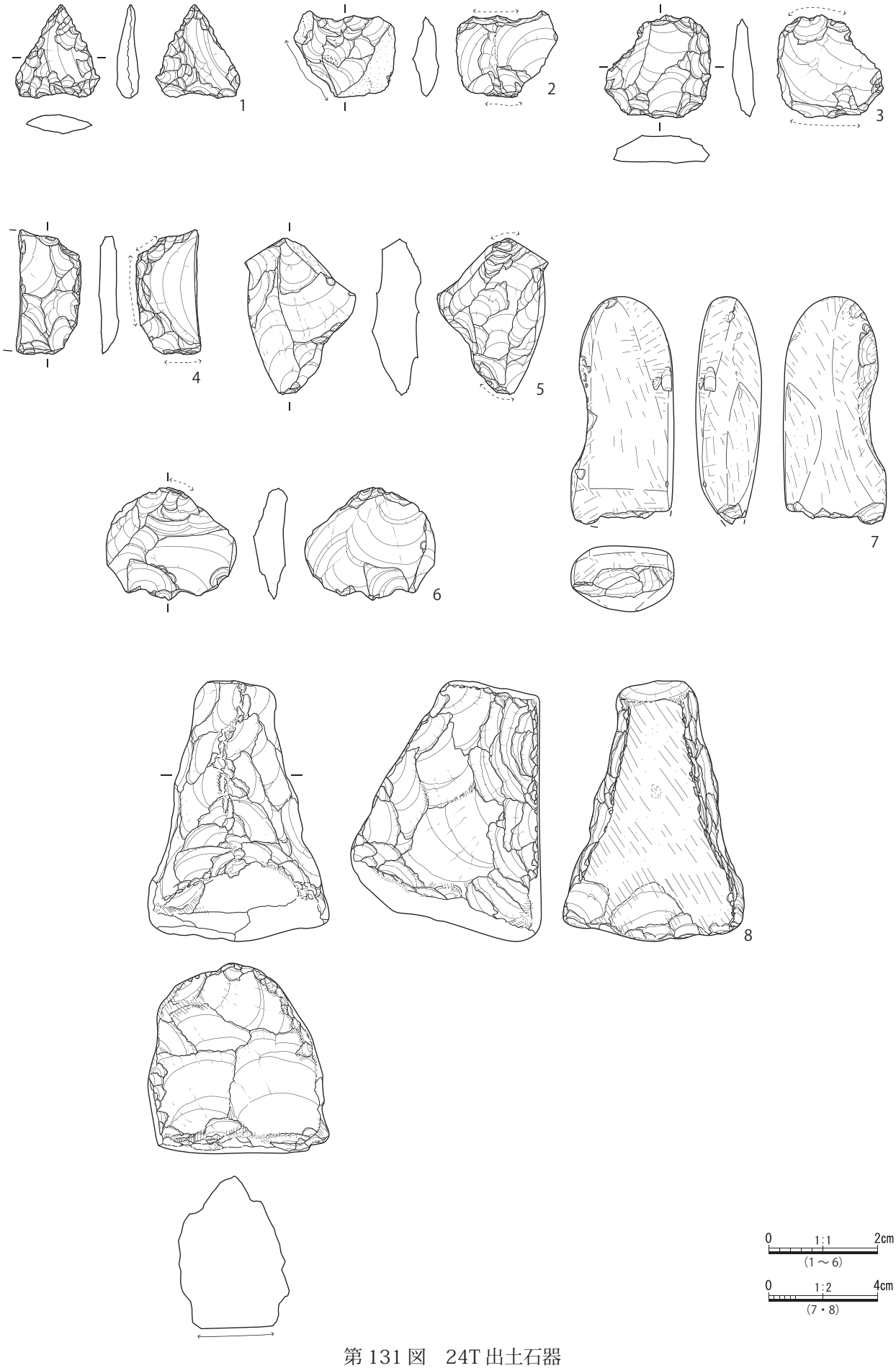

第 128 図　19T 出土石器



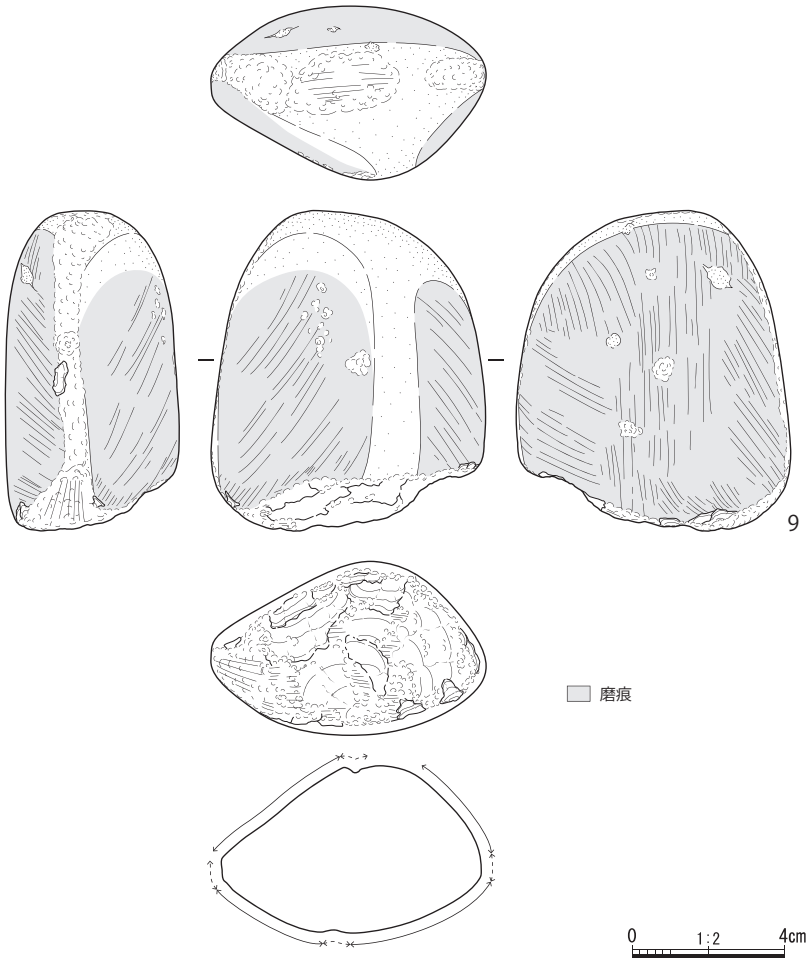

第 129 図　19・20・22・23T 出土石器




第 130 図　23T 出土石器

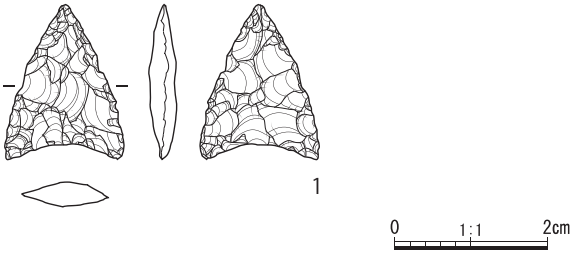



第 131 図　24T 出土石器

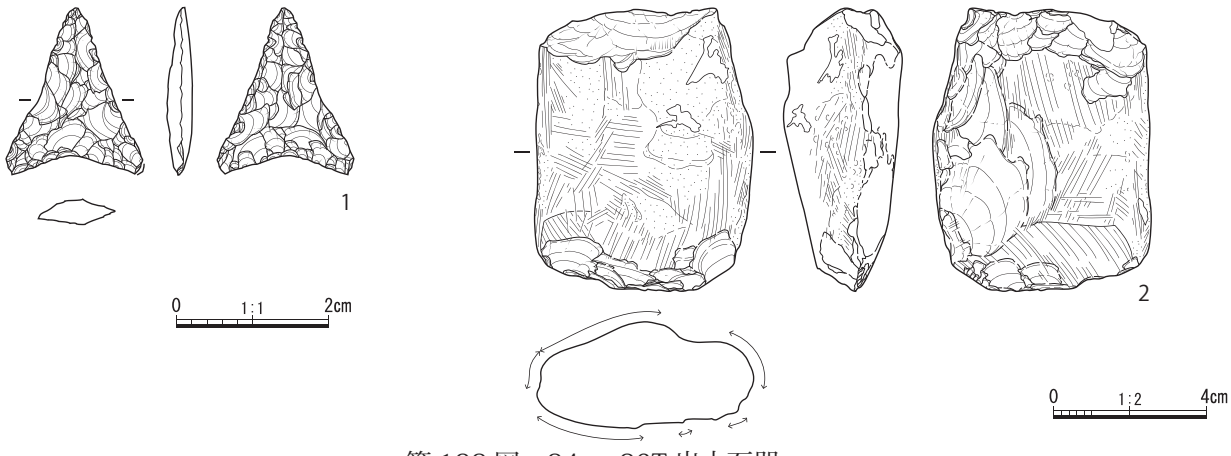



24T

25T




26T




第 132 図　24 ～ 26T 出土石器

## 第４節　縄文時代

これまでの調査（１～８次調査）で検出した縄文時代の竪穴住居跡は早期前葉が 58 軒、前期前半が 18 軒、中期後半１軒である。早期･前期の住居跡は遺跡中央部から東部にかけて広い範囲で検出されており、時期ごとに分布域が異なる傾向にあった（第６章第１節第１項）。ここでは、このうち早期前葉（取掛西Ⅱ～Ⅳ期）31 軒、前期前半（取掛西Ⅴ･Ⅵ期）17 軒、中期後半（取掛西Ⅶ期）１軒について詳細を記載する。

土坑は多数検出したが、半截などの精査を行ったものは少ない。ここでは、５次調査で検出したもののうち遺物の出土量が多かった４基、６～８次調査で底面の状況を確認するためサブトレンチを設定あるいは半截を実施した 10 基について詳細を記載する。

### 第１項　縄文時代早期

#### １．住居跡

**５次 SI－002**（第 133 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区南部　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 6.0m、東西（4.2）m、深さ 75cm　**重複：**SK－013（取掛西Ⅵ期）と重複。新旧関係は SI－002（古）→ SK－013（新）　**覆土：**壁際に黒褐色土が三角堆積。遺構全体を覆うようにヤマトシジミを主体とする貝層が堆積　**床面：**中央部に掘り込み。中央部を中心に広い範囲で硬化面を確認　**炉跡：**中央部付近で検出。69 × 68cm、深さ９cm。火床面は認められなかったが、覆土中に炭化物・灰を含む　**ピット：**106 基を検出　**備考：**炭化種実や貝類などの年代測定を複数実施（第５章第２節第２項）。調査区外となる西部は検土杖により貝層範囲を推定。貝層直下からイノシシ・シカの頭骨がまとまった状態で出土しており、動物骨の儀礼的取扱いとしては、日本最古の事例である。５次 SI－003・004 および SK－005 と遺構間接合が認められた（第 49 表）

**出土遺物：**出土した遺物は極めて多量である。貝層中からは骨角歯牙製品・貝製品のほか、鳥獣骨・魚骨も多量に検出した。

**土器**（第 173 ～ 186 図）：Ⅰ群土器が 1,674 点出土し、204 点を図示した。Ⅰ群 12 ～ 14 類が主体となる。１～ 11 は 11 類である。１～３･５･６は口縁部が屈曲、４･７～ 10 は直立する。11 は尖底の底部である。12 ～ 90 は 12 類である。12 ～ 63 はｂ種、64 ～ 85 はｃ種とした。92 ～ 168 は 13 類である。口唇部形態から、92 ～ 104 は円頭状のａ種、105 ～ 156 は角頭状のｂ種、157 ～ 168 は尖頭状のｃ種とした。169 ～ 190 は 15 類である。口唇部形態から、175 ～ 186 は円頭状のａ種、169 ～ 174 は角頭状のｂ種とした。187 ～ 190 は底部破片である。191･192 は 16 類である。共に口縁部に縄側面圧痕が施される。193 ～ 203 は 17 類である。203 は細沈線により文様が施される。204 は 15 類の胴部破片を利用した土製円盤である。

**石器**（第 208 ～ 214 図）：剝片石器が剝片・破片を含め 27 点、礫石器が 50 点出土した。このうち、図示したのは 39 点である。１～６は石鏃である。５を除き全てチャート製で、２・３はその一部に弱い研磨が施される。７・８は削器である。７は黒曜石製、８はガラス質黒色安山岩製。９～ 13 は楔形石器である。10 は黒曜石製、ほかはチャート製。14 はチャート製の石核と剝片の接合資料である。14－３が石核と考えられ、他は剝片となる。15 ～ 19 は礫斧で、15 が細粒緑色凝灰岩製、17 が角閃岩製、その他が変質玄武岩製。20 は砂岩製の礫器である。21 ～ 24 はスタンプ形石器、25 は敲石、26 ～ 31 は磨石類である。32･33 は礫の一部に光沢面が認められることから、磨き石と考えた。34 ～ 39 は石皿あるいは台石である。34 ～ 37 は利用面が凹面となることから石皿と考えたが、いずれも石皿としてはやや軟質の石材である。38 は SI－004 と遺構間接合が認められた。

**骨角歯牙製品**（第 223 ～ 225 図）：109 点が出土し、66 点を図示した。１～ 20 は刺突具、22 は鏃、23 ～ 45 は針である。45 は他のものに比べ大型で整形も異なるが、基部に紐などをかけたと思われる切り込みが認められたため、針の一種と考えた。52 ～ 57 は錐である。58 ～ 60 は髪針となるか。いずれも頂部に穿孔を有し、光沢を伴う非常に丁寧な研磨が施されていることから髪針と判断した。61 ～ 63 は器種不明の骨角製品である。64 は切断痕が認められることから、骨角製品の素材が切り取られた残りと考えられる。65 ～ 67・69 ～ 74 は装身具である。67 はイノシシの犬歯と思われる破片に穿孔が施されていた。69 ～ 74 はサメ類の歯牙を利用したもので、直径１～２mm の穿孔が歯根部に認められる。
**貝製品**（第 226 ～ 228 図）：2,138 点が出土し、207 点を図示した。ツノガイ類製品が中心であり、小玉状が 912 点、管状が 1,216 点である。１～ 187 はツノガイ製品であり、素材と考えられるものも含んでいる。１～ 27、28 ～ 57、58 ～ 104 は、それぞれＧ区、Ｈ区、Ｆ区内の同一サンプルの乾燥フルイ中に検出した。１～ 57 は小玉状、58 ～ 104 は管状の製品である。105 ～ 187 は上記以外の貝層サンプルから検出されたものである。188 ～ 194 はタカラガイ類を加工した装身具である。189・190・195 は背面に穿孔が施され、その破断面は研磨される。196 は研磨された貝殻片に穿孔が施されるため装身具と考えた。利用された貝種については不明である。197 ～ 202、204 ～ 206 は穿孔されたヤマトシジミである。198・199 は風化により判断が難しいものの、穿孔部を研磨していると考えられる。207 ～ 209 は貝刃である。全てハマグリを素材としており、刃部は内側からの剝離により作出される。
**時期：**出土土器の主体がⅠ群 12 ～ 14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－003**（第 134 図）
**調査次：**５次　**位置：**調査区南部　**形態：**楕円形　**規模：**南北 3.4m、東西（1.8）m、深さ 47cm　**重複：**なし　**覆土：**上層にヤマトシジミを主体とする貝層が堆積　**床面：**中央部の一部に硬化面　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：**23 基を検出　**備考：**貝層中の炭化種実（ミズキ）を年代測定（第５章第２節第１項）。５次 SI－002 および 004 と遺構間接合が認められた（第 49 表）
**出土遺物：**遺物量は少ない。貝層中を中心に出土し、床面近くからの出土は乏しい。貝層中からは鳥獣骨も検出している。
**土器**（第 187・188 図）：Ⅰ群土器が 134 点出土し、31 点を図示した。Ⅰ群 12 ～ 14 類が主体となる。１～３は 11 類である。４～ 14 は 12 類である。４～７はｂ種、８～ 13 はｃ種とした。15 ～ 22 は 13 類である。口唇部形態から、15 ～ 17 は円頭状のａ種、18 ～ 22 は角頭状のｂ種とした。23 ～ 29 は 14 類、30 は 15 類である。31 は 17 類で、12 類ｃ種に類似する小型土器である。口縁部は内弯し、焼成前に施された径２mm 程の小穿孔が２か所に施される。
**石器**（第 215 図）：礫石器が７点出土し、４点を図示した。１は頁岩製の礫斧、２は石英斑岩製のスタンプ形石器、３は流紋岩製の磨石である。４は砂岩製の台石の破片と考えたが、砥石となる可能性も否定できない。利用面となる正裏面平坦部に強い光沢が認められる。
骨角歯牙製品・貝製品：骨角歯牙製品は不明製品が１点、貝製品はツノガイ類製品が 48 点出土したが、図示はしていない。内訳は小玉状 11 点、管状 37 点である。
**時期：**出土土器の主体がⅠ群 12 ～ 14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－004**（第 134 図）
**調査次：**５次　**位置：**調査区南部　**形態：**楕円形　**規模：**南北 5.7m、東西 3.3m、深さ 46cm　**重複：**な

し　**覆土：**上層にヤマトシジミを主体とする貝層が堆積。遺物は貝層中を中心に出土し鳥獣骨も検出　**床面：**中央部を中心に楕円形の掘り込みがあり、その底面に硬化が認められた　**炉跡：**Ｐ６覆土に炭化物が含まれるため、灰床炉の可能性あり　**ピット：**108 基を検出　**備考：**貝層中の炭化種実（ミズキ）を年代測定（第５章第２節第１項）。５次 SI－002 および 004 と遺構間接合が認められた（第 49 表）

**出土遺物：**出土遺物は比較的多い。出土層位は貝層中からのものが多く、床面近くからの出土は少ない。貝層中からは５次 SI－002 に次ぐ量の骨角歯牙製品や貝製品が出土した。

**土器**（第 189 ～ 193 図）：Ｉ群土器が 420 点出土し、70 点を図示した。Ｉ群 12 ～ 14 類が主体となる。１・２は口縁部に縄側面圧痕が巡るが、胴部に施文が認められない。16 類との分類が困難だが、原体圧痕が深く明瞭であることや調整・胎土の特徴から５類と判断した。３は６類ａ種、４・５は８類である。６・７は 11 類で、６は口縁部が屈曲し、７は直線的な口縁部である。８～ 31 は 12 類である。８はａ種、９～ 21 はｂ種、22 ～ 29 はｃ種とした。32 ～ 59 は 13 類である。口唇部形態から、32 ～ 37 は円頭状のａ種、38 ～ 54 は角頭状のｂ種、55 ～ 59 は尖頭状のｃ種とした。60 ～ 62 は 14 類の底部である。63 ～ 67 は 15 類である。68・69 は 16 類で、共に口縁部に無節Ｒの側面圧痕文が施される。胎土は 15 類に類似する。70 は 17 類で、小型土器の胴部破片である。

**石器**（第 216・217 図）：剝片石器が剝片・砕片を含め４点、礫石器が８点出土した。このうち、図示したのは７点である。１はチャート製の抉入石器、２は黒曜石製の二次加工のある剝片である。３～５は磨石、６は砂岩製の砥石である。７は軟質砂岩製の石皿である。

**骨角歯牙製品**（第 223 ～ 225 図）：15 点が出土し、７点を図示した。21 は刺突具、46 ～ 50 は針である。68 は装身具と考えられ、メジロザメの脊椎骨の中央部に穿孔が施される　**貝製品**（第 228 図）：ツノガイ類製品が 95 点出土したが、図示していない。内訳は小玉状 71 点、管状 24 点である。195 はタカラガイ類製品で１点出土した。203 は穿孔されたヤマトシジミである。

**時期：**出土土器の主体がＩ群 12 ～ 14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－006**（第 135 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区南西部　**形態：**不明　**規模：**東西（6.4）m、深さ６cm　**重複：**５次 SD－007（取掛西Ｘ期）と重複。南側を攪乱により壊される　**覆土：**ヤマトシジミを主体とする貝層ブロックを複数確認　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：**８基を検出　**備考：**５次確認調査４Ｔで貝層を含む遺構覆土を確認しているため、東に住居範囲が広がる可能性がある。この場合、東西の規模は検出部分で 7.3m を測る

**出土遺物：**遺物出土量は少なく、出土位置の記録は行っていない。

**土器**（第 194 図）：Ｉ群土器が 24 点出土し、４点を図示した。無文の胴部破片である 14 類が最も多く出土した。１は４類で、口縁部に沈線、胴部に縦位の撚糸文Ｒ。２は 11 類、３・４は 15 類である。

**石器**：礫類・小礫が 15 点出土したが、石器は出土しなかった。

**骨角歯牙製品・貝製品**：骨角歯牙製品は出土しなかった。貝製品はツノガイ類製品（管状）が１点出土したが、図示はしていない。

**時期：**出土土器の主体がＩ群 14 類であること、11 類が出土していることなどから、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－008**（第 135 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区北部　**形態：**楕円形か　**規模：**南北（3.4）m、深さ 17cm　**重複：**５次 SI－009（Ⅲ

期）、５次 SK－008（取掛西Ⅲ期）と重複。新旧関係は SI－009（古）→ SI－008 → SK－008（新）　**覆土：**黒褐色土が堆積　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：** 1 基を検出

**出土遺物：**遺物出土量は少ない。覆土中層からの出土が大半である。

**土器**（第 194 図）：Ⅰ群土器が 16 点出土し、10 点を図示した。無文の胴部破片である 14 類が最も多く出土した。1 は 11 類の胴部破片である。2 ～ 4 は 12 類、5 は 13 類ｃ種である。6 ～ 8 は 14 類で無文の胴部破片で、9 は 14 類で平底の底部破片である。10 は 15 類で補修孔が認められる。

**石器：**石器は出土しておらず、破砕した礫が 1 点のみ出土した。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群 14 類であること、11 類が出土していることなどから、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－009**（第 135 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区北部　**形態：**不明　**規模：**南北（2.7）m、深さ 12cm　**重複：**５次 SI－008（取掛西Ⅲ期）と重複。新旧関係は SI－009（古）→ SI－008（新）　**覆土：**黒褐色土が堆積　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：** 1 基を検出

**出土遺物：**遺物出土量は少ないが、全て床面のほぼ直上から出土しており、比較的大型の破片が多い。石器・礫類は出土しなかった。

**土器**（第 195 図）：Ⅰ群土器が７点出土し、２点を図示した。1 は 11 類で、口縁部が屈曲する。2 は 12 類ｂ種である。

**時期：**出土土器にⅠ群 11 類・12 類が認められることから、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－010**（第 136 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区北東部　**形態：**楕円形か　**規模：**検出できた部分で南北 6.5m、東西 5.0m、深さ 27cm　**重複：**複数の土坑と重複。覆土に焼土を含む SK－172 は出土土器から取掛西Ⅵ期のもの　**覆土：**暗褐色土が堆積　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：**15 基を検出

**出土遺物：**遺物出土量は少ない。出土位置の記録ができたのはセクションベルト範囲内に限られるが、床面近くからの出土は少ない。

**土器**（第 195 図）：Ⅰ群土器が 236 点出土し、19 点を図示した。14 類や 15 類の無文の胴部破片が主体となる。口縁部破片では 13 類や 15 類が多い。1 は 11 類の胴部破片である。２・３は 12 類、４～９は 13 類である。口唇部形態から、4 は円頭状のａ種、5・6 は角頭状のｂ種、7 ～ 9 は尖頭状のｃ種とした。10 ～ 17 は 15 類である。18 は 17 類で、口唇部が尖頭状の小型土器である。19 はⅡ群（沈線文系土器）と考えられる。Ⅰ群土器よりも太めの沈線により口縁部が横位に区画され、その上下に傾きの異なる斜線文が施される。文様を描く沈線はⅠ群 16 類と異なり、やや幅広の沈線となる。胎土はⅠ群 15 類と類似する。

**石器**（第 218 図）：剥片石器が剥片・砕片を含め６点、礫石器が７点出土した。このうち、５点を図示した。礫類・小礫が 101 点出土し、その 65％が被熱していた。1 はチャート製の削器、2 は微細剥離痕を有する剥片である。黒曜石製。3 は砂岩製のスタンプ形石器、4 は砂岩の礫を素材とした磨石である。5 は敲石である。安山岩の棒状礫を素材とする。

**時期：**Ⅰ群 12 類の出土量が少なく 15 類が主体となることから、取掛西Ⅳ期とした。

**５次 SI－011**（第 136 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区北東部　**形態：**円形または楕円形か　**規模：**検出できた部分で南北 2.9m、東西 3.5m、深さ６cm　**重複：**SH－171 と重複　**覆土：**暗褐色土が堆積　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：**６基を検出

**出土遺物：**遺物出土量は少ない。住居跡上に堆積するⅡ層中からの出土遺物についても、本住居跡に関係する可能性が高いと考え、ここに含めた。

**土器**（第 196 図）：Ⅰ群土器が 35 点出土し、９点を図示した。14 類や 15 類の無文の胴部破片が主体となる。１～９は 15 類である。１は口唇部が角頭に近い形状のため、ｂ種とした。

**石器**（第 218 図）：剝片が１点、礫斧が１点出土した。このうち、図示したのは１点である。１は変質玄武岩の礫を素材とした礫斧である。

**時期：**Ⅰ群 12 類の出土が認められず、15 類が主体となることから、取掛西Ⅳ期とした。

**５次 SI－012**（第 136 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区中央部北側　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北（2.1）m、東西（1.2）m、深さ 10cm　**重複：**なし　**覆土：**黒褐色土が堆積　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：**２基を検出

**出土遺物：**遺物出土量は少ない。

**土器**（第 196 図）：Ⅰ群土器が 41 点出土し、７点を図示した。無文の胴部破片である 14 類が最も多く出土した。１は 11 類で、口縁部が屈曲する。２は 12 類ｂ種で、口縁部の沈線は断面がレ字状に浅く削り込んで表現される。３は 13 類ｃ種である。４・５は 15 類、６・７は 14 類である。

**石器**：礫が１点出土したのみであり、石器は出土しなかった。

**時期:**出土土器の主体がⅠ群 14 類であること、11 類･12 類が出土していることから、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SI－015**（第 136 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区北部　**形態：**隅丸方形か　**規模：**南北（0.7）m、東西（1.5）m、深さ 22cm　**重複：**なし　**覆土：**黒褐色土が堆積　**床面：**検出範囲内では硬化面を確認できない　**炉跡：**検出範囲内では確認できない　**ピット：**検出範囲内では確認できない　**備考：**５次確認調査２Ｔの遺構確認状況を考慮すると、東西３m 前後の規模となる可能性がある

**出土遺物：**遺物出土量は少ない。住居跡上に堆積するⅡ層中からの出土遺物についても、本住居跡に関係する可能性が高いと考え、ここに含めた。

**土器**：Ⅰ群土器が 11 点出土したが図示していない。無文の胴部破片である 14 類が最も多く出土した。

**石器**（第 218 図）：有舌尖頭器が１点出土し、これを図示した。１はホルンフェルス製の有舌尖頭器である。その形態から草創期の所産とみられ、遺構には伴わないと考えられる。

**時期：**出土量が乏しく時期決定は困難となるが、出土土器の主体がⅠ群 14 類で 15 類の出土が１点のみであることから、取掛西Ⅲ期とした。

**5T－005 住居跡**（第 138 図）

**調査次：**８次　**位置：**５Ｔ中央拡張区南部　**遺存状況：**北東部を 5T－002 住居跡に壊される　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形**

**態：**隅丸方形　**規模：**南北 5.0m、東西 4.8m　**重複：**5T－002 住居跡（取掛西Ⅵ期）と重複。新旧関係は 5T－005（古）→ 5T－002（新）　**覆土：**暗褐色土　**備考：**平面形態を確認したのみで未精査
**出土遺物：**5T－002 住居跡（取掛西Ⅵ期）と重複するため、本遺構には伴わないと考えられるⅣ群土器の出土量も少なくない。遺構確認面から、細片も含めて 11 点のⅣ群土器が出土したが図示はしていない。重複する 5T－002 住居跡から出土したⅠ群土器の多くは本住居跡に属する可能性が高い。
**土器**（第 229 図）：Ⅰ群土器が 10 点出土し、３点を図示した。Ⅰ群９類の出土量が多い。１は 13 類ｃ種である。２は９類で、撚糸文Ｒが縦位施文される。３は 14 類である。
**石器**（第 285 図）：剝片石器が１点、礫類が２点出土した。このうち、図示したのは１点である。１はチャート製の石鏃で、五角形状を呈する。
**時期：**Ⅰ群９類の出土が目立つことから、取掛西Ⅱ期とした。

**6T－001 住居跡**（第 139 図）
**調査次：**６次　**位置：**６Ｔ北端部・１－２Ｔ　**遺存状況：**住居跡の大半は調査区外。一部攪乱を受けるが全体的に良好　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸長方形　**規模：**南北 7.8m と推定される　**重複：**6T－002 住居跡と重複。新旧関係は 6T－002（古）→ 6T－001（新）　**覆土：**黒褐色土
**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、6T－001 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が３点、Ⅳ群土器が３点出土した。これらの土器のうち、２点を第３節に図示した（第 67 図 20・21）。
**土器**（第 230 ～ 233 図）：Ⅰ群土器が 366 点出土し、91 点を図示した。Ⅰ群 15 類が主体であり、全体の約８割を占める。１は 11 類の胴部破片である。２～４は 13 類。口唇部形態から、２は円頭状のａ種、３・４は尖頭状のｃ種とした。５～ 18・43 は 14 類で、17 は平底、18 は尖底となる。19 ～ 42・44 ～ 91 は 15 類である。口唇部形態から、19 ～ 31 は円頭状のａ種、32 ～ 34 は角頭状のｂ種、35 は尖頭状のｃ種とした。36 ～ 42・44 ～ 91 は胴部～底部破片のｄ種で、86 ～ 91 は底部破片である。
**石器**（第 286 図）：剝片石器が１点、礫石器が９点出土した。このうち、図示したのは２点である。１は砂岩製の砥石である。破損後に下部破断面をスタンプ形石器として再利用したと考えられる。２は斑レイ岩製の磨石Ａとした。破損後の破断面に磨耗痕が認められるが、使用面が凹面状となるため最終的に磨石Ｃに利用されたと推測した。
**時期：**出土土器の主体がⅠ群 15 類であることから、取掛西Ⅳ期とした。

**7T－001 住居跡**（第 140・141 図）
**調査次：**６次　**位置：**７Ｔ中央拡張区　**遺存状況：**住居跡東部は調査区外。一部土坑に壊されるが全体的に良好　**調査内容：**40cm 幅のサブトレンチを南北に設定し、貝層の堆積状況と床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 4.2m、東西（4.5）m、深さ 19cm　**重複：**住居跡との重複なし。北壁や貝層部分を土坑（前期か）に切られる　**覆土：**住居内東部の上層にヤマトシジミを主体とする貝層。住居中央部に黒色土が堆積　**床面：**全体に硬化が認められた　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**ピット：**１基を検出　**備考：**サブトレンチ内の覆土（土壌・貝層）を全量採取。貝層中の炭化種実（オニグルミ）を年代測定（第５章第２節第１項）
**出土遺物：**遺物量は少ない。貝層中からの出土が多く、床面近くからの出土は乏しい。Ⅰ群土器が大半を

占めるが、7T－001 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅣ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が 10 点、Ⅴ群土器が２点出土した。これらの土器のうち、５点を第３節に図示した（第 35 図、第 68 図 15 ～ 19）。

**土器**（第 234 ～ 236 図）：Ⅰ群土器が 57 点出土し、38 点を図示した。Ⅰ群 11 ～ 14 類が多い。１～７は 11 類である。８～ 11 は 12 類である。全て口唇部が角頭状のｂ種であり、11 を除いて口縁部を削り込むことにより段を作出する。12 ～ 15 は 13 類である。口唇部形態から、12・13 は円頭状のａ種、14 は角頭状のｂ種、15 は尖頭状のｃ種とした。16 ～ 33 は 14 類で、29 ～ 32 は尖底、33 は平底の底部破片である。34 ～ 37 は 15 類の胴部破片である。38 は 17 類で、12 類に類似する小型土器である。

**石器**（第 287 図）：礫石器が８点出土し、５点を図示した。１・２はスタンプ形石器である。１は砂岩製、２は石英斑岩製。３は砂岩製の敲石、４は多孔質安山岩製の磨石Ａである。４は下部破断面に磨耗痕が認められるため、破損後にスタンプ形石器として再利用されたと考えられる。５は石皿である。安山岩製。５次 SI－002 などから出土した石皿に比べ、硬質な石材を素材としている。

**骨角歯牙製品・貝製品**：貝層サンプル量が少量だったためか、現時点では確認できていない。

**時期**：出土土器の主体がⅠ群 11 ～ 14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**9T－001 住居跡**（第 142・143 図）

**調査次**：６次　**位置**：９Ｔ中央部　**遺存状況**：覆土は薄いが全体的に良好　**調査内容**：9T－002 住居跡と連続する 40cm 幅のサブトレンチを南北に設定し、新旧関係と床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態**：隅丸方形　**規模**：南北 5.4m、東西 4.5m、深さ 19cm　**重複**：9T－002 住居跡と重複。新旧関係は 9T－002（古）→ 9T－001（新）　**覆土**：黒褐色土　**床面**：サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡**：サブトレンチ内では未確認　**ピット**：８基を検出

**出土遺物**：住居範囲内から多数の遺物が集中して出土した。一定量のⅠ群４～９類が認められるが、これらは 9T－002 住居跡からの混入と考えられる。Ⅰ群土器が大半を占めるが、9T－001 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が１点、Ⅳ群土器が 11 点、Ⅴ群土器が１点出土した。これらの土器のうち３点を第３節に図示した（第 37 図、第 72 図 76 ～ 78）。

**土器**（第 237・238 図）：Ⅰ群土器が 77 点出土し、41 点を図示した。Ⅰ群 11 ～ 14 類が主体となる。１は６類ａ種である。口唇部は肥厚せず、その直下から撚糸文が縦位に施文される。２・３は９類である。４～６は 11 類で、４・５は口縁部が屈曲し、６は直立する。７・８は 12 類である。７はａ種で、表面に工具による調整痕が認められる。内面は貝殻条痕文となるか。８はｃ種とした。９～ 14 は 13 類。口唇部形態から、９・10 は円頭状のａ種、11・12 は角頭状のｂ種、13・14 は尖頭状のｃ種とした。15 は 15 類の胴部破片、16 ～ 41 は 14 類である。39 ～ 41 は底部直上の破片と考えられる。

**石器**（第 288 図）：剥片石器が２点、礫石器が１点出土した。このうち、図示したのは２点である。１・２は微細剥離痕のある剥片である。いずれもチャート製。

**時期**：002 住居跡との新旧関係と出土土器にⅠ群９類が少ない点から、取掛西Ⅲ期とした。

**9T－002 住居跡**（第 142・144 図）

**調査次**：６次　**位置**：９Ｔ中央部　**遺存状況**：覆土は薄いが全体的に良好。西部は調査区外で、北東部を

9T－001 住居跡に壊される　**調査内容：**9T－001 住居跡と連続する 40cm 幅のサブトレンチを南北に設定し、新旧関係と床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸長方形　**規模：**南北 7.9m、東西（4.0）m、深さ 11cm　**重複：**9T－001 住居跡と重複。新旧関係は 9T－002（古）→ 9T－001（新）　**覆土：**黒褐色土　**床面：**サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**ピット：**５基を検出

**出土遺物：**住居範囲内から多数の遺物が出土した。その多くは遺構確認面での出土であり、サブトレンチ内からの出土量は少ない。遺構範囲内からⅢ群以降の縄文土器の出土は認められなかった。

**土器**（第 239 ～ 244 図）：Ⅰ群土器が 217 点出土し、117 点を図示した。１・２は８類である。３・４・８は４類である。３は凹線が確認できないが、口縁部の調整が４類と似るためここに分類した。５・６は５類である。７・９～ 17・25・77 は９類である。７は沈線により文様が描かれる。９類ｄ種とした。撚糸文が施される９～ 14 はａ種、縄文が施される 15 ～ 17 はｂ種とした。25・77 は列点が施される９類ｅ種とした。77 は短沈線状の列点文が斜位に施される。18 ～ 24 は 11 類である。19・22・23 は同一個体となるか。26 ～ 39 は 12 類である。26・27 はａ種、28 ～ 30 はｂ種、31 ～ 39 はｃ種とした。40 ～ 56 は 13 類である。口唇部が円頭状の 40 ～ 47 はａ種、角頭状の 48 ～ 55 はｂ種、尖頭状の 56 はｃ種とした。57・58 は 15 類でｄ種とした。58 は小平底の底部破片である。59 ～ 76・78 ～ 116 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。114 ～ 116 は尖底の底部破片である。117 は小型土器で 17 類とした。

**石器**（第 288 図）：剥片石器が６点、礫石器が５点出土した。このうち、６点を図示した。１は楔形石器、２・３は石錐、４は微細剥離痕のある砕片である。いずれもチャート製。５は棒状の砂岩礫を素材としたスタンプ形石器。６は軽石製品である。

**時期：**Ⅰ群 11・12 類も出土しているが、001 との新旧関係や４～９類が一定量出土していることから、取掛西Ⅱ期とした。

**10T－001 住居跡**（第 145 ～ 152 図）

**調査次：**６次・８次　**位置：**10T 北部　**遺存状況：**南壁の一部を攪乱に壊されるが全体的に良好　**調査内容：**十字に設定したベルトを残して床面まで精査。調査終了後床面上に山砂を敷き詰め保存処置を行った　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 6.5m、東西 6.9m、深さ 17cm　**重複：**住居跡との重複はなし　**覆土：**黒褐色土　**床面：**ほぼ平坦だが中央部に方形の掘り込みあり。床面で硬化面を認識できなかったため、ベルト部分で土壌硬度計を用いて床面の硬化の程度を計測した。また、比較対象として確認面・覆土中・地山についても計測を実施した（第 152 図）。しかし、硬化範囲を示す明瞭な値は認められなかった　**炉跡：**なし。ほぼ中央部で検出した焼土範囲は確認面から掘り込まれていたため、住居跡には伴わないと判断した

**ピット：**89 基を検出。ピットは床面での覆土観察により、A：黒褐色土、B：極暗褐色土、C：暗褐色土の３つに分類し、それぞれの分類群ごとに一部を断ち割って土層断面の観察を行った。その結果、ピット A・B については深さが 20cm を超えるものや底面が先細り状となるピットが多く認められた。また、ピット A・B の一部は遺構確認面で検出しているため（第 145 図）、これらについては柱が残存した状態で住居が廃絶、埋没したと考えられる。検出したピットの規模は小径のものが多く主柱穴は明確にできなかったが、中央部で検出した P75・76 は他のピットに比べて深く、上屋構造を支えるためのピットだった可能性がある　**備考：**遺構全体を覆うように１m 四方のグリッドを設定し、そのグリッド毎に覆土を全量採取。検出した炭化種実（オニグルミ）を年代測定（第５章第２節第１項）

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、10T－001 の範囲内からは、遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。耕作土直下から遺構確認面にかけて細片も含めて 21 点のⅣ群土器が出土し、覆土中からもⅢ群土器が６点、Ⅳ群以降と考えられる土器が 15 点出土した。これらの土器のうち４点を第３節に図示している（第 38 図、第 77 図 108・110・116・119）。

**土器**（第 245 ～ 249 図）：Ⅰ群土器が 489 点出土し、122 点を図示した。１～３は１類である。３は胴部破片だが、密接した縄文が施文されることから１類と判断した。４～８・10 ～ 22 は４類である。４・５は口唇部が肥厚し口縁部はミガキやナデにより丁寧に調整される。４類でも古段階に相当する。12 は胴部に縄文が異方向施文される。口縁部に沈線が施される 19 は、４類でも最終段階にあたるものと考えられる。22 は口縁部を欠損するが、凹線が認められるためここに分類した。23 ～ 38 は５類である。口縁部に縄側面圧痕文が施されるものが多いが、32 ～ 37 は絡条体圧痕文、38 は小径の竹管による円形の列点文が横位に施される。口縁部が屈曲するものが多い。39 は絡条体圧痕文が異方向に施文されるが、破片右端では撚糸文が縦位に施されている。９類ｃ種とした。40 ～ 44 は列点文により文様が施される。９類ｅ種とした。40 は列点の列が一部でずれているため、櫛歯状工具の刺突により施文されたと考えられる。45・46 は６類ａ種、47 は６類ｂ種とした。47 は口唇部に横位の撚糸文が施される。９・48 ～ 51 は８類である。51 は凹線状の工具調整が施されることから、ここに分類した。52 ～ 98 は９類である。撚糸文が施される 52 ～ 61・63 ～ 86 はａ種、縄文が施される 87 ～ 97 はｂ種、絡条体圧痕文が異方向施文される 62 はｃ種とした。98 は撚糸文ではなく縄側面圧痕により文様が施されたと考えられることから、９類ｃ種とした。99 ～ 102 は 11 類である。103 ～ 106 は 12 類である。103 はａ種、104・105 はｂ種、106 はｃ種とした。107 ～ 111 は 13 類である。口唇部が円頭状の 107 はａ種、角頭状の 108 ～ 111 はｂ種とした。112 ～ 121 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。120 は尖底、121 は小平底の底部破片である。122 は 15 類としたが、口唇部が外削ぎ状であることから、Ⅱ群初頭に併行する可能性がある。

**石器**（第 289 図）：剥片石器が剥片・砕片を除いて 24 点、礫石器が 10 点出土した。このうち、図示したのは 16 点である。１～３は石鏃で全てチャート製である。１は正裏面に研磨痕が認められる。４・５はチャート製の楔形石器。原礫面が残存する５は両極剥片となるか。６は石錐、７～ 11 は抉入石器である。いずれもチャート製。12･13 は微細剥離痕のある砕片である。黒曜石製。14 は微細剥離痕のある剥片で、チャート製である。15・16 は敲石で、15 は砂岩製、16 は流紋岩製である。

また、覆土全体の水洗選別の結果、チャート製 497 点、黒曜石製 69 点の砕片を検出した。第 151 図には１×１m 方眼ごとに集計した点数を石材別に示した。チャート製の砕片は住居西部と中央部に集中するのに対し、黒曜石製の砕片は住居中央部から北東部で多く出土し、チャートと黒曜石で分布が異なる状況が認められた。また、覆土の水洗選別の際に２mm 目の篩に残った小礫の中から径 10mm 以下の細円礫 923 点を抽出した。これらについても、砕片と同様に集計結果を第 150 図に示した。住居跡中央部に集中するなど分布に疎密が認められるが、利用目的は明確にできなかった。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群４～９類のため、取掛西Ⅱ期とした。

**10T－004 住居跡**（第 153 図）

**調査次：**８次　**位置：**10T 拡張区北西部　**遺存状況：**遺構の大半は調査区外となるが、検出範囲内は良好　**調査内容：**40cm 幅のサブトレンチを東西に設定し、床面の状況を確認。サブトレンチ内および遺構確認面の出土遺物を取り上げた。調査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態：**隅丸方形か

**規模：**南北（1.7）m、東西（3.2）m、深さ 15cm　**重複：**10T－011 土坑と重複。新旧関係は 10T－011（古）→ 10T－004（新）　**覆土：**暗褐色土　**床面：**やや凹凸があるもののほぼ平坦。サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**ピット：**８基を検出　**備考：**サブトレンチ内の覆土を全量採取

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、10T－004 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が３点出土したが図示はしていない。

**土器**（第 250 図）：Ⅰ群土器が 18 点出土し、７点を図示した。１・２は５類である。１は破片下端に縄側面圧痕の痕跡がわずかに残されるため５類とした。２は破片上端に縄側面圧痕文が認められる。３・４は８類である。３は口縁部がわずかにくびれ、口唇部は内削ぎされる。４は工具による横位の調整痕が目立つ。５・６は９類で、撚糸文が施される５はａ種、縄文が施文される６はｂ種である。７は 14 類で無文の胴部破片である。

**石器**（第 290 図）：剝片石器が２点、礫石器が１点出土した。このうち、図示したのは１点である。１は変質玄武岩製の礫斧である。このほか、サブトレンチ内の覆土を水洗選別した際に、砕片を 134 点確認している。

**時期：**出土遺物が少なく時期決定は難しいが、Ⅰ群５類や９類が出土し 11 類や 12 類が認められないことから、取掛西Ⅱ期とした。

**10T－005 住居跡**（第 154 図）

**調査次：**８次　**位置：**10T 拡張区西端部　**遺存状況：**遺構の大半は調査区外となるが、検出範囲内は比較的良好　**調査内容：**40cm 幅のサブトレンチを東西に設定し、床面の状況を確認。サブトレンチ内および遺構確認面の出土遺物を取り上げた。調査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態：**隅丸方形か　**規模：**南北（5.0）m、東西（3.5）m、深さ 16cm　**重複：**北壁部分で 10T－009 土坑と、東壁で 10T－006 住居跡（取掛西Ⅸ期）と重複。新旧関係は 10T－009（古）→ 10T－005 → 10T－006（新）　**覆土：**暗褐色土　**床面：**ほぼ平坦。サブトレンチ内では硬化面は未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**ピット：**４基を検出　**備考：**サブトレンチ内の覆土を全量採取。検出した炭化種実（オニグルミ）を年代測定（第５章第２節第１項）

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、10T－005 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が１点、Ⅳ群土器が３点出土したが図示はしていない。

**土器**（第 251 図）：Ⅰ群土器が 36 点出土し、９点を図示した。１・２は４類である。２は口縁部を欠損するが、弱いくびれが認められるためここに分類した。３～５は５類である。５は口縁部を欠損するが、破片上端に縄側面圧痕文が認められるため５類とした。６～８は９類ａ種である。胴部に撚糸文が縦位施文される。９は 12 類ｂ種である。

**石器：**砕片を除いて剝片石器が１点、礫石器が１点出土したが、図示していない。また、サブトレンチ内の覆土を水洗選別した際に検出されたものも含め、砕片が 59 点出土している。内訳はチャートが 57 点、黒曜石が１点、メノウが１点である。

**時期：**Ⅰ群４・５・９類の出土点数が多いことから、取掛西Ⅱ期とした。

**10T－007 住居跡**（第 155 図）

**調査次：**８次　**位置：**10T 拡張区西部　**遺存状況：**一部を土坑に壊されるが比較的良好　**調査内容：**ベルトを残して床面まで精査。調査終了後床面上に山砂を敷き詰め保存処置を行った　**形態：**隅丸長方形か　**規模：**南北 2.4m、東西 3.1m、深さ 14cm　**重複：**東壁部分で円形の土坑と重複。007 住居跡が古い　**覆土：**黒褐色土　**床面：**ほぼ平坦で硬化面は認められない。10T－001 住居跡と同様にベルト部分で土壌硬度計を用いて床面の硬化の程度を計測したが硬化範囲を示す明瞭な値は認められなかった　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**ピット：**11 基を検出　**備考：**覆土の一部を採取。検出した炭化種実（ミズキ）を年代測定（第５章第２節第１項）

**出土遺物：**床面近くから多くの遺物が出土した。他の住居跡にくらべ土器の接合率が高い。Ⅰ群土器が大半を占めるが、10T－007 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が１点、Ⅳ群土器が３点出土したが図示はしていない。

**土器**（第 252・253 図）：Ⅰ群土器が 128 点出土し、30 点を図示した。１は１類である。破片上端の施文方向が下部と異なるため、頸部から胴上部の破片と考えられる。２～４は３類である。肥厚する口唇部には丁寧な調整が施される。３類でも新段階に相当すると考えられる。５～８は４類である。５は口縁部に未貫通の穿孔が施される。７は口縁部を欠損するが、破片上端に凹線が認められるためここに分類した。９～ 16 は５類である。９・10・13 は縄側面圧痕文、11・12・14 ～ 16 は絡条体圧痕文が口縁部下端に施される。11 ～ 16 のように口縁部が屈曲するものが多い。17 は列点により鋸歯状文が描かれ、破片下部には撚糸文が縦位施文される。９類ｅ種とした。18 ～ 21 は８類である。21 は凹線状の工具調整が施されることから、ここに分類した。22 ～ 29 は９類である。撚糸文が施される 22 ～ 27 はａ種、縄文が施される 28・29 はｂ種とした。30 は無文の胴部破片で 14 類である。

**石器**（第 290 図）：剝片・砕片を除いて剝片石器が５点出土した。このうち、図示したのは２点である。１は黒曜石製の削器である。２は二次加工のある剝片でチャート製。このほか、土壌サンプルを水洗選別した際に検出されたものも含め、チャートを主体とした砕片が 155 点出土している。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群４～９類であることから、取掛西Ⅱ期とした。

**12T－001 住居跡**（第 156 図）

**調査次：**７次　**位置：**12T 拡張区北部　**遺存状況：**住居跡の一部は調査区外。一部近世の掘立柱建物跡に壊されるが比較的良好　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面で出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 6.9m、東西 8.0m　**重複：**12T－004 掘立柱建物跡（取掛西Ｘ期・第 357 図）と重複。新旧関係は 12T－001（古）→ 12T－004（新）　**覆土：**暗褐色土

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、12T－001 住居跡の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅣ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が 20 点、Ⅴ群土器が２点、Ⅶ群土器が１点出土した。これらの土器のうち５点を第３節に図示した（第 41 図、第 87 図 52・53・55・56・59）。

**土器**（第 254 図）：Ⅰ群土器が 53 点出土し、25 点を図示した。１は１類とした。胴部破片だが密接した縄文が施文されることからここに分類した。２は６類ｂ種である。口唇部には横位の撚糸文が施される。３は口縁部の無文部の幅が比較的広いことから７類とした。４は口縁部下端に短沈線状の列点文が横位に施される。時期不明としたが、４類あるいは５類となるか。５～ 17 は９類である。撚糸文が施される５

～ 15 はａ種、縄文が施される 16・17 はｂ種とした。18 ～ 24 は無文の胴部破片で 14 類である。24 は底部直上の破片で尖底を呈すると考えられる。25 は 17 類である。器壁が薄く、推定径も小さいことから、17 類と判断した。

**石器**（第 290 図）：礫石器が３点出土した。このうち、図示したのは１点である。１はホルンフェルス製の三角錐形石器である。

**時期：** Ⅰ群９類の出土点数が多く、11・12 類が認められないことから、取掛西Ⅱ期とした。

**12T－002 住居跡**（第 157 図）

**調査次：** ７次　**位置：**12T 拡張区南部　**遺存状況：**住居跡の東部は調査区外。一部を攪乱と縄文時代前期の住居跡に壊されるが比較的良好　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面で出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形か　**規模：**北西−南東（9.5）m、北東−南西（5.8）m　**重複：**12T－003 住居跡（取掛西Ⅵ期）と重複。新旧関係は 12T－002（古）→ 12T－003（新）

**覆土：**黒褐色土

**出土遺物：** Ⅰ群土器が大半を占めるが、12T－003 住居跡（取掛西Ⅵ期）と重複するため、本遺構には伴わないと考えられるⅢ群土器の出土量も少なくない。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が２点、Ⅳ群土器が 54 点、Ⅴ群土器が１点、Ⅵ群土器が２点、Ⅶ群土器が１点出土した。これらの土器のうち６点を第３節に図示した（第 41 図、第 87 図 47 ～ 51・58）。

**土器**（第 255 ～ 261 図）：Ⅰ群土器が 441 点出土し、144 点を図示した。１～９は４類である。口縁部下端の区画は段や沈線によるものが多い。10 ～ 25 は５類である。口縁部に縄側面圧痕文が施されるものが大半だが、24・25 は半截竹管による刺突文が横位に施される。18 は口縁部が屈曲する。23 は口縁部にも単節ＲＬが横位に施文される。26 は列点文により文様が施される。９類ｅ種とした。口唇部直下から撚糸文が縦位に施文される 27 ～ 33 は６類ａ種、口唇部から口縁部にかけて横位に撚糸文が施文される 34・35 は６類ｂ種とした。22・23 と異なり、34・35 には口縁部と胴部を区画する縄側面圧痕文などは認められない。36・37 は７類とした。38 ～ 41 は８類である。42 ～ 106 は９類である。撚糸文が施される 42 ～ 67・69 ～ 86 はａ種、縄文が施される 68・87 ～ 105 はｂ種とした。101 は異方向施文ではなく、異原体により羽状に施文される。沈線が縦位に施文される 106 はｄ種とした。軽しょうな胎土である。107 は 11 類で、口縁部が屈曲する。108 は 12 類ａ種である。109 ～ 113 は 13 類。口唇部が円頭状の 109・110 はａ種、角頭状の 111 ～ 113 はｂ種とした。111 の口縁部破片と胴部破片は接合しないが、胎土・調整から同一個体と考えられたため、図上で復元した。114 ～ 137 は 14 類で、135 ～ 137 は尖底を呈する底部破片である。138・139 は 15 類。胴部破片のｄ種とした。140・141 は小型土器の 17 類である。140 は器厚がそれほど薄くないが、推定される径が 10cm 程度のため、小型土器とした。142 ～ 144 は土製円盤である。143 は穿孔が認められる。いずれも９類を素材とする。

**石器**（第 291 図）：軽石製品を含め、礫石器が 11 点出土した。このうち、図示したのは３点である。１・２は砂岩製のスタンプ形石器である。３は磨石Ａ。石英斑岩の円礫を素材とする。このほか、礫 69 点・破砕礫 51 点と礫類の出土量も多い。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群４～９類であることから、取掛西Ⅱ期とした。

**16T－001 住居跡**（第 158・159 図）

**調査次：** ７次　**位置：**16T 拡張区北部　**遺存状況：**覆土は薄いが比較的良好　**調査内容：**50cm 幅のサブ

トレンチを南北に設定し、床面の状況を確認。サブトレンチ内および遺構確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 7.3m、東西 8.2m、深さ 12cm　**重複：**住居跡との重複はなし　**覆土：**暗褐色土　**床面：**ほぼ平坦。サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**備考：**サブトレンチ内の覆土を土壌サンプルとして全量採取

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、16T－001 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅣ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が３点、Ⅴ群土器が２点出土した。このうち５点を第３節に図示した（第 46 図、第 91 図 31 ～ 34・36）。

**土器**（第 262 ～ 264 図）：Ⅰ群土器が 169 点出土し、78 点を図示した。１は１類、２は３類である。２は口唇部が肥厚し、丁寧なミガキが施される。３～ 10・41 は４類である。41 は破片上端部に凹線の痕跡が残るため、ここに分類した。11 ～ 24 は５類である。口縁部下端に縄側面圧痕文が施されるものが多いが、20 は絡条体圧痕文、21 は半截竹管によるＣ字状の刺突文が横位に施される。14 ～ 16・21 は口縁部が屈曲する。23・24 は口縁部と胴部を区分する縄側面圧痕文を施文後、口縁部に横位の撚糸文が施される。25 は列点文により文様が施される。９類ｅ種とした。26 ～ 28 は６類ａ種である。口唇部は肥厚せず、その直下から撚糸文が施される。29 は口唇部が内削ぎ状で、口縁部の無文部の幅が比較的広い。７類とした。30・31 は８類である。30 は工具による粗い調整痕が目立つ。32 ～ 40・42 ～ 65 は９類である。撚糸文が施される 32 ～ 34・36 ～ 40・42 ～ 53 はａ種、縄文が施される 54 ～ 65 はｂ種、絡条体圧痕文が施される 35 はｃ種とした。44 は軽しょうな胎土で、外面に付着した炭化物を年代測定している（第５章第２節第１項）。66 は 13 類ａ種である。67 ～ 77 は無文の胴部破片で 14 類である。78 は土製円盤である。

**石器**（第 292 図）：剝片・砕片が２点、礫石器が４点出土した。このうち、図示したのは３点である。１は石英斑岩製の敲石である。２は遺存状態が悪く明瞭ではないが、ホルンフェルス製の砥石と考えられる。３は磨石Ａである。斑レイ岩の扁平な円礫を素材とする。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群４～９類のため、取掛西Ⅱ期とした。

**19T－002 住居跡**（第 160 図）

**調査次：**７次　**位置：**19T 拡張区南端部　**遺存状況：**南部の大半は調査区外。一部を近世溝に壊される　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。攪乱を利用して床面の状況を確認。確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形か　**規模：**南北（3.8）m、東西（3.3）m、深さ 10cm　**重複：**19T－003 住居跡と重複。新旧関係は 19T－003（古）→ 19T－002（新）　**覆土：**黒褐色土　**備考：**平面形態を確認したのみで未精査。攪乱を利用して土層堆積状況を確認

**出土遺物：**19T－002 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅣ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が１点、Ⅶ群土器が１点出土し、第３節に図示した（第 49 図、第 93 図 11・15）。

**土器**（第 265 図）：Ⅰ群土器が５点出土し、１点を図示した。１は無文の胴部破片の 14 類である。

**石器**：剝片が１点出土したが図示していない。

**時期：**Ⅰ群９類が出土し、11・12 類が認められないことから、取掛西Ⅱ期とした。

**19T－003 住居跡**（第 160 図）

**調査次：**７次　**位置：**19 拡張区南端部　**遺存状況：**西部は調査区外。一部を近世溝に壊される　**調査内容：**

平面形態を確認したのみで未精査。攪乱を利用して床面の状況を確認。確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形か　**規模：**南北（4.2）m、東西（5.4）m、深さ 16cm　**重複：**19T－002 住居跡と重複。新旧関係は 19T－003（古）→ 19T－002（新）　**覆土：**黒褐色土

**出土遺物：**19T－003 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅣ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が３点出土し、第３節に図示した（第 49 図、第 93 図９・10・12）。

**土器**（第 265 図）：Ⅰ群土器が６点出土し、３点を図示した。１は４類、２は９類ｂ種、３は 14 類である。

**石器**（第 292 図）：剥片・砕片を除いて剥片石器が３点出土した。このうち、図示したのは２点である。１は二次加工のある剥片、２は微細剥離痕のある剥片である。いずれも黒曜石製。

**時期：**Ⅰ群４・９類が出土し、11・12 類が認められないことから、取掛西Ⅱ期とした。

**23T－001 住居跡**（第 161 図）

**調査次：**８次　**位置：**23T 拡張区北部　**遺存状況：**東部の一部が調査区外。覆土が薄いが比較的良好

**調査内容：**50cm 幅のサブトレンチを南北に設定し、床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 7.8m、東西 6.9m、深さ 14cm　**重複：**住居跡との重複はなし　**覆土：**暗褐色土　**床面：**やや凹凸があるもののほぼ平坦。サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**備考：**サブトレンチ内の覆土を全量採取。検出した炭化種実（オニグルミ）を年代測定（第５章第２節第１項）

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、23T－001 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が１点、Ⅳ群土器が９点、Ⅴ群土器が９点出土した。これらの土器のうち６点を第３節に図示した（第 53 図、第 102・103 図 156・159・166・176・178・182）。

**土器**（第 267・268 図）：Ⅰ群土器が 99 点出土し、37 点を図示した。１～４は 13 類である。口唇部が角頭状の１・２はｂ種、３・４はｃ種とした。５～ 11 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。11 は小平底の底部破片である。12 ～ 35 は 15 類である。口唇部が円頭状の 12 はａ種、角頭状の 13 ～ 17 はｂ種、尖頭状の 18・19 はｃ種とした。20 ～ 35 は胴部～底部破片のｄ種とした。35 は小平底の底部破片と考えられる。36 は 16 類ｂ種である。沈線により文様が描かれるが、胎土は 15 類に類似する。37 は小型土器で 17 類である。

**石器**（第 293 図）：剥片・砕片を含め剥片石器が 12 点、礫石器が５点出土した。このうち、図示したのは２点である。１はホルンフェルス製の三角錐形石器、２は中粒緑色凝灰岩製の磨石Ａである。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群 15 類であり、全体の約７割を占めることから、取掛西Ⅳ期とした。

**23T－002 住居跡**（第 162 図）

**調査次：**８次　**位置：**23T 拡張区中央部　**遺存状況：**住居跡の西部は調査区外。一部を土坑に壊されるが比較的良好　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面で出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形か　**規模：**南北 5.5m、東西（3.7）m　**重複：**住居跡との重複はなし　**覆土：**暗褐色土

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、23T－002 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅣ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が１点、Ⅴ群土器が３点出土し

た。これらの土器のうち１点を第３節に図示した（第 53 図、第 103 図 173）。

**土器**（第 269 図）：Ⅰ群土器が 53 点出土し、22 点を図示した。１・２は 13 類である。口唇部が角頭状の１はｂ種、２はｃ種とした。３～７は無文の胴部～底部破片で 14 類である。８～ 22 は 15 類である。口唇部が円頭状の 12 はａ種、角頭状の８～ 11 はｂ種、胴部破片の 13 ～ 22 をｄ種とした。22 は底部直上の破片である。

**石器**（第 293 図）：剝片石器が１点、礫石器が１点出土した。このうち、１点を図示した。１は微細剝離痕のある砕片である。黒曜石製。

**時期：**Ⅰ群 15 類の出土点数が最多であり、全体の６割を超えることから取掛西Ⅳ期とした。

**23T－003 住居跡**（第 163 図）

**調査次：**８次　**位置：**23T 拡張区南部　**遺存状況：**住居跡の南東部は調査区外。一部を土坑に壊されるが比較的良好　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面で出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形か　**規模：**南北 8.7m、東西（6.4）m　**重複：**住居跡との重複はなし　**覆土：**暗褐色土

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、23T－003 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅢ群土器が１点、Ⅳ群土器が３点、Ⅴ群土器が４点、Ⅶ群土器が１点出土した。これらの土器のうち３点を第３節に図示した（第 53 図、第 102・103 図 165・175・192）。

**土器**（第 270 ～ 272 図）：Ⅰ群土器が 170 点出土し、78 点を図示した。１～５は 11 類、６は 12 類ｃ種とした。７～ 11 は 13 類である。口唇部が角頭状の７はｂ種、尖頭状の８～ 11 はｃ種とした。12 ～ 25 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。24 は尖底、25 は平底を呈する。26 ～ 77 は 15 類である。

口唇部が円頭状の 26 ～ 32 はａ種、角頭状の 33 ～ 44 はｂ種とした。45 ～ 77 は胴部～底部破片のｄ種とした。78 は推定径が小さく、薄手となることから小型土器と判断した。17 類である。

**石器**：砕片１点、礫石器が３点出土したが図示はしていない。

**時期：**Ⅰ群 15 類の出土点数が最多であり、全体の６割を超えることから取掛西Ⅳ期とした。

**23T－004 住居跡**（第 164 図）

**調査次：**８次　**位置：**23T 南部　**遺存状況：**住居跡の大半は調査区外。一部を土坑に壊されるが比較的良好　**調査内容：**平面形態を確認したのみで未精査。確認面で出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態:**隅丸方形か　**規模:**検出したコーナー部分から推定して南北 5.5m、東西 5.0m　**重複:**住居跡との重複はなし　**覆土：**暗褐色土

**出土遺物：**遺構範囲内から、Ⅲ群以降の縄文土器の出土は認められなかった。

**土器**（第 266 図）：Ⅰ群土器が 14 点出土し、８点を図示した。１は 11 類の胴部破片、２は 12 類ｂ種、３は 12 類ｃ種である。４～７は無文の胴部破片で 14 類。８は 15 類で、口唇部が角頭状のためｂ種とした。

**石器**：剝片・砕片が各１点、計２点出土したが、図示はしていない。

**時期：**出土土器に 11 類や 12 類が認められることから、取掛西Ⅲ期とした。

**24T－001 住居跡**（第 165 ～ 168 図）

**調査次：**８次　**位置：**24T 拡張区中央部　**遺存状況：**一部を倒木痕に壊されるが比較的良好　**調査内容：**

40cm 幅のサブトレンチを東西に設定し、002 住居跡との新旧関係と床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**隅丸方形　**規模：**南北 8.2m、東西 7.3m、深さ 12cm　**重複：**24T－002 住居跡と重複。新旧関係は 24T－002（古）→ 24T－001（新）　**覆土：**黒褐色土。一部で焼土を確認　**床面：**ほぼ平坦だが中央部付近で方形と考えられる掘り込みを確認。サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認　**ピット：**サブトレンチ内で７基を検出　**備考：**サブトレンチ内の覆土を全量採取。検出した炭化種実（ミズキ・オニグルミ）を年代測定（第５章第２節第１項）

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、24T－001 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が 17 点出土した。これらの土器のうち１点を第３節に図示した（第 55 図、第 105 図 38）。

**土器**（第 273 ～ 277 図）：Ⅰ群土器が 240 点出土し、97 点を図示した。１は４類、２～５は５類である。３は口唇部および口唇部直下にも縄側面圧痕文が施文される。５は破片上端に縄側面圧痕文の痕跡が認められるため、ここに分類した。６は縦位の沈線が施される。９類ｄ種とした。７は口縁部の無文部の幅が比較的広く、口縁部と胴部の境は圧痕文などにより区画されない。７類とした。８～ 16 は８類である。10 は工具による凹線状の調整痕が目立つことから８類とした。17 ～ 20 は９類である。撚糸文が施される 17 ～ 19 はａ種、縄文が施される 20 はｂ種とした。19・20 は異方向施文される。21 ～ 26 は 11 類である。21 は口縁部が屈曲する。27 ～ 34 は 12 類である。27 ～ 29 はａ種、30・31 はｂ種、32・33 はｃ種とした。34 は口唇部が欠損するためｄ種とした。35 ～ 42 は 13 類である。口唇部が円頭状の 35 はａ種、角頭状の 36 ～ 38 はｂ種、尖頭状の 39 ～ 42 はｃ種とした。43 ～ 95 は無文の胴部～底部破片で 14 類である。70・83 には胎土に繊維が含まれる。90 ～ 95 は底部破片であり、91 は小平底、92 ～ 94 は尖底、95 は平底を呈する。96 は 15 類、97 は小型土器で 17 類とした。

**石器**（第 294 図）：剥片・砕片を除いて剥片石器が 35 点、礫石器が９点出土し、14 点を図示した。このほか、サブトレンチ内の覆土を水洗選別した際に検出されたものも含め、チャートを主体とした剥片が 26 点、砕片が 508 点出土している。１～４は石鏃である。４は硬質頁岩製、それ以外はチャート製。５～ 11 はチャート製の楔形石器、12 はチャート製の微細剥離痕のある砕片である。13 はチャート製の石核となるか。14 は砂岩製の三角錐形石器である。

**時期：**24T－002 住居跡と重複するためⅠ群４～９類の出土も認められるが、主体となる土器は 11 ～ 14 類のため取掛西Ⅲ期とした。

**24T－002 住居跡**（第 170 図）

**調査次：**８次　**位置：**24T 拡張区北端部　**遺存状況：**西部の大半は調査区外。南東部は 24T－001 住居跡に壊されるため、遺存状態はやや不良　**調査内容：**40cm 幅のサブトレンチを東西に設定し、002 住居跡との新旧関係と床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態：**方形か　**規模：**東西（6.7）m、南北（10.2）m、深さ 16cm　**重複：**24T－001 住居跡と重複。新旧関係は 24T－002（古）→ 24T－001（新）　**覆土：**暗褐色土　**床面：**サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡：**サブトレンチ内では未確認

**出土遺物：**Ⅰ群土器が大半を占めるが、24T － 002 の範囲内からは本遺構に伴わないと考えられるⅢ群以降の縄文土器も少量出土している。遺構確認面から細片も含めてⅣ群土器が１点出土したが、図示はしていない。

**土器**（第 278 図）：Ⅰ群土器が 22 点出土し、10 点を図示した。１・２は５類である。口縁部が屈曲する個体は認められない。３は口唇部が弱く肥厚することから８類とした。４～６は撚糸文が縦位施文される胴部破片で、９類ａ種とした。７は 12 類ａ種である。８～ 10 は無文の胴部破片で 14 類とした。
**石器**：微細剥離痕のある砕片１点、剥片２点、砕片 13 点が出土したが、図示はしていない。
**時期**：24T－001 住居跡との新旧関係やⅠ群５類や９類が出土し、11 類や 13 類が認められないことから取掛西Ⅱ期とした。

**24T－003 住居跡**（第 169 図）
**調査次**：８次　**位置**：24T 拡張区南端部　**遺存状況**：遺構の大半は調査区外。西部は縄文時代前期の 24T－004 住居跡に壊される　**調査内容**：50cm 幅のサブトレンチを東西に設定し、004 住居跡との新旧関係と床面の状況を確認。サブトレンチ内および確認面の出土遺物を取り上げ、遺構は平面形態を記録し保存した　**形態**：隅丸方形か　**規模**：東西（2.7）m、深さ 16cm　**重複**：24T－004 住居跡（取掛西Ⅵ期）と重複。新旧関係は 24T－003（古）→ 24T－004（新）　**覆土**：暗褐色土　**床面**：中央部でやや深くなるがほぼ平坦。サブトレンチ内では硬化面を未確認　**炉跡**：サブトレンチ内では未確認　**ピット**：サブトレンチ内で３基を検出　**備考**：サブトレンチ内の覆土を全量採取
**出土遺物**：遺構範囲内から、Ⅲ群以降の縄文土器の出土は認められなかった。
**土器**（第 279 図）：Ⅰ群土器が 23 点出土し、７点を図示した。１は５類である。口唇部は欠損するが、口縁部に縄側面圧痕文が施される。２は沈線が縦位施文されることから９類ｄ種とした。３～６は９類である。撚糸文が施される３～５はａ種、縄文が異方向施文される６はｂ種とした。７は 13 類で、口唇部が角頭状を呈するためｂ種とした。
**石器**（第 295 図）：剥片石器が２点、礫石器が１点出土し２点を図示した。１はチャート製の楔形石器である。２はアプライト製の磨石 A。正裏面および側面に顕著な敲打痕が認められる。
**時期**：９類の出土点数が多いことから、取掛西Ⅱ期とした。

**２．土坑**
**５次 SK－005**（第 137 図）
**調査次**：５次　**位置**：調査区南部　**形態**：風倒木痕と重複するため不整形かつ不明瞭　**規模**：東西約 1.2m、深さ約 70cm（規模・深さ共にセクション図から計測）　**重複**：SK－114（取掛西Ⅲ期）と重複。新旧関係は SK－114（古）→ SK－005（新）　**覆土**：下層に暗褐色土が堆積。上層にはヤマトシジミを主体とする貝層が堆積　**備考**：貝層中の炭化種実（カラスザンショウ）を年代測定（第５章第２節第１項）。５次 SI－002 および 003 と遺構間接合が認められた（第 49 表）
**出土遺物**：遺物出土量は少ない。貝層中および覆土上層からの出土が目立つ。
**土器**（第 197 図）：Ⅰ群土器が 41 点出土し、８点を図示した。無文の胴部破片である 14 類が最も多く出土したが、Ⅰ群 12 類の大形破片が出土している。１～７は 12 類である。１は５次 SI－002 および 003 と遺構間接合した。８は 13 類ｂ種である。
**石器**：抉入石器が１点出土したが、小片のため図示していない。
**骨角歯牙製品**（第 224 図）：１点が出土し、これを図示した。51 は針と考えられる。頂部は欠損するが、縦に２つの穿孔部が認められる。
**貝製品**：ツノガイ類製品が８点出土した。内訳は小玉状５点、管状３点である。図示はしていない。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群 12 ～ 14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SK－008**（第 137 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区北部　**形態：**不整長方形　**規模：**長軸（2.2）m、短軸（1.4）m、深さ 56cm　**重複：**５次 SI－008（取掛西Ⅲ期）と重複。新旧関係は SI－008（古）→ SK－008（新）　**覆土：**黒褐色土

**出土遺物：**遺物出土量は多い。重複する５次 SI－008 と、出土遺物の時期に大きな差は認められない。

**土器**（第 198 ～ 205 図）：Ⅰ群土器が 427 点出土し、92 点を図示した。無文の胴部破片である 14 類が最も多く出土したが、口縁部破片でみるとⅠ群 11 ～ 13 類の出土が目立つ。１～４は８類である。５～ 14 は 11 類。10・11 は直線的な口縁部である。14 は先端を欠損するが、尖底となる底部破片である。15 ～ 51 は 12 類である。15 ～ 34 はｂ種、35 ～ 48 はｃ種とした。52 ～ 75 は 13 類である。口唇部形態から、52 ～ 64 は円頭状のａ種、65 ～ 70・75 は角頭状のｂ種、71 ～ 74 は尖頭状のｃ種とした。76 ～ 82 は 14 類で、81・82 は底部破片である。83 ～ 89 は 15 類、90 ～ 92 は 17 類である。

**石器**（第 219・220 図）：剝片石器が剝片を含め２点、礫石器が 14 点出土した。このうち、図示したのは９点である。１はチャート製の掻器、２は砂岩製のスタンプ形石器の下部破片である。３は変質安山岩の扁平礫を素材としたスタンプ形石器と考えられる。４～８は磨石、９は手持ちの砥石と考えられる。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群 11 ～ 14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SK－114**（第 137 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区南部　**形態：**楕円形　**規模：**長軸 2.2m、深さ 44cm　**重複：**SK－005（取掛西Ⅲ期）と重複。新旧関係は SK－114（古）→ SK－005（新）　**覆土：**黒褐色土

**出土遺物：**遺物出土量は多い。５次 SK－005 と重複するが、出土遺物に明確な時期差は認められない。覆土上層からの出土が主体を占める。

**土器**（第 206 図）：Ⅰ群土器が 73 点出土し、15 点を図示した。13・14 類が主体である。１は８類とした。２は 11 類、３は 12 類ｂ種である。４～９は 13 類。口唇部形態から、４・５は円頭状のａ種、６・８は角頭状のｂ種、７・９は尖頭状のｃ種とした。10 ～ 14 は 14 類で、12・13 は尖底、14 は平底の底部破片である。15 は 17 類の底部破片である。

**石器**（第 221 図）：剝片石器が１点、礫石器が３点出土した。このうち、図示したのは２点である。１はチャート製の削器、２は砂岩製の砥石である。

**時期：**出土土器の主体がⅠ群 13・14 類のため、取掛西Ⅲ期とした。

**５次 SK－131**（第 137 図）

**調査次：**５次　**位置：**調査区中央部　**形態：**楕円形　**規模：**長軸 2.0m、短軸 1.6m、深さ 49cm　**重複：**なし　**覆土：**焼土粒を含む黒褐色土が堆積

**出土遺物：**覆土中から多数の土器・礫が出土した。礫は約９割が被熱しており、上層～中層に集中していた。

**土器**（第 207 図）：Ⅰ群土器が 110 点出土し、20 点を図示した。出土点数は 14 類が最多となるが、15 類も少なくない。口縁部破片でみると 13 類が多く、これに 12 類ｃ種、15 類が続く状況である。１～４は 11 類である。５～８は 12 類ｃ種とした。９～ 17 は 13 類である。口唇部形態から、９は円頭状のａ種、10 ～ 13 は角頭状のｂ種、14 ～ 17 は尖頭状のｃ種とした。18 ～ 20 は 15 類である。

**石器**（第 222 図）：剝片石器が剝片・砕片を含め５点、礫石器が８点、礫類・小礫が 74 点、合計 87 点が

出土した。このうち、図示したのは４点である。１は微細剝離痕のある剝片である。チャート製。２～４は磨石である。いずれも被熱しており、２は裏面に被熱による剝落が認められた。
**時期：**出土土器の主体がⅠ群 14 類であること、11 類・12 類が出土していることなどから、取掛西Ⅲ期とした。

**10T－008 土坑**（第 171 図）
**調査次：**６次・８次　**位置：**10T 拡張区北東部　**遺存状況：**覆土は薄いが比較的良好　**調査内容：**ベルトと北東部を残して床面まで精査。調査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態:**円形　**規模:**長軸 1.4m、短軸 1.3m、深さ 16cm　**重複：**住居跡との重複はなし　**覆土：**黒褐色土　**備考：**覆土の一部を土壌サンプルとして採取
**出土遺物：**遺構範囲内から、Ⅲ群以降の縄文土器の出土は認められなかった。
**土器**（第 280 図）：Ⅰ群土器が３点出土し、１点を図示した。１は１類である。同一個体の土器を図上復元した。施文は口唇部・頸部・胴部の３帯構成となる。
**石器**（第 296 図）：１点を図示した。１はチャート製の石鏃である。正面の一部に研磨痕が認められる。
**時期：**出土した土器から取掛西Ⅰ期とした。

**10T－011 土坑**（第 171 図）
**調査次：**８次　**位置：**10T 拡張区北西部　**遺存状況：**一部を 10T－004 住居跡に壊される　**調査内容：**半截して底面の状況を確認。調査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態：**円形　**規模：**直径 1.1m、深さ 13cm　**重複：**10T－004 住居跡、10T－012 土坑と重複。新旧関係は 10T－011（古）→ 10T－004・10T－012（新）　**覆土：**暗褐色土　**備考：**半截した覆土は土壌サンプルとして全量採取した
**出土遺物**
**土器：**Ⅰ群土器が９点出土したが、小片のため図示していない。
**石器：**軽石および礫類・小礫が出土したが、図示していない。
**時期：**出土土器の主体がⅠ群９類のため、取掛西Ⅱ期とした。

**10T－012 土坑**（第 171 図）
**調査次：**８次　**位置：**10T 拡張区北西部　**遺存状況：**一部をピットに壊される　**調査内容：**半截して底面の状況を確認。調査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態：**円形　**規模：**直径 1.0m、深さ 16cm　**重複：**10T－011 土坑と重複。新旧関係は 10T－011（古）→ 10T－012（新）　**覆土：**暗褐色土　**備考：**半截した覆土は土壌サンプルとして全量採取した
**出土遺物**
**土器：**Ⅰ群９類の土器が１点出土したが、小片のため図示していない。
**石器：**礫類・小礫も含め出土していない。
**時期：**出土土器から取掛西Ⅱ期とした。

**17T－001 土坑**（第 172 図）
**調査次：**７次　**位置：**17T 中央部　**遺存状況：**目立った攪乱は受けておらず良好　**調査内容：**ベルトを残して底面まで精査　**形態：**隅丸長方形　**規模：**長軸 2.2m、短軸 1.6m、深さ 24cm　**重複：**ピット以外

との重複なし　**覆土**：黒褐色土

**出土遺物**

**土器**：Ⅲ群の土器が１点出土したが、小片のため図示していない。

**石器**：礫類・小礫も含め出土していない。

**時期**：出土土器および覆土の状況から早期後葉～前期前半と考えられる。

**23T－006 土坑**（第 171 図）

**調査次**：８次　**位置**：23T 拡張区中央部　**遺存状況**：目立った攪乱は受けておらず良好　**調査内容**：半截して底面の状況を確認　**形態**：円形か　**規模**：直径 1.5m、深さ 19cm　**重複**：なし　**覆土**：極暗褐色土　**備考**：半截した覆土は土壌サンプルとして一部を採取した

**出土遺物**

**土器**（第281図）：Ｉ群土器のうち６点を図示した。１～６は15類である。口唇部が円頭状の１～３はａ種、胴部破片の４～６はｄ種とした。

**石器**：砕片が２点、スタンプ形石器の破片が２点出土したが、図示していない。

**時期**：出土土器の主体がＩ群 15 類のため、取掛西Ⅳ期に属すると考えられる。

**23T－007 土坑**（第 171 図）

**調査次**：８次　**位置**：23T 拡張区中央部　**遺存状況**：目立った攪乱は受けておらず良好　**調査内容**：半截して底面の状況を確認　**形態**：円形か　**規模**：直径 1.4m、深さ 27cm　**重複**：なし　**覆土**：黒褐色土・暗褐色土　**備考**：半截した覆土は土壌サンプルとして一部を採取した

**出土遺物**

**土器**（第 282 図）：Ｉ群土器のうち２点を図示した。１～２は 15 類である。胴部破片のｄ種とした。

**石器**：砕片が１点出土したが、図示していない。他に礫類・小礫が７点認められた。

**時期**：出土土器は 15 類が多いため、取掛西Ⅳ期とした。

**25T－001 土坑**（第 172 図）

**調査次**：８次　**位置**：25T 西端部　**遺存状況**：一部を陥穴（25T－002 土坑）に壊される　**調査内容**：半截して底面の状況を確認。調査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態**：隅丸方形　**規模**：東西 2.1m、南北 1.9m、深さ 12cm　**重複**：25T－002 土坑と重複。新旧関係は 25T－001（古）→ 25T－002（新）　**覆土**：暗褐色土

**出土遺物**：遺構内から出土した遺物は少ない。重複した 002 土坑から出土したＩ群土器の多くは、本遺構から落ち込んだ遺物と考えられる（第 106・107 図１～ 10・12 ～ 14・16 ～ 20・22 ～ 30・32）。

**土器**（第 283 図）：Ｉ群土器のうち３点を図示した。１は 11 類の胴部破片、２は 12 類ｃ種、３は 13 類で、口唇部が尖頭状のためｃ種とした。

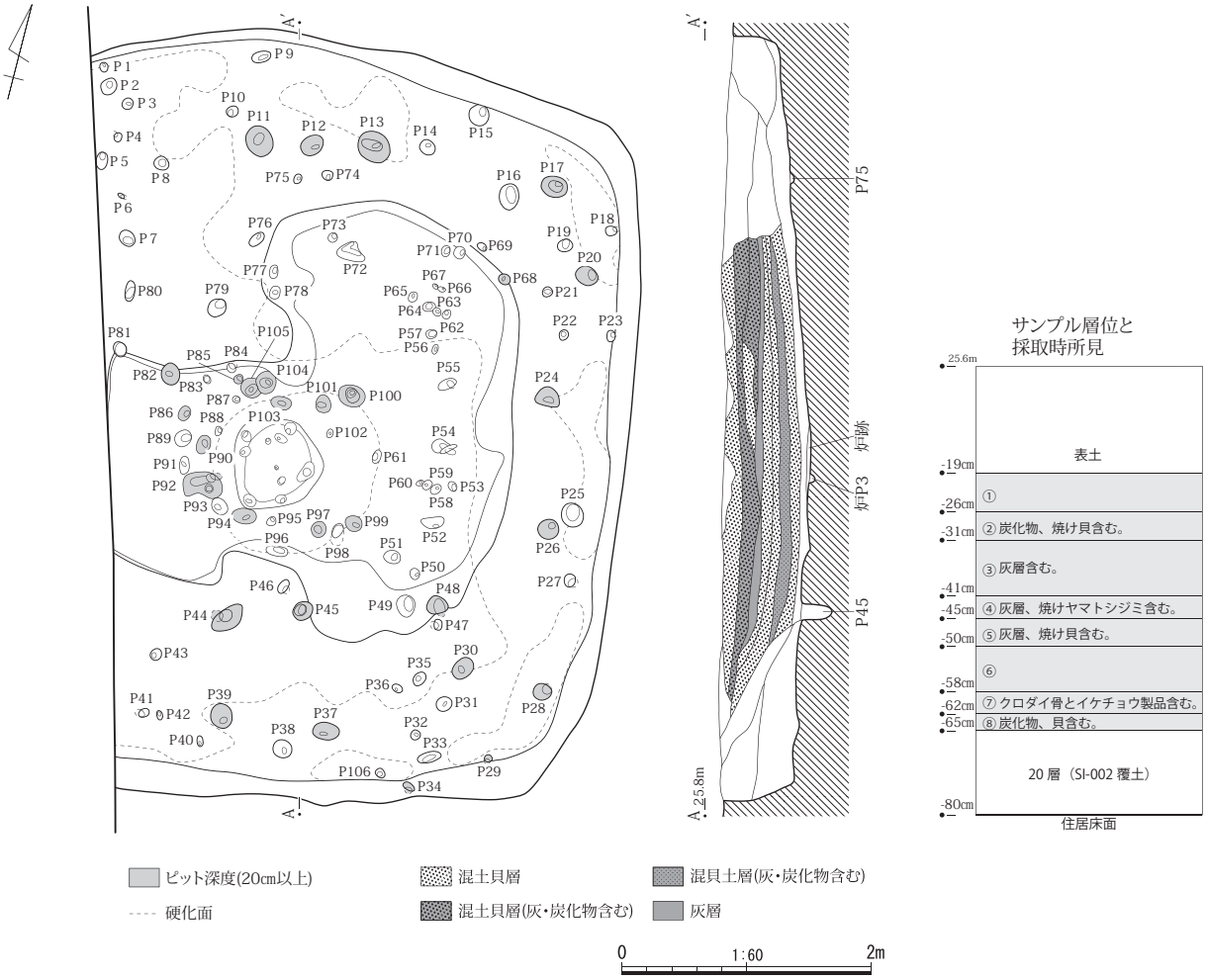
**石器**：砕片が 14 点出土したが、図示していない。他に礫類・小礫が 13 点認められた。

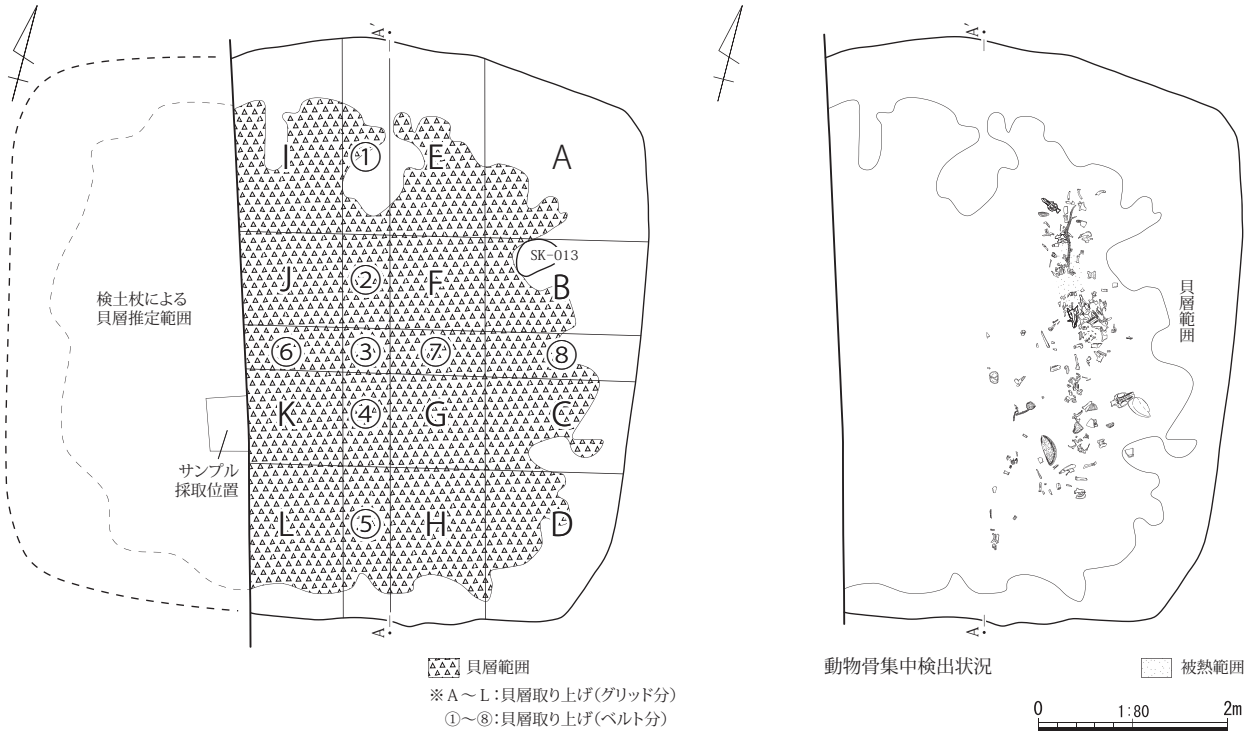
**時期**：出土した遺物の時期から取掛西Ⅲ期と判断した。

**25T－002 土坑**（第 172 図）

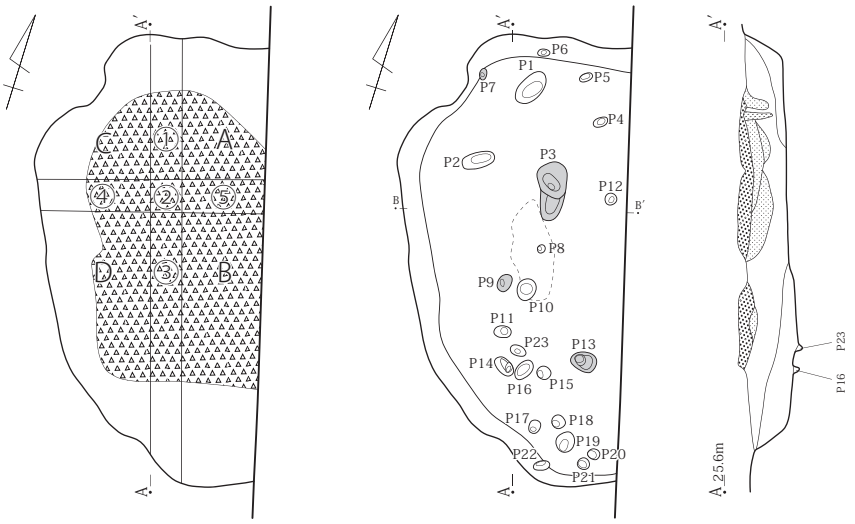
**調査次**：８次　**位置**：25T 西端部　**遺存状況**：良好　**調査内容**：東部を半截して底面の状況を確認。調

査終了後、山砂を敷き詰めて保存処置を行った　**形態**：隅丸方形　**規模**：長軸 2.6m、短軸 0.6m、深さ 157cm　**重複**：25T－001 土坑と重複。新旧関係は 25T－001（古）→ 25T－002（新）　**覆土**：黒褐色土
**備考**：覆土下層の一部を土壌サンプルとして採取
**出土遺物**：Ⅰ群土器が 125 点、Ⅲ群土器が 11 点、Ⅳ群土器が７点、Ⅴ群土器が１点出土した。Ⅰ群土器の多くは覆土上層から出土したため、重複する 25T－001 土坑から埋没時に落ち込んだものと判断した。これらの土器は遺構には伴わないと考えられるため、トレンチ出土遺物として扱い、第 106・107 図に図示した。覆土中層からは骨片も出土している。
**土器**（第 284 図）：７点を図示した。１～４はⅢ群土器である。覆土中層から出土した。いずれも貝殻条痕文が施される。５・６はⅣ群４類、７はⅤ群２類である。出土層位は不明。
**石器**（第 296 図）：剥片・砕片を除いて剥片石器７点、礫石器３点が出土したが、Ⅰ群土器と同様に多くが 001 土坑からの流入の可能性がある。２点を図示した。１は珪質頁岩製の尖頭器、２はチャート製の楔形石器である。他に、土壌の水洗選別の結果検出したものも含め、チャートを主体とした剥片が９点、砕片が 104 点出土している。
**時期**：出土土器から、早期後葉～前期前半と考えられる。




第 133 図　５次 SI－002

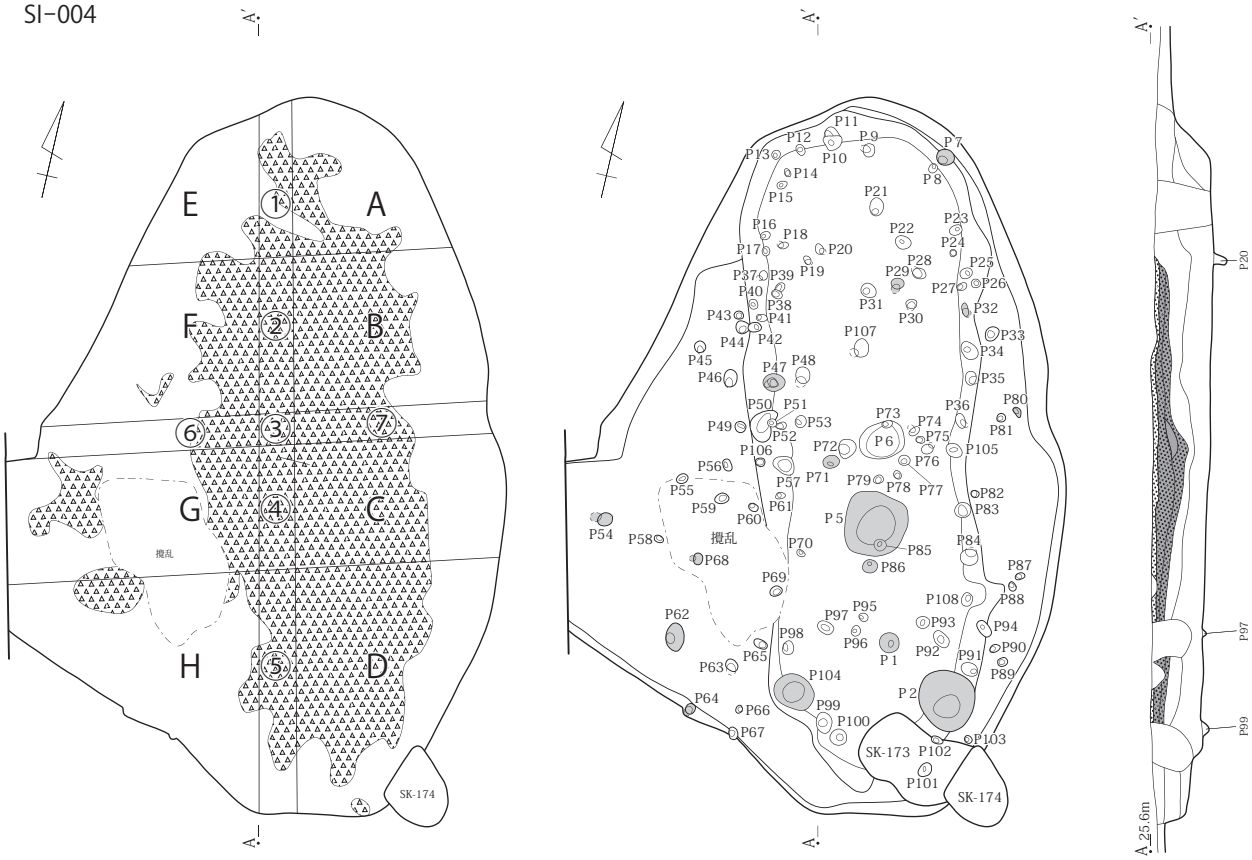



貝層範囲　　ピット深度（20㎝以上）　　混土貝層
※Ａ～Ｄ：貝層取り上げ（グリッド分）　　硬化面　　混貝土層
①～⑤：貝層取り上げ（ベルト分）

0　1:60　2m

SI-003

SI-004

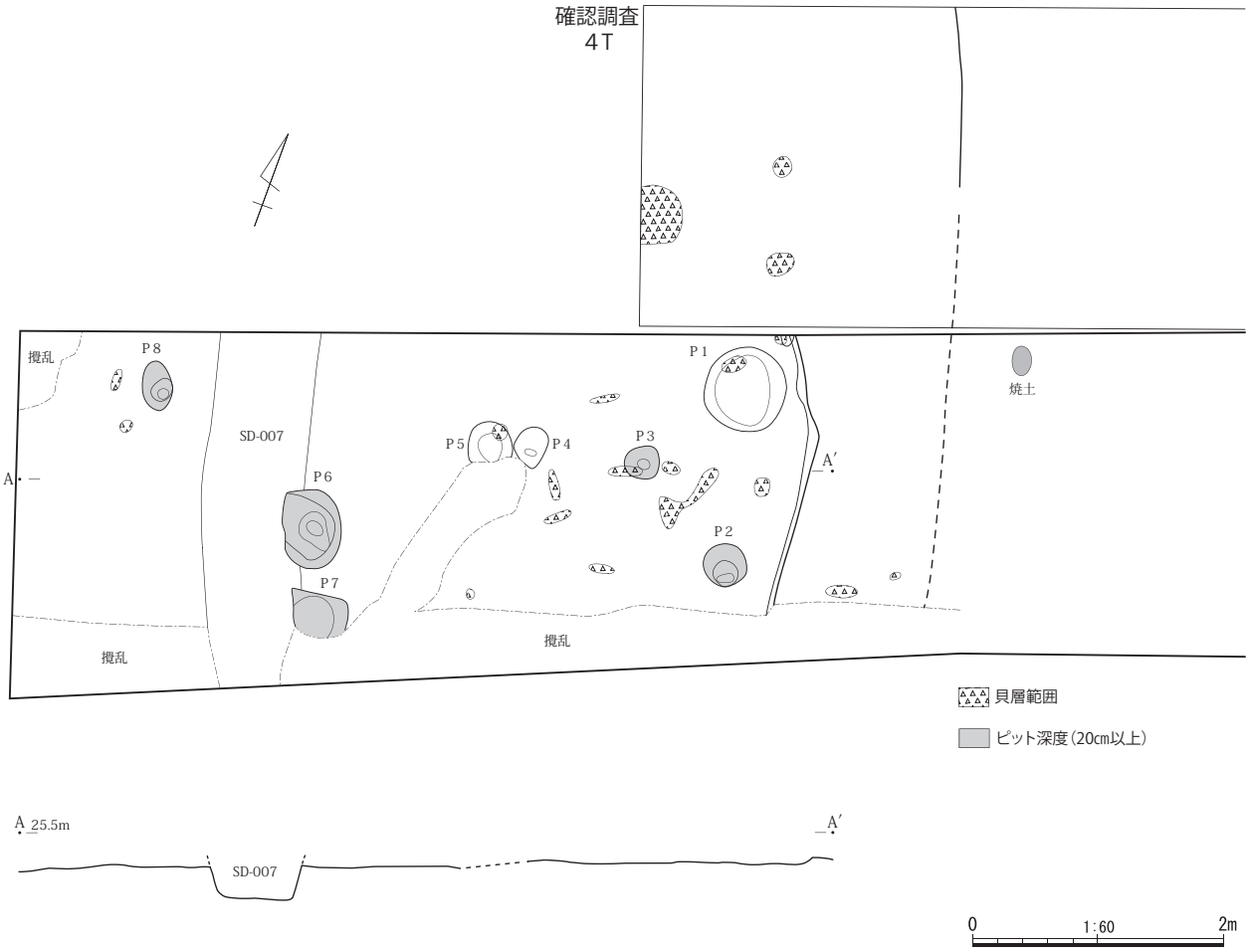



貝層範囲
※Ａ～Ｈ：貝層取り上げ（グリッド分）
①～⑦：貝層取り上げ（ベルト分）

ピット深度（20㎝以上）　　混土貝層
混土貝層（灰・炭化物含む）
灰層

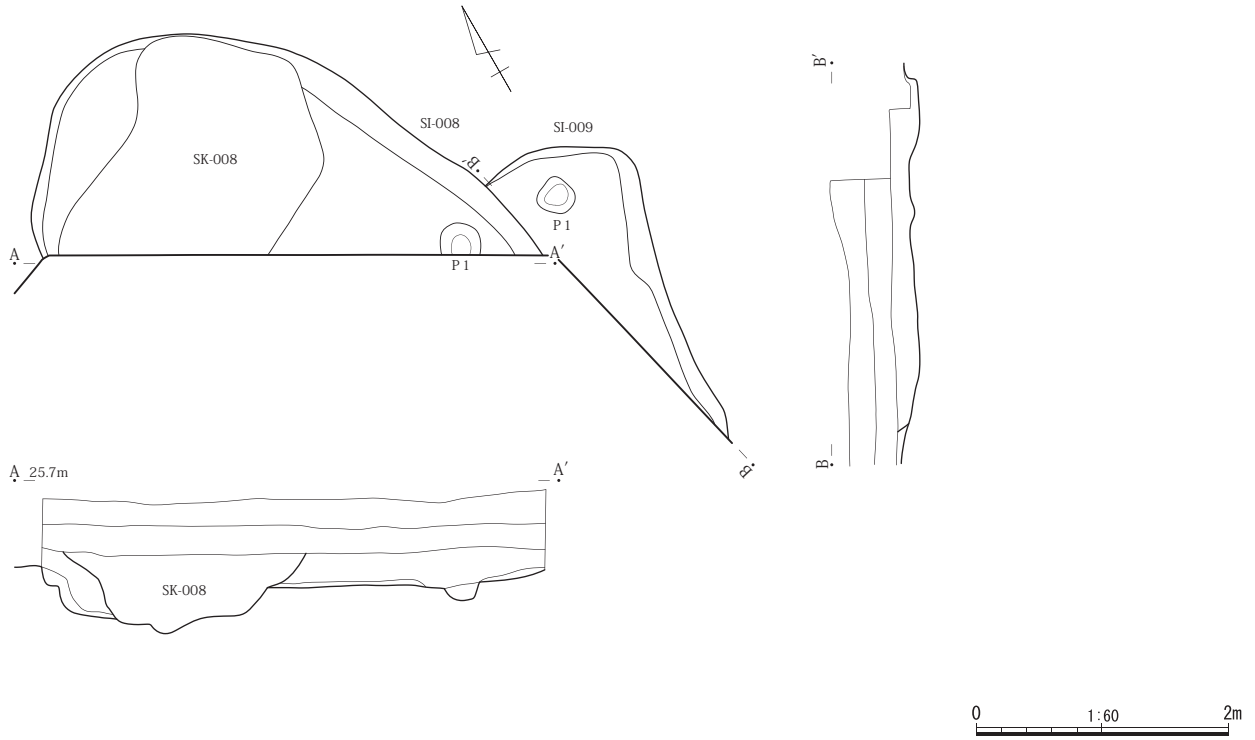
0　1:60　2m

第 134 図　5 次 SI－003・004

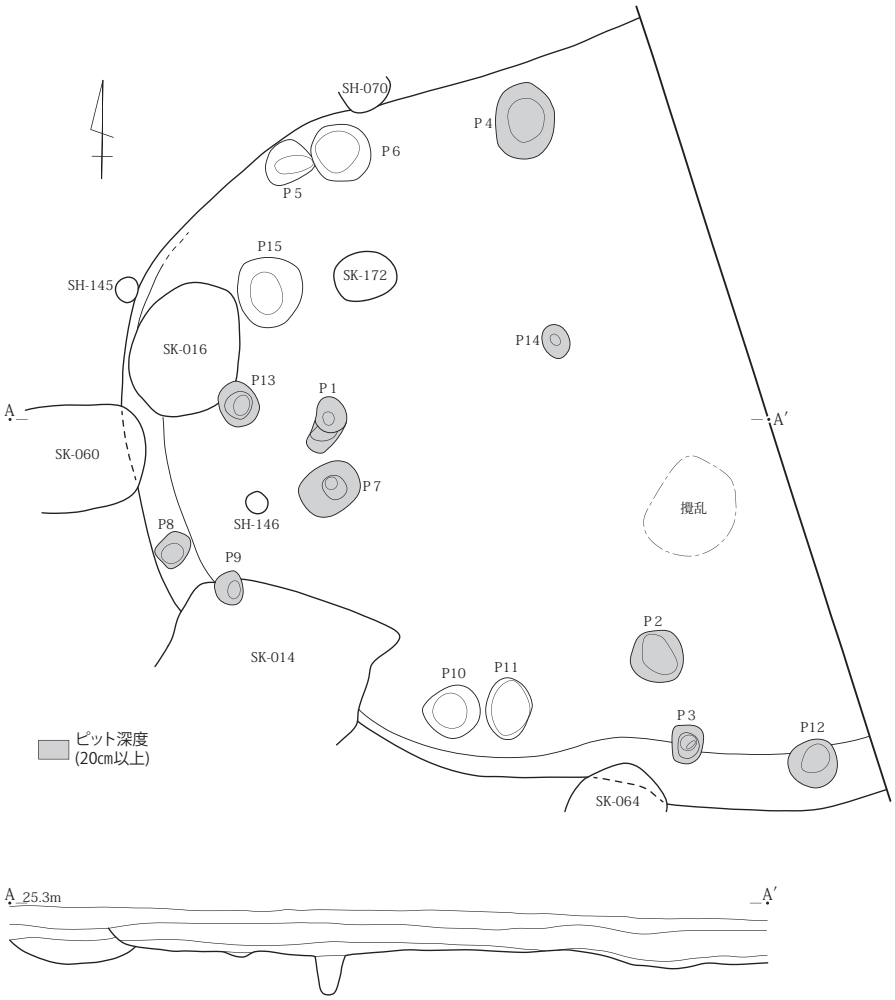


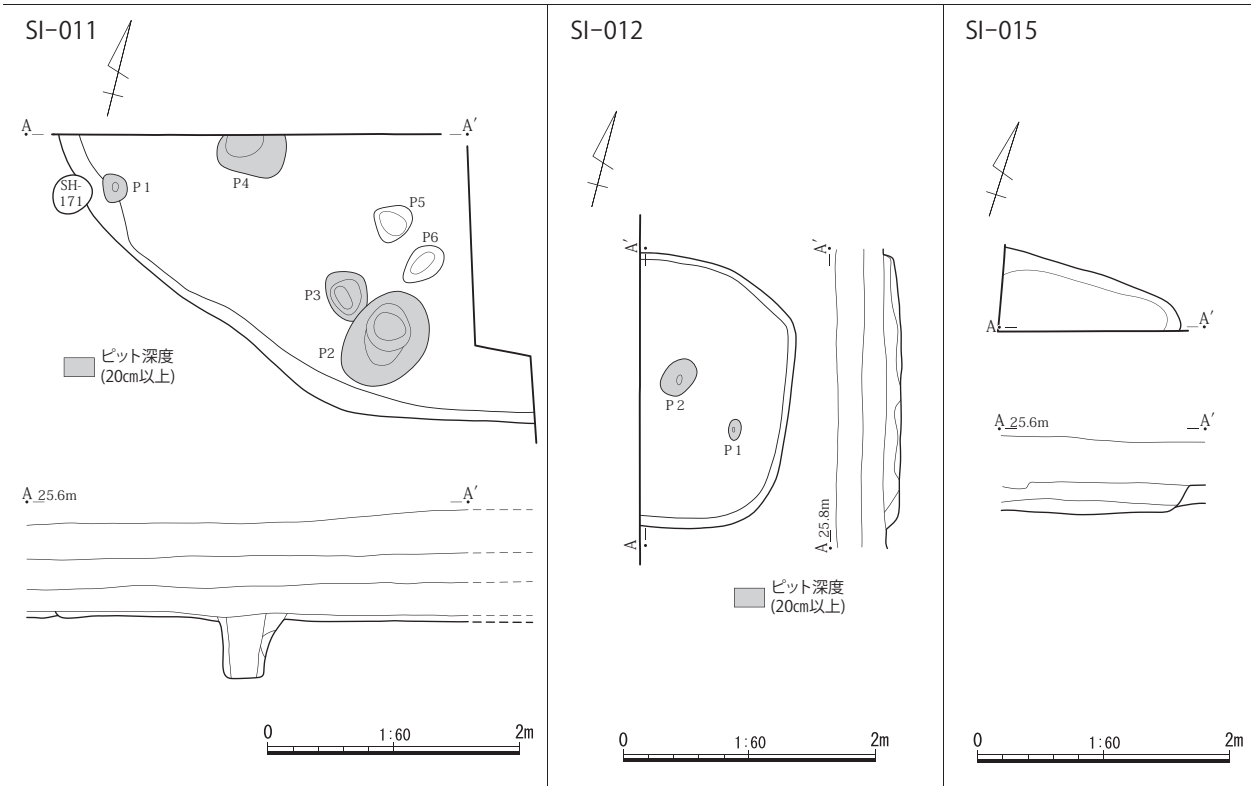

SI-006

SI-008・009

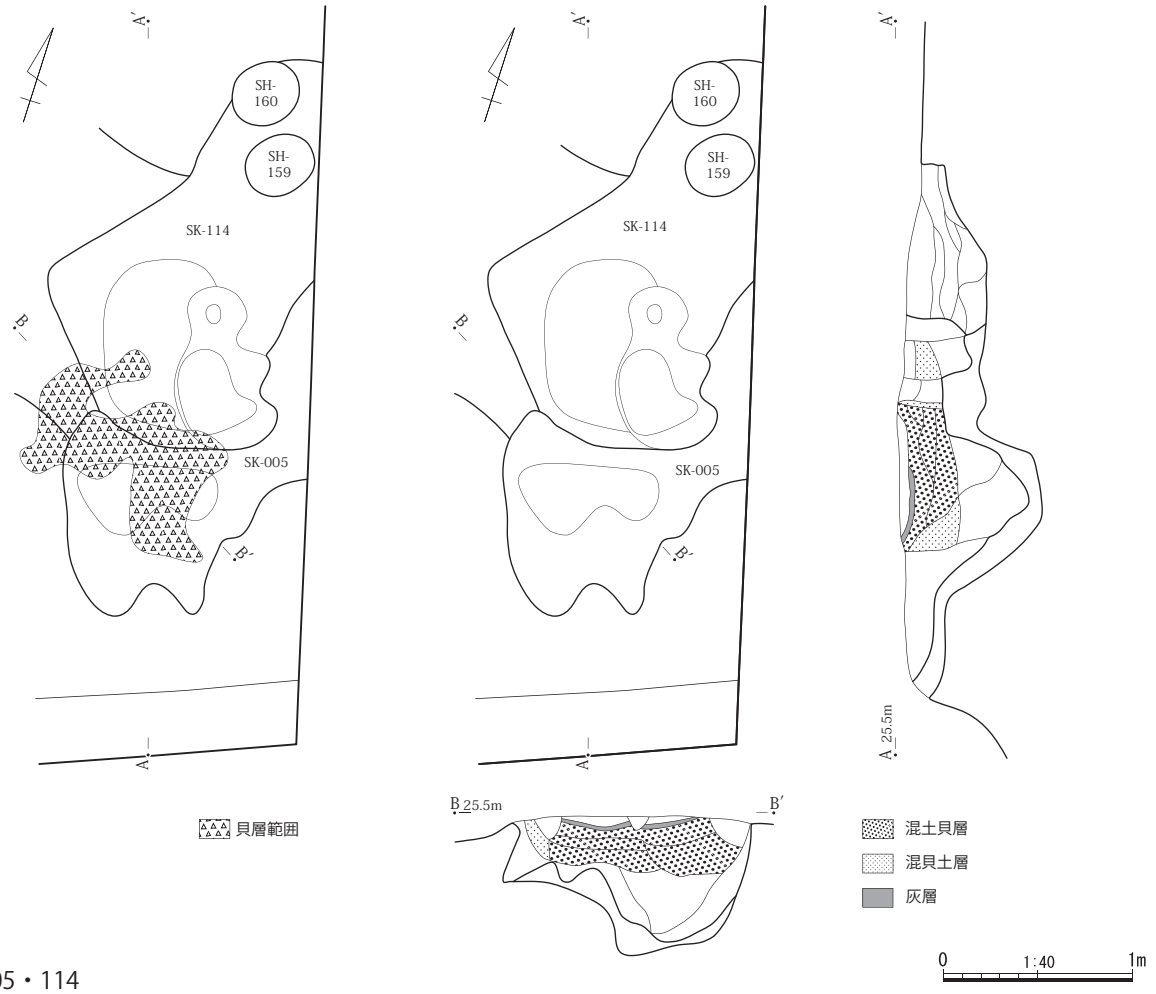



第 135 図　5 次 SI－006・008・009



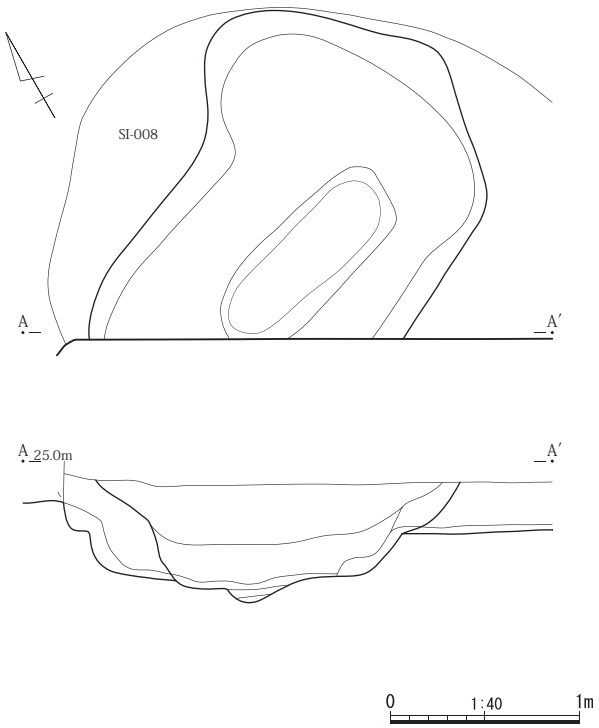




第 136 図　5次 SI－010・011・012・015

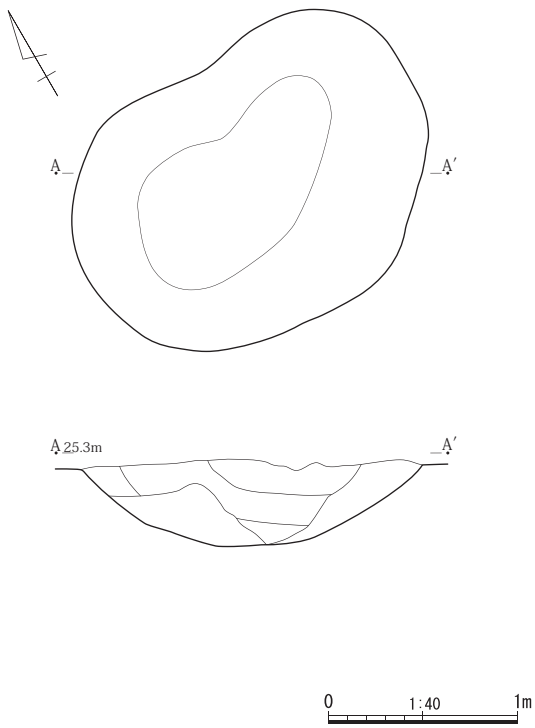



SK-005・114

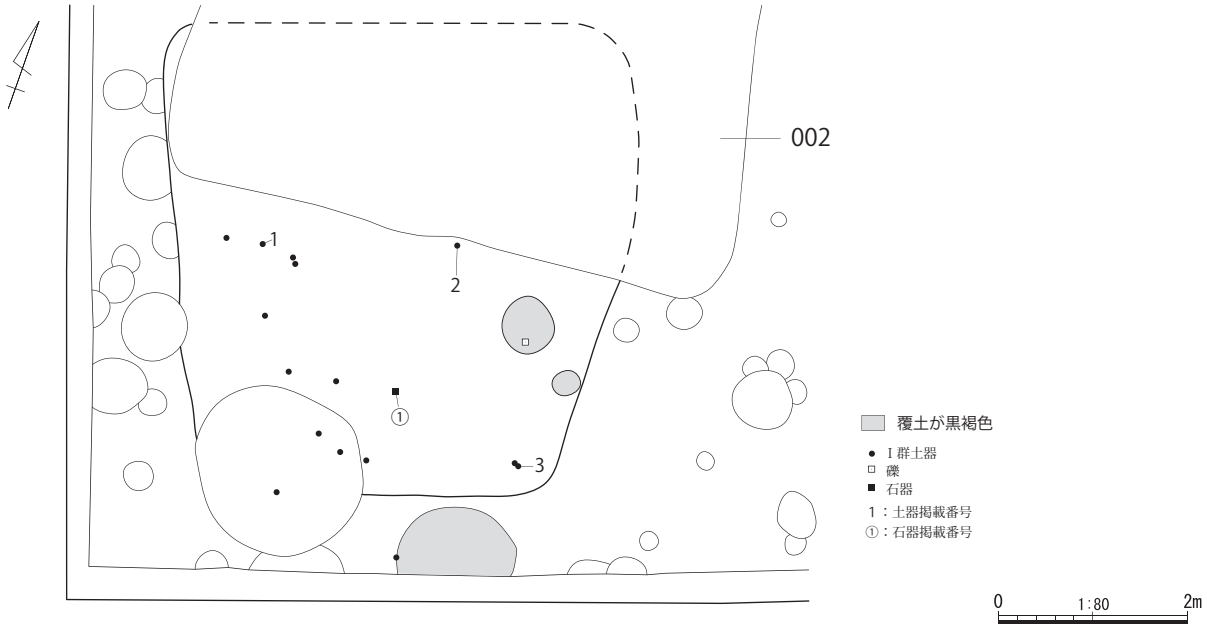
SK-008



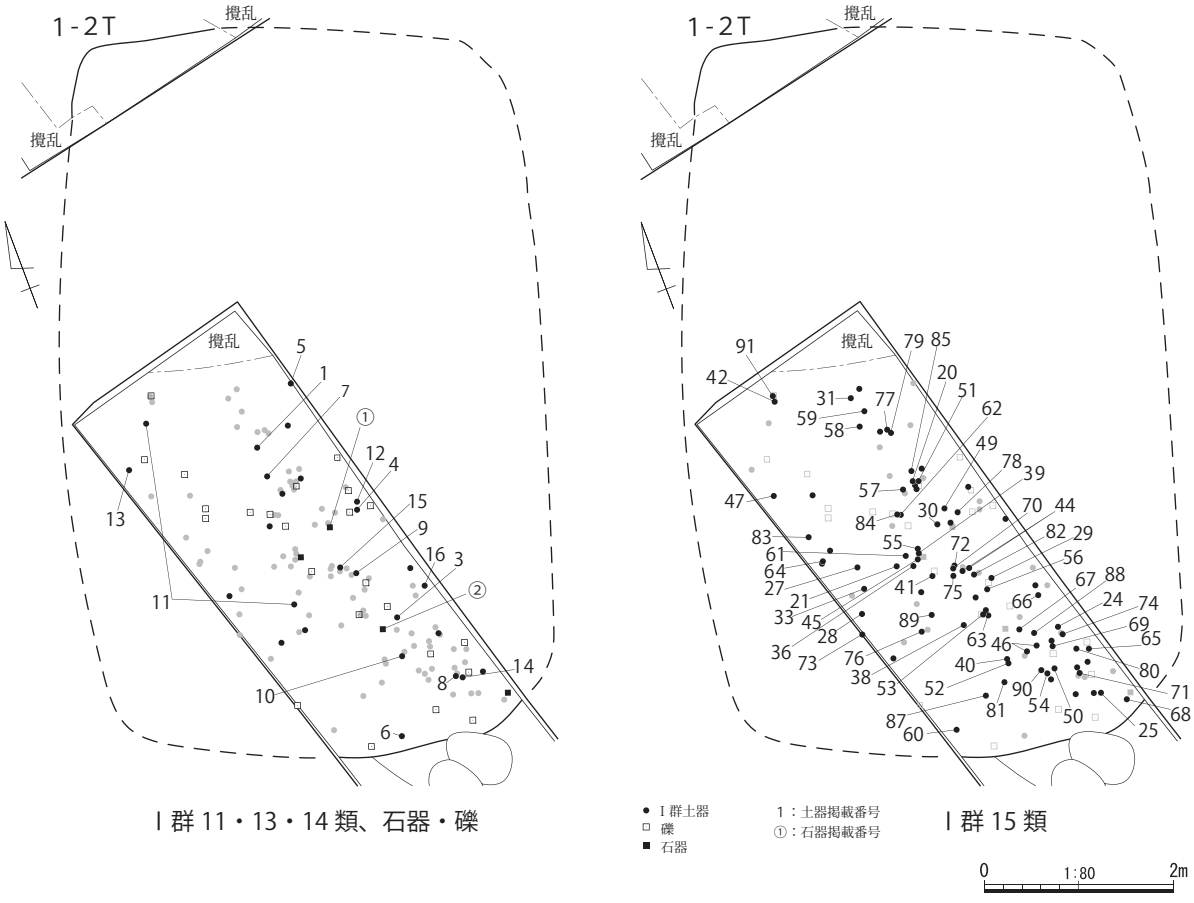

SK-131



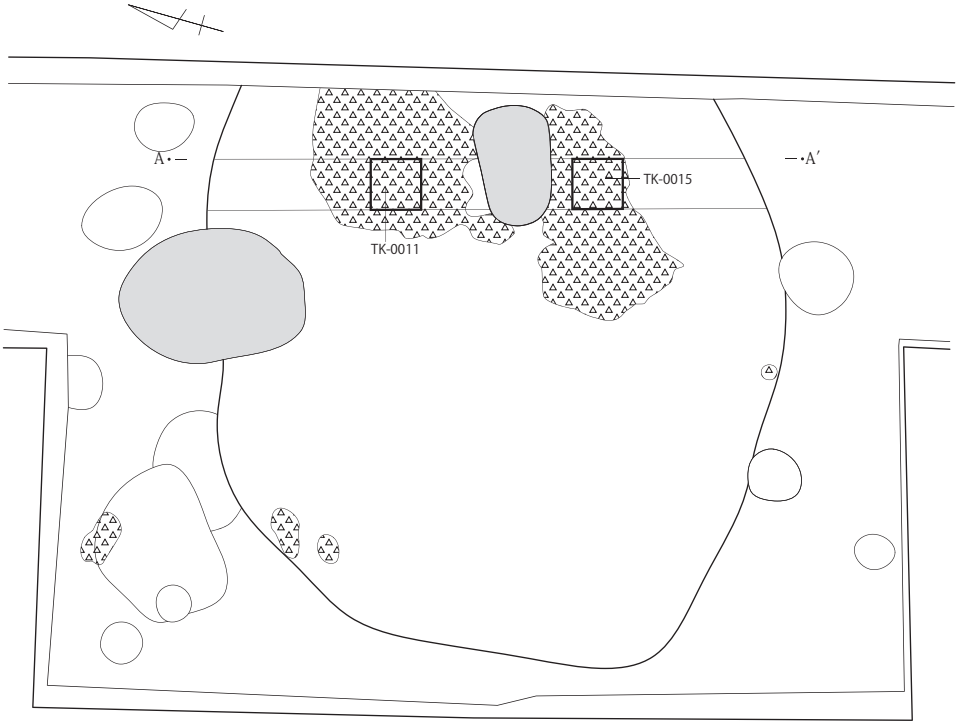

第 137 図　5 次 SK－005・114・008・131




第 138 図　5T－005 住居跡

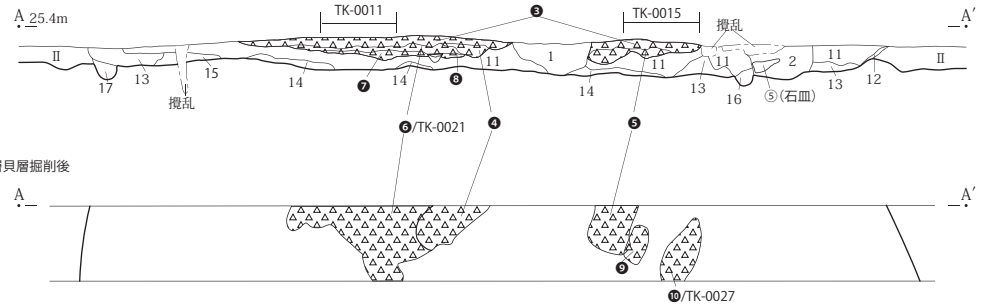



第 139 図　6T－001 住居跡




前期遺構
貝層範囲
分析サンプル範囲
（TK－0011・0015）

0　1:60　2m



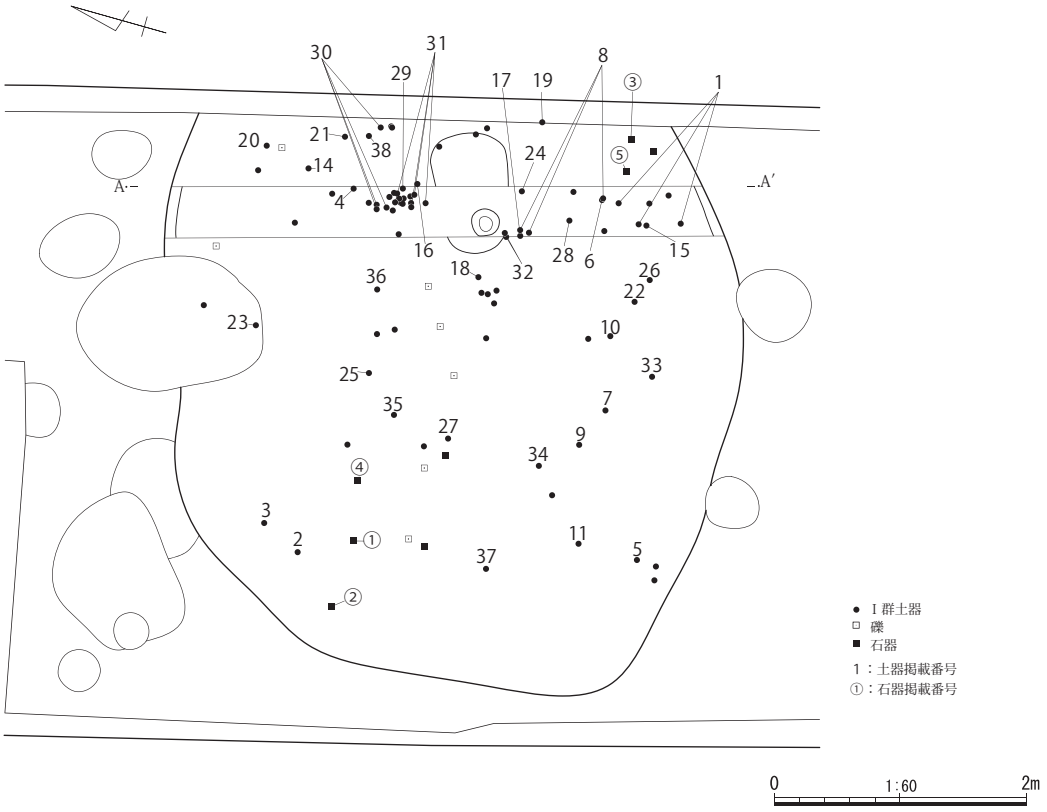

❶：貝層番号

0　1:40　1m

1.黒褐色土7.5YR2/2　ローム粒、焼土粒を微量含む。しまり有り。
2.黒褐色土7.5YR2/2　ローム粒を少量、焼土粒を微量含む。しまり有り。
*❸.混貝土層 破砕ヤマトシジミを多く含む。部分的に灰、炭化物、焼土粒を微量含む。(TK-0011・TK-0015)
❹.混土貝層 灰、焼土粒を多く含み、炭化物、炭化材を少量含む。
❺.混土貝層 灰を少量含み、下部は若干破砕されたヤマトシジミを多く含む。
*❻.混土貝層 灰、焼土粒を多く含む。土器片出土。(TK-0021)
❼.混土貝層 炭化物を微量含む。破砕されたヤマトシジミを多く含む。
❽.混土貝層 焼土粒、灰を多く含む。
❾.混貝土層 ローム粒を微量含む。
*❿.混貝土層 灰、ローム粒を微量含む。(TK-0027)
11.黒褐色土7.5YR3/2　径2～3㎜のローム粒、炭化物を少量、焼土粒を微量含む。しまり有り。
12.明褐色土7.5YR5/6　ロームブロック主体。
13.褐色土　7.5YR4/4　ロームブロック主体。径1～2㎜の炭化物を少量、破砕貝を少量含む。(北の壁際は根撹乱により不明瞭)しまり有り。
14.黒褐色土7.5YR2/2　径2～3㎜のローム粒、炭化物、赤色粒(焼土粒)を含む。部分的に径1～2㎜のロームブロックを含む。しまり有り。
15.暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒、炭化物粒を含む。ロームブロック含む。しまり有り。
16.暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を含む。しまり有り。
17.暗褐色土7.5YR3/3　ロームブロック主体。径1～2㎜のローム粒、炭化物を少量含む。しまり有り。

*自然科学分析対象

第140図　7T－001住居跡（1）



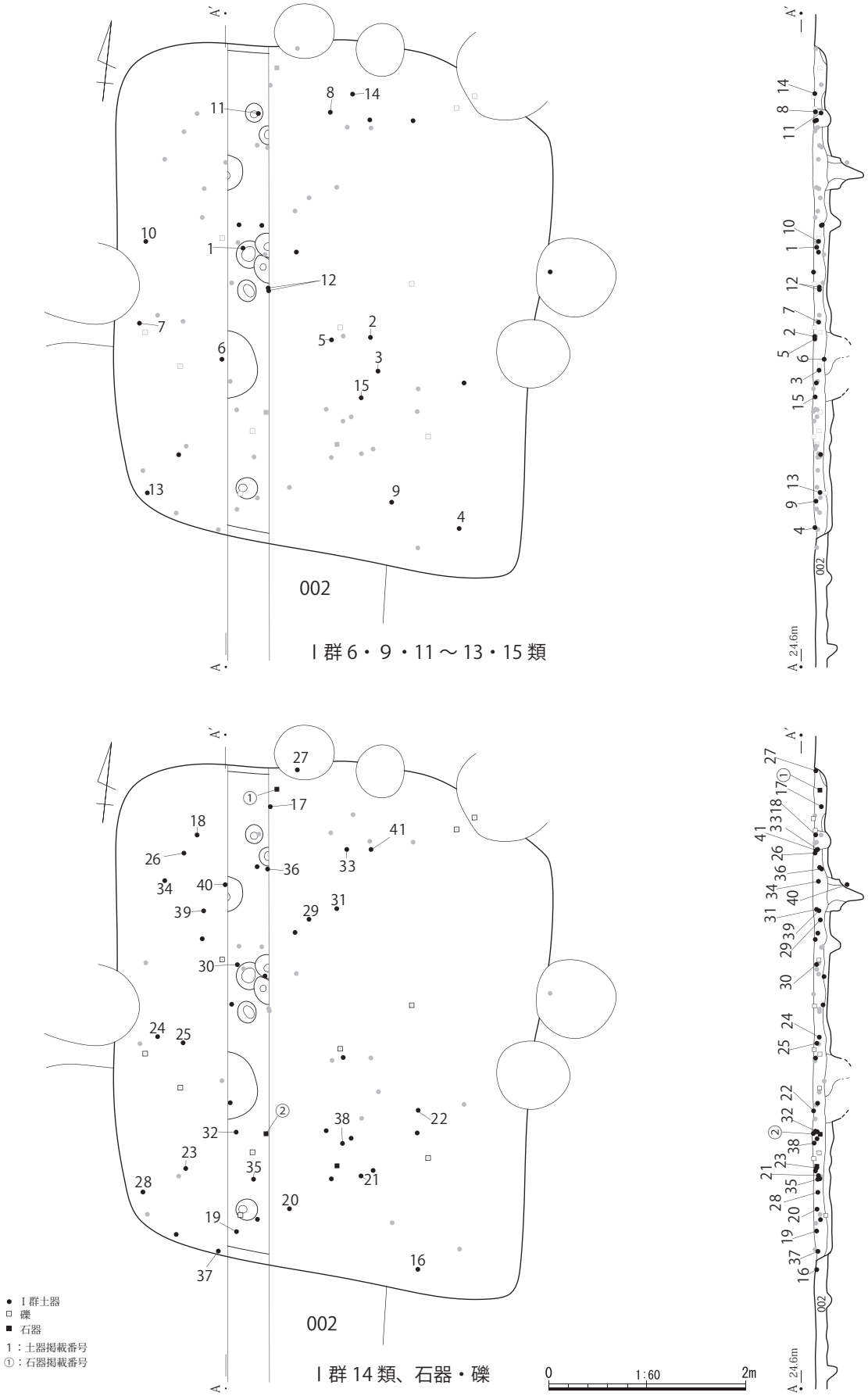

第 141 図　7T－001 住居跡（２）

A-A’
1．暗褐色土10YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量含む。
2．黒褐色土7.5YR3/2 径1㎜のローム粒を微量、径1㎜の焼土粒を極微量含む。
　（9層よりわずかに暗く、ローム粒もやや多い。）
3．黒褐色土7.5YR3/2 径1㎜のローム粒を極微量含む。
4．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を少量含む。
5．褐色土 7.5YR4/4　径1㎜のローム粒を微量、径5㎜のローム粒を微量含む。
6．褐色土 7.5YR4/4　径1㎜のローム粒を少量、径10～20㎜のロームブロックを少量含む。
7．暗褐色土7.5YR3/3 径1～2㎜のローム粒を少量、1層の黒褐色土を斑状に含む。
8．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を少量含む。
9．黒褐色土7.5YR3/2 径1～2㎜のローム粒を微量、径1㎜の焼土粒、炭化物粒を極微量含む。
10.暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。

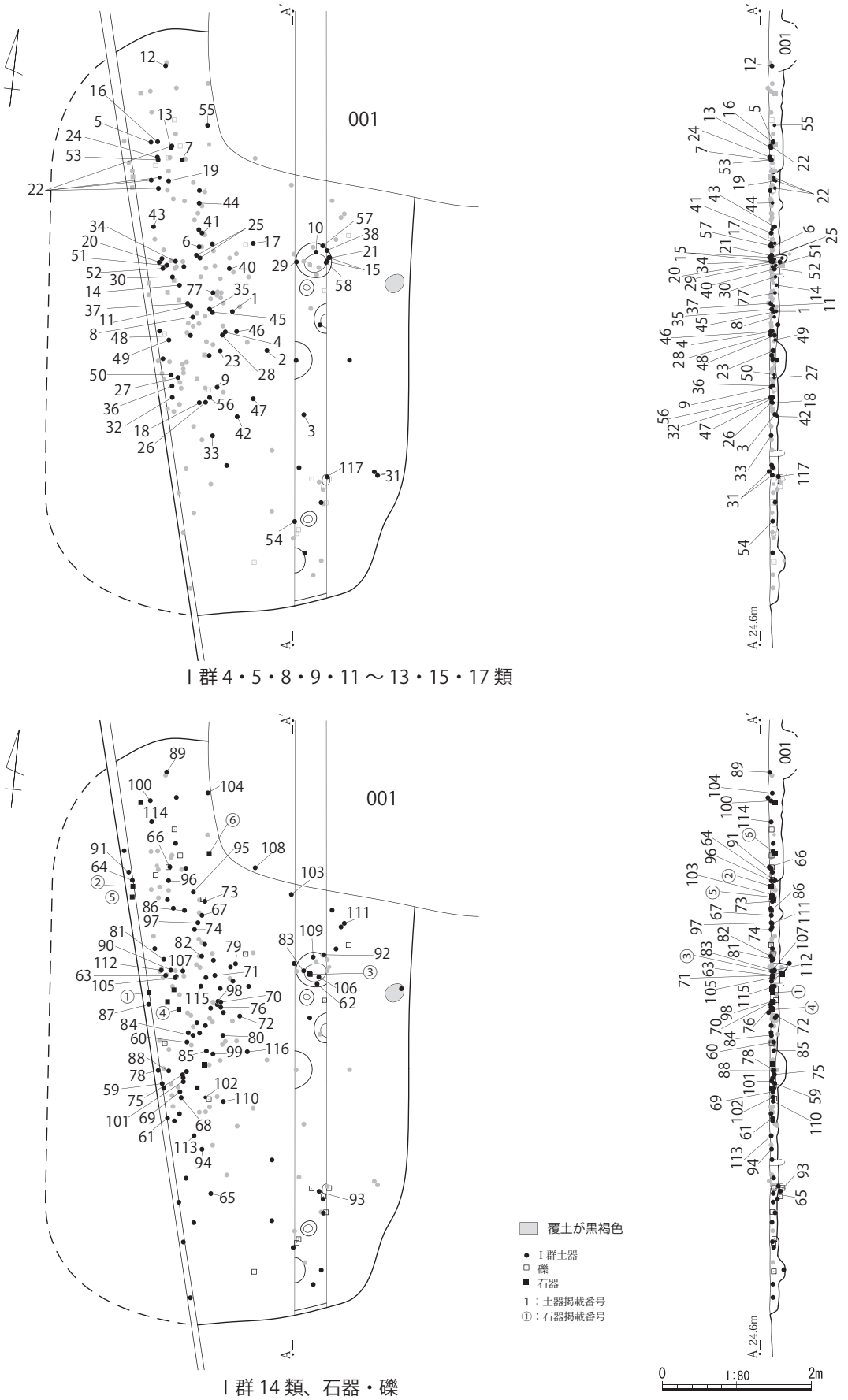
B-B’
1．黒褐色土7.5YR2/2 径1㎜のローム粒、炭化物粒を極微量含む。
2．暗褐色土7.5YR3/3 径1㎜のローム粒を少量、ローム土(Ⅲ層)を斑状に含む。しまりやや弱い。

C-C’
1．黒褐色土7.5YR3/2 径1㎜のローム粒を微量含む。
2．暗褐色土7.5YR3/4 径1～2㎜のローム粒を少量、ローム土(Ⅲ層) を斑状に含む。しまりやや弱い。

第 142 図　9T－001・002 住居跡



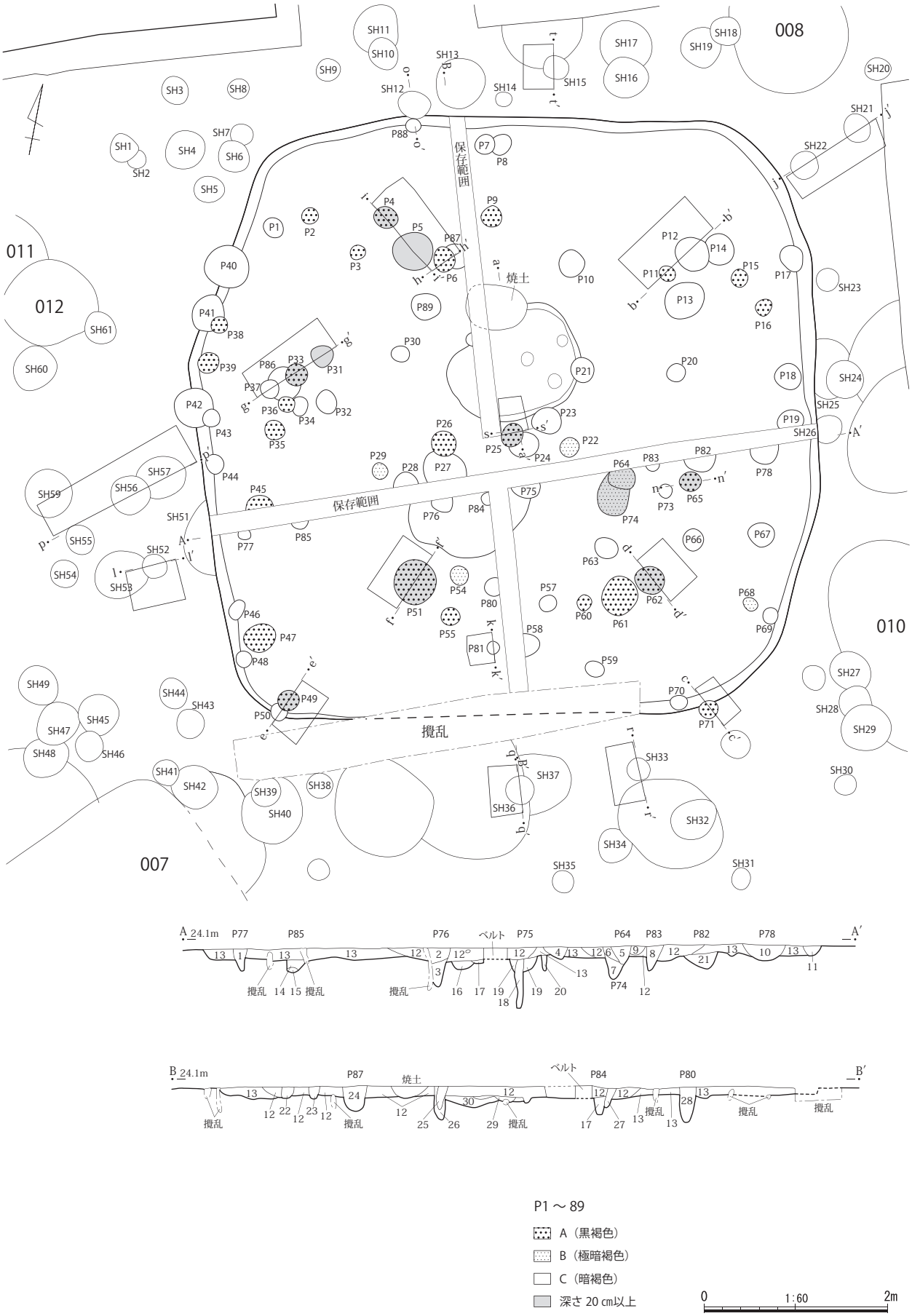

第 143 図　9T－001 住居跡




Ⅰ群４・５・８・９・11 ～ 13・15・17 類

Ⅰ群 14 類、石器・礫

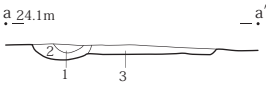
第 144 図　9T－002 住居跡



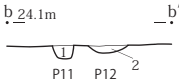

第 145 図　10T－001 住居跡（1）

SPA-A′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を微量、径5㎜のローム粒を極微量含む。しまり強い。
2．黒褐色土7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
3．黒褐色土7.5YR3/2　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまり強い。
4．黒褐色土7.5YR2/2　径1～3㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
5．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、径1～2㎜の白色粒を微量、径5㎜のローム粒を極微量含む。しまり強い。
6．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜の白色粒を極微量含む。しまり強い。
7．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径10㎜のロームブロックを少量含む。しまり強い。
8．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。
9．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。
10．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。
11．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を極微量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。
12．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜以下のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。
13．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり強い。
14．褐色土　7.5YR4/6　ローム土を斑状に中量含む。しまり強い。
15．暗褐色土7.5YR3/3　径2～3㎜のローム粒を少量、径10㎜のロームブロックを微量含む。しまりやや弱い。
16．暗褐色土7.5YR3/4　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまり強い。
17．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり強い。
18．極暗褐色土7.5YR2/3　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまり強い。
19．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量含む。しまり強い。
20．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまり強い。
21．暗褐色土7.5YR3/4　ローム土を斑状に少量含む。しまり強い。

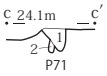
SPB-B′
22．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を極微量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。
23．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
24．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
25．黒褐色土7.5YR2/2　径1㎜のローム粒少量、径1㎜以下の焼土粒を極微量含む。しまり強い。
26．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を少量含む。ローム土主体。しまりやや弱い。
27．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜の白色粒を極微量含む。しまり強い。
28．黒褐色土7.5YR2/2　径2～3㎜のローム粒を中量、径5㎜のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。
29．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒を少量含む。しまり強い。
30．褐色土　7.5YR4/4　ローム土主体。12層の暗褐色土を斑状に少量含む。しまり強い。



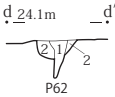

SPa-a′
1．極暗褐色土7.5YR2/3　径1～2㎜のローム粒を中量、径1～2㎜の焼土粒を少量、径10㎜の焼土ブロック少量含む。しまり強い。
2．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1～2㎜の焼土粒を微量含む。しまり強い。
3．黒褐色土7.5YR3/2　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜の炭化物粒を極微量含む。しまり強い。



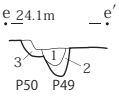

P11・12　SPb-b′
1．黒褐色土10YR2/3　径1㎜のローム粒を少量、径1以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
2．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を微量、径1以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。



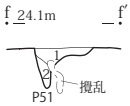

P71　SPc-c′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、白色粒を微量含む。しまり強い。
2．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量含む。しまり強い。



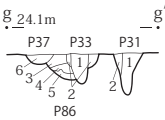

P62　SPd-d′
1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量、白色粒を微量含む。しまり強い。
2．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を極微量含む。しまり強い。



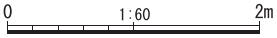

P49・50　SPe-e′
1．黒褐色土10YR2/2　径1～3㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
2．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり強い。
3．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒をほとんど含まない。径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。




P51　SPf-f′
1．黒褐色土10YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を微量、赤色粒を極微量含む。しまり強い。
2．暗褐色土7.5YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、ロームブロックを少量含む。しまり強い。



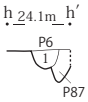

P31　SPg-g′
1．黒褐色土7.5YR3/2　径1㎜のローム粒を微量、径10㎜のロームブロックを微量、径1㎜以下の白色粒を極微含む。しまり強い。
2．極暗褐色土7.5YR2/3　径２～３㎜のローム粒を微量含む。しまり強い。
P33・P37・86　SPg-g′
1．極暗褐色土7.5YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
2．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量、径10㎜のロームブロックを、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
3．褐色土　7.5YR4/6　径2～3㎜のローム粒、径5～10㎜のロームブロックを多量含む。しまり強い。
4．極暗褐色土7.5YR2/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜の焼土粒を極微量含む。しまり強い。
5．暗褐色土7.5YR3/4　径1～2㎜のローム粒を少量、径10～20㎜のロームブロックを多量含む。しまり強い。
6．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり強い。



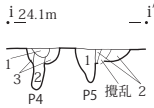

| 番号 | 長径 | 短径 | 深さ | 覆土 | 検出面 |
|---|---|---|---|---|---|
| P 1 | 23 | 20 | — | C | 床面 |
| P 2 | 18 | 18 | — | A | 確認面 |
| P 3 | 18 | 15 | — | A | 床面 |
| P 4 | 27 | 23 | 25 | A | 確認面 |
| P 5 | 43 | 43 | 25 | C | 床面 |
| P 6 | 28 | 23 | 15 | A | 床面 |
| P 7 | 22 | 21 | — | C | 床面 |
| P 8 | 24 | 21 | — | C | 床面 |
| P 9 | 23 | 23 | — | A | 床面 |
| P10 | 30 | 28 | — | C | 床面 |
| P11 | 19 | 16 | 10 | A | 確認面 |
| P12 | 40 | 36 | 6 | C | 床面 |
| P13 | 46 | 39 | — | C | 床面 |
| P14 | 34 | 28 | — | C | 床面 |
| P15 | 20 | 18 | — | A | 床面 |
| P16 | 19 | 17 | — | A | 床面 |
| P17 | 30 | 24 | — | C | 床面 |
| P18 | 29 | 27 | — | C | 床面 |
| P19 | 30 | (19) | — | C | 床面 |
| P20 | 20 | 20 | — | C | 床面 |
| P21 | 27 | 25 | — | C | 床面 |
| P22 | 21 | 21 | — | B | 床面 |
| P23 | 32 | 28 | — | C | 床面 |
| P24 | 33 | 27 | — | C | 床面 |
| P25 | 25 | 24 | 27 | A | 床面 |
| P26 | 28 | 27 | — | A | 床面 |
| P27 | 42 | (25) | — | C | 床面 |
| P28 | 26 | (15) | — | C | 床面 |
| P29 | 17 | 17 | — | B | 床面 |
| P30 | 20 | 18 | — | C | 床面 |
| P31 | 23 | 23 | 33 | C | 床面 |
| P32 | 26 | 22 | — | C | 床面 |
| P33 | 24 | 24 | 23 | A | 床面 |
| P34 | 21 | (14) | — | C | 床面 |
| P35 | 23 | 21 | — | A | 確認面 |
| P36 | 19 | 17 | — | A | 床面 |
| P37 | 20 | 20 | 8 | C | 床面 |
| P38 | 18 | 18 | — | A | 床面 |
| P39 | 23 | 22 | — | A | 床面 |
| P40 | 48 | 46 | — | C | 床面 |
| P41 | 41 | 35 | — | C | 床面 |
| P42 | 43 | 36 | — | C | 床面 |
| P43 | 20 | 19 | — | C | 床面 |
| P44 | 22 | 19 | — | C | 床面 |
| P45 | 30 | (14) | — | A | 床面 |
| P46 | 22 | 16 | — | C | 床面 |
| P47 | 36 | 30 | — | A | 確認面 |
| P48 | 18 | 18 | — | C | 床面 |
| P49 | 23 | 22 | 23 | A | 確認面 |
| P50 | 20 | (16) | 12 | C | 床面 |
| P51 | 48 | 46 | 31 | A | 床面 |
| P54 | 21 | 20 | — | B | 床面 |
| P55 | 21 | 20 | — | A | 確認面 |
| P57 | 19 | 17 | — | C | 床面 |
| P58 | 24 | (17) | — | C | 床面 |
| P59 | 21 | 17 | — | C | 床面 |
| P60 | 18 | 16 | — | A | 床面 |
| P61 | 43 | 40 | — | A | 確認面 |
| P62 | 32 | 30 | 29 | A | 確認面 |
| P63 | 26 | 23 | — | C | 床面 |
| P64 | 30 | (20) | 20 | A | 床面 |
| P65 | 24 | 21 | 25 | A | 床面 |
| P66 | 24 | 23 | — | C | 床面 |
| P67 | 29 | 27 | — | C | 床面 |
| P68 | 17 | 14 | — | B | 床面 |
| P69 | 18 | 17 | — | C | 床面 |
| P70 | 19 | 16 | — | C | 床面 |
| P71 | 21 | 19 | 17 | A | 床面 |
| P73 | 16 | 15 | — | — | 床面 |
| P74 | 35 | (31) | 23 | C | 確認面 |
| P75 | 31 | (15) | 54 | B | 確認面 |
| P76 | 23 | (15) | 28 | A | 確認面 |
| P77 | 14 | (10) | 14 | A | 確認面 |
| P78 | 31 | (19) | 5 | C | 確認面 |
| P80 | 20 | (16) | 30 | A | 確認面 |
| P81 | 14 | 14 | 23 | A | 床面 |
| P82 | 35 | (16) | 18 | C | 確認面 |
| P83 | 15 | (7) | 14 | C | 確認面 |
| P84 | 14 | (9) | 19 | C | 確認面 |
| P85 | 18 | (8) | 14 | C | 確認面 |
| P86 | 37 | — | 21 | C | 床面 |
| P87 | 27 | — | 16 | C | 確認面 |
| P88 | 16 | 14 | 27 | C | 床面 |
| P89 | 32 | 29 | — | — | 床面 |

※計測値の単位はすべて cm
※計測値の（ ）は残存値

第 146 図　10T－001 住居跡（２）



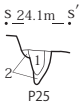

P6・87　SPh-h′
1．極暗褐色土7.5YR2/3　径1～3㎜のローム粒を中量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり有り。



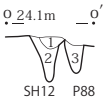

P4　SPi-i′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を微量、赤色粒を極微量含む。しまり強い。
2．黒褐色土7.5YR3/2　径1～2㎜のローム粒を層下部中心に中量含む。しまり有り。
3．黒褐色土7.5YR3/2　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を微量、焼土粒を極微量含む。しまり有り。
P5　SPi-i′
1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を微量、焼土粒を極微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を微量含む。しまり有り。

P81　SPk-k′
1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を多量、白色粒を微量含む。クラック多い。しまりやや有り。
2．暗褐色土10YR3/3　径1～2㎜のローム粒を多量含む。しまりやや有り。

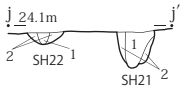
P65　SPn-n′
1．黒褐色土10YR2/3　径1㎜のローム粒を極微量、径1㎜の炭化物粒を極微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1㎜以下のローム粒を極微量含む。しまり有り。



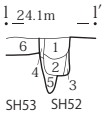

P25　SPs-s′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、白色粒を微量、焼土粒を微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土7.5YR3/4　径1～2㎜のローム粒を多量含む。しまり有り。



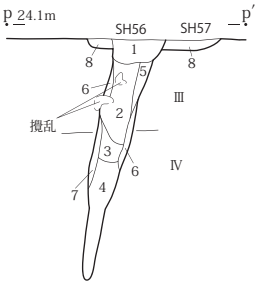

P88・SH12　SPo-o′
1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量、白色粒を微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を少量、白色粒を極微量含む。しまり有り。
3．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまりやや有り。



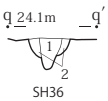

SH21　SPj-j′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を少量、層下部にロームブロックを少量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/3　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまり有り。
SH22　SPj-j′
1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を少量、白色粒を微量含む。しまり有り。



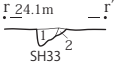

SH52・53　SP1-1′
1．黒褐色土10YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり強い。
2．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまり有り。
3．黒褐色土10YR2/3　径2～3㎜のローム粒を中量含む。しまり有り。
4．黒褐色土10YR2/2　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまり有り。
5暗褐色土10YR3/4　径2～3㎜のローム粒を少量含む。しまり有り。
6．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまり強い。




SH56・57　SPp-p′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒、径1㎜の焼土粒を極微量含む。しまり有り。
2．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。
3．極暗褐色土7.5YR2/3 径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまり弱い。
4．黒褐色土7.5YR2/2　径1～3㎜のローム粒を少量含む。しまり弱い。
5．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまり有り。
6．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を中量含む。しまりやや弱い。
7．暗褐色土7.5YR3/4　径1～3㎜のローム粒を多量含む。しまり弱い。
8．暗褐色土10YR3/4　ローム粒をほとんど含まない。径1㎜以下の白色粒を極微量含む。

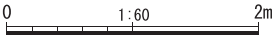



SH36　SPq-q′
1．黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土7.5YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量含む。層下部はロームブロック多い。しまり有り。

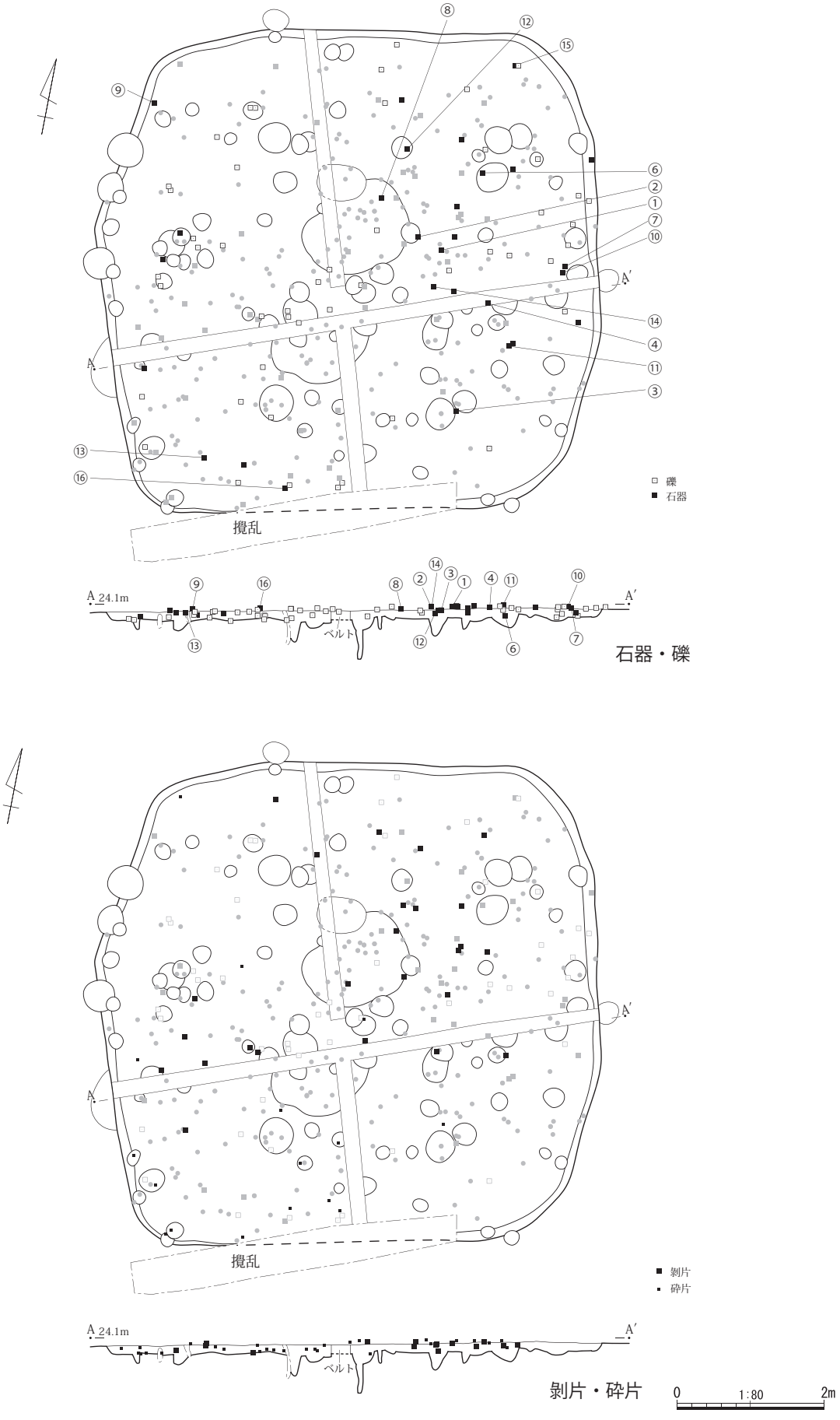



SH33　SPr-r′
1．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を微量、焼土粒を極微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を極微量含む。しまり有り。

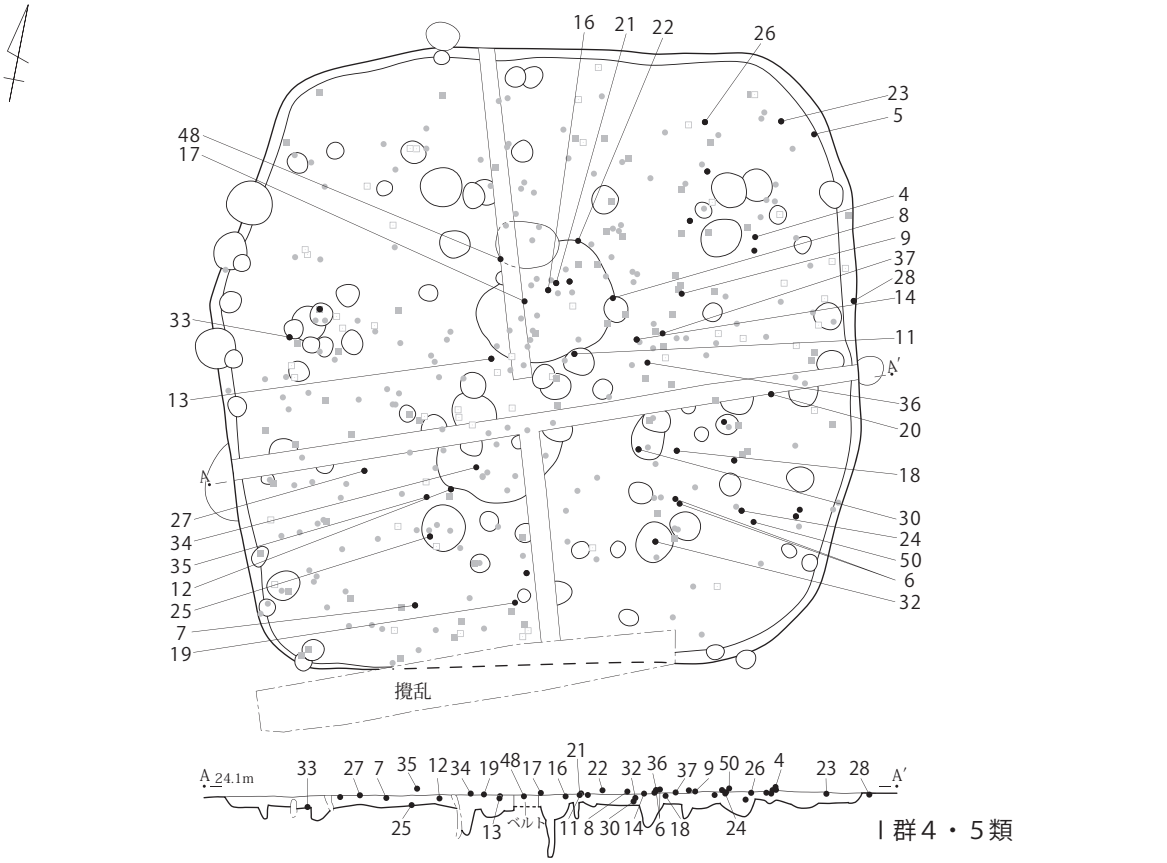
SH15　SPt-t′
1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を微量含む。しまり有り。
3．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、白色粒を極微量含む。しまり有り。（土坑覆土）



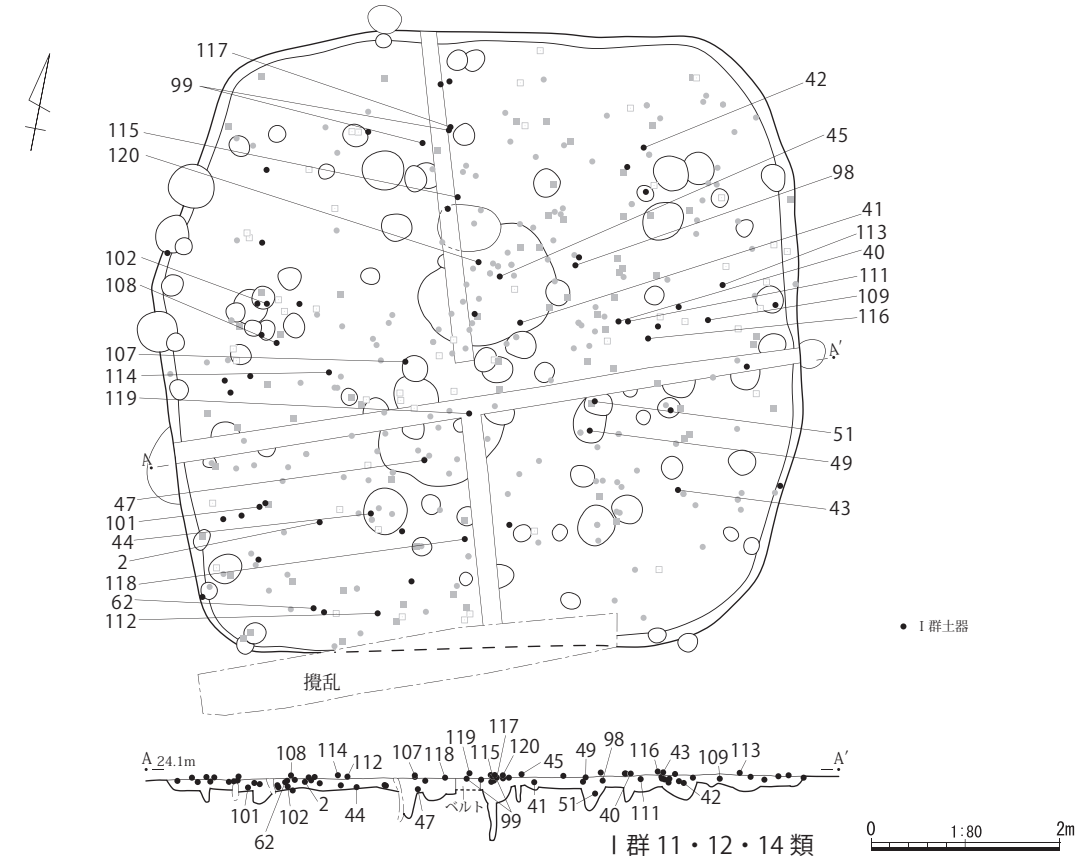

第 147 図　10T－001 住居跡（3）

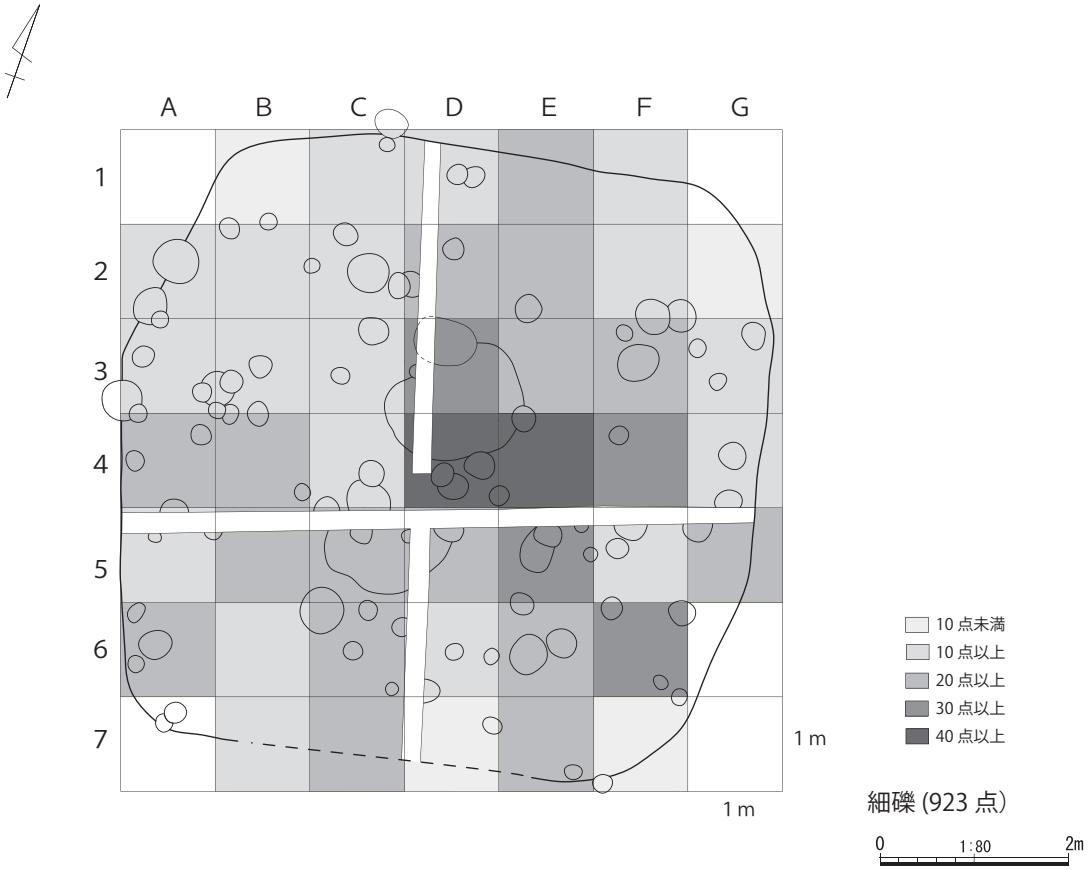



第 148 図　10T－001 住居跡（４）

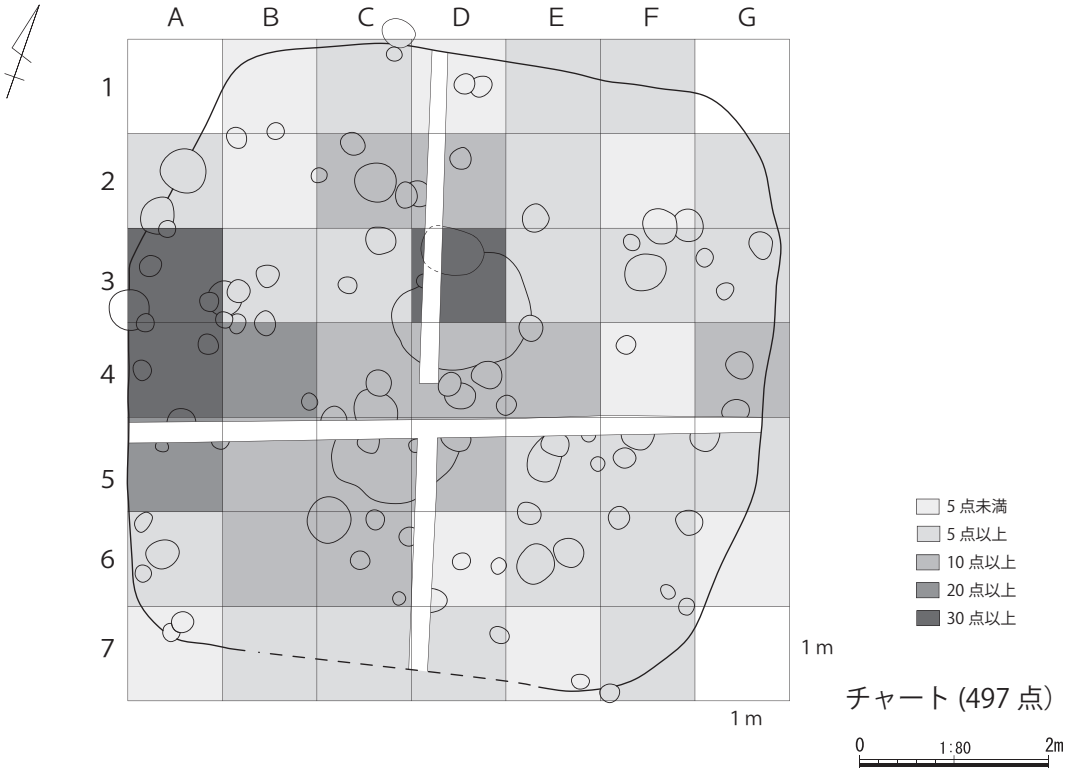


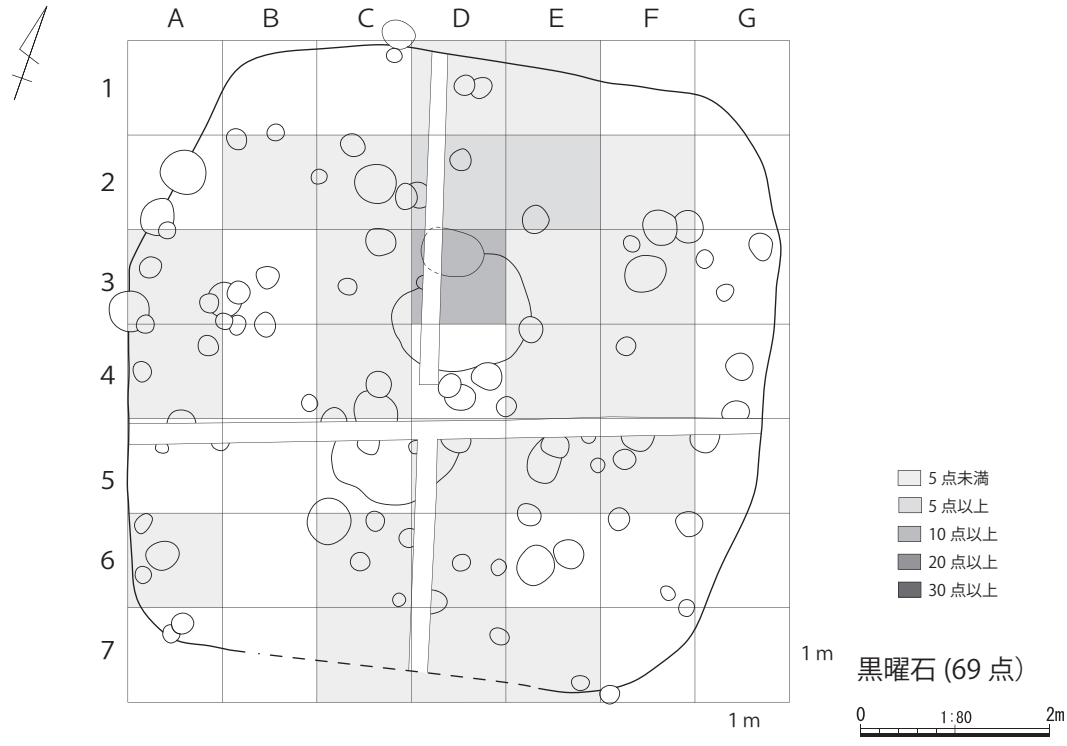

第 149 図　10T－001 住居跡（５）



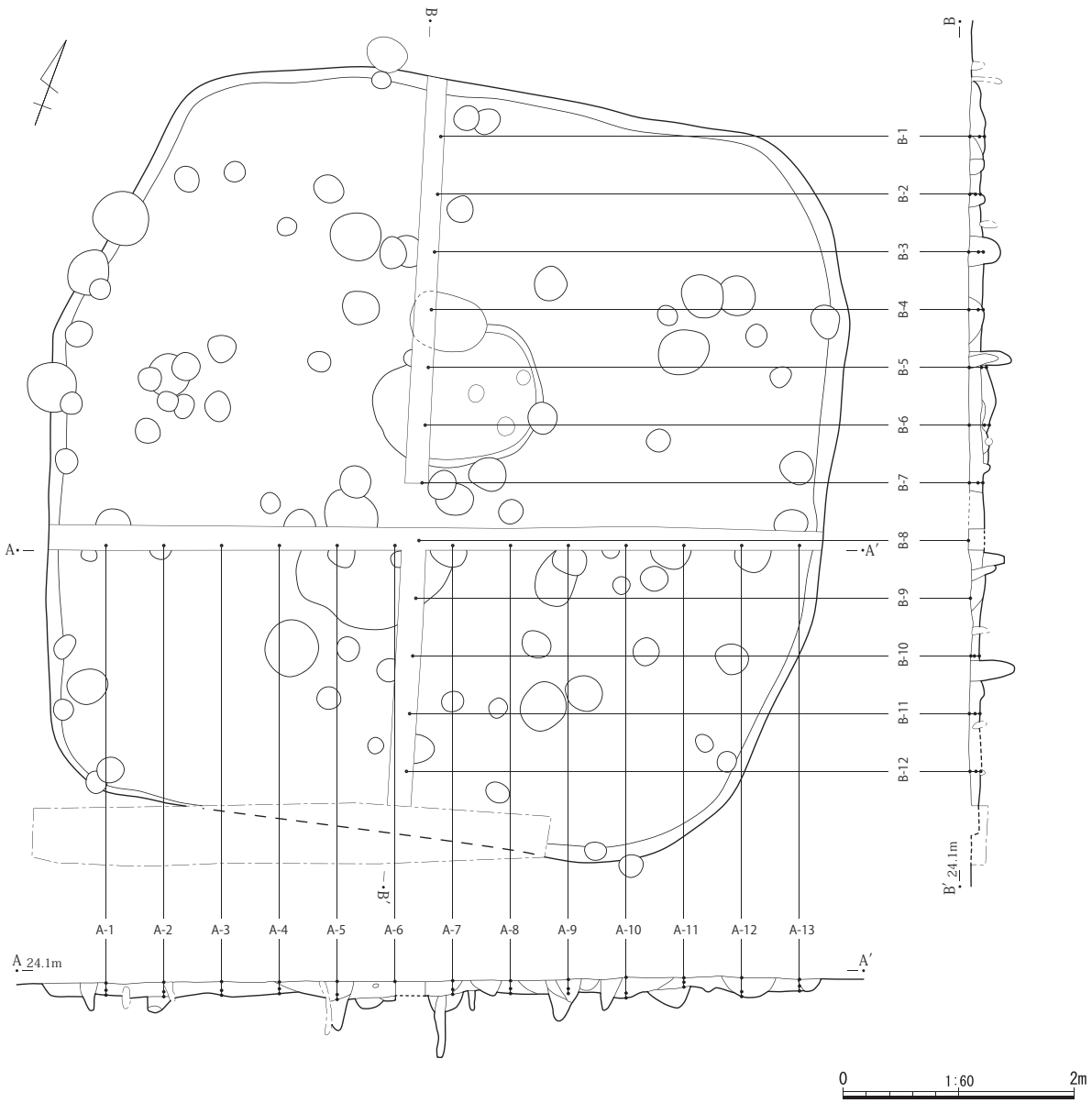




第 150 図　10T－001 住居跡（6）




第 151 図　10T－001 住居跡（7）



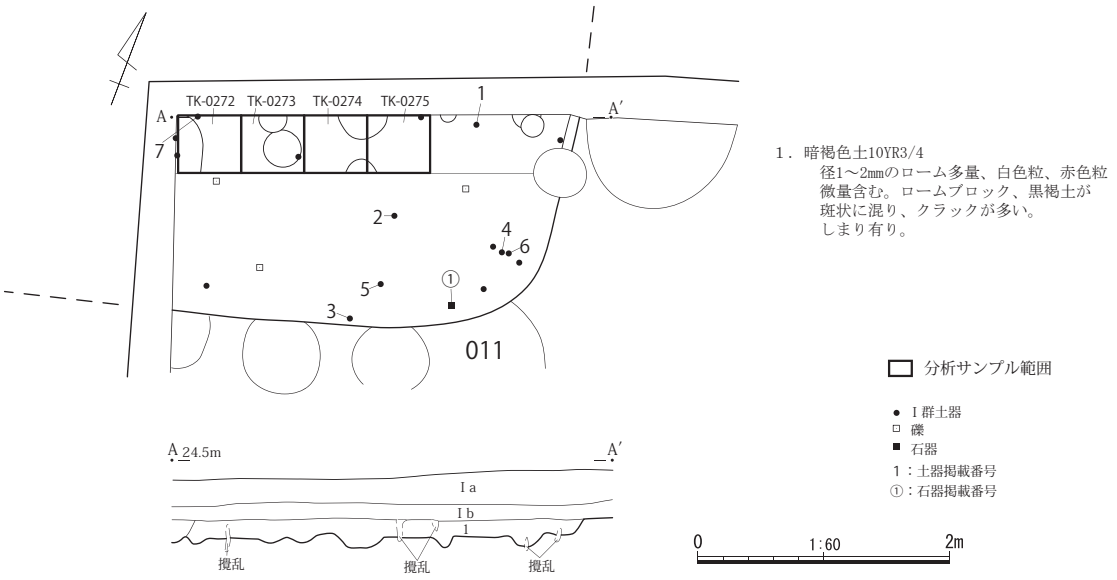

土壌硬度の計測位置および計測値

| 地点 | 遺構確認面 | | 覆土下層 | | 床面 | | 地山 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 |
| A1 | 23 | 10 | 15 | 3.02 | 22 | 8.54 | 21 | 7.32 |
| A2 | 25 | 13.97 | 23 | 10 | 24 | 11.79 | - | - |
| A3 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | 23 | 10 |
| A4 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | - | - |
| A5 | 25 | 13.97 | 25 | 13.97 | 24 | 11.79 | 22 | 8.54 |
| A6（B9） | 25 | 13.97 | - | - | - | - | - | - |
| A7 | 22 | 8.54 | 23 | 10 | 25 | 13.97 | 22 | 8.54 |
| A8 | 23 | 10 | 23 | 10 | 23 | 10 | - | - |
| A9 | 25 | 13.97 | 25 | 13.97 | 24 | 11.79 | 20 | 6.29 |
| A10 | 22 | 8.54 | 25 | 13.97 | 24 | 11.79 | - | - |
| A11 | 23 | 10 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | 22 | 8.54 |
| A12 | 26 | 16.68 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | - | - |
| A13 | 24 | 11.79 | 25 | 13.97 | 25 | 13.97 | 23 | 10 |

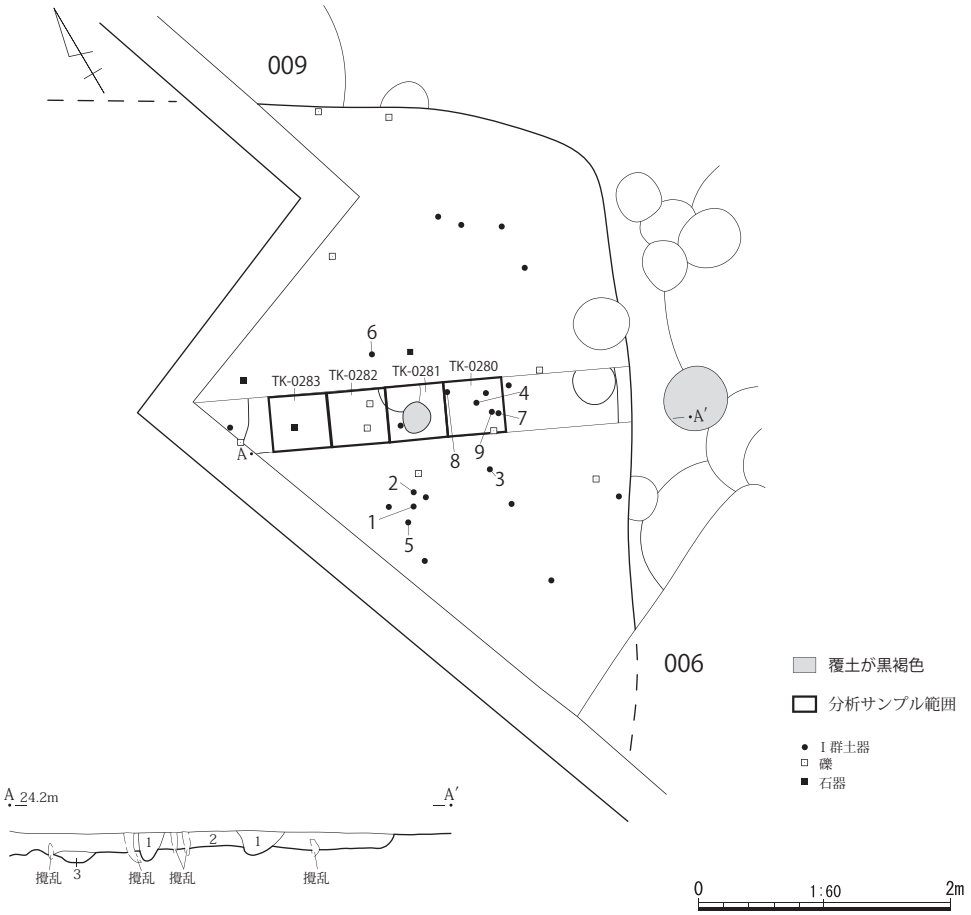
| 地点 | 遺構確認面 | | 覆土下層 | | 床面 | | 地山 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 |
| B1 | 25 | 13.97 | 23 | 10 | 24 | 11.79 | - | - |
| B2 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | 23 | 10 | - | - |
| B3 | 25 | 13.97 | 23 | 10 | 24 | 11.79 | - | - |
| B4 | 25 | 13.97 | 23 | 10 | 22 | 8.54 | - | - |
| B5 | 25 | 13.97 | 24 | 11.79 | 23 | 10 | - | - |
| B6 | 25 | 13.97 | 24 | 11.79 | 26 | 16.68 | - | - |
| B7 | 26 | 16.68 | 24 | 11.79 | 26 | 16.68 | - | - |
| B8 | 26 | 16.68 | - | - | - | - | - | - |
| B9（A6） | 25 | 13.97 | - | - | - | - | - | - |
| B10 | 26 | 16.68 | 24 | 11.79 | 24 | 11.79 | - | - |
| B11 | 26 | 16.68 | 24 | 11.79 | 23 | 10 | - | - |
| B12 | 26 | 16.68 | 24 | 11.79 | 23 | 10 | - | - |

指数の単位は (cm) ／支持力は支持力強度を表し単位は (kg/cm$^2$)

第 152 図　10T－001 住居跡（８）

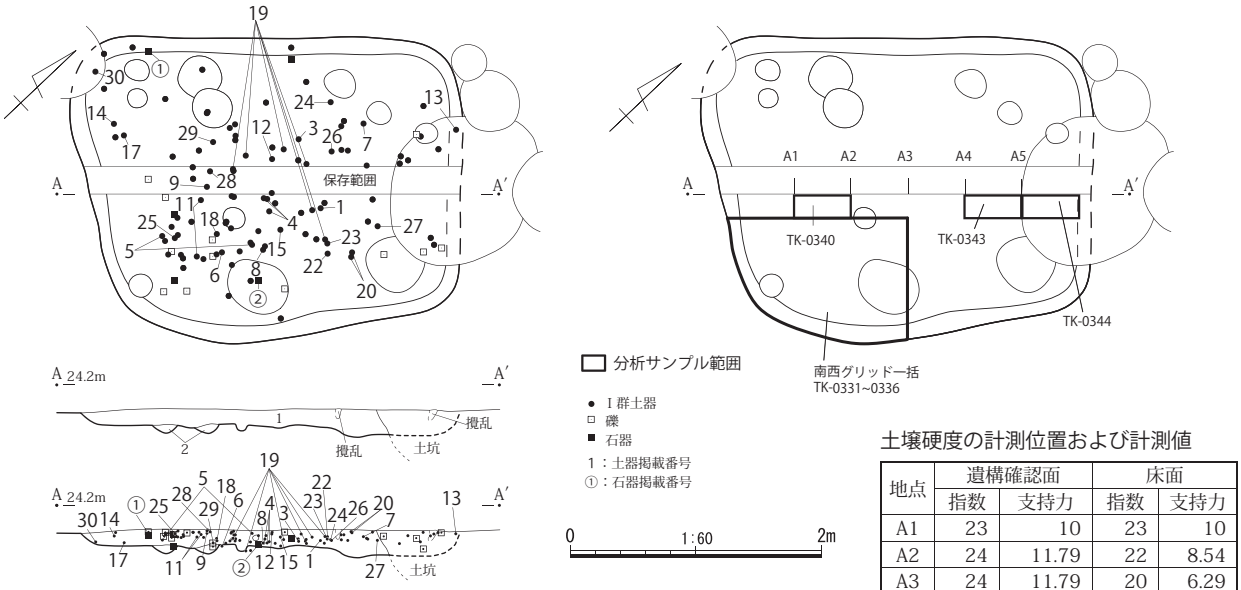



第 153 図　10T－004 住居跡




1．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒下部に微量、白色粒を少量含む。しまり強い。
2．暗褐色土10YR3/3　径1～2㎜のローム粒微量、白色粒（特に層上部に目立つ）赤色粒を極微量含む。しまり強い。（005覆土）
3．暗褐色土10YR3/4　ローム粒主体。赤色粒を極微量含む。しまり強い。

第 154 図　10T－005 住居跡



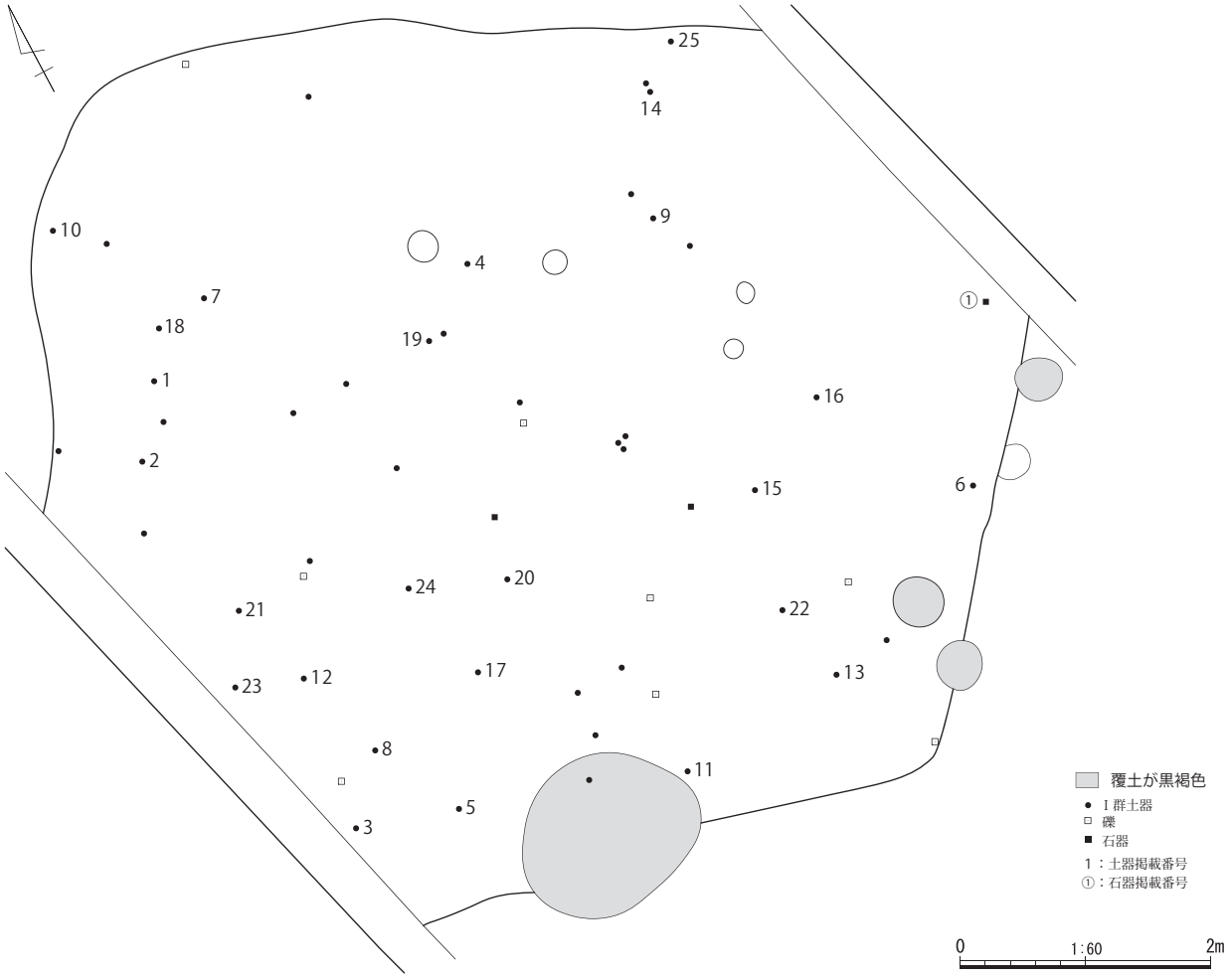

1.黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜のローム粒極微量、径1㎜以下の白色粒微量、径1㎜の炭化物粒極微量含む。しまりやや有り。
2.暗褐色土 7.5YR3/3　径10㎜のロームブロック極微量含む。しまり有り。

土壌硬度の計測位置および計測値

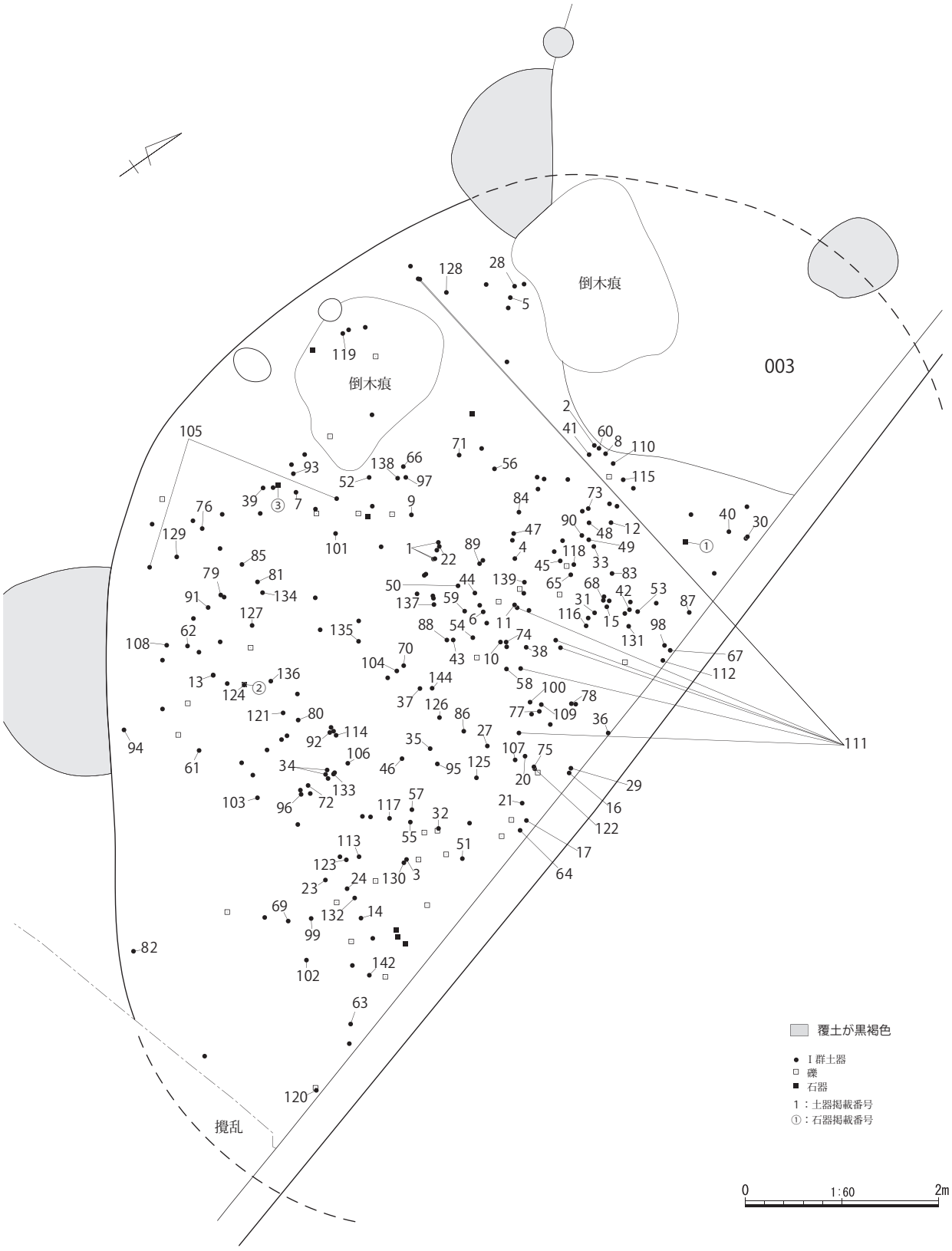
| 地点 | 遺構確認面 | | 床面 | |
|---|---|---|---|---|
| | 指数 | 支持力 | 指数 | 支持力 |
| A1 | 23 | 10 | 23 | 10 |
| A2 | 24 | 11.79 | 22 | 8.54 |
| A3 | 24 | 11.79 | 20 | 6.29 |
| A4 | 23 | 10 | 22 | 8.54 |
| A5 | 24 | 11.79 | 21 | 7.32 |

指数の単位は (cm) ／
支持力は支持力強度を表し単位は (kg/cm$^2$)

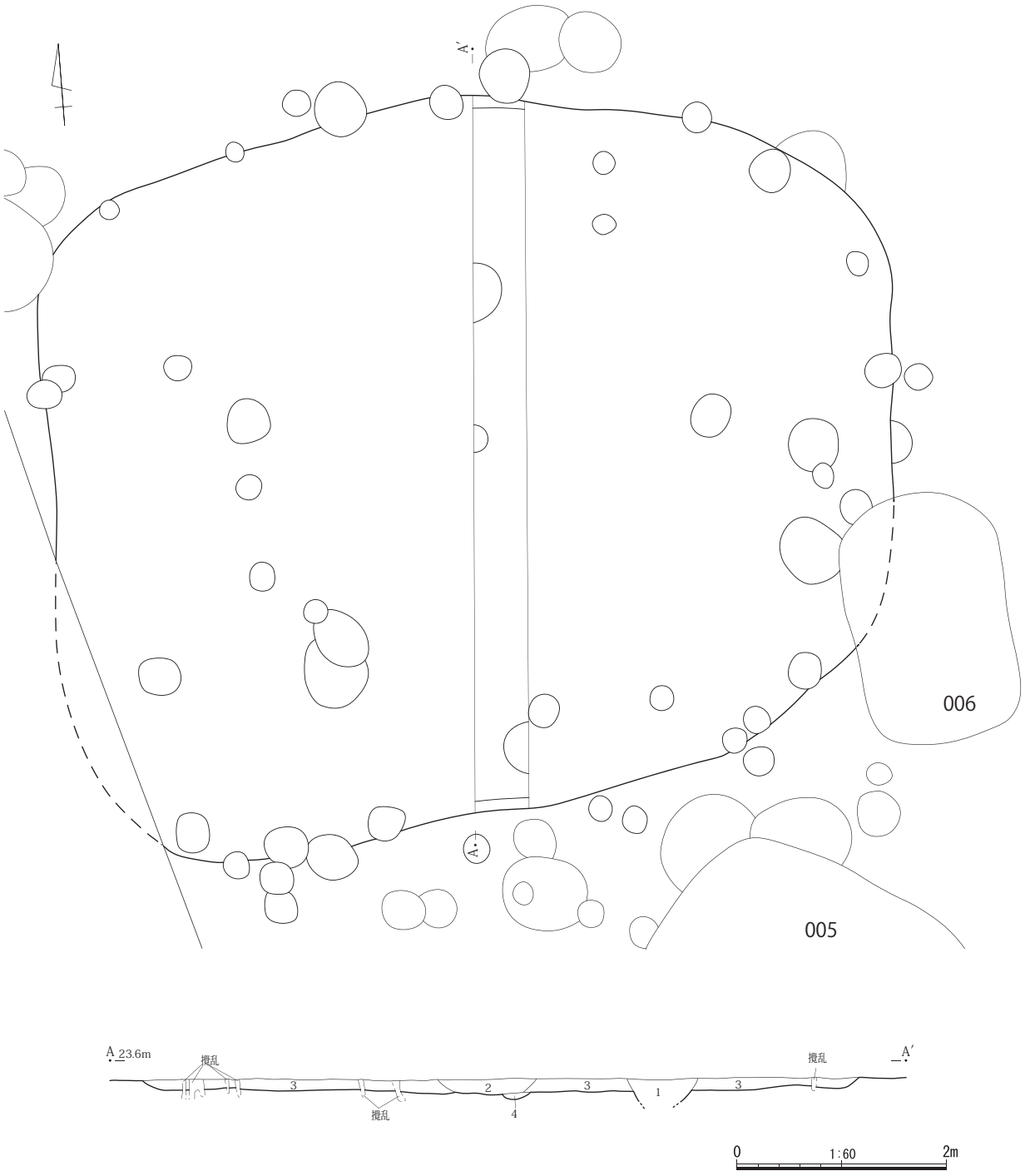
第 155 図　10T－007 住居跡




第 156 図　12T－001 住居跡

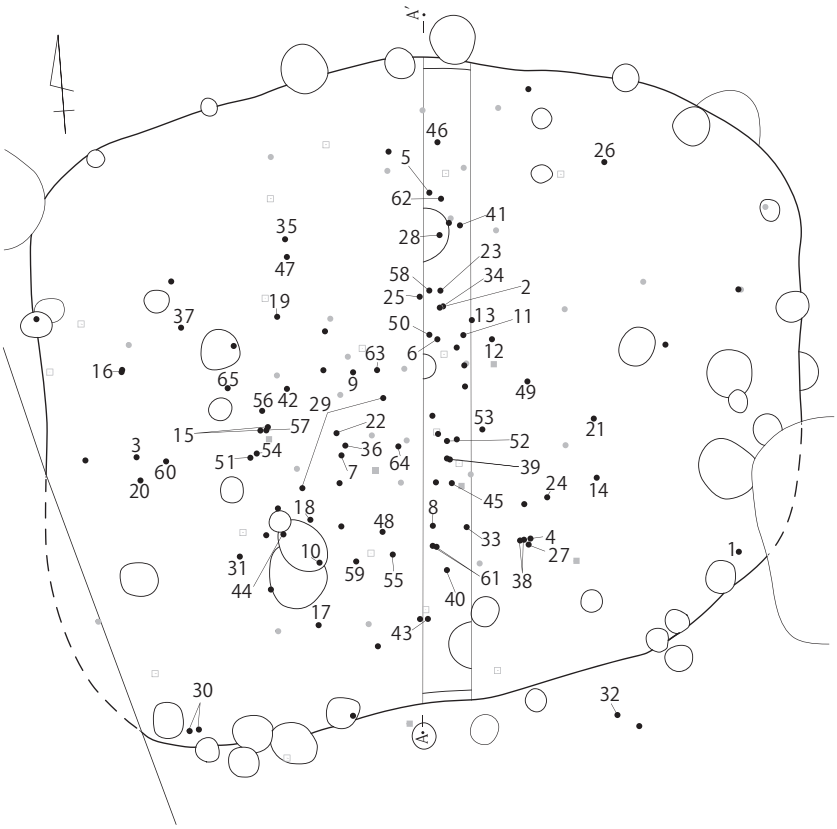



第 157 図　12T－002 住居跡

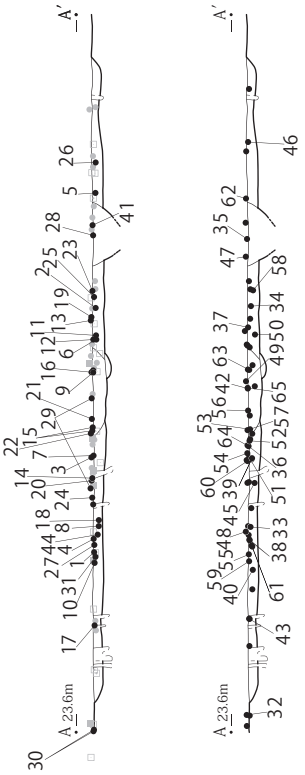



1．暗褐色土10YR3/3　径1～2㎜のローム粒を少量、層下部中心に10～20㎜程のロームブロックを少量含む。層下部の色調やや明るくなる。しまり強い。
2．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量、炭化粒、焼土粒を微量含む。しまり強い。
3．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を少量、炭化粒、焼土粒を微量含む。しまり強い。
4．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜の炭化粒、焼土粒を微量、径20～30㎜のロームブロックを少量含む。しまり強い。

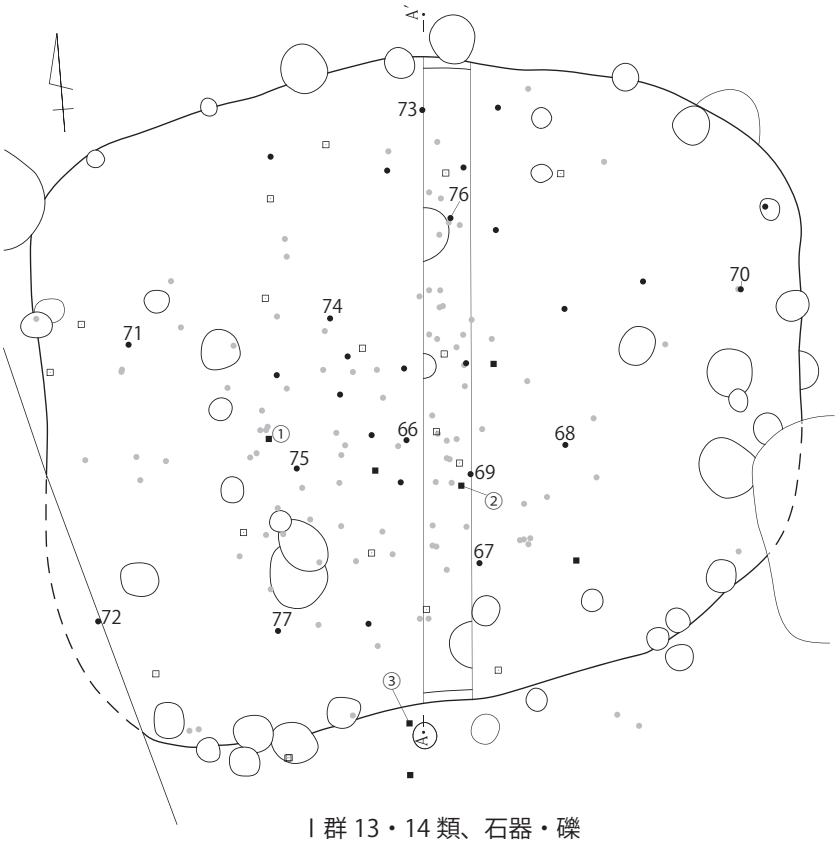
第 158 図　16T－001 住居跡（1）



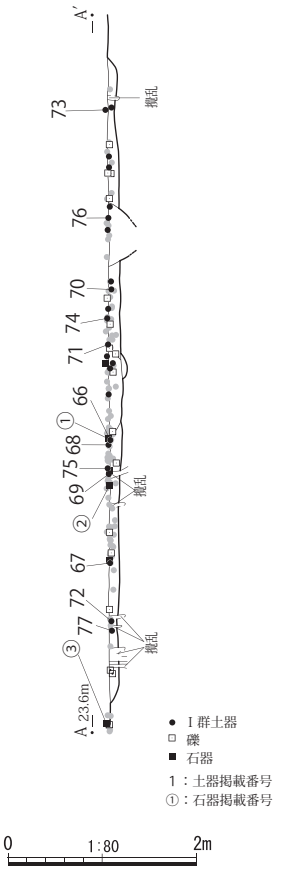

Ⅰ群1・3～9類



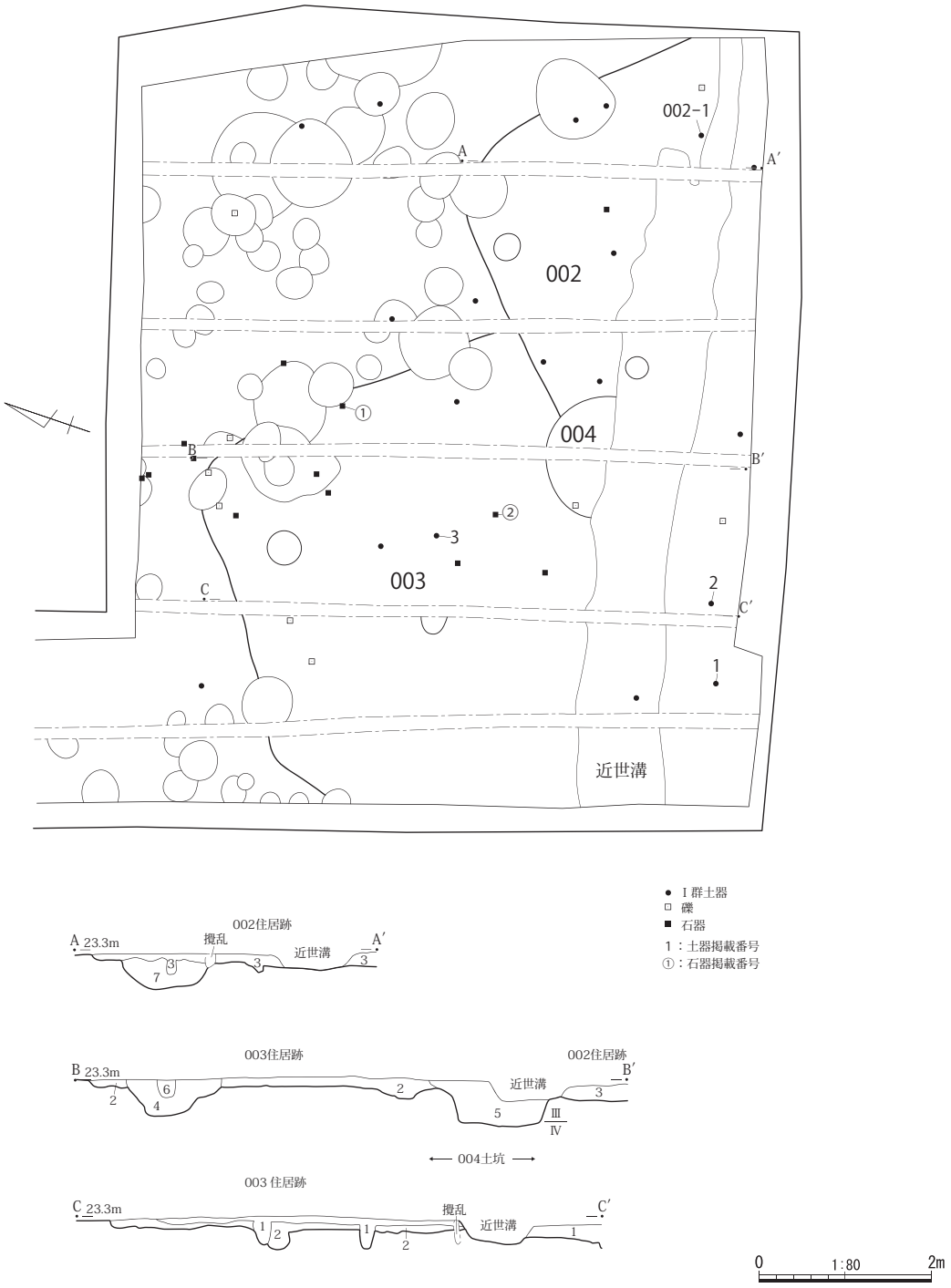

Ⅰ群1･3～8類　Ⅰ群9類




Ⅰ群13・14類、石器・礫

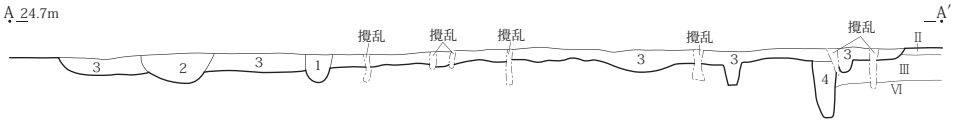


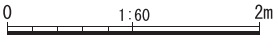

第159図　16T－001住居跡（2）




1．黒褐色土7.5YR3/2　径1㎜のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。
2．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量含む。
3．黒褐色土7.5YR3/2　径1㎜のローム粒を微量含む。1との境は不明瞭。
4．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量含む。
5．暗褐色土7.5YR3/3　径1～2㎜のローム粒を微量含む。
6．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を少量含む。
7．暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。

第 160 図　19T－002・003 住居跡



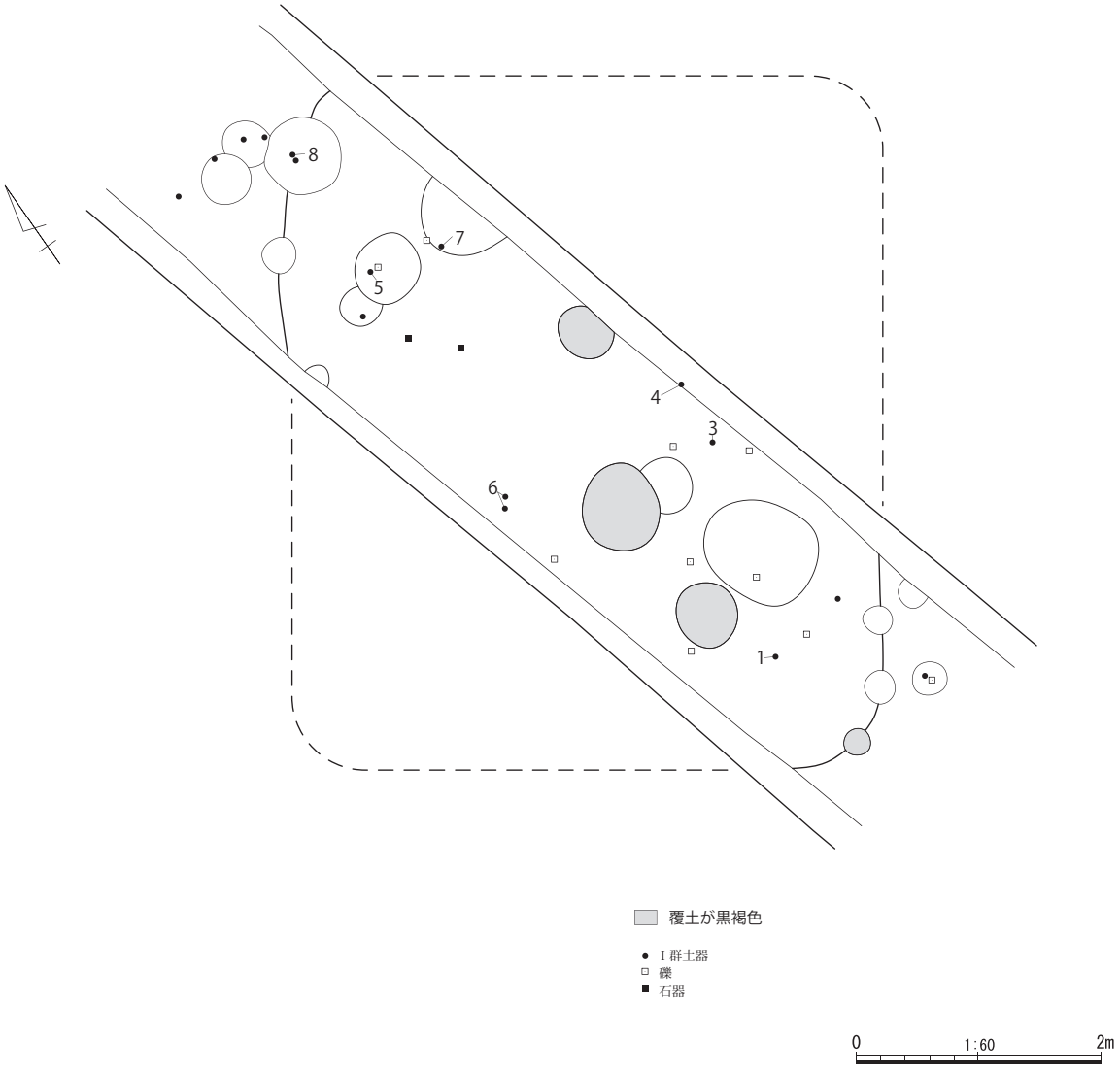




1．極暗褐色土7.5YR2/3　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまりやや弱い。（住居を切るピット）
2．黒褐色土7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり有り。（住居を切るピット）
3．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまり有り。
4．暗褐色土7.5YR3/4　径1㎜のローム粒及び，径10㎜のロームブロックを微量含む。しまり有り。

第 161 図　23T－001 住居跡

第 162 図　23T－002 住居跡

第 163 図　23T－003 住居跡



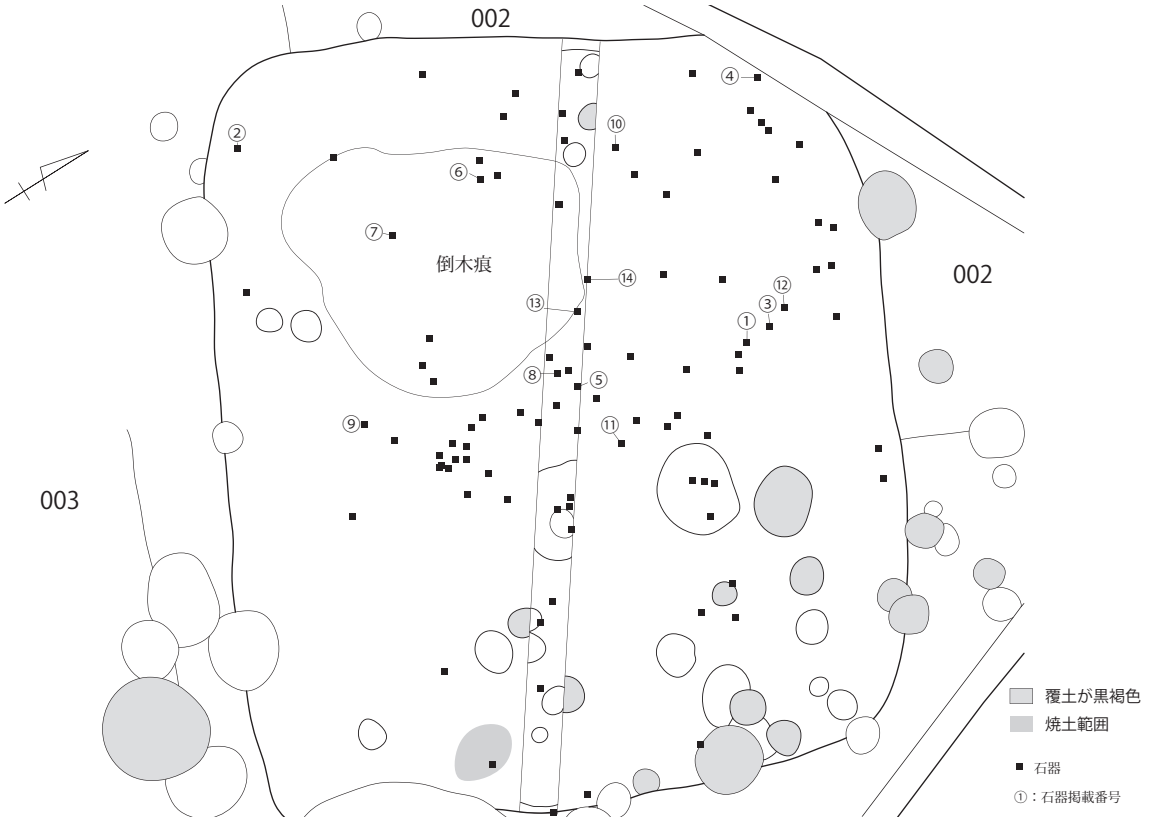

第 164 図　23T－004 住居跡

1．黒褐色土10YR2/3　径2～3㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量、径1～2㎜の炭化物粒を極微量含む。しまりやや弱い。（倒木痕）
2．黒褐色土10YR2/3　径1㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。1層よりやや明るい。しまりやや弱い。（倒木痕）
3．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を中量、径1㎜以下の白色粒を極微量含む。しまりやや弱い。（倒木痕）
4．黒褐色土10YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり有り。（住居を切るピット）
5．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまりやや弱い。（白色粒なし）（住居を切るピット）
6．暗褐色土10YR2/3　径2～3㎜のローム粒を中量含む。しまりやや弱い。（住居を切るピット）
7．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり有り。（住居を切るピット）
8．暗褐色土10YR3/4　ローム粒はほとんど含まない。Ⅲ層のローム土を斑状に含む。しまりやや弱い。（住居を切るピット）
9．黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を少量、径1㎜の以下の白色粒を微量含む。しまり有り。（住居を切るピット）
10．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を微量含む。白色粒含まない。しまり有り。（住居を切るピット）
11．黒褐色土10YR2/3　径1㎜のローム粒を微量、径10㎜のロームブロックを微量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり有り。
12．暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を微量、炭化物粒を極微量含む。しまり有り。
13．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を微量含む。径10㎜のロームブロックを微量含む。しまり有り。

覆土が黒褐色
焼土範囲
分析サンプル範囲

0　1:60　2m

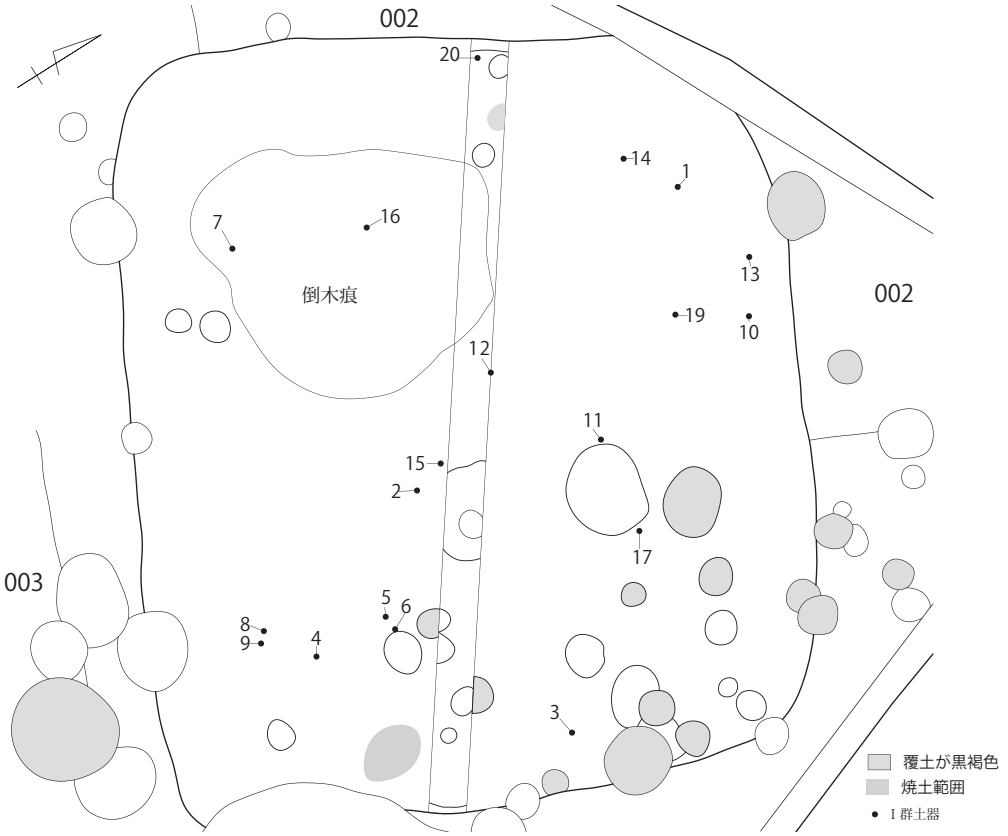
第 165 図　24T－001 住居跡（1）



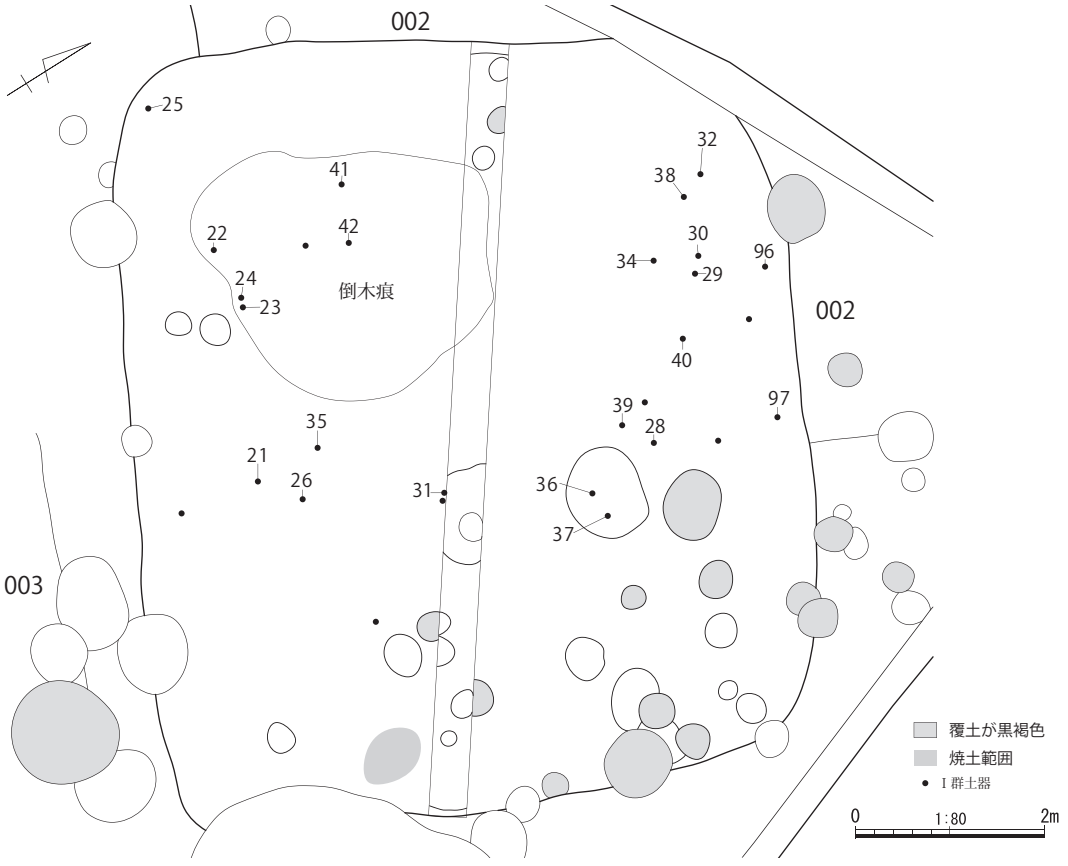

剥片石器、剥片、砕片

礫石器、礫など

第 166 図　24T－001 住居跡（２）

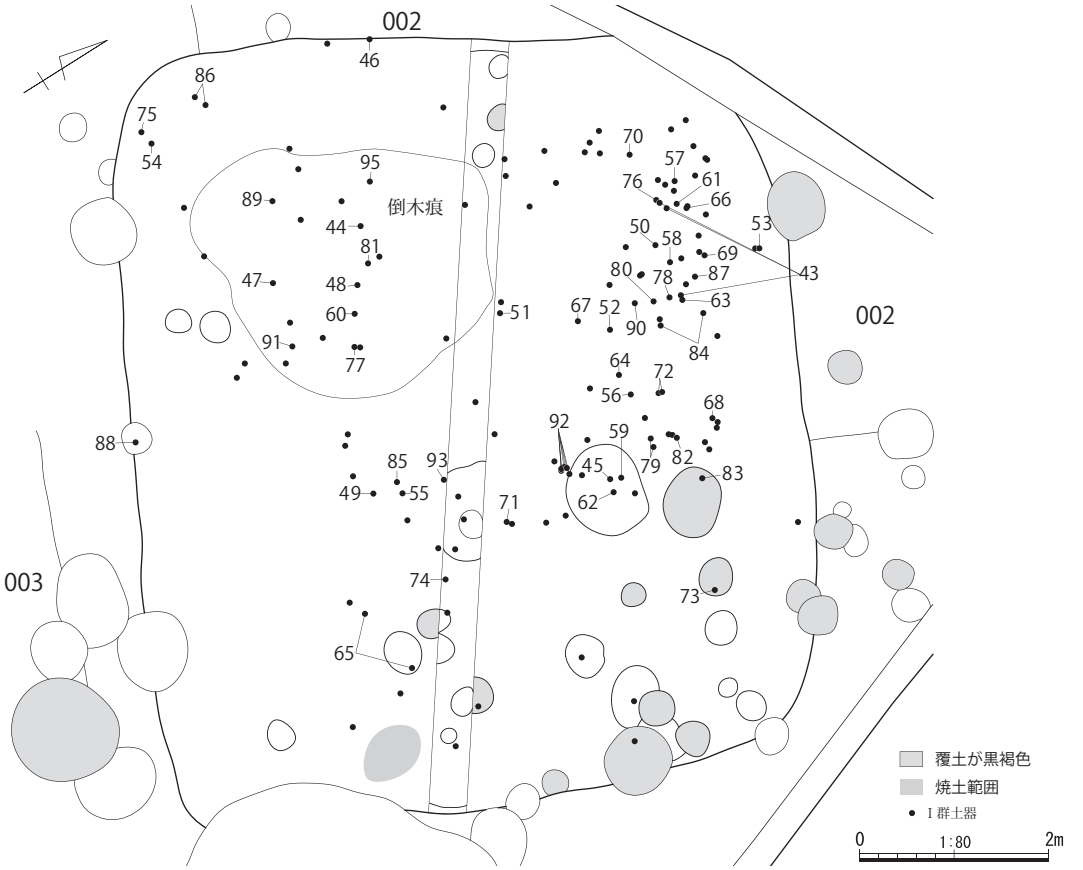



Ⅰ群４・５・７～９類



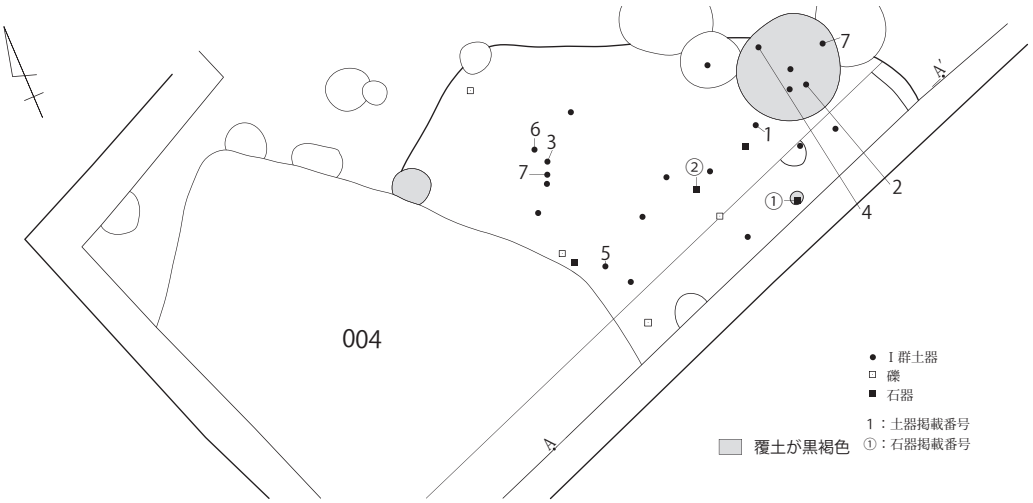

Ⅰ群 11 ～ 13・15・17 類

第 167 図　24T－001 住居跡（3）




Ⅰ群 14 類

第 168 図　24T－001 住居跡（４）

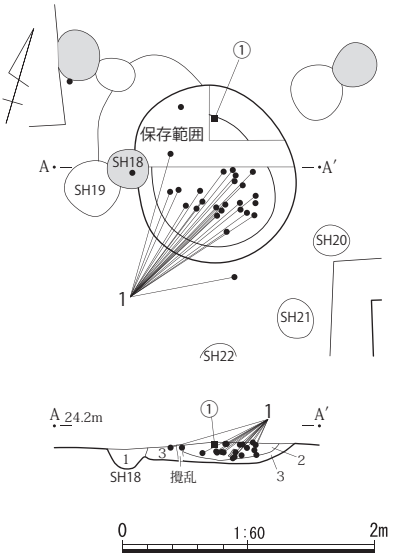



1．黒褐色土7.5YR2/2　径1mm以下のローム粒を微量、径1mm以下の白色粒、赤色粒を極微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　径1mm以下のローム粒を極微量、径1mm以下の白色粒を微量含む。しまり有り。
3．褐色土 7.5YR4/4　径1mm以下のローム粒をほとんど含まない均質な覆土。径1mm以下の白色粒を極微量含む。しまり有り。
4．褐色土 7.5YR4/4　径1mm以下のローム粒を極微量、径10mm以下のロームブロックを極微量含む。しまり有り。
5．暗褐色土10YR3/4　径1mm以下のローム粒を極微量含む。Ⅲ層の土が混じる。しまり有り。

第 169 図　24T－003 住居跡

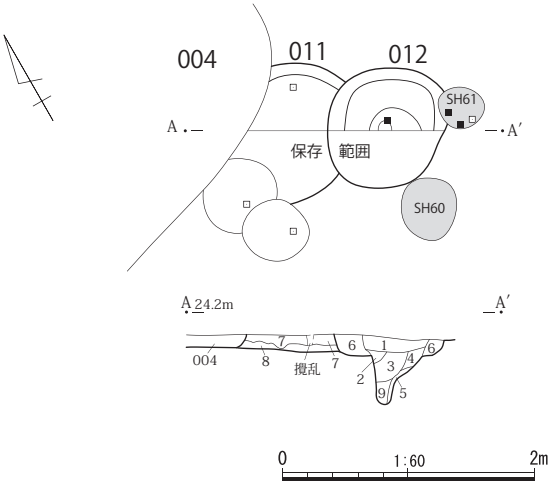
1．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり有り。前期住居掘り方か。
2．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を極微量、径1㎜以下の白色粒を微量、径1㎜の赤色粒を極微量含む。しまり有り。
3．暗褐色土10YR3/3　径1㎜のローム粒を極微量含む。しまり有り。

第 170 図　24T－002 住居跡



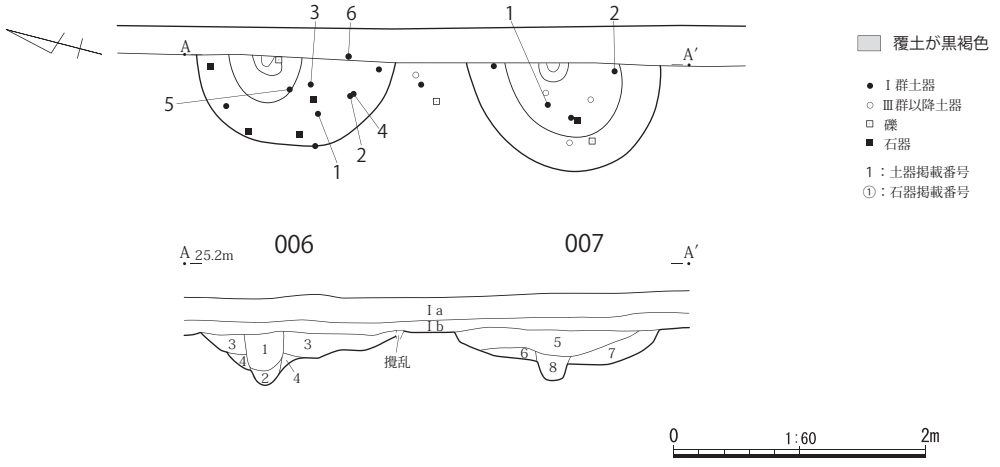

1.黒褐色土7.5YR3/2
　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒、赤色粒を極微量含む。しまり有り。
2.暗褐色土10YR3/4
　径1～2㎜のローム粒を微量、白色粒を少量、　赤色粒を微量含む。
　しまり有り。
3.にぶい黄褐色土10YR4/3
　ローム粒主体層。白色粒、炭化粒を極微量含む。しまり有り。

10T–008 土坑




1.黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜以下のローム粒を少量、径１㎜以下の白色粒、径1㎜の炭化物粒を微量含む。しまり有り。
2.黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜以下のローム粒を微量、径10㎜のソフトロームブロックを微量含む。しまり有り。
3.黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜以下のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。
4.暗褐色土 7.5YR3/4　径1㎜以下のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。
5.黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜以下のローム粒を少量含む。しまり有り。
6.暗褐色土 7.5YR3/3　径1㎜以下のローム粒を極微量含む。しまり有り。
7.暗褐色土 7.5YR3/4　径1㎜以下のローム粒を少量、径1㎜以下の白色粒を微量、径1㎜の炭化物粒を極微量含む。しまり有り。
8.暗褐色土 10YR3/4　径1㎜以下のローム粒、径1㎜以下の白色粒を微量、径1㎜の赤色粒を極微量含む。しまり有り。７層よりやや明るい。
9.褐色土 7.5YR4/4　径1㎜以下のローム粒ほとんど含まない。径1㎜の炭化物粒を極微量含む。しまり有り。

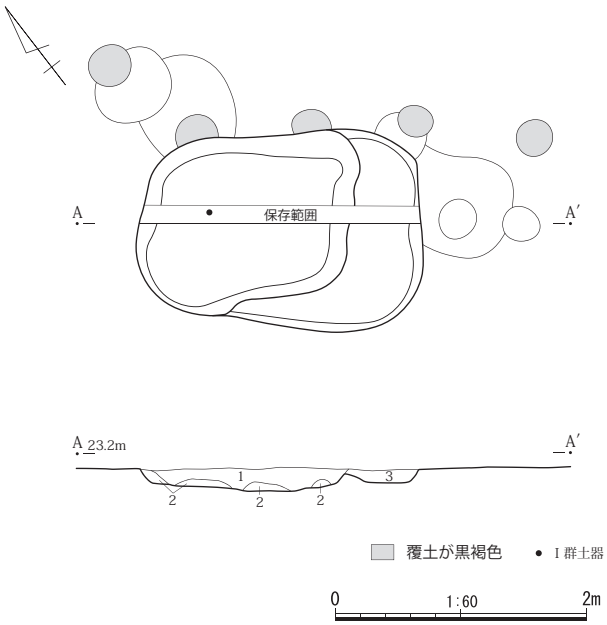
10T–011・012 土坑




23T-006土坑
1.黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量含む。しまりやや弱い。
2.黒褐色土10YR2/3　径1～2㎜のローム粒、径10㎜のロームブロックを少量含む。しまりふつう。
3.極暗褐色土7.5YR2/3 径1㎜のローム粒を極微量含む。しまりふつう。
4.暗褐色土10YR3/4　ソフトローム土を斑状に含む。しまりふつう。
23T-007土坑
5.黒褐色土7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を微量含む。しまりふつう。
6.黒褐色土10YR2/3　径1㎜のローム粒、赤色粒を極微量含む。しまりふつう。
7.暗褐色土10YR3/4　径1～2㎜のローム粒を少量、径10㎜のロームブロックを微量含む。しまりふつう。
8.暗褐色土7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を微量含む。しまりふつう。

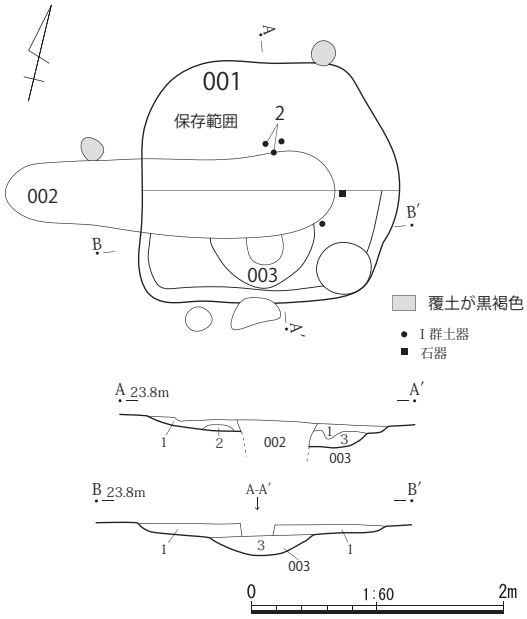
23T–006・007 土坑

第 171 図　10T－008・011・012、23T－006・007 土坑



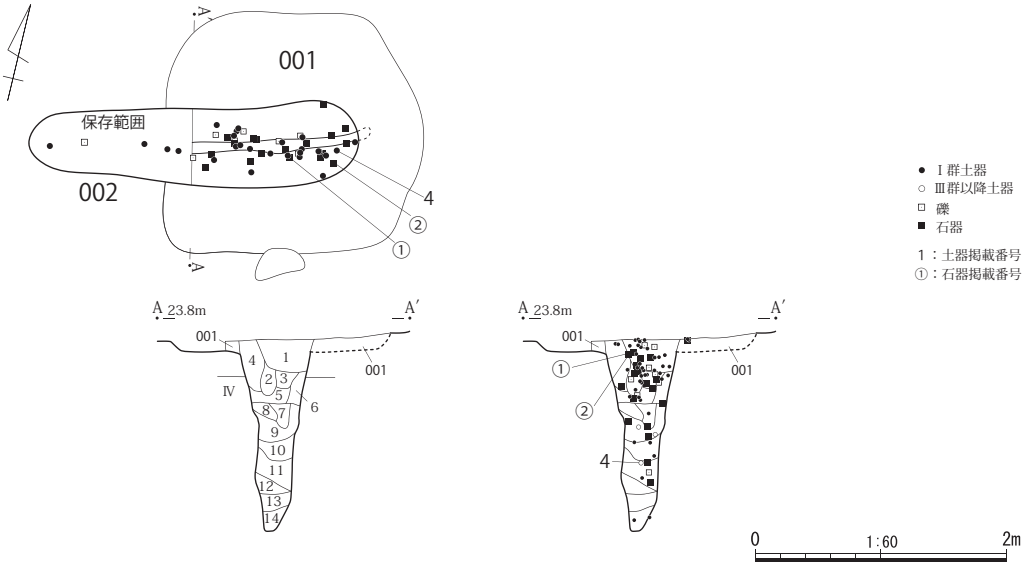

1．黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を少量含む。
2．極暗褐色土 7.5YR2/3 ローム土を中量含む。
3．暗褐色土 7.5YR3/3　径1㎜のローム粒を少量含む。斑状にローム土を含む。

17T-001 土坑




1．暗褐色土10YR3/4　径1㎜のローム粒を微量、径1㎜以下の白色粒を極微量、径1㎜の炭化物粒を微量含む。しまり有り。
2．暗褐色土10YR3/4　1層よりやや明るい。ローム粒をほとんど含まない。しまり有り。
3．暗褐色土7.5YR3/4 径10～20㎜のハードロームブロックを多量に含む。しまりやや弱い。

25T-001 土坑

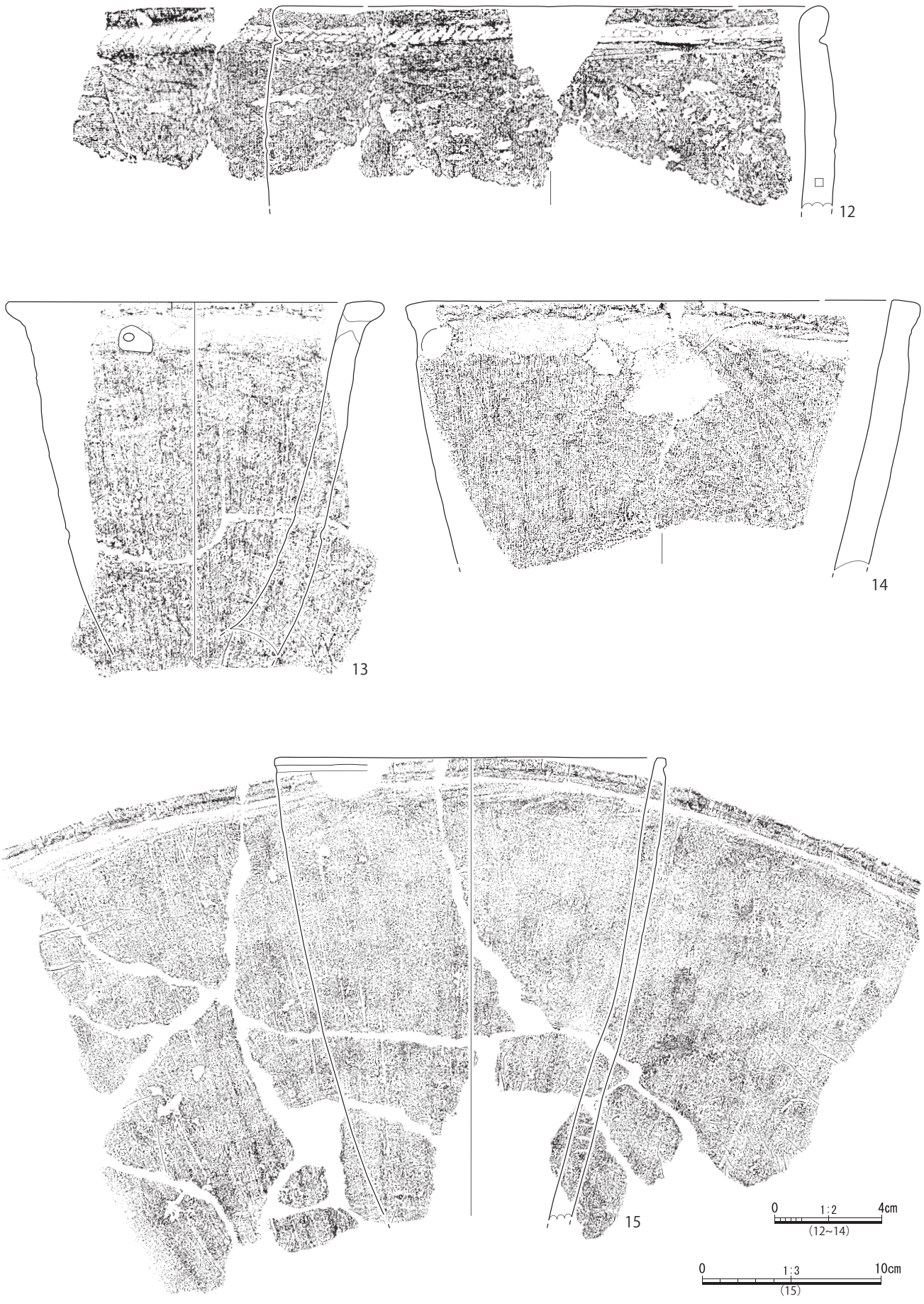



1．黒色土 10YR1.7/1　径1～2㎜のローム粒を極微量、径1㎜以下の白色粒を微量含む。しまり有り。
2．黒色土 7.5YR1.7/1　径1㎜のローム粒を極微量、ローム土混じる。しまり有り。
3．黒色土 7.5YR2/1　径1～2㎜のローム粒を少量含む。しまりやや弱い。
4．黒色土 7.5YR2/1　径1～2㎜のローム粒を少量、径10㎜のロームブロックを微量含む。しまり有り。壁崩落土。
5．黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を微量、径10㎜のロームブロックを微量含む。しまり弱い。
6．黒褐色土 10YR2/3　径2～3㎜のローム粒を多量含む。しまりやや弱い。壁崩落土。
7．黒色土 7.5YR1.7/1　径1㎜のローム粒少量含む。しまり弱い。
8．黒褐色土 7.5YR2/2　径1～2㎜のローム粒を少量、径30㎜のロームブロックを多量含む。しまり弱い。
9．黒色土 7.5YR2/1　径1～2㎜のローム粒を中量含む。しまり弱い。
10．黒褐色土 10YR2/3　径1～2㎜のローム粒を中量、径10～20㎜のロームブロックを多量含む。しまり弱い。
11．黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を微量含む。しまり弱い。
12．暗褐色土 7.5YR3/4　径2～3㎜のローム粒を多量、径10㎜のロームブロックを微量含む。しまり弱い。
13．黒褐色土 7.5YR2/2　径1㎜のローム粒を少量、径20㎜のロームブロックを微量含む。しまり弱い。
14．極暗褐色土 7.5YR2/3 径1～2㎜のローム粒を中量含む。しまり弱い。

25T-002 土坑

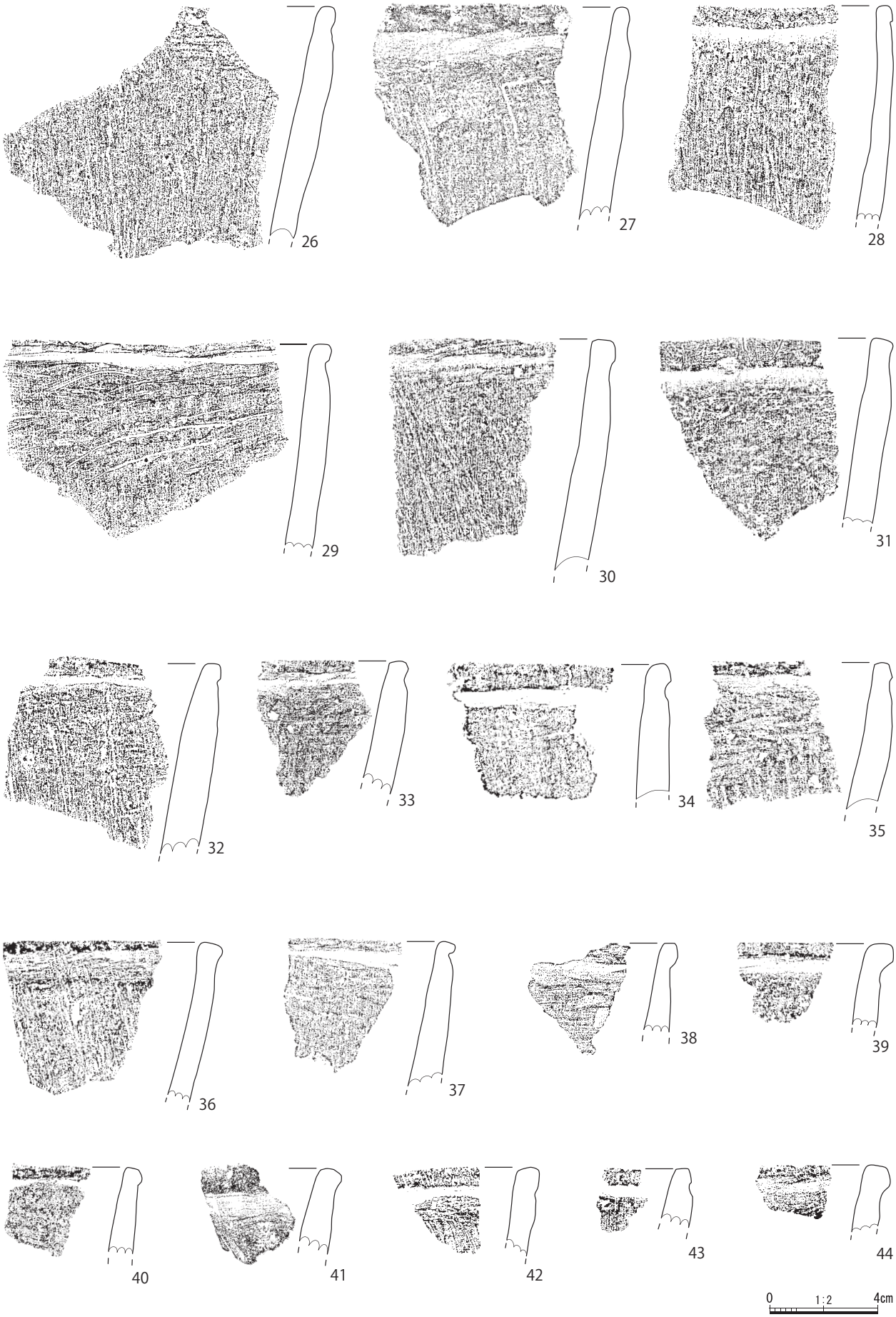
第 172 図　17T－001、25T－001・002 土坑

第 173 図　５次 SI－002 出土土器（１）

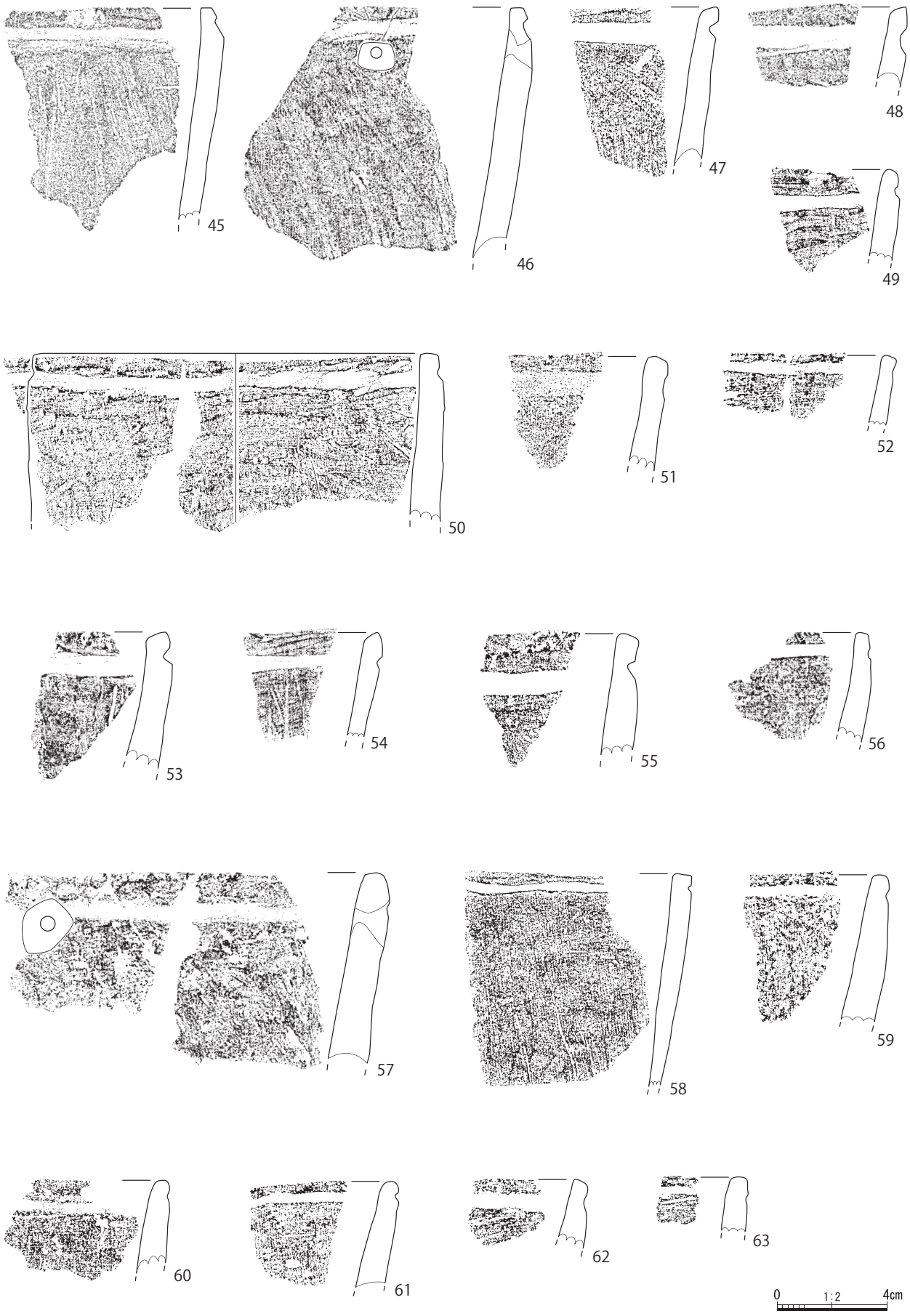



第 174 図　５次 SI－002 出土土器（２）

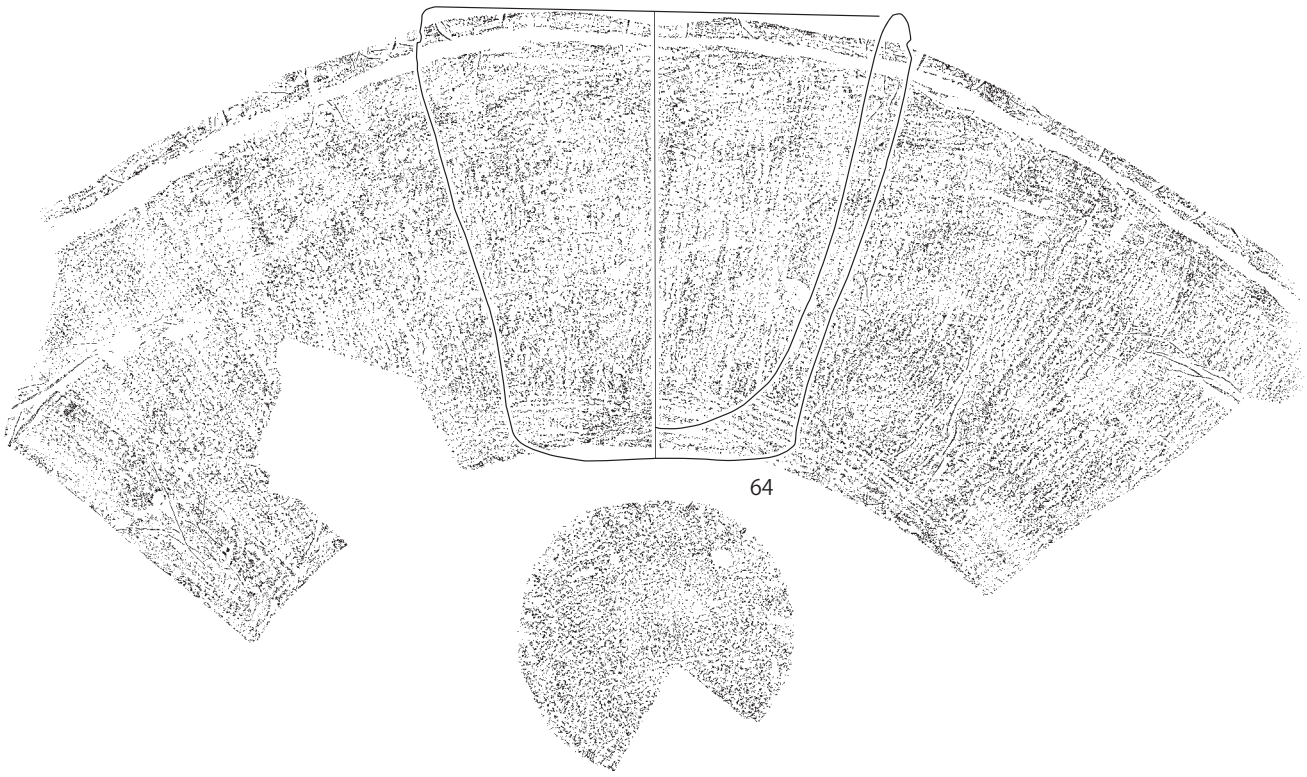
第 175 図　５次 SI－002 出土土器（３）



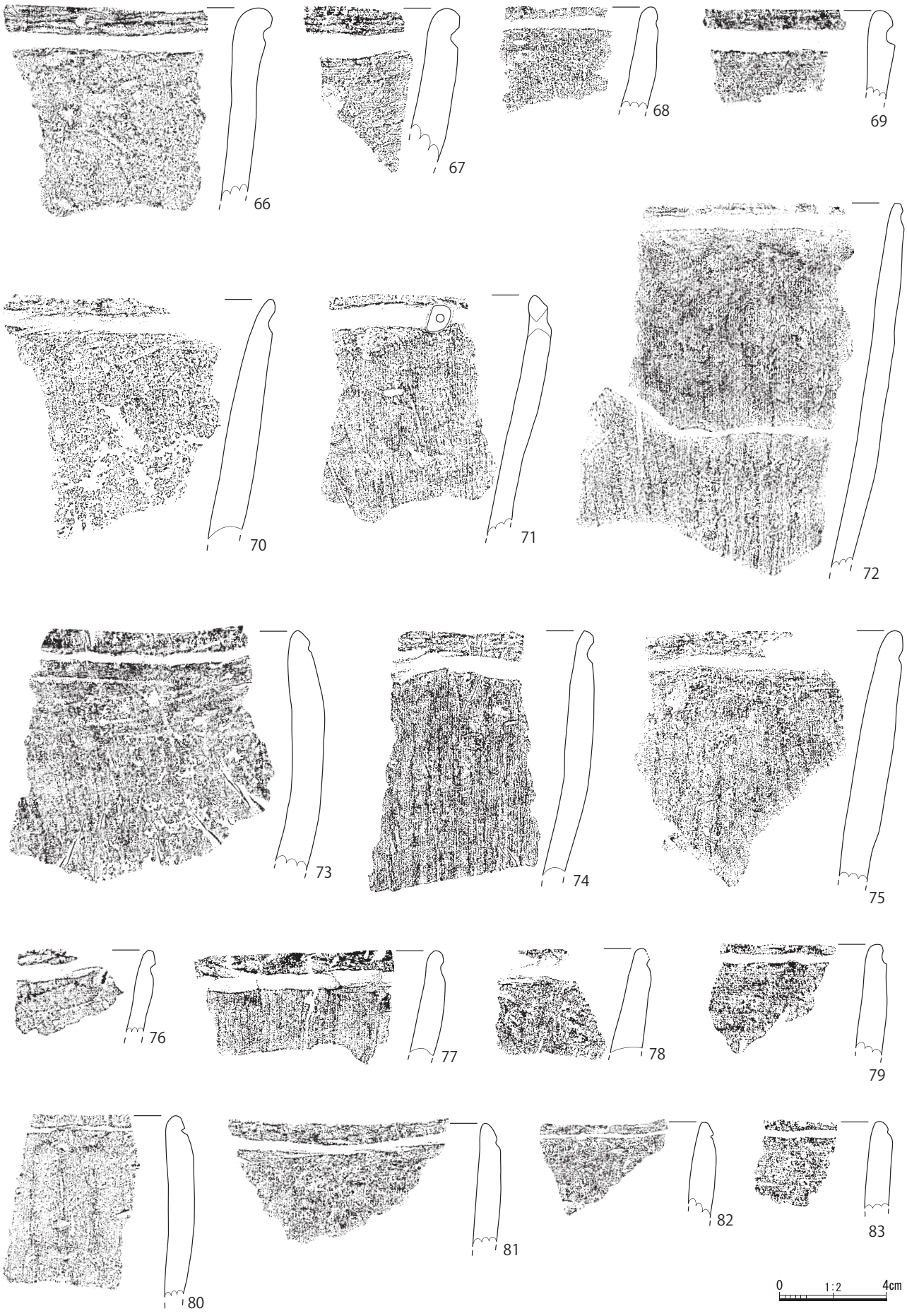

第 176 図　５次 SI－002 出土土器（４）



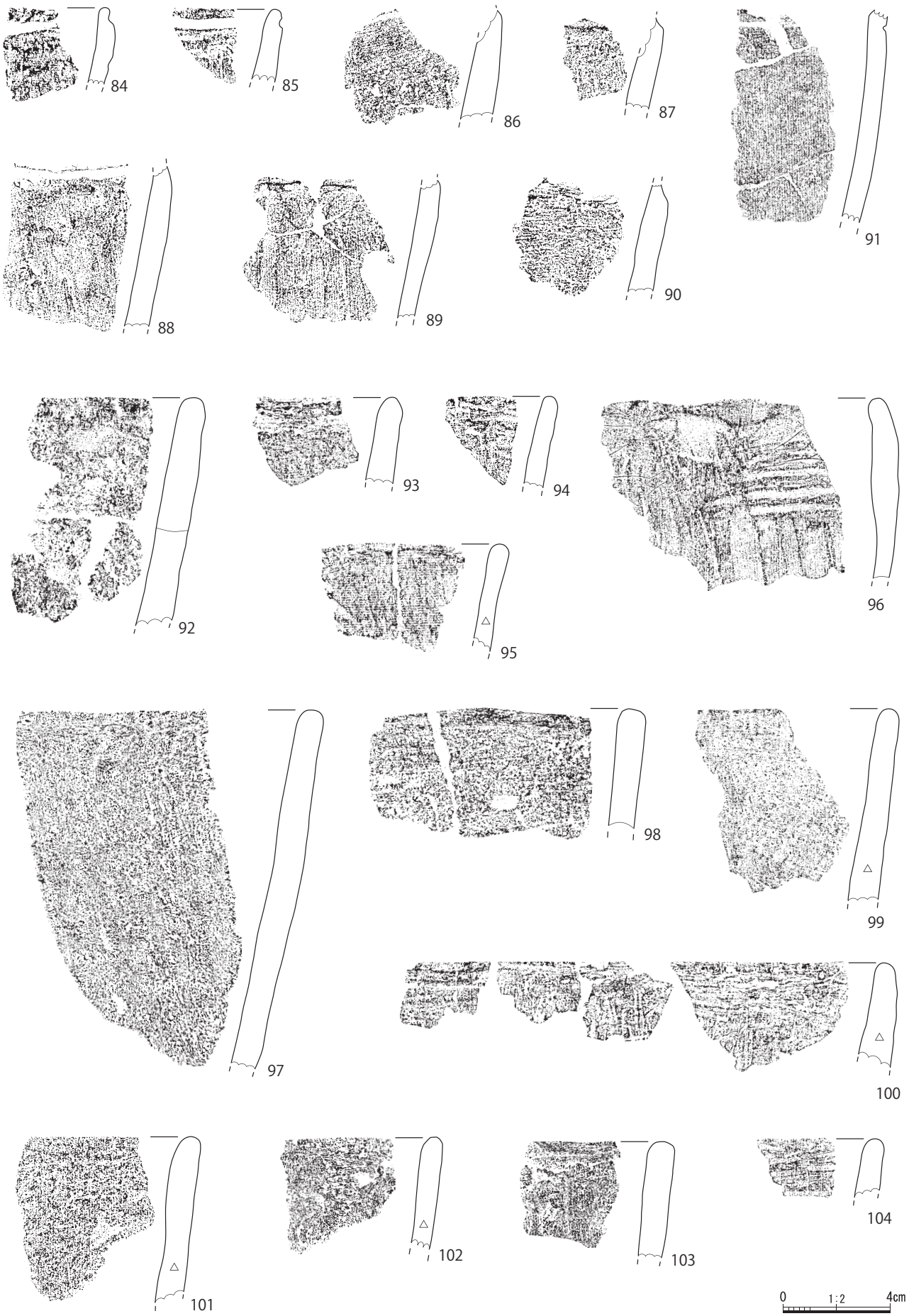

第 177 図　５次 SI－002 出土土器（５）



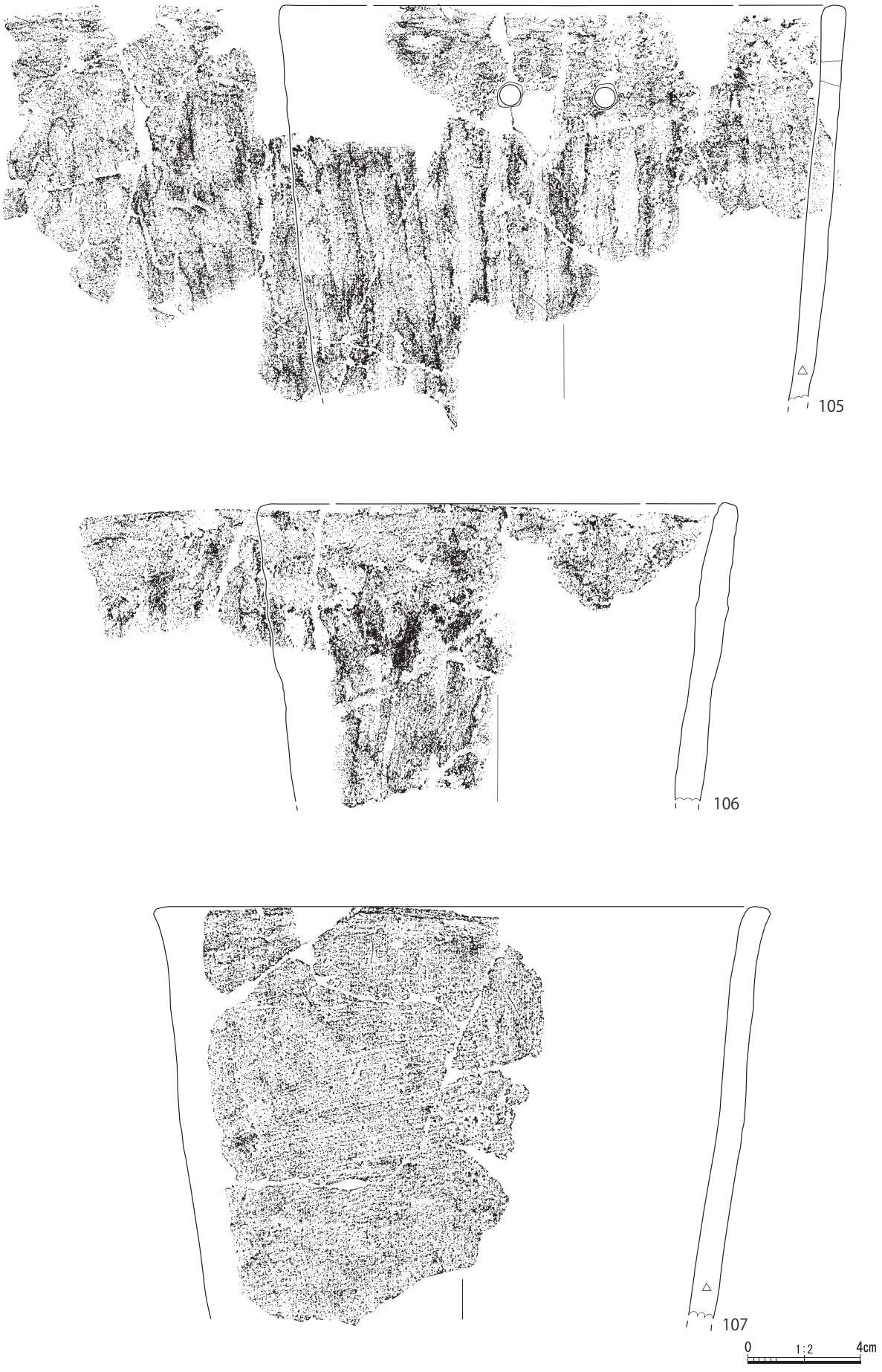
第 178 図　5 次 SI－002 出土土器（6）



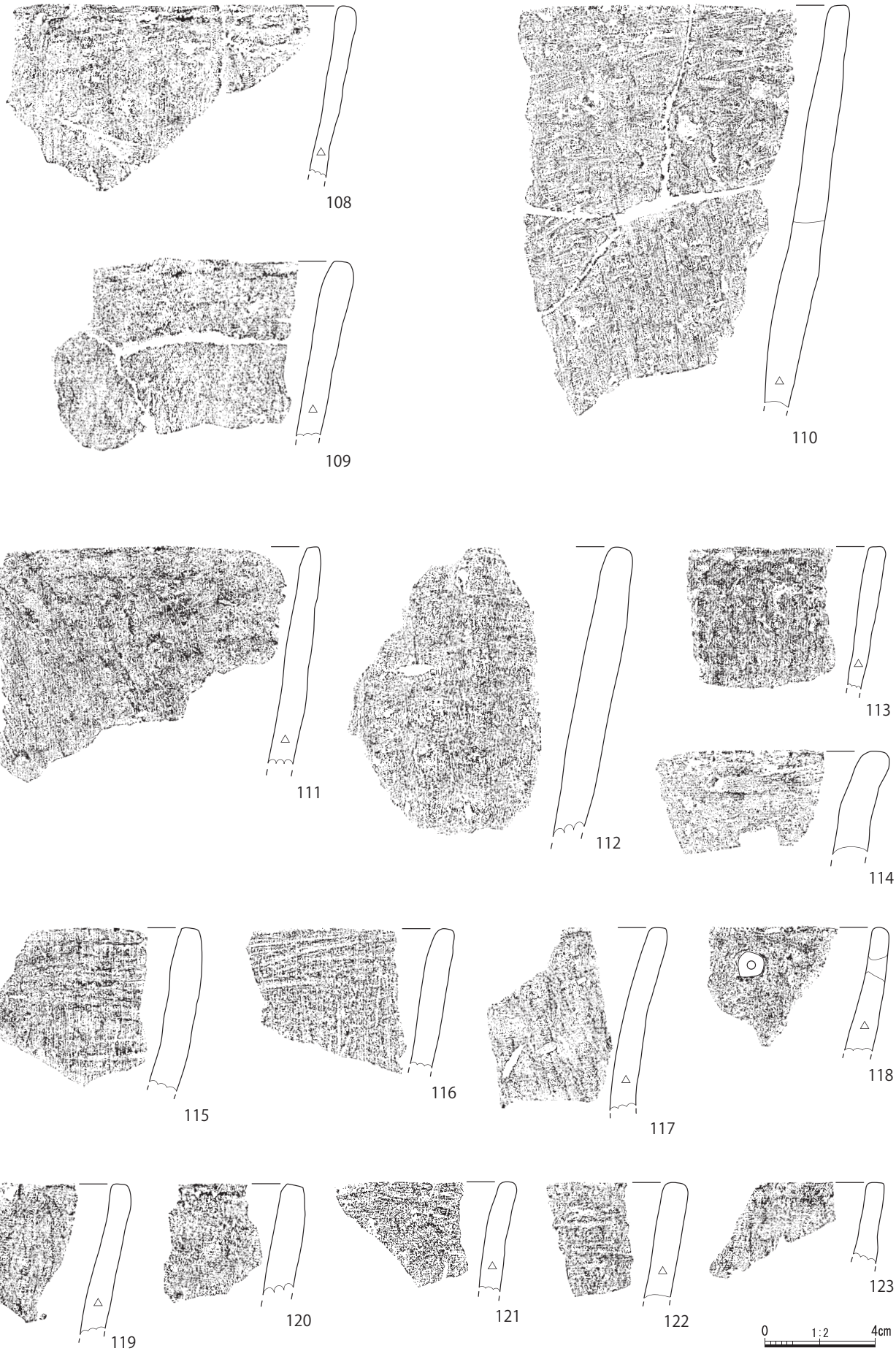

第 179 図　５次 SI－002 出土土器（７）



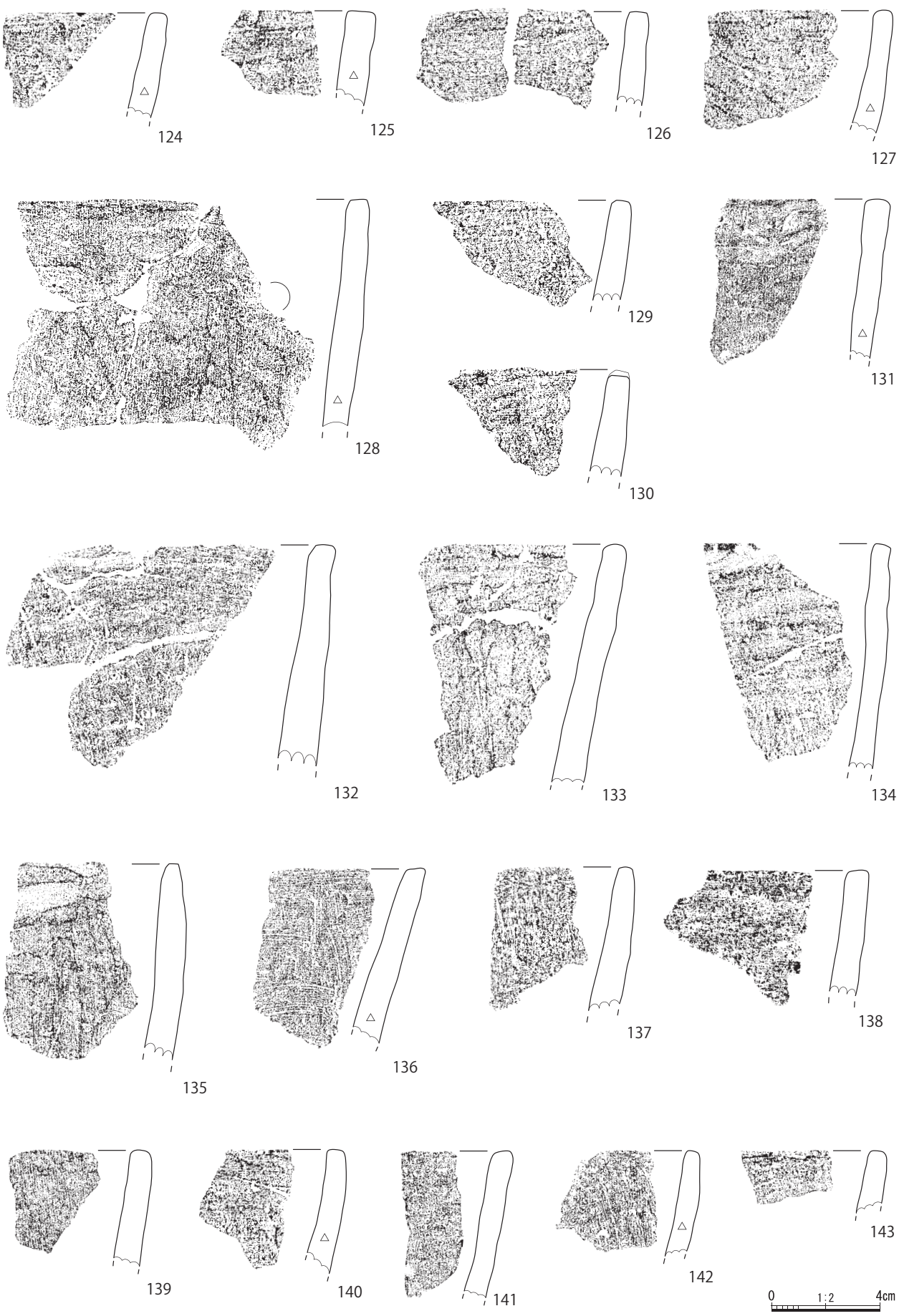

第 180 図　５次 SI－002 出土土器（８）



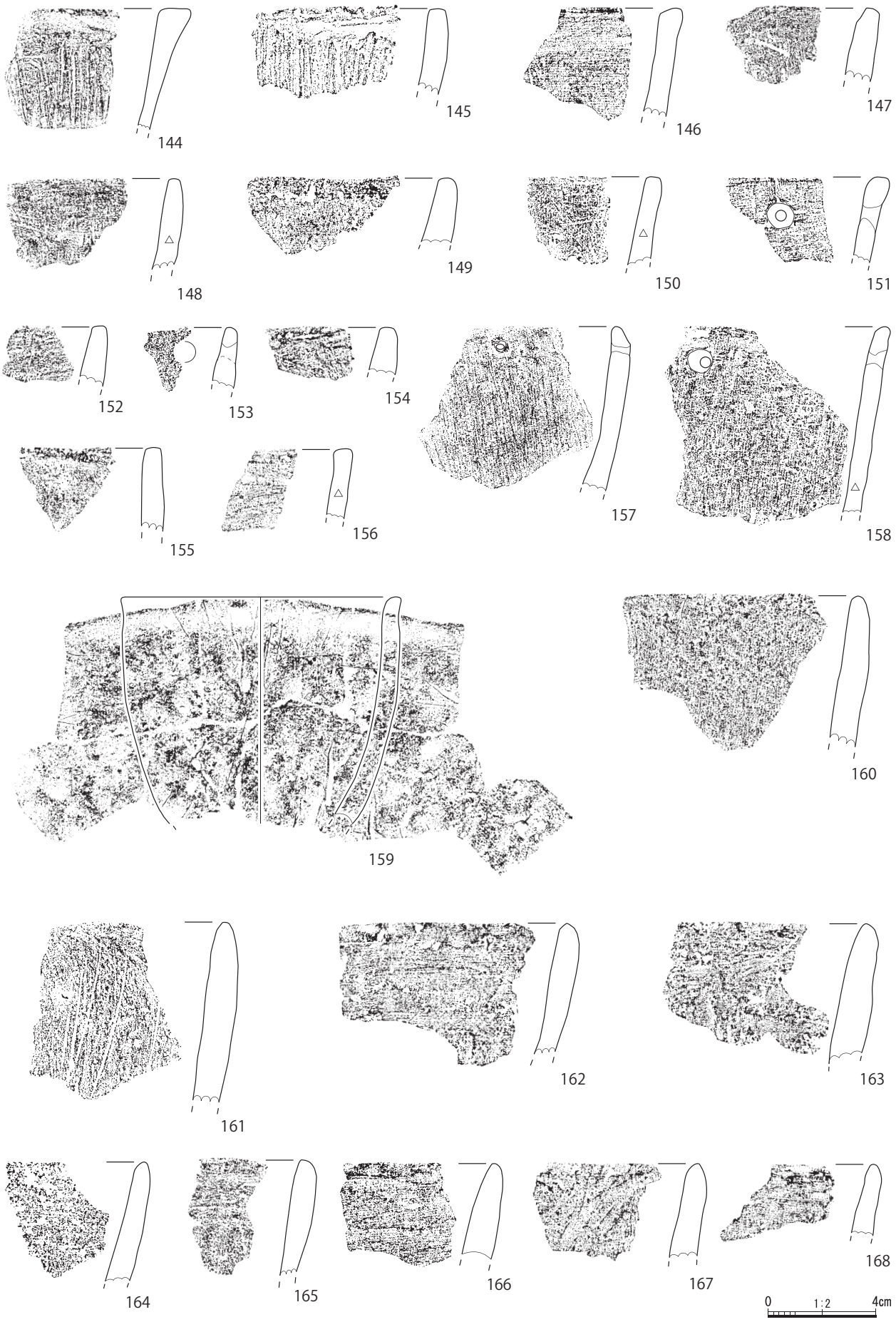

第 181 図　５次 SI－002 出土土器（９）



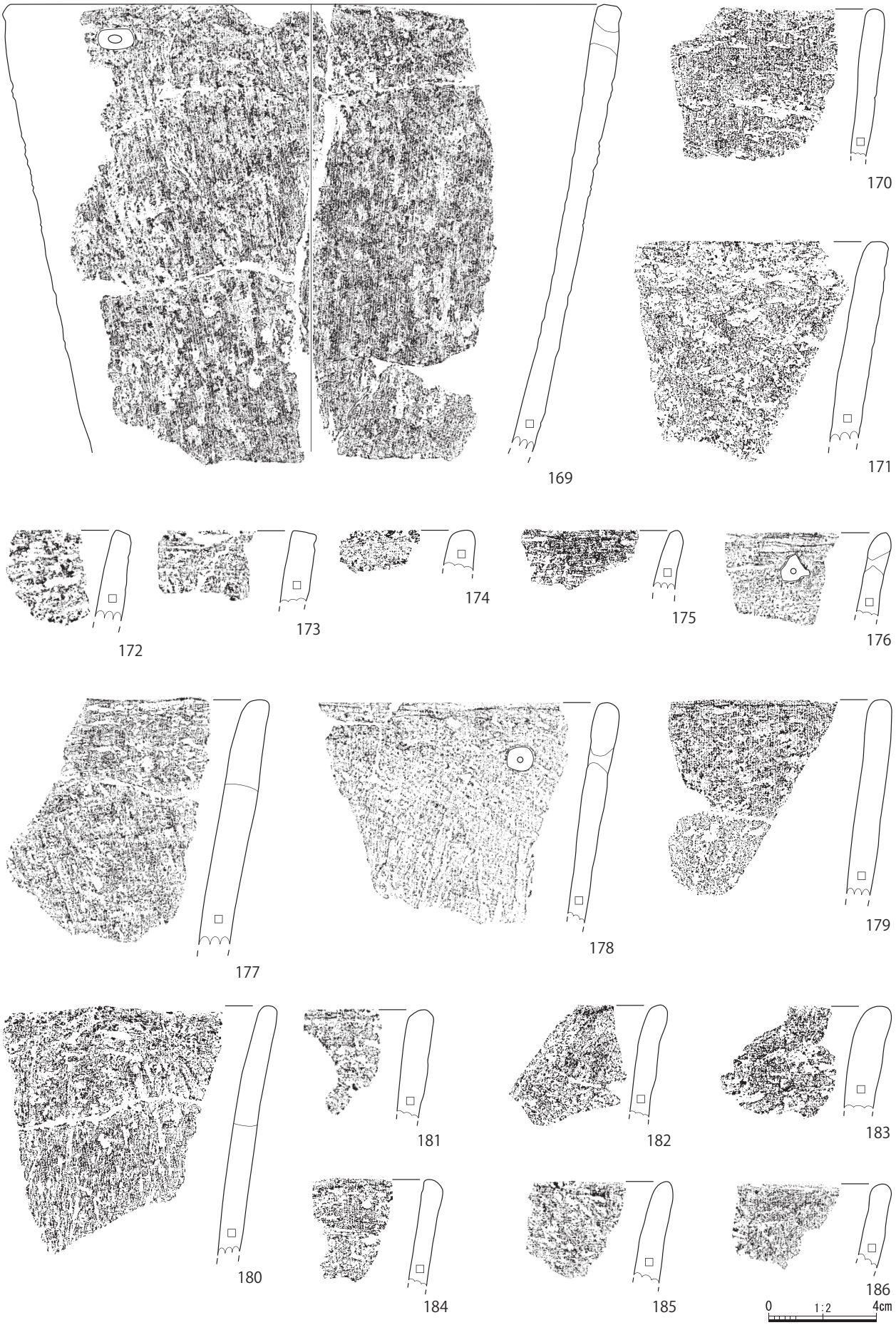

第 182 図　５次 SI－002 出土土器（10）



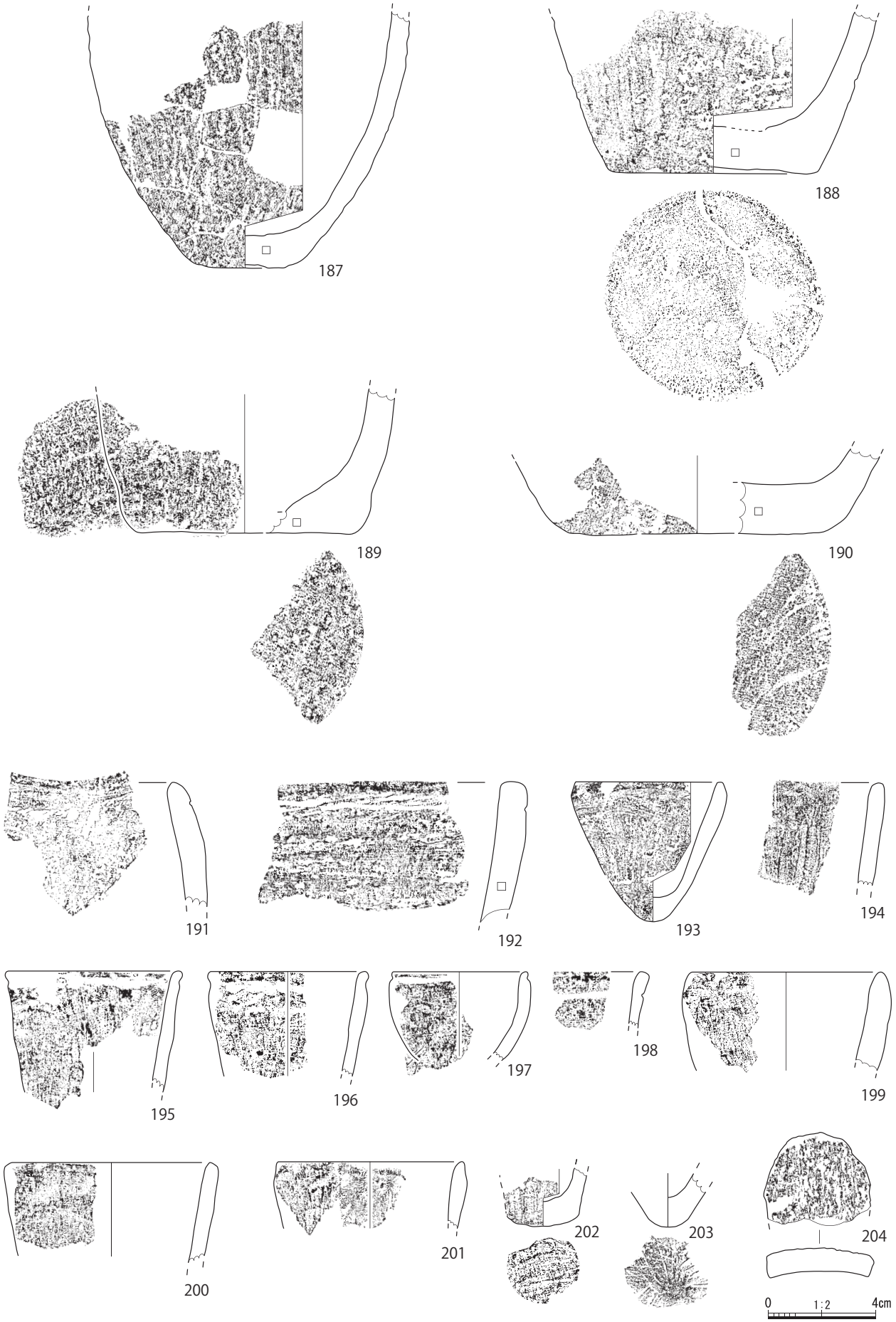

第 183 図　５次 SI－002 出土土器（１１）



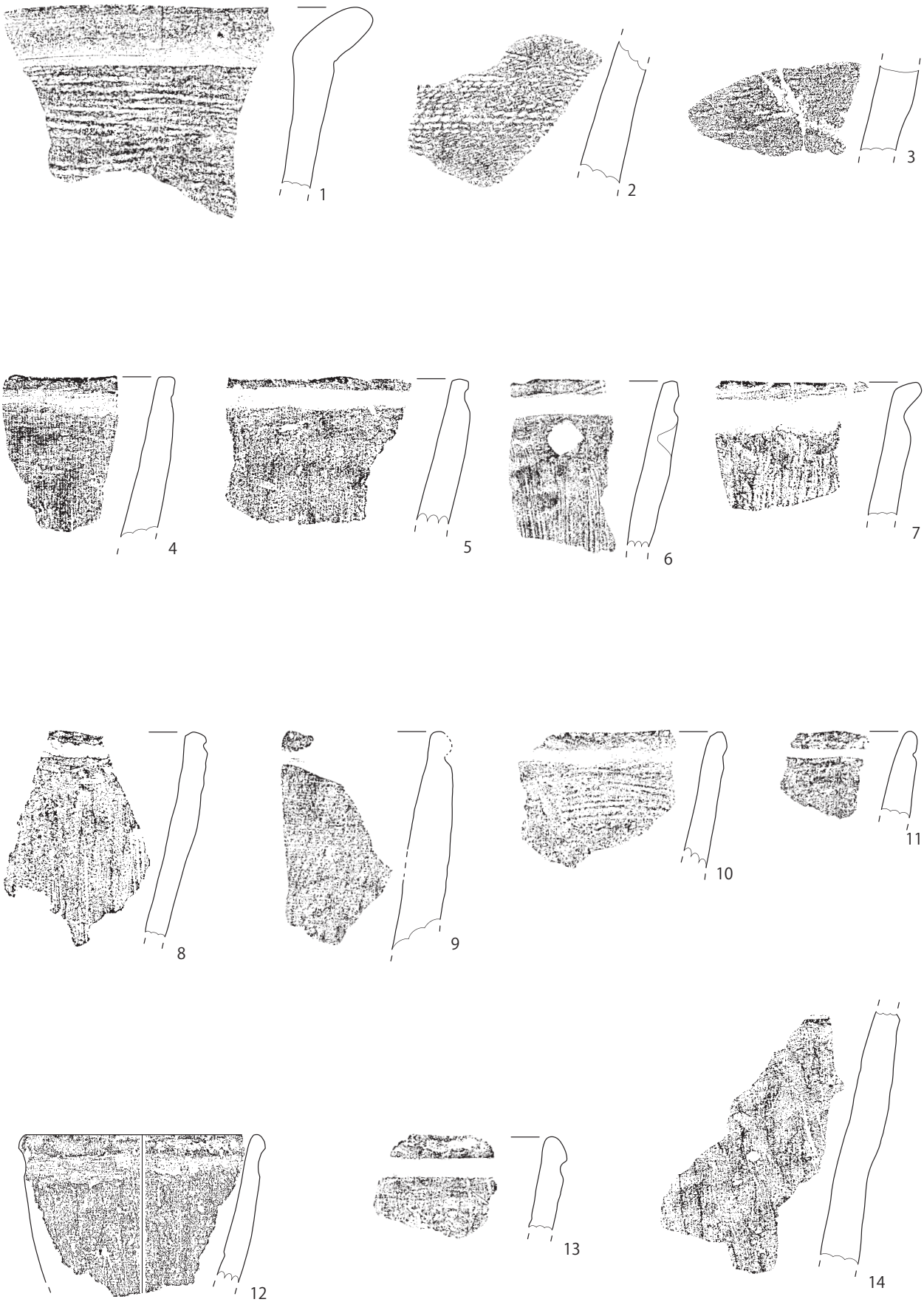

第 184 図　５次 SI－002 出土土器（１2）



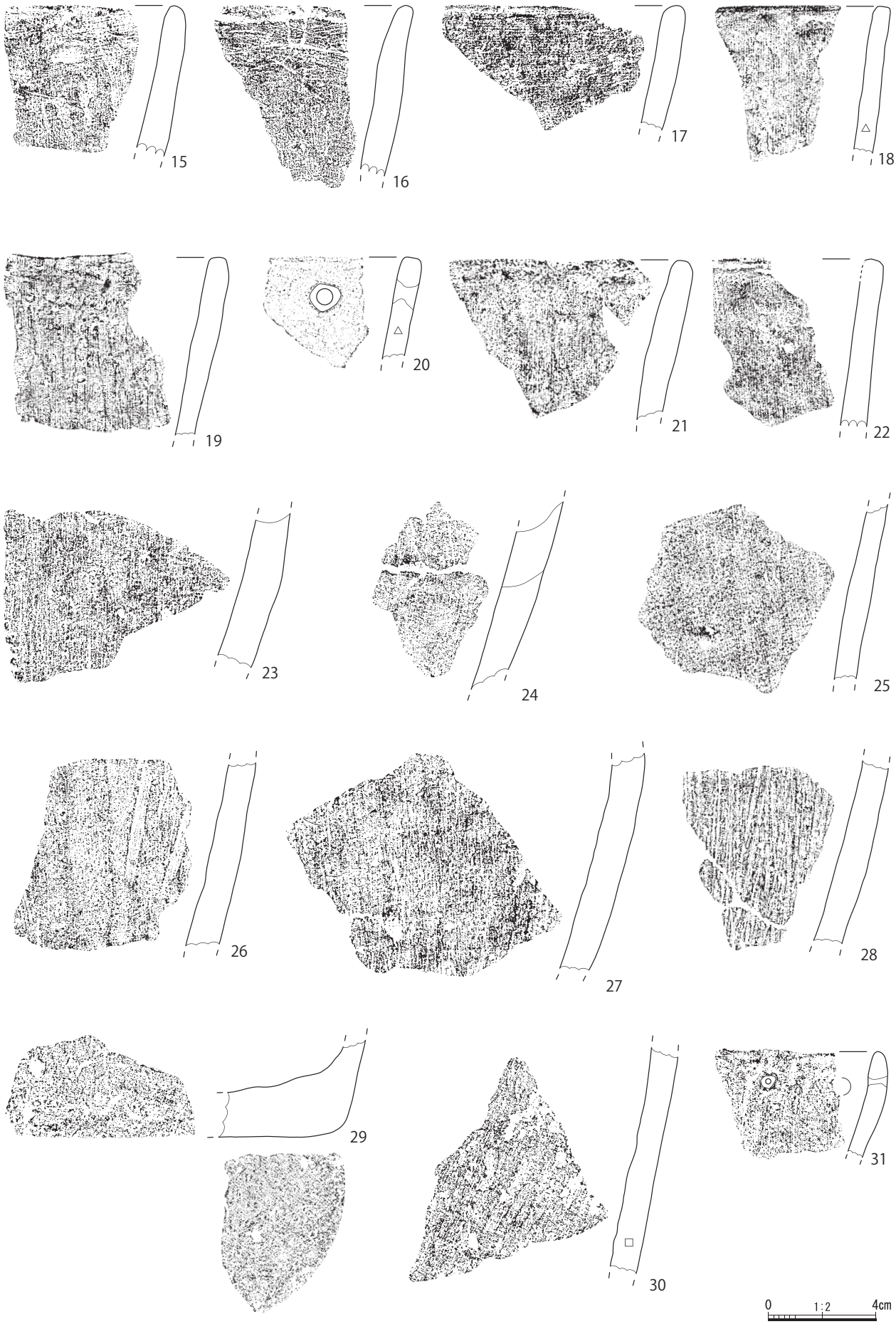

第 185 図　５次 SI－002 出土土器（13）




第 186 図　５次 SI－002 出土土器（１４）

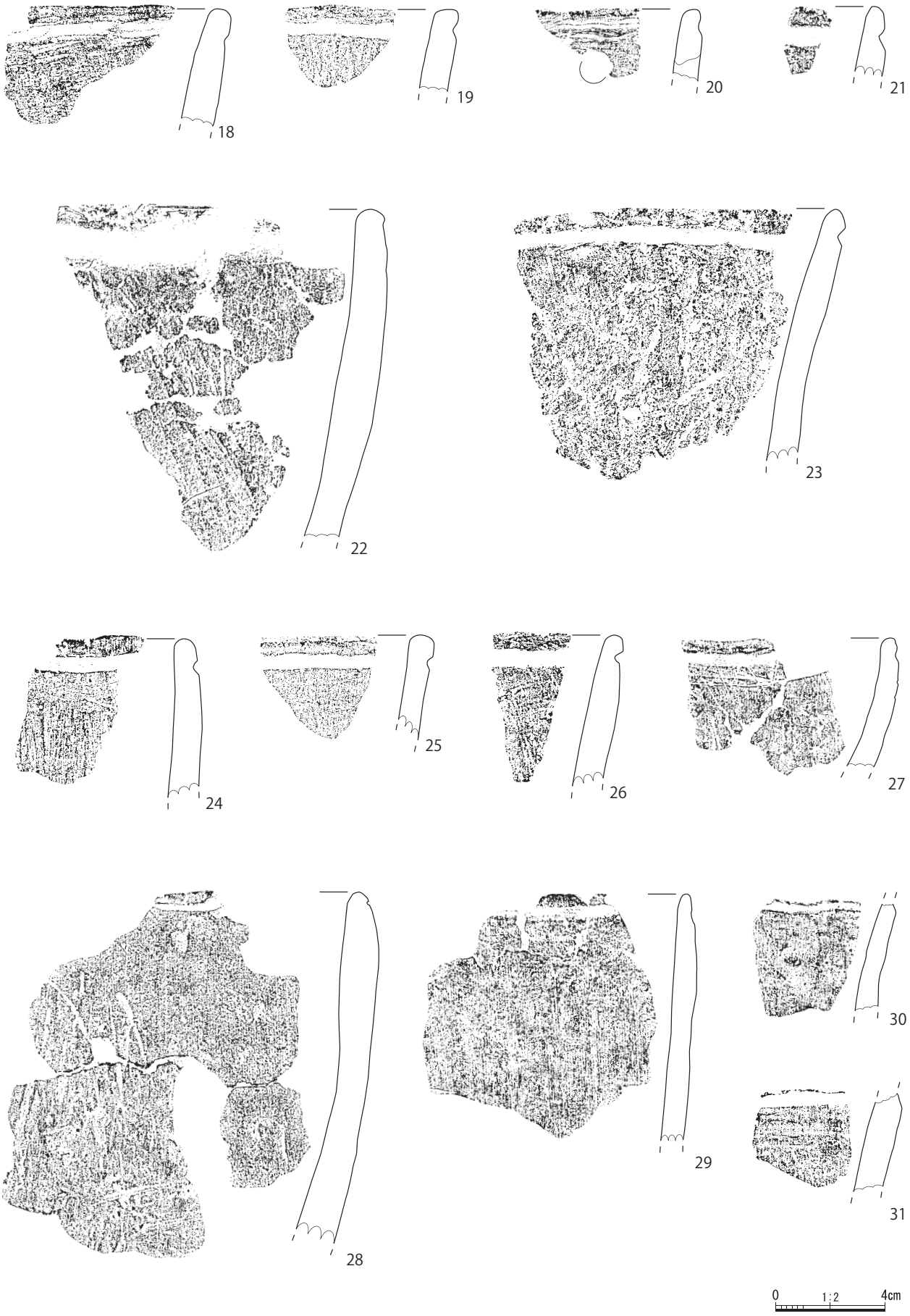



第 187 図　５次 SI－003 出土土器（１）

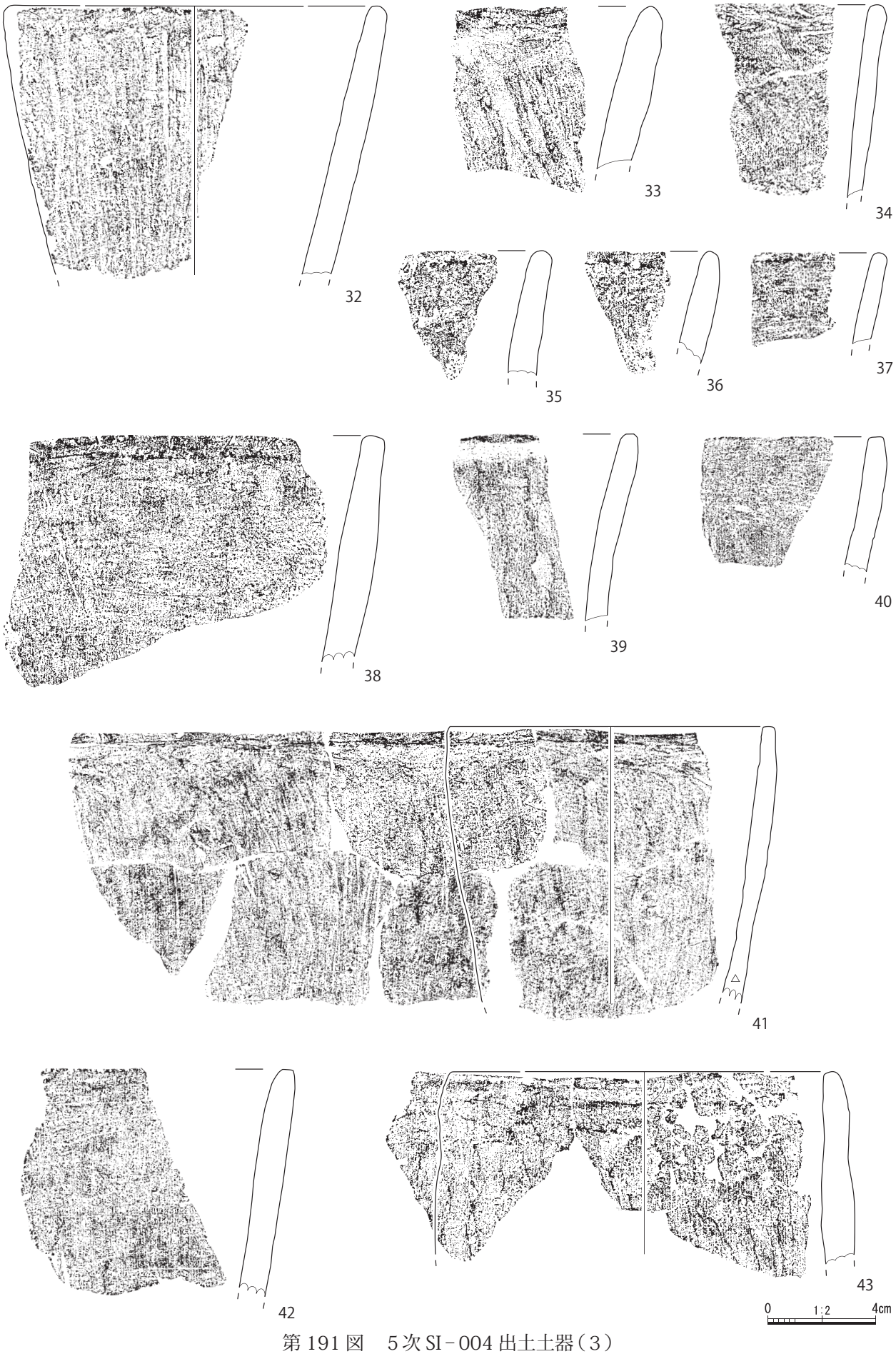



第 188 図　５次 SI－003 出土土器（２）

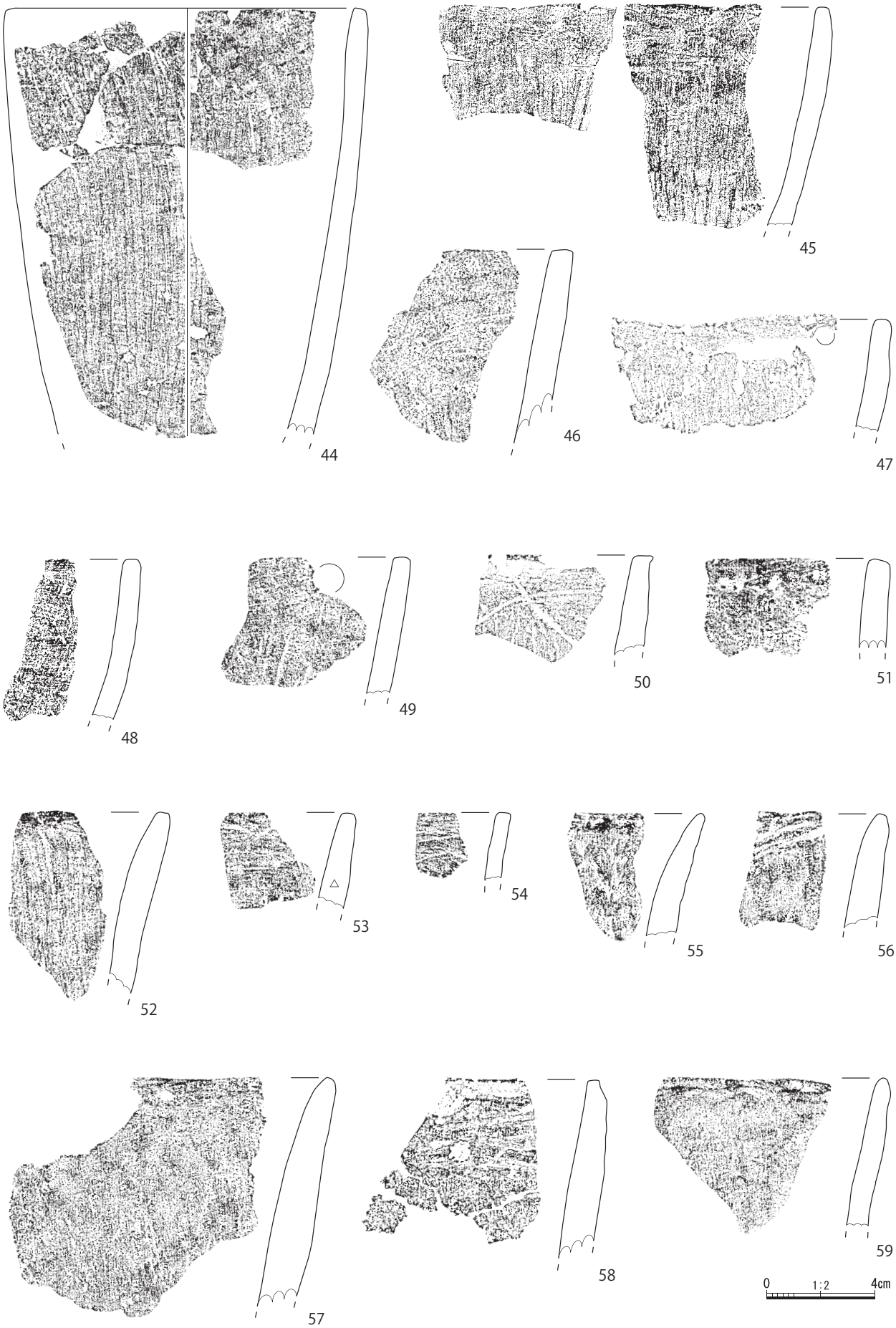
第 189 図　５次 SI－004 出土土器（１）




第 190 図　５次 SI－004 出土土器（２）

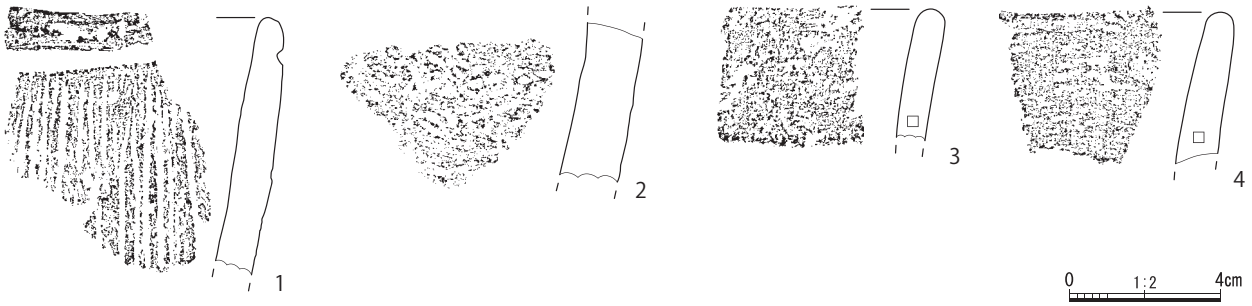



第 191 図　５次 SI－004 出土土器（３）



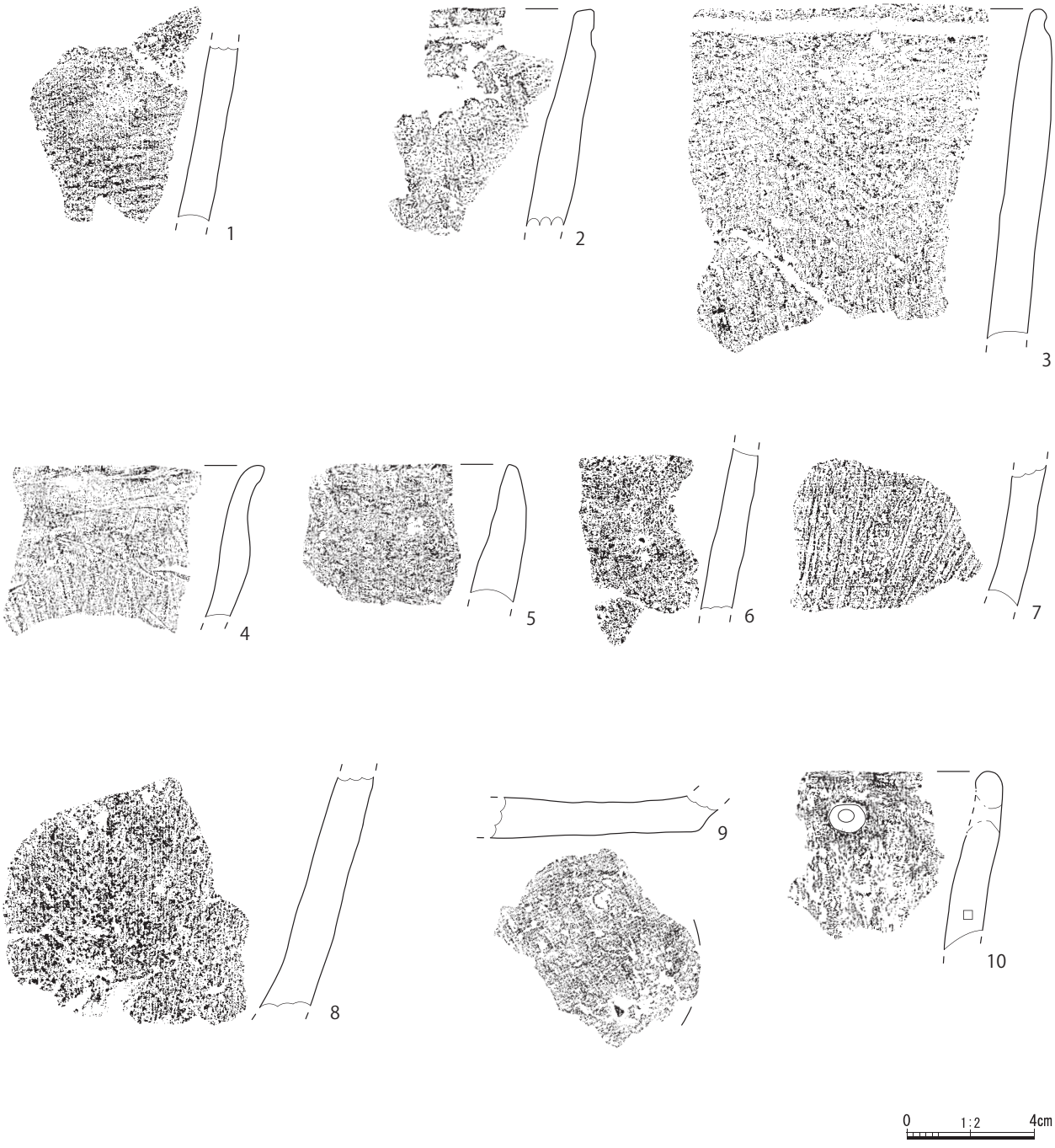

第 192 図　５次 SI－004 出土土器（４）

第 193 図　５次 SI－004 出土土器（５）

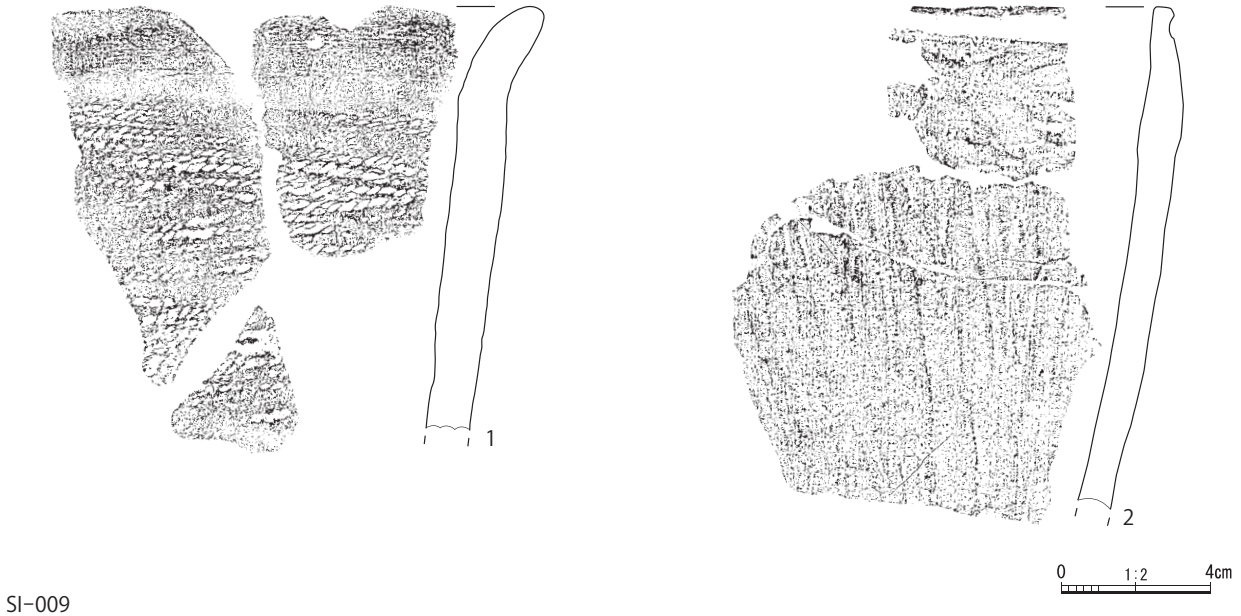



SI-006

SI-008

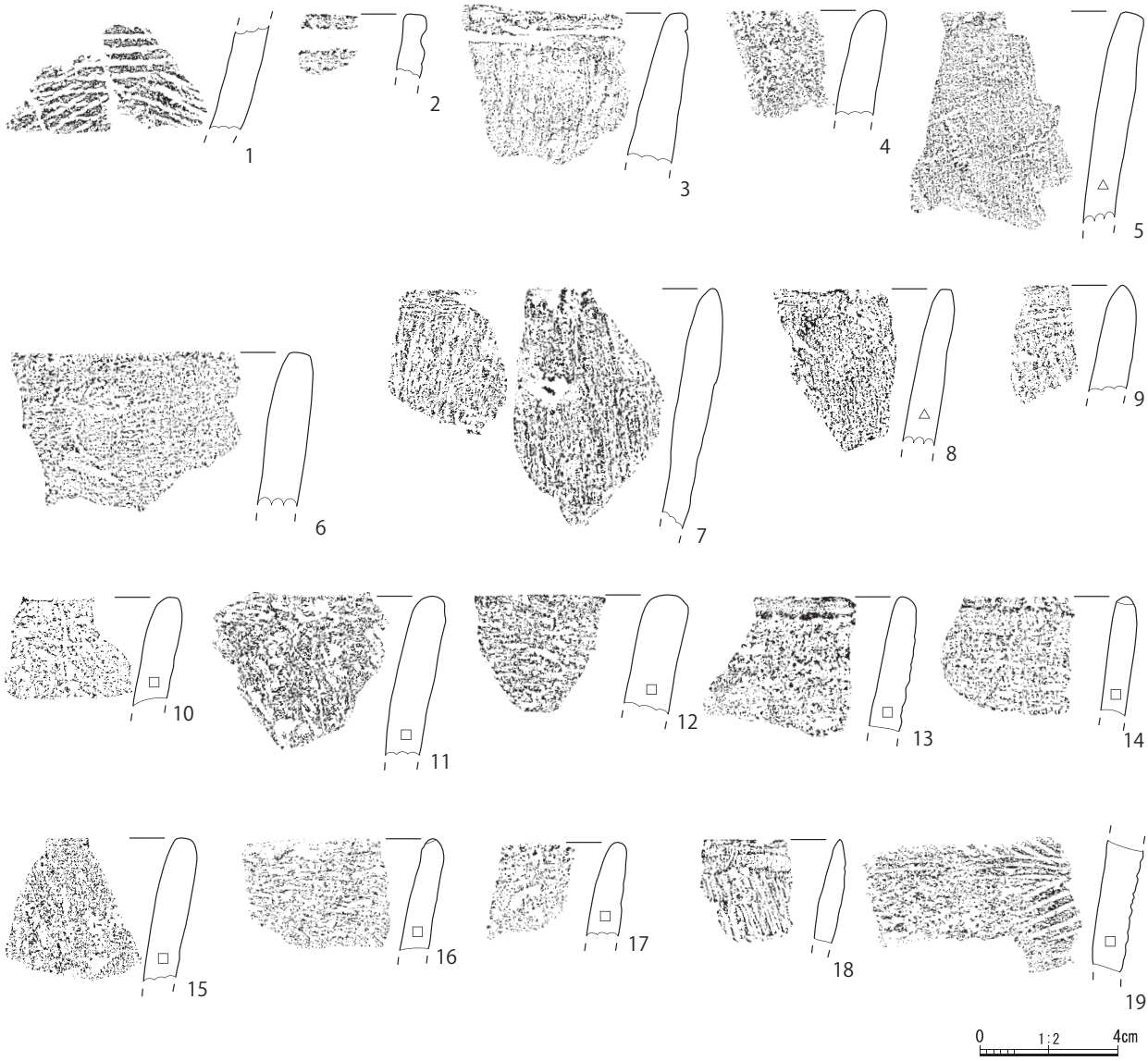



第 194 図　5 次 SI－006・008 出土土器

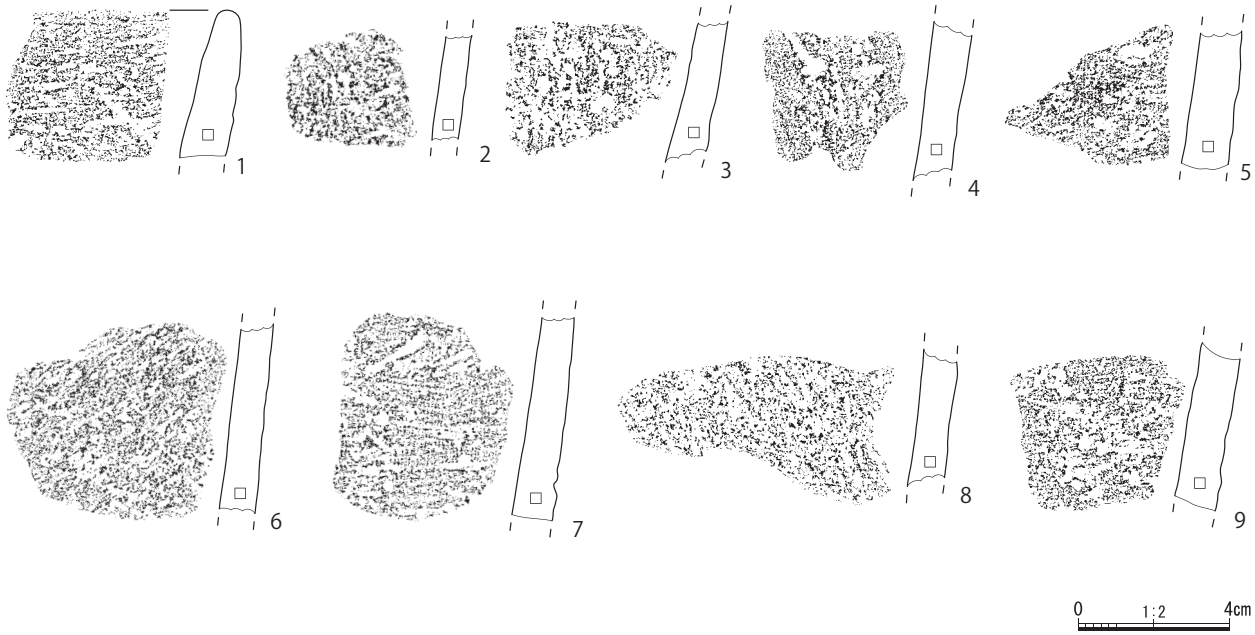



SI-009

SI-010

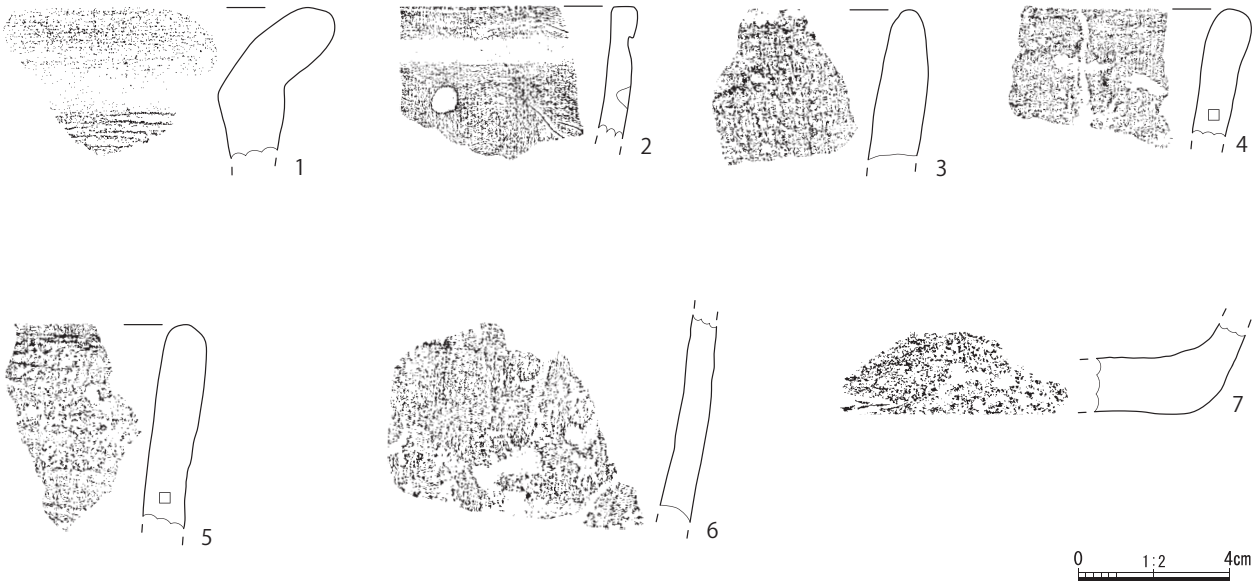



第 195 図　5 次 SI－009・010 出土土器

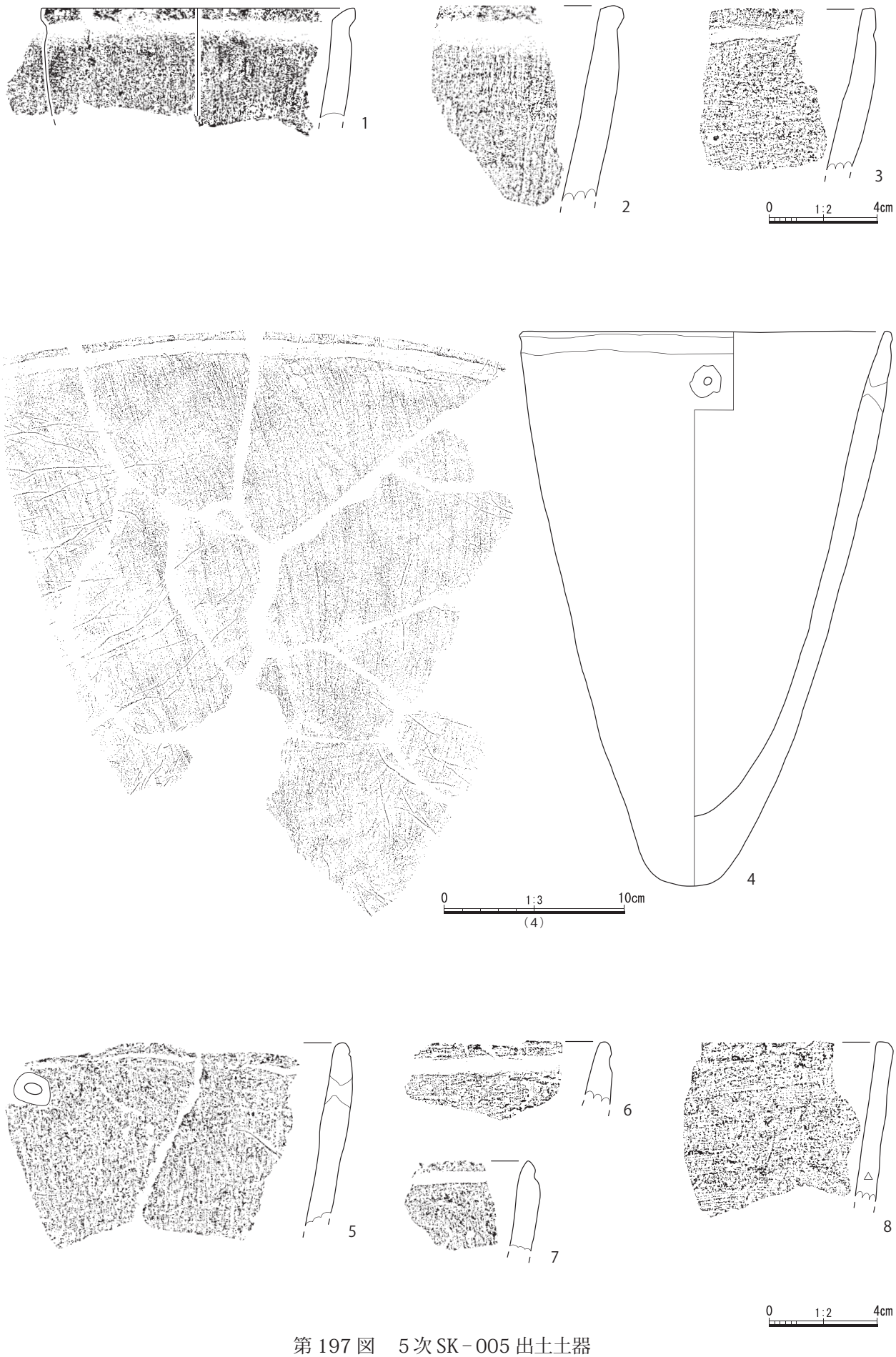



SI-011

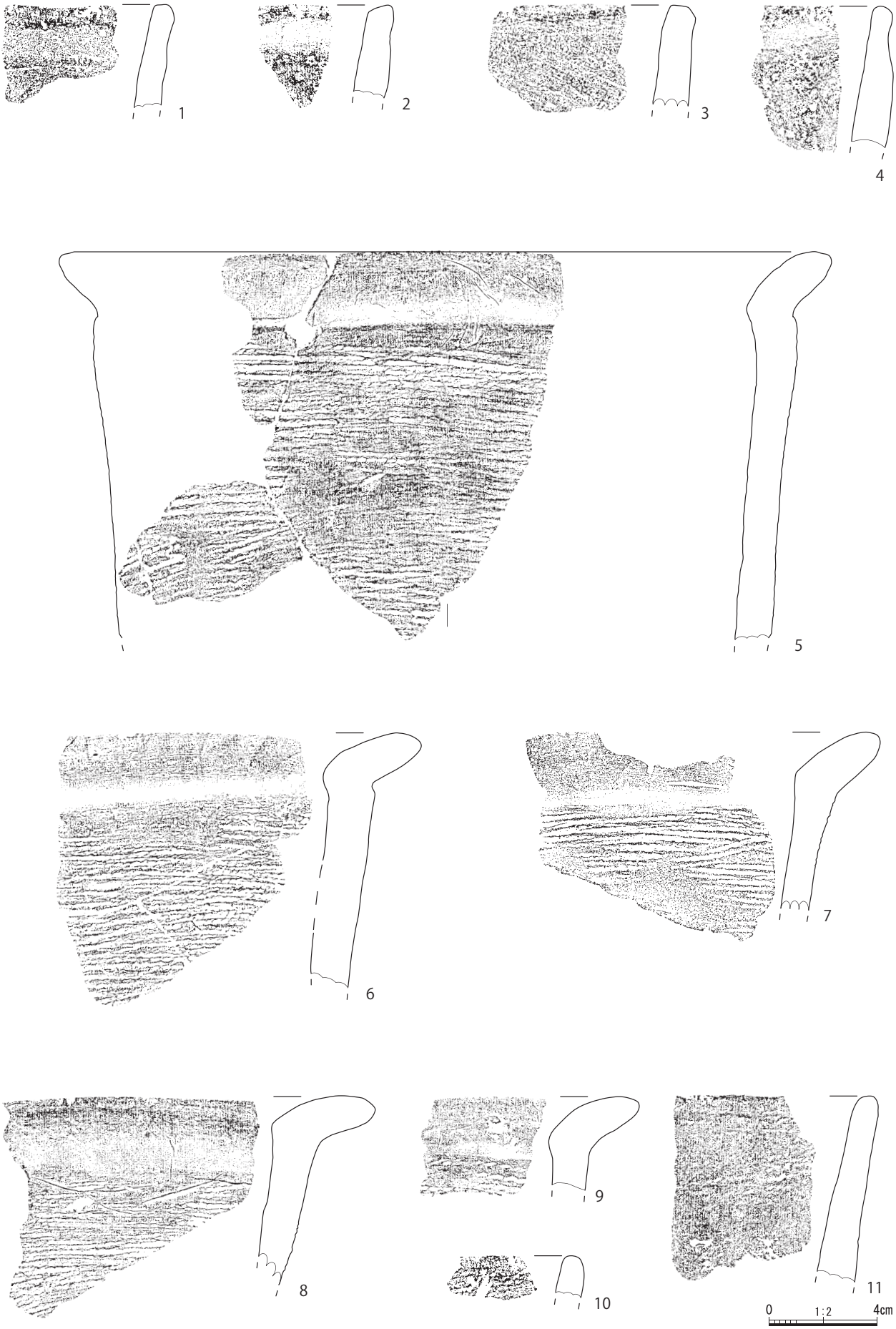
SI-012



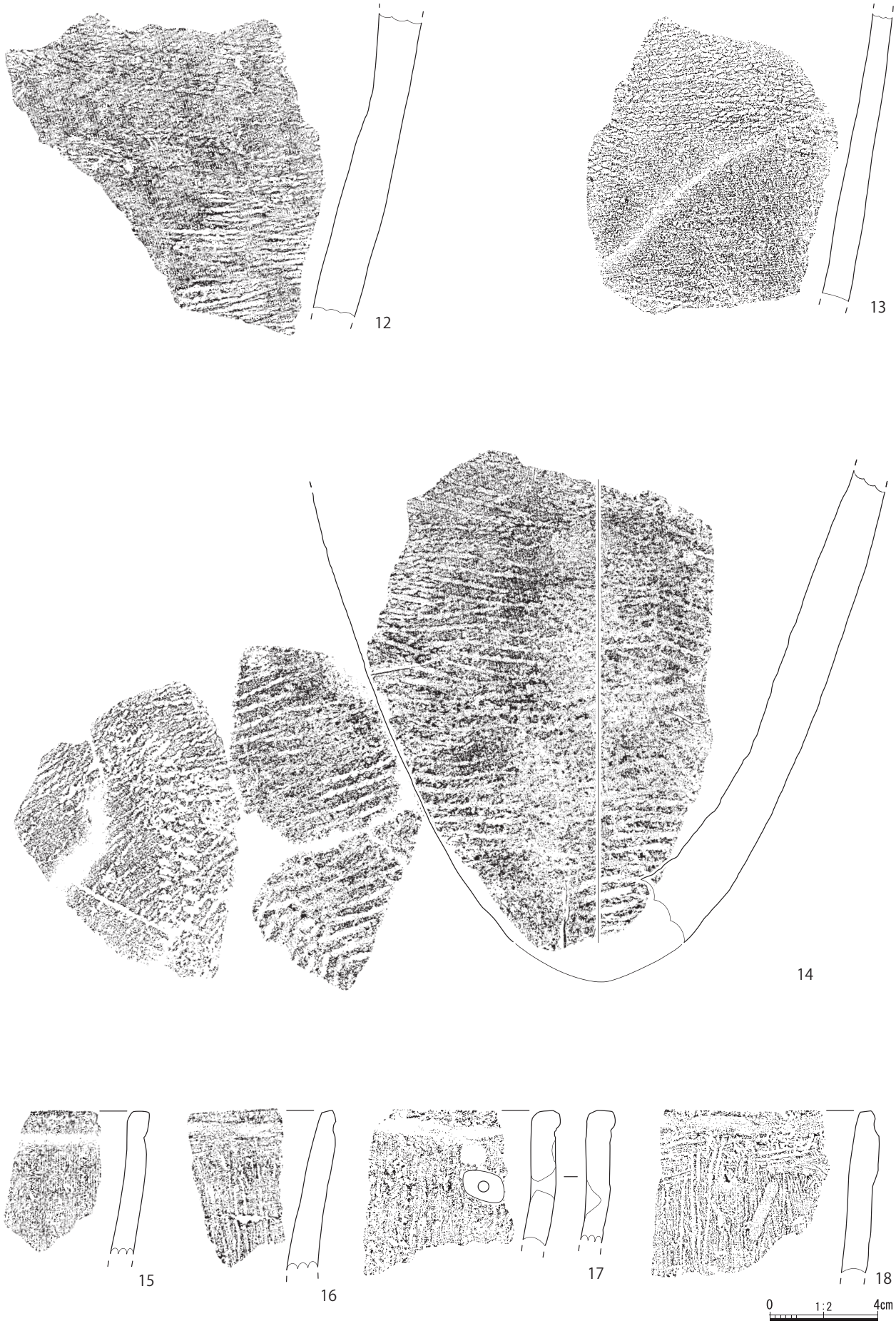

第 196 図　５次 SI－011・012 出土土器



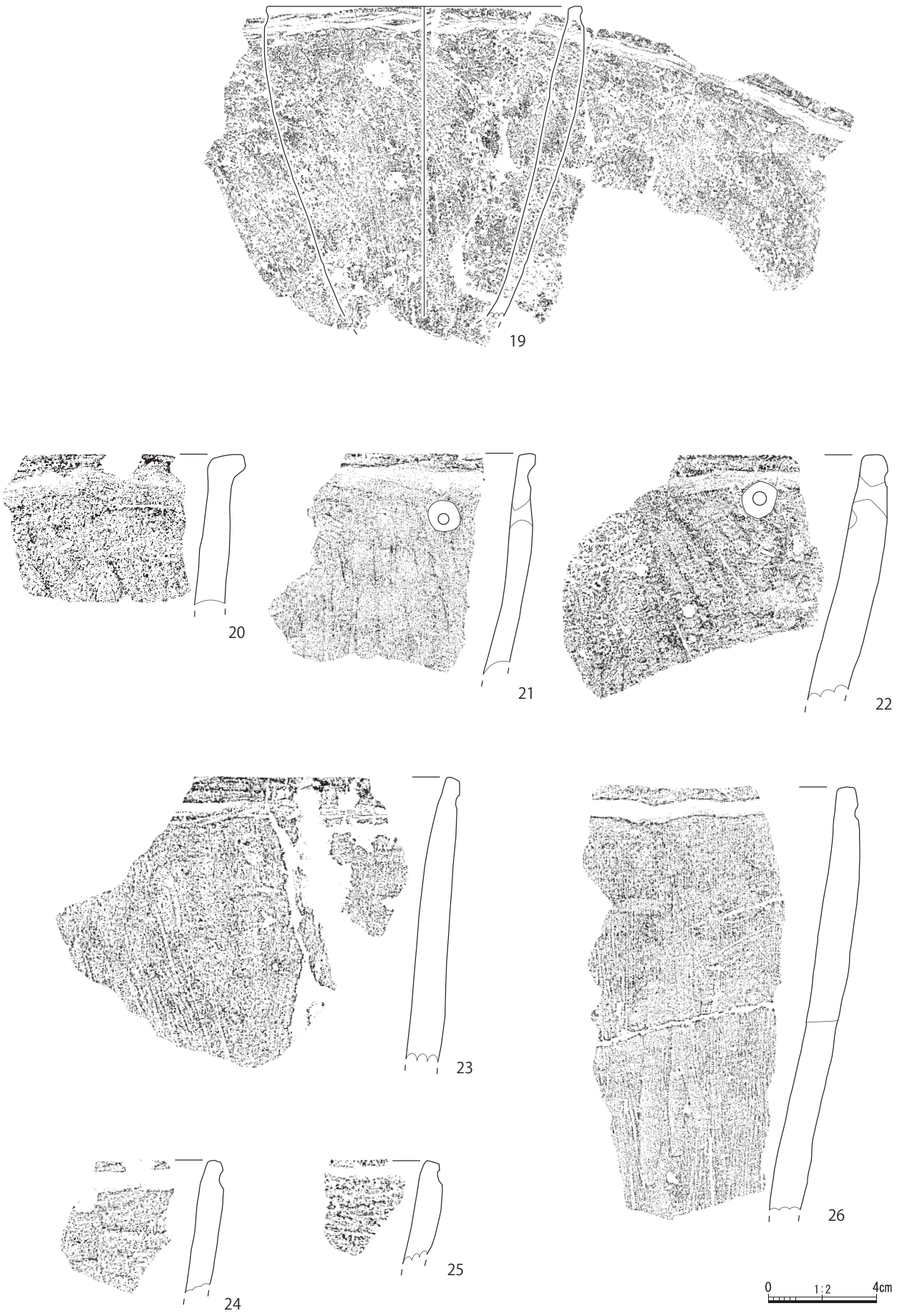

第 197 図　５次 SK－005 出土土器



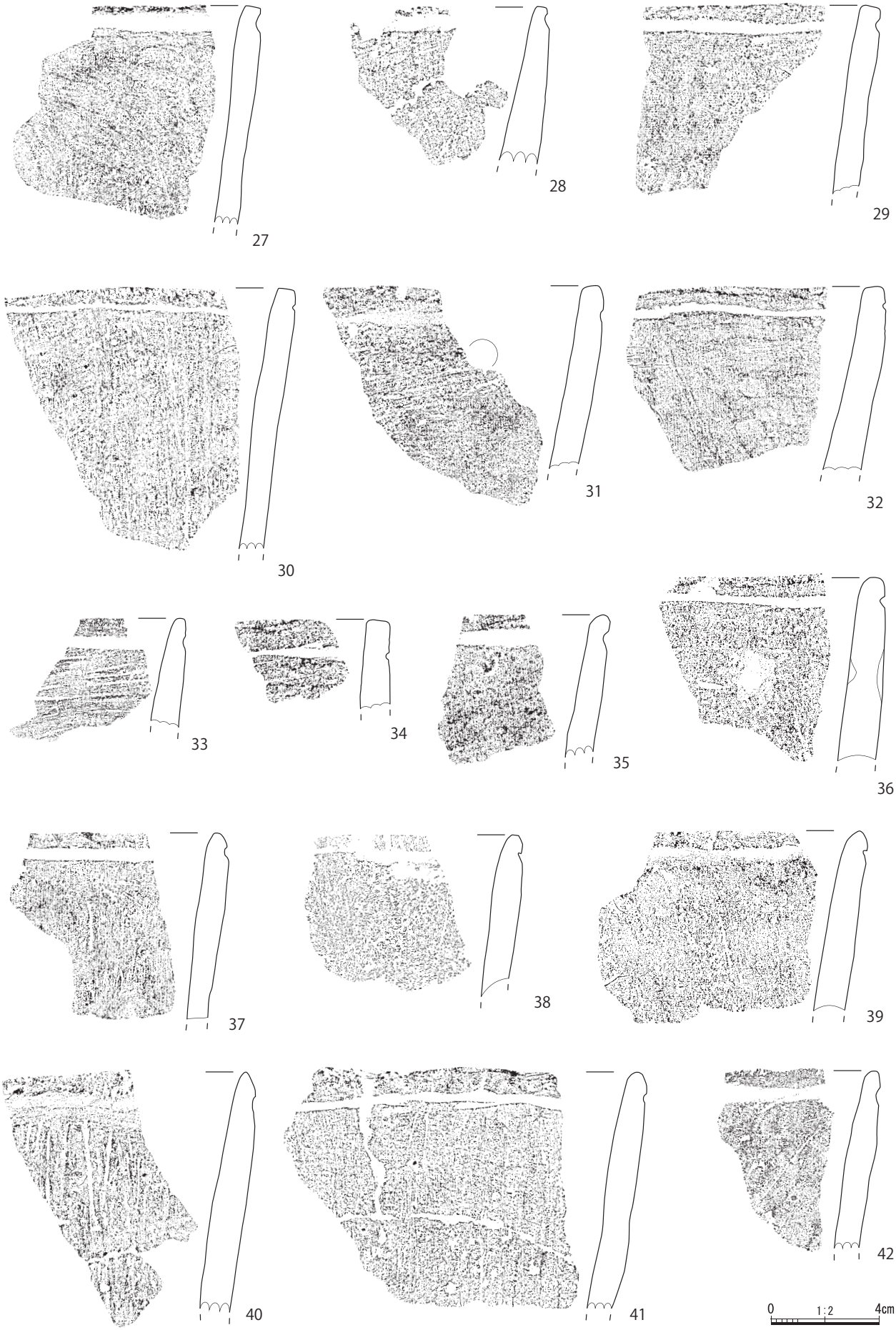

第 198 図　５次 SK－008 出土土器（１）



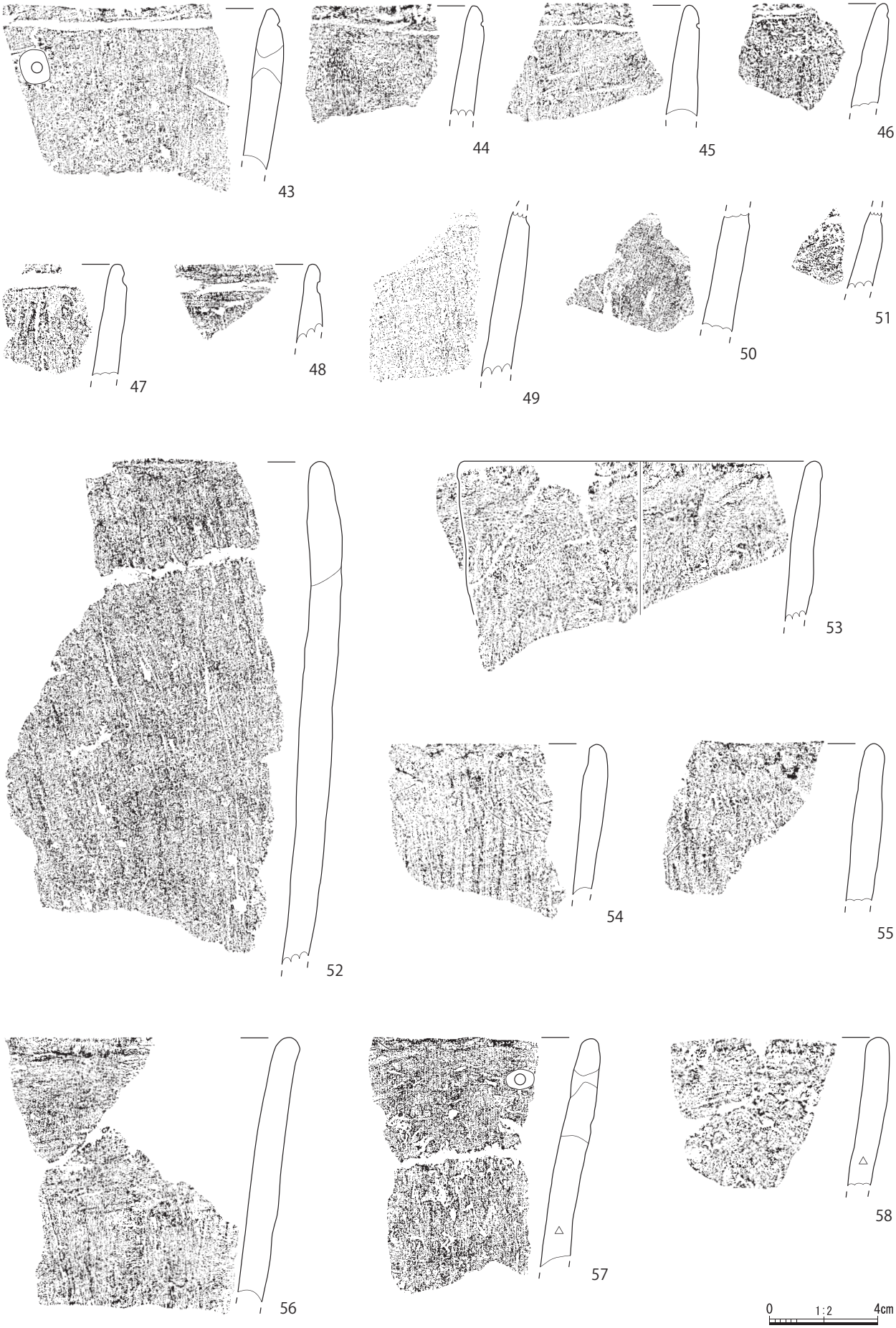

第 199 図　５次 SK－008 出土土器（２）



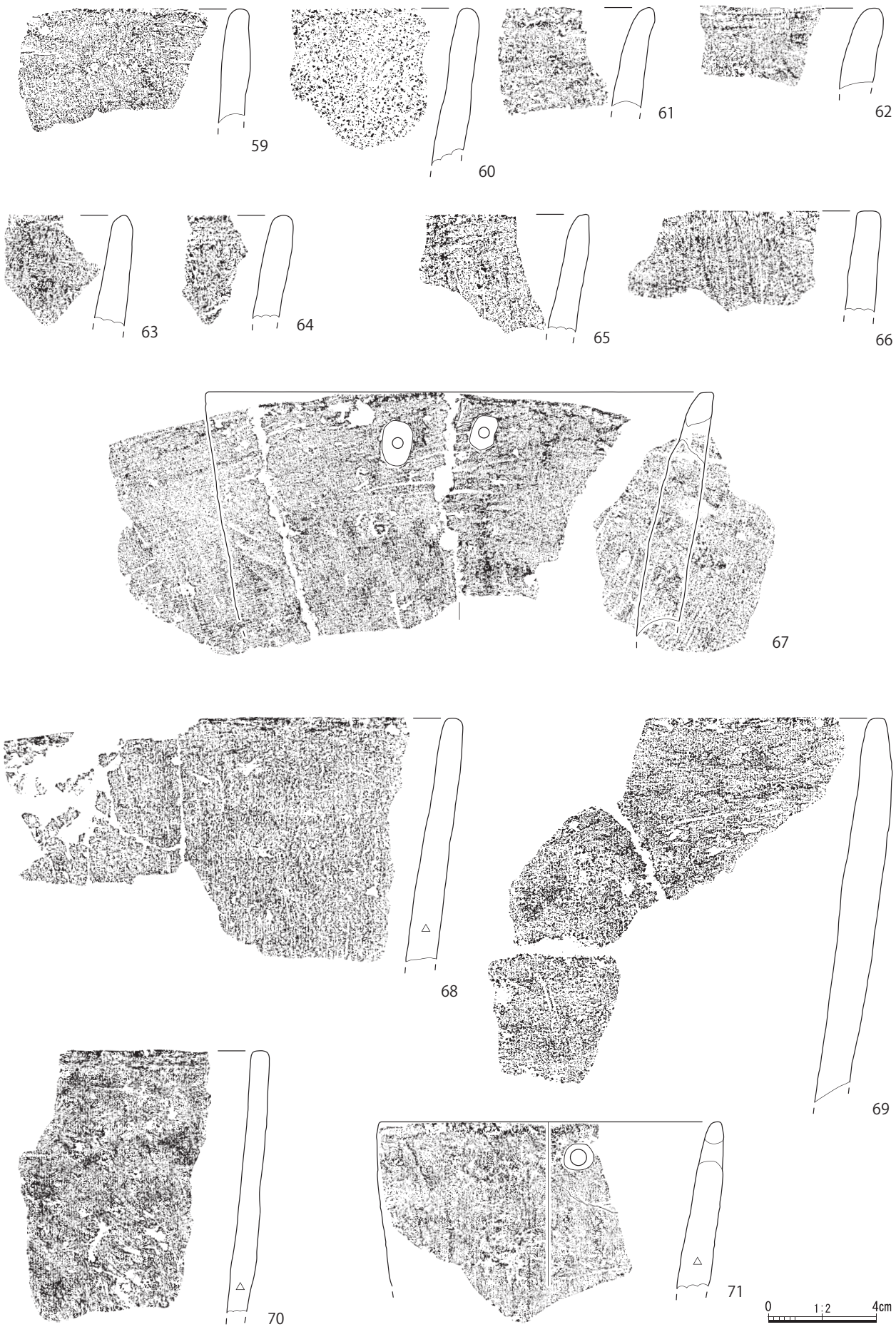

第 200 図　５次 SK－008 出土土器（３）



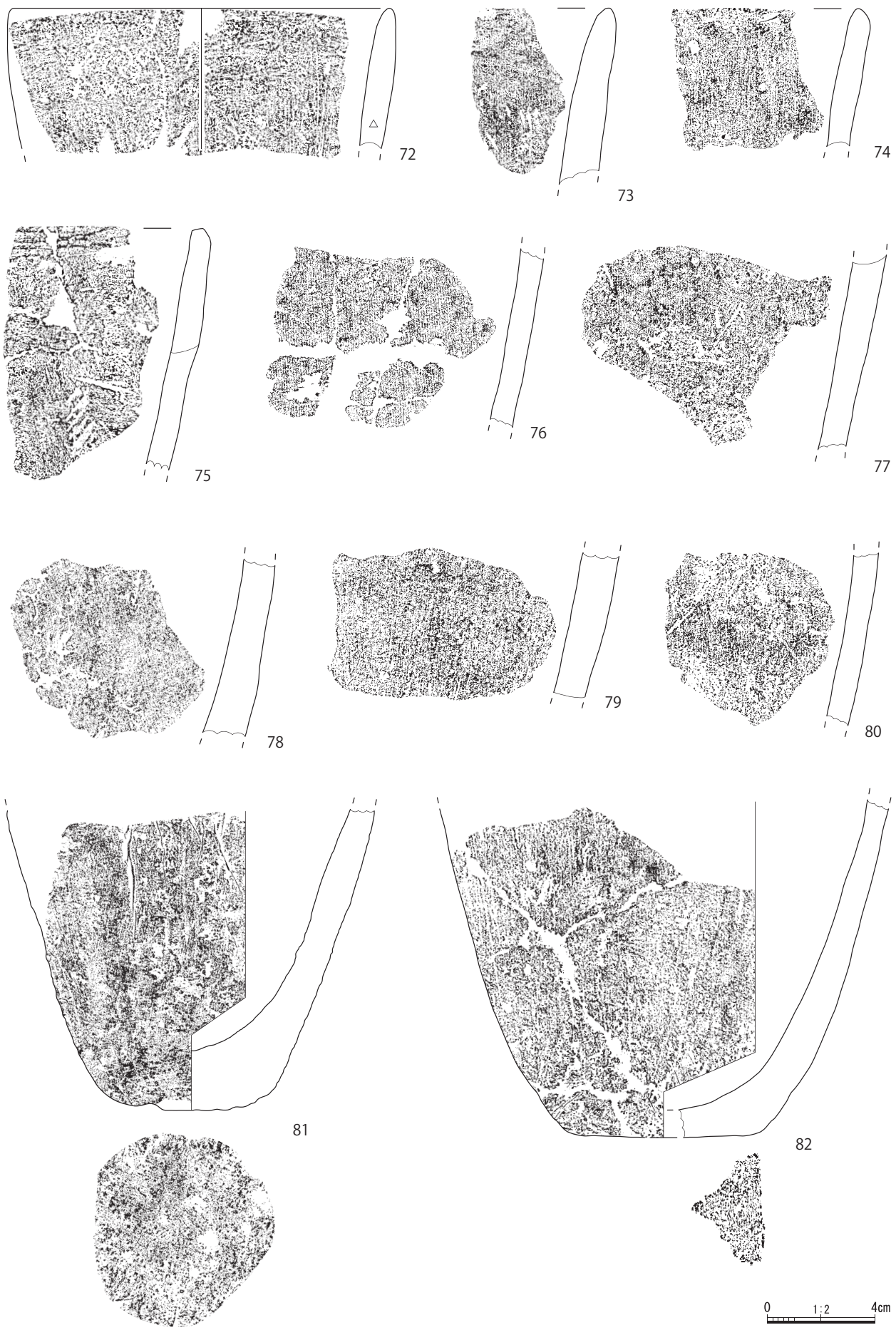

第 201 図　５次 SK－008 出土土器（４）



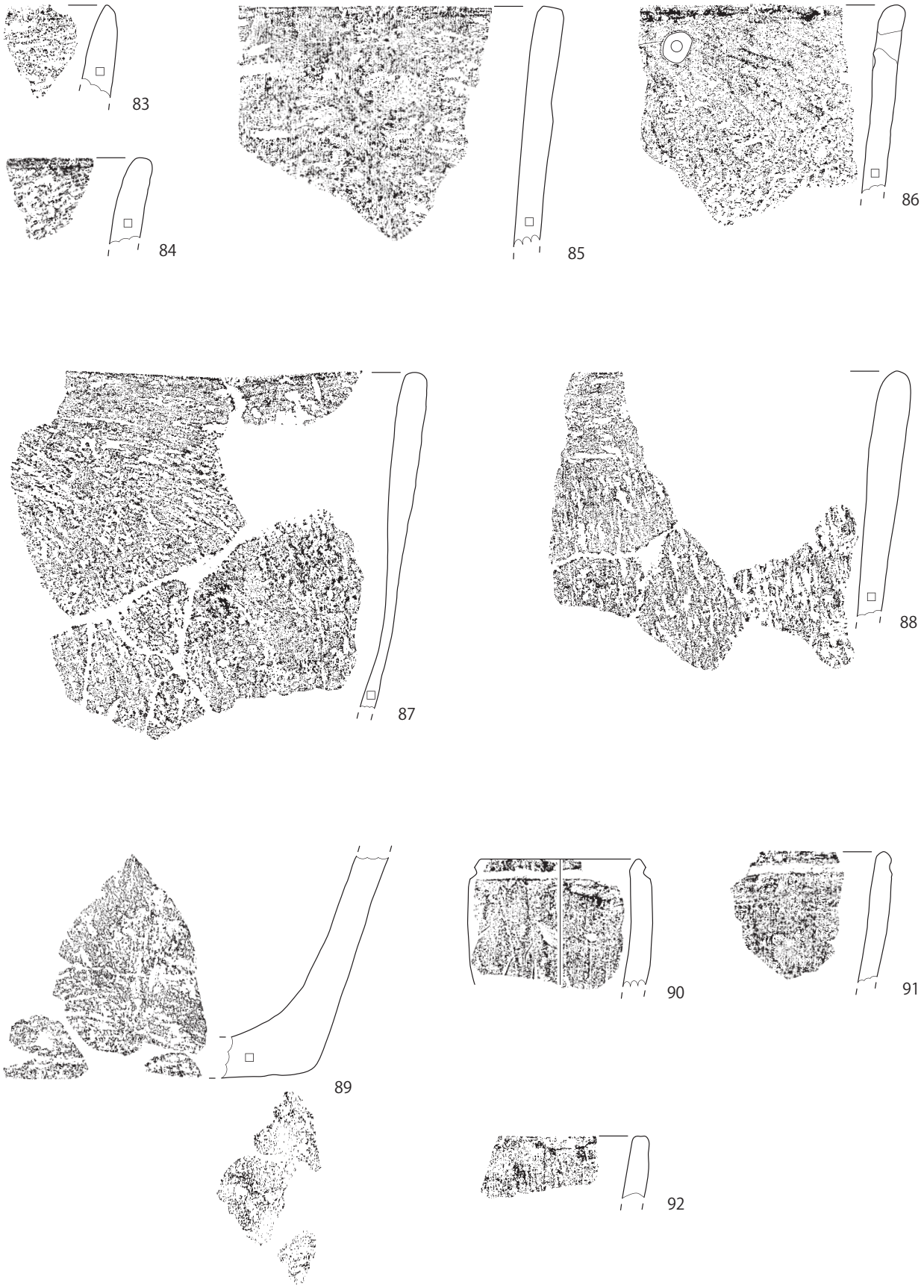

第 202 図　５次 SK－008 出土土器（５）



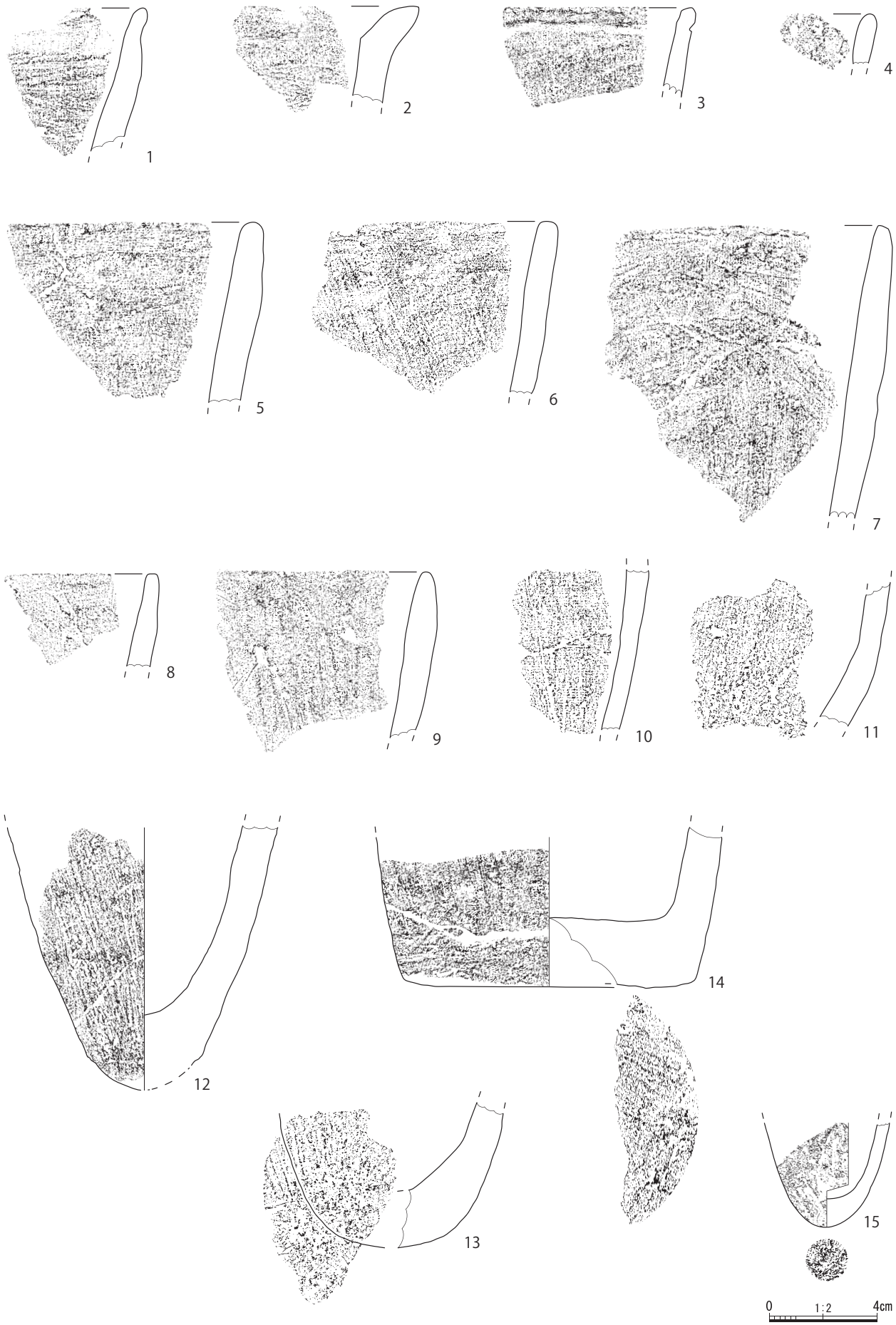

第 203 図　５次 SK－008 出土土器（６）



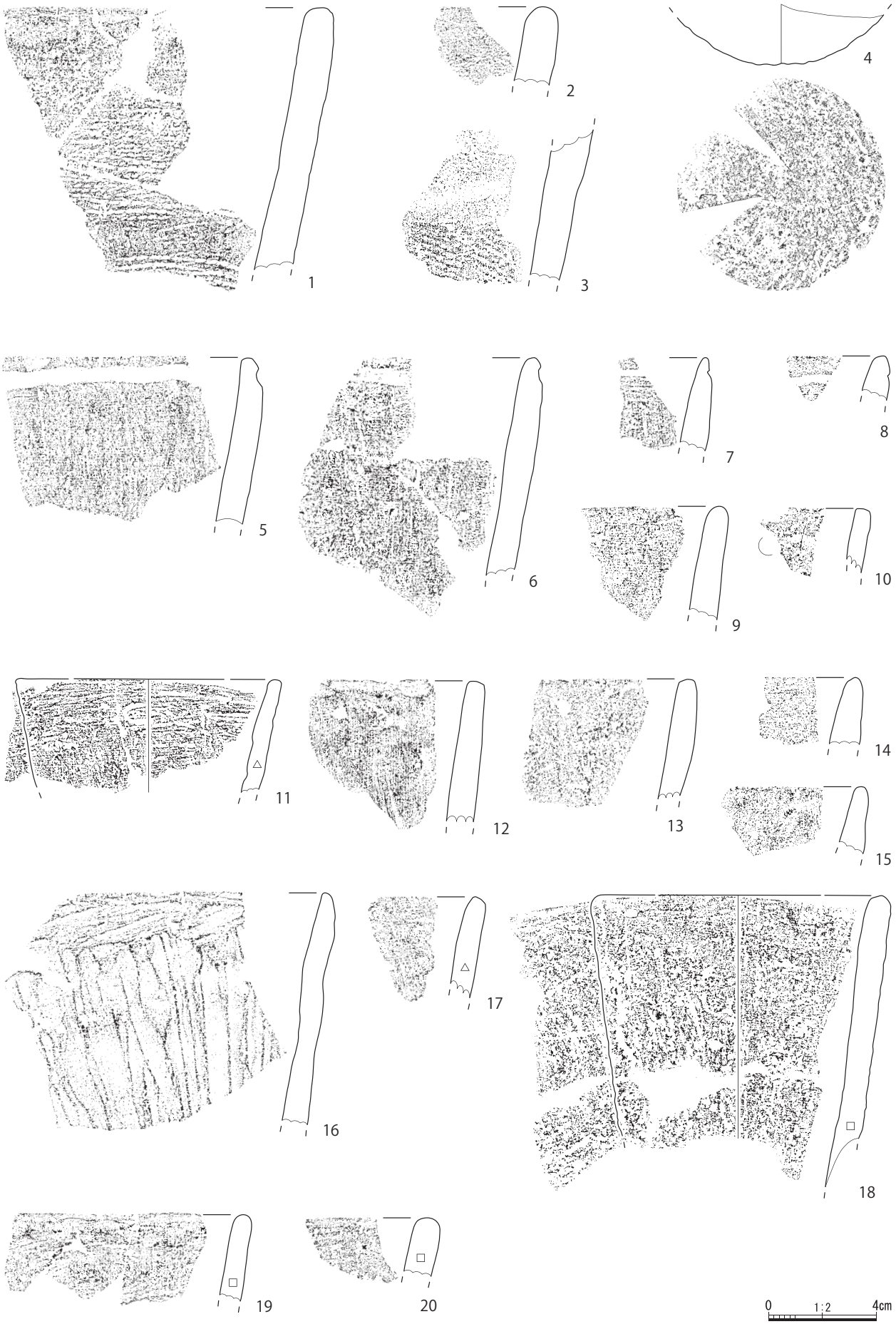

第 204 図　５次 SK－008 出土土器（７）



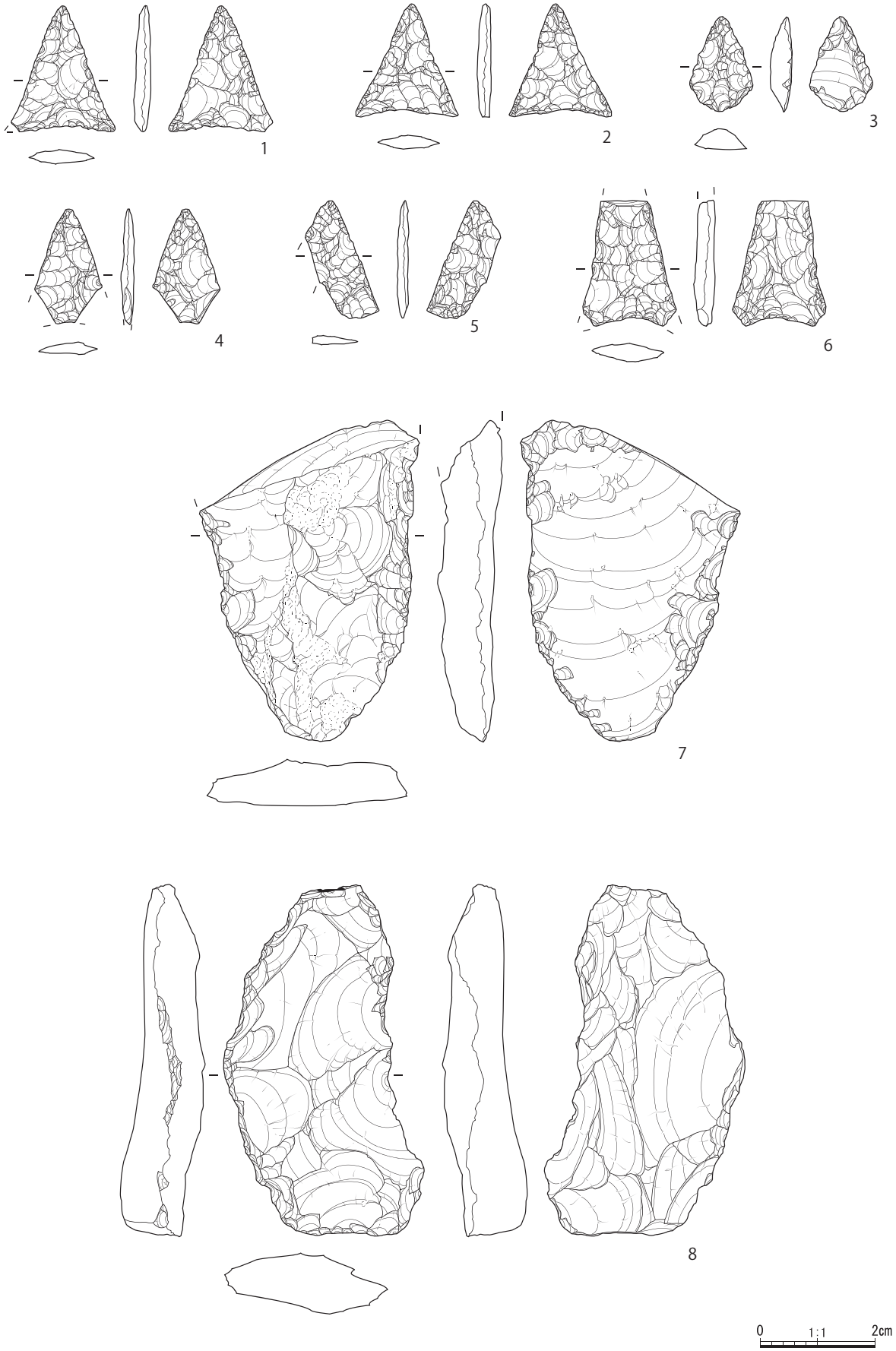

第 205 図　５次 SK－008 出土土器（８）



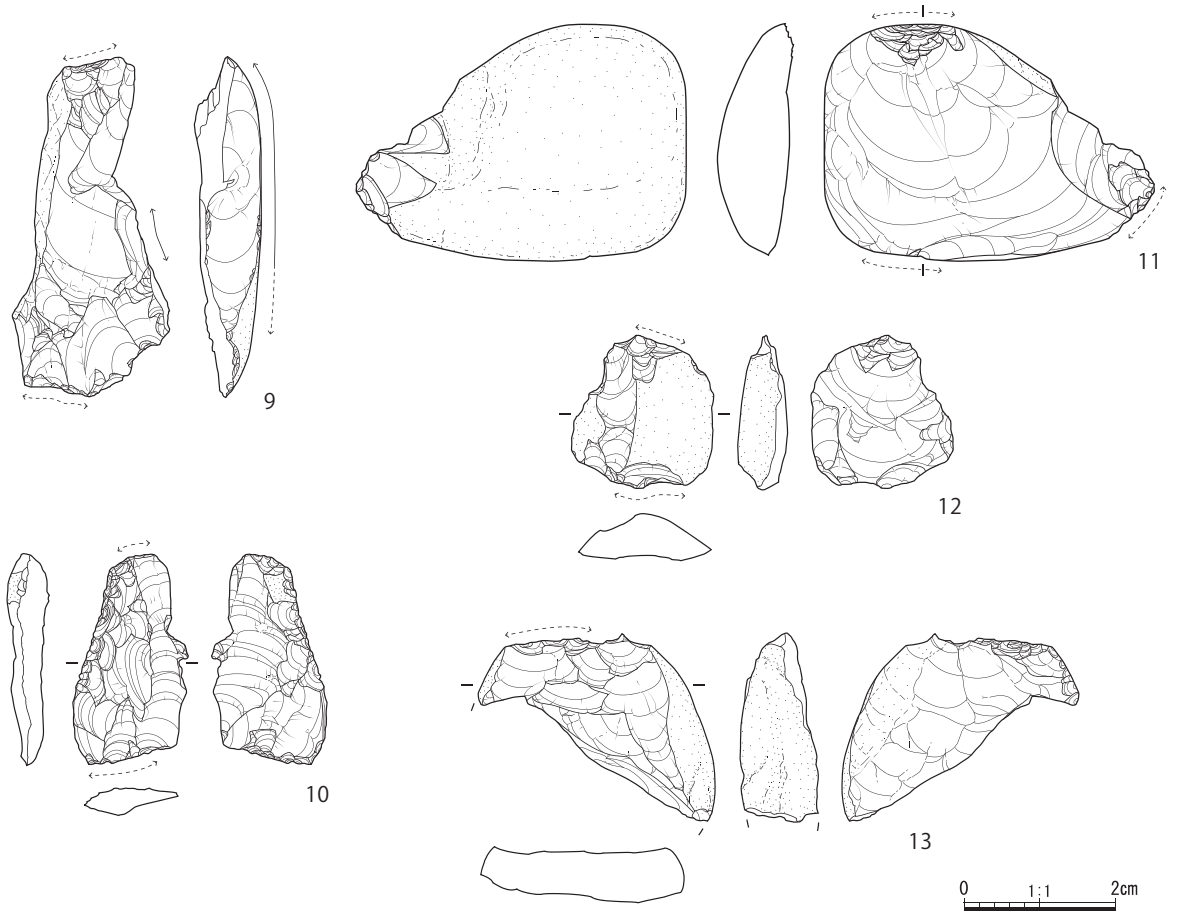

第 206 図　５次 SK－114 出土土器

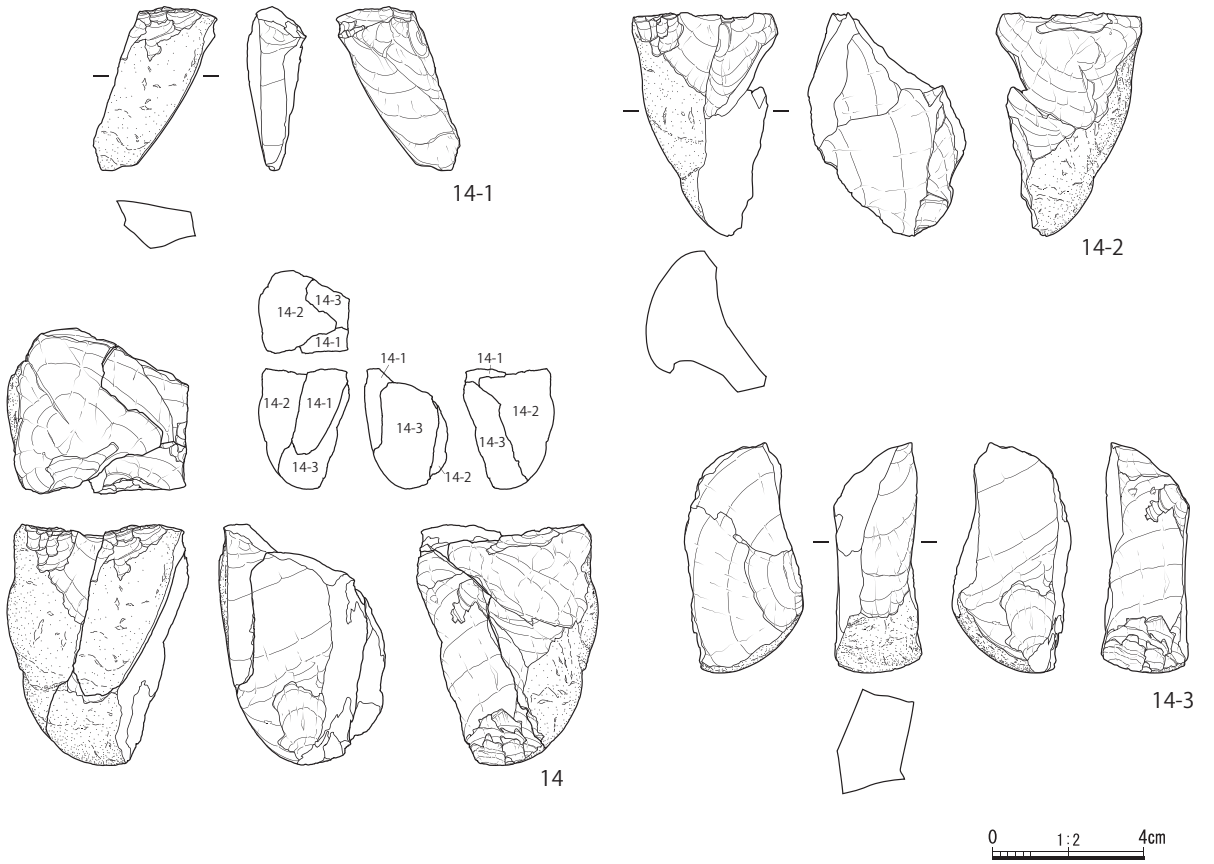



第 207 図　５次 SK－131 出土土器

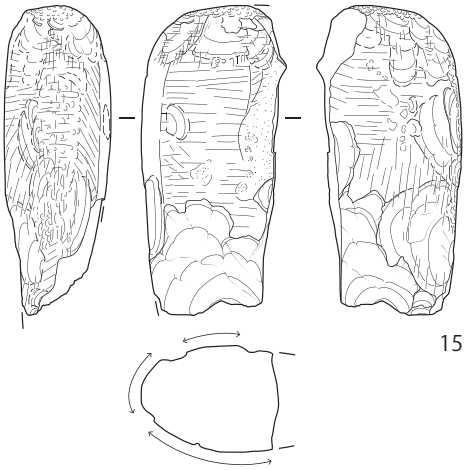


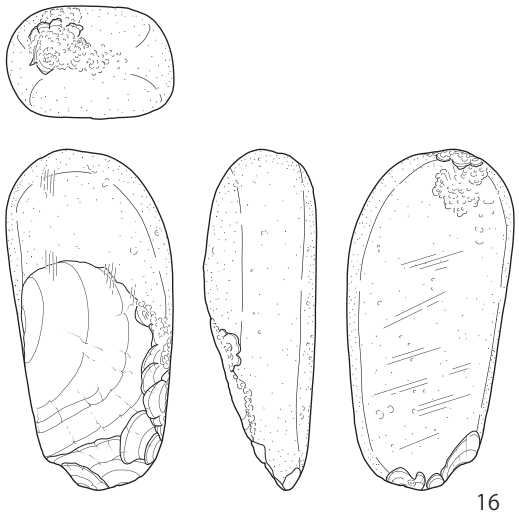

第 208 図　5 次 SI－002 出土石器（1）

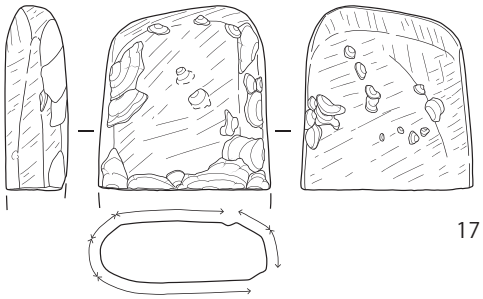


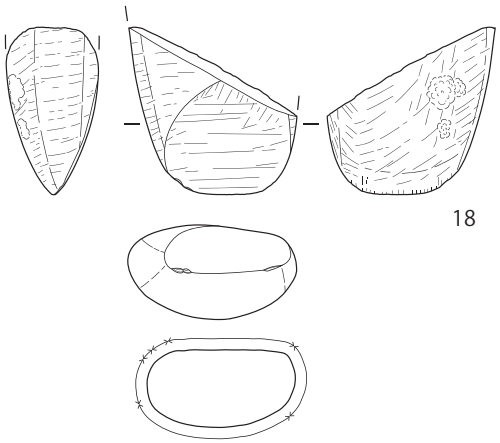



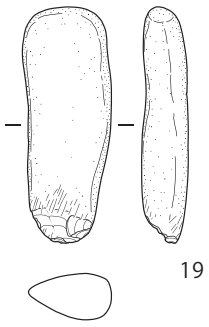

第 209 図　5 次 SI－002 出土石器（2）

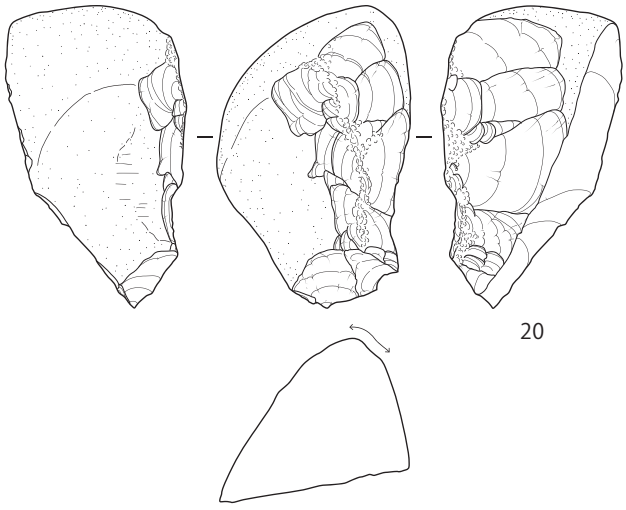


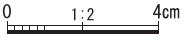



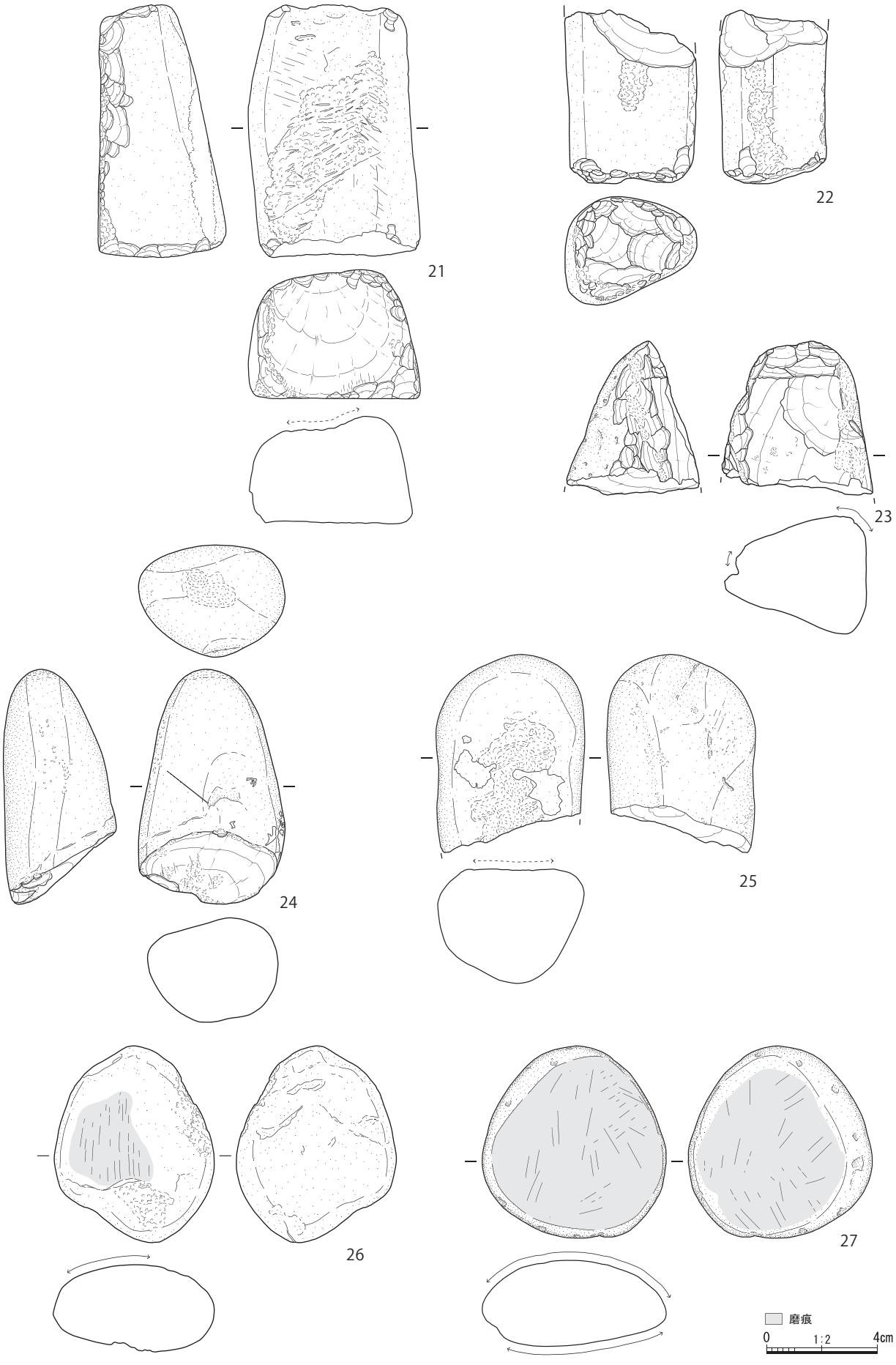



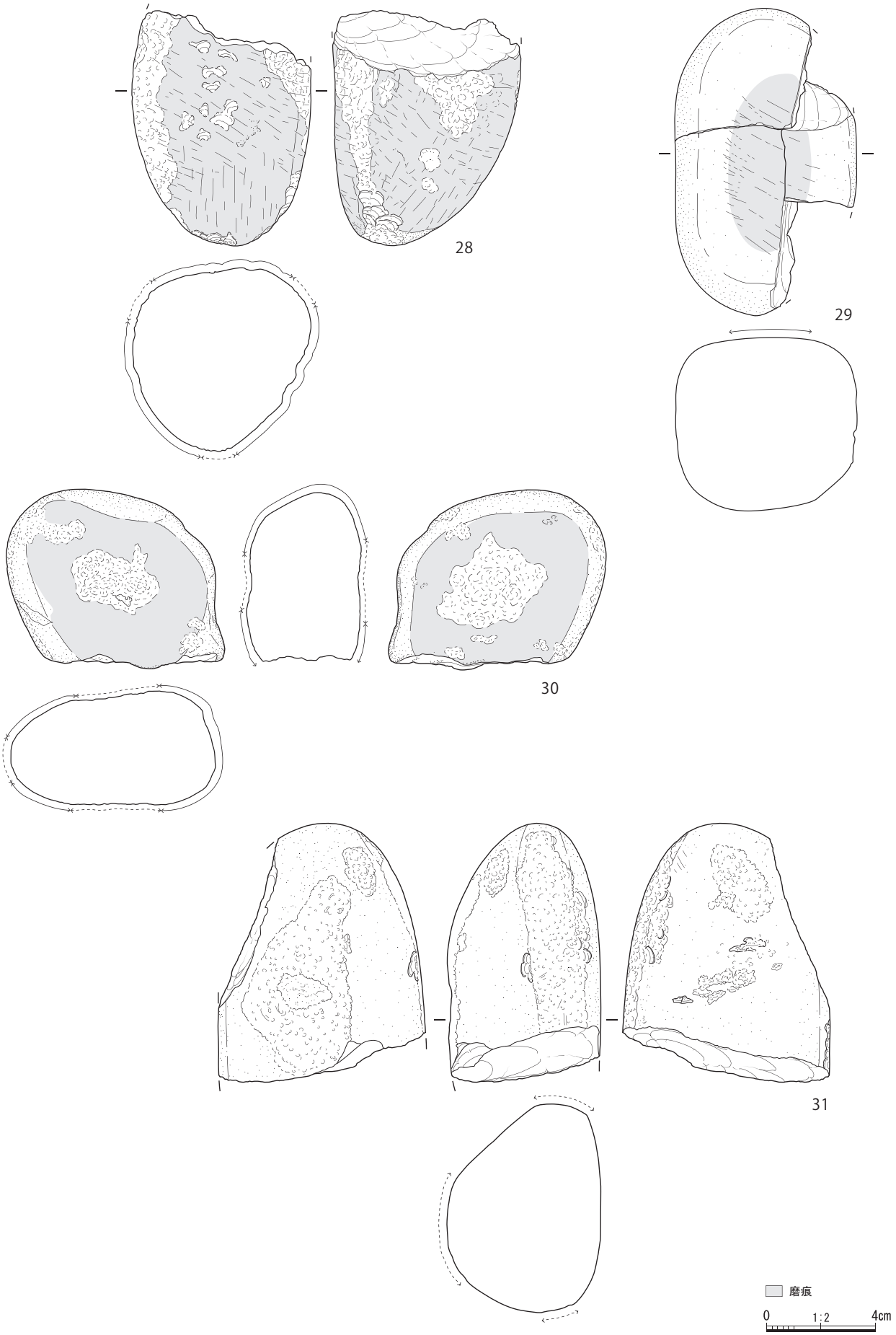



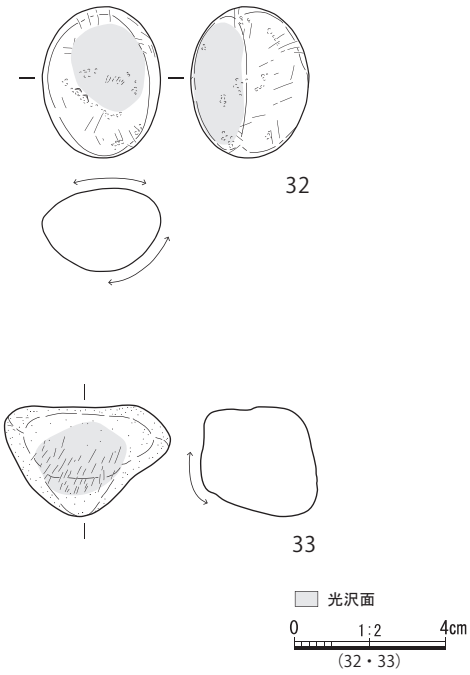

第 210 図　5 次 SI－002 出土石器（3）

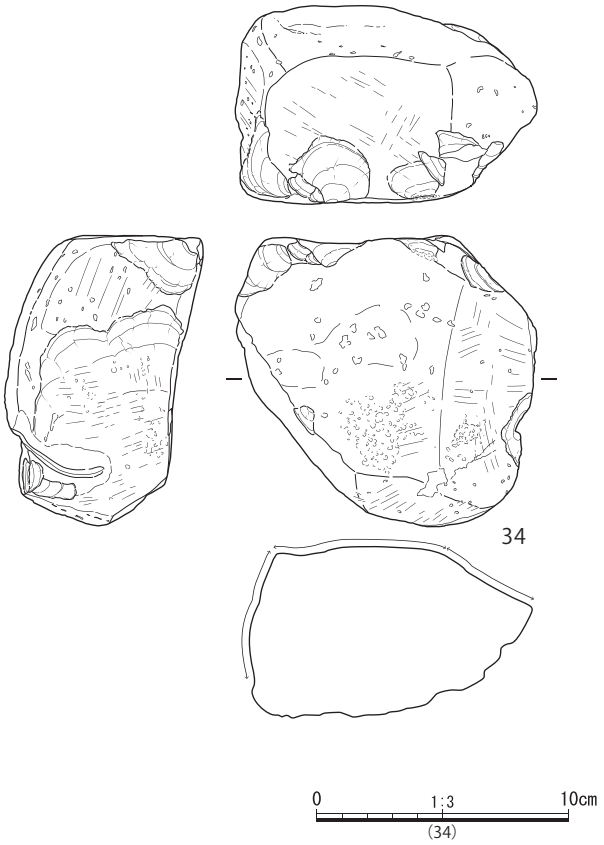


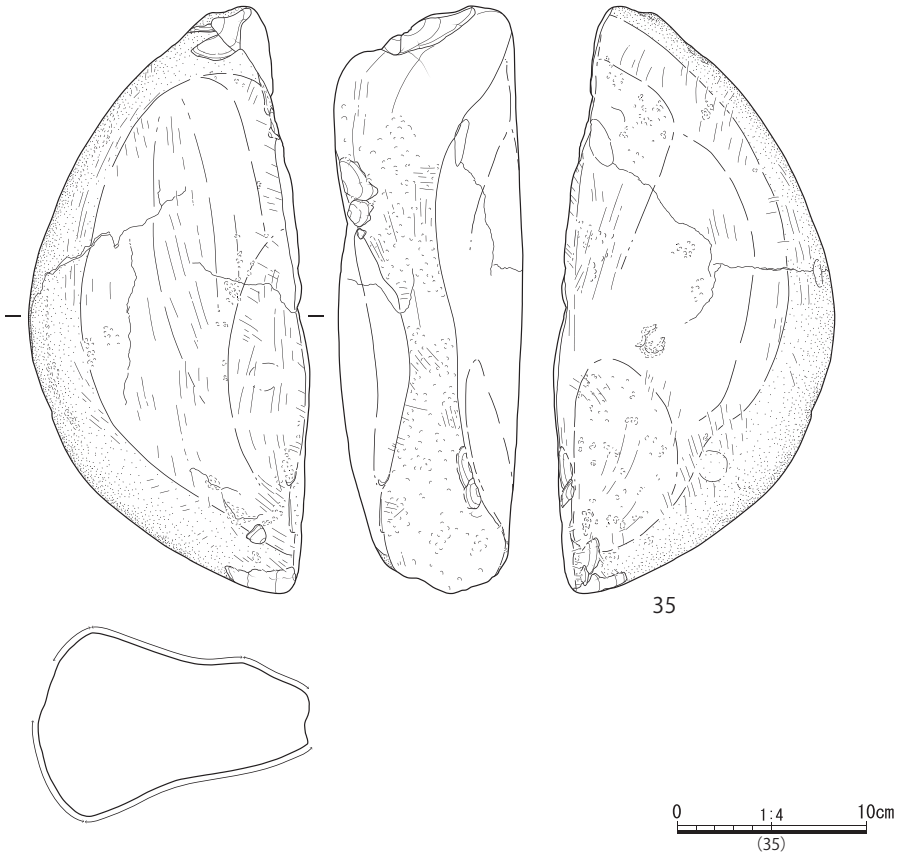

第 211 図　５次 SI－002 出土石器（４）



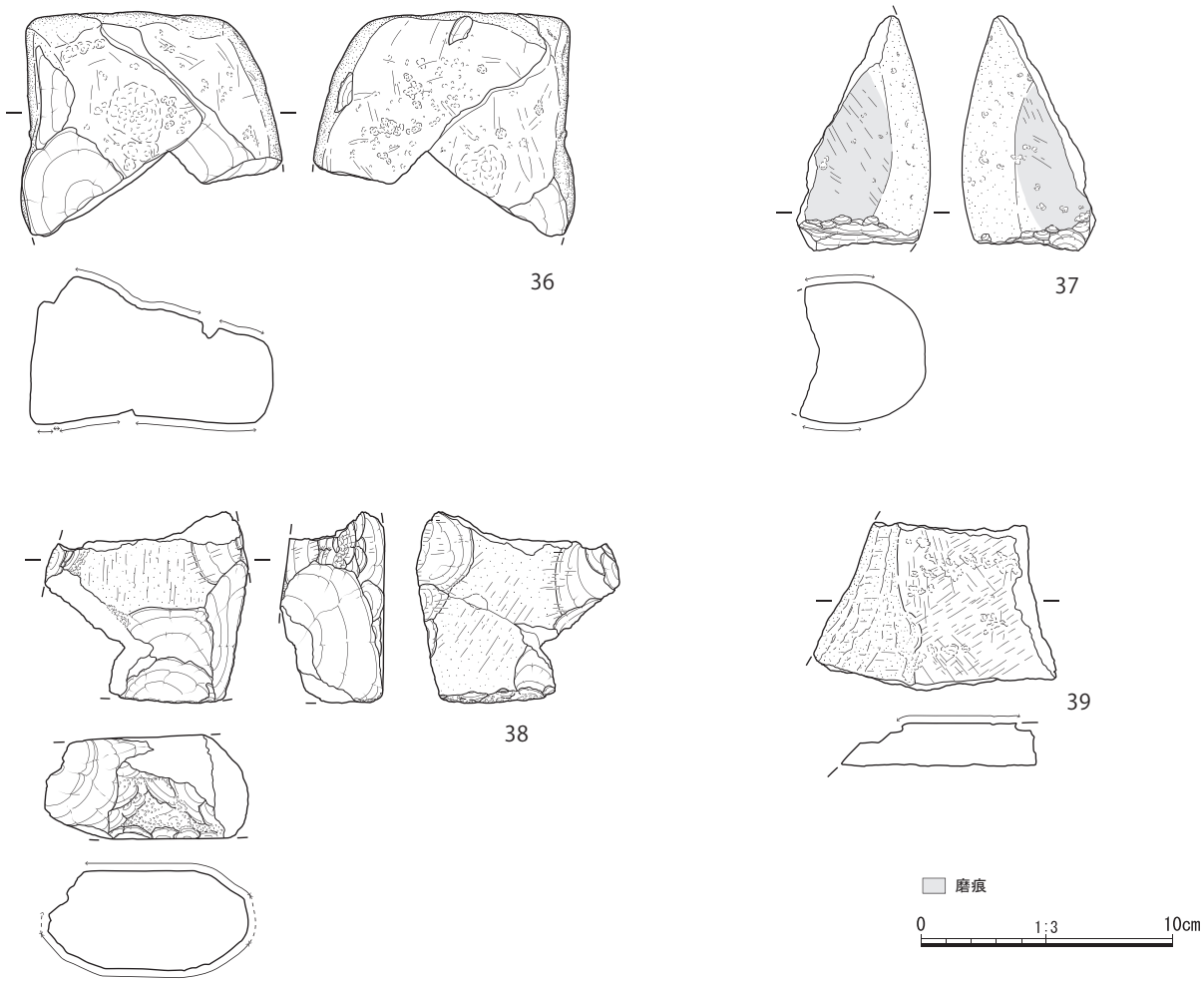

第 212 図　5 次 SI－002 出土石器（5）



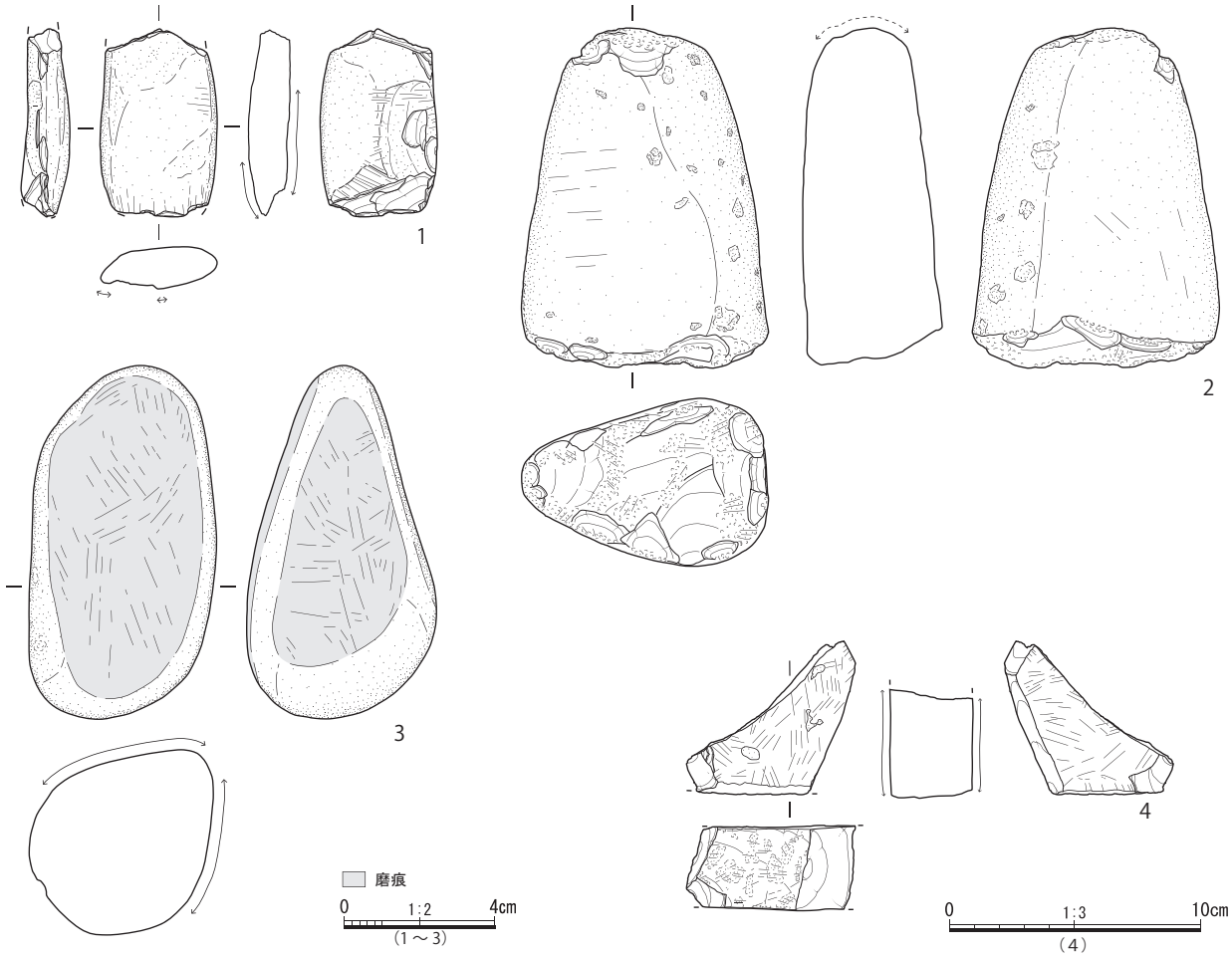



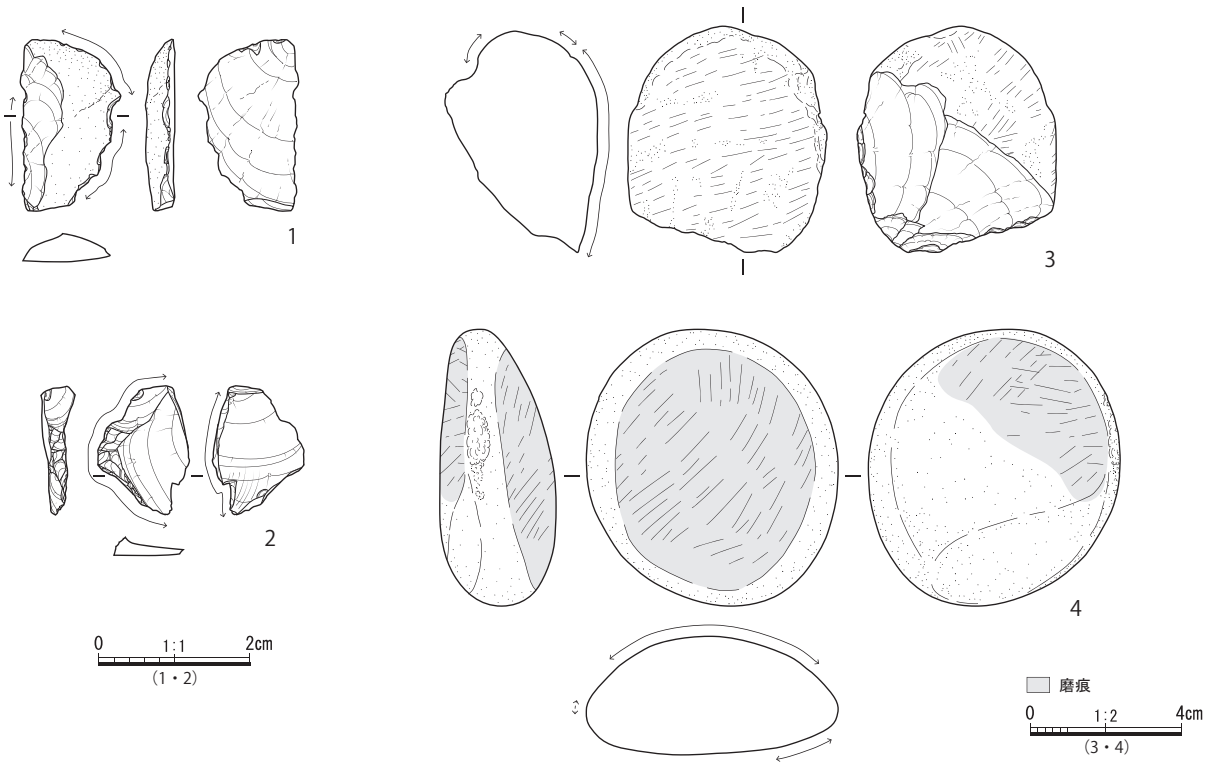

第 213 図　５次 SI－002 出土石器（６）



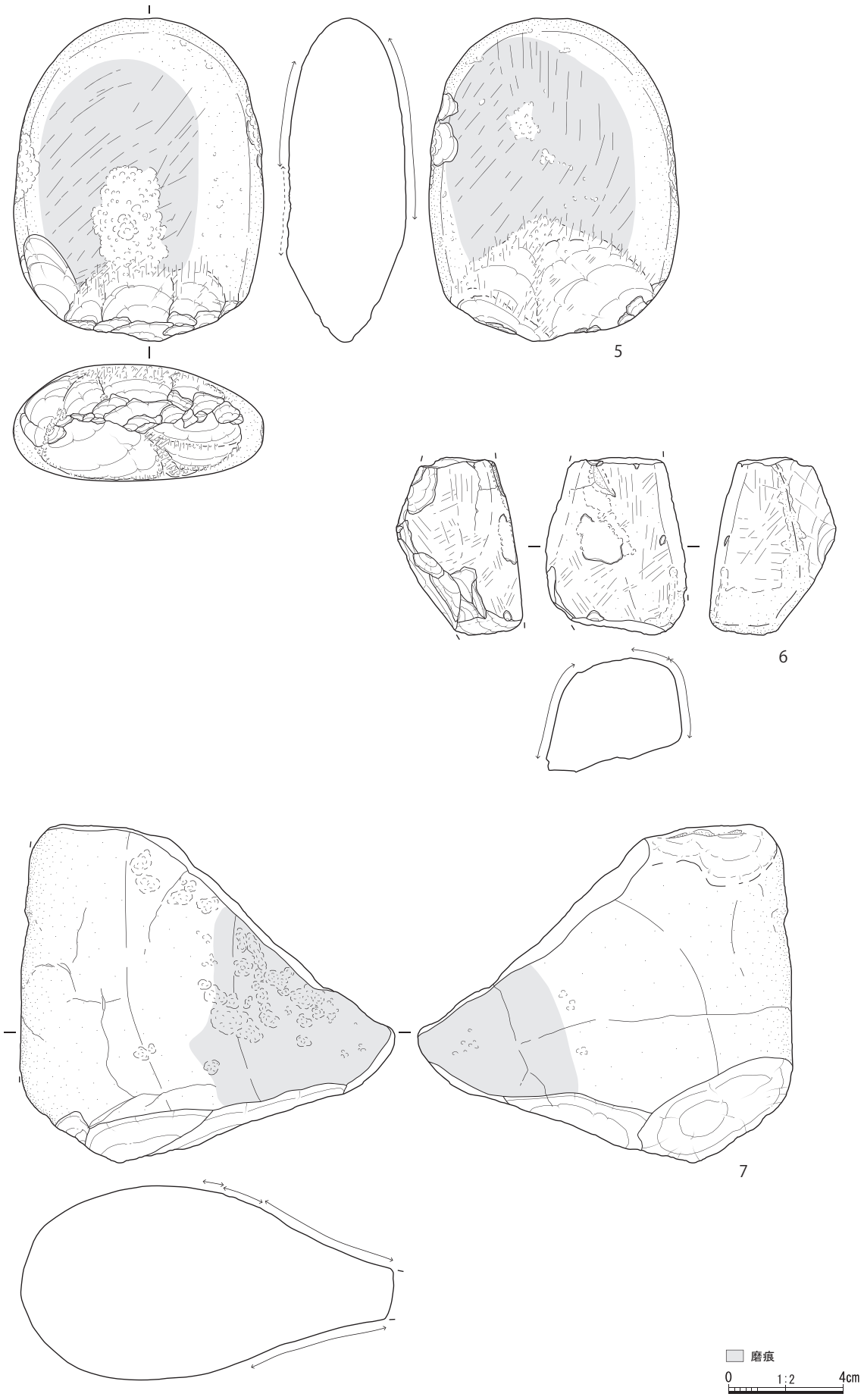

第 214 図　５次 SI－002 出土石器（７）



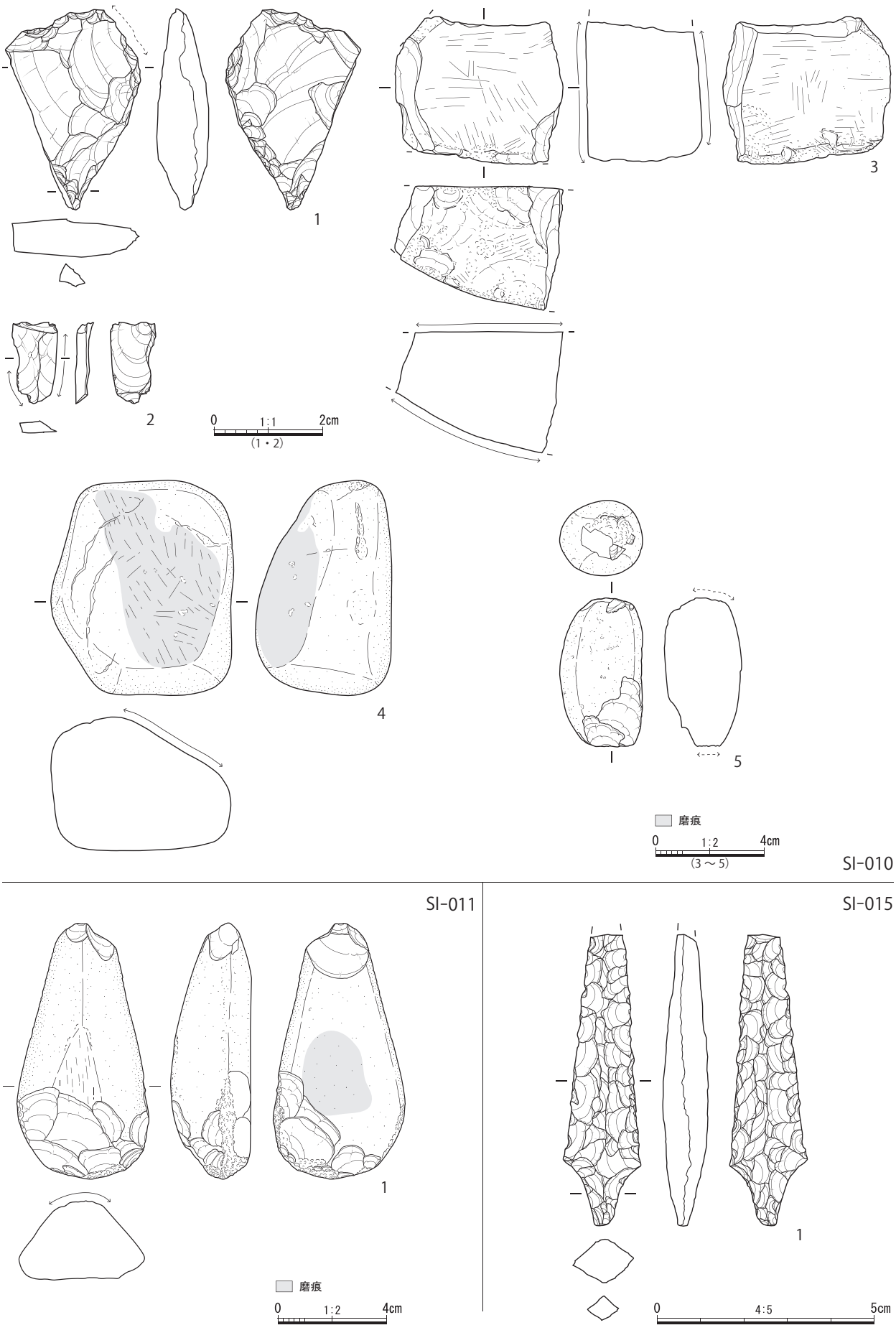

第 215 図　５次 SI－003 出土石器



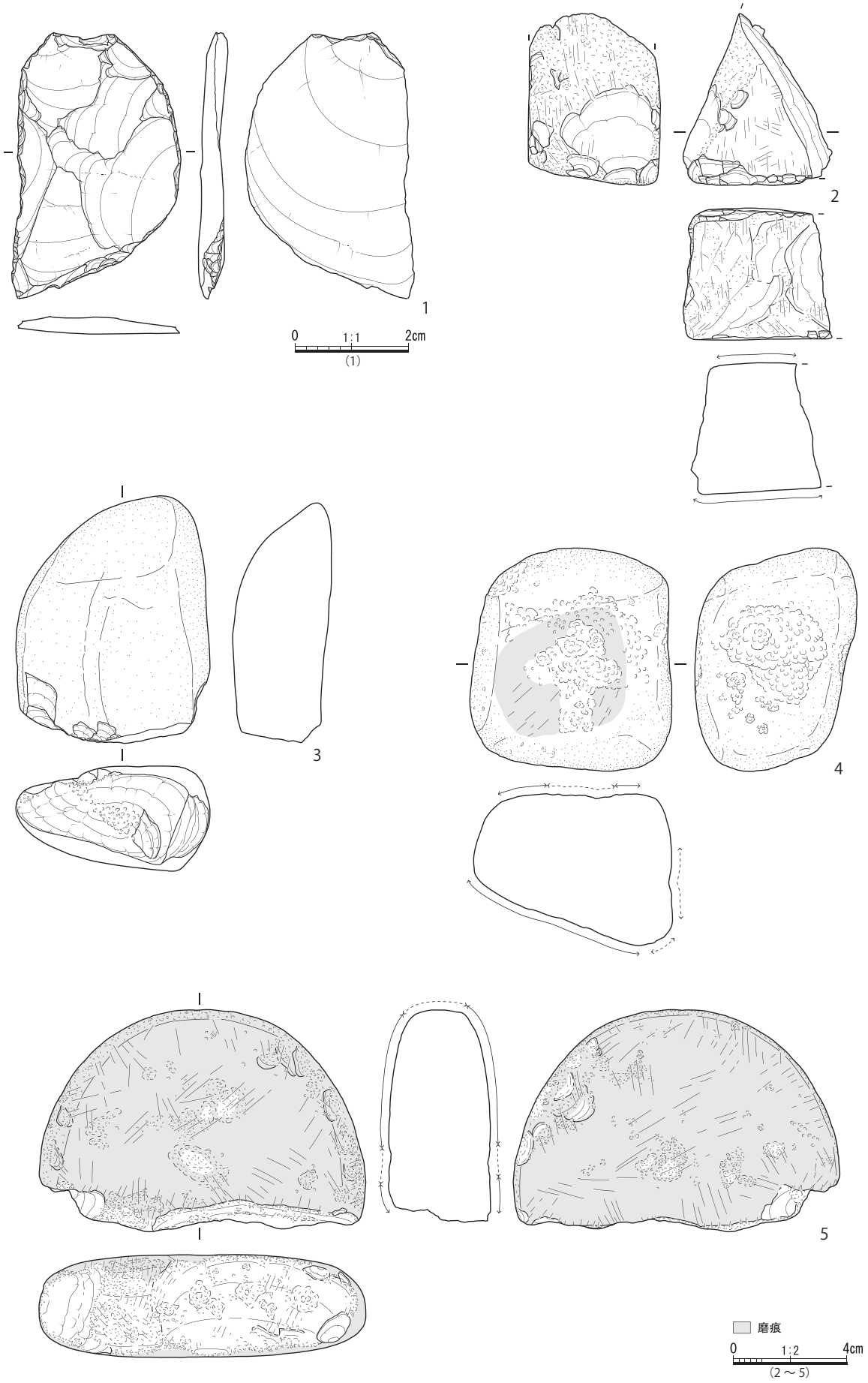

第 216 図　５次 SI－004 出土石器（１）




第 217 図　5 次 SI－004 出土石器（2）

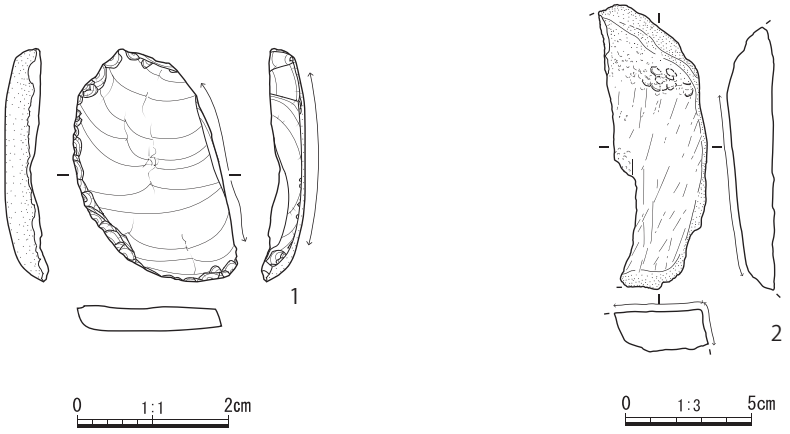



第 218 図　5 次 SI－010・011・015 出土石器

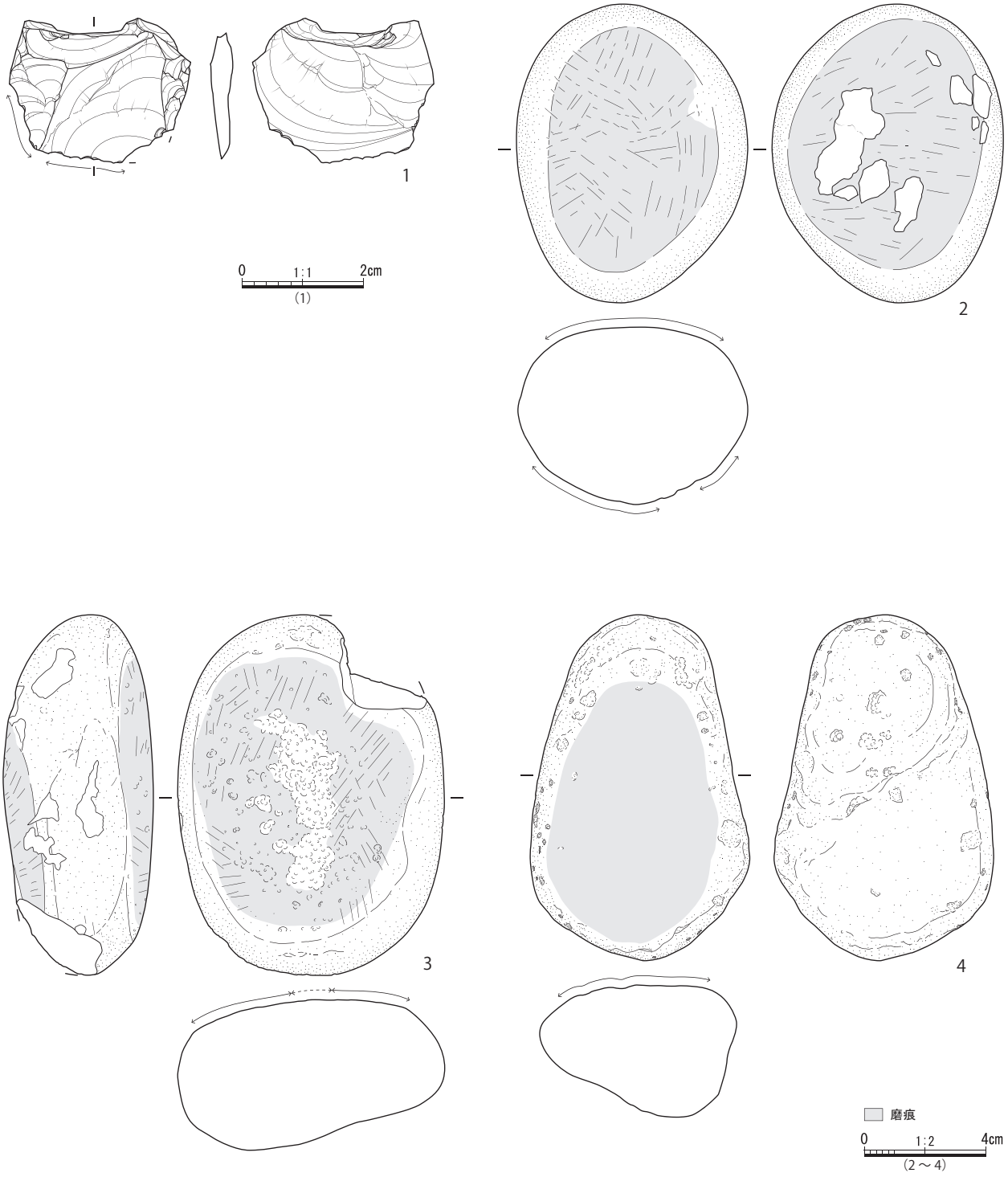



第 219 図　5 次 SK－008 出土石器（1）

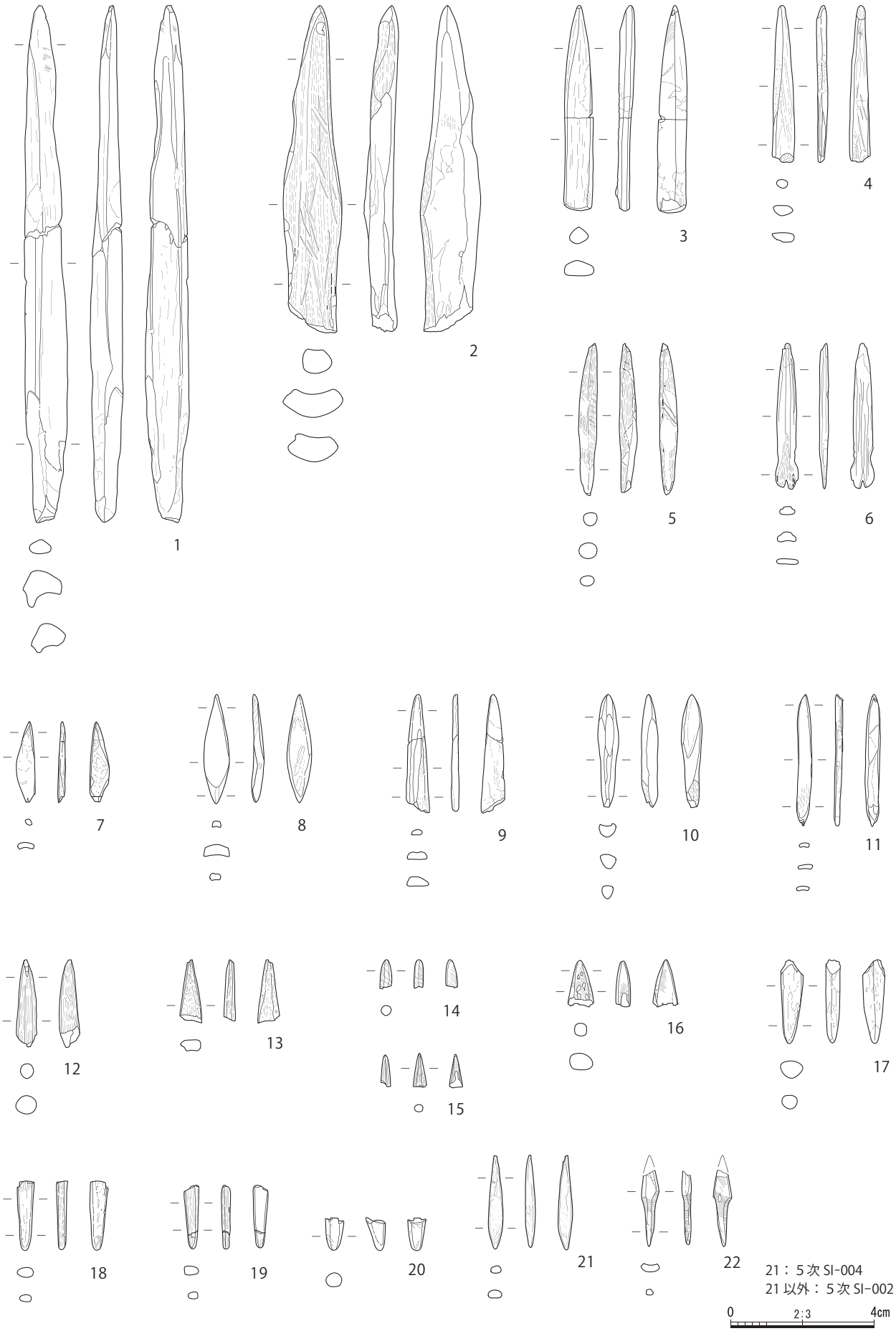
第 220 図　５次 SK－008 出土石器（２）



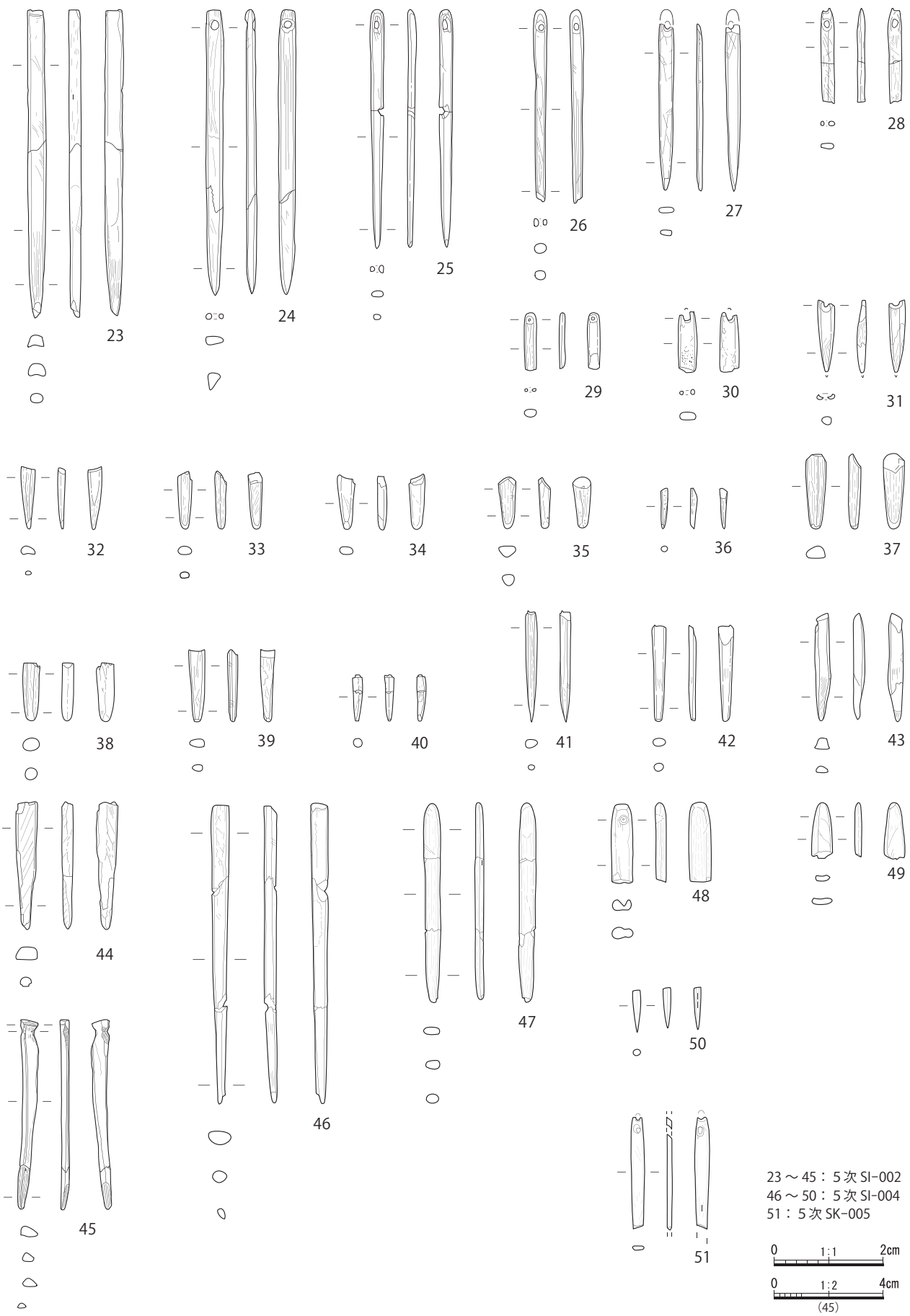

第 221 図　５次 SK－114 出土石器



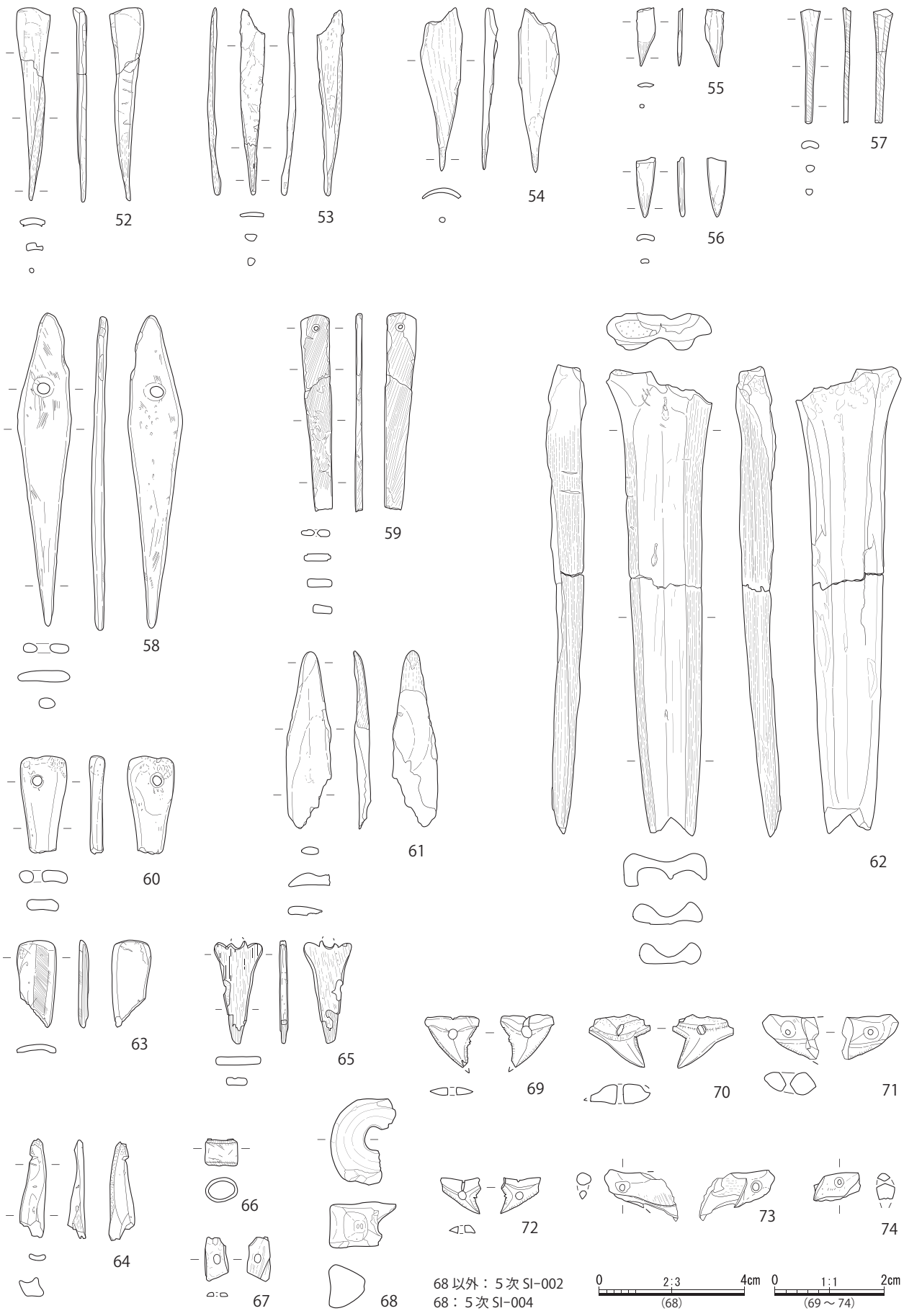

第 222 図　５次 SK－131 出土石器



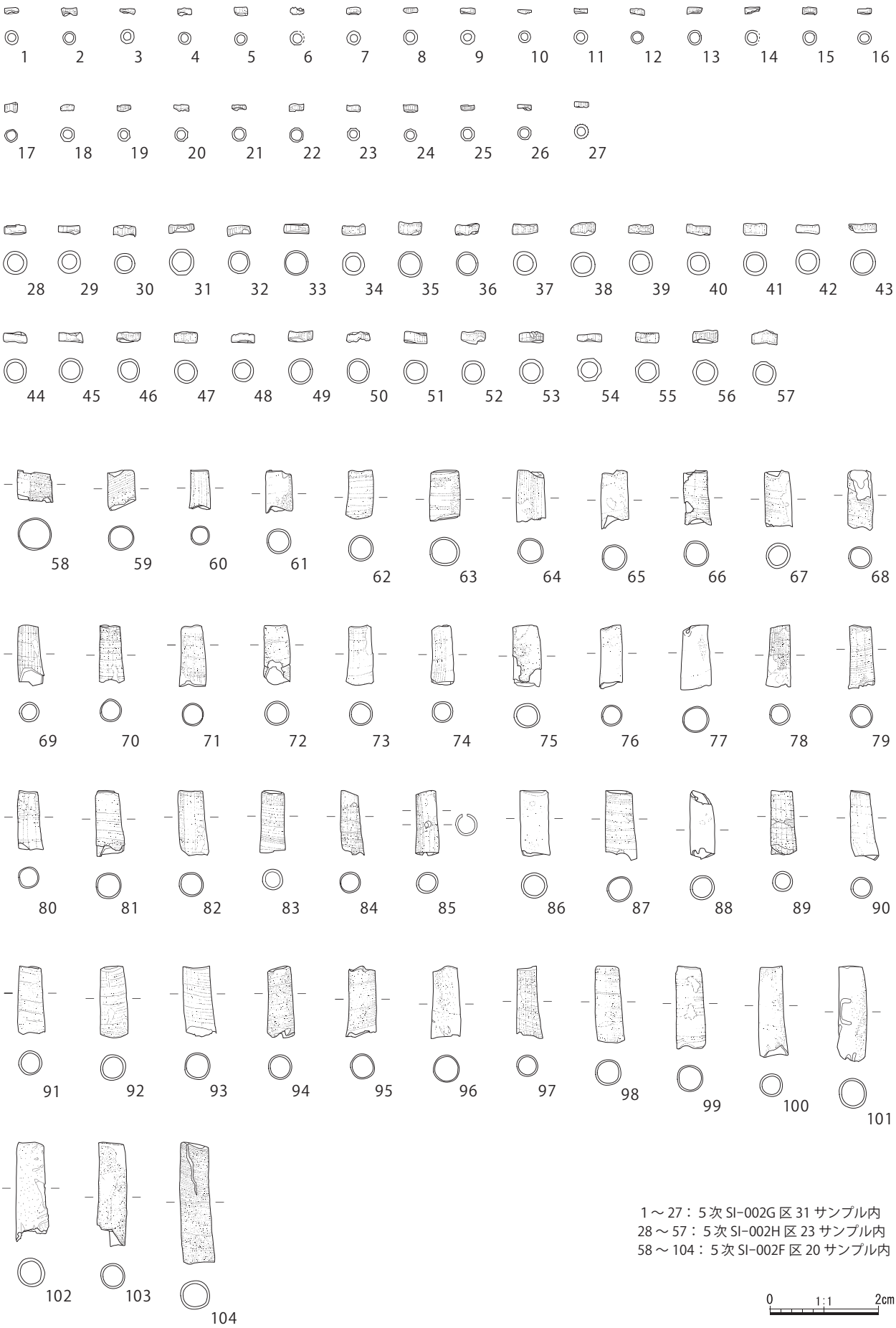

第 223 図　５次出土骨角歯牙製品（１）




第 224 図　５次出土骨角歯牙製品（２）



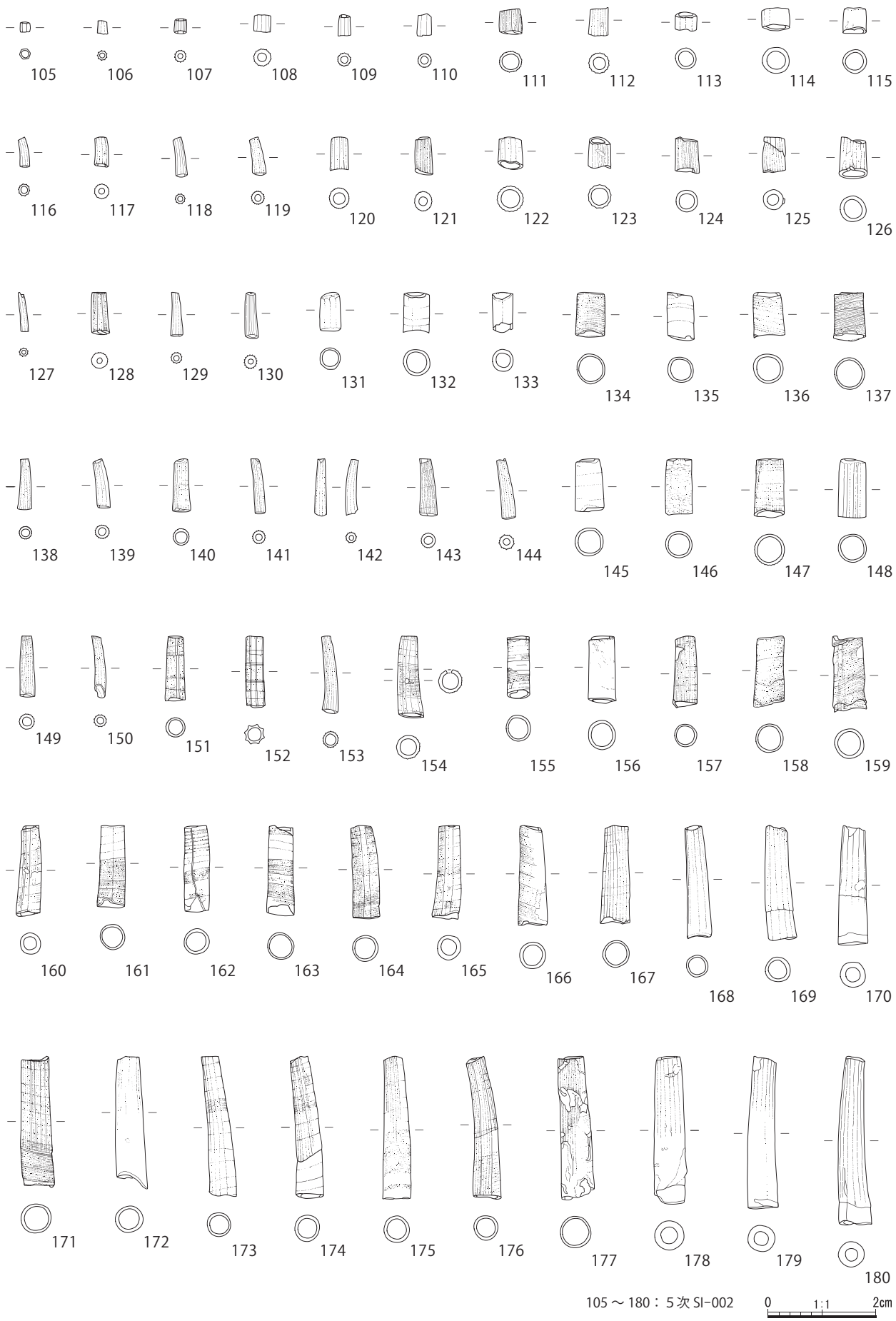

第 225 図　５次出土骨角歯牙製品（３）



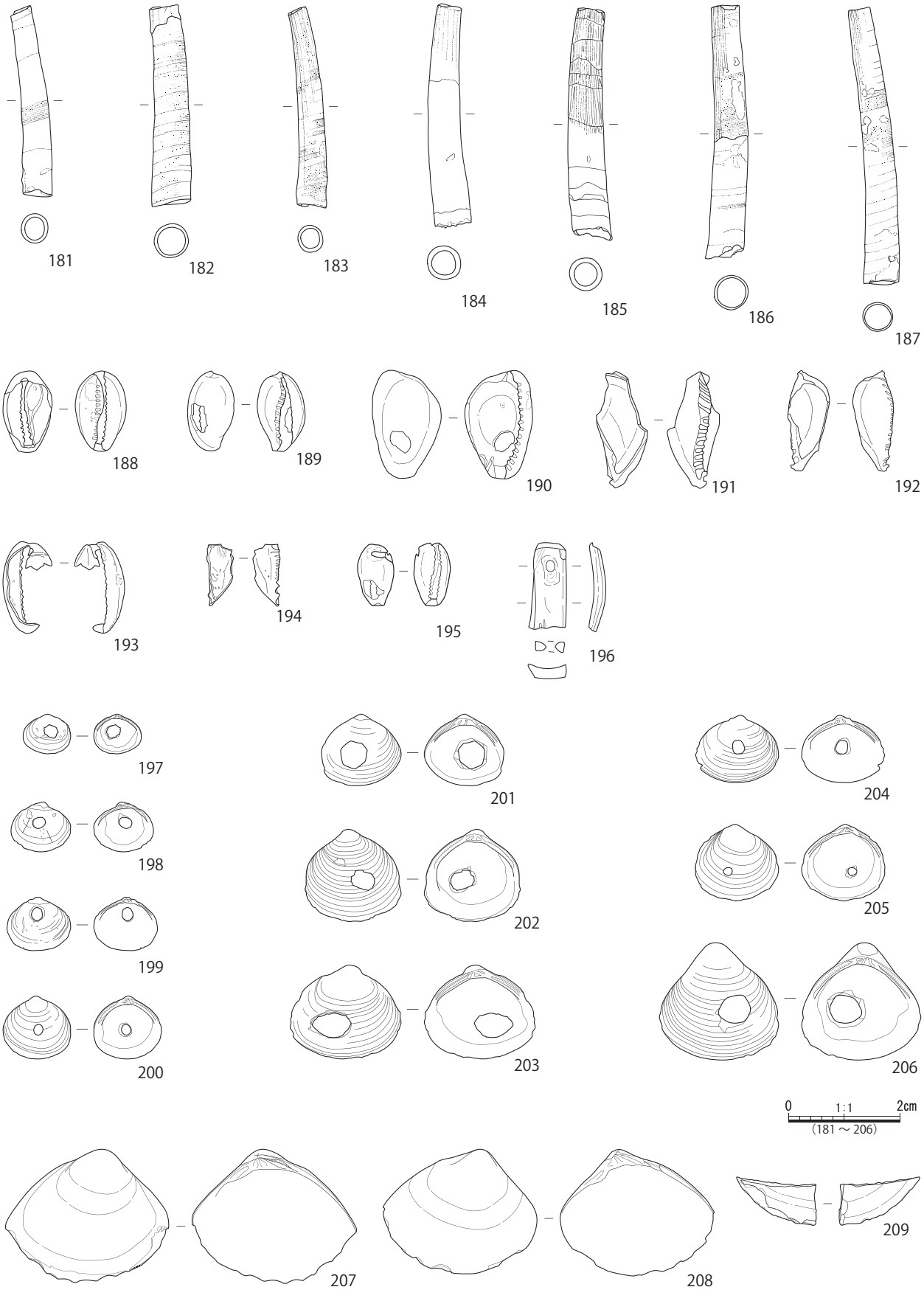

1～27：５次 SI-002G 区 31 サンプル内
28～57：５次 SI-002H 区 23 サンプル内
58～104：５次 SI-002F 区 20 サンプル内

0　1:1　2cm

第 226 図　５次出土貝製品（１）

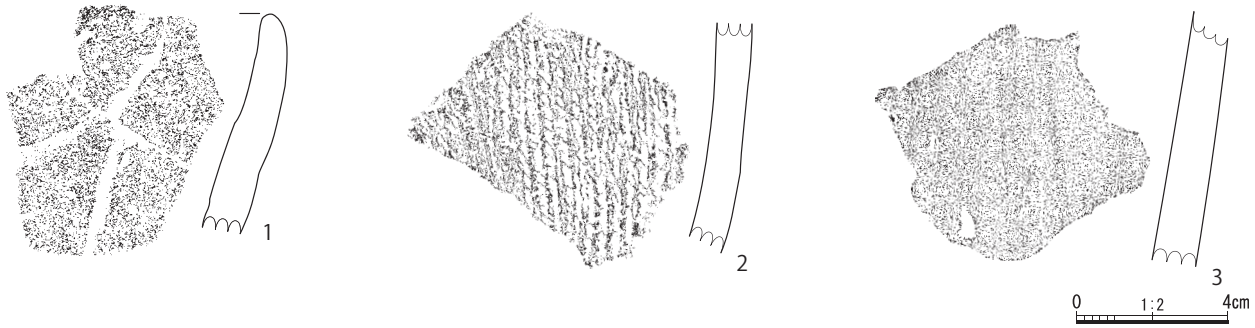



第 227 図　５次出土貝製品（２）

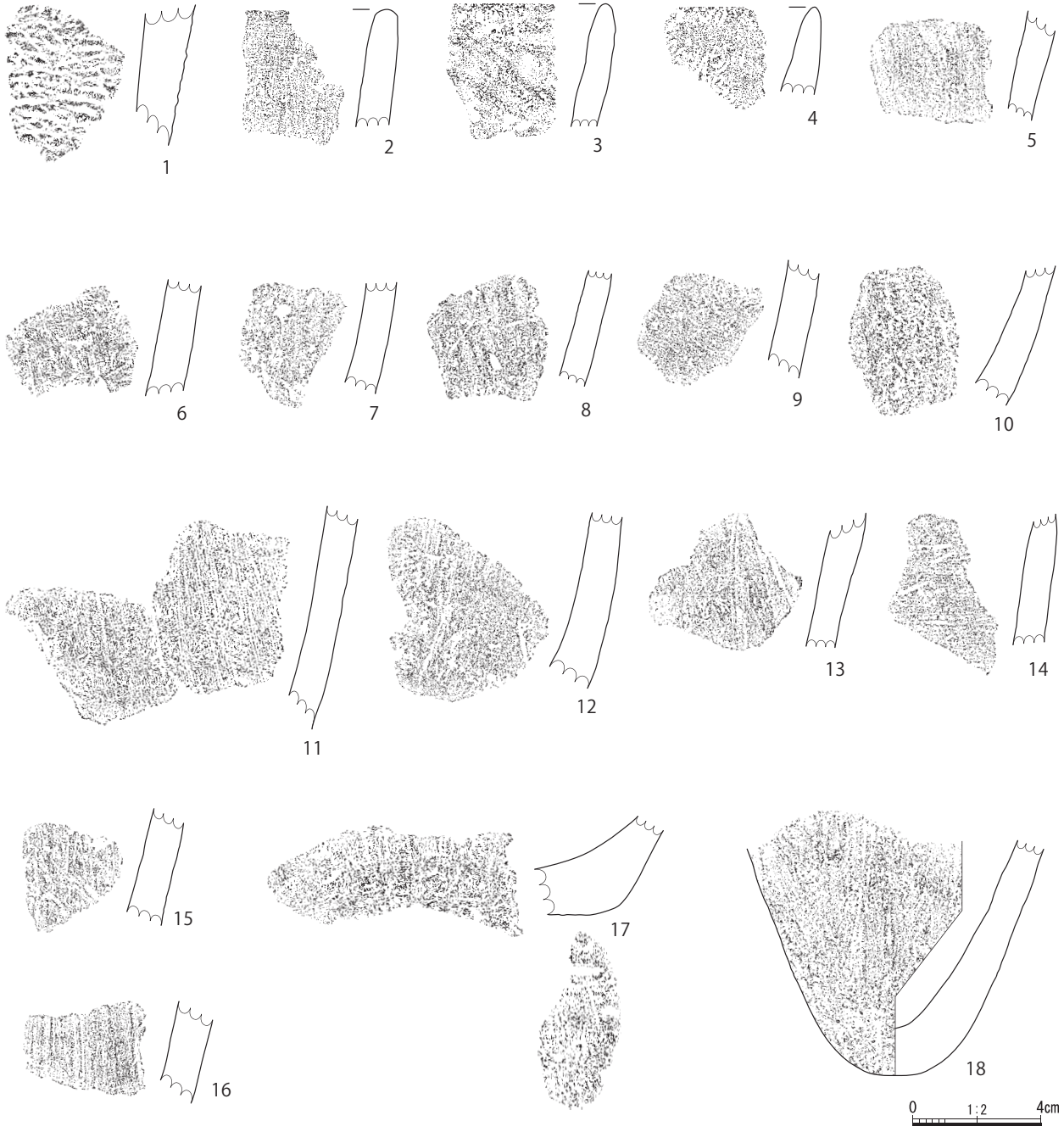



181 ～ 194・196 ～ 202・204 ～ 209：５次 SI-002
195・203：５次 SI-004

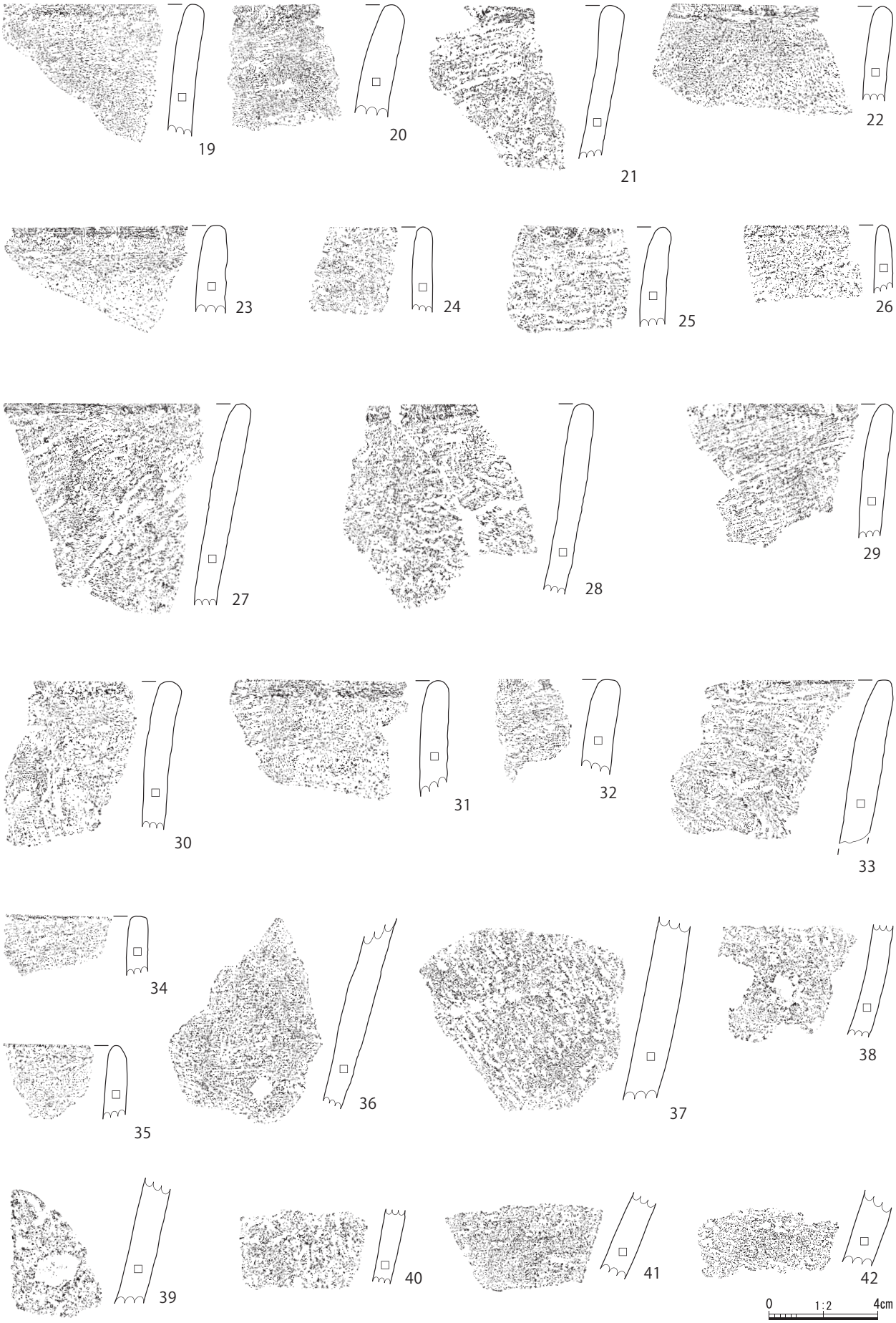
第 228 図　５次出土貝製品（３）、貝刃



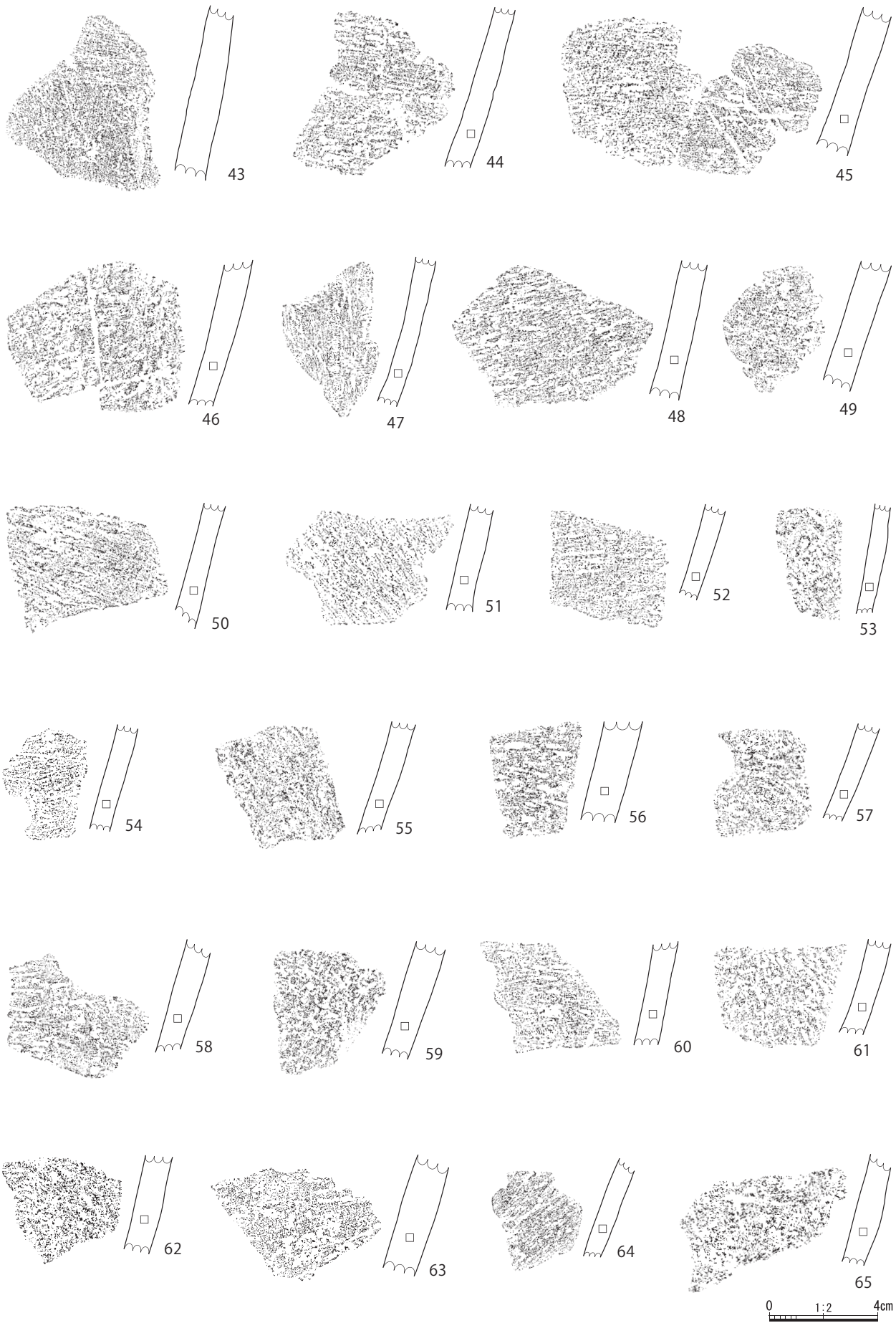

第 229 図　5T－005 住居跡出土土器



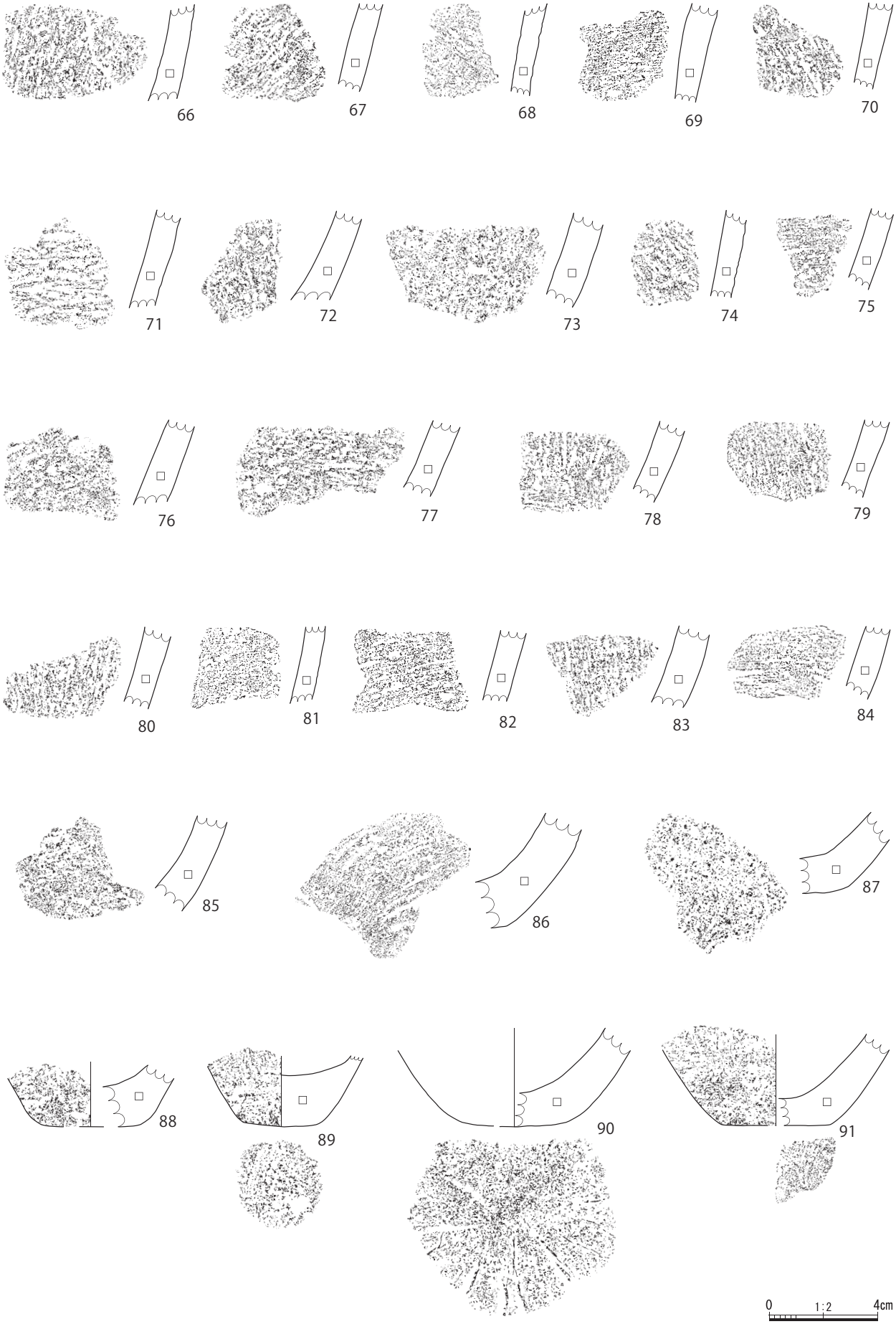

第 230 図　6T－001 住居跡出土土器（１）




第 231 図　6T－001 住居跡出土土器（２）

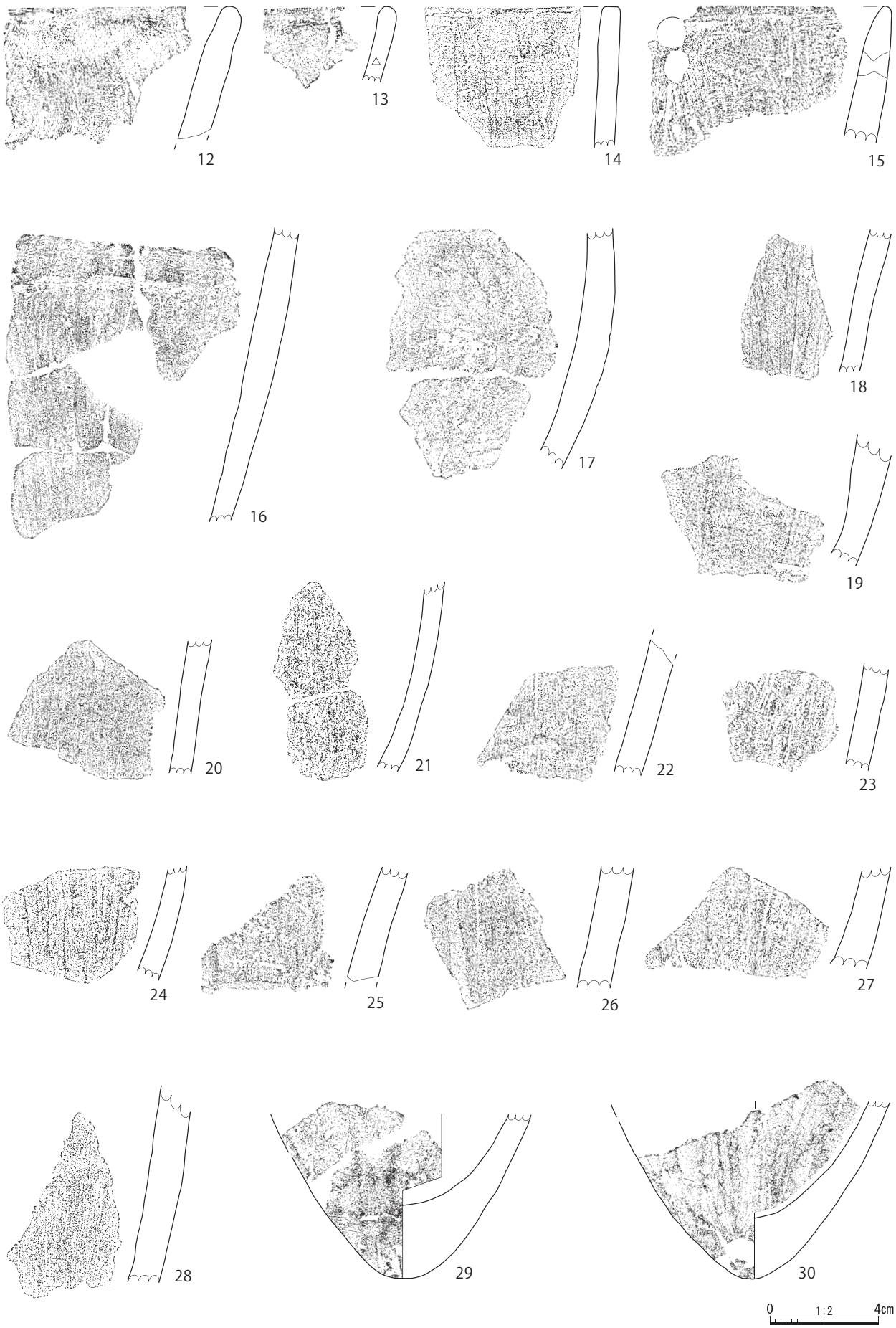



第 232 図　6T－001 住居跡出土土器（３）

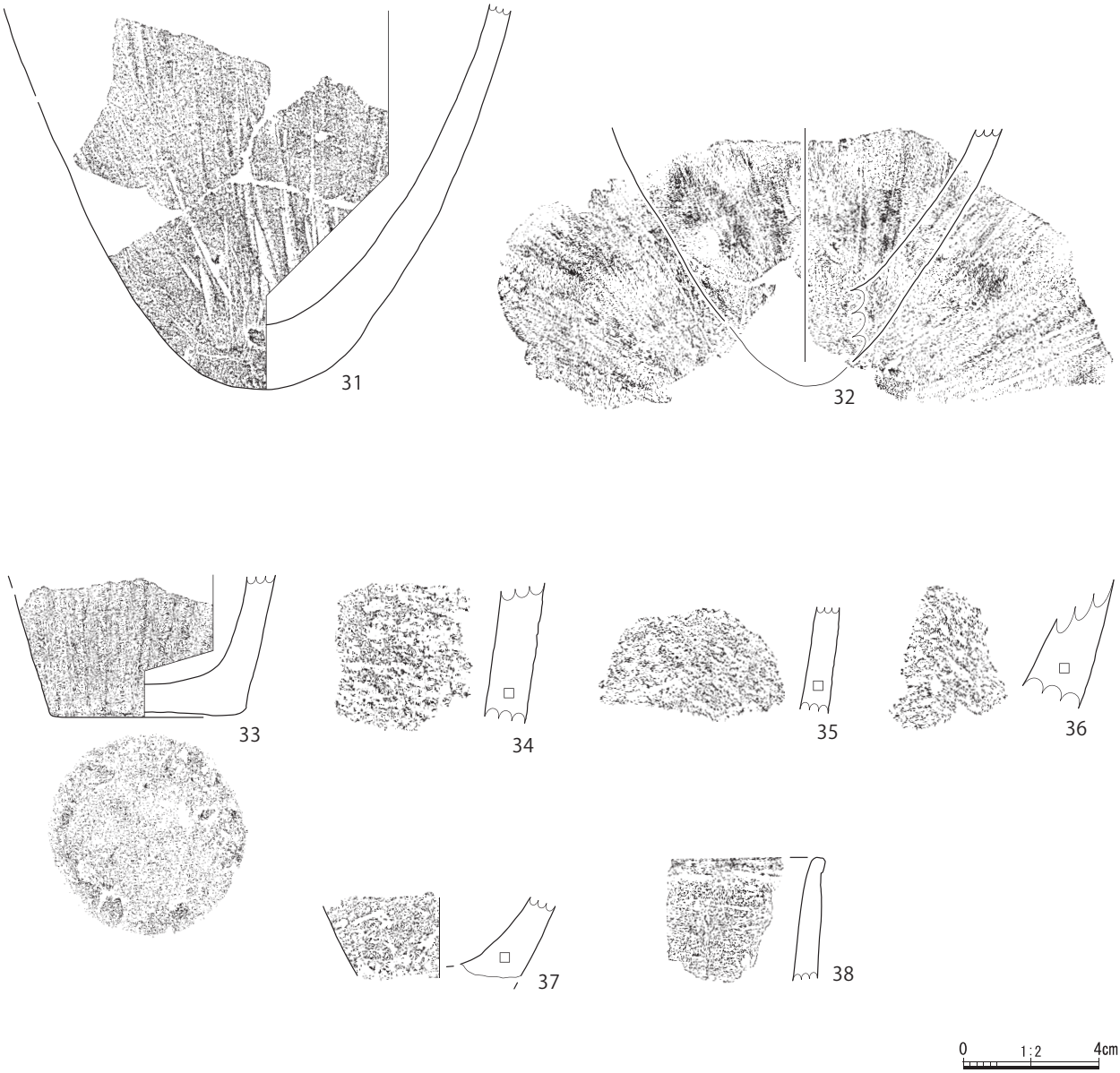



第 233 図　6T－001 住居跡出土土器（４）

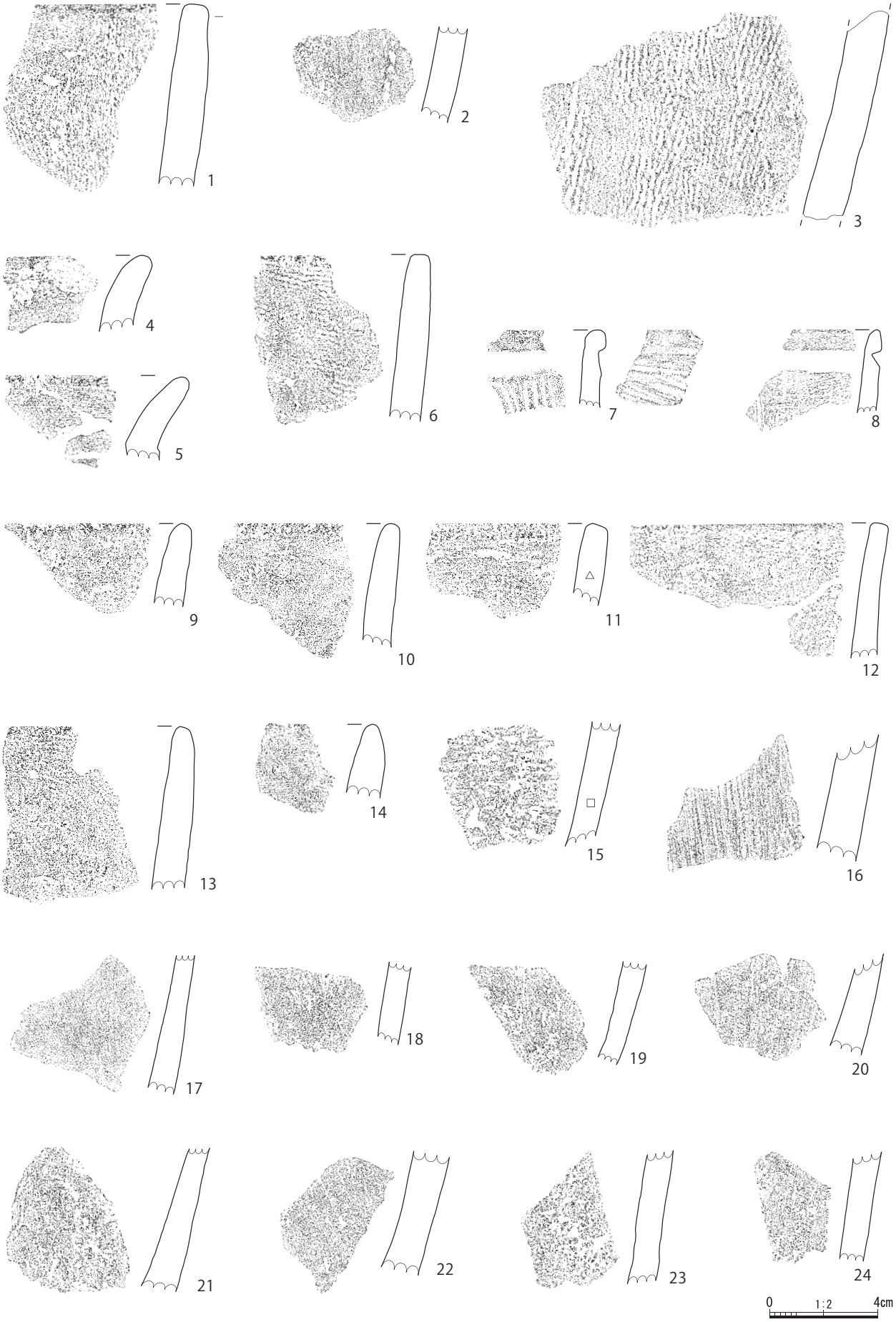
第 234 図　7T－001 住居跡出土土器（１）



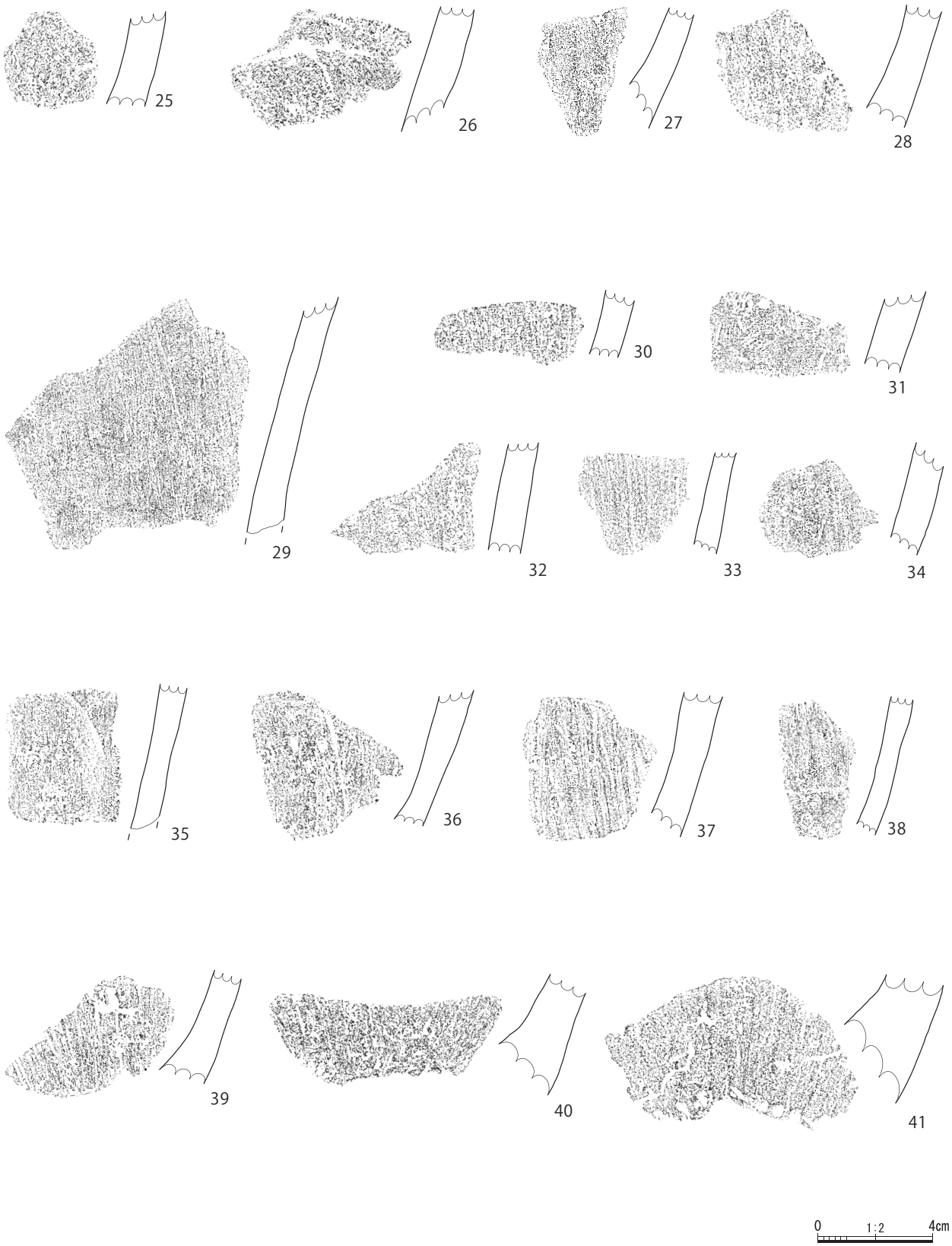

第 235 図　7T－001 住居跡出土土器（２）



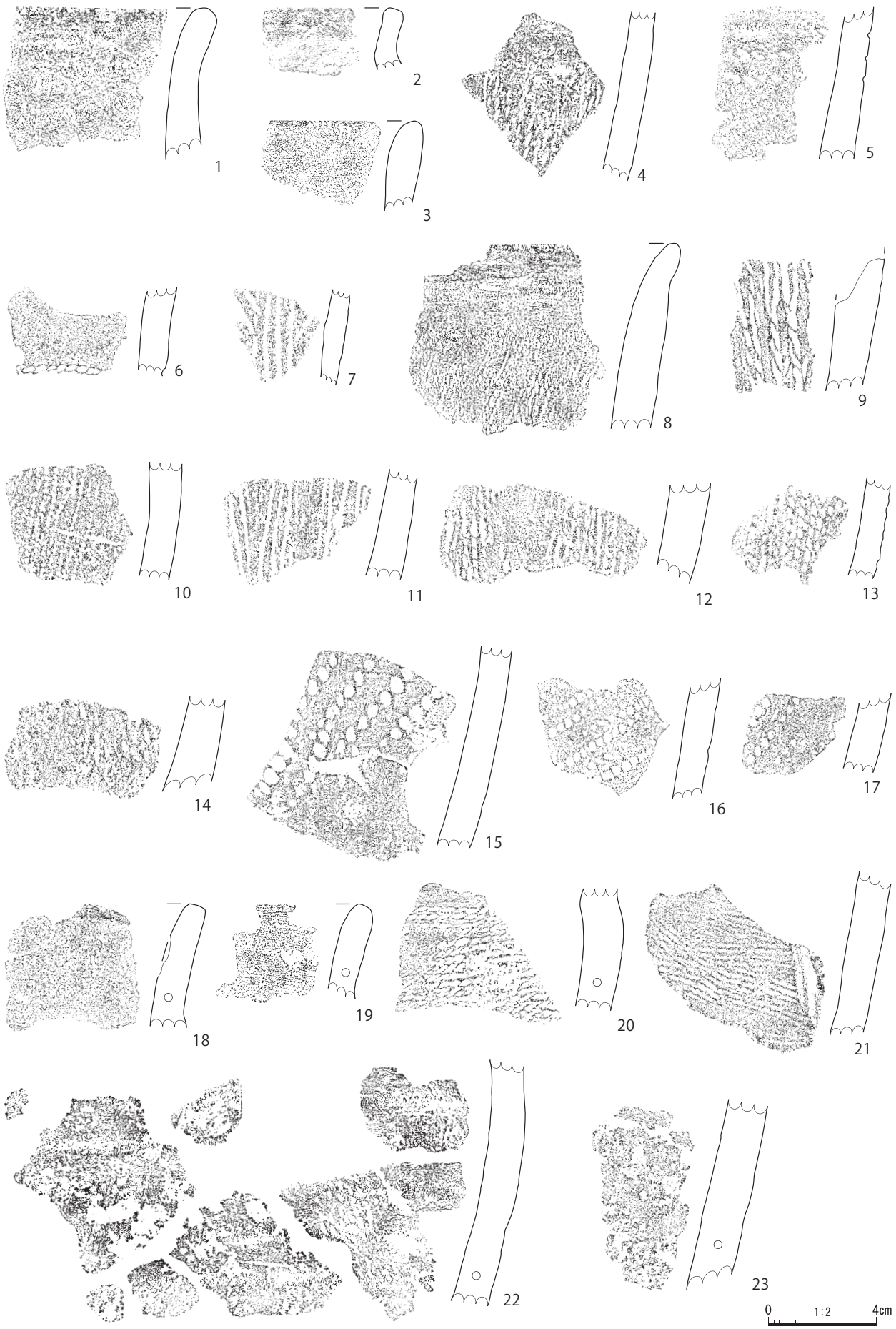

第 236 図　7T－001 住居跡出土土器（３）



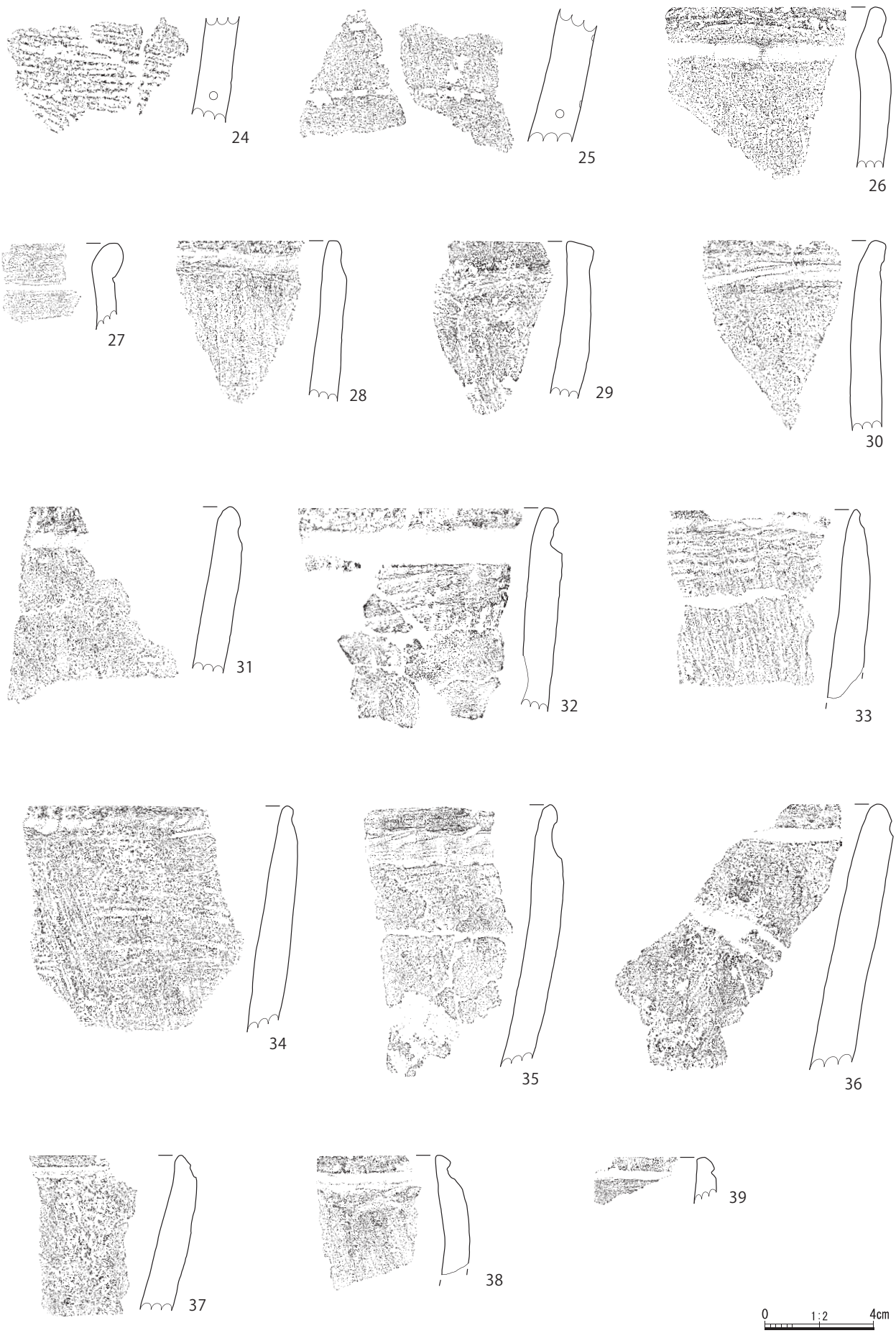

第 237 図　9T－001 住居跡出土土器（1）



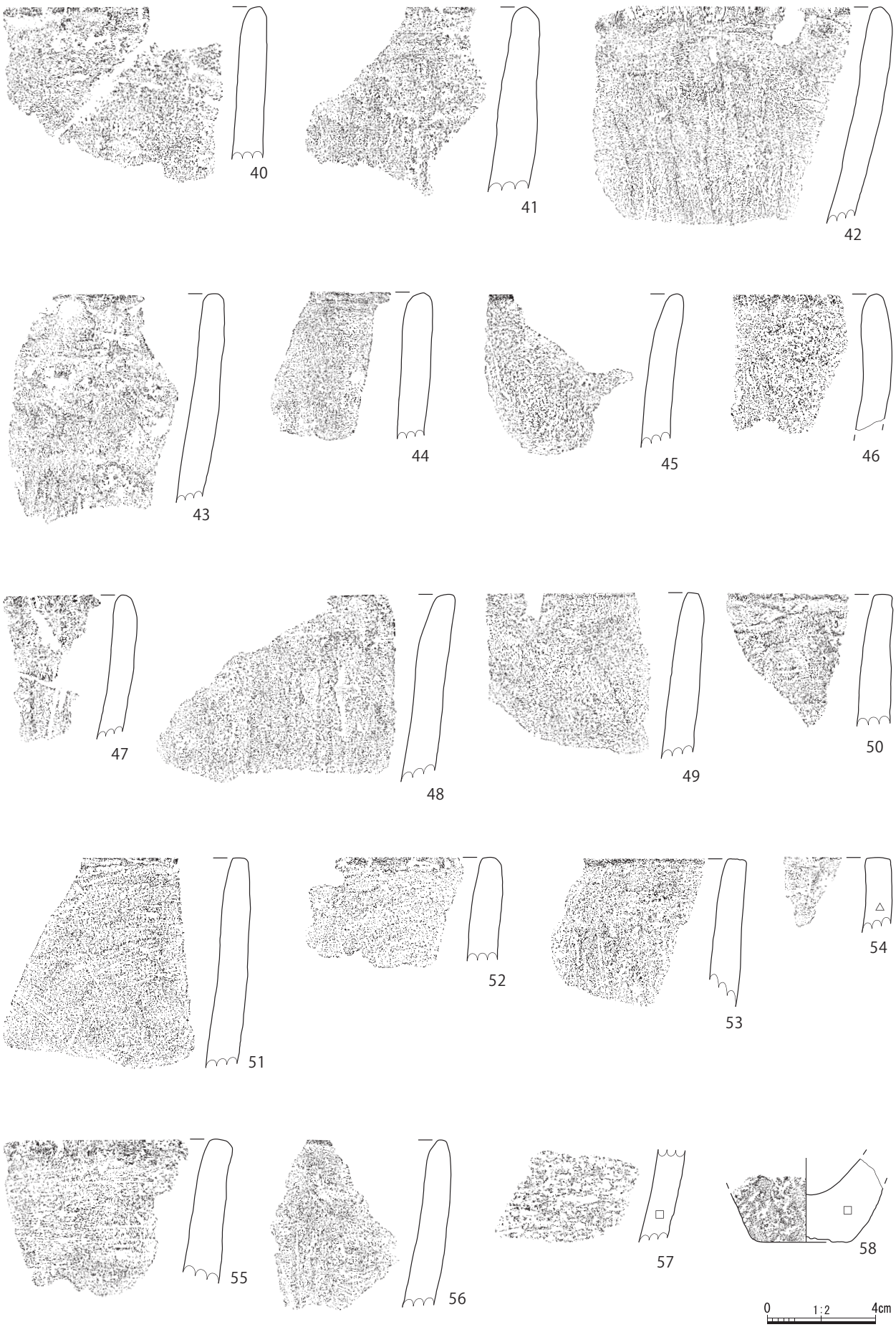

第 238 図　9T－001 住居跡出土土器（２）



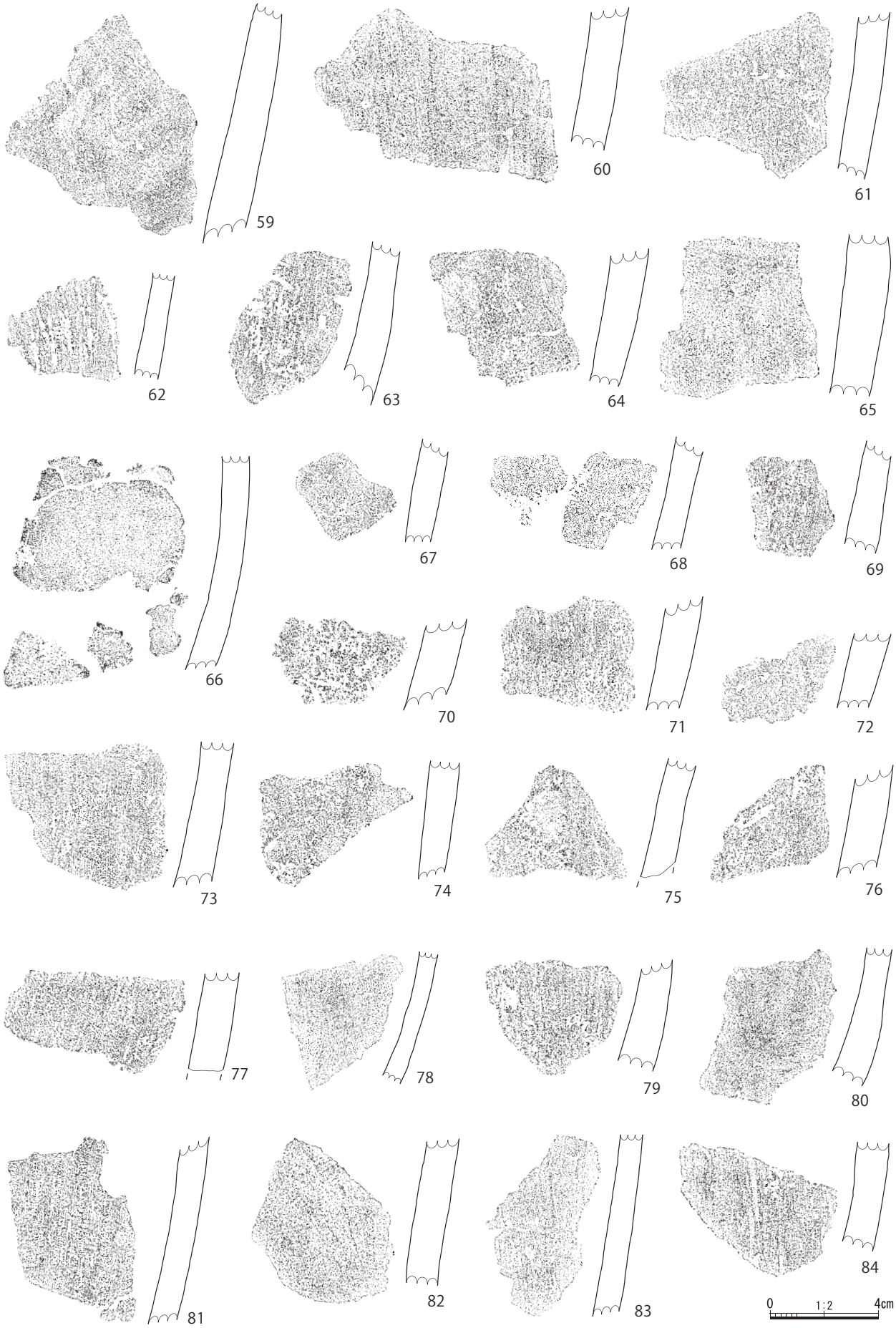

第 239 図　9T－002 住居跡出土土器（１）



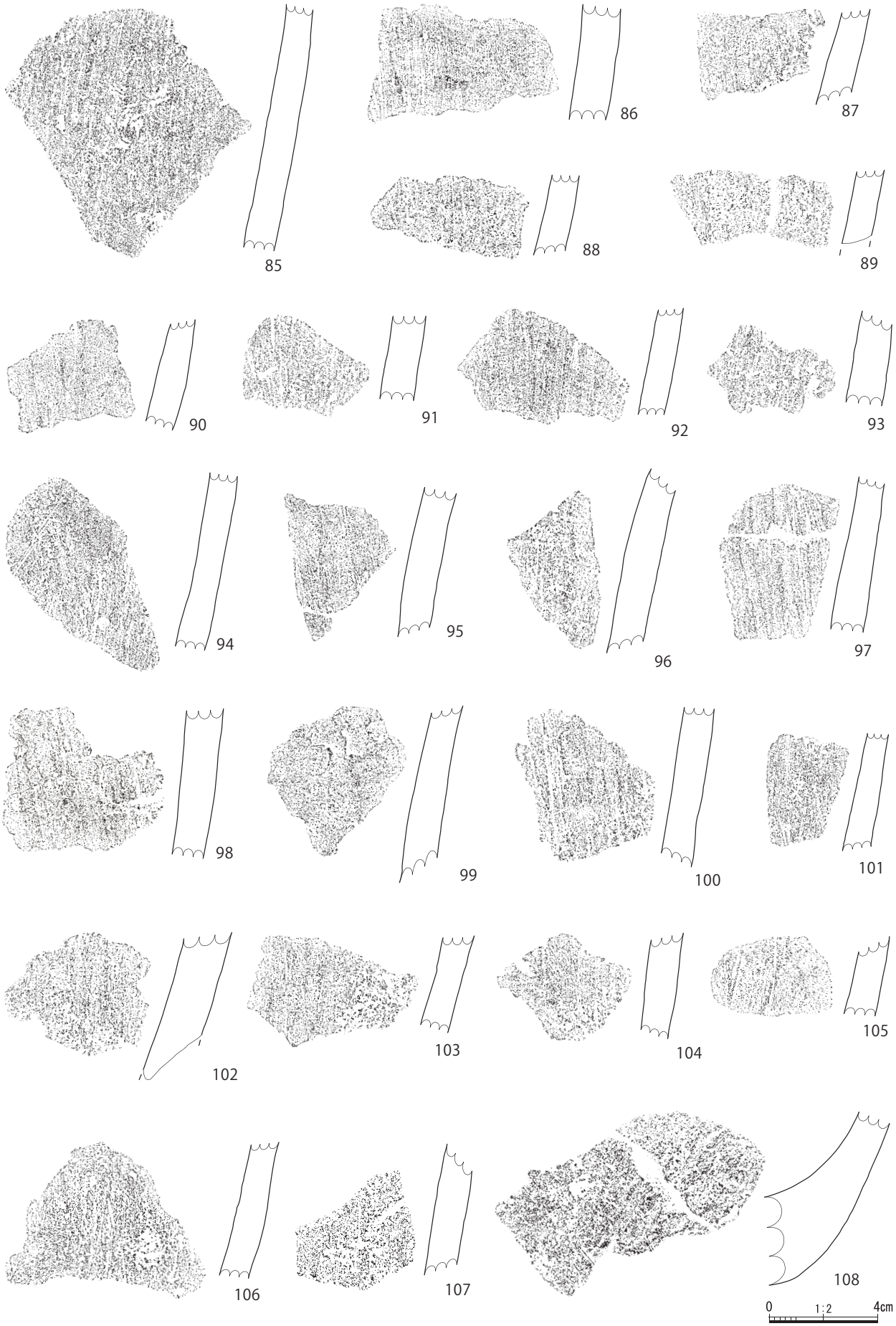

第 240 図　9T－002 住居跡出土土器（２）



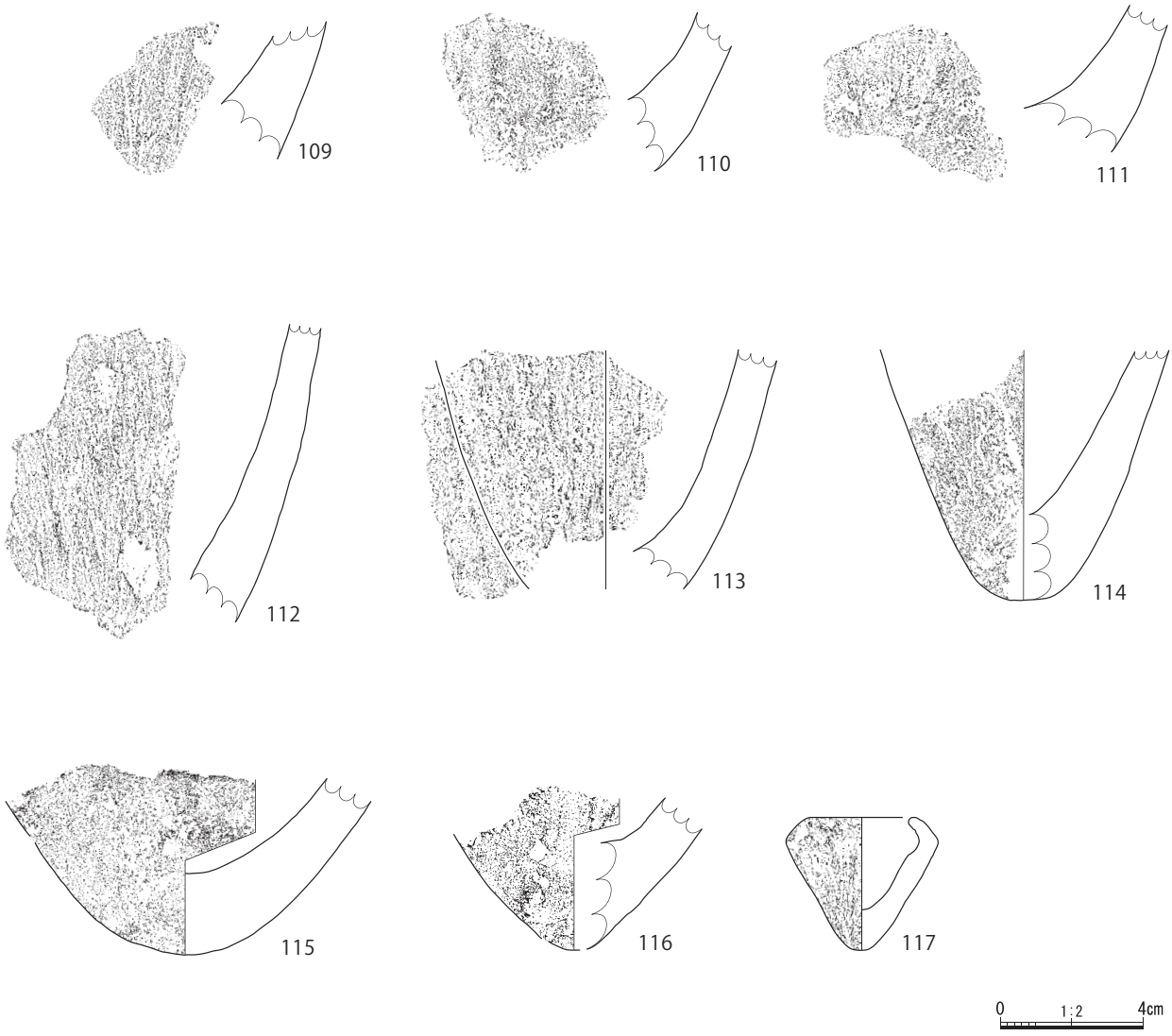

第 241 図　9T－002 住居跡出土土器（３）



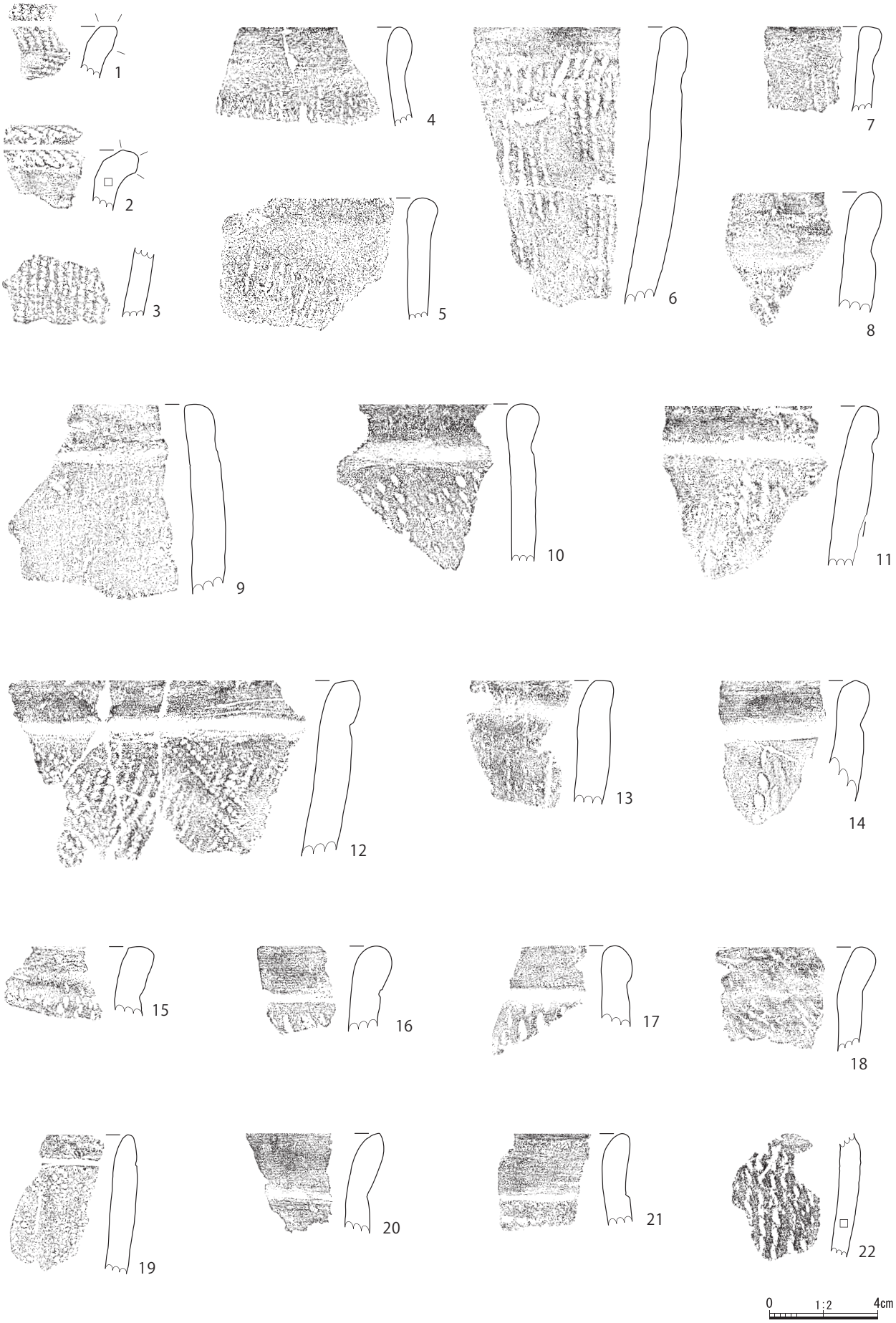

第 242 図　9T－002 住居跡出土土器（４）



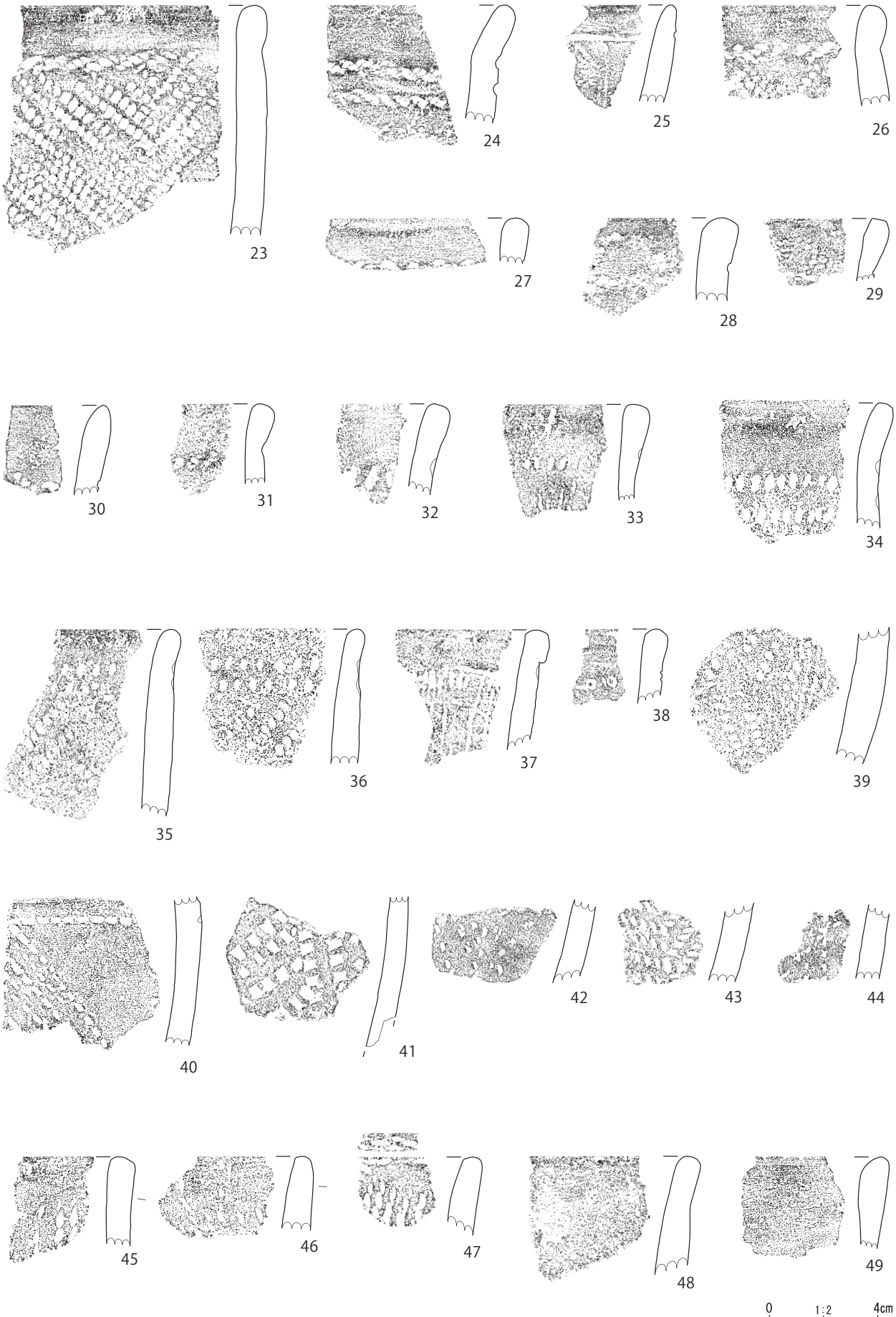

第 243 図　9T－002 住居跡出土土器（５）



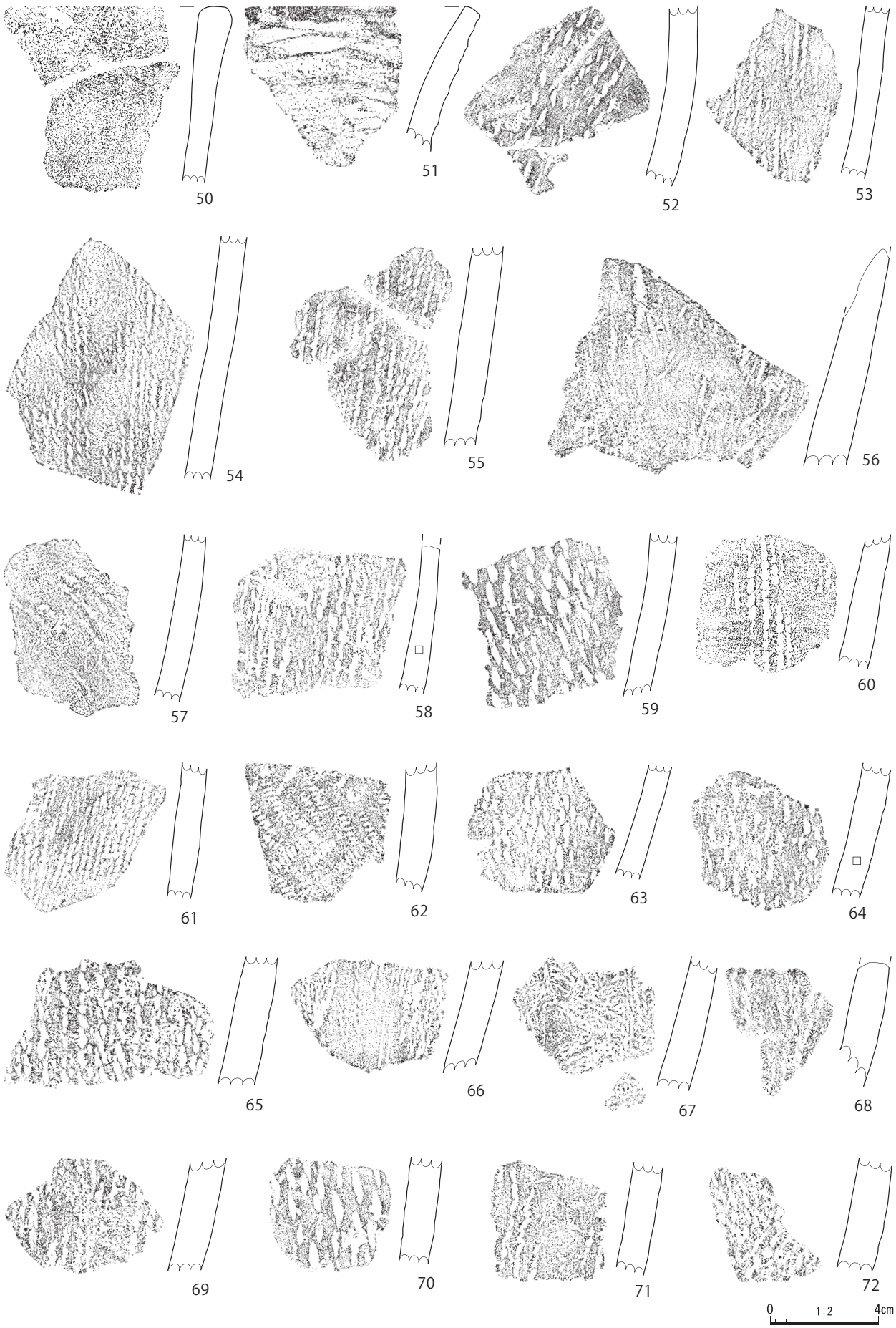

第 244 図　9T－002 住居跡出土土器（６）



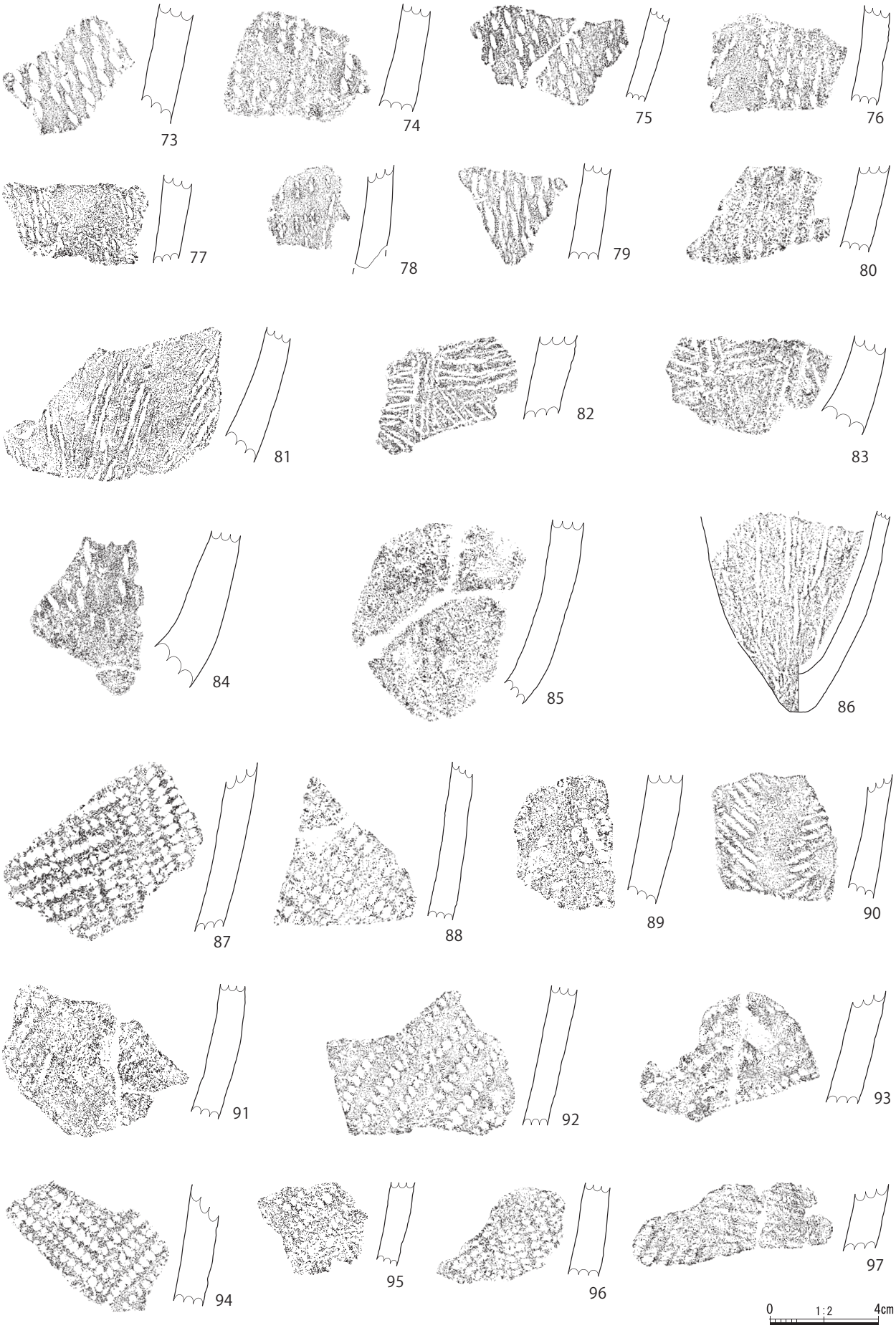

第 245 図　10T－001 住居跡出土土器（１）



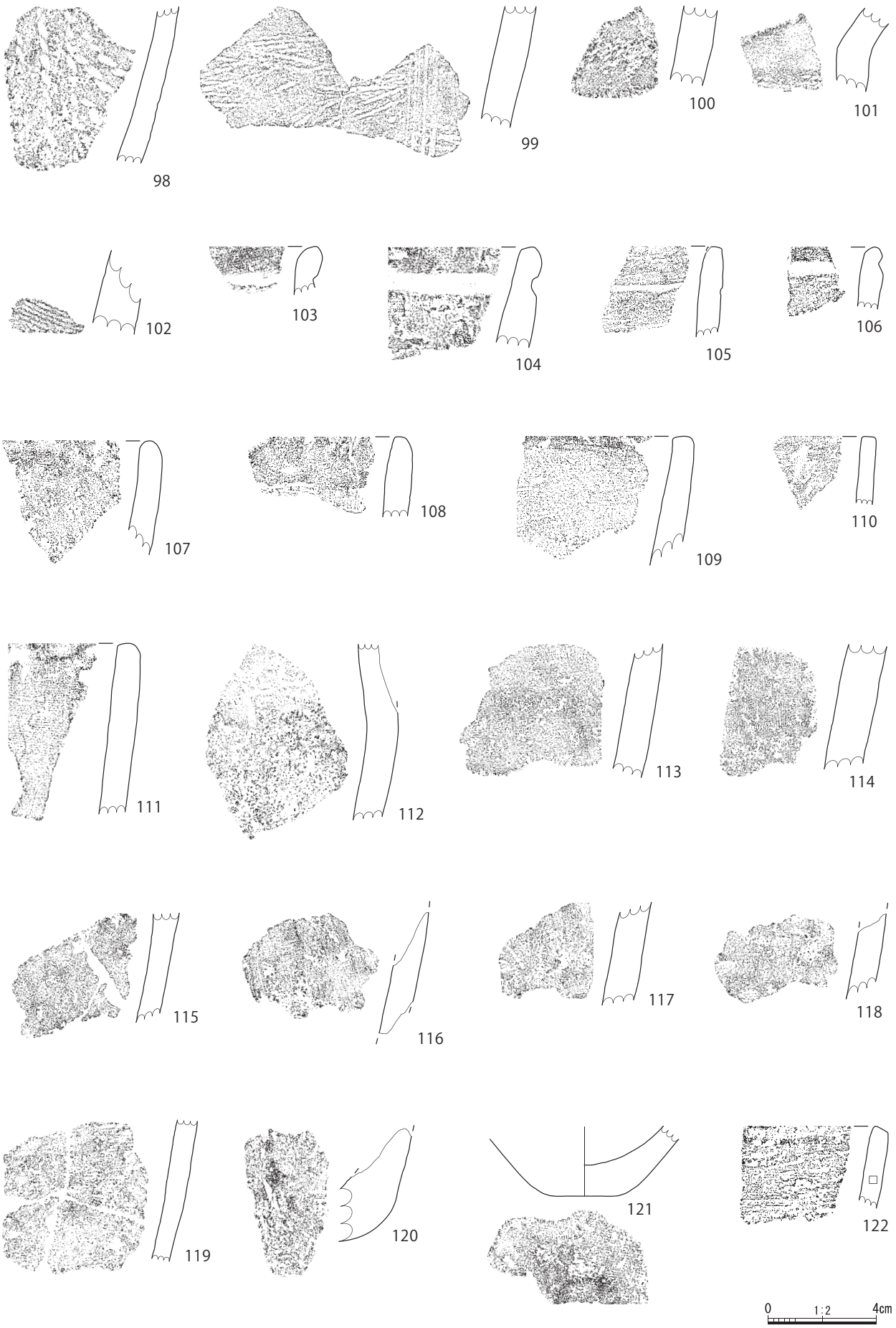

第 246 図　10T－001 住居跡出土土器（２）



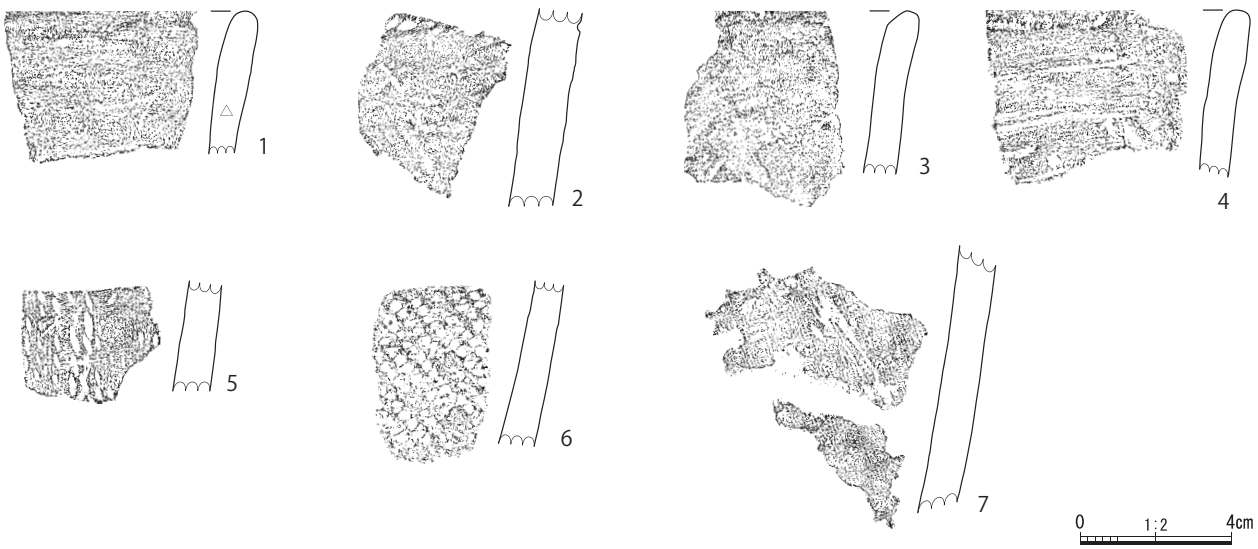

第 247 図　10T－001 住居跡出土土器（3）



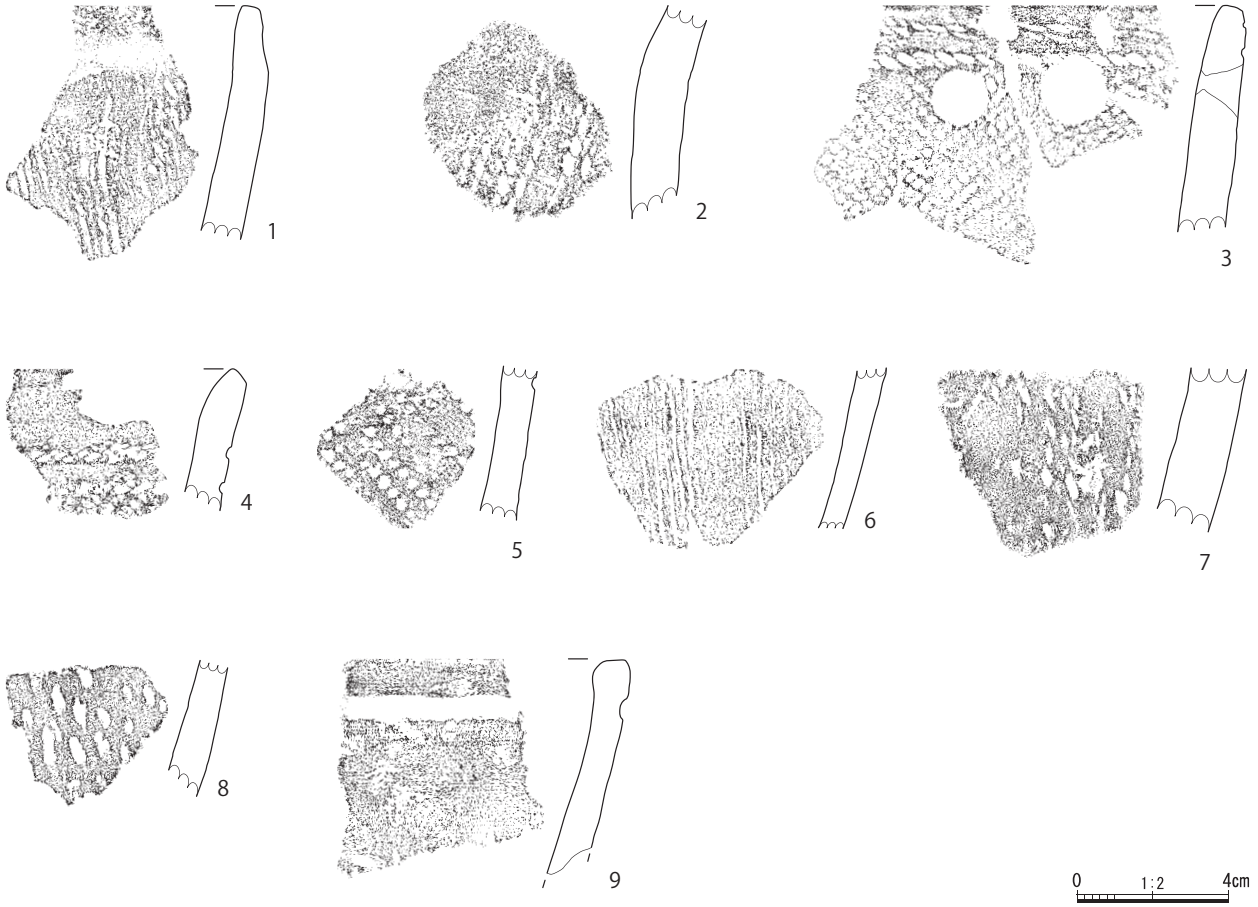

第 248 図　10T－001 住居跡出土土器（４）



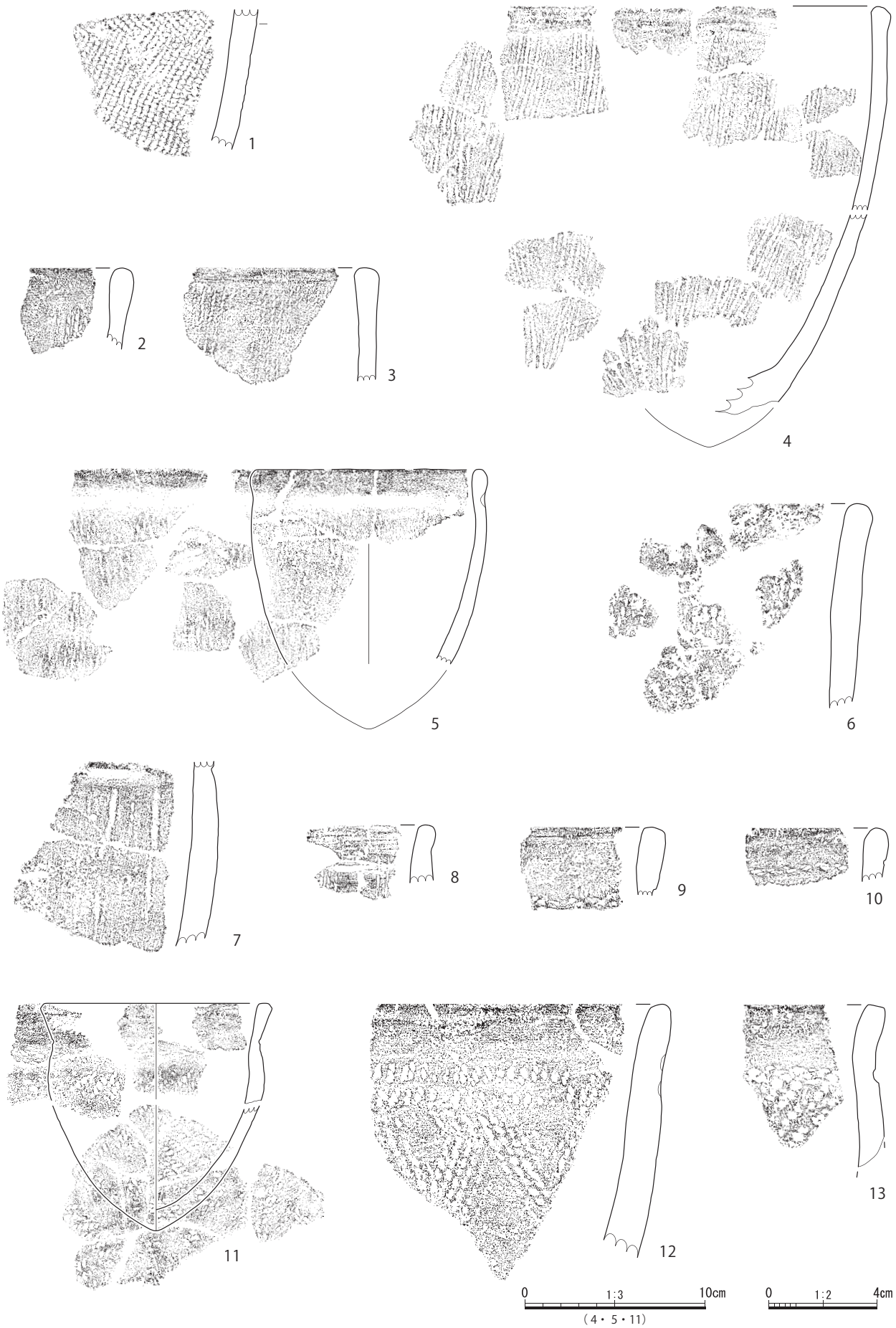

第 249 図　10T－001 住居跡出土土器（５）



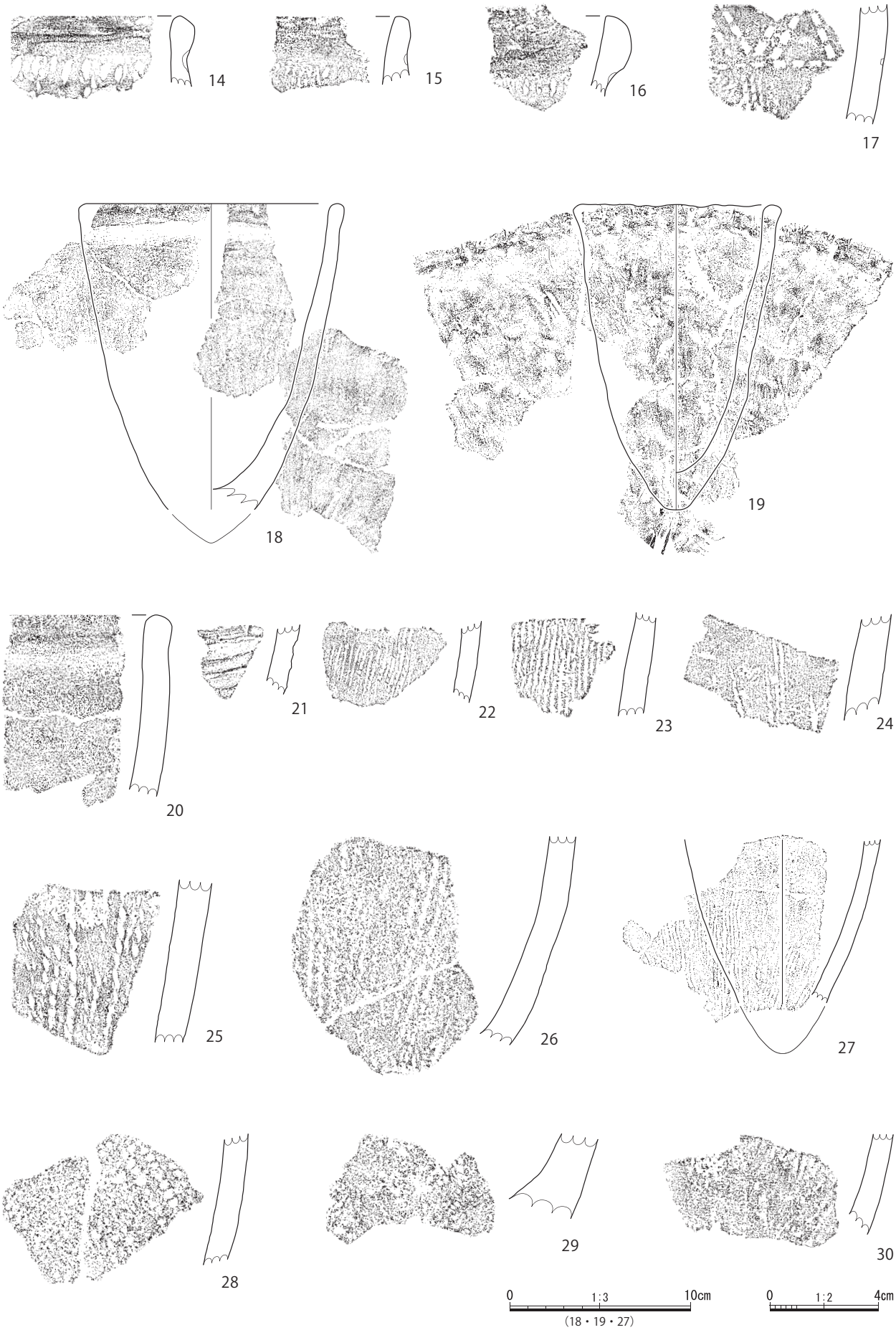

第 250 図　10T－004 住居跡出土土器



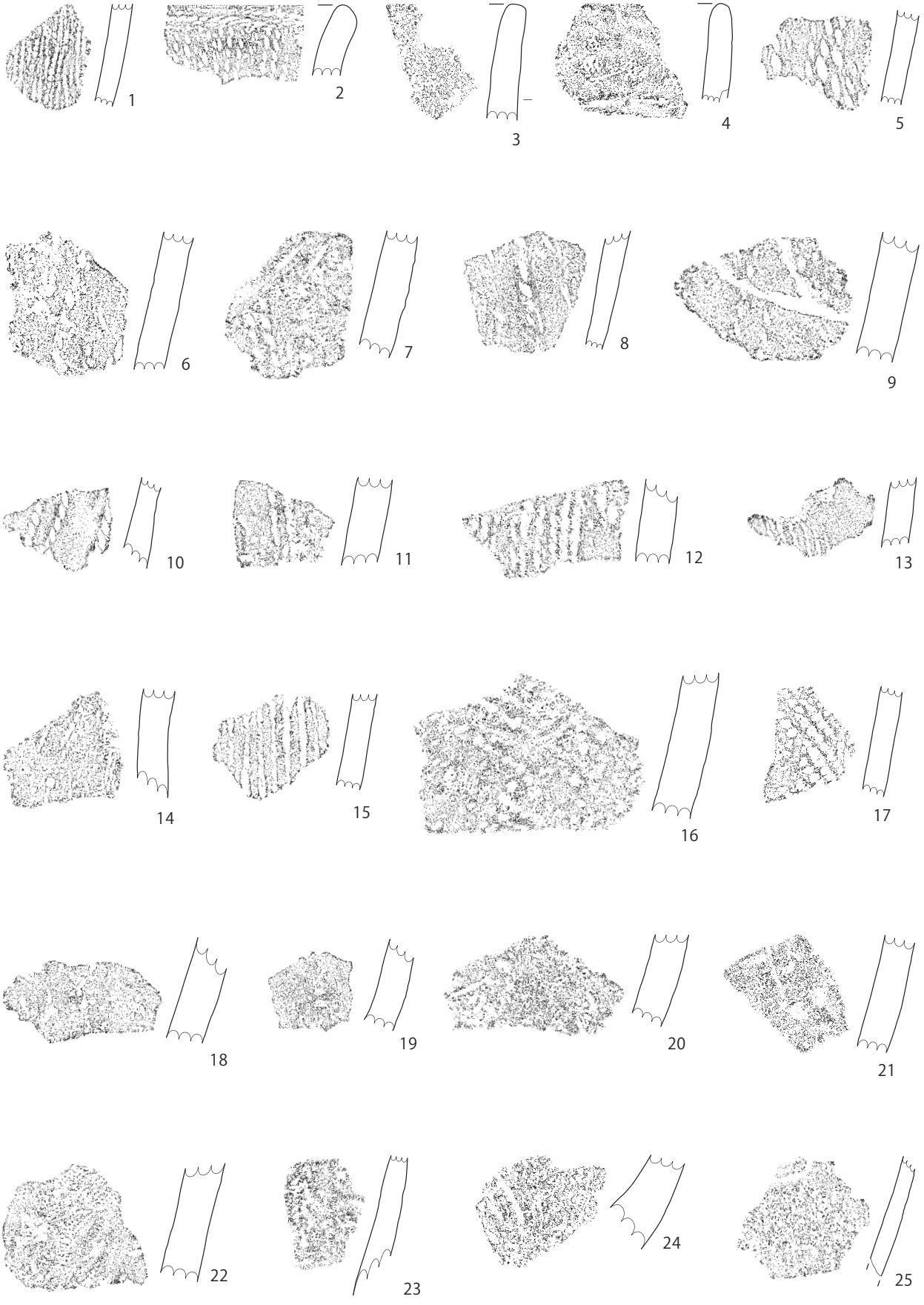

第 251 図　10T－005 住居跡出土土器



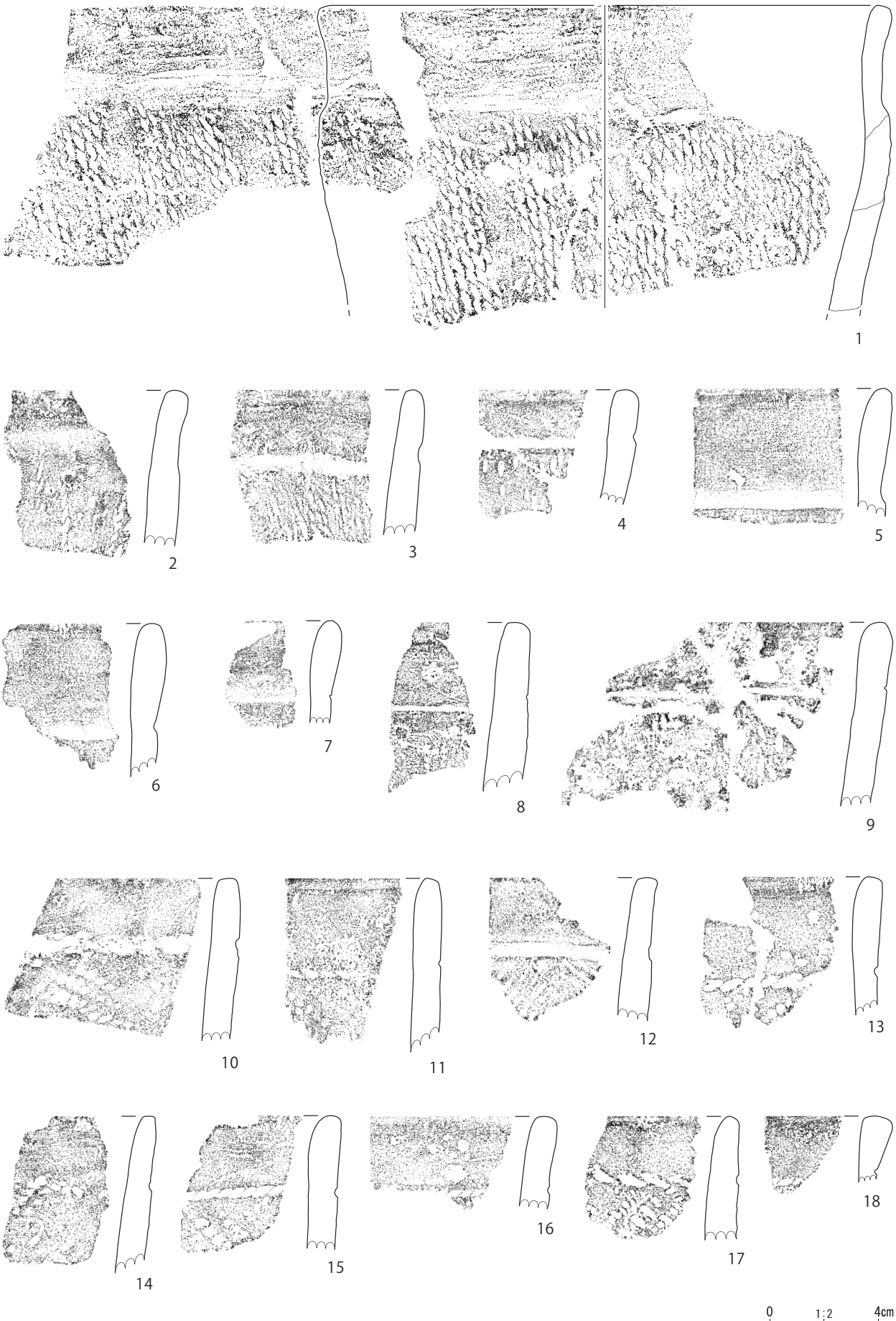

第 252 図　10T－007 住居跡出土土器（１）



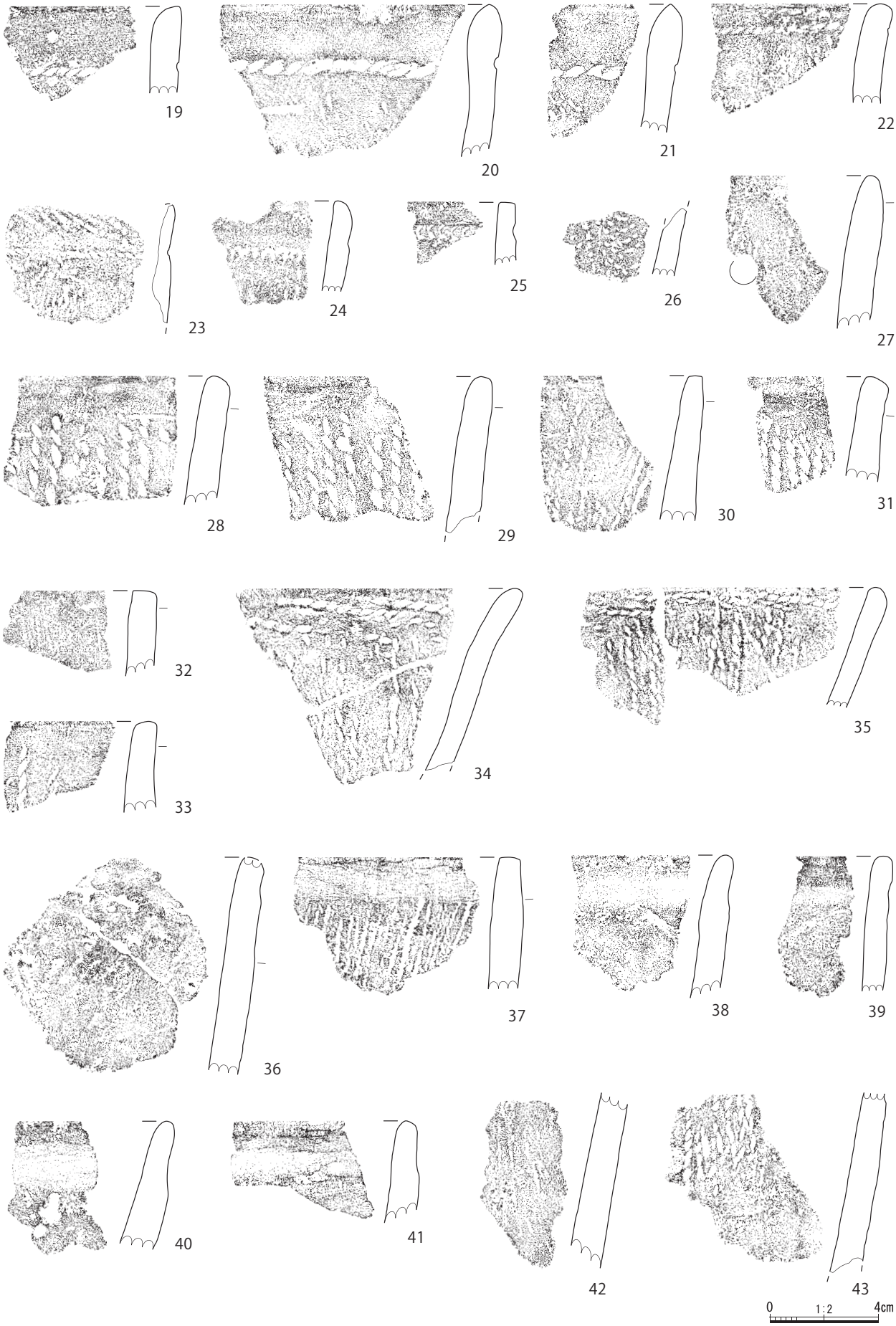

第 253 図　10T－007 住居跡出土土器（２）



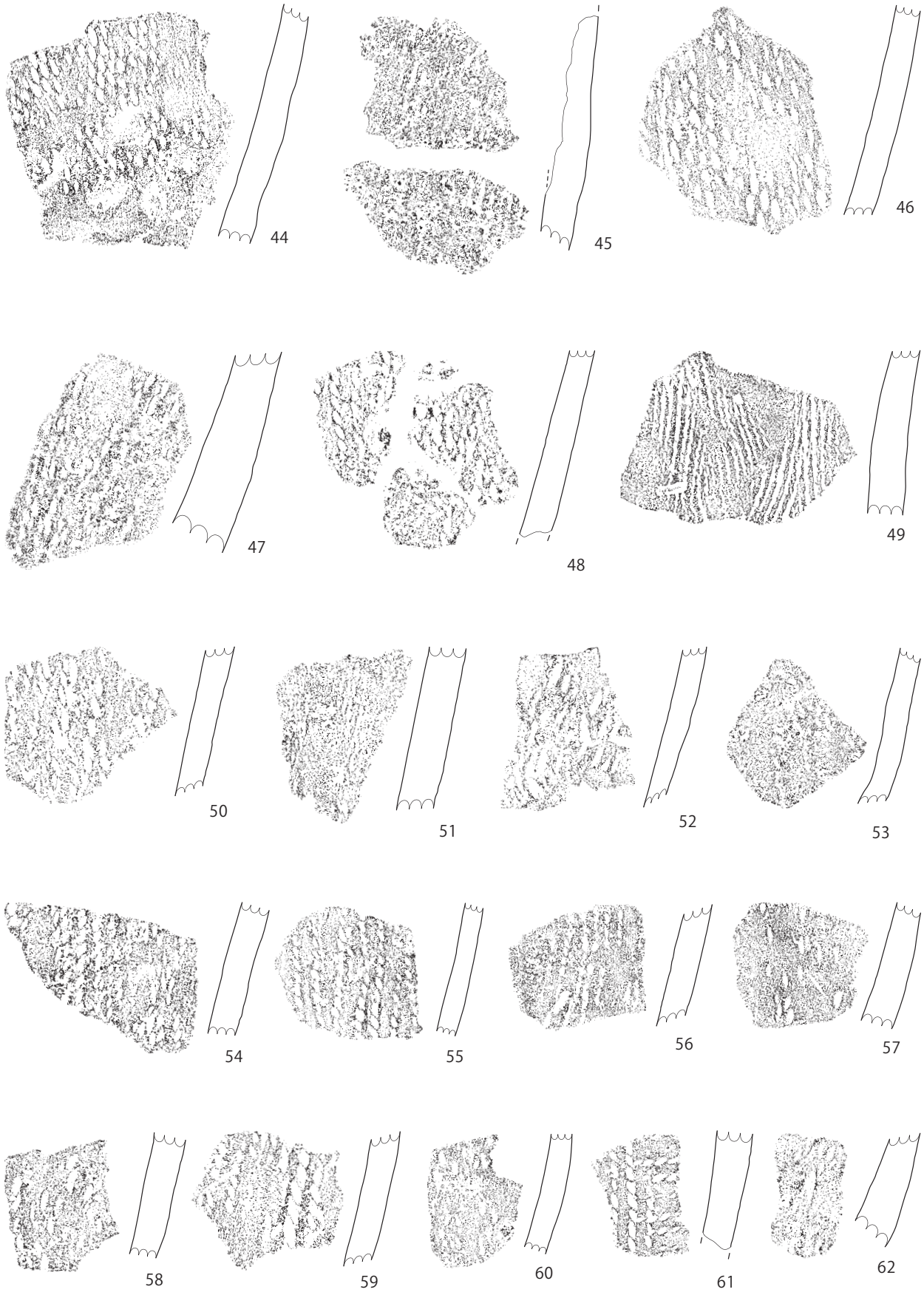

第 254 図　12T－001 住居跡出土土器



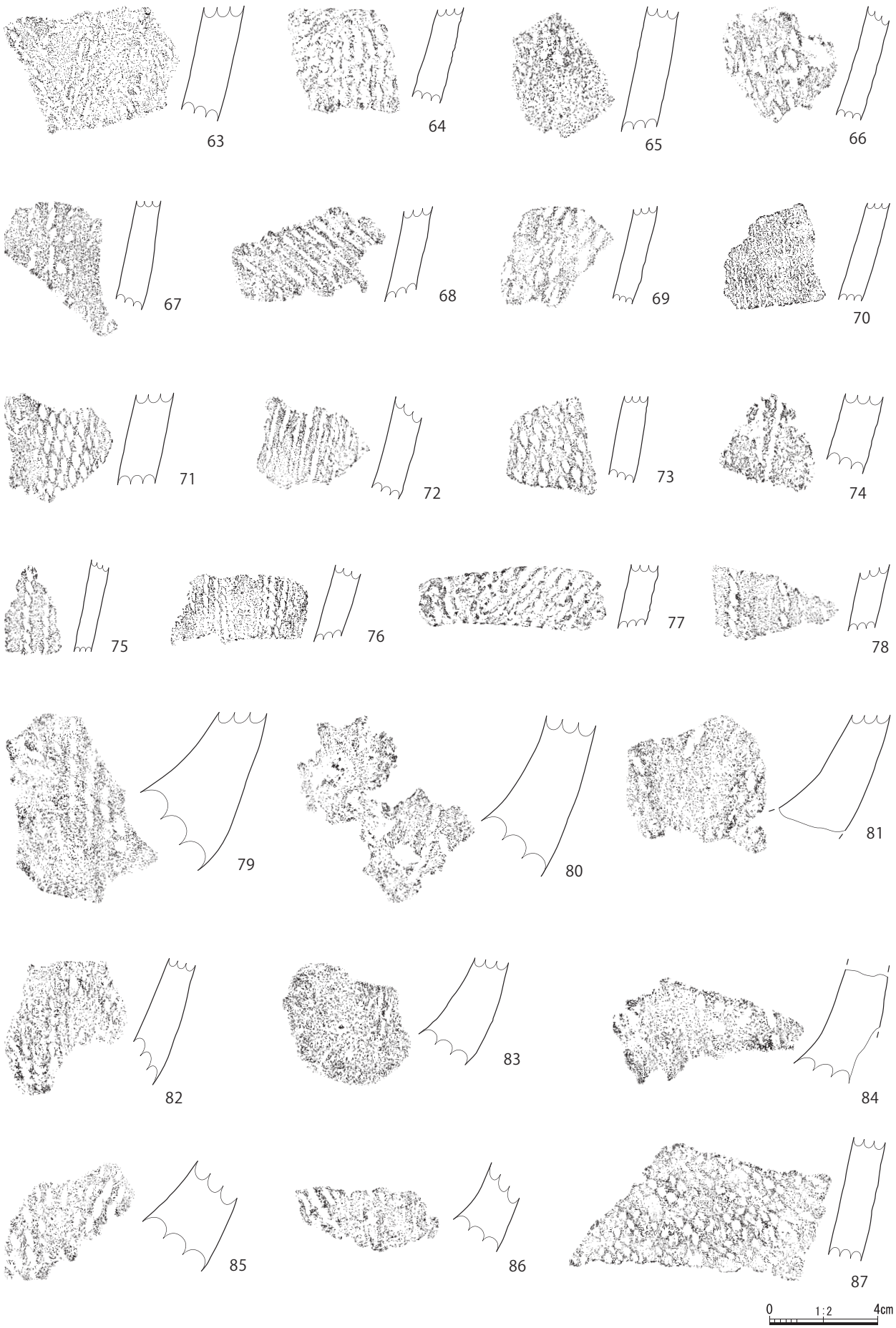

第 255 図　12T－002 住居跡出土土器（１）



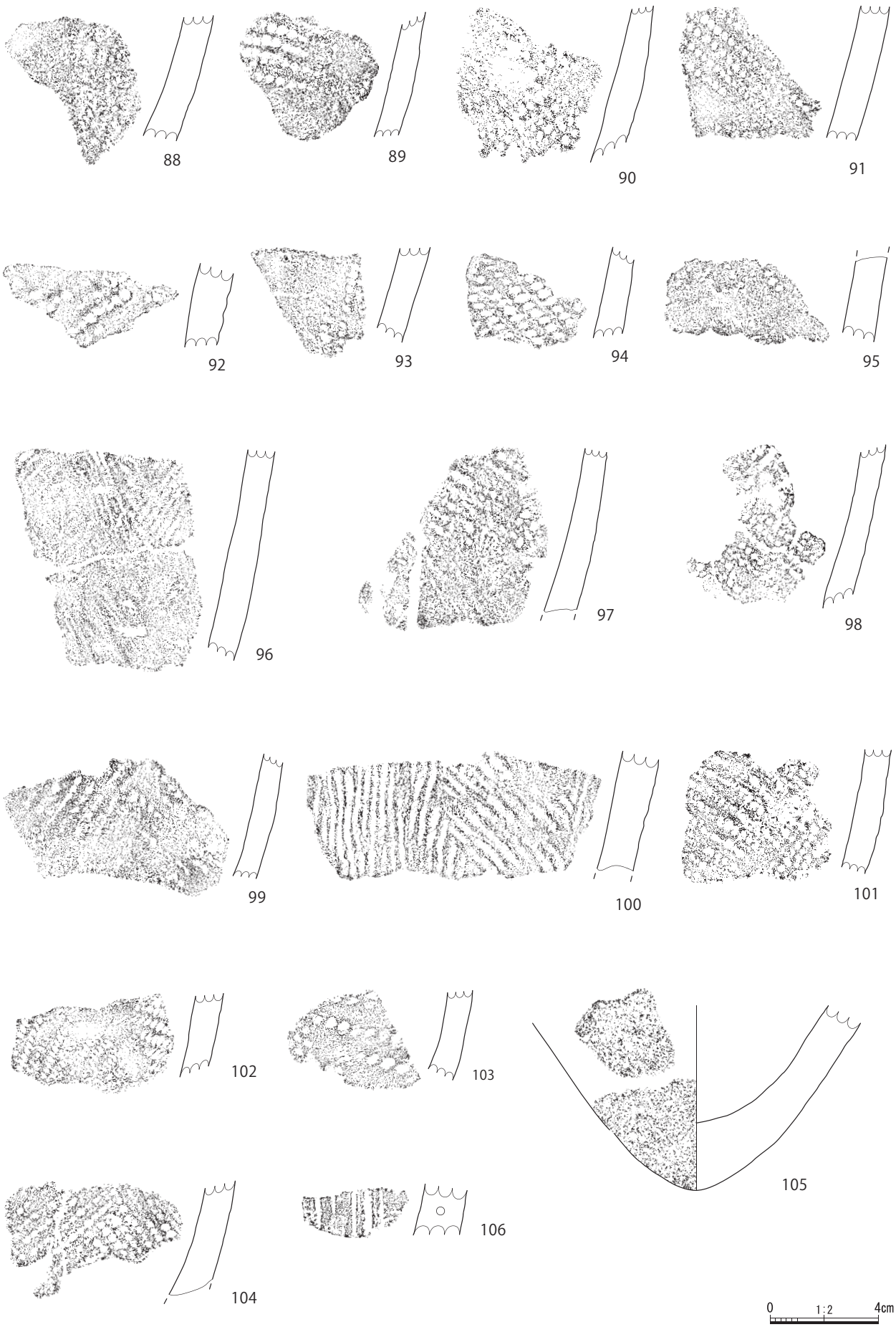

第 256 図　12T－002 住居跡出土土器（２）



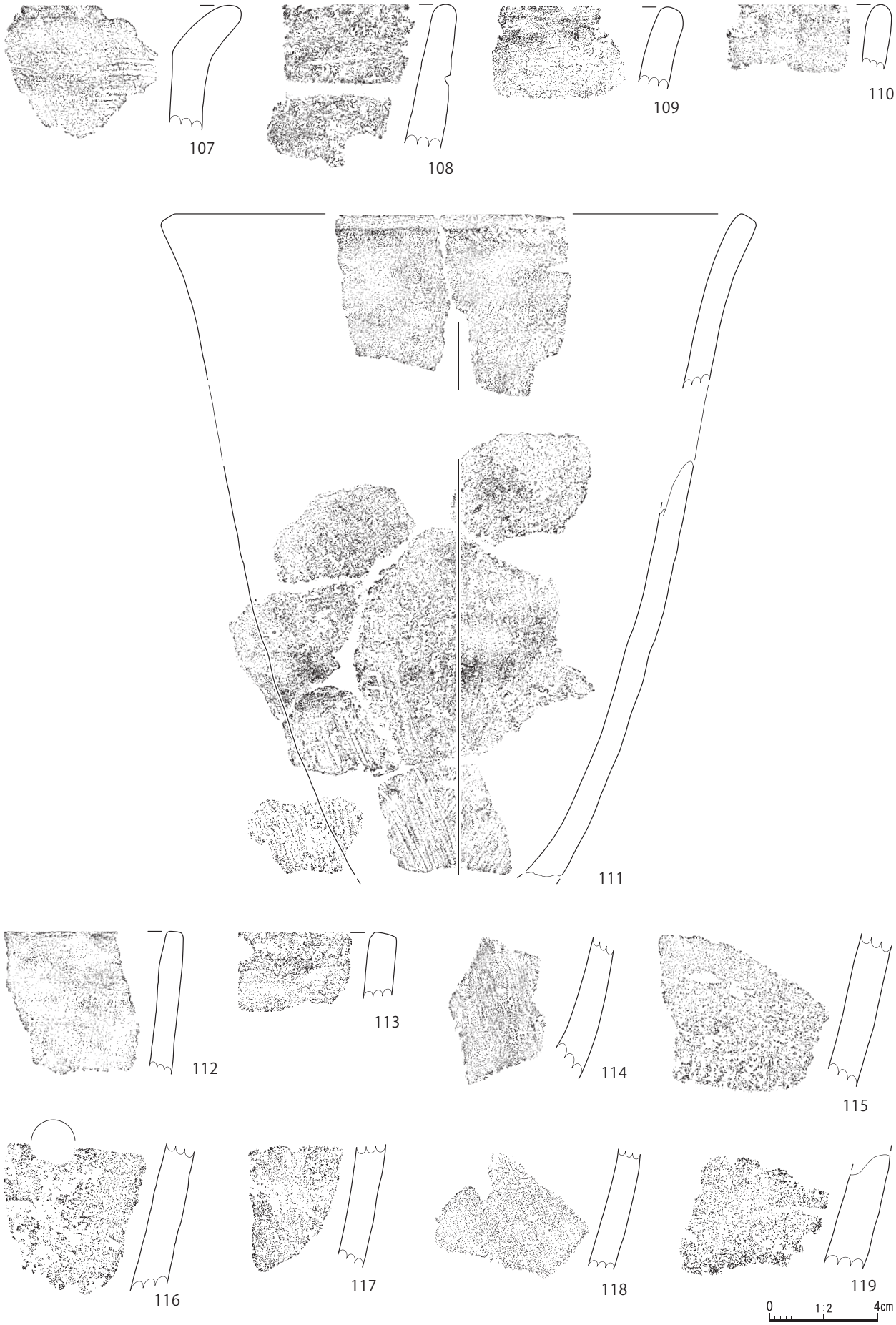

第 257 図　12T－002 住居跡出土土器（３）



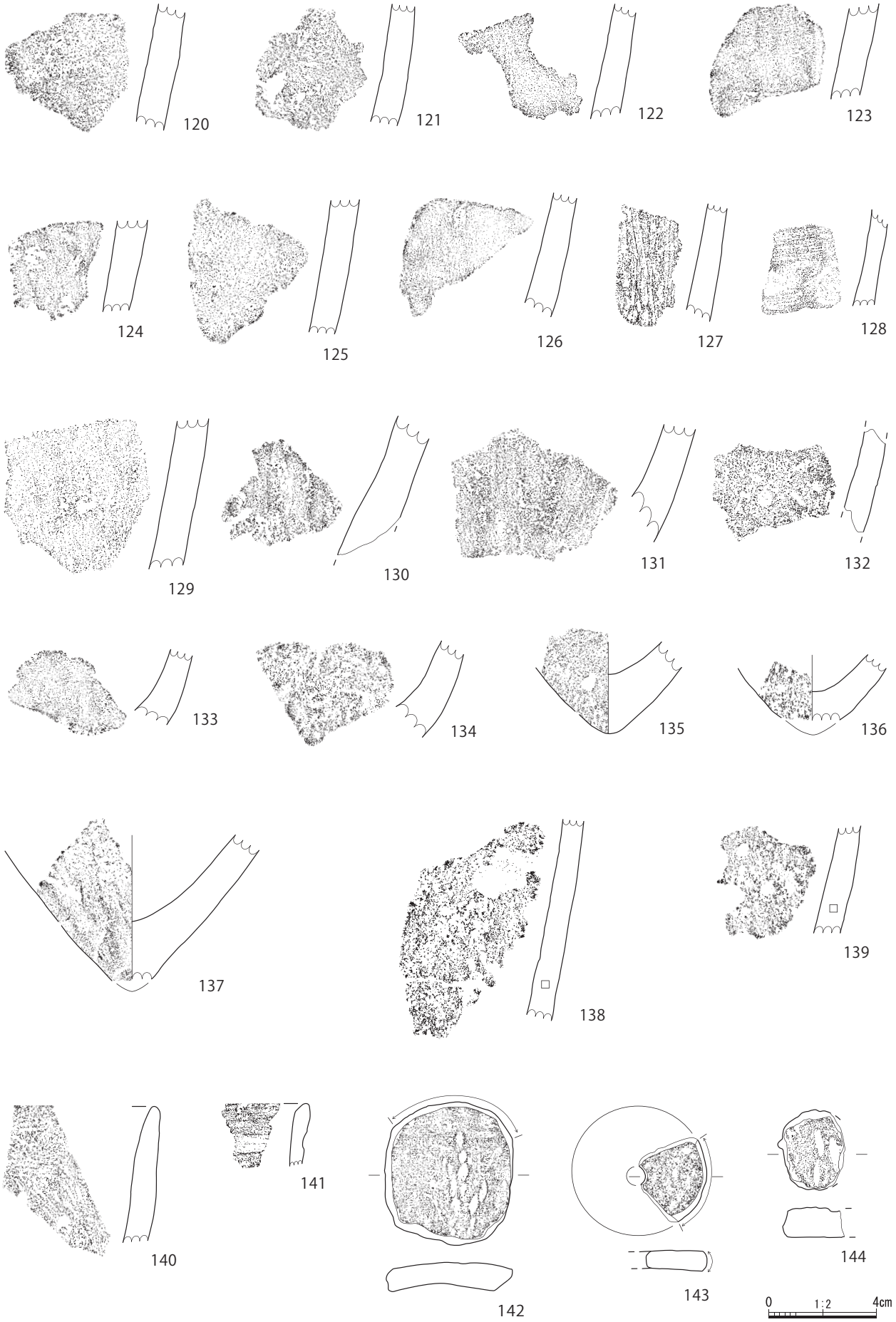

第 258 図　12T－002 住居跡出土土器（４）



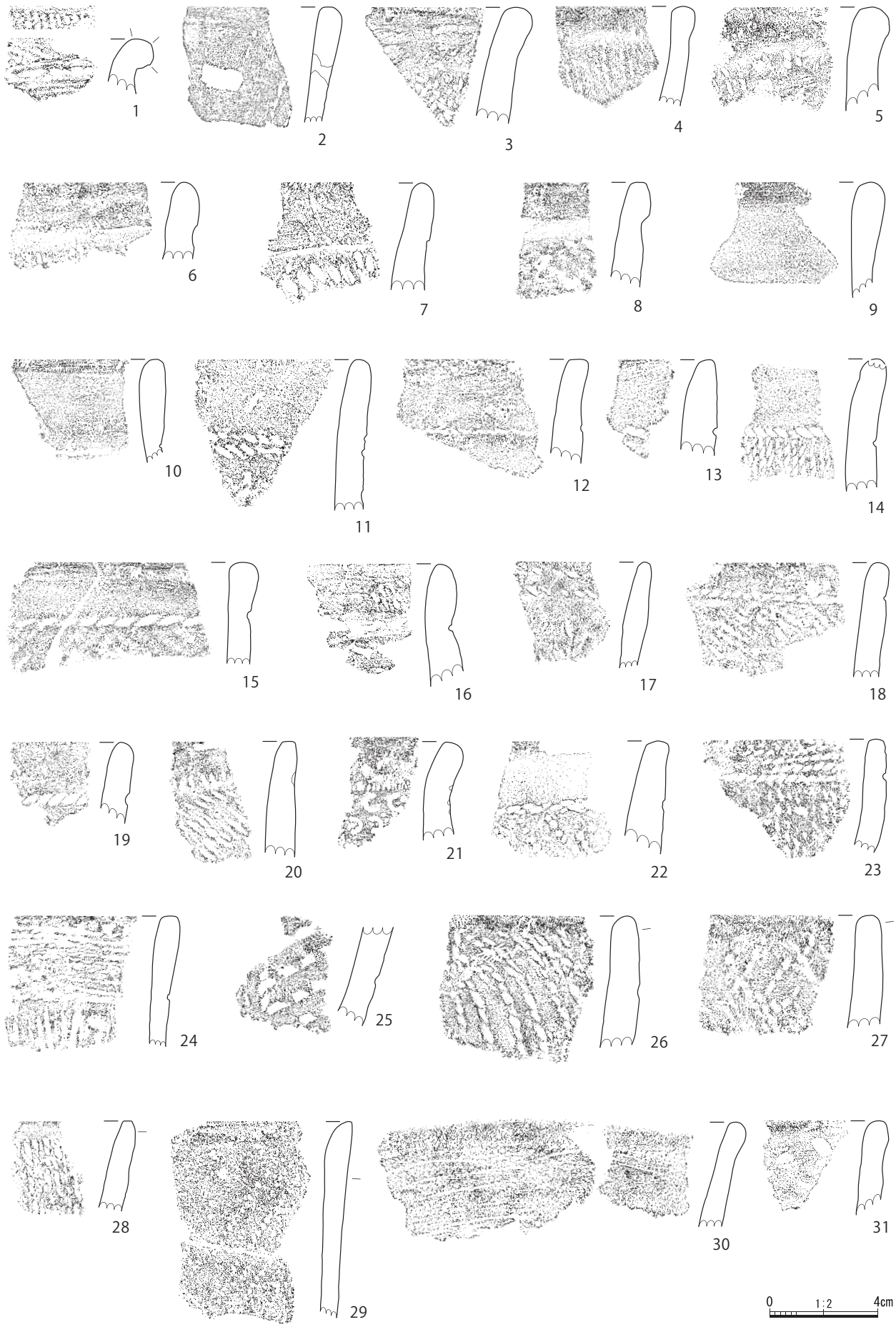

第 259 図　12T－002 住居跡出土土器（５）



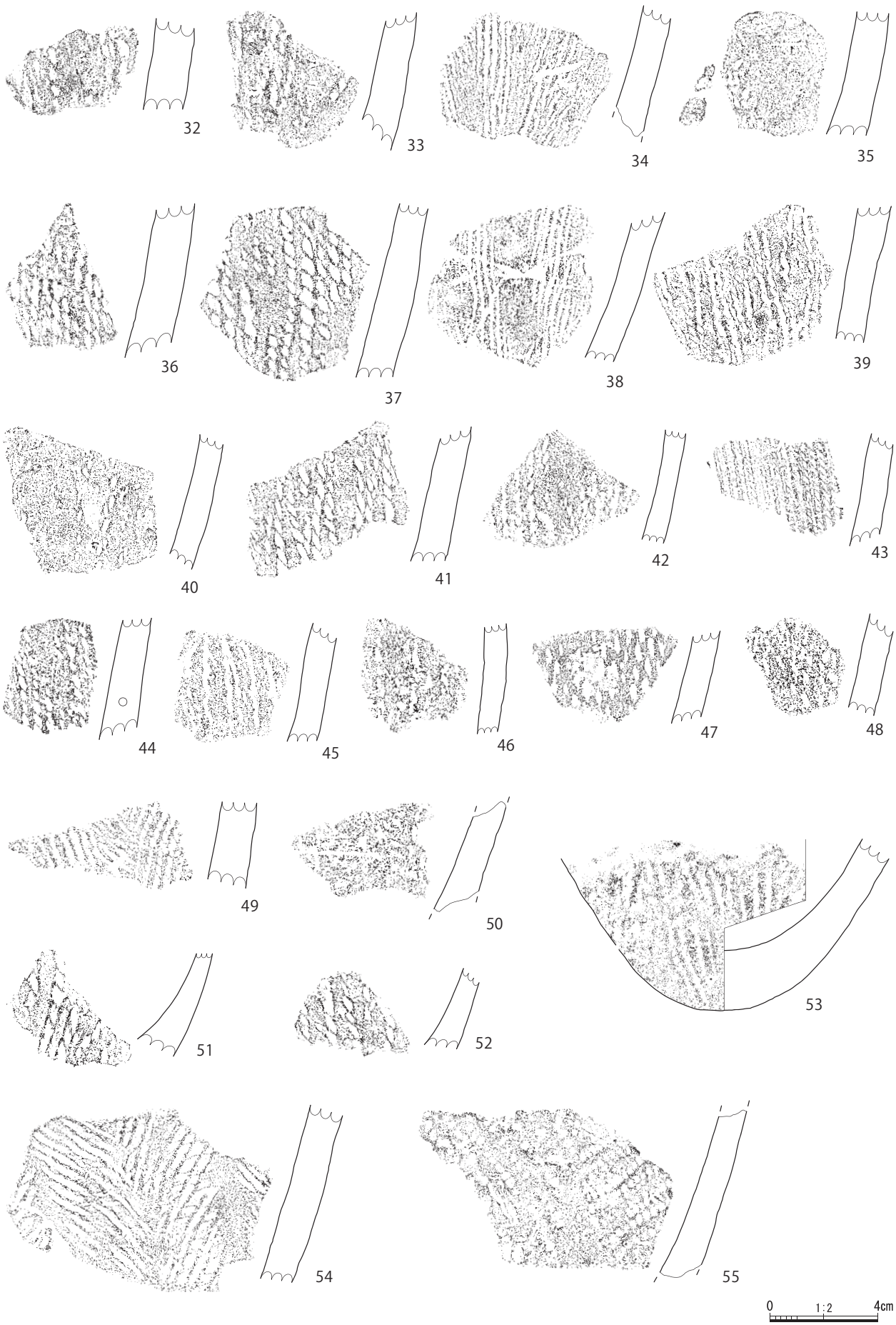

第 260 図　12T－002 住居跡出土土器（６）



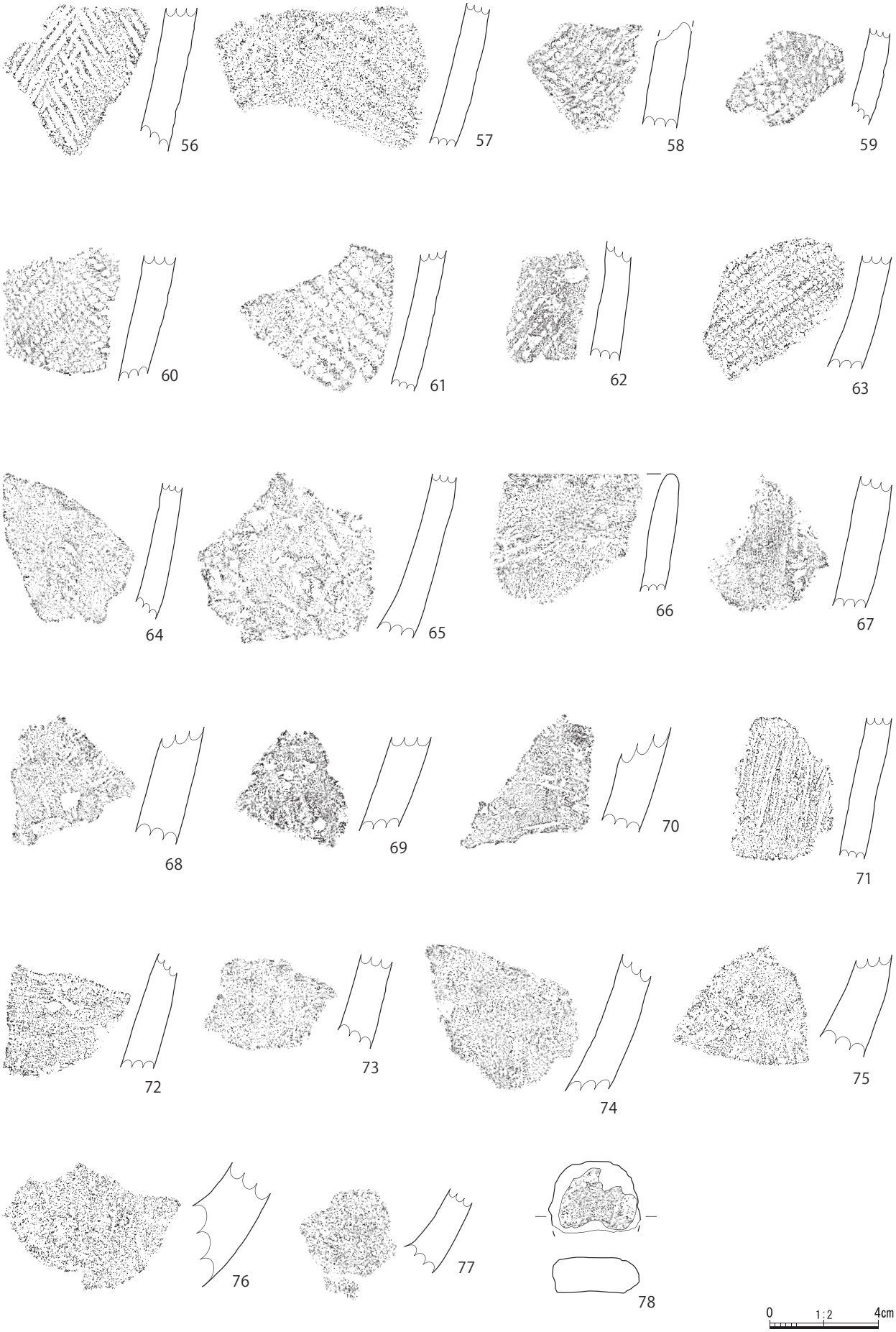

第 261 図　12T－002 住居跡出土土器（７）



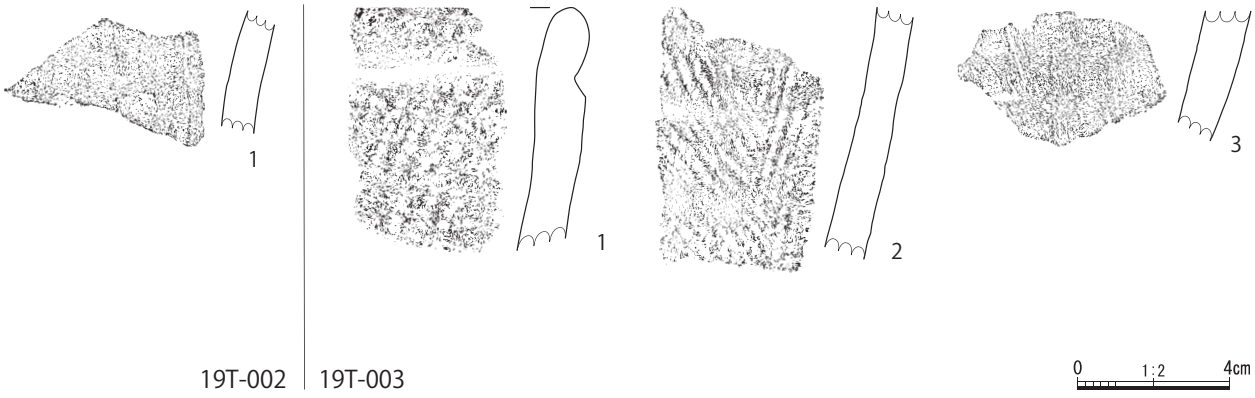

第 262 図　16T－001 住居跡出土土器（1）



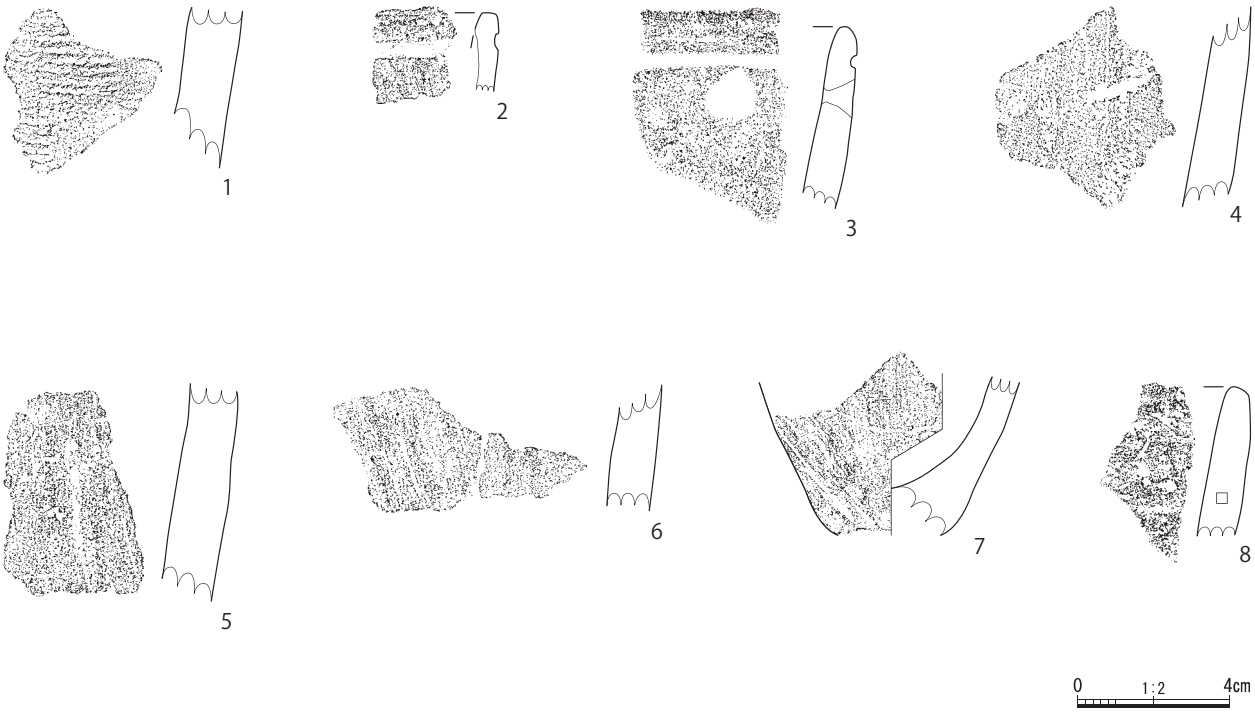

第 263 図　16T－001 住居跡出土土器（２）



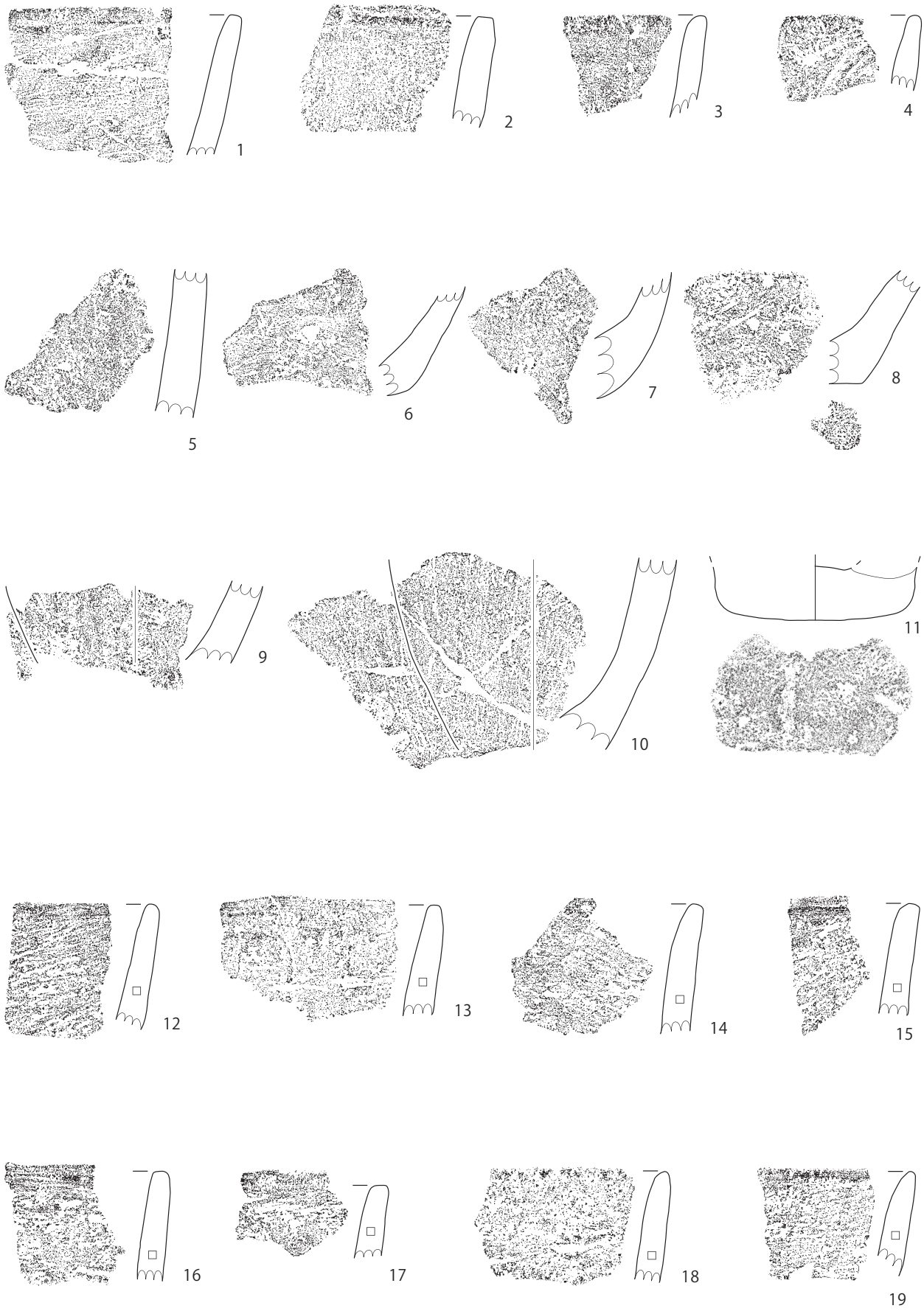

第 264 図　16T－001 住居跡出土土器（3）



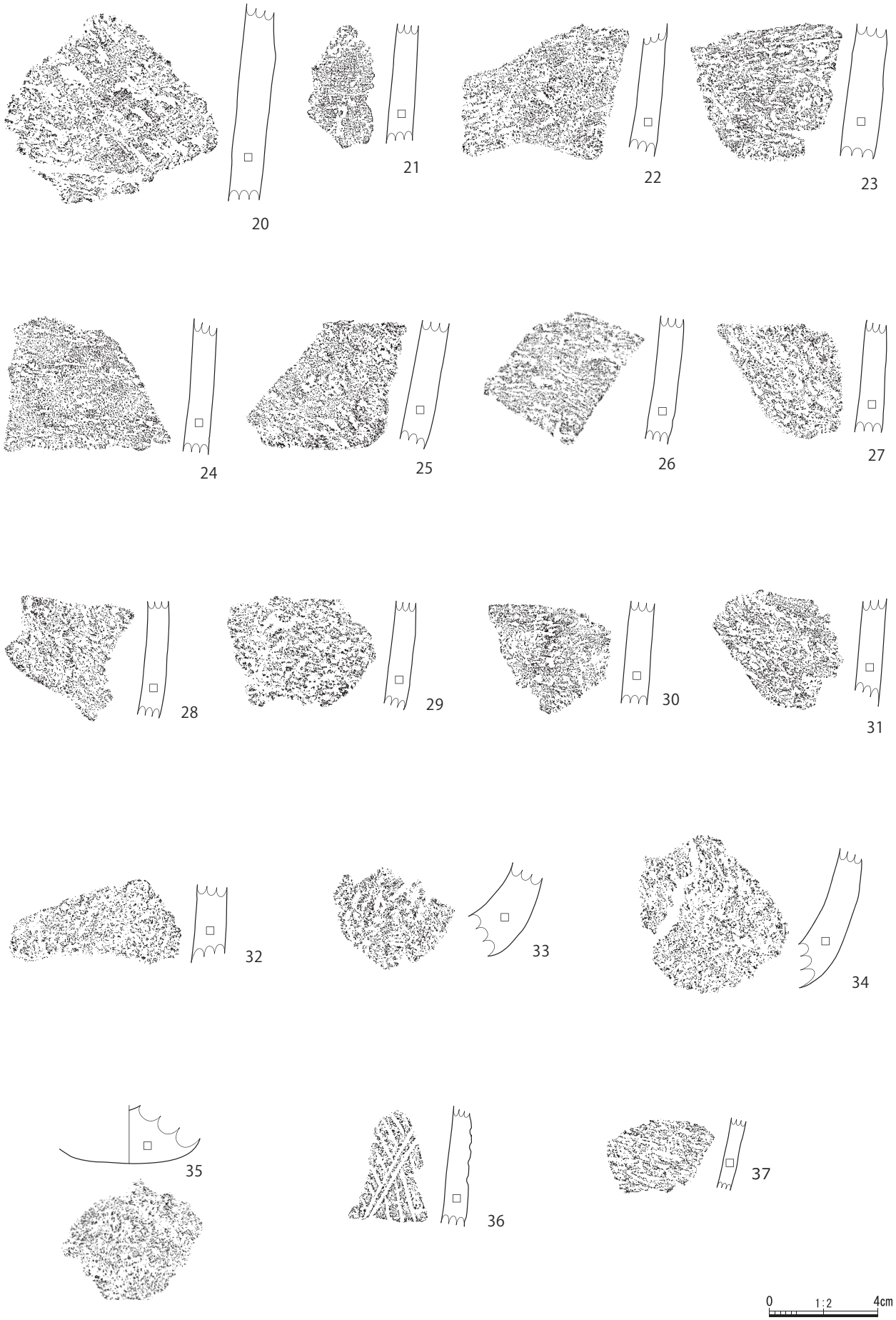

第 265 図　19T－002・003 住居跡出土土器



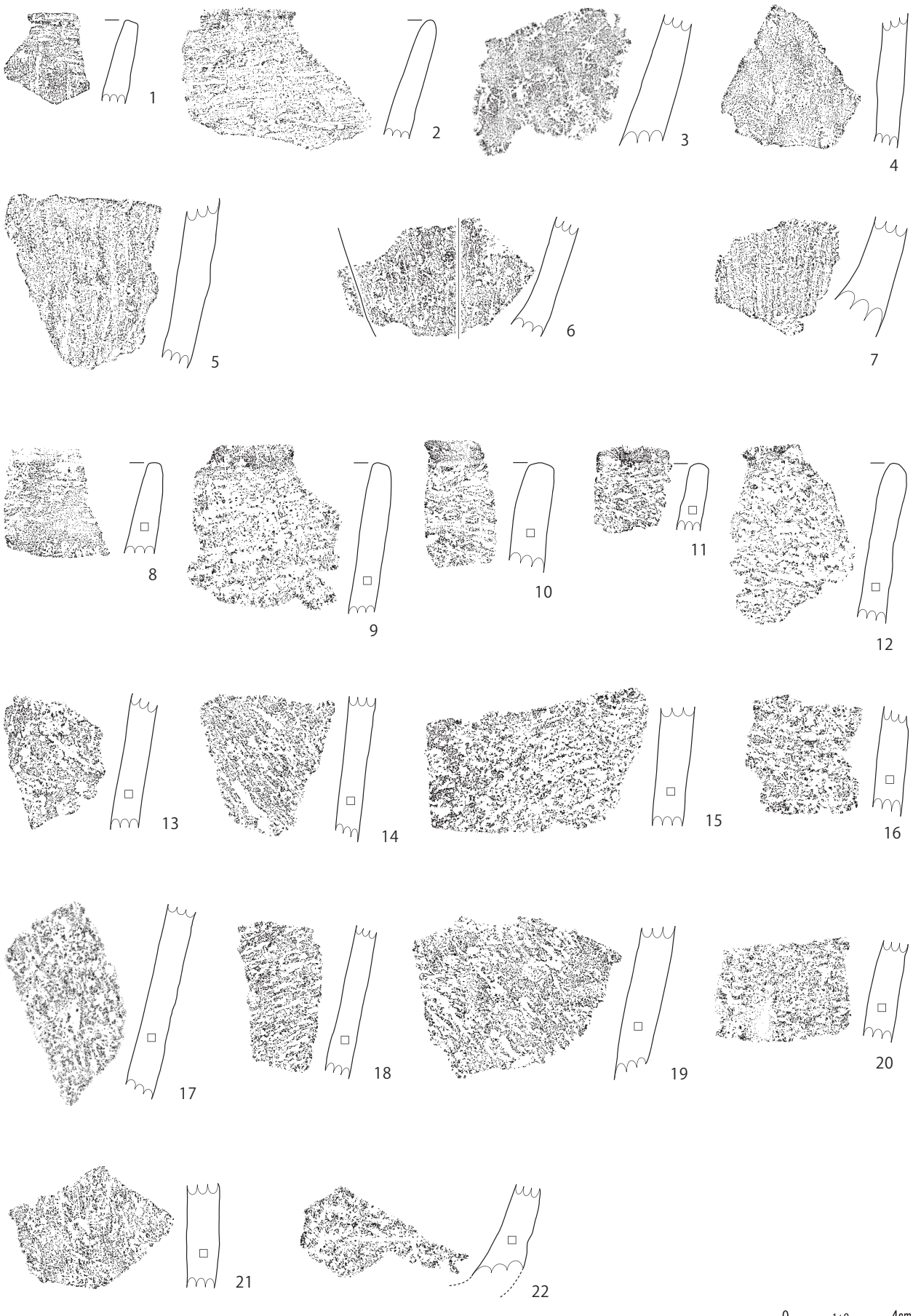

第 266 図　23T－004 住居跡出土土器



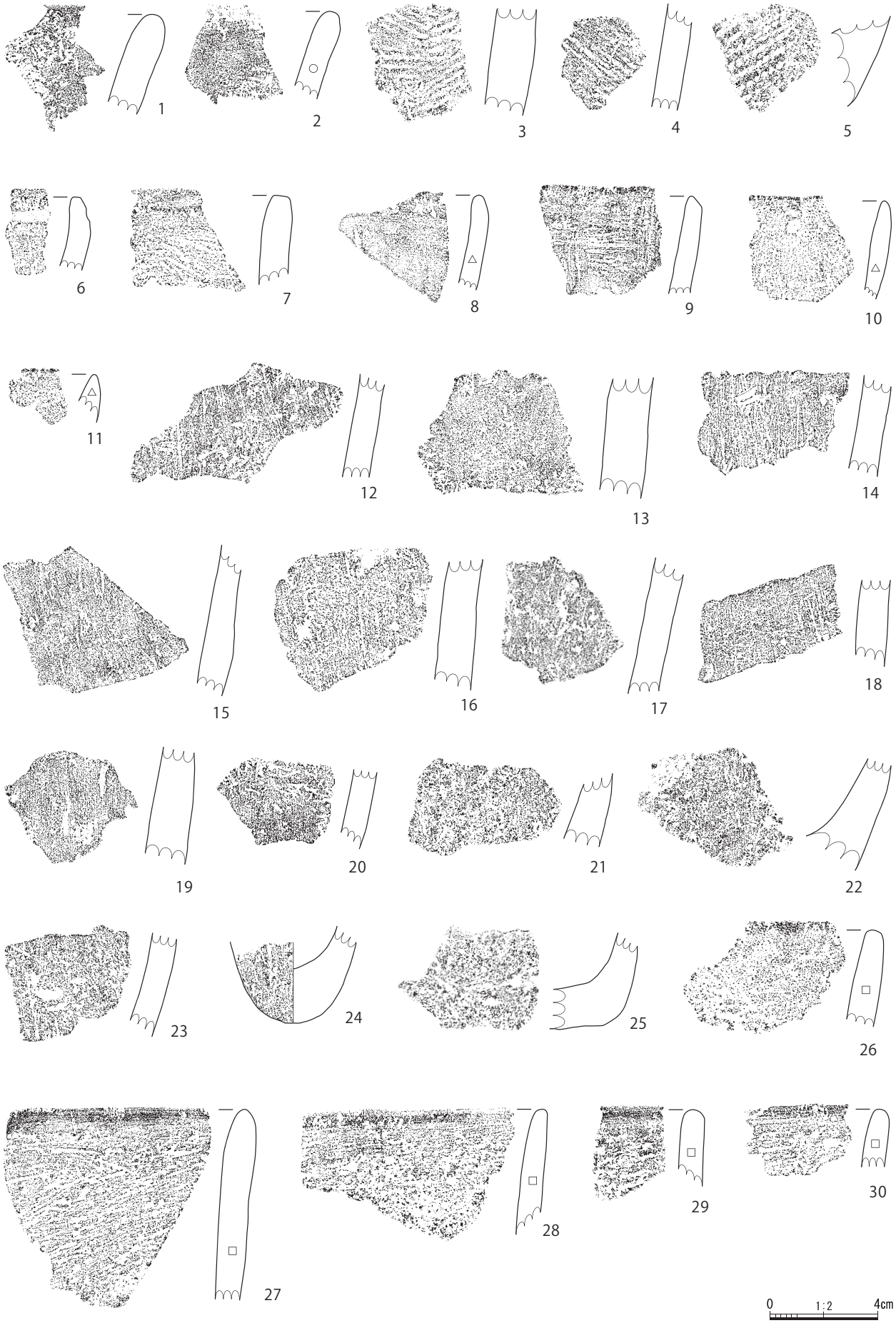

第 267 図　23T－001 住居跡出土土器（１）



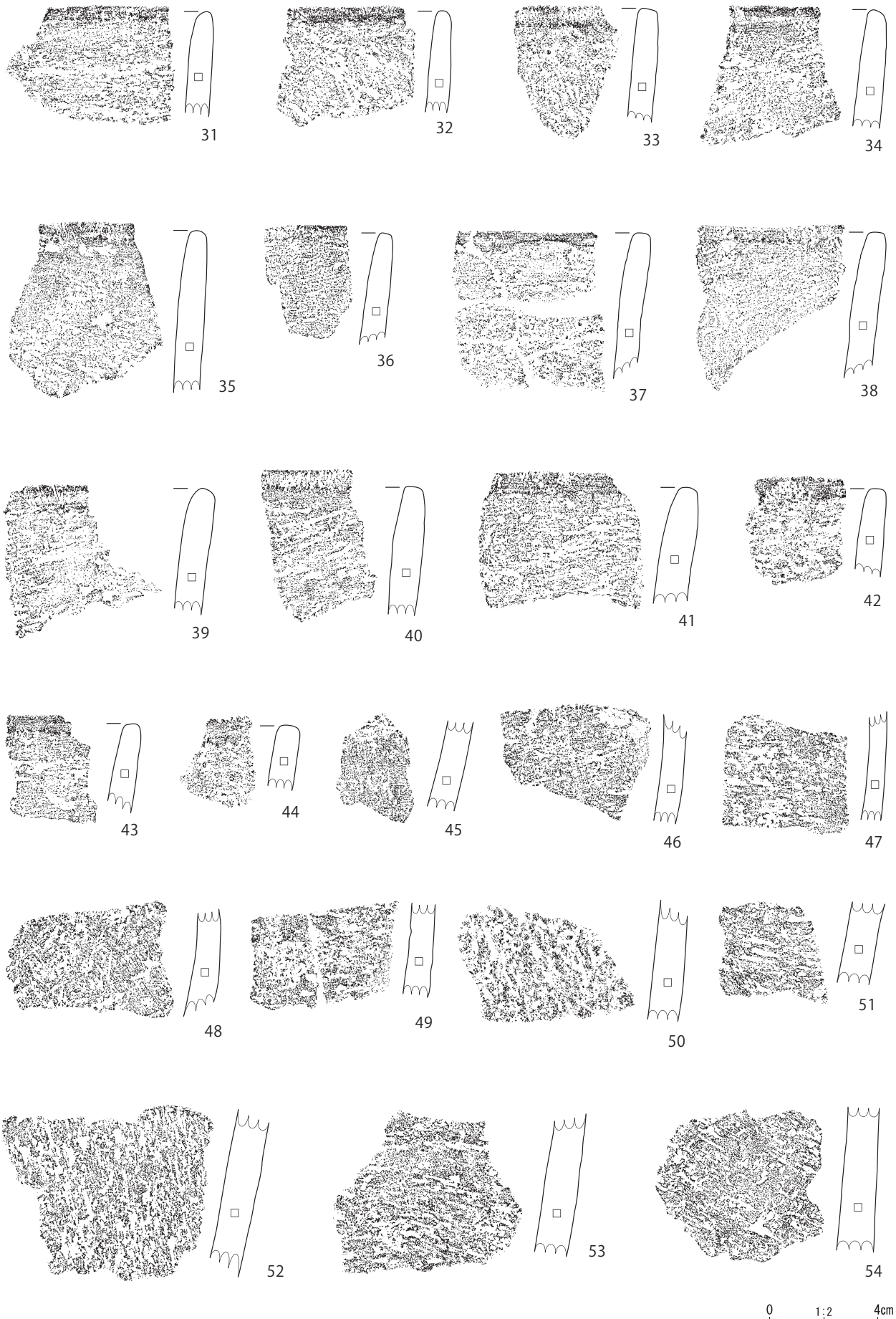

第 268 図　23T－001 住居跡出土土器（２）



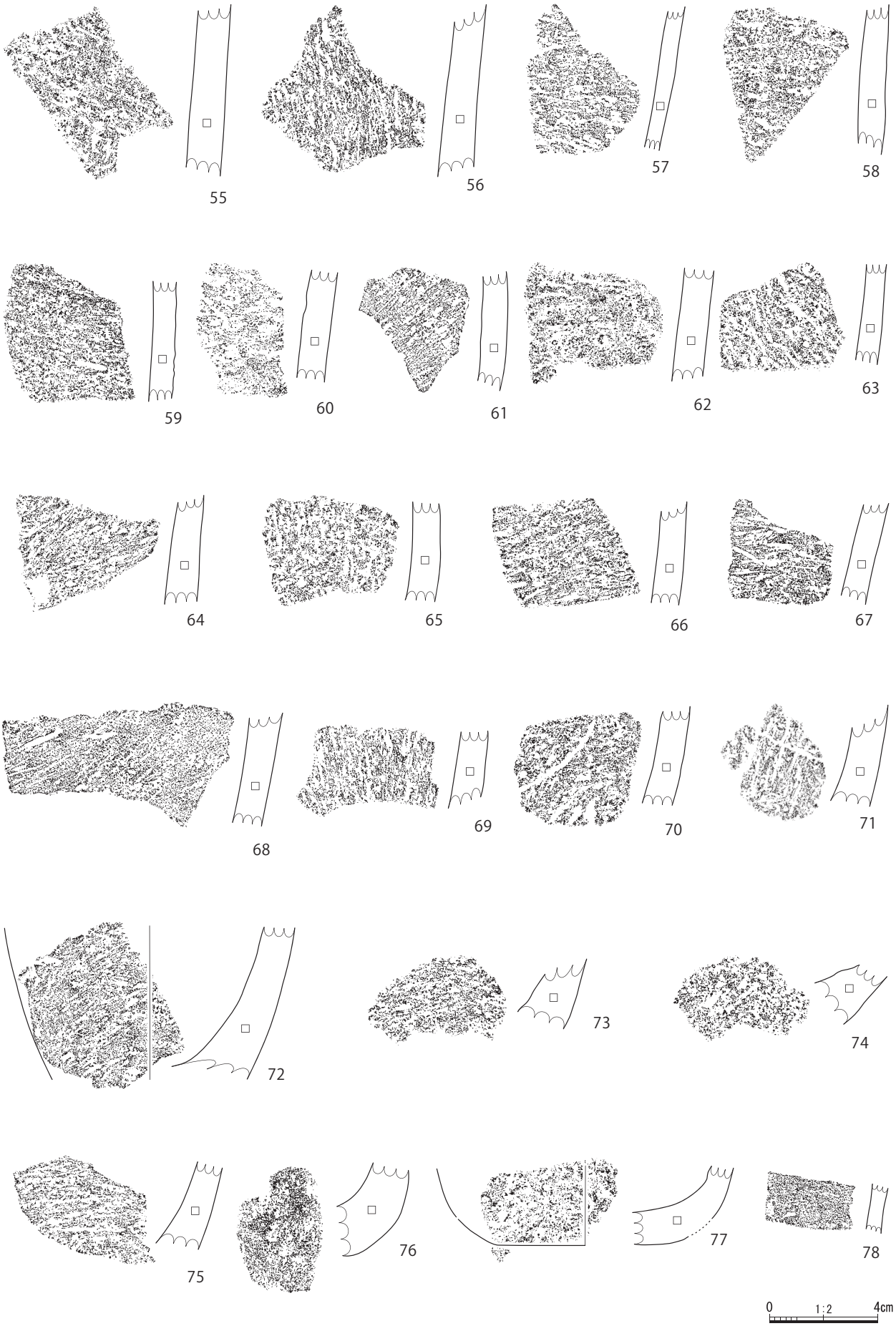

第 269 図　23T－002 住居跡出土土器



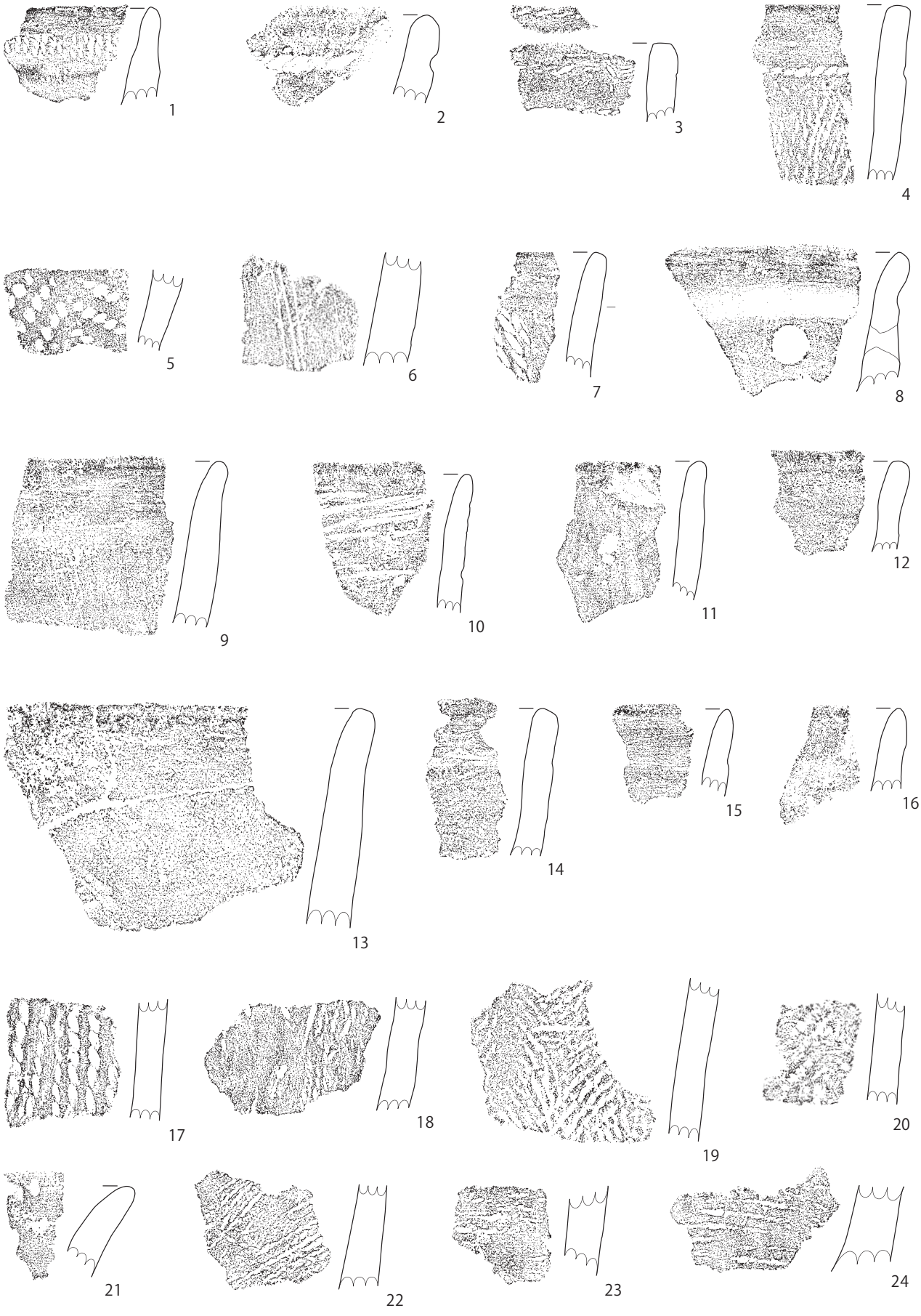

第 270 図　23T－003 住居跡出土土器（1）



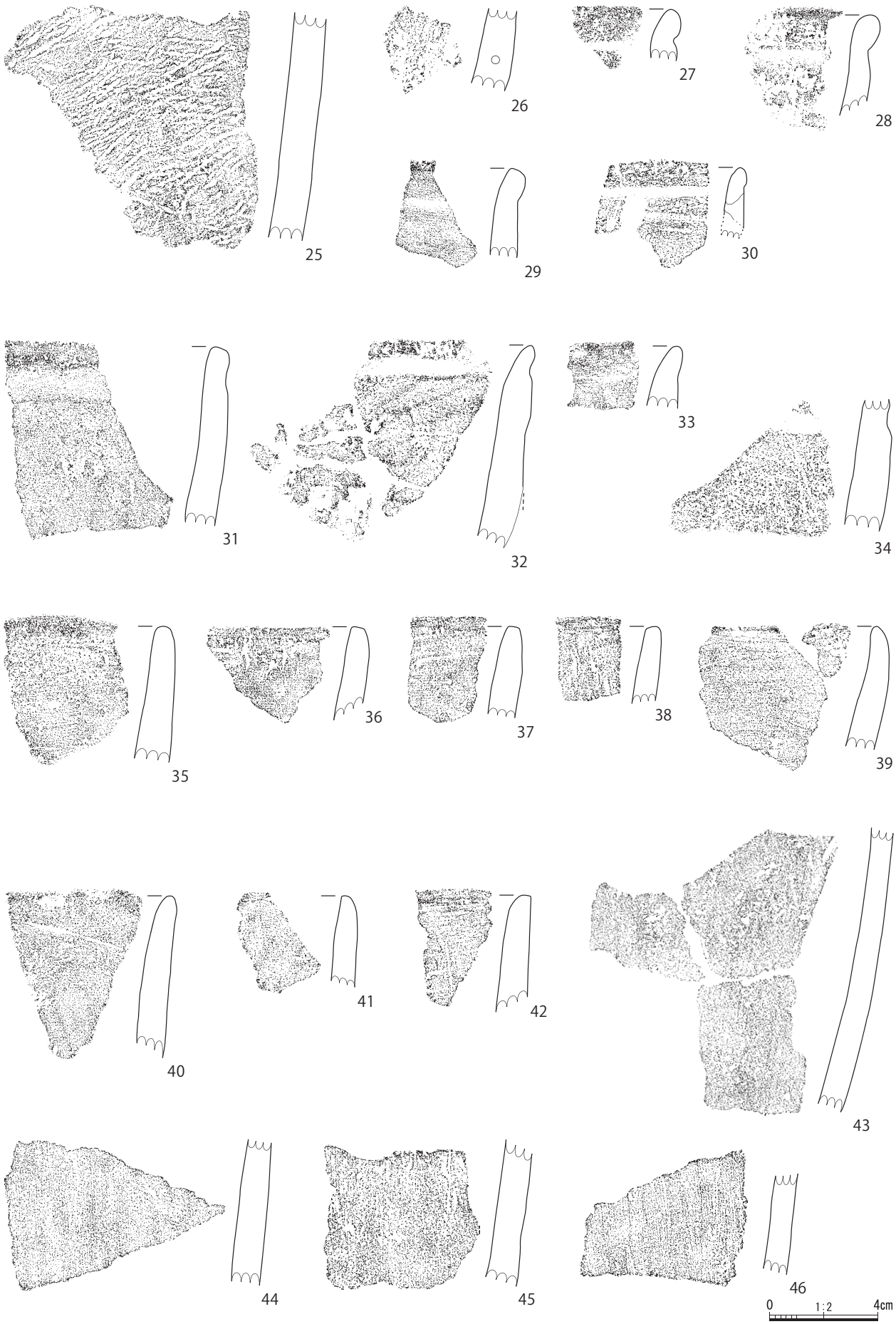

第 271 図　23T－003 住居跡出土土器（２）



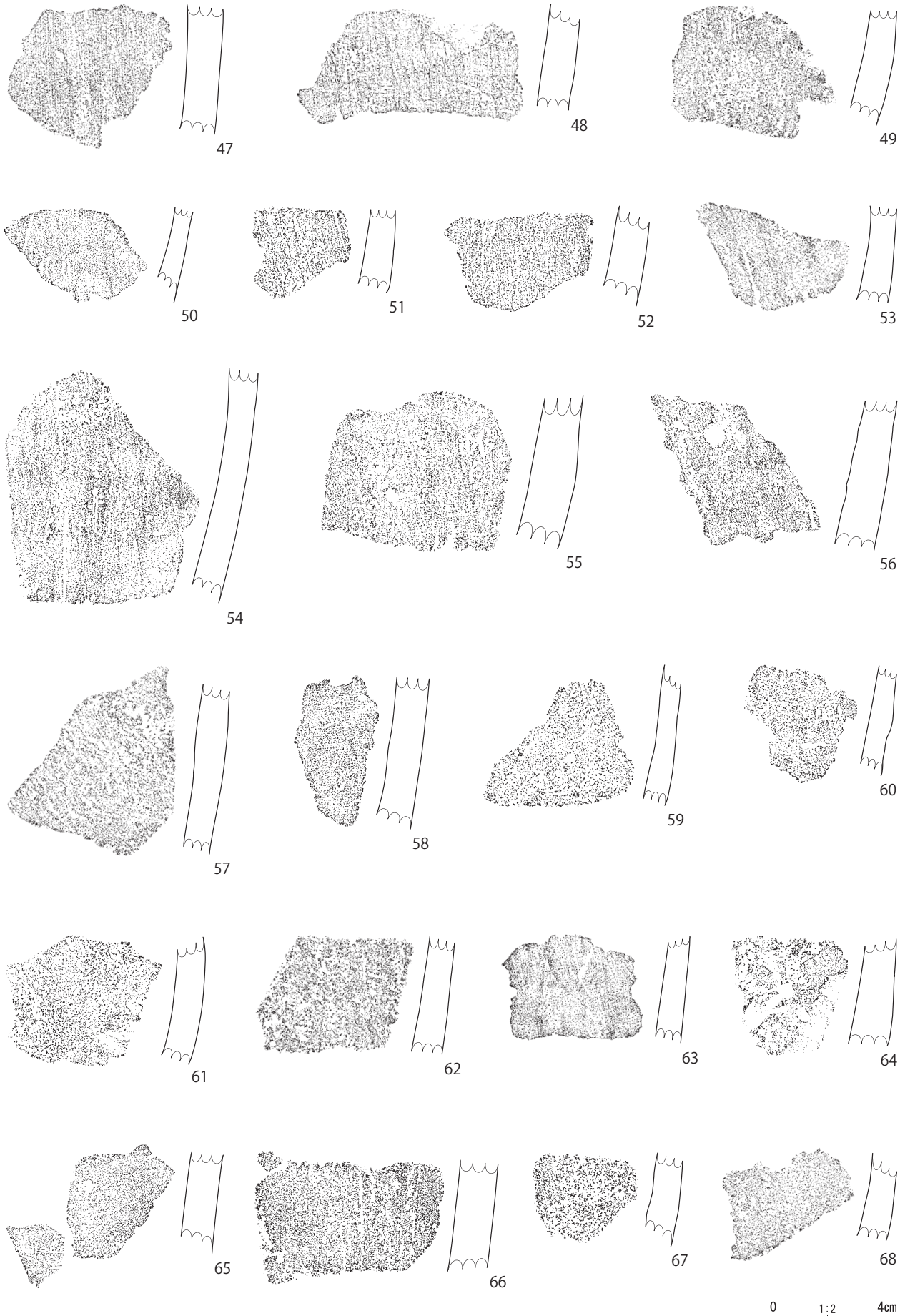

第 272 図　23T－003 住居跡出土土器（３）



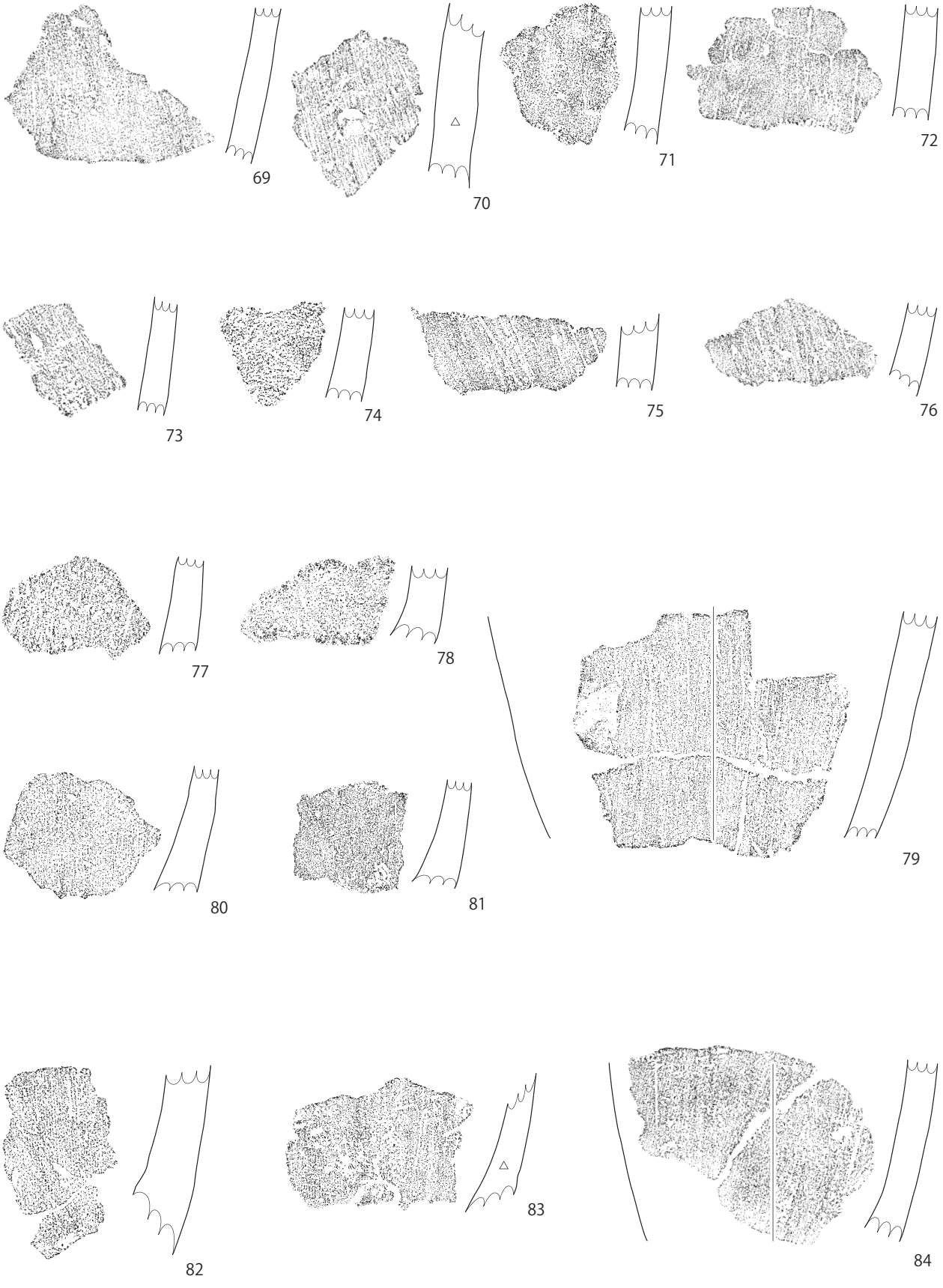

第 273 図　24T－001 住居跡出土土器（1）



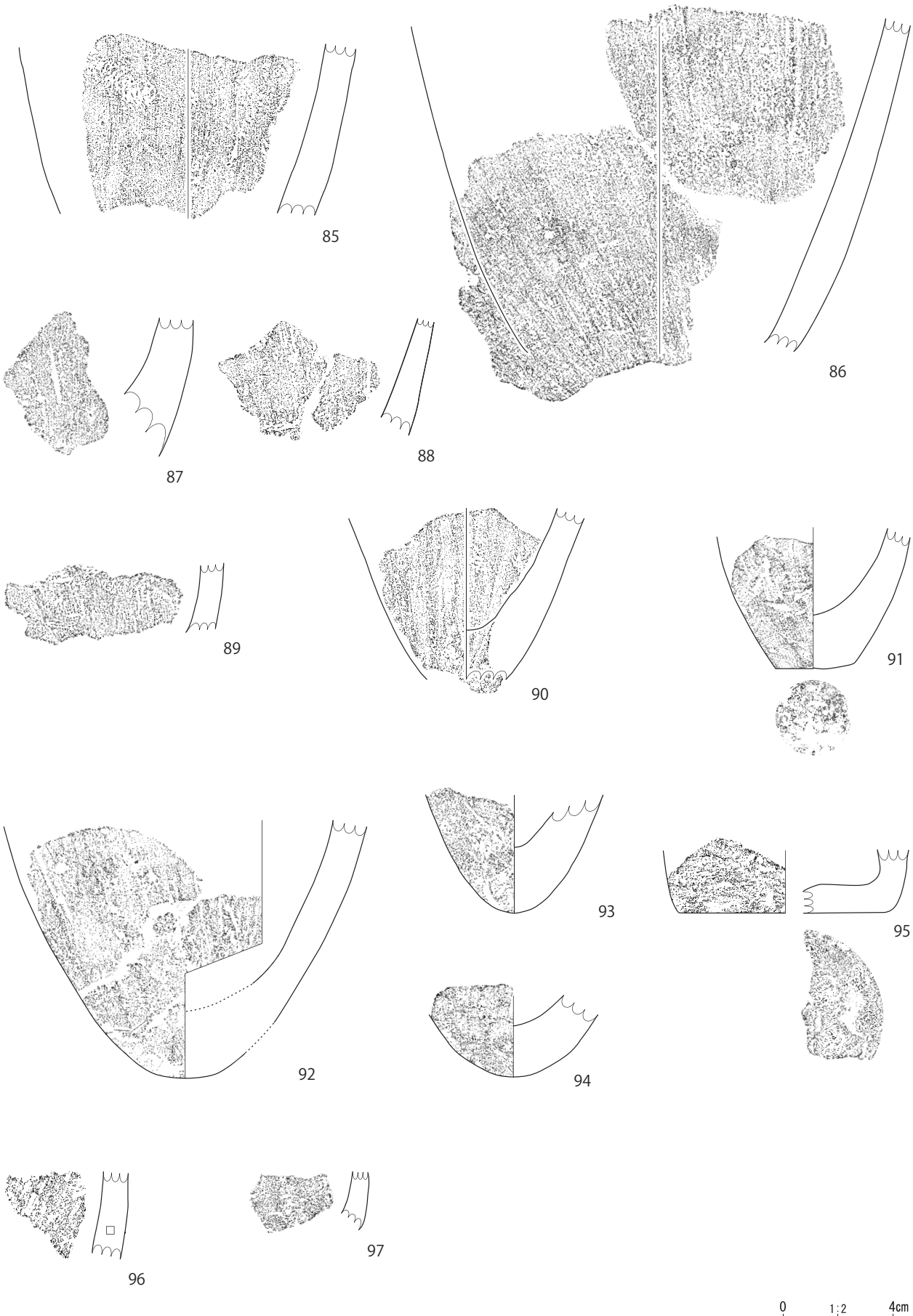

第 274 図　24T－001 住居跡出土土器（２）



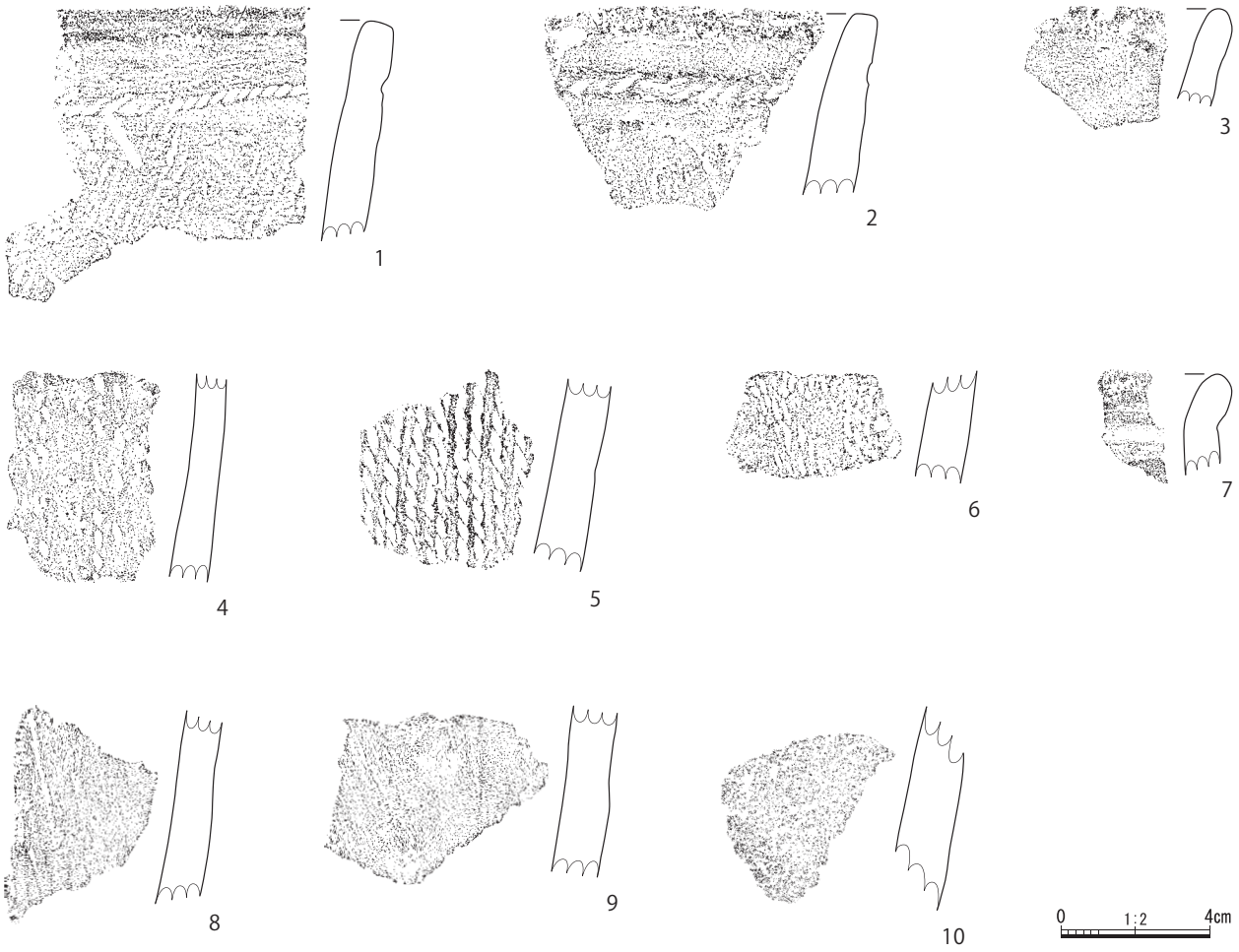

第 275 図　24T－001 住居跡出土土器（３）



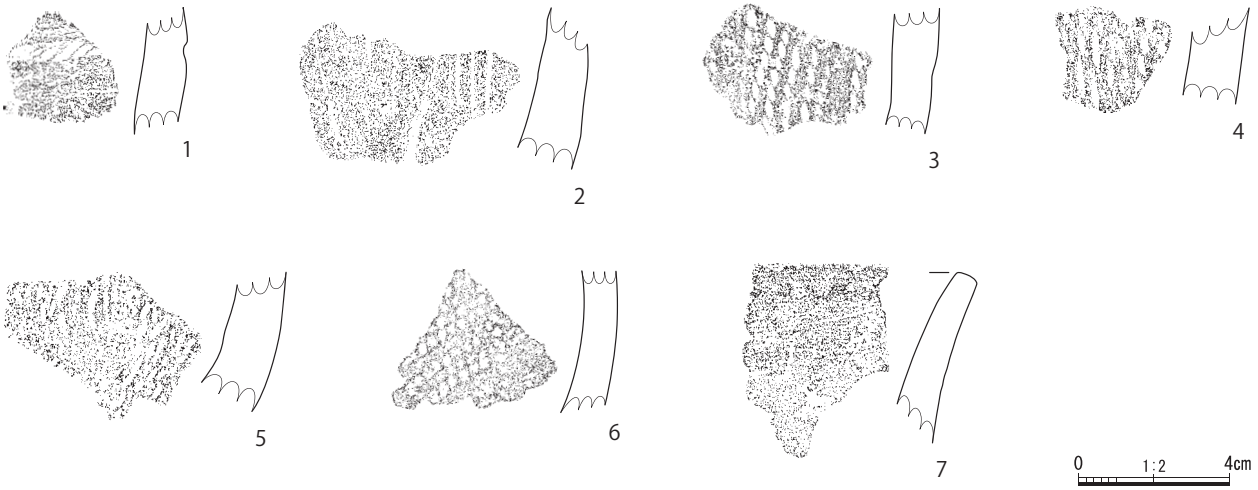

第 276 図　24T－001 住居跡出土土器（４）




第 277 図　24T－001 住居跡出土土器（５）



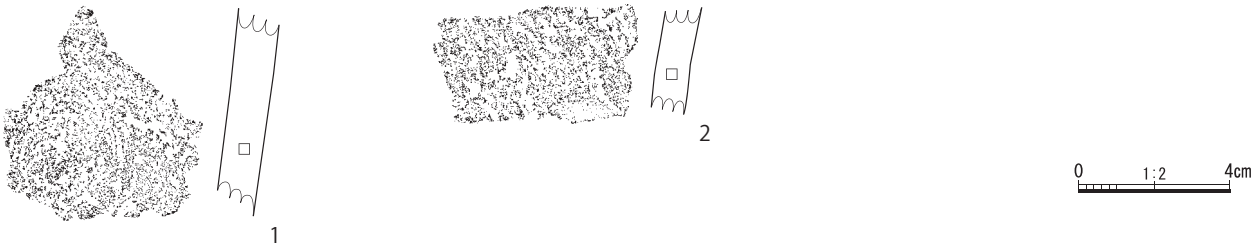

第 278 図　24T－002 住居跡出土土器



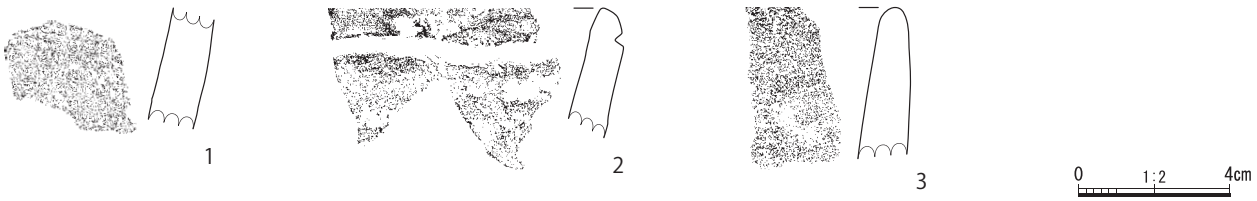

第 279 図　24T－003 住居跡出土土器

第 280 図　10T－008 土坑出土土器

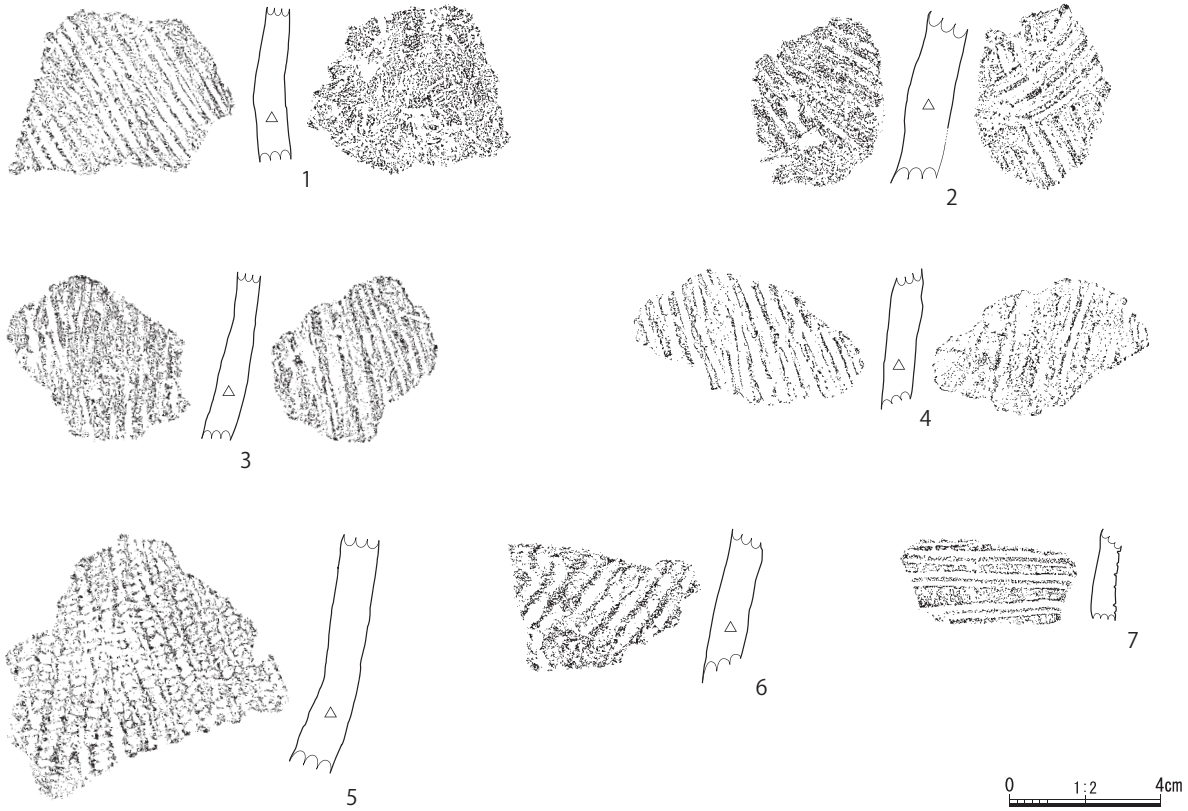
第 281 図　23T－006 土坑出土土器



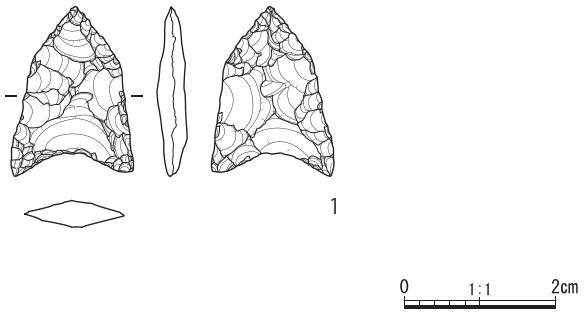

第 282 図　23T－007 土坑出土土器



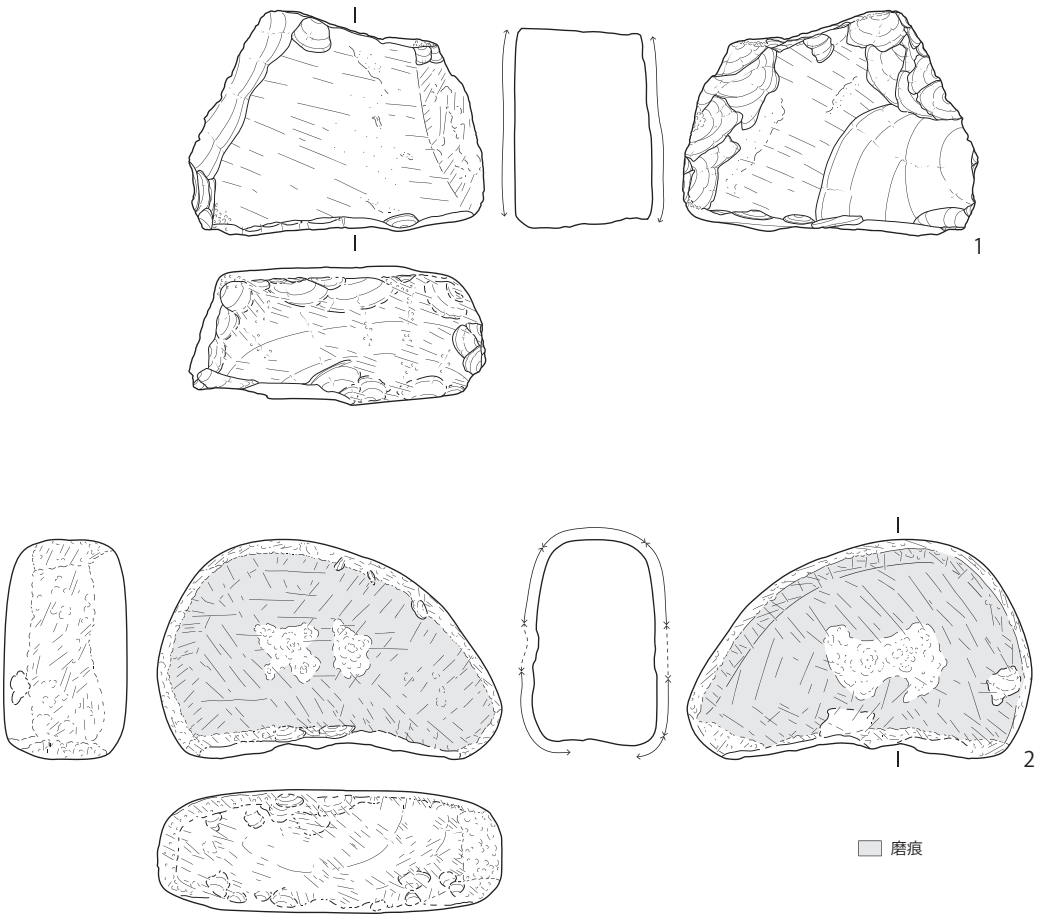

第 283 図　25T－001 土坑出土土器



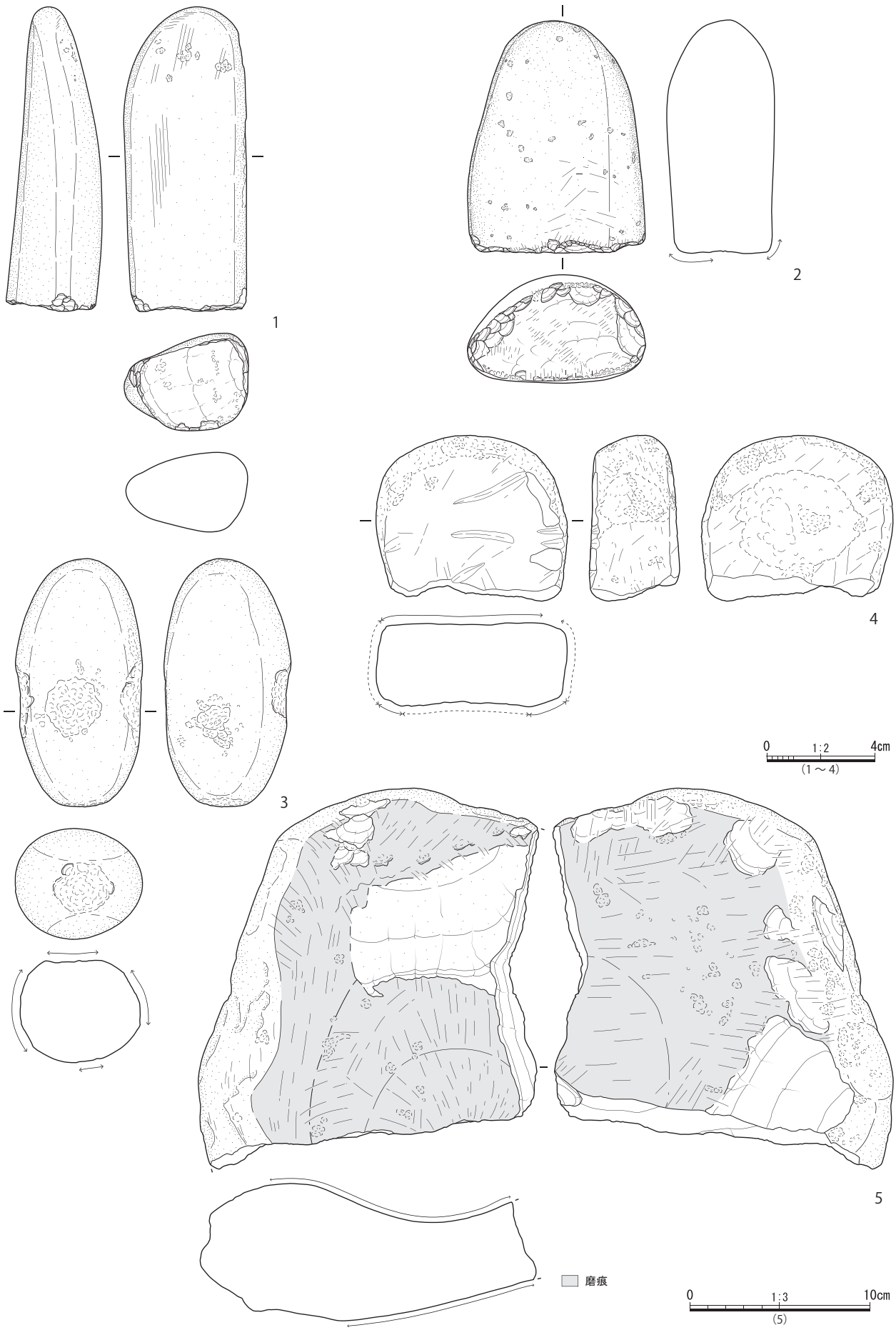

第 284 図　25T－002 土坑出土土器



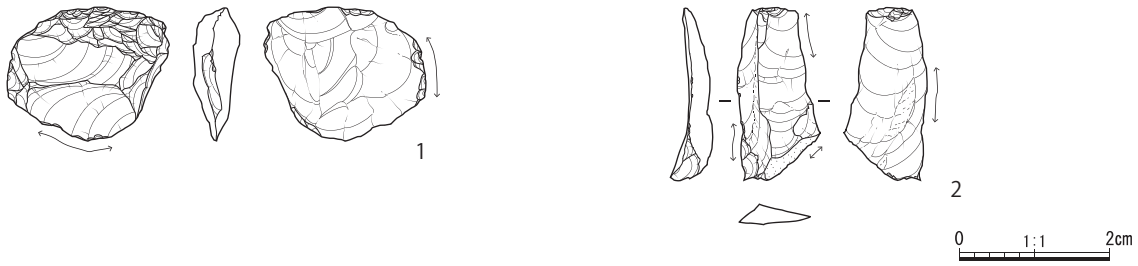

第 285 図　5T－005 住居跡出土石器




第 286 図　6T－001 住居跡出土石器

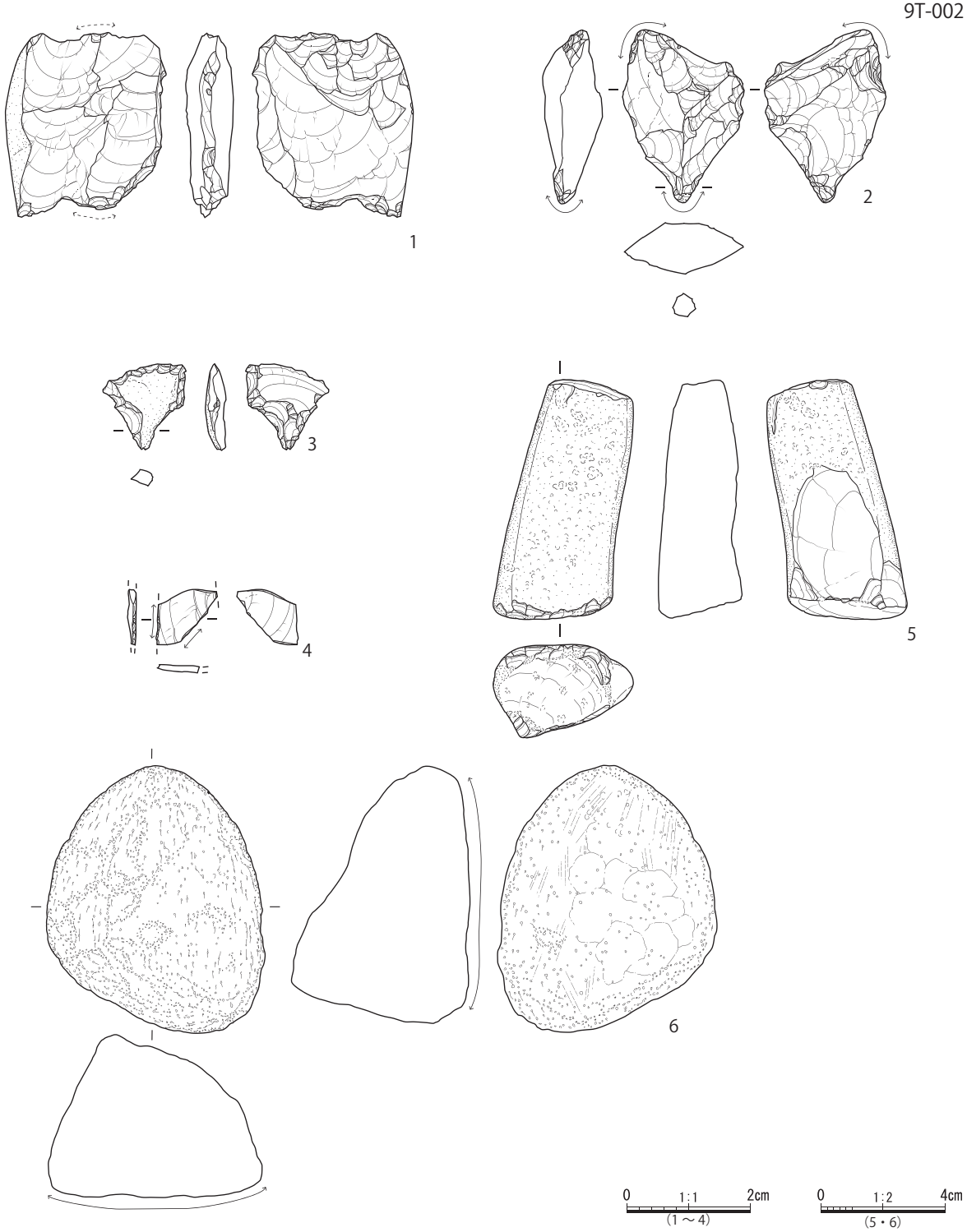



第 287 図　7T－001 住居跡出土石器



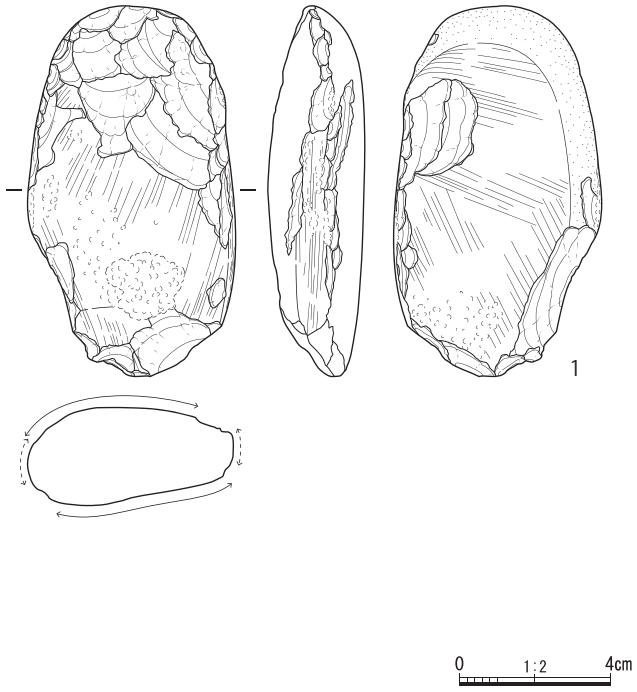

9T-001

9T-002

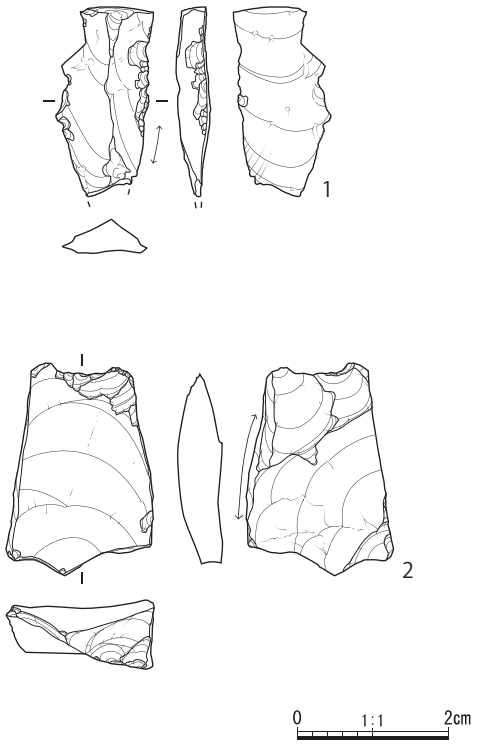



第 288 図　9T－001・002 住居跡出土石器

第 289 図　10T－001 住居跡出土石器

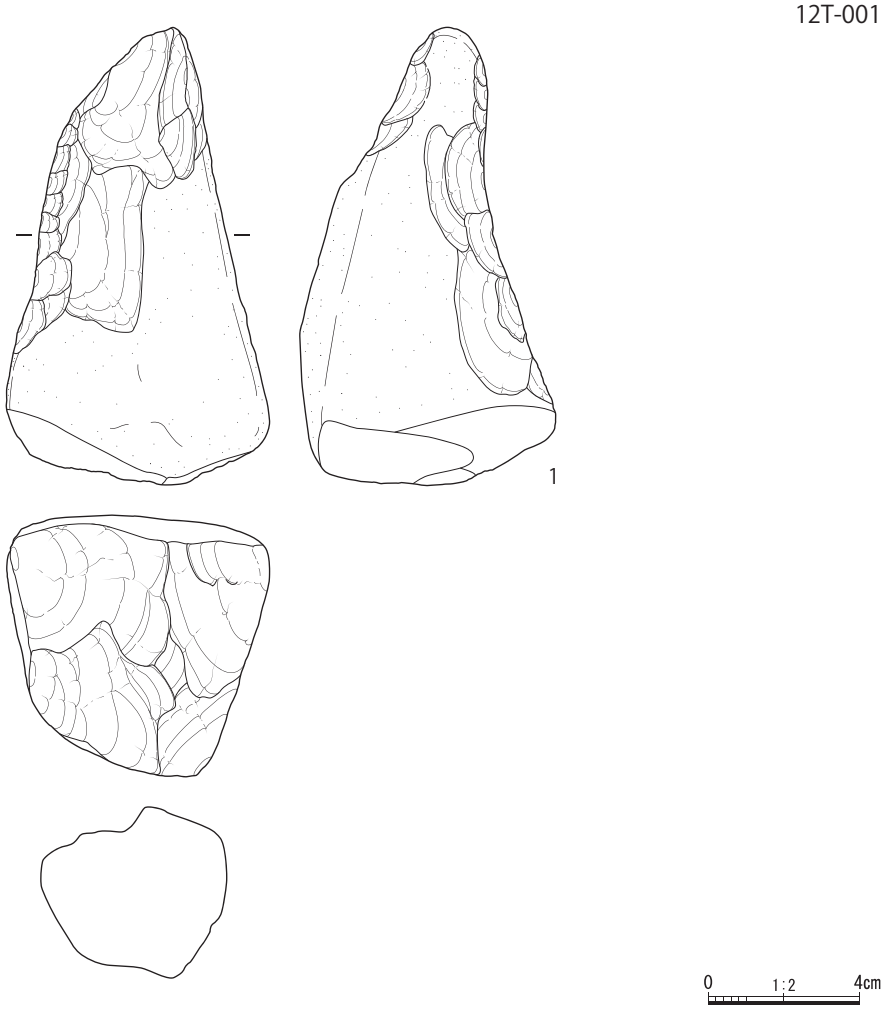



10T-004



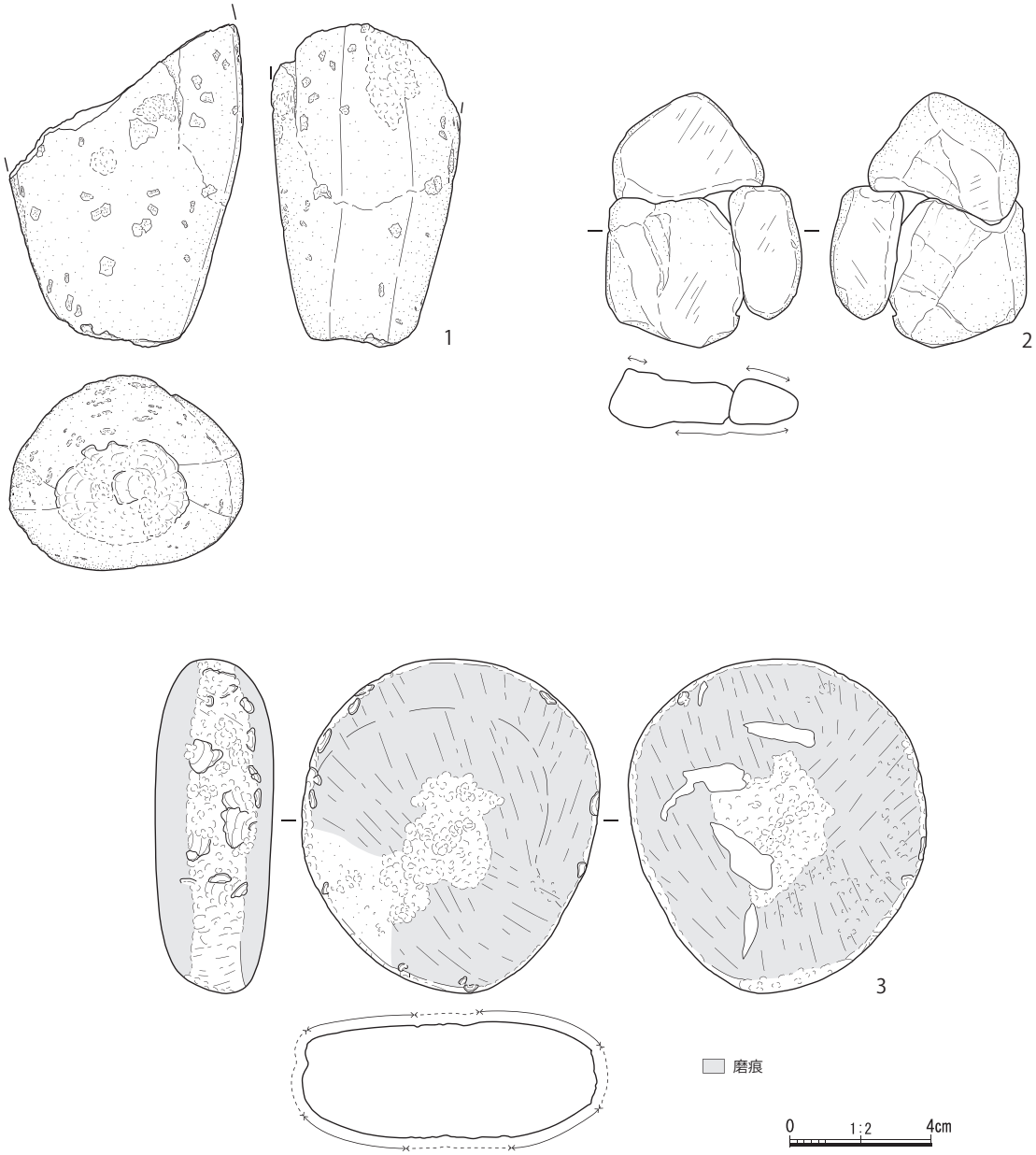

10T-007

12T-001



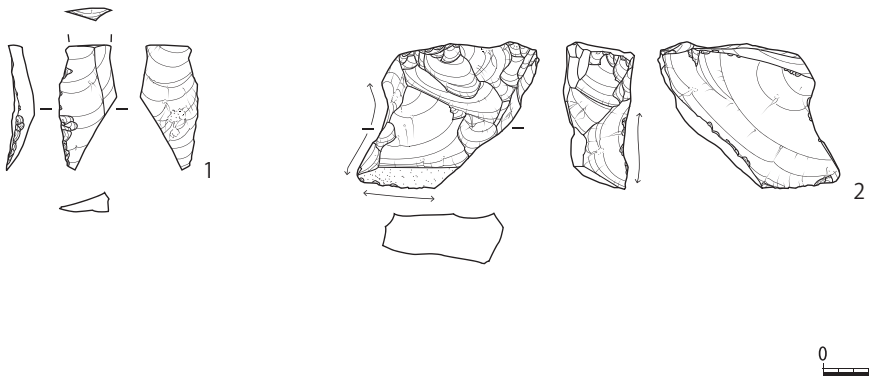

第 290 図　10T－004・007、12T－001 住居跡出土石器

第 291 図　12T－002 住居跡出土石器

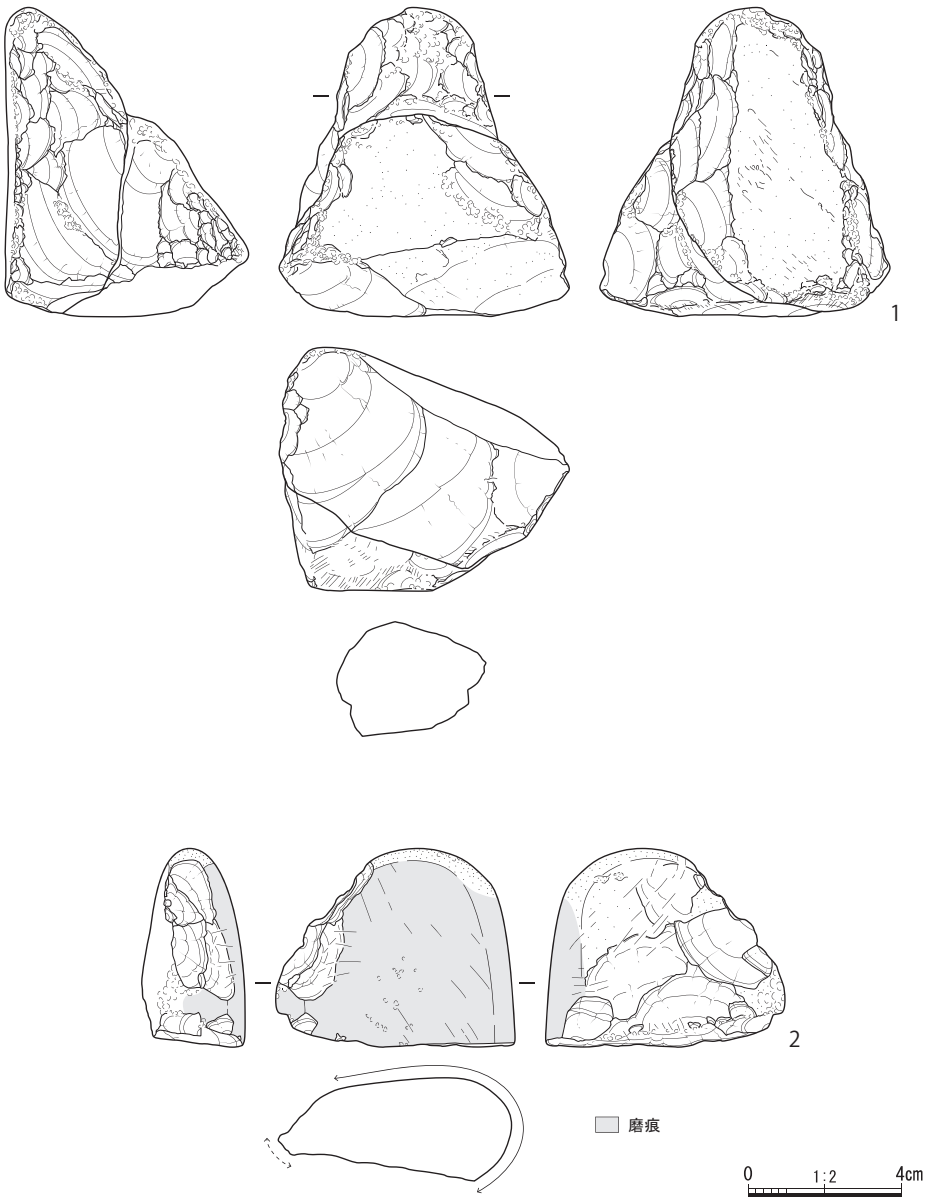



16T−001

19T−003

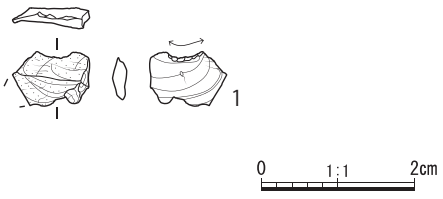



第 292 図　16T－001、19T－003 住居跡出土石器

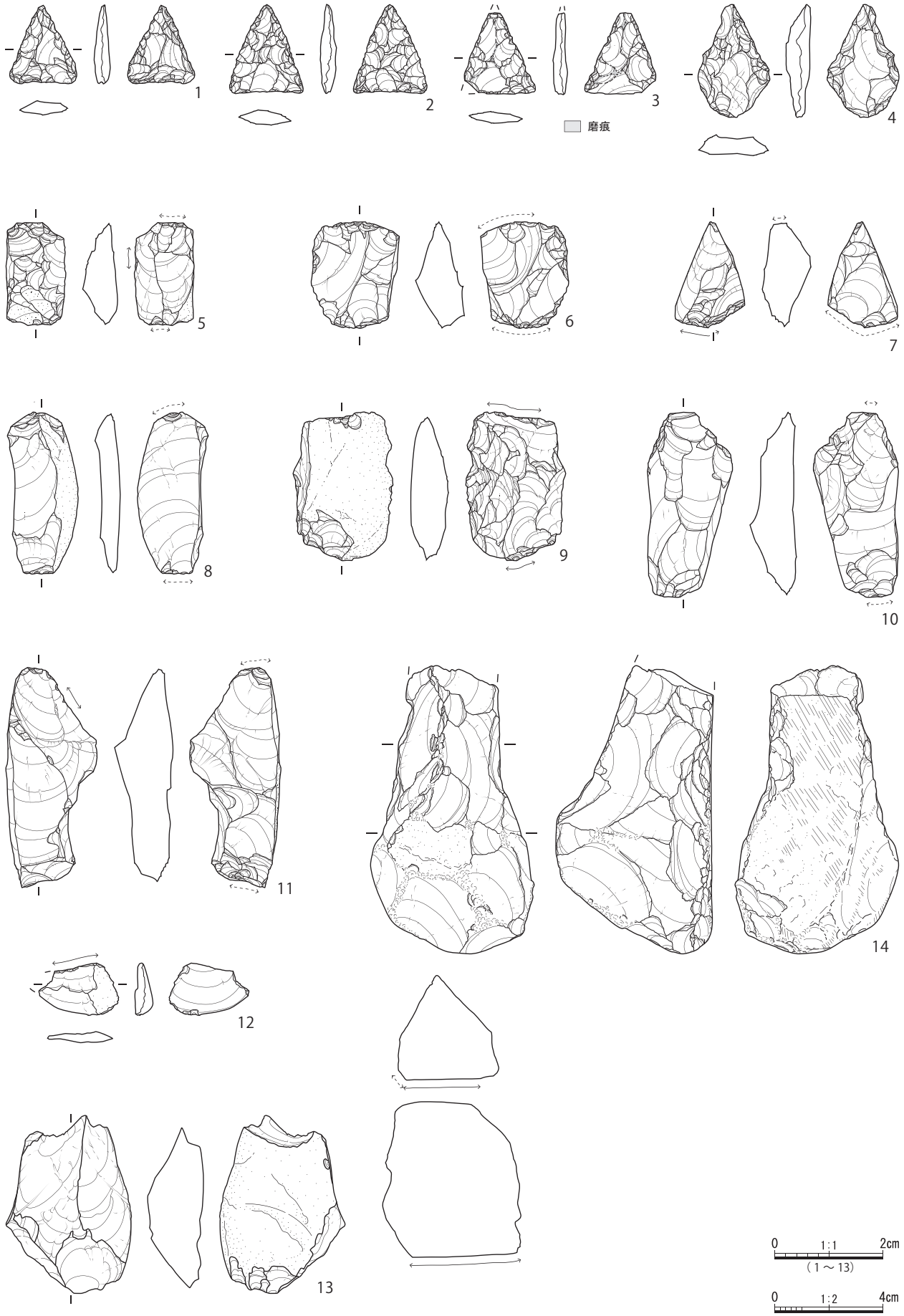



23T−001

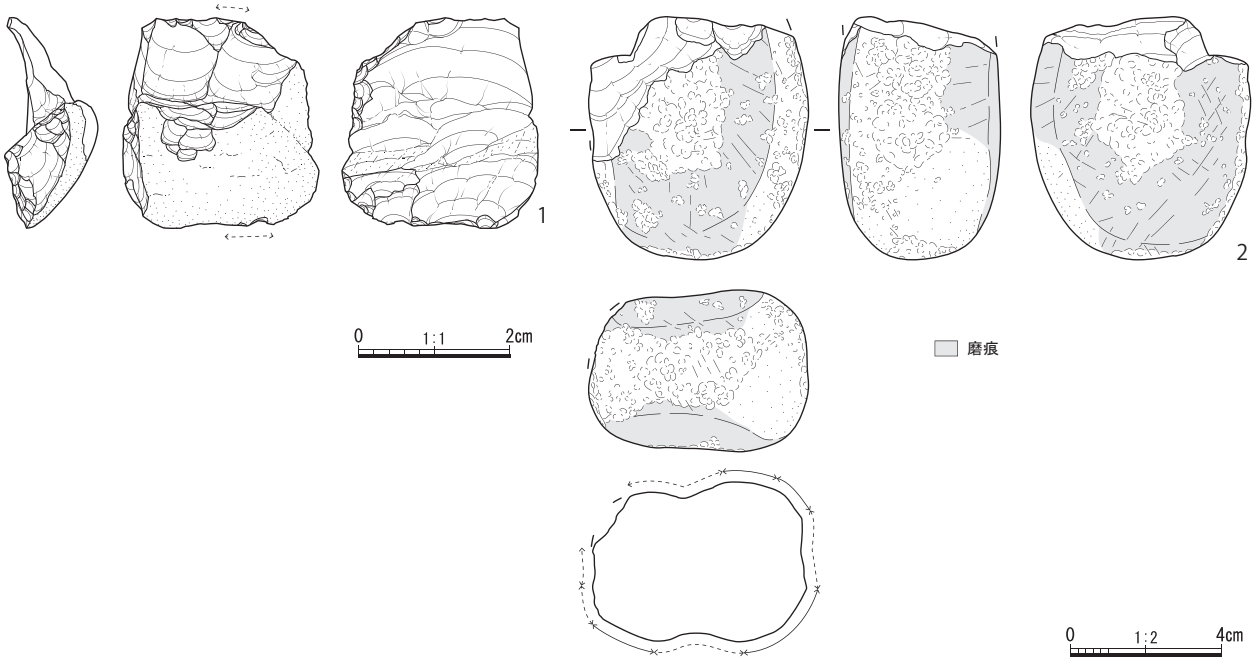
23T−002



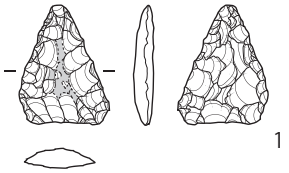

第 293 図　23T－001・002 住居跡出土石器

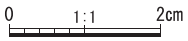



第 294 図　24T－001 住居跡出土石器



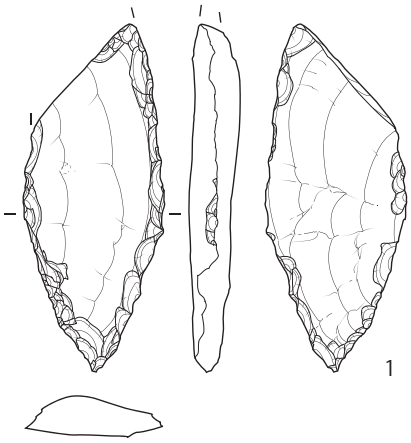

第 295 図　24T－003 住居跡出土石器

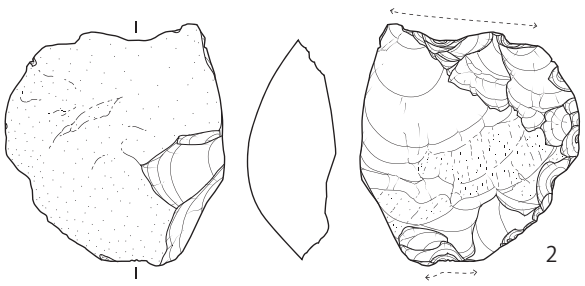


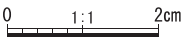



10T-008 土坑

25T-002 土坑




第 296 図　10T－008、25T－002 土坑出土石器